国道365号線バイパス工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
II

―― 伊香郡高月町井口・柏原遺跡 ――

1984・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

国道365号線バイパス工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
II

―― 伊香郡高月町井口・柏原遺跡 ――

001.2
Sh27

1984・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

井口・柏原遺跡は伊香郡高月町に所在する遺跡で、国道 365号線バイパス工事に関連し昭和53年度から56年度にかけて発掘調査を実施し、57、58年度で資料整理を行なったものであります。この結果、井口・柏原遺跡は律令制の成立から解体過程を経て荘園制が成立し、その後の武士団の発生頃まで極めて長い期間営まれてきた集落跡であり、日本古代史の大きな画期を如実に反映している遺跡であることが明らかになりました。

この貴重な資料を通じ、滋賀県の埋蔵文化財に対する理解が一層深められる一助となれば、本書を上梓した意義も達成され幸せとするところであります。

末尾になりましたが、今回の長期に及ぶ発掘調査に御協力いただいた関係機関および地元関係者の各位に対し厚くお礼申しあげます。

昭和59年３月

滋賀県教育委員会
教育長　南　　光　雄

目　　次

序　　文……(1)
目　　次……(3)
例　　言……(17)
はじめに……1
第一章　位置と環境……1
　第一節　位置と地理的環境……1
　　第一項　位置と範囲……1
　　第二項　地理的環境……3
　　Ⅰ）自然地理的環境……3
　　Ⅱ）人文地理的環境……4
　第二節　歴史的環境……5
　　第一項　歴史的環境……5
　　第二項　研究史……5
　　Ⅰ）井口遺跡昭和51・52年度調査……5
　　Ⅱ）柏原遺跡昭和53年度調査……8
　　Ⅲ）保延寺大海道遺跡昭和49・50年度調査……9
　　Ⅳ）渡岸寺遺跡昭和57年度調査……9
第二章　調査の経過……10
第三章　調査の結果……12
　第一節　遺　　構……12
　　第一項　遺構の種類と分布……12
　　Ⅰ）第1住居跡群……12
　　Ⅱ）第2住居跡群……13
　　Ⅲ）第3住居跡群……14
　　Ⅳ）第4住居跡群……15
　　Ⅴ）第5住居跡群……15
　　Ⅵ）第6住居跡群……15
　　Ⅶ）第7住居跡群……16
　　Ⅷ）第8住居跡群……16
　　Ⅸ）第9住居跡群……16

第二項　遺　　構……16
Ⅰ）竪穴式住居跡……16
Ⅱ）掘立柱建物跡……99
Ⅲ）溝状遺構……131
Ⅳ）墓　　跡……137
Ⅴ）土　　坑……141
第二節　遺　　物……144
第一項　遺物の分類……144
Ⅰ）須恵器……144
Ⅱ）土師器……148
Ⅲ）灰釉陶器……149
Ⅳ）緑釉陶器……149
Ⅴ）黒色土器……149
Ⅵ）その他……149
第二項　遺物の出土状況……149
Ⅰ）竪穴式住居跡……149
Ⅱ）掘立柱建物跡……155
Ⅲ）土坑・溝状遺構・その他……155
第三項　編年(土器類)Ⅰ……200
第四項　編年(土器類)Ⅱ……214
Ⅰ）6世紀以前……214
Ⅱ）10世紀以降……215
第五項　瓦　　類……217
Ⅰ）瓦の出土状況……217
Ⅱ）平　瓦……217
Ⅲ）丸　　瓦……218
Ⅳ）軒 丸 瓦……218
Ⅴ）軒 平 瓦……219
第六項　鉄製品……220
第七項　その他遺物……222
第四章　遺構・遺物の変遷……252
第一節　遺　　構……252
第一項　竪穴式住居跡……252

第二項　溝状遺構……256
第三項　掘立柱建物跡……259
第四項　墓跡、その他遺構……262
第二節　遺　　物……263
第一項　須恵器……263
第二項　土師器……269
第三項　施釉陶器、黒色土器、磁器、山茶埦……272
第五章　総　　括……283
おわりに……284

挿　図　目　次

図１．遺跡位置図及び周辺遺跡分布図…… 2
２．昭和52年度ほ場整備関係井口遺跡発掘調査検出遺構…… 7
３．地区設定図…… 11
４．主要遺構分布図…… 17
５．柏原北Ｃ・Ａ区遺構実測図…… 19
６．Ａ・Ｂ地区遺構実測図…… 21
７．Ｃ・Ｄ地区遺構実測図…… 23
８．Ｅ・Ｆ地区遺構実測図…… 25
９．Ｇ・Ｈ地区遺構実測図…… 27
10．Ｉ・Ｋ地区遺構実測図…… 29
11．Ｌ地区遺構実測図…… 31
12．柏原北ＣＴ１実測図…… 33
13．柏原北ＣＴ２・３実測図…… 34
14．柏原北ＣＴ４実測図…… 35
15．柏原北ＣＴ５・８実測図…… 36
16．柏原北ＣＴ７実測図…… 37
17．柏原北ＣＴ９実測図…… 40
18．ＡＴ２・３実測図…… 41
19．ＡＴ４・５実測図…… 42
20．ＡＴ６・10実測図…… 44
21．ＡＴ11・13実測図…… 45
22．ＡＴ14・ＢＴ１実測図…… 46
23．ＢＴ２・３・９・10実測図…… 47
24．ＢＴ４・５実測図…… 49
25．ＢＴ６・７実測図…… 50
26．ＢＴ８・ＣＴ１実測図…… 51
27．ＣＴ２・３実測図…… 52
28．ＣＴ６・７実測図…… 53
29．ＣＴ８・９実測図…… 54
30．ＣＴ10・11・12実測図…… 56
31．ＣＴ13・ＦＴ１実測図…… 59
32．ＦＴ２・４実測図…… 60
33．ＦＴ６・７実測図…… 61
34．ＦＴ８・10・21実測図…… 63
35．ＦＴ11・12実測図…… 64
36．ＦＴ13・14実測図…… 66

図37. ＦＴ15実測図…… 67
38. ＦＴ16実測図…… 68
39. ＦＴ17・18実測図…… 70
40. ＦＴ19・20実測図…… 71
41. ＦＴ24実測図…… 72
42. ＧＴ１・２実測図…… 73
43. ＧＴ３・６実測図…… 74
44. ＧＴ７・８実測図…… 75
45. ＧＴ９実測図…… 76
46. ＧＴ10実測図…… 77
47. ＧＴ11・12実測図…… 79
48. ＧＴ４・13・14・15実測図…… 80
49. ＨＴ１・２実測図…… 81
50. ＨＴ４・５実測図…… 83
51. ＨＴ６・ＩＴ１実測図…… 85
52. ＩＴ２・３実測図…… 86
53. ＩＴ４・５実測図…… 87
54. ＩＴ７・９・10実測図…… 88
55. ＩＴ11・12実測図…… 89
56. 竪穴式住居跡床面規模分布図…… 94
57. 竪穴式住居跡平面形態比較図…… 96
58. カマド形態分類模式図…… 98
59. 柏原北ＣＨ１・２実測図…… 100
60. 柏原北ＣＨ３・４実測図…… 102
61 ＡＨ１実測図…… 103
62. ＡＨ２実測図…… 104
63. ＡＨ３実測図…… 105
64. ＡＨ４実測図…… 106
65. ＡＨ５実測図…… 107
66. ＡＨ６実測図…… 108
67 ＢＨ１実測図…… 109
68. ＢＨ２・３実測図…… 110
69. ＢＨ４実測図…… 111
70. ＢＨ５・６実測図…… 112
71. ＢＨ７実測図…… 113
72 ＣＨ１実測図…… 114
73. ＥＨ１実測図…… 115
74. ＦＨ１実測図…… 116

図75. ＦＨ２・４実測図…… 117
76. ＦＨ３実測図…… 118
77. Ｆ柵列実測図…… 119
78. ＧＨ１実測図…… 120
79. ＧＨ２・３実測図…… 121
80. ＧＨ４・５実測図…… 122
81. ＩＨ１・２実測図…… 123
82. ＩＨ３・５実測図…… 124
83. ＩＨ４実測図…… 125
84. ＫＨ１・ＬＨ１実測図…… 126
85. 掘立柱建物跡平面形比較図…… 130
86. 溝状遺構断面土層実測図…… 136
87. 土坑墓・その他土坑実測図(1)…… 138
88. 墓・その他土坑実測図(2)…… 139
89. 墓・その他土坑実測図(3)…… 140
90. Ｅ区焼土坑Ⅰ～Ⅲ実測図…… 143
91. 柏原北Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 156
92. 柏原北Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 157
93. Ａ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 158
94. Ａ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 159
95. Ａ区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)…… 160
96. Ａ区竪穴式住居跡出土土器実測図(4)…… 161
97. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 162
98. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 163
99. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)…… 164
100. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(4)…… 165
101. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(5)…… 166
102. Ｂ区竪穴式住居跡出土土器実測図(6)・その他遺構出土土器実測図(1)…… 167
103. Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 168
104. Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 169
105. Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)・その他遺構出土土器実測図(1)…… 170
106. Ｆ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 171
107. Ｆ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 172
108. Ｆ区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)・その他遺構出土土器実測図(1)…… 173
109. Ｆ区竪穴式住居跡出土土器実測図(4)…… 174
110. Ｆ区竪穴式住居跡出土土器実測図(5)…… 175
111. Ｇ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 176
112. Ｇ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)…… 177

図113. G区竪穴式住居跡出土土器実測図…… 178
114. H区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 179
115. H区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)・その他遺構出土土器実測図(1)…… 180
116. I区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)…… 181
117. I区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)・その他遺構出土土器実測図(1)…… 182
118. 柏原北A区その他遺構出土土器実測図(1)…… 183
119. 柏原北A区その他遺構出土土器実測図(2)…… 184
120. 柏原北C区その他遺構出土土器実測図…… 185
121. A区その他遺構出土土器実測図(1)…… 186
122. A区その他遺構出土土器実測図(2)…… 187
123. A区その他遺構出土土器実測図(3)…… 188
124. B区その他遺構出土土器実測図(2)…… 189
125. C区その他遺構出土土器実測図(2)…… 190
126. C区その他遺構出土土器実測図(3)…… 191
127. C区その他遺構出土土器実測図(4)…… 192
128. D区その他遺構出土土器実測図…… 193
129. E区その他遺構出土土器実測図…… 194
130. F区その他遺構出土土器実測図(2)…… 195
131. F区その他遺構出土土器実測図(3)…… 196
132. F区その他遺構出土土器実測図(4)…… 197
133. G区その他遺構出土土器実測図(1)…… 198
134. G区その他遺構出土土器実測図(2)…… 199
135. H区その他遺構出土土器実測図(2)…… 199
136. 須恵器杯A実測図(1)…… 223
137 須恵器杯A実測図(2)…… 224
138. 須恵器杯B・C・皿実測図…… 225
139. 須恵器蓋C実測図…… 226
140. 須恵器蓋A・B実測図…… 227
141. 須恵器高杯・壺・鉢等実測図…… 228
142. 須恵器杯D～F・壺・甕等実測図…… 229
143. 土師器甕A・C・高杯等実測図…… 230
144. 土師器蓋・杯・鉢・鍋・甕B・羽釜等実測図…… 231
145. 土師器皿等実測図…… 232
146. 灰釉陶器等実測図(1)…… 233
147. 灰釉陶器等実測図(2)…… 234
148 須恵器・灰釉陶器等実測図 …… 235
149. 山茶埦等実測図…… 236
150. 緑釉陶器・黒色土器・白磁・その他陶器実測図…… 237

図　版　目　次

図版１　遺跡航空写真

2	(上)遺跡遠景（北より）	(下)調査後工事風景（北より）
3	(上)柏原北Ｃ地区北部全景（南より）	(下)柏原北Ｃ地区北部全景（北より）
4	(上)柏原北Ｃ地区中部全景（西より）	(下)柏原北Ｃ地区中部全景（東より）
5	(上)柏原北Ｃ地区中部近景（南より）	(下)柏原北Ｃ地区中部近景（西より）
6	(上)柏原北ＣＴ３・４、ＣＢＰ4(西より)	(下)柏原北ＣＴ３・４(西より)
7	(上)柏原北Ｃ地区中部近景（西より）	(下)柏原北Ｃ地区北部西側全景（北より）
8	(上)柏原北Ｃ地区北部東側全景（南より）	(下)柏原北Ｃ地区北部東側全景（北より）
9	(上)柏原北Ｃ地区北部東側近景（南より）	(下)柏原北Ｃ地区北部東側近景（北より）
10	(上)柏原北Ｃ地区南部全景（北より）	(下)柏原北Ｃ地区南部全景（南より）
11	(上)柏原北ＣＴ１（西より）	(下)柏原北ＣＴ２（東より）
12	(上)柏原北ＣＴ２（西より）	(下)柏原北ＣＴ２カマド
13	(上)柏原北ＣＴ３カマド部分遺物出土状態	(下)柏原北ＣＴ３カマド
14	(上)柏原北ＣＴ３鉄製鍬先出土状態	(下)柏原北ＣＴ４カマド
15	(上)柏原北ＣＴ５（西より）	(下)柏原北ＣＴ５カマド
16	(上)柏原北ＣＴ５（北東より）	(下)柏原北ＣＴ５（南西より）
17	(上)柏原北ＣＴ７（北より）	(下)柏原北ＣＴ７カマド
18	(上)柏原北ＣＴ９（南より）	(下)柏原北ＣＴ９セクション（南より）
19	(上)柏原北ＣＴ９・10（東より）	(下)柏原北ＣＴ２・８（南より）
20	(上)柏原北ＣＨ３（南より）	(下)柏原北ＣＢＰ10
21	(上)柏原北ＣＢＰ４（東より）	(下)柏原北ＣＢＰ４（西より）
22	(上)柏原北ＣＢＰ４煙出し部分	(下)柏原北ＣＢＰ６（西より）
23	(上)柏原北ＣＢＰ６（西より）	(下)柏原北ＣＢＰ６煙出し部分
24	(上)柏原北Ａ地区全景（北より）	(下)柏原北Ａ地区南部全景（北より）
25	(上)柏原北ＡＭ１・２・３（西より）	(下)柏原北ＡＭ１セクション
26	(上)柏原北ＡＭ２・３上層土器溜り(西より)	(下)柏原北ＡＭ２・３上層土器溜り除去後（西より）
27	(上)柏原北ＡＭ２・３上層土器溜り近景	(下)柏原北ＡＭ２・３上層土器溜り近景
28	(上)Ａ地区全景（南より）	(下)Ａ地区全景（北より）
29	(上)Ａ地区南部（北より）	(下)Ａ地区南部（南より）
30	(上)ＡＴ４附近近景（北より）	(下)ＡＴ13附近近景（南東より）
31	(上)ＡＴ２（東より）	(下)ＡＴ２カマド
32	(上)ＡＴ３（南より）	(下)ＡＴ３（東より）
33	(上)ＡＴ３カマド	(下)ＡＴ３遺物出土状態
34	(上)ＡＴ３遺物出土状態	(下)ＡＴ３鉄釘出土状態
35	(上)ＡＴ４（南より）	(下)ＡＴ４（東より）

図版36	(上)ＡＴ４カマド	(下)ＡＴ４カマド
37	(上)ＡＴ４カマド附近遺物出土状態	(下)ＡＴ４カマド附近遺物出土状態近景
37	(上)ＡＴ５（西より）	(下)ＡＴ５（南より）
39	(上)ＡＴ６（北より）	(下)ＡＴ６（西より）
40	(上)ＡＴ６カマド附近遺物出土状態	(下)ＡＴ６カマド
41	(上)ＡＴ７（東より）	(下)ＡＴ７（西より）
42	(上)ＡＴ10（西より）	(下)ＡＴ10（南より）
43	(上)ＡＴ10カマド	(下)ＡＴ10遺物出土状態
44	(上)ＡＴ11（北より）	(下)ＡＴ11（東より）
45	(上)ＡＴ11カマド	(下)ＡＴ11カマド
46	(上)ＡＴ13（西より）	(下)ＡＴ13（北より）
47	(上)ＡＴ13カマド	(下)ＡＴ13遺物出土状態
48	(上)ＡＴ14（西より）	(下)ＡＴ14（南より）
49	(上)ＡＭ１（北より）	(下)ＡＭ１断面土層
50	(上)ＡＭ５（東より）	(下)ＡＢＰ１（北より）
51	(上)Ａ地区掘立柱建物群全景（南より）	(下)Ａ地区掘立柱建物群北部（北より）
52	(上)ＡＨ３附近近景（北より）	(下)ＡＨ３（南より）
53	(上)ＡＨ６附近近景（南より）	(下)ＡＨ６（東より）
54	(上)Ｂ地区全景（北より）	(下)Ｂ地区全景（南より）
55	(上)ＢＴ１・２附近近景（東より）	(下)Ｂ地区北部（南より）
56	(上)ＢＴ１・２・９・10（北より）	(下)ＢＴ２・９・10（東より）
57	(上)ＢＴ９カマド	(下)ＢＴ１セクション
58	(上)ＢＴ３（南より）	(下)ＢＴ３カマド
59	(上)ＢＴ４・５・６（南より）	(下)ＢＴ４遺物出土状態
60	(上)ＢＴ５（西より）	(下)ＢＴ６（西より）
61	(上)ＢＴ６カマド	(下)ＢＴ８附近近景（西より）
62	(上)ＢＴ８（西より）	(下)ＢＴ８（北より）
63	(上)ＢＴ８カマド	(下)ＢＴ８カマド
64	(上)ＢＴ８附近近景（北より）	(下)ＢＴ１（東より）
65	(上)ＢＨ２・３（南より）	(下)ＢＨ２・３（北より）
66	(上)ＢＨ１（南より）	(下)ＢＨ２（南より）
67	(上)ＢＨ３（南より）	(下)ＢＨ４（南より）
68	(上)ＢＨ５（北より）	(下)ＢＨ７（西より）
69	(上)ＢＨ７附近近景（南より）	(下)ＢＨ７（南より）
70	(上)ＢＨ６（南より）	(下)ＢＨ６（西より）
71	(上)ＢＭ１（東より）	(下)ＢＭ１遺物出土状態
72	(上)ＢＭ１礫石	(下)ＢＭ２遺物出土状態
73	(上)Ｃ地区全景（南より）	(下)Ｃ地区全景（南より）

図版74	(上)Ｃ地区南部（北より）	(下)Ｃ地区北部（南より）
75	(上)ＣＴ１（東より）	(下)ＣＴ１カマド
76	(上)ＣＴ５（西より）	(下)ＣＴ５カマド
77	(上)ＣＴ７・８・９（東より）	(下)ＣＴ７（東より）
78	(上)ＣＴ９（西より）	(下)ＣＴ10（西より）
79	(上)ＣＴ10炭化物	(下)ＣＴ11・12（東より）
80	(上)ＣＴ８（西より）	(下)ＣＭ１・２（東より）
81	(上)ＣＭ９（北より）	(下)ＣＭ９遺物出土状態
82	(上)ＣＭ９遺物出土状態	(下)ＣＭ13（東より）
83	(上)ＣＭ13セクション	(下)ＣＭ13遺物出土状態
84	(上)ＣＭ17（西より）	(下)ＣＭ17杭
85	(上)ＣＭ17杭出土状態	(下)ＣＭ17石仏出土状態
86	(上)ＣＢＰ22（南より）	(下)ＣＢＰ19・21・22・26（北より）
87	(上)ＣＢＰ16	(下)ＣＢＰ18
88	(上)ＣＢＰ９	(下)ＣＢＰ12
89	(上)ＣＢＰ５	(下)ＣＢＰ７
90	(上)ＣＢＰ１	(下)ＣＢＰ４
91	(上)ＣＰ12	(下)ＣＰ19
92	(上)ＣＰ51	(下)ＣＰ 150
93	(上)ＣＰ 169	(下)ＣＰ 215
94	(上)ＣＰ 329	(下)ＣＭ９内Ｐ
95	(上)Ｄ地区全景（北より）	(下)Ｄ地区南部（北より）
96	(上)Ｄ地区墓４	(下)Ｄ地区墓５
97	(上)Ｅ地区全景（南より）	(下)Ｅ地区全景（北より）
98	(上)Ｅ地区南部（北より）	(下)Ｅ地区北部（南より）
99	(上)ＥＨ１（南より）	(下)ＥＨ１柱穴内軒丸瓦出土状態
100	(上)ＥＭ５（南より）	(下)ＥＭ５（西より）
101	(上)ＥＢＰ１	(下)ＥＢＰ４
102	(上)ＥＢＰ９	(下)ＥＰ31
103	(上)Ｅ地区落込みⅠ	(下)Ｅ地区落込みⅡ
104	(上)Ｅ地区焼土坑Ⅰ～Ⅳ（南より）	(下)Ｅ地区焼土坑Ⅰ～Ⅳ（東より）
105	(上)Ｆ地区全景（南より）	(下)Ｆ地区全景（北より）
106	(上)Ｆ地区北部（南より）	(下)Ｆ地区南部（北より）
107	(上)Ｆ地区北部（西より）	(下)Ｆ地区中部（西より）
108	(上)ＦＴ１（西より）	(下)ＦＴ１（北より）
109	(上)ＦＴ２（東より）	(下)ＦＴ２（北より）
110	(上)ＦＴ２床面礫石	(下)ＦＴ４・５（東より）
111	(上)ＦＴ６（南より）	(下)ＦＴ６（北より）

図版112	(上)ＦＴ９・10・23（東より）	(下)ＦＴ９・10・23（北より）
113	(上)ＦＴ11（東より）	(下)ＦＴ11（西より）
114	(上)ＦＴ11カマド	(下)ＦＴ11カマド
115	(上)ＦＴ12（北より）	(下)ＦＴ12（西より）
116	(上)ＦＴ12カマド附近遺物出土状態	(下)ＦＴ12カマド
117	(上)ＦＴ12壁溝内ピット列	(下)ＦＴ12壁溝内ピット列
118	(上)ＦＴ８・９・10・23（北より）	(下)ＦＴ13（西より）
119	(上)ＦＴ15（北より）	(下)ＦＴ15（西より）
120	(上)ＦＴ16（南より）	(下)ＦＴ16（西より）
121	(上)ＦＴ16カマド部分遺物出土状態	(下)ＦＴ16カマド
122	(上)ＦＴ18（西より）	(下)ＦＴ23（西より）
123	(上)ＦＴ19（西より）	(下)ＦＴ19カマド
124	(上)ＦＴ20・ＦＨ３（西より）	(下)ＦＴ20（西より）
125	(上)ＦＴ24（西より）	(下)ＦＴ24（北より）
126	(上)ＦＨ１・４（北より）	(下)ＦＨ２（北より
127	(上)ＦＨ３（北より）	(下)Ｆ地区南部（西より）
128	(上)Ｆ地区柵列（北より）	(下)Ｆ地区柵列（北より）
129	(上)Ｆ地区北部	(下)Ｆ地区北部
130	(上)ＦＢＰ11・12	(下)ＦＢＰ11
131	(上)ＦＢＰ３	(下)ＦＢＰ16
132	(上)ＦＰ 151	(下)ＦＰ 151
133	(上)Ｇ地区全景（南より）	(下)Ｇ地区全景（北より）
134	(上)Ｇ地区北部（南より）	(下)Ｇ地区北部（北より）
135	(上)Ｇ地区南部（北より）	(下)Ｇ地区南部（南より）
136	(上)ＧＴ１（西より）	(下)ＧＴ１（南より）
137	(上)ＧＴ２（南より）	(下)ＧＴ２（西より）
138	(上)ＧＴ３遠景（北より）	(下)ＧＴ３（北より）
139	(上)ＧＴ３（東より）	(下)ＧＴ３遺物出土状態
140	(上)ＧＴ４、ＧＢＰ６・７	(下)ＧＴ４カマド
141	(上)ＧＴ６（西より）	(下)ＧＴ６（北より）
142	(上)ＧＴ９（西より）	(下)ＧＴ９カマド
143	(上)ＧＴ９カマド	(下)ＧＴ９遺物出土状態
144	(上)ＧＴ７（西より）	(下)ＧＴ８（西より）
145	(上)ＧＴ８（東より）	(下)ＧＴ８カマド
146	(上)ＧＴ10（西より）	(下)ＧＴ10遺物出土状態
147	(上)ＧＴ12・13・14（西より）	(下)ＧＴ12（西より）
148	(上)ＧＴ12カマド	(下)ＧＴ13・14（西より）
149	(上)Ｇ地区南部（西より）	(下)ＧＢＰ６

図版150 (上)Ｈ地区全景（北より） (下)Ｈ地区全景（南より）
151 (上)Ｈ地区南部（北より） (下)ＨＴ１（南より）
152 (上)ＨＴ２（南より） (下)Ｈ地区北部（南より）
153 (上)ＨＴ５（北より） (下)ＨＴ６（南より）
154 (上)Ｉ地区全景（南より） (下)Ｉ地区全景（北より）
155 (上)Ｉ地区南部（北より） (下)Ｉ地区北部（南より）
156 (上)Ｉ地区北部（南より） (下)Ｉ地区北部（北より）
157 (上)Ｉ地区南部（南より） (下)Ｉ地区南部（北より）
158 (上)ＩＴ１（北より） (下)ＩＴ１カマド
159 (上)ＩＴ２（北より） (下)ＩＴ２カマド
160 (上)ＩＴ３（北より） (下)ＩＴ３カマド
161 (上)ＩＴ４（北より） (下)ＩＴ４カマド
162 (上)ＩＴ５（北より） (下)ＩＴ５須恵器杯Ａ出土状態
163 (上)ＩＴ８（西から） (下)ＩＴ８焼土
164 (上)ＩＴ９（北から） (下)ＩＴ11（西から）
165 (上)ＩＴ12カマド (下)ＩＢＰ
166 (上)ＩＨ１（北より） (下)ＩＨ１（東より）
167 (上)Ｋ地区全景（北より） (下)Ｋ地区全景（南より）
168 (上)ＬＭ１杭列セクション (下)ＬＭ１杭列セクション
169 (上)Ｋ地区１・２号墓、ＫＭ１（東より） (下)ＫＨ１（南東より）
170 (上)Ｋ地区１・２号墓（南より） (下)Ｋ地区１号墓（北より）
171 (上)Ｋ地区１号墓（西より） (下)Ｋ地区１号墓須恵器杯出土状況（北より）
172 (上)Ｋ地区２号墓（北より） (下)Ｌ地区全景（南より）
173 (上)ＬＭ１（南より） (下)ＬＨ１（北より）
174 柏原北遺跡出土土器
175 Ａ地区出土土器
176 Ｂ地区出土土器
177 Ｂ・Ｃ地区出土土器
178 Ｃ・Ｄ地区出土土器
179 Ｅ・Ｆ地区出土土器
180 Ｆ地区出土土器
181 Ｆ・Ｇ地区出土土器
182 Ｈ・Ｉ・Ｋ地区出土土器
183 各地区出土瓦
184 各地区出土瓦、る壺、鉄製品

表　目　次

表１．昭和51・52年度井口遺跡発掘調査地区別検出遺構一覧表…… 6
２．竪穴式住居跡計測値一覧表…… 90
３．竪穴式住居跡床面積分類表…… 93
４．竪穴式住居跡平面形分類表…… 95
５．竪穴式住居跡主・支柱穴・壁溝等分類表…… 97
６．掘立柱建物跡計測値一覧表…… 101
７．掘立柱建物跡間数別面積分類表…… 127
８．掘立柱建物跡柱間寸法計測値一覧表…… 128
９．掘立柱建物跡間数別柱間寸法分類表…… 129
10．掘立柱建物跡柱間寸法分類規模別一覧表…… 129
11．掘立柱建物跡柱間寸法分類間数別一覧表…… 130
12．掘立柱建物跡平面形分類間数別一覧表…… 130
13．掘立柱建物跡平面形分類柱間寸法・間数別一覧表…… 131
14．掘立柱建物跡方位分類平面形・柱間寸法別一覧表…… 135
15．溝状遺構間距離計測値一覧表…… 145
16．竪穴式住居跡出土杯Ａ・杯Ｂ計測値一覧表…… 221
17．瓦出土地点一覧表…… 254
18．竪穴式住居跡カマド構造分類時期別一覧表…… 254
19．竪穴式住居跡床面積等分類時期別一覧表…… 255
20．竪穴式住居跡構造分類時期別一覧表…… 255
21．溝状遺構変遷表…… 258
22．掘立柱建物跡時期別一覧表…… 261
23．竪穴式住居跡出土須恵器各種出土一覧表…… 264
24．竪穴式住居跡出土須恵器蓋Ｃ時期別出土数一覧表…… 264
25．竪穴式住居跡出土須恵器杯Ｂ時期別出土数一覧表 …… 265
26．竪穴式住居跡出土須恵器杯Ａ時期別出土数一覧表 …… 265

例　　言

1．本書は、伊香郡高月町に所在する井口・柏原両遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、滋賀県が施行する国道 365号線バイパス工事に伴うものである。

3．調査は、文化財保護課が、県土木部道路課の依頼により、財団法人　滋賀県文化財保護協会（理事長代理　辻　　清）に委託して実施した。

4．調査は、昭和53年度より昭和56年度にかけて実施した。

5．本書は、昭和54年度より昭和56年度にかけて発掘調査し、昭和57年度・昭和58年度に整理した成果である。なお、昭和53年度発掘調査分については、昭和54年度に整理し、報告書を刊行している。

6．調査の体制は以下の通りである。

調査主体　滋賀県教育委員会

調査機関　（財）滋賀県文化財保護協会

調査指導　滋賀県教育委員会事務局文化部　文化財保護課技師田中勝弘、用田政晴

調　査　員　（財）滋賀県文化財保護協会：技師　林　　純（現五箇荘町教育委員会）、同　吉田秀則

調査補助員　臼井滋、石本好典、藤井益夫、樋野真司、井塚哲夫、中川卓也、北脇泰久、岸本好弘、多賀健次、田中聡一、増田行雄、塚本裕治、丸岡一成、平通茂、田村克也、徳永直樹、宮崎雅美、武村浩二、富田正俊、上羽基之、青木千枝、大内裕子、菊池久美、渡辺隆治、井藤俊、阪口浩章、田中秀和、宇田川正樹、大前千春、武田知久、加藤栄司、和田光司、岸野徹、為則和哉、土井美幸、井上敏明、富家佐和子、児玉浩見、国川美紀、池戸尚司、田中濃美、木下直樹、溝口勝隆、吉田美香、吉村由加、多賀千代子、福本真隆、田村清、渡辺康彦、北川保、北村玉男、川村直樹、塚越正之、（順不同）

7．本書は、田中勝弘が執筆した。ただし、才三章　才二節　才四項　Ⅰ）６世紀以前の項の弥生式土器及び、才六項・才七項については吉田秀則が執筆した。挿図、図版等の作成は、上記調査員等の共同作業による。ただし、土器の編年表は田中勝弘が作成した。写真については、遺構を田中勝弘・林純が、遺物を寿福滋が撮影した。

8．本書では、竪穴式住居跡をＴ、掘立柱建物跡をＨ、溝状遺構をＭ、土坑は大形のものをＢＰ、小型のものをＰと略号を用い、それぞれに地区名を冠した。地区名は、柏原北遺跡部分のみ、たとえば、柏原北ＣＴ５とし、井口遺跡部分については、井口を省略し、たとえば、ＡＴ１とした。地区は、柏原北遺跡をＡ～Ｃの３地区、井口遺跡をＡ～Ｌの12地区を設定している。

9．本書では、遺構の変遷について主眼をおいたので、個々の遺物、特に土器類の個々の観察表は省略した。出土遺物はすべて、滋賀県埋蔵文化財センターに保管しているので御活用いただきたい。

はじめに

柏原遺跡及び井口遺跡は、昭和50年度に、国道 365号線バイパス建設事業の策定に当って、事前に路線予定地附近の遺跡確認調査によって発見したものである。両遺跡は、遺物の散布状況から路線予定地のほぼ全域に及び、かつ、遺跡の中心附近に当ると予想された。従って、遺跡の保護のため、路線変更等の計画の見直しを要望したところであるが、現国道が東海地方と日本海地方とを結ぶ主要道路となっていて、交通量も多く、しかも、集落間をぬって通過しており、交通事故等の交通問題が顕現化しているところから、早期開発について地元の極めて強い要望があった。また、バイパス建設計画とその附近のほ場整備計画とが並行して実施されていたため、路線の変更が極めて困難な状況であった。さらには、湖北町以南においては、すでにバイパスが完成しており、高月町内への延長が急務となっていた。従って、県道路課、木ノ本土木事務所の要請によって、急拠、事前調査を実施したのである。

調査は、原因者である滋賀県が費用を負担し、昭和53～56年度の４ヵ年事業として、滋賀県教育委員会が財団法人　滋賀県文化財保護協会に再委託して実施した。

なお、調査に当り、高月町教育委員会、井口区、柏原区、持寺区、保延寺区、東阿閉区、西阿閉区の方々、京都産業大学考古学クラブの会員の方々にお世話になった。さらに、木ノ本土木事務所の担当の方々には調査を進行させる上に色々御便宜を計っていただいた。ここに記して謝意を表します。

第一章　位置と環境

第一節　位置と地理的環境

第一項　位置と範囲（図１）

国道 365号線バイパス路線範囲内で、行政区画が伊香郡高月町井口地先に入る南北 1.1㎞の間を井口遺跡、その南で、柏原地先に入る 0.6㎞の間を柏原遺跡とした。柏原遺跡は、調査年次の関係もあって、便宜上、北半分の 0.3㎞の間を柏原北遺跡とした。しかし、井口・柏原両遺跡は、時期的にも性格的にも共通しており、今回の調査においても、集落の単位及びその範囲を明確にすることができなかったため、現在の行政区画で遺跡を区別することは不適当と考えられる。従って、本書では、井口・柏原遺跡として、南北 1.7㎞に及ぶ一つの集落跡として取り扱うこととした。従って、遺跡は、伊香郡高月町井口及び柏原の両地先に及ぶ。遺跡の正確な範囲は明瞭でないが、井口地先にあっては、現集落の西及び南側の水田・畑地に中心があって、西方約 600ｍ、国鉄北陸本線の東約 150ｍ附近にまで及ぶものと考えられる。現在の集落内については明らかに仕難いが、昭和56年度に実施された高月町営上水道工事に伴う立会調査等によって、井口集落の東、雨森集落附近まで及ぶことが判明しており、現集落のほとんどを含み込むことが推察される。

図１．位置図及び周辺主要遺跡分布図

柏原地先にあっては、現集落の北側から東側にかけて遺跡の広がりが確認されているのみであるが、柏原区の南、渡岸寺区で、昭和57年度に実施された県営ほ場整備工事に伴う事前調査で、渡岸寺集落の東側、柏原集落にあってはその南側の水田で同種の遺構が検出されており、柏原地先のみならず、渡岸寺地先をも含めた範囲を考えておく必要がある。

また、井口の北に持寺、その東側に保延寺、その北に尾山と集落が続くが、この３区に囲まれて保延寺大海道遺跡がある。やはり、井口・柏原遺跡と時期的、性格的に共通性のある集落跡である。

以上から、保延寺、井口、柏原、渡岸寺と南北約 2.2㎞に及ぶ集落群跡が存在するのである。これら集落群跡は、湖北平野を形成する主要河川の一つ、高時川の西側 100ｍ～ 300ｍに位置する。国道８号線からは 0.3㎞～ 1.1㎞東側にある。湖北平野の北部は、西を賤ヶ岳から派生する約７㎞に及ぶ地累状の山丘によって琵琶湖と界され、東を高時川が南流する。井口・柏原遺跡は湖北平野北部の北東部を占める。高時川は伊吹山系三国ヶ岳に源を発し、田部山の東麓で平野部に出るが、遺跡はその田部山の南側、高時川西岸に位置する。

第二項　地理的環境

Ⅰ．自然地理的環境

湖北平野を形成する主要河川の一つである高時川は、平野部に出て、己高山、山田山と続く山丘との間に後背湿地を形成する一方、その西岸において、現在の集落である保延寺、持寺、雨森、井口、柏原、渡岸寺、落川、高月、森本と続く自然堤防を形成している。西方には、千田、唐川、布施、東高田、磯野、東柳野、西柳野と続く赤川沿いの自然堤防が見られるが、規模の上では高時川西岸のこの自然堤防が極めて大きい。微細に等高線を追うと、等高線はこの自然堤防の方向よりやや西方で張り出す。すなわち、南西方向へ張り出す地形を呈している。従って、南西方向へ張り出す微高地の東辺に自然堤防が形成されていることになる。井口・柏原遺跡はこの自然堤防上に立地していることになる。遺跡は標高 112ｍ～ 113ｍ前後にある。

遺跡は現在、高時川の西岸に位置するが、航空写真を観察すると、その西岸に高時川の支流と思われる旧河道状の地形が認められ、これに沿って現在も小河川が流れている。一本は、尾山の東を通り、保延寺と持寺の間を通過し、井口の東側、雨森との間をぬけ、井口の南側、柏原までの間で現国道 365号線に沿い、柏原の東側から落川の東方で高時川に合流するものである。この旧河道は、井口遺跡にあってはそのほぼ東限を通過しており、柏原遺跡にあっては、柏原北遺跡として便宜上区別したものとの間を通る。また、保延寺大海道遺跡の東限、渡岸寺遺跡の東限でもある。もう一本は、この旧河道から派生しているようで、井口集落の中程から集落内を通って南西方向に流れるものである。これは、集落を離れて 450ｍ程まで南西方向に流れ、以西は条里畦畔に沿って流れている。現在農業用の小水路であるが、本来河幅の極めて広い河川であったことは今回の調査で明らかになっている。また、条里畦畔に沿う部分も、平安時代後期に改修されたものであり、本来、水路変更せず、南西方向に流れていたものであることも判明している。さらに、尾山の北で分流するものがあり、これは保延寺、雨森の東側を南流し、雨森の南側で高時川に合流する。この小支流と高時川との間は、『川原』等の字名が示すように後背湿地であったようである。

以上の旧河道は、今回の調査において確認したものもあり、現在小水路となっているものも、本来相当な河川幅を持っていたものと考えられる。これらは、南北に長い自然堤防の微高地をぬって流れてい

るわけで、集落の形成に関して大きく関与していたであろうことは想像に難くない。

II．人文地理的環境

湖北平野、特にその北部、高月町から木ノ本町にかけての人文地理的な大きな特徴は、一つに、あらゆる交通路が集束することであろう。主なものでは、国道８号線、国鉄北陸本線、国道 365号線等であり、最近、北陸自動車道が開通している。これらは、いずれも木ノ本町木ノ本に集束し、国道 365号線を除いて、敦賀経由で北陸日本海方面へ通じている。国道365号線は、椿坂、中河内、今庄を経由して、武生で国道８号線と合流しており、北陸へ通じる最短距離となっている。このように、栗太郡栗東町で国道１号線と分岐し、湖東地方を北上する８号線、岐阜県関ヶ原町で21号線と分岐する 365号線、同様に、米原町で分岐する北陸本線や北陸自動車道と、現在もなおかつ、近畿中心部・東海地方と北陸日本海方面とを結ぶ幹線交通網は湖北地方を通過し、湖北平野北部、高月町から木ノ本町附近へ集結し、交通上極めて重要な位置を占めていることが知れる。歴史上においても、８号線から21号線への経路は中山道とオーバーラップし、８号線の米原以北と 365号線の木ノ本以北は北国街道、 365号線の木ノ本以南は北国脇往還道と沿って通過しており、交通上の要所を占めていることに変りがなく、従って、高月・木ノ本町附近が、古来より日本海方面への門戸的な位置にあったとすることができる。特に、国道 356号線、すなわち、旧北国脇往還道は、古墳の分布等からも古来より極めて重要なルートであったらしいことが伺える。また、このルートは、井口・柏原遺跡を縦断しているのであって、遺跡と極めて関係の深い交通路である。現在、高時川東岸で湖北町を通過し、高月町馬上から阿弥陀橋を渡って高時川の西岸に移り、川辺を北上して雨森に至り、井口の集落の南端附近で西に折れ、再び北上して持寺の西沿いから井口集落の北辺で鉤状に折れて、木ノ本町に入っている。従って、柏原及び渡岸寺遺跡の東側を通り、井口遺跡の東辺を通って、北辺で折れ、再び北上している。これは現在のルートであるが、これとは別に、井口の中程から持寺の東辺を通り尾山へ至る道が小字の分布からうかがえる。すなわち、持寺－尾山間に田村三道、山道、大海道の字名が並ぶのである。このルートでは保延寺大海道遺跡の東辺を通ることになり、渡岸寺遺跡以北の諸遺跡がこれで道沿いに分布することになる。井口以北の道沿いにも北大道、田大道、大道、西大道等の小字名が並ぶが、現存条里畦畔の方向にあるもので、新しくひらかれたものであろう。このように見てくると、井口・柏原遺跡等の諸集落の形成が旧北国脇往還道と極めて密接に関連するものであることが考えられるであろう。

次に、人文地理的な景観としては、平野部の全体に広がる条里景観がある。湖北地方の条里は郡単位で異る。すなわち、伊香郡単位で統一条里景観を示す。ただし、高月町内に限って見ると、高時川以東及び旧北国脇往還道に沿った範囲には、以西の条里景観に比べ水田の畦割に大きな乱れが生じている。高時川以東にあっては後背湿地として後世まで水田開発の遅れがあったものと理解できる。一方北国脇往還道に沿う部分については、井口・柏原遺跡等諸遺跡の存在に大きく起因しているものと考えられる。以西の平野部に現存する諸集落の有り方が現存条里割に極めて強い規制を受けていると考えられるのに対し、渡岸寺から保延寺、尾山にかけての諸集落は条理割りとは無関係な町割りとなっている。さらに、各集落の周囲の水田に、やはり条里畦畔を持たない部分が多い。これまでの諸調査では、こうした条里畦畔を持たない水田部分を中心に遺構を検出しており、遺跡の範囲のアウトラインを示すものであった。諸遺跡が平安時代後期を境いに衰退していくことや同時期に水路が条里畦畔にあわせて改変されていること、また、この頃に、遺跡内に条里畦畔に沿った水路が新たに開発されていること等を考え合せると、諸遺跡における集落の展開とその西方平野部の条里開発とが撥を一にしたものであることが推察

されるのである。今回の調査でも農業用と考えられる多くの人工的水路を検出している。これら水路に対する検討が条里水田の開発に関して大いに寄与するものであろう。

第二節　歴史的環境

第一項　歴史的環境

周辺諸遺跡の分布に関しては、これまでに、特に高月町内の遺跡に対する発掘調査報告書の中で繰り返し述べられているので、本書では改めて取り上げることをしない。脚注にあげた諸報告書を参照されたい。

第二項　研　究　史

井口・柏原遺跡及びその前後に所在する保延寺大海道遺跡、渡岸寺遺跡については、これまでに、県営ほ場整備事業に伴い、何回かの調査を実施しており、その結果についても報告書を刊行してきた。今回の調査は、これら過去の一連の調査を踏まえて実施したものである。従って、ここで、数年次にわたる調査の概略を記し、参考に供することとする。

Ⅰ．井口遺跡昭和51・52年度調査(図2)

井口遺跡については、２年度にわたり、県営ほ場整備事業に伴い、発掘調査を実施してきた。調査方法は、ほ場整備工事により切土が計画されている部分についてトレンチを設定し、工事が遺跡に影響のある場合、設計変更により遺跡の保存を計ったため、遺構の完掘は、深掘がやむを得ない排水路計画部分に限った。従って、遺跡の詳細は明確になし得なかったが、遺跡の範囲や性格、時期幅等の概略を知ることができた。

（昭和51年度調査）[①]

井口地先の水田の南半分約 300,000㎡が調査対象で、その約２分の１に当る範囲に試掘坑を設定している。最も国鉄北陸本線沿いに近い部分（北陸線より 250ｍ東）に設定した試掘坑を除き、これより以東のほとんどの試掘坑で遺構を確認した。従って、北陸線より 200ｍ東附近が遺跡の西限であることが判明した。東、北、南については、さらに広がることが予想された。

検出した遺構は、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、大形土坑、ピット、瓦溜等である。完掘したのは、排水路計画部分のみで、Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅ水路として調査を実施した。

Ａ水路　　掘立柱建物１基の他、多数のピット、土坑等を検出している。掘立柱建物跡は全容は不明であるが、Ｎ３度Ｅの方向にある東西棟である。柱穴からは平城宮跡ＳＫ 870（平城宮跡Ⅴ期）の須恵器杯身が出土している。その他のピット群や土坑については、性格は不明だが、平安時代前期～後期の土器類を出土するものが多い。

Ｃ水路　　３～４基の竪穴式住居跡、溝跡１条、ピット群を検出している。竪穴式住居跡は、北端の１基は旧河道に切られていて、住居跡かどうか不明。他の３基は３～５ｍ間隔に、ほぼ軸線を南北にそろえている。明確なカマドの痕跡は検出できなかったが、焼土を住居の東辺中央及びやや南寄りで確認している。いわゆる壁溝はなく、柱穴も持たない。出土遺物は極めて少なく、南端の４号としたものから平城宮跡Ⅲ期頃の須恵器杯、３号から４号より古いと思われる土師器壺が出土しているにすぎない。

溝跡はＮ12度Ｗの方向に直線的にのびるもの。ピット群のうち、溝跡を切り込んでいる３基はＮ11度Ｗのの方向に並び、掘立柱建物になる可能性が強い。

Ｄ水路　　多数のピット群、土坑群、２条の溝跡等を検出している。溝跡は 4.7ｍの間隔をもって並行しており、３度程南にふれて東西方向にのびる。小片であるが、平安時代中期末頃の土師器皿が出土している。ピット群、土坑群については性格は不明だが、出土した土器類は平安時代全般のもので、奈良時代以前にさかのぼるものは極めて少なく、Ｄ水路附近の遺構群の特徴といえる。

Ｅ水路　　掘立柱建物及びピット群を検出した。Ｅ水路の南及び北側で設定したトレンチでも２基の掘立柱建物を検出しており、竪穴式住居跡は確認していない。掘立柱建物は円形の柱穴で、Ｎ５度Ｗの軸線を持ち、トレンチで検出した2基はともに方形の掘り方で、２間×５間で、軸線は前記のものよりわずかに西にふれる。時期は不明であるが、この水路からは奈良時代の土器類が比較的多く出土している。

Ａ地区ｄグリット竪穴式住居跡　　試掘調査の過程で、１基の竪穴式住居跡の完掘を計った。住居跡内から飛鳥Ⅱ期に比定できる須恵器杯、蓋、土師器長胴甕等が出土している。Ｎ14度Ｗに軸線を持ち、竪穴の西辺で南よりに焼土塊があった。東辺に幅の狭い段を持ち、この部分に２基の柱穴があり、西辺寄りに２基の柱穴がある特異な構造を持つものであった。

以上の完掘を計った排水路計画部分の他に、対象区域内で12の地区を設定し、トレンチにより遺構の有無等を確認した。その結果は表１の通りである。

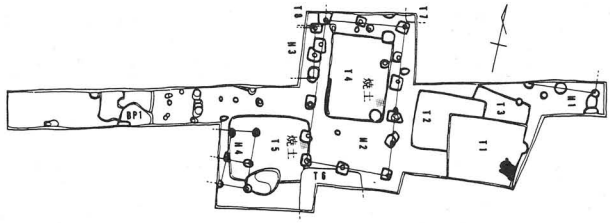
地区名	所在地（字名）	主要遺構	出土遺物の年代
A	鍵田	竪穴式住居．溝．ピット	平安
B	〃	竪穴式住居．ピット	奈良・平安
C	小寺	掘立柱建物．ピット	奈良・平安
D	西石橋	包含層	奈良・平安
E	東野村	掘立柱建物．溝．ピット	古墳・平安
F	〃	包含層	奈良・平安
G	〃	包含層	古墳・奈良・平安
H	南出口	土器溜．包含層	古墳・奈良・平安
I	殿町	瓦溜	古墳・奈良・平安
J	宿の西	包含層	奈良・平安
K	畔ノ下	竪穴式住居．掘立柱建物	奈良・平安
L		遺構なし	古墳・奈良・平安

表１．昭和51年度井口遺跡発掘調査各地区検出遺構一覧表

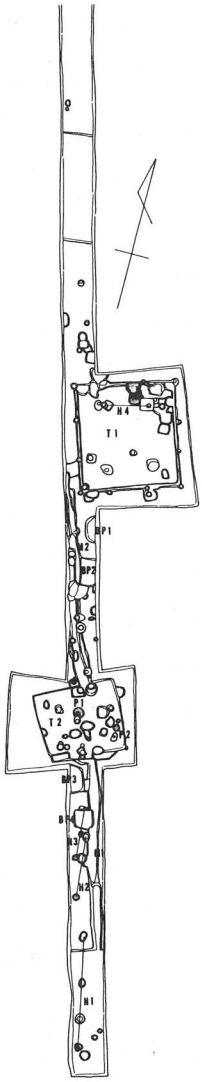
（昭和52年度調査）[②]

井口地先の水田の北半分 280,000㎡を調査対象とし、Ａ～Ｘの24地区を設定し、このうち13地区にトレンチを設定、試掘を実施した。国鉄北陸本線より東 250ｍまでは遺構は確認できず、遺跡の東限と考えられた。以東では、ほ場整備工事による排水路計画部分にトレンチが集中したが、Ｒ・Ｎ地区を除いて、他の地区では何等かの遺構を確認し、完掘を計った。

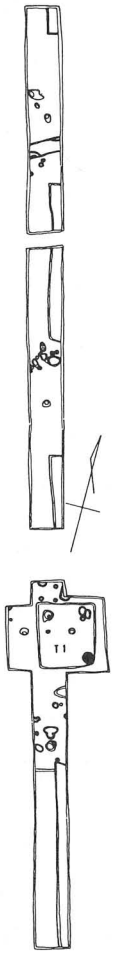
Ｈ地区　　幅4.65ｍ、深さ 0.8ｍの大溝、幅1.45ｍ、深さ0.55ｍ及び幅１ｍ、深さ0.55ｍの小溝２条、



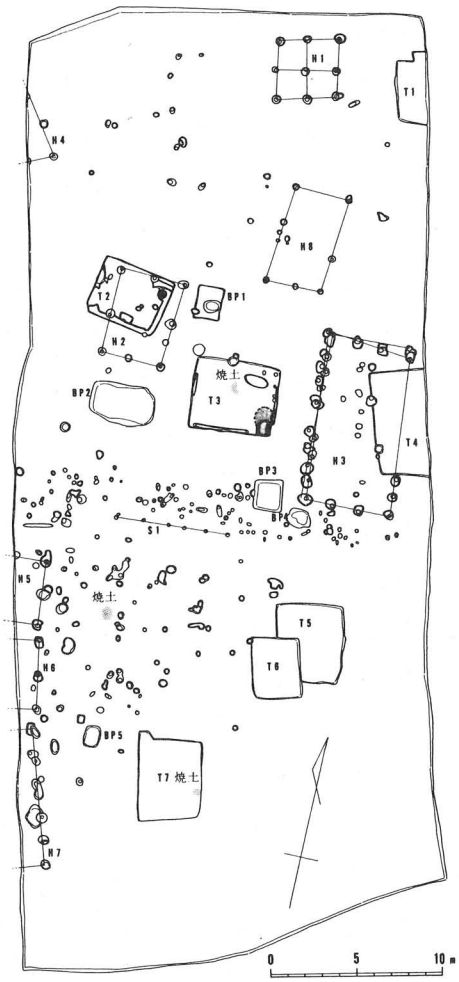
W地区



M地区



P地区



X地区

図２．昭和52年度ほ場整備関係井口遺跡検出遺構図

径 5.2m、深さ 0.9mの大型土坑を検出。大溝は人工的であるが性格は不明で、須恵器や灰釉陶器の細片が出土しており、平安時代の開削と考えられた。

M地区　竪穴式住居跡、溝、ピット等を検出。竪穴式住居跡は、軸線が磁北よりやや西にふれ、北西コーナーにカマドを持つ。柱穴や壁溝はない。須恵器杯、蓋等が出土しており、平城宮Ⅶ期頃のものと考えられる。

P地区　竪穴式住居跡、掘立柱建物、井戸跡、溝跡、大型土坑、ピット等を検出した。竪穴式住居跡のうちPT1は、北辺にカマドを持ち、壁溝をめぐらせる。4本の主柱穴とともに、各辺に2基、各コーナーに1基の支柱穴のある特異な構造を持つ。須恵器埦、蓋、平瓶、土師器甕等が出土していて、飛鳥Ⅳ期のもの。PT2は、焼土塊が中央と東辺の2ヵ所で検出された。中央のものは炉跡状に凹む。柱穴等はない。土師器の甕が出土しているが、6世紀前半頃のもので、作り付けのカマドを本来持っていなかった可能性がある。掘立柱建物跡は4基確認している。PH4はPT1を切り込み、平城宮Ⅶ期頃、PH1～3は明らかでないが、PT2に重複した土溜りより、猿投窯東山70号窯式　(11C前半)の灰釉陶器が出土していることからこの頃のものと考える。井戸跡は4基で、このうちBP2としたものは、その西辺から北へのびる溝がある。溝は北ほど深かく、BP2より水を引いている。

W地区　竪穴式住居跡5基、掘立柱建物跡3基、その他土坑、ピット等を検出している。竪穴式住居跡のうちT1～3は重複している。T1→T2→T3の関係にある。T1は6世紀後半のもの。T3は南西コーナーより北寄りに、竪穴の東辺に対し斜めにカマドが付き、東壁に沿って南東コーナーに口を出す煙道がつくられる。カマドの焚口には長胴カメを2個つなぎ、焚口両側の石材に横架させている。平城宮Ⅰ期に相当する須恵器杯、蓋、土師器甕等を出土している。T4は長方形プランを持つ。東辺の南東コーナー寄りに焼土があり、南東コーナー部分に貯蔵穴状のピットがあった。土師器甕、鍋、杯、高杯等が出土している。6世紀末頃の住居跡である。T5はやや隅丸の方形プランで、東辺中央部に焼土が認められた。T1と同様6世紀後半の住居跡である。掘立柱建物はH2が2間×5間で方形の掘り方、H4が2間×2間以上で束柱を持ち、H1とともに円形の掘り方を持つ。H4はT5を切り込んでいる。

X地区　この地区は工事との関係で、東西約25m、南北約55mの広い範囲を完掘した。竪穴式住居跡7基、掘立柱建物跡8基、土坑、ピット群を検出した。竪穴式住居跡は、6世紀後半から8世紀中頃までのもので、T1→3→5→2・7→4・6の関係にある。T2では南辺と東辺に溝がめぐり、北辺の北東コーナーよりに斜めにカマドがつき、辺に沿って北東コーナーより煙を出す煙道があり、煙道の南側に灰のつまったピットが設けられている。T3は南東コーナーに、南辺に直交したカマドがある。T7は東辺中央に焼土があった。竪穴式住居跡のいずれにも柱穴は認められない。掘立柱建物跡は8基を確認しているが、全容の知れるものは2間×2間で束柱をもつH1、2間×2間で束柱のないH2、2間×8間の大型のH3で、H8は建物としては不確実である。竪穴式住居跡に重複するものはすべて、新しい。土坑のうちBP3は方形の掘り方、BP1は長方形の掘り方で焼土、炭化物が含まれていた。

以上が昭和52年度の調査概要である。6～9世紀にかけての竪穴式住居跡、奈良時代から平安時代と考えられる掘立柱建物跡等の他井戸跡等を検出している。土器類からも表土層出土のものも含めて、6世紀後半から12世紀までのものが出土している。

Ⅱ．柏原遺跡昭和53年度調査③

国道 365号線バイパス工事に関連して調査したもので、既報告のものである。現国道365 号線以南約220mを調査した。遺構は南の約80mの間で、以北の国道までは河道となっている。以南は砂層の堆積

が厚く、高時川の浜堤となる。竪穴式住居跡９棟、掘立柱柱建物跡２棟、井戸跡、多数の土坑、ピット、溝跡等を検出している。Ｔ１は竪穴の北辺中央にカマドを持ち、平城宮Ⅳ期の須恵器、灰釉陶器、土師器の土器溜りが形成されていた。Ｔ３とＴ９は重複し、Ｔ９はＴ２と並行で、鉄製の鎌が出土している。４本の柱柱穴がある。カマドの位置は判然としない。Ｔ３は竪穴の南東コーナーよりやや北寄りにカマドが付く。平城宮Ⅵ期頃のもの。Ｔ５は東半分のみであるが、北辺と南辺に壁溝があり、南東コーナーよりやや北寄りの東辺に直交したカマドが付く。飛鳥Ⅲ期の須恵器、土師器が出土している。Ｔ６は４本の主柱穴と竪穴の外側で、各コーナーと各辺に２基ずつの支柱穴がめぐらされている。竪穴の南東コーナー部分が掘り残され、この北側にカマドが付く。平城宮Ⅱ期頃の土器類を出土している。Ｔ７は壁溝をめぐらせている。平城宮Ⅰ期頃のもの。Ｔ８は飛鳥Ⅴ期頃、Ｔ４は壁溝をめぐらせるが時期は不明。以上から、（Ｔ２・Ｔ９）→（Ｔ５）→（Ｔ６・Ｔ７・Ｔ８・Ｔ４）→（Ｔ３・Ｔ１）と６Ｃ後半、７Ｃ半頃、８Ｃ初頭、８Ｃ末の４時期の住居跡群である。井戸跡は黒笹90号窯式の灰釉陶器を出土するもの（ＢＰＩ）と百代寺窯式のものを出土するもの（ＢＰ９）とがある。溝跡はＴ３・ＴＴ９をめぐるように、Ｌ字形に曲るもの（Ｍ１）がある。遺物は時期差があるが、最も新しいもので、東山72号窯式と考えられる灰釉陶器の他玉緑のある白磁等がある。土坑やピット等では、Ｐ351、Ｐ353、Ｐ350等が土器を破サイした状況にある。Ｐ54からは「今西」の墨書名のあるもの、Ｐ51は杯身を２個、枕状に置いた状態で出土している。掘立柱建物は４間×５間の特異なもの、２間以上×４間以上のものの２基ある。時期は明らかでないが、平安時代のものであろう。

以上が遺構の概略である。他のピットや包含層の出土遺物も６世紀後半から12世紀頃までの間に納るものである。以北の旧河道状の部分からの出土遺物も、平安時代を中心とするが少ないながら７世紀代にさかのぼるものがあり、集落の範囲もさほど北へ広がらないものと考えられる。

Ⅲ．保延寺大海道遺跡昭和49・50年度調査④

昭和49年度に中心部、50年度に縁辺部の試掘調査を実施している。ともに県営ほ場整備事業に伴うもので、完掘をさけているため、検出した遺構の時期はすべて不明である。ただ、両年次調査を通じて、東西400ｍ、南北300ｍ程の範囲に納る集落跡であることが判明している。検出した建物跡は、竪穴式住居跡 120棟以上、掘立柱建物跡12棟以上で、その他に瓦溜り等がある。遺構の時期は明らかでないが、６世紀中頃から９世紀まで変遷がたどれる。以後にあっては、灰釉陶器で折戸53号窯式から百代寺窯式まで確実にたどれ、以前にあっては、空白期間があり、弥生時代後期にさかのぼる。

Ⅳ　渡岸寺遺跡昭和58年度調査⑤

県営ほ場整備工事に伴い、実施された。渡岸寺東側の狭い範囲であるが、カマドを持つ古墳時代後期の竪穴式住居跡５棟、８世紀前半～中頃の掘立柱建物１棟が検出されている。

以上が、井口・柏原遺跡周辺の遺跡のこれまでの調査の概略である。いずれも竪穴式住居跡、掘立柱建物を主体とする集落跡である。時期の判明している竪穴式住居跡では、井口遺跡ＰＴ２が６世紀前半にさかのぼるかと思われるが、およそ６世紀後半から９世紀初頭までのものがある。この点、保延寺大海道遺跡においては、出土遺物の変遷から同様の時期幅を考えることができる。掘立柱建物は、竪穴式住居跡と重複する限り、新しい。９世紀以降の出土遺物では、灰釉陶器の変遷から12世紀頃までのものがたどれ、掘立柱建物の時期幅を示している可能性が強い。以前にあっては、保延寺大海道遺跡で比較的多量の弥生式土器が出土しているが、それまでの間を埋める遺物の出土がない。従って、井口・柏原・保延寺大海道遺跡と南北に並ぶ集落跡は、その形成段階から終末までの間、揆を一にした展開を示し

ているといえる。渡岸寺遺跡も例外ではなかろう。このように、井口・柏原遺跡を考える場合、その南北に分布する諸遺跡とは無関係には論じ得ないだろう。むしろ、一体として把握する必要がある。また、これら諸集落跡が、後期群集墳の爆発的な増加を見る時に形成初期を迎え、律令体制とその崩壊を経験し、新たに荘園体制に入り、武士団の発生期に終焉を迎えるという日本史上の画期を通過して展開していったものであり、今回の調査は、こうした歴史の流れの中での集落の対応・変化過程を知る上に極めて貴重な資料を提供するであろう。

注 ①『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ（滋賀県教育委員会、昭和52年）
②『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ（滋賀県教育委員会、昭和53年）
③『国道 365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ（滋賀県教育委員会、昭和54年）
④『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅱ（滋賀県教育委員会、昭和50年）
『同　上』Ⅲ－Ⅱ（同上、昭和51年）
⑤『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅸ－２（滋賀県教育委員会、昭和59年）

第二章　調査の経過(図３)

井口・柏原遺跡は、昭和40年度刊行の『滋賀県遺跡目録』には登載されていない。当時は、井口地先のものとして、集落の西方にある天満宮遺跡が神社跡として周知され、また、集落内の日吉神社前の池から縄文時代の石棒が出土したと伝え、井ノ口遺跡として記載されていたにすぎない。しかるに、昭和50年度に、国道 365号線のバイパス工事を高月町内で実施する計画があり、滋賀県木ノ本土木事務所の依頼により遺跡確認調査を実施したところ、計画路線のほぼ全域に遺物の散布することが判明したのである。その後、昭和51・52両年度にわたる井口地先の県営ほ場整備工事に伴う事前調査が実施され、遺跡の範囲、遺構の分布状況、遺跡の性格、時代幅等のアウトラインが知れるようになった。昭和53年度に入って、滋賀県より事前の発掘調査の要請を受けたのであるが、これまでの調査結果から、路線内で約1.7㎞にわたり、遺構の分布する可能性が極めて強いため、全体の調査終了までに３～４年間を要する旨通知し調査を開始したのである。

初年度は、現国道 365号線までの約 230ｍ間を調査対象とした。調査は、７ヵ所にトレンチを設定し、遺構や遺物の包含層等の有無を確認した。その結果、調査対象区域の南端約80～ 100ｍの間で遺構を確認し、柏原遺跡と銘命して、この間の発掘を行った。オ２トレンチ以北では、旧河道状の礫層や砂層、流木等を含む泥質土層の堆積が厚く、遺構や遺物の包含層等を検出できなかった。

国道 365号線以北については、井口地先の範囲を井口遺跡、柏原地先の範囲については、前年度の柏原遺跡と区別するため、柏原北遺跡とした。両遺跡とも、周辺のほ場整備工事が完了しており、約 100ｍ毎に排水路、用水路、農道等が横断しているので、これらで区切られる約 100ｍの範囲毎にアルファベットを冠し、地区設定した。井口遺跡については、南よりＡ地区、Ｂ地区……として、最終的にはＬ地区までの12地区に分けた。柏原北遺跡については、路線内の用地交渉の未決着の場所が存在していたことで、調査順序順にアルファベットを付したため、Ｃ地区が南端に来たが、Ａ～Ｃの３地区を設定した。

昭和54年度には、井口遺跡のＡ～Ｄ地区と柏原北遺跡のＡ・Ｂ地区の計６地区、約 600ｍの範囲を調

査対象とした。柏原北遺跡のＣ地区は、用地問題が未解決であるため、翌年度に着手することとした。この年度には、柏原北遺跡のＡ地区北半分と、Ｂ地区の全域に遺構のない部分があった。また、井口遺跡Ｄ地区は北半分が旧河道、南半分に近世の墓地が分布し、住居跡がなく、従って、Ａ～Ｃの約 300ｍに住居群が集中していることが判明した。柏原北遺跡では、Ａ地区の南半分に溝跡等が検出され、遺跡がＣ地区に広がることが予想された。

昭和55年度、すなわち才３年次は、井口遺跡Ｅ地区からＩ地区までの約500ｍと柏原北遺跡のＣ地区約150ｍを調査対象とした。井口遺跡では、Ｅ地区は、大半がＤ地区で検出した旧河道が続き、南端で

図３．地区設定図

わずかに掘立柱建物を検出したにすぎない。この建物跡は次のＦ地区に続くが、Ｆ地区でも住居群は南半分に集中する。Ｇ地区では、その中央部が落ち込み、南北両側に住居群の分布が認められた。Ｈ地区は南寄りと北端に若干の住居群の分布が認められ、Ｉ地区では南側に集中的に住居群が分布し、北端に掘立柱建物跡を若干数検出している。柏原北遺跡Ｃ地区では、前年度のＡ地区の調査で予想された通り、ほぼ全域に住居群の分布が認められた。Ｃ地区は用地の問題があり、一部造成済みの部分があって、この部分に関しては、問題解決後に調査を実施した。

遺跡は頭初、Ｉ地区までの範囲を想定していたのであるが、Ｉ地区の北端で掘立柱建物跡が検出され、さらに北へ遺跡ののびることが予想されたので、調査地区をさらに北へ設定し、昭和56年度事業として発掘調査を実施することとした。

昭和56年度には、結果的にＫ・Ｌの２地区を発掘した。Ｋ地区では土坑墓と掘立柱建物跡を検出したにすぎず、Ｌ地区は、大半が削平を受け、一部に溝跡等を検出したのにとどまる。また、以北への遺跡の広がりも予想できず、遺跡の北限と考え、調査を終了することとした。

以上が、現地発掘調査の経過である。柏原遺跡の北側130ｍ～150ｍの間及び、井口遺跡のＪ地区及びＬ地区の西半分を除いて、路線内をほぼ全掘する結果となった。総延長約 1.5㎞にわたって発掘調査を実施したことになる。調査後の整理作業は、昭和56年度の下半期を含め、昭和57年度、昭和58年度のあしかけ３年間を要した。この間に、昭和54年度には柏原遺跡について報告書を刊行し、昭和55年度には昭和54年度に実施したもののうち、井口遺跡Ａ～Ｄ地区の調査概要を報告した。また、昭和57年度には、昭和55年度に実施した井口遺跡Ｅ～Ｉ地区の調査概要を『日本考古学年報33（1980年度版）』（日本考古学協会）に掲載した。以下は、昭和54年度～56年度に実施した井口遺跡Ａ～Ｌ地区、柏原北遺跡Ａ～Ｃ地区の調査報告である。柏原遺跡についてはすでに報告済みであって本書には掲載しない。しかし、遺跡としては一体として扱う必要があり、必要に応じて再録している。また、昭和51・52両年度に実施したほ場整備工事に伴う井口遺跡の調査結果についても再録している個所がある。ただし、既報告の遺物の年代や遺構の構造等の内容については、本書で訂正して使用している場合があるので最初に断っておく。

第三章　調査の結果

第一節　遺　　構

第一項　遺構の種類と分布（図４～11）

検出した遺構は、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡を中心とし、大小の溝状遺構、大小のピット、土坑、旧河道跡等であり、その他に火葬墓、土坑墓等がある。大小のピット、土坑の中には特殊な用途のあるもの、また、溝状遺構の中にも農業用水路と考えられるもの等が存在するが、詳細は別項で記述していくこととする。本項では、地区毎に、遺構の種類とその主なものの分布状況を述べていくこととする。

Ｉ．第Ｉ住居跡群（図５）

柏原北遺跡では、北端のＢ地区は無遺構地帯である。Ａ地区についても、その南端で、溝状遺構や若

干のピット群を検出したにすぎず、北側の大半が遺構の見出せない部分である。住居群はＣ地区で検出されている。井口Ａ地区ではその全域で遺構を検出しており、従って、Ｂ地区及びＡ地区の北側大半、路線上での延長約 170ｍの区間が空白地帯を形成している。Ｃ地区では、現国道 365号線までのほぼ全域で住居跡群等を検出しているが、国道以南では、約 130ｍの旧河道状の遺構のない部分をはさんで、柏原遺跡が存在する。従って、Ａ地区の南端の一部からＣ地区にかけての約 120ｍを遺構の分布の上で単位群として扱い得るので、この一群の遺構を才１遺構群（第１住居跡群）とすることにする。

才１遺構群の北端は、ほぼ磁北に直交する幅４ｍ～５ｍの溝状遺構（ＡＭ２・３）１条と磁北に対し45度程東に振れる幅１ｍ程の幅の狭い溝状遺構１条（ＡＭ1）とがある。両溝跡とも西側半分が削平されていて不明で、両者の切り合い関係も明確でなかった。溝状遺構以北は灰褐色や黄褐色、あるいは茶褐色等の粘質土が堆積しており、泥湿地状で何等遺構は分布しない。なお、溝状遺構ＡＭ２・３は当初２条の溝かと思われたが、結果的には１条とし得るものであった。

住居跡群はＡＭ２・３の南側約 100ｍ、現国道 365号線までの間で検出された。すなわち柏原北遺跡Ｃ地区であるが、北半分の西側３分の１、中程の25ｍ程の間は、後世の削平により、遺構は消滅していた。結局検出した住居跡は竪穴式住居跡９棟（ＣＴ１～７・９・10）、掘立柱建物跡４棟（ＣＨ１～４）である。その他溝状遺構１条（ＣＭ１）、燃焼痕跡の見られる土坑２基（ＣＢＰ６・４）、大小の土坑多数が検出されている。重複関係は、ＣＨ１はＣＭ１を切って構築され、ＣＨ２はＣＴ１を切っている。ＣＴ３がＣＴ４を切り、ＣＴ10はＣＴ９に切られている。ＣＴ５はＣＢＰ４より先行している。すなわち、ＣＭ１→ＣＨ１、ＣＴ１→ＣＨ２、ＣＴ４→ＣＴ３、ＣＴ10→ＣＴ９、ＣＴ５→ＣＢＰ４の関係にある。

ＣＭ１はほぼ東西方向にあり、ＡＭ２・３とは約23ｍの位置で、ほぼ並行している。竪穴式住居跡群はこのＣＭ１より南側にあり、規模や構造、軸線の方位により４群に区別できる。１群は、Ｎ23度Ｅに軸線を持ち、壁溝、四本の主柱穴、竪穴の北辺中央にカマドを持つ共通項の見出せるＣＴ１とＣＴ５で、約12ｍの間隔を置いて東西に位置する。才２群はＣＴ４とＣＴ10で、約５度程東に振れる軸線を持ち、ともに次の才３群に切られている。約９ｍ程の間隔を持って南北にある。才３群は、Ｎ10度Ｗの軸線があり、１辺３ｍ未満とＣ地区では最小規模のＣＴ３とＣＴ９で、約12ｍの間隔で南北にあり、ともに、カマドが南東コーナーに作り付けられている。才４群は約５度程軸線が西に振れ、カマドが東壁の南東コーナーより 1.2ｍ程北寄りで、壁に対して斜めに取り付くという共通性の見られるＣＴ２とＣＴ７である。軸線から見ればＣＴ６も才４群である。ＣＴ２とＣＴ６は４ｍの間隔で東西に、ＣＴ２とＣＴ７はは約30ｍの間隔があって、南北の位置関係にある。

掘立柱建物は、ＣＭ１の北側からＣＴ７の南側まで、重複することなく分布する。ＣＨ１～３は南北棟、ＣＨ４は東西棟で、ＣＨ１とＣＨ２は11ｍ程の間隔で南北に、ＣＨ３とＣＨ４は約５ｍの間隔で東西に位置する。ＣＨ１とＣＨ４は軸線方位が近似するが、いずれも若干の違いが見られる。ＣＨ１がＮ３°Ｗ、ＣＨ２がＮ11°Ｗ、ＣＨ3がＮ7°30′Ｅ、ＣＨ４がＮ６°30′Ｗで、ＣＨ３のみ東へ振れている。ＣＨ３を除けば、他は現存条里方向に近似している。

Ⅱ．第２住居跡(図６・７)

柏原北遺跡Ａ地区の溝状遺構の北約170ｍの無遺構地帯を経て、井口遺跡Ａ地区から再び遺構が集中する。住居群の分布はＡ地区の南端から始り、Ｃ地区まで、約 300ｍの間に密に分布する。以北は、70ｍ程の近世の火葬墓しか分布しない部分をはさみ、以北が約 140ｍ程の旧河道状の幅の広い礫の堆積のあ

る溝が幾条にも走る部分となっていて、住居群その他の遺構を認めることができない。従って、Ａ地区からＣ地区にかけての約 300ｍ程の間を才２遺構群（住居跡群）分布地帯とすることができる。

才２遺構群では、竪穴式住居跡31棟、掘立柱建物跡16棟、大小の溝状遺構32条、大小の土坑多数等を検出している。

まず遺構の重複関係から見ていくと、竪穴式住居跡では、ＢＴ５→ＢＴ４、ＢＴ２→ＢＴ９→ＢＴ10、ＣＴ６→ＣＴ７→ＣＴ８、ＣＴ12→ＣＴ11の古→新の関係がある。掘立柱建物跡では、ＢＨ２→ＢＨ３がある。両者の関係では、ＡＴ２・ＡＴ４→ＡＨ２、ＡＴ５→ＡＨ３、ＡＴ６→ＡＨ４、ＡＴ10・ＡＴ11→ＡＨ５、ＡＴ11・ＡＴ13→ＡＨ６、ＡＴ13→ＡＨ７・ＡＨ８、ＢＴ７→ＢＨ７、ＢＴ８→ＢＨ５、ＣＴ10・ＣＴ11→ＣＨ１と重複するもののすべてが竪穴式住居跡の方が先行している。溝状遺構との関係では、ＡＭ５がＡＴ13、ＡＨ７、ＡＨ８を切り込んでいる程度で、住居群と切り合うことは少ない。

次に位置関係であるが、溝状遺構のうち南端に位置するＡＭ１は柏原北遺跡Ｃ地区のＣＭ１から約 200ｍの位置にあり、溝の垂線が約11度西に振れる。Ｃ地区南端のＣＭ17は垂線が約１度程西に振れる程度で、ＡＭ１から 205ｍ、柏原北ＣＭ１からは 408ｍの位置にある。両者はやや方位を異にするが、ともに、その延長線は現存条里畦畔にほぼ一致するものである。また、ともに、２段掘りになっていることも柏原北ＣＭ１と同様で共通している。

住居群は、ＡＭ１以北に分布し、ＣＭ17は住居群の間を通過している。竪穴式住居跡は、ＡＴ２・３・４がＡＭ１の北11ｍ程の所に集り、住居群の南端の位置を占る。この３棟は１ｍ未満の間隔しか持たない。Ａ地区の他の住居跡は、南よりＴ５・６・７・10・11・13・14と点在する。Ａ地区北端のＡＴ14から15ｍ程北へ行くとＢＴ１・２・９・10があり、このうちＢＴ２・９・10は重複する。Ｔ１とは約２ｍ程の間隔である。北へ14ｍおいてＢＴ13、さらにＢＴ13から20ｍ北でＢＴ４・５・６がある。ＢＴ４とＢＴ５が切り合い、ＢＴ５とＢＴ６の間隔はわずか20cm程である。ＢＴ７とＢＴ８は点在する。また、ＢＴ７とＢＴ８の間にＢＭ２が通過している。ＢＴ８から北へ18ｍ、ＣＴ13から南へ３ｍの位置にＣＭ17が通過し、ＣＴ13の南わずか50cm程のところにＣＭ19が通過している。Ｃ地区では、ＣＴ６・７・８・９、ＣＴ11・12、ＣＴ１・２の３か所で住居跡が重複、あるいは近接している。点在しているものはＣＴ13・10・５である。また、Ｃ地区では多数の溝状遺構や土坑等が密に分布している。

以上竪穴式住居跡群は、Ａ地区からＣ地区まで、南北約 278ｍの間に31棟が分布している。この間で、２棟及至３棟の重複関係が４ヵ所で認められ、また密接なるものを含めれば、同じ個所で２棟及至４棟となる。

掘立柱建物跡は、ほぼ竪穴式住居群と重複するが、北が46ｍ程短かく、竪穴式住居群より狭い範囲に分布している。重複あるいは近接しているのは、ＡＨ１・２、ＡＨ５・６、ＡＨ５・６・７・８、ＢＨ４・３・２で、２棟及至４棟で４ヵ所に認められる。竪穴式住居跡とは、ＡＴ２・３・４とＡＨ１・２、ＡＴ５とＡＨ３、ＡＴ６とＡＨ４、ＡＴ10・11とＡＨ５、ＡＴ11・13とＡＨ６、ＡＨ13とＡＨ７・８、ＢＴ７とＢＨ７、ＡＴ８とＢＨ５、ＣＴ10・11・12とＣＨ１となっている。溝状遺構との関係は、ＡＭ５がＡＨ７・８を通過する以外重複していない。

Ⅲ．第３住居跡群（図８）

Ｃ地区北端のＣＴ１から、Ｅ地区の北端に位置するＥＨ１までの約 220ｍの間はＤ地区の南半分の火葬墓群、北半の旧河道、Ｅ地区の泥湿地、溝跡等があり、住居関係の遺構は存在しない。ＥＨ１以北では、Ｆ地区に入るが、再び住居群が分布する。住居群はＥＨ１からＦＨ４まで南北に約 100ｍまで分布

する。ＥＨ１以北は約35ｍまでは大小の土坑や溝状遺構があるのみで住居跡は存在しない。Ａ～Ｃ地区の才２住居群の南及び北側の様相とは異るが、住居跡のまとまり具合いから才３住居群とする。

才３住居跡群では竪穴式住居跡21棟、掘立柱建物跡４棟、柵列状柱穴列２条、その他溝状遺構、土坑等がある。竪穴式住居跡では、ＦＴ２とＦＴ22及びＦＴ４とＦＴ５がそれぞれ重複し、かつ近接している。ＦＴ６・７、ＦＴ12・13・14が重複し、ＦＴ７とＦＴ12が近接している。ＦＴ８・10・23・９・11・15・16の７棟も相互に切り合い、ＦＴ19・20にも切り合いが認められる。わずか50～60ｍの長さの間に、極めて密集した状況で分布しているが、ＦＴ11→9→10→23、あるいはＦＴ12→13→14と相互の切り合い関係で３及至４時期の区別ができる。

掘立柱建物跡は、南北約 100ｍの間に４棟が分布する。ＥＨ１とＦＨ１とが約30ｍ、ＦＨ３とＦＨ４が約４ｍの距離にあり、ＦＨ１とＦＨ３とは24ｍの間隔がある。また、ＦＨ１の北側に、２条の柵列状の柱穴列が検出されている。

溝状遺構はＦＴ20及びＦＨ４の北側に、約20ｍの間隔をおいてＦＭ４、ＦＭ５がほぼ並行して走り、さらにＦＭ５の北側に、並行して旧河道状の砂利層が走る。ＦＭ４より北側、砂利層までの約35ｍの間には住居跡は検出されない。ピットや大小の土坑群についても、ＦＭ５までで、砂利層まで及ばない。ＦＭ４は、ＦＴ20を切り、ＦＨ４に切られているが、ＦＭ４とＦＭ５との間で多数のピットや土坑を検出しているが、住居跡がない。溝状遺構は住居群分布地帯に目立ったものはないが、ＦＭ３とするものが、柵状柱穴列の東側のものと約 1.5ｍ程の間をおいて並行しており、相関連するものと思われる。

ピットや土坑等の中では、ＥＨ１の南側５ｍ程の所に、燃焼痕の認められる小土坑が２～３基検出され、その南側の溝状遺構等からフイゴ等が出土していて、これとの関係が注意された。

Ⅳ．第４住居跡群（図８・９）

ＦＴ20及びＦＨ４の北側約35ｍの間に、２条の溝状遺構及び旧河道状の砂利層をはさんで、ＦＴ25が位置する。このＦＴ25と次のＧ地区のＴ14との間約30ｍは未調査部分であるが、十分に住居跡の存在が推察し得る状況であって、ＡＴ25を次の才４住居跡群に含めることとする。才４住居跡群は約75ｍの間に13棟の竪穴式住居跡が分布するが、北端のＧＴ15以北は、幅20ｍに及ぶ旧河道があり、ＧＴ15と旧河道との間約10ｍ程の間は住居跡がなく、ＧＴ15以南の密集状況と異なっており、調査範囲内では群としてまとまる。才４住居跡群では掘立柱建物跡がなく、溝状遺構も検出されていない。他にはピット群があるのみである。Ｇ地区の12棟は極めて良く密集しており、ＧＴ11・12・13・14及びＧＴ４・５・６・・７・８・９・15が相互に切り合っている。ＧＴ10もＧＴ９と接っし、ＧＴ11ともわずか１ｍの間隔しかない。切り合いの先後関係で、ＧＴ14→13→11→12、ＧＴ９→７→８、ＧＴ６→５→4 等の関係があり、４時期以上のものが重複している。

Ⅴ．第５住居跡群（図９）

Ｈ地区に入って、その南側20ｍ余は礫を堆積した溝になっており、旧河道状となっている。従って、Ｇ地区の旧河道との間にはさまれた30～40ｍの間に分布する住居跡群を才５住居跡群とすることができる。この間には、３棟の竪穴式住居跡と３棟の掘立柱建物跡とが分布する。竪穴式住居跡は、７ｍ及び９ｍ程の間隔をおいて分布し、重複しない。掘立柱建物跡は、ＧＨ２と３が重複し、ＧＨ２にほとんど接っしてＧＨ１が並ぶ。ＧＨ１はＧＴ２に、ＧＨ２・３はＧＴ３に重複している。

Ⅵ．第６住居跡群（図９）

Ｈ地区に入って、才５住居跡群北側の旧河道に沿って、ＨＴ１・２・３の３棟の竪穴式住居跡がある

が、その北側には幅20m～30mに及ぶ沼沢状の泥湿地が横たわする。この間に若干のピットは認められるものの、住居跡を見出すことができないので、ＨＴ１～３の３棟を以って才６住居跡群とする。ＨＴ１～３はＬ字状に並び、切り合うことはない。ＨＴ１及びＨＴ２を切って溝ＨＭ５が走る他、他数のピット群が沼沢地までの間に分布している。

Ⅶ．第７住居跡群（図９・10）

才６住居跡群北側の沼沢地が途切れて、再びＨ地区で住居跡が検出された。住居跡はやや東側に分布するが、住居跡は次のＩ地区に続く。Ｉ地区では、ＩＴ１の北側50m程の間が無遺構地帯となっている。従って、ＨＴ４からＩＴ１までの間、約80mの間を才７住居跡群とする。竪穴式住居跡13棟、掘立柱建物４棟、その他ピット群等を検出している。

竪穴式住居跡はいずれも重複しないが、ＩＴ９とＩＴ７、ＩＴ４・６・５・12がそれぞれ近接している。

掘立柱建物跡は、ＨＴ６の北側で１棟、ＩＴ11に重複して１棟、ＩＴ７・９に重複して１棟、ＩＴ３に重複して１棟の計４棟であるが、いずれも重複しない。

Ⅷ．第８住居跡群（図10）

50m程の無遺構地帯をはさんで、Ｉ地区の南端で２棟の掘立柱建物跡を検出している。次のＪ地区では遺構は皆無であり、Ｋ地区まで約 120m程あり、この２棟を以って才８住居群とする。

Ⅸ．第９住居跡群（図10・11）

Ｋ地区とＬ地区で各々１棟を検出している。両者の間隔は 110m程あるが一括しておく。

両地区でともに東西に走る溝状遺構を検出している。約80mの間隔を持って、ほぼ並行する。Ｃ地区Ｍ17からＫ地区の溝まで約 876mを計る。Ｋ地区では、他に、溝状遺構をはさんで南側及び北側に各１基の土坑墓を検出している。Ｌ地区では、調査範囲の西側の大半が削平されていた。

以上、住居跡を中心に遺構の分布状況を見てきたが、無遺構地帯や旧河道等で分断され、かつ遺構の密集状況から、９～10の住居跡群を区別した。これは一応便宜上の区別とし、以下で、説明の都合上繁雑をさける場合、この遺構群を用いることとする。

第二項　遺　　構

この項では、個々の遺構について説明を加えることとする。個々の遺構の相互関係については後章で取り扱うこととする。

Ｉ．竪穴式住居跡（図12～55）

イ）才１住居跡群竪穴式住居跡

柏原北ＣＴ１（図12）　南側３分の１程が破壊されていて不明だが、竪穴の北辺にカマドを持ち、壁溝をめぐらせ、竪穴内に４本の主柱穴を持つ。全体規模は不明だが、遺存している北辺は5.94mを計る。壁溝は幅20cm～55cm、深さが竪穴床面から10cm前後である。全周せず、竪穴の北東コーナーで途切れる。また、北辺の中央部が幅50cmにわたって掘り残されている。この部分に焼土塊が認められ、北辺に対して垂直に取り付けられたカマドの存在が確認された。主柱穴は、北側の柱間(心芯距離)3.15m、東側柱間も3.15mと等距離にあって、直交している。柱は各辺からほぼ等距離（約 1.5m）にある。従って復元すれば、一辺約６mの方形プランを持つことになる。中軸線はおよそN22°30′Eの方向にある。

柏原北ＣＴ２（図13）　Ｎ１°30′Ｗと極めて磁北に近い方向にある。北辺５m、南辺 4.4m、東辺

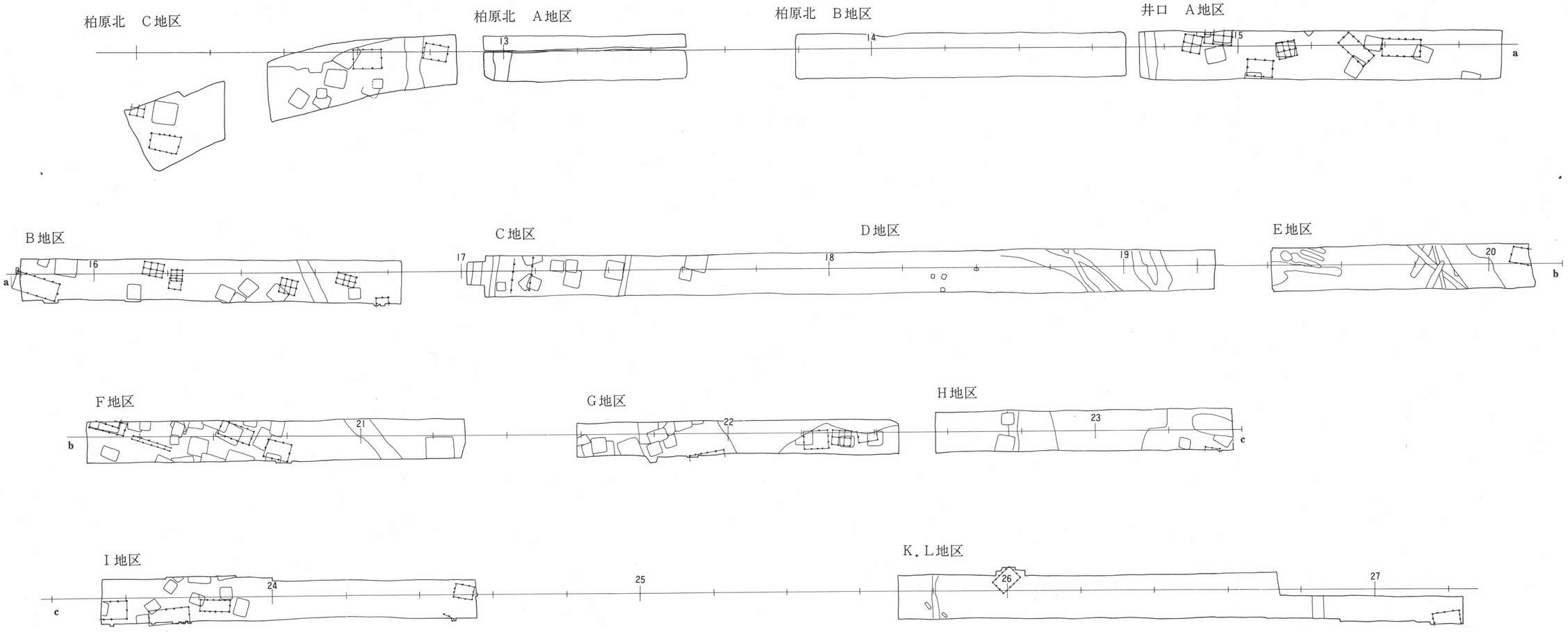

柏原北　C地区
柏原北　A地区
柏原北　B地区
井口　A地区
B地区
C地区
D地区
E地区
F地区
G地区
H地区
I地区
K．L地区
a
b
c
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

図4　主要遺構分布図

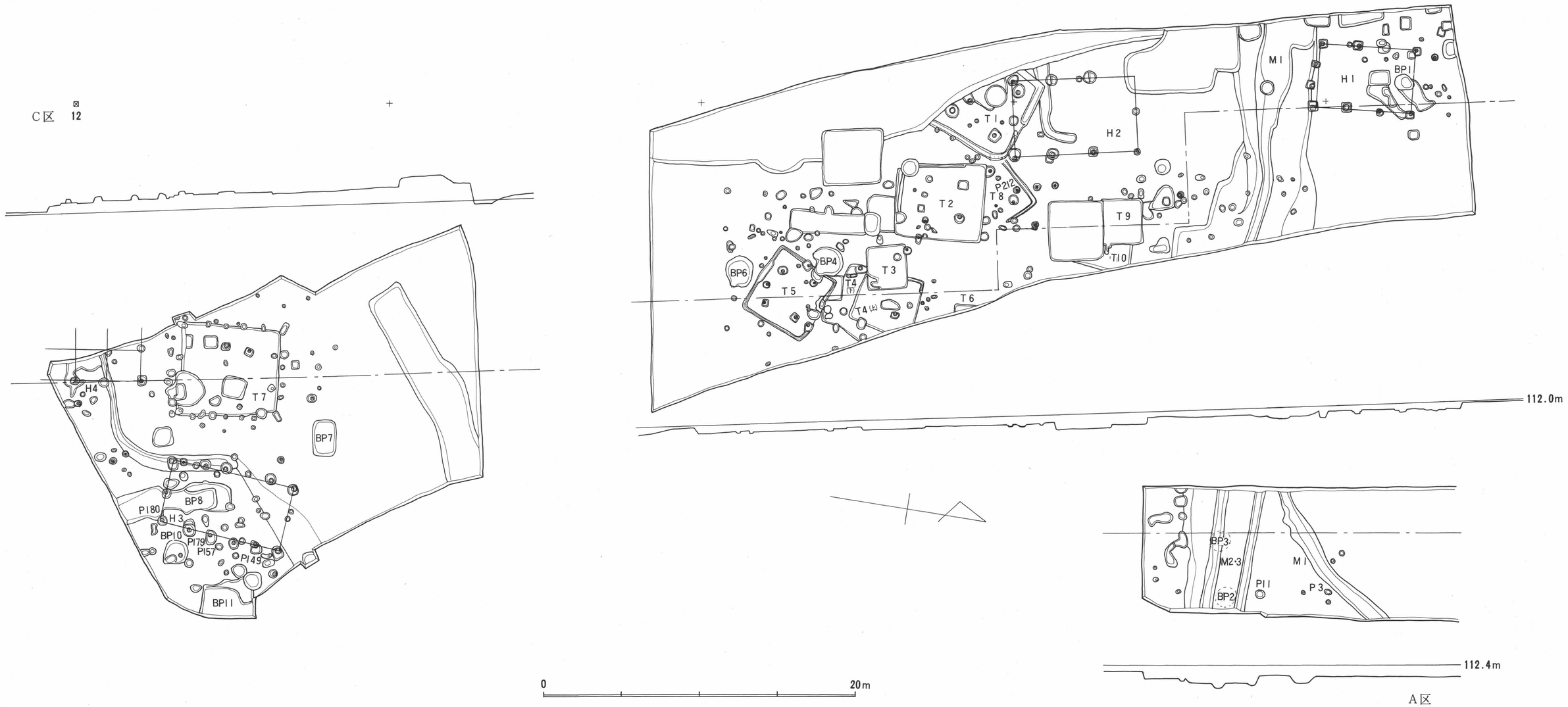


図５．柏原北Ｃ．Ａ地区遺構実測図

A地区

B地区

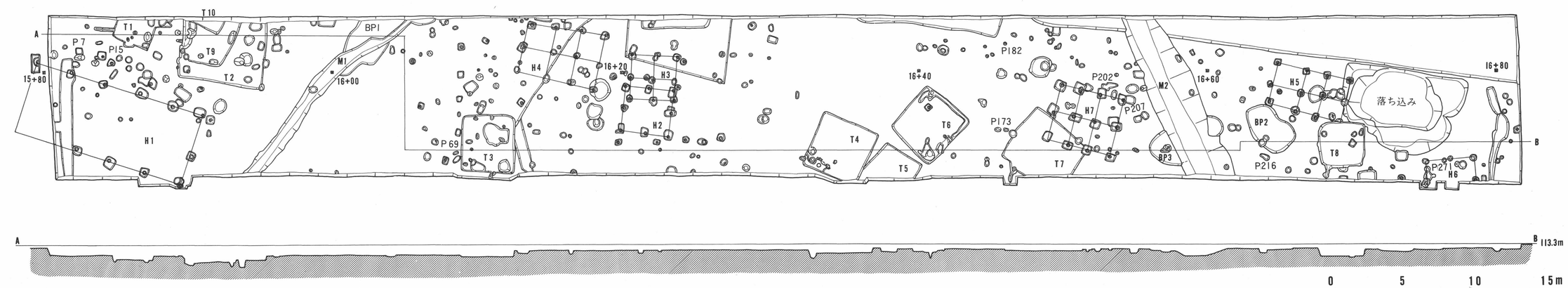
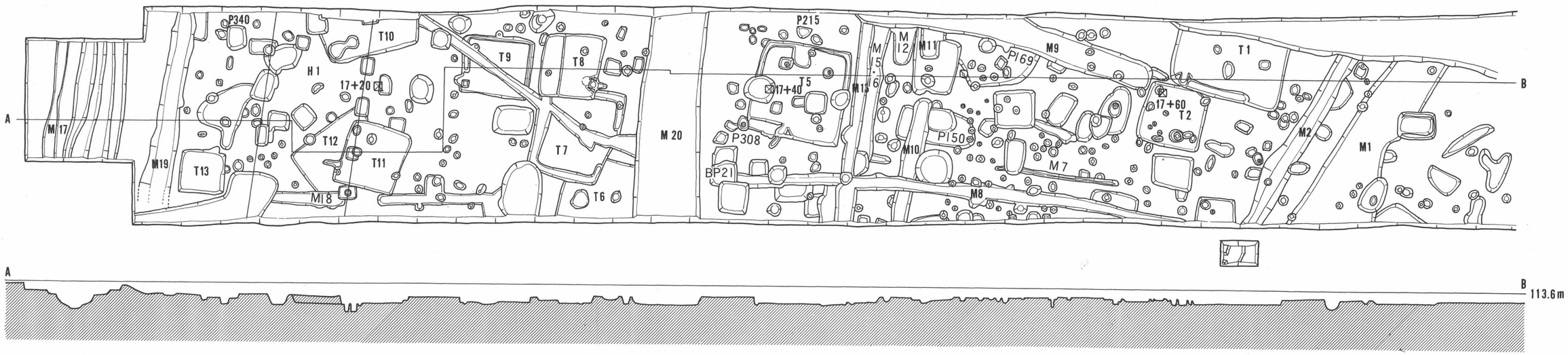


図6．A，B地区遺構実測図

C地区



D地区

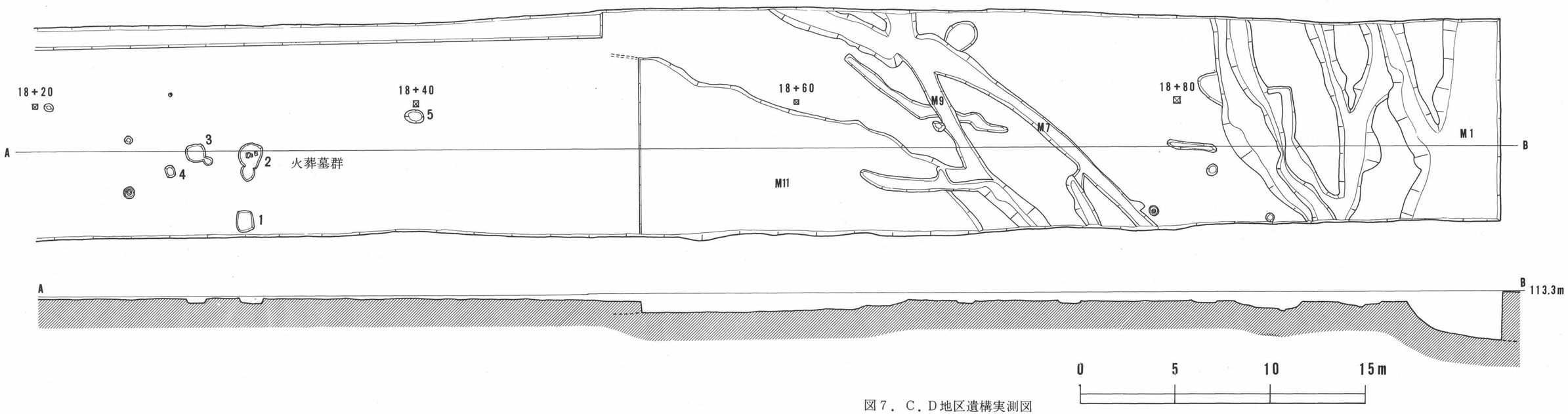
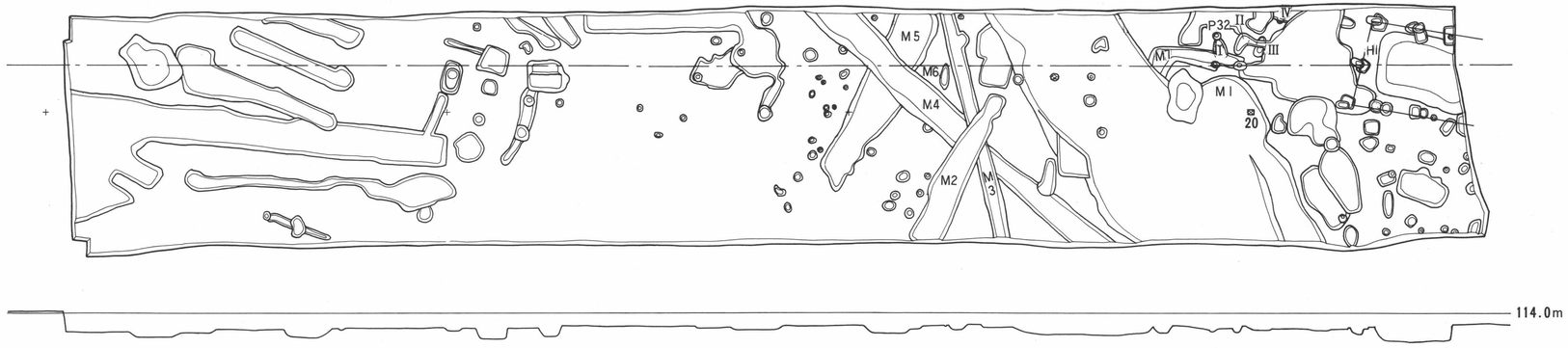
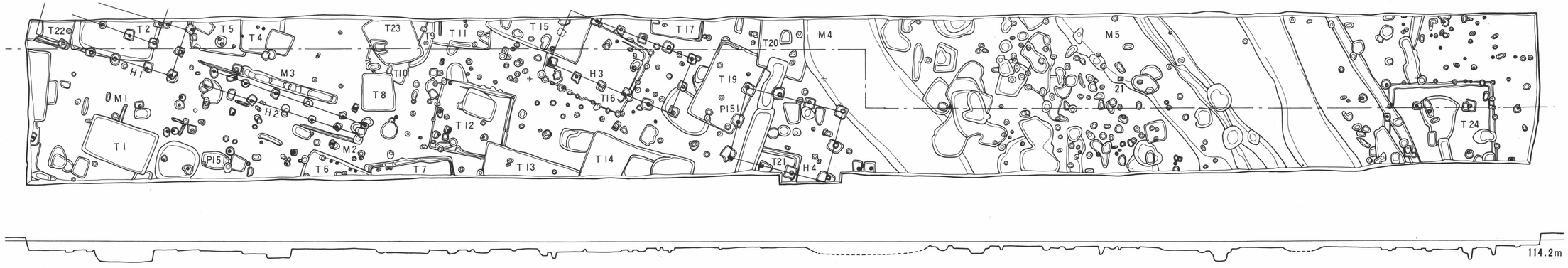


図7．C．D地区遺構実測図

E地区



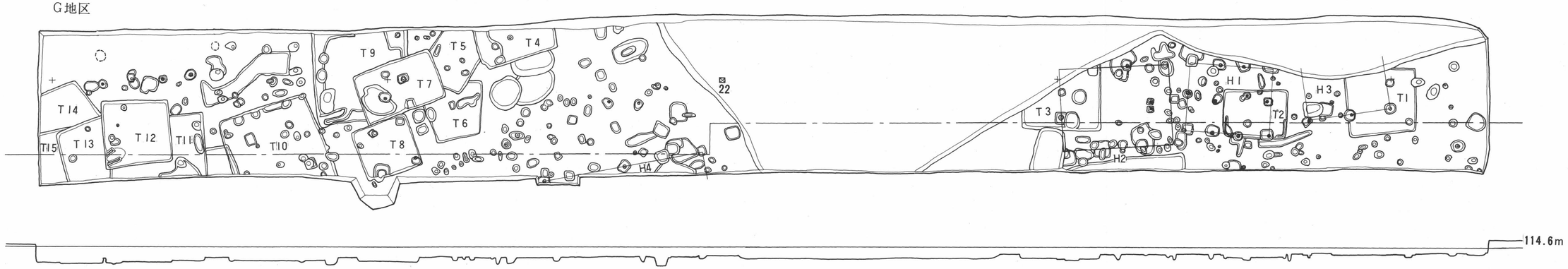
F地区



0 20m

図8．E．F地区遺構実測図

G地区



H地区

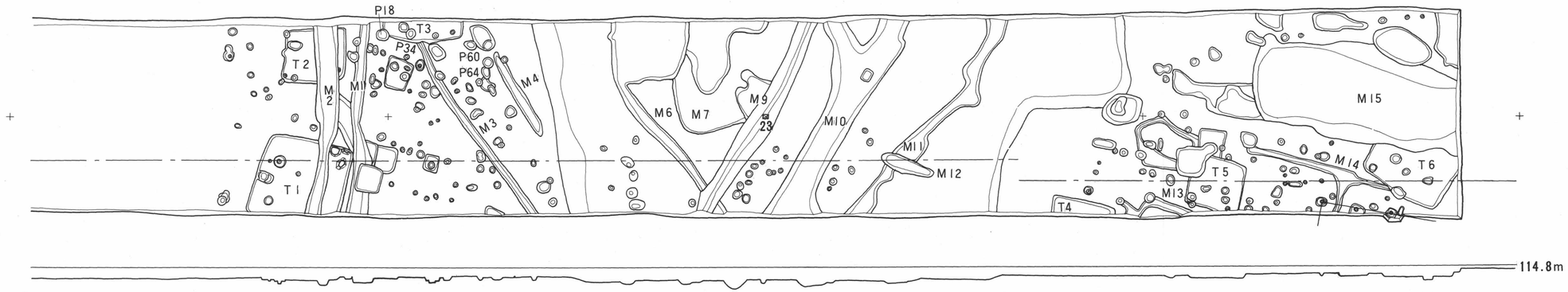


図9．G．H地区遺構実測図

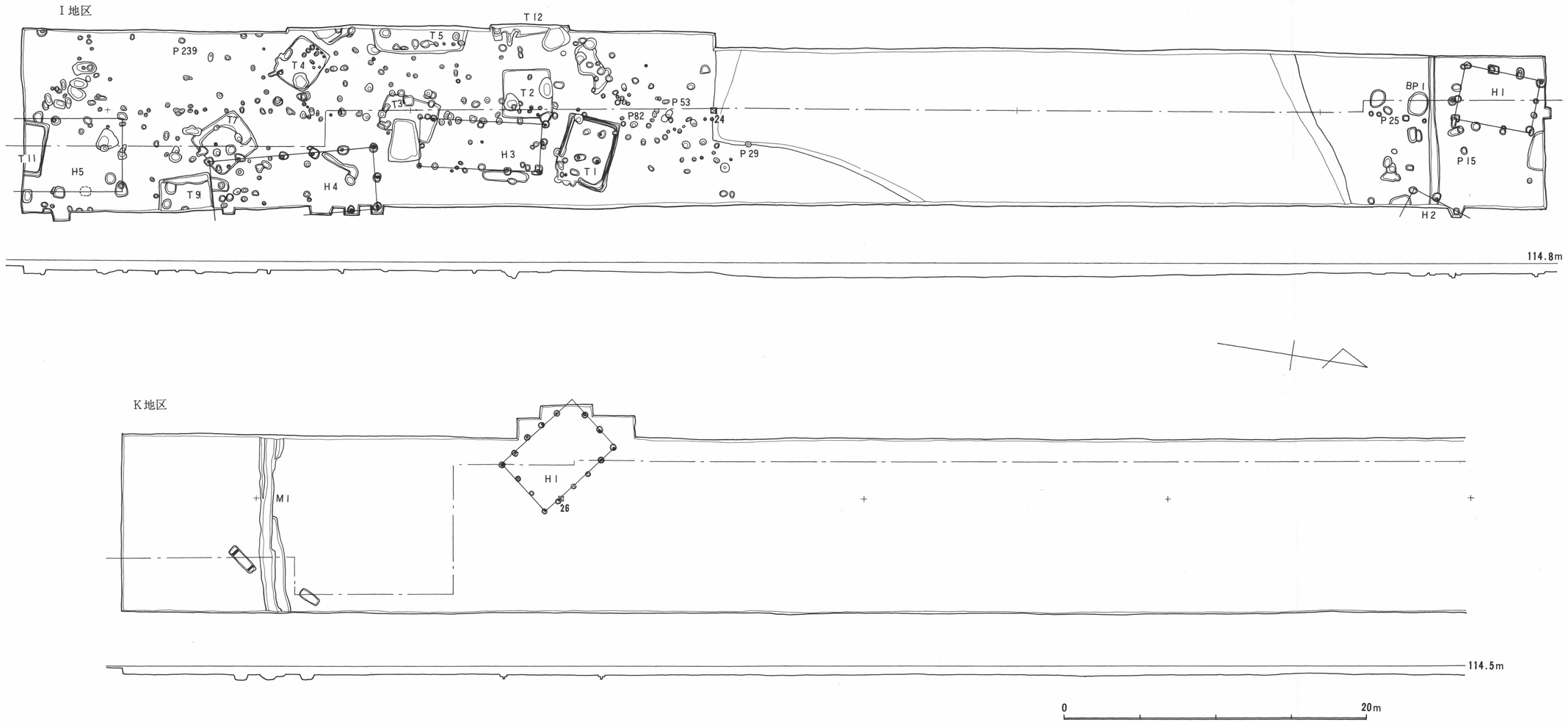


図10. I．K地区遺構実測図

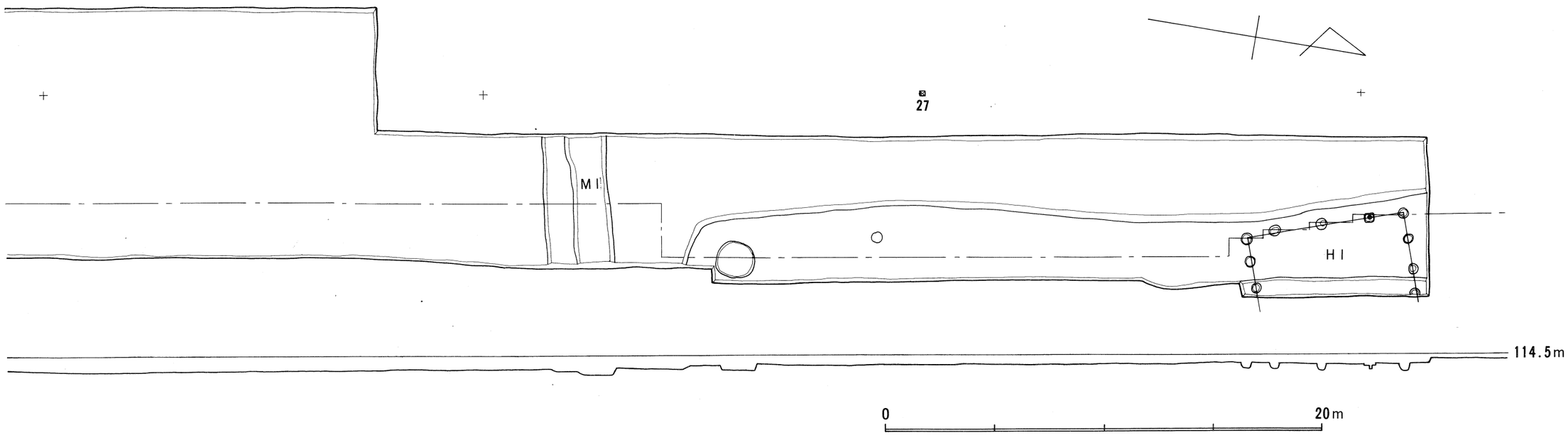


図11．L地区遺構実測図

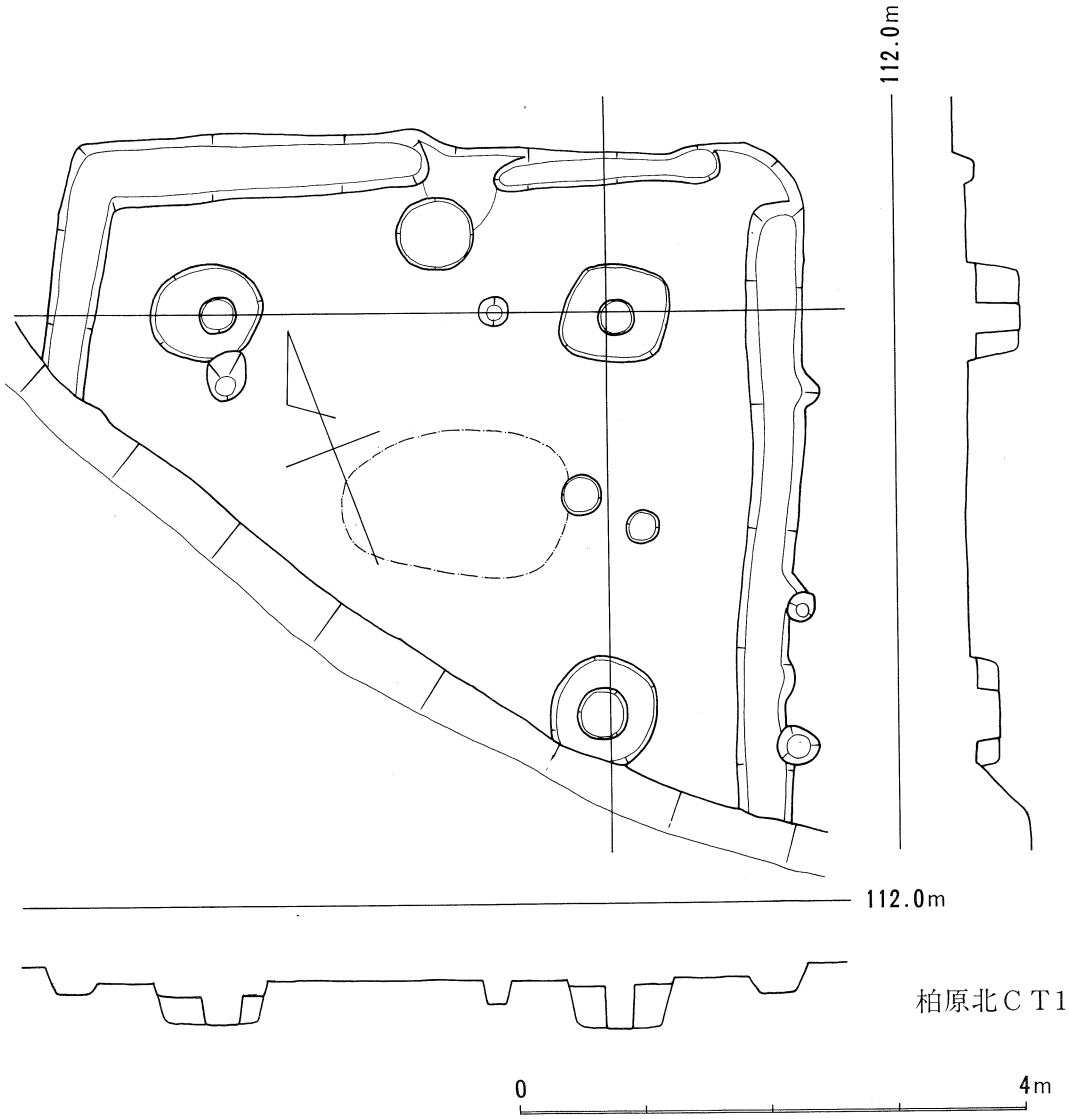


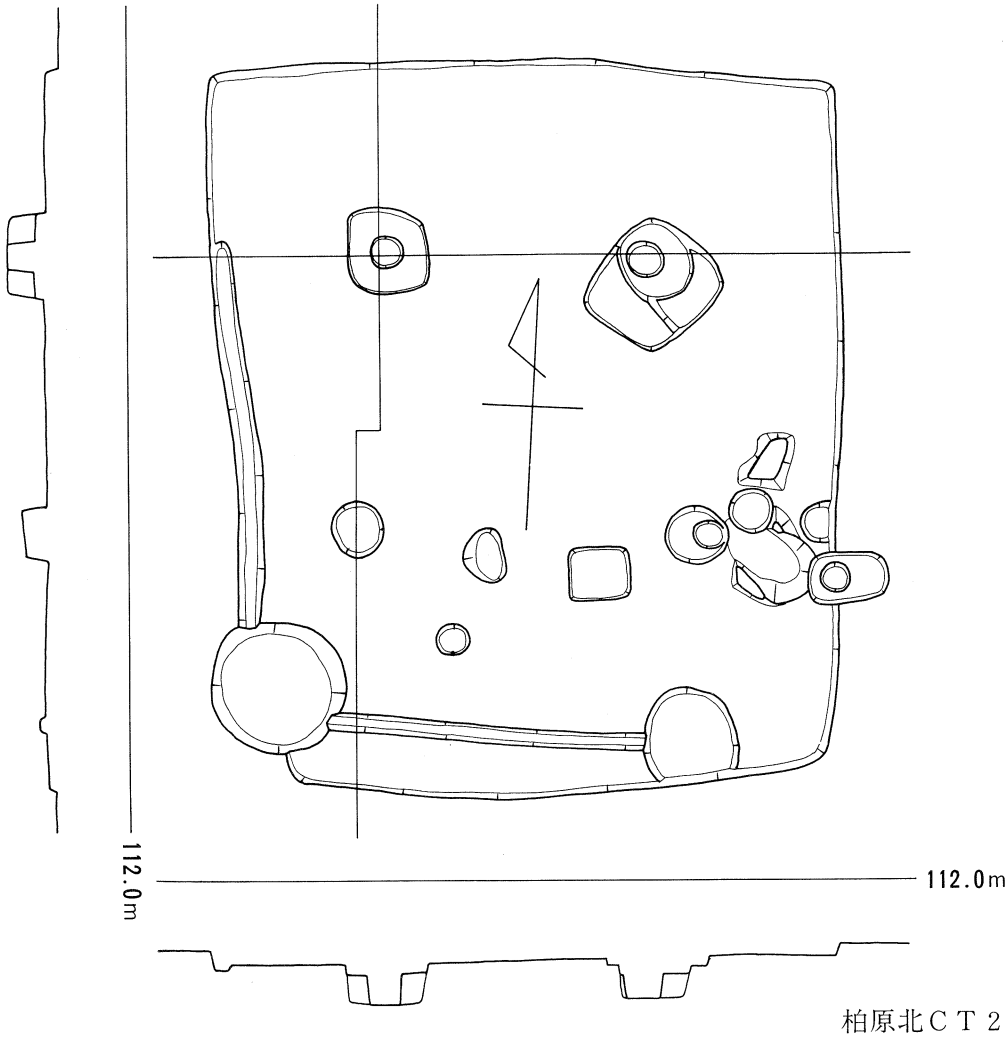
図12. 柏原北ＣＴ１実測図

5.4m、西辺 5.6mとやや台形を呈している。カマドは竪穴の南東コーナーより北へ 1.3mの間隔を取り、東辺に対して、約40°の方向に作り付けられている。壁溝や柱穴は認められない。

柏原北ＣＴ３（図13）　ＣＴ４を切り込む住居跡である。東西両辺2.74m、北辺2.65m、南辺2.45m。柱穴、壁溝は認められない。カマドは、南東コーナーで、南辺に直交する方向で作り付けられている。中軸線はＮ９°30′Ｗの方向にある。

柏原北ＣＴ４（図14）　ＣＴ３に切り込まれ、Ｎ12°30′Ｅ の方向を向く住居跡。北東コーナー部分が調査範囲外に掛る。全体規模は不明だが、計測できる範囲で、東西４ｍ、南北 3.7m～４ｍである。北西コーナー附近に、幅20cm程、深さ３cm前後の壁溝らしいものが見えるが、部分的で、極めて浅い。カマドの位置は明確でないが、東辺で、南東コーナーより50cm程北側に焼土塊が認められ、この部分より、幅50cm、長さ50cmの半円形の浅い掘り込みが竪穴外へ、東辺に直交して出ている。カマドの位置と考えてよかろう。

柏原北ＣＴ５（図15）　全周する壁溝と竪穴内に４本の柱穴のある住居跡。Ｎ22°30′Ｅの方向を向



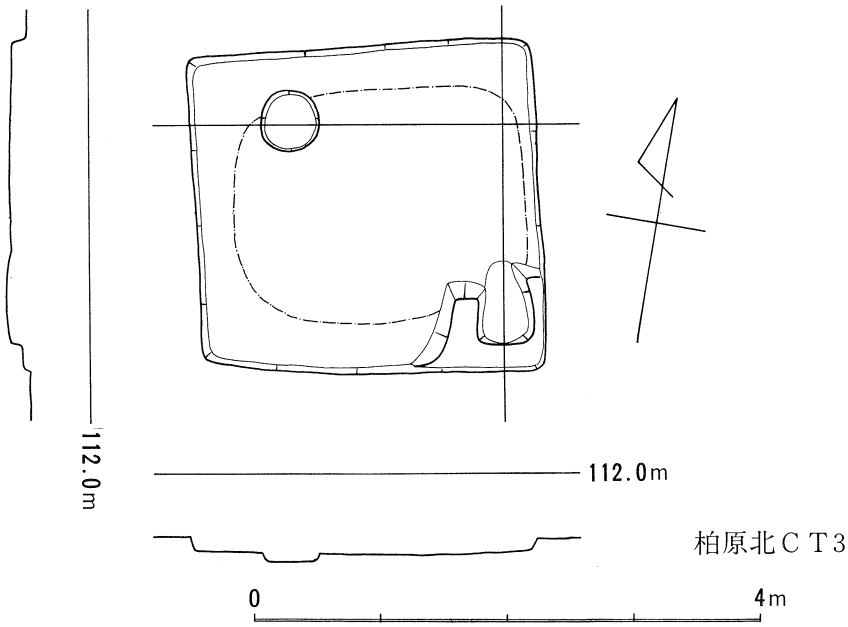


図13．柏原北ＣＴ２．３実測図

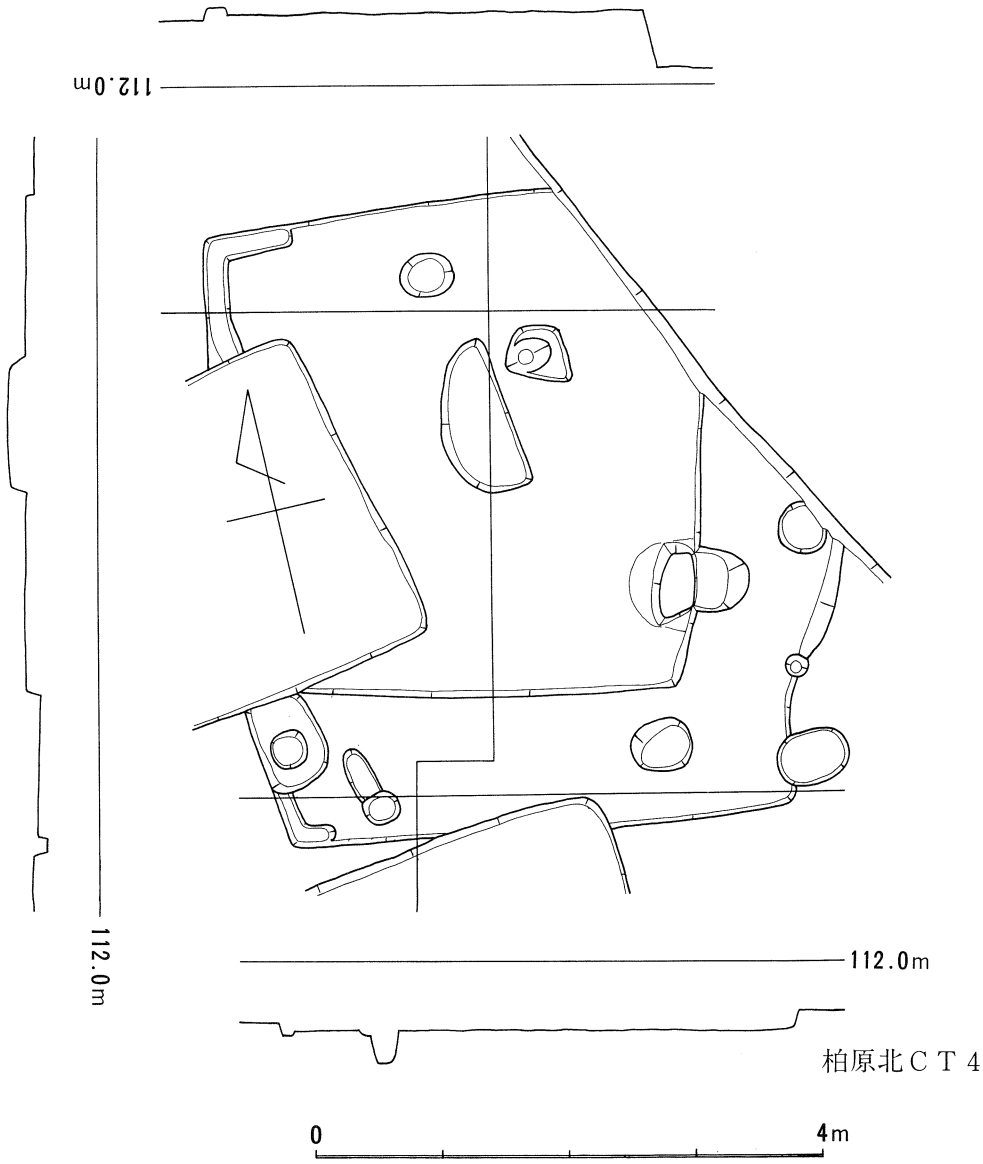


図14．柏原北ＣＴ４実測図

く。北辺 4.5m、南辺 4.8m、東辺 4.5m、西辺 4.3m。柱穴の柱間は、北側 2.5m、南側2.32m、東側 2.2m、西側2.18mで、北南両側は竪穴の各辺に約 1.1m及至 1.2mの間隔をおいて並行するが、東西両側は並行しない。柱は太さ19cm～21cmである。壁溝は15cm～38cmの幅で深さ２cm～12cmであるが、南辺の中央よりやや西に寄って、長さ 1.6mにわたって、幅が38cmと広く、深さも10cm～12cmと他の部分より深くなっている。壁溝は、北辺の中央よりやや西寄りで、幅90cmにわたって途切れている。この間で、長径約90cm、短径約64cm、深さ５cm程の浅い凹みがあり、焼土があった。このダ円形の窪みは15cm程北壁より外側へ出ており、カマドと煙り出しの痕跡と考えられる。

柏原北ＣＴ６　　ほとんどが調査対象外の地域に入る。南西コーナーの部分のみ調査し得た。およそＮ１°30′Ｗの方向にある。

柏原北ＣＴ７（図16）　　およそＮ１°30′Ｗの方向にあり、磁北に近い住居跡である。東西両辺が6.3m、南辺６ｍ、北辺 5.2mで台形状のプランを持つ。竪穴内の主柱穴や壁溝は認められなかったが、

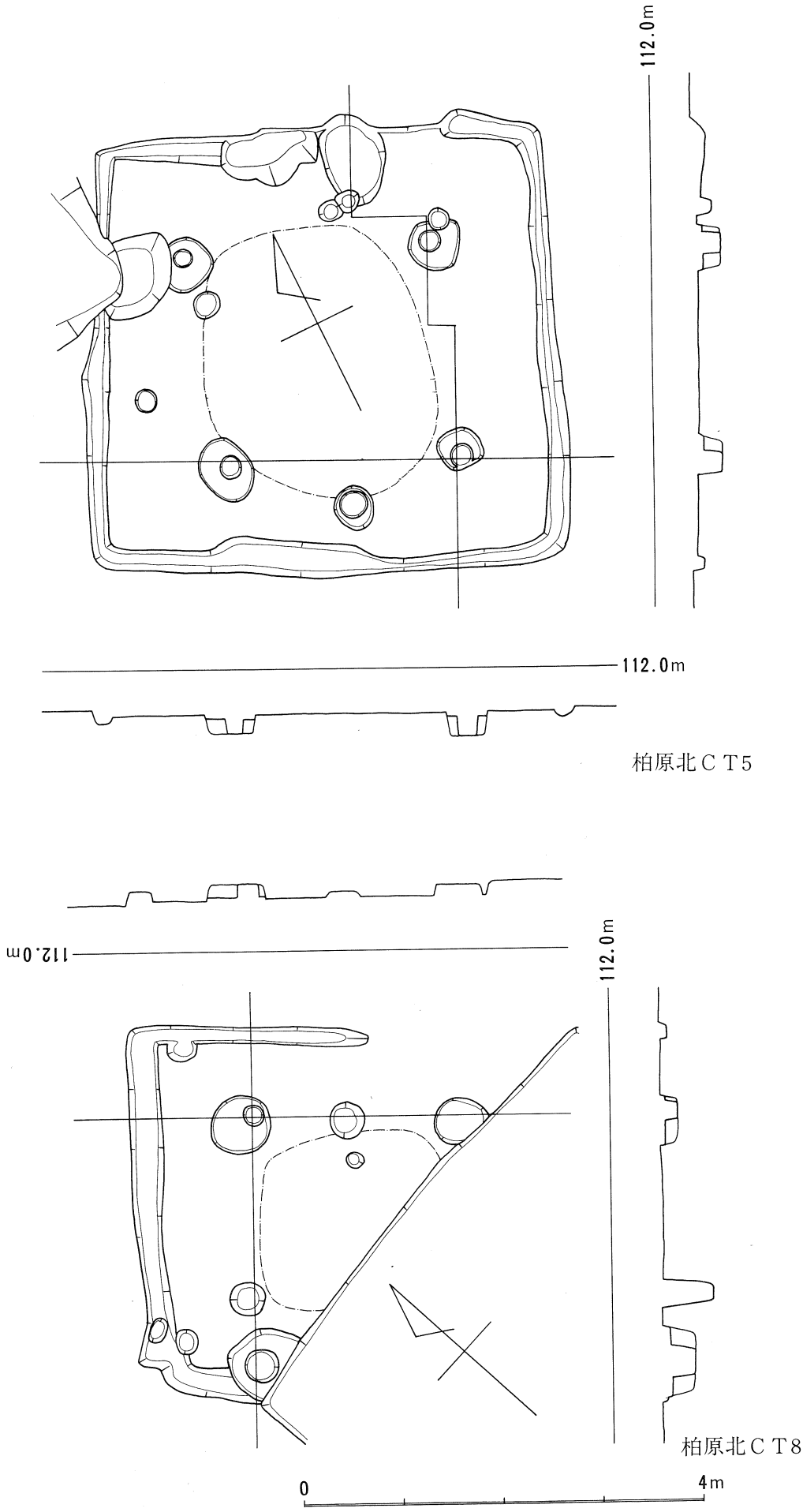


図15．柏原北ＣＴ５．８実測図

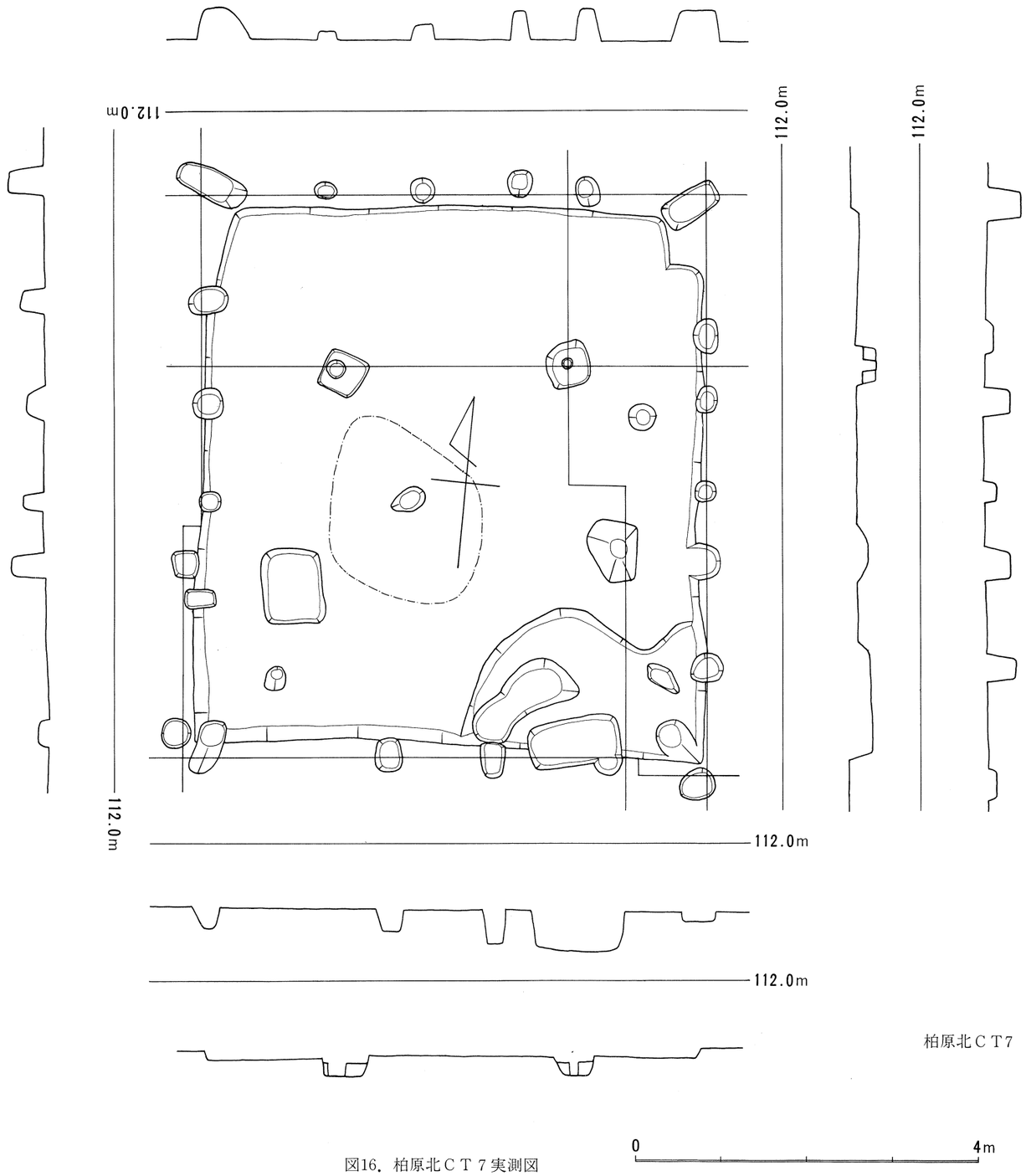


図16．柏原北ＣＴ７実測図

竪穴の肩部から竪穴の下端にかけてに穿たれた支柱穴が検出された。支柱穴は、竪穴の各コーナーに１基ずつ、東辺５基、北及び西辺は各４基、南辺は攪乱孔もあって、１基のみ検出している。各コーナーの柱穴は、長径70cm～80cm、短径30cm～40cmのダ円形の掘り方を示し、竪穴の対角線の方向に長軸を向けている。また、南東コーナー以外では竪穴の肩部に接っして外側に、南東コーナーのもののみ竪穴の壁面に接っして内側に、柱穴が掘られている。コーナー部分のものでは柱痕を確認できなかったが、柱穴の掘り方は、竪穴の内側がほぼ垂直に掘られ、外側に向って除々に浅くなる掘り方を示し、竪穴の床面からの深さは20cm前後である。各辺に並ぶものは、南北辺のものが竪穴の肩部に接っして外側に、東西辺のものは竪穴の肩部から竪穴内にかけて穿たれている。各辺の柱列はほぼ一直線に並ぶが、各コーナーのものは、各辺の柱列より20cm前後内側に入る。各辺の柱穴は直径25cm～40cmのほぼ円形で、柱痕を確認できるものでは、柱の太さは10cm程で、先端が尖り気味である。従って、杭状のものを、20cm足らずの深さに埋め込んでいる。また、柱痕は、ほとんど竪穴の壁面に接するか、あるいは一部くい込んだ状況にあり、ほぼ、垂直に立つ。柱間は0.8m～1.7mであるが、南辺では、東半分は攪乱を受けていて不明だが、西半分で検出したのは１基のみで、しかも、南西コーナーから 2.2mの間隔をもっている。あるいは出入口である可能性がある。カマドは東辺で、南東コーナーより１m程北側で、東辺に対して42度の角度に作り付けられている。

柏原北ＣＴ８（図15）　　壁溝のみ検出している。

柏原北ＣＴ９（図17）　　ＣＴ10を切り込み、瓦拾場の被掘により、竪穴の南辺部分が消失している。Ｎ９°30′Ｗの方向に中軸線がある。東西で2.85m、南北は不明だが、ほぼ方形プランを呈していたものと考えられる。柱痕や壁溝等は認められない。カマドは、南東コーナーで、東辺に垂直方向に作り付けられている。カマドの本体は竪穴の内側につくられているが、カマドの奥から竪穴の外側へ、幅約30cm、長さが東壁の肩部から60cmの煙出しの溝（本来トンネル状に掘り込む）を作っている。煙出しの勾配は約30度である。ＣＴ９の場合、床面は地山ではなく、厚さ10cmにわたり版築状の土をのせて床面を形成している。この版築状の盛土は、竪穴の掘り方の床面が砂層で軟弱な範囲にのみ施されている。これは、カマドがこの盛土の上で構築されているところから、頭初より施された工夫であることが知れる。

柏原北ＣＴ10　　ＣＴ９に切り込まれ、また瓦拾場の掘り込みと調査対象外にかかるため全容は不明である。残存部ではＮ６°30′Ｅの方向に軸線がある。復原で、一辺４mの方形を呈するものと思われる。カマドは、南東コーナーに、東壁に直交する方向に作り付けられている。

以上が才１住居跡群の内の竪穴式住居跡である。構造上、壁溝を四周させ、主柱穴を４本配するものと、その両者の認められないものとを区別できる。壁溝、主柱穴を持つものはＣＴ１とＣＴ５の２棟あるが、両者は、ともに、竪穴の北壁の中央やや西寄りに、北壁に垂直にカマドを作り付けている。また、壁溝はカマドの部分で途切れている。さらに、中軸線の方位がＮ22°30′Ｅと大きく東へ振れることも共通している。床面積はＣＴ１が35.3m²、ＣＴ５が20.5m²と差があるが、構造的に共通しているのでこれをＡ型住居跡とする。主柱穴、壁溝を持たないものでは、ＣＴ２とＣＴ７のカマドに共通項が見出せる。両者のカマドは、ともに、南東コーナーより北寄り１m程の位置で、東壁に対して40度の角度を以って、斜めに作り付けられているのである。両者は、中軸線がＮ１°30′Ｗと磁北に近かく、床面積も25.9～37.8m²とやや大型である点共通する。これらをＢ型住居跡とする。残る住居跡でもカマドの形態で比較すると、いずれも東壁に垂直に作り付けられているが、ＣＴ４とＣＴ10とでは南東コーナーより50cm北側に寄り、ＣＴ３及びＣＴ９では南東コーナーで、南壁に接っして構築されている。前者をＣ型、

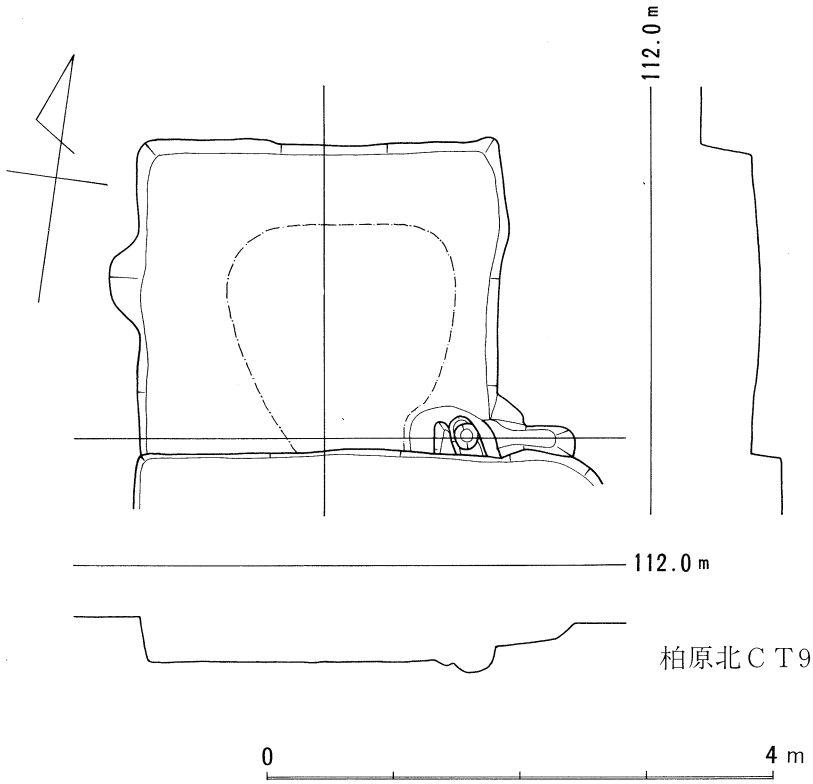


図17. 柏原北ＣＴ９実測図

後者をＤ型とすると、Ｃ型の２棟は、中軸線がＮ12° 30′Ｅ（ＣＴ９）とＮ６° 30′Ｅ（ＣＴ10）で共に東にふれ、床面積も15.4m²及び16m²と共通項が多い。Ｄ型の２棟は中軸線がともにＮ９° 30′Ｗであり、床面積も７～ 8.1m²と極めて小さい点にも共通性がある。これらの編年的位置付けについては才四章で述べるが、住居跡相互の切り合い関係で見る限り、ＣＴ４→ＣＴ３、ＣＴ10→ＣＴ９の関係にあり、Ｃ型→Ｄ型の古→新の関係が認められる。

ロ）才２住居跡群竪穴式住居跡

ＡＴ１　　欠番

ＡＴ２（図18）　　東壁側の１部のみで、西側の大半が調査地域外に出る。東辺の長さは 3.8ｍで、東辺はＮ４° 30′Ｗの方向にある。壁溝、柱穴はなく、カマドは、東壁の南東コーナーより１ｍ程北側に焼土塊があり、この附近に作り付けられていたものと考えられる。

ＡＴ３（図18）　　北辺 4.2ｍ、南辺4.2ｍ、東辺 5.1ｍ、西辺 4.9ｍの規模で、中軸線はＮ22° 30′Ｗと強く西にふれる。壁溝、柱穴は認められず、カマドは北壁の中央よりやや東寄りで、垂直に作り付けられる。カマド奥の立ち上りはほぼ垂直で、煙出しの掘り込みは認められない。

ＡＴ４（図19）　　西側約２分の１程が調査地域外にある。中軸線はＮ９° 30′Ｗにあり、南北の長さは 4.8ｍ～ 5.2ｍである。壁溝や柱穴は認められない。カマドは南東コーナー部分にあって、竪穴の対角線方向を向いている。カマドの西側に長径80cm、短径60cm程のダ円形の土坑があって、その埋土の上面に須恵器杯、台付長頸壺等が良好な状態で出土している。

ＡＴ５（図19）　　東側大半が調査地域外に当る。南北長4.4ｍを計る。南辺及び北辺がほぼ並行し

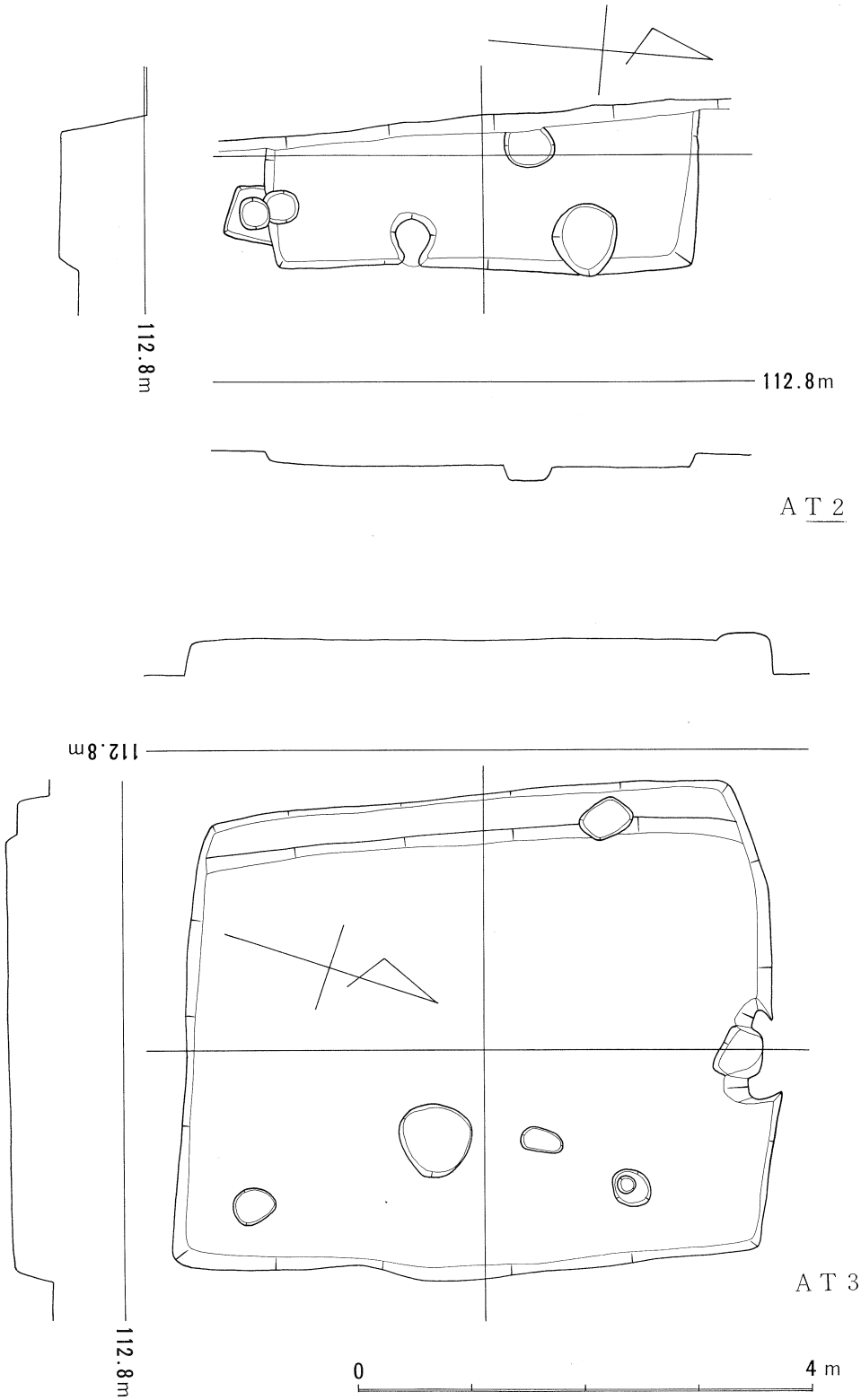


図18．ＡＴ２．３実測図

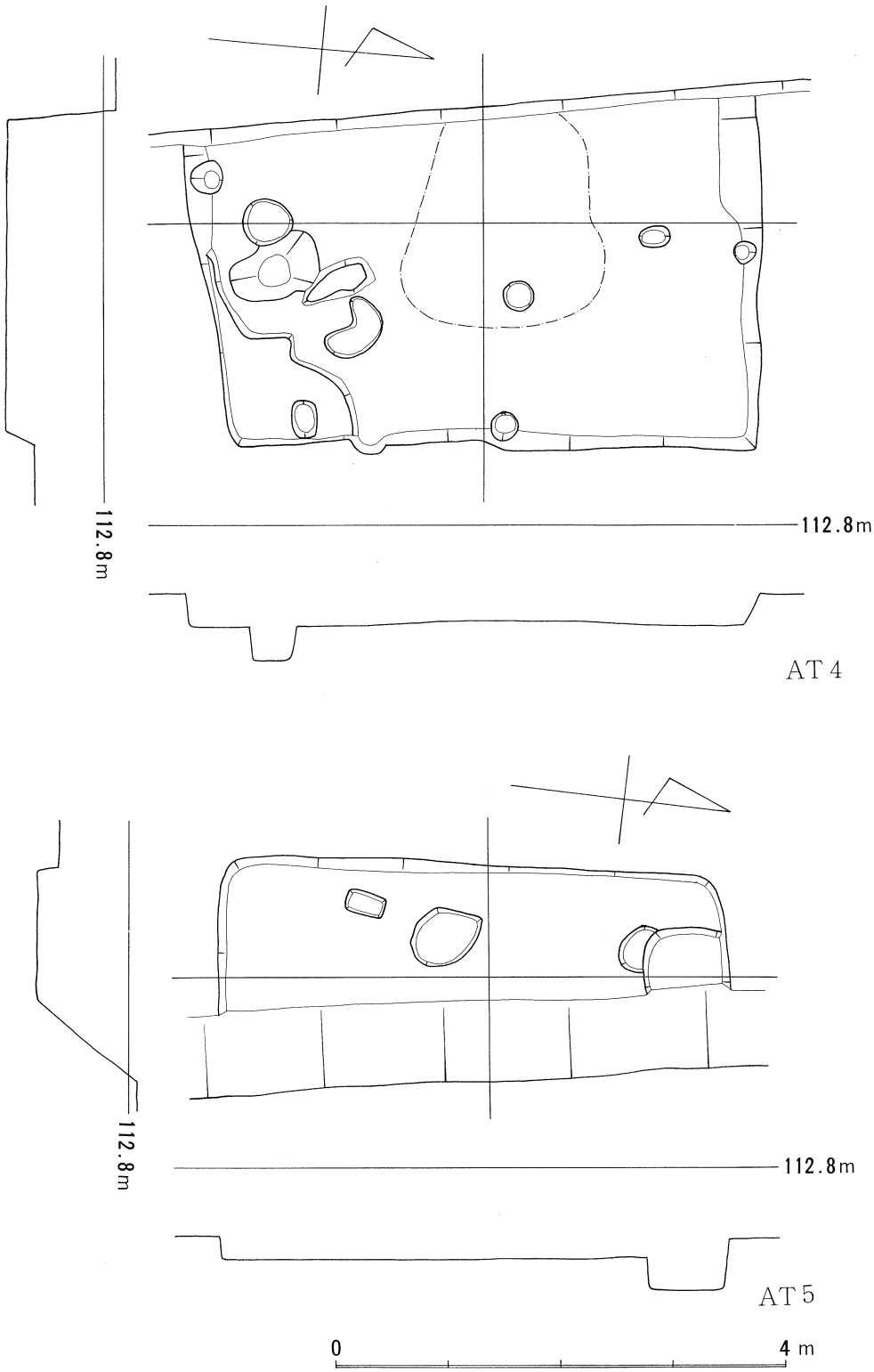


図19．ＡＴ４．５実測図

ており、Ｎ９°30′Ｗに中軸線を持つ。

ＡＴ６（図20）　東西両辺が並行しており、Ｎ11°30′Ｗの方向にある。東辺 4.3ｍ、西辺５ｍ、南北両辺は４ｍである。壁溝や柱穴は認められない。カマドは遺存していなかったが、南東コーナーより１ｍ程北で東辺附近に焼土があり、東壁面にこの焼土の正面から南側へ70cm程長くのびた火を受けた部分があった。このことから、カマドは南東コーナーより１ｍ北側で東壁に対し、斜めに作り付けられていたことが考えられる。

ＡＴ７　南東コーナー部分のみで、大半が調査対象外になる。このコーナー部分に径50cm程の土坑があり、焼土があった。コーナー部分に、対角線方向に取り付くカマドである可能性がある。

ＡＴ８　欠番

ＡＴ９　欠番

ＡＴ10（図20）　東辺 3.5ｍ、西辺４ｍ、南北両辺６ｍの規模を持つ。やや台形プランである。東西両辺が並行し、Ｎ20°30′Ｗの方向にある。壁溝は認められないが、北辺の東側に長さ 2.3ｍにわたって溝状に窪む部分がある。柱穴はない。カマドは南東コーナー附近、コーナーより30cm程西側で竪穴の対角線方向、南辺に対して約30°程の方向に作り付けられている。

ＡＴ11（図21）　南辺 3.5ｍ、北辺 3.2ｍ、東西両辺 4.6ｍの長方形プランである。Ｎ１°30′Ｅの方向にある。カマドは南東コーナーより１ｍ程北側で、東壁に対して40度の方向に付く。カマド内には露出部分が三角錐状の石材が埋め込まれ、支脚を作り付けていた。カマドの奥部と南壁との間約90cm程の間は幅50cm程の土盛りがなされ、土盛り内にトンネルを設け、煙通孔としていた。すなわち、東壁に対して斜めに作り付けられたカマドは、煙を直ちに竪穴外に排出するのではなく、東壁に並行して設けられたトンネル（煙通孔）によって竪穴の南東コーナーまで導びかれ、竪穴外に排出されていたものと考えられる。カマドの底と煙通孔とのレベル差はなく、煙通孔の底部もほぼ水平である。煙通孔に近接してその西側には、直径40cm、深さ40cmのほぼ垂直に掘り込まれたピットが穿たれている。ピット内には灰を多量に含んだ土が堆積し、遺物の出土はなかった。

ＡＴ12　欠番

ＡＴ13（図21）　東西両辺がほぼ並行で、Ｎ８°30′Ｅの方向にある。北辺4.18ｍ、南辺4.16ｍ、東辺4.52ｍ、西辺4.24ｍを計る。壁溝はなく、北辺及び東西両辺の一部が浅く窪む。カマドは南東コーナーより90cm程北側で、東辺に対して約30度の方向に付く。カマドの奥から東壁に並行して煙通孔がのびる。煙通孔は長さ64cmまで斜方にのび、南東コーナにまでは達っしていない。しかし、本来トンネル状を呈していたと考えられ、南東コーナー部分で竪穴外へぬけていたものと考えられる。煙通孔は約12°50′の勾配を持っている。現存している竪穴の深さは約30cm程であるため、煙通孔は竪穴のコーナー部分に向って40度以上の急勾配に変って竪穴外へ通じていたものと復原できる。

ＡＴ14（図22）　東側半分以上が調査地域外に出る。南北長 5.1ｍである。Ｎ３°Ｅの方向にある。

ＢＴ１（図22）　西辺部分が調査地域外に出る。南北長 2.8ｍと小さい。カマドは竪穴の北西コーナー近くで、北壁に構築されているようで、長さ1.12ｍの煙出しの溝（本来トンネル）が残っている。カマド部は、径50cm、深さ５cm程のカマド底部だけが残る。煙出しの施設は、カマドの奥から80cm程はわずか２度程の傾斜で導き、その外側に長径42cm、深さ11cm程の孔を穿ち、急角度で斜上方へ排煙する構造を持っている。Ｎ９°30′Ｅに向く。

ＢＴ２（図23）　ＢＴ９及びＢＴ10に切られ、西辺部分は調査地域外になる。南東コーナーより北 1.

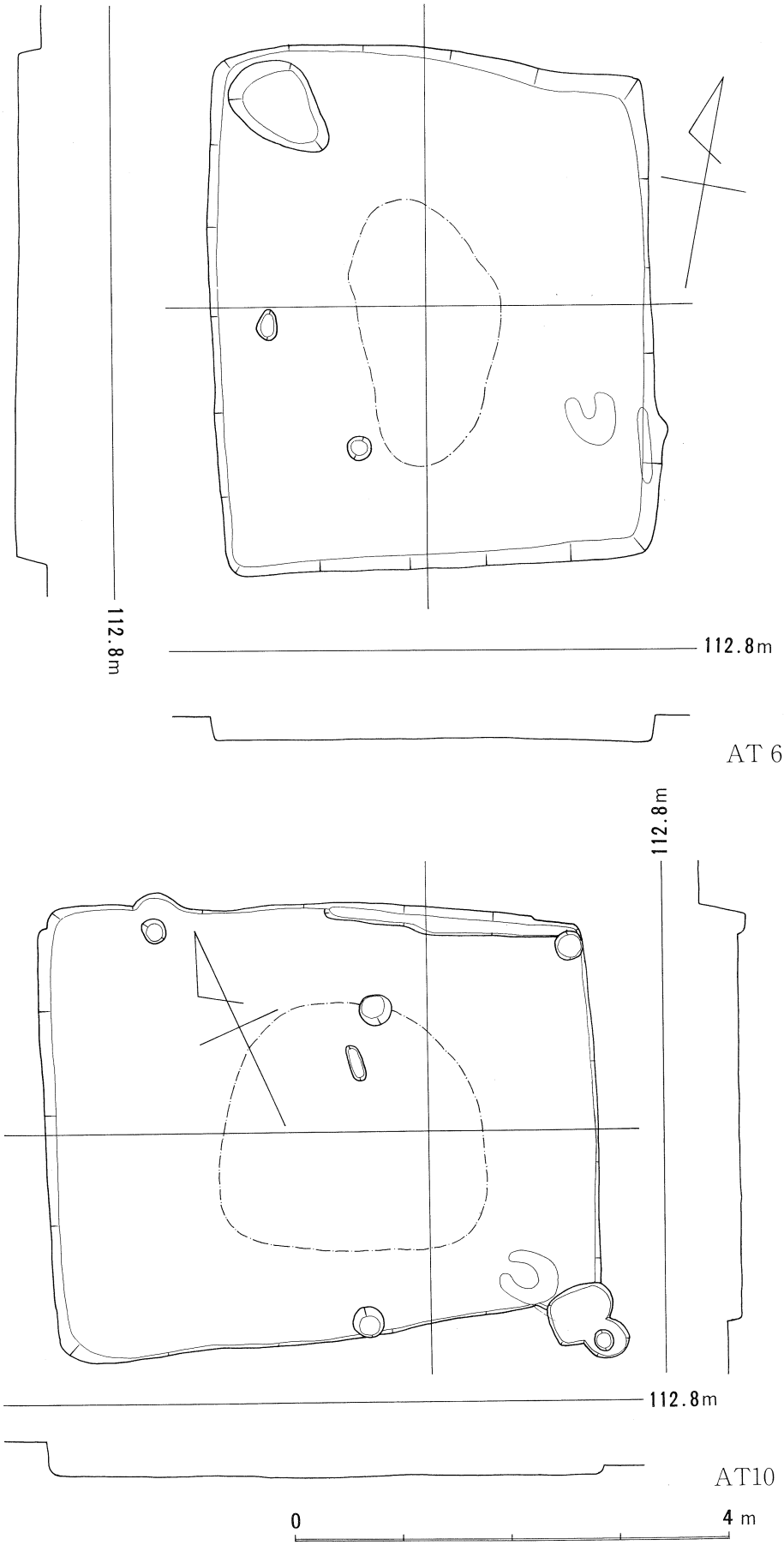


図20．ＡＴ６．10実測図

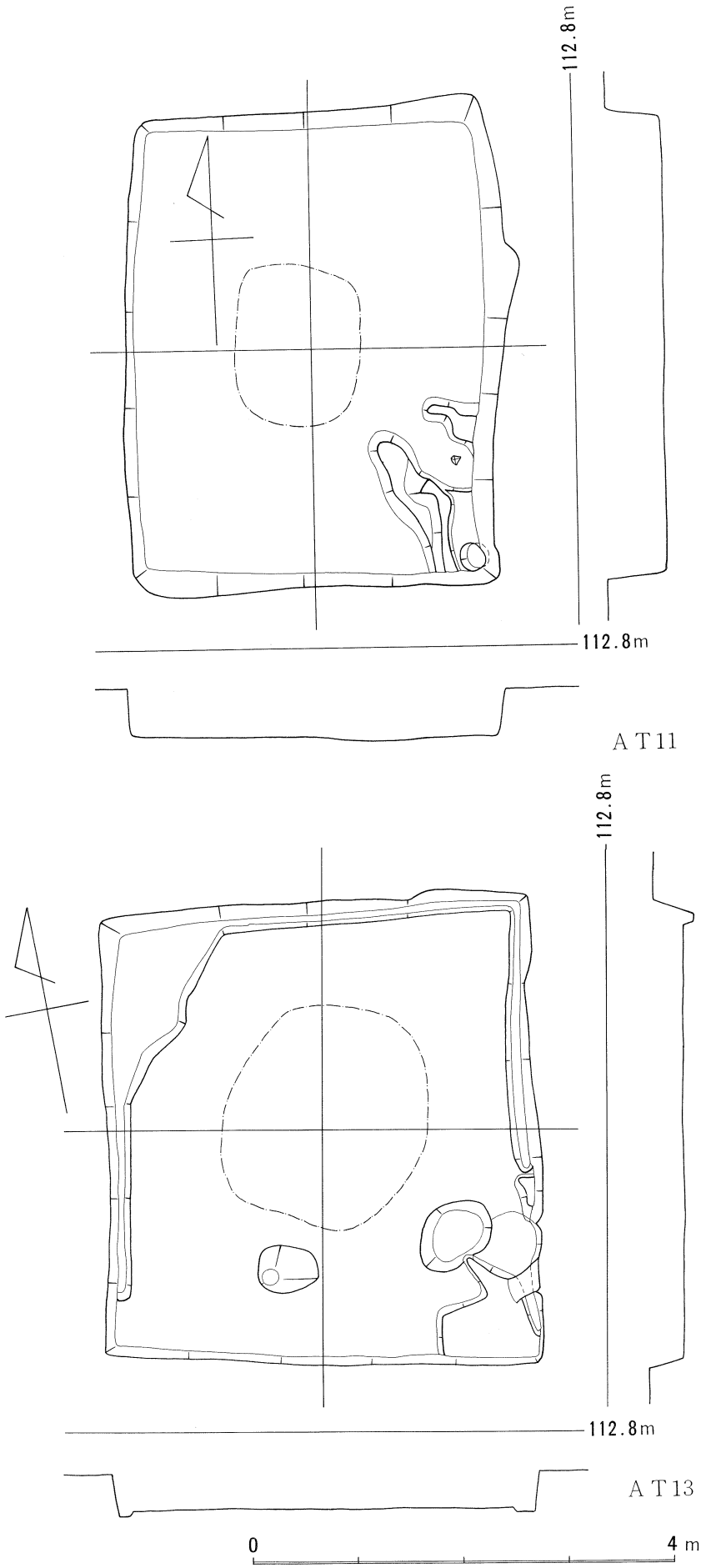


図21．ＡＴ11．13実測図

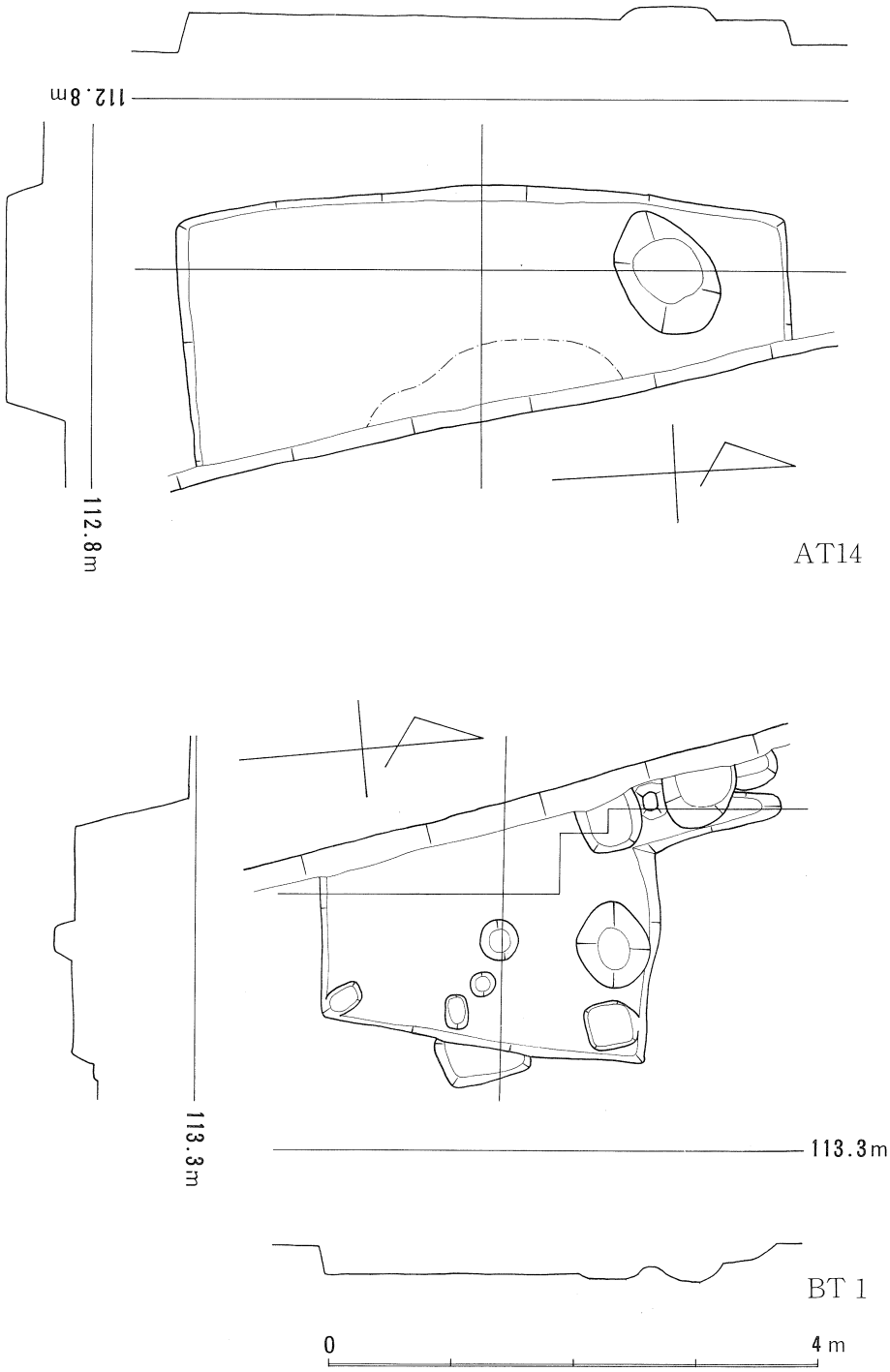


図22．ＡＴ14．ＢＴ１実測図

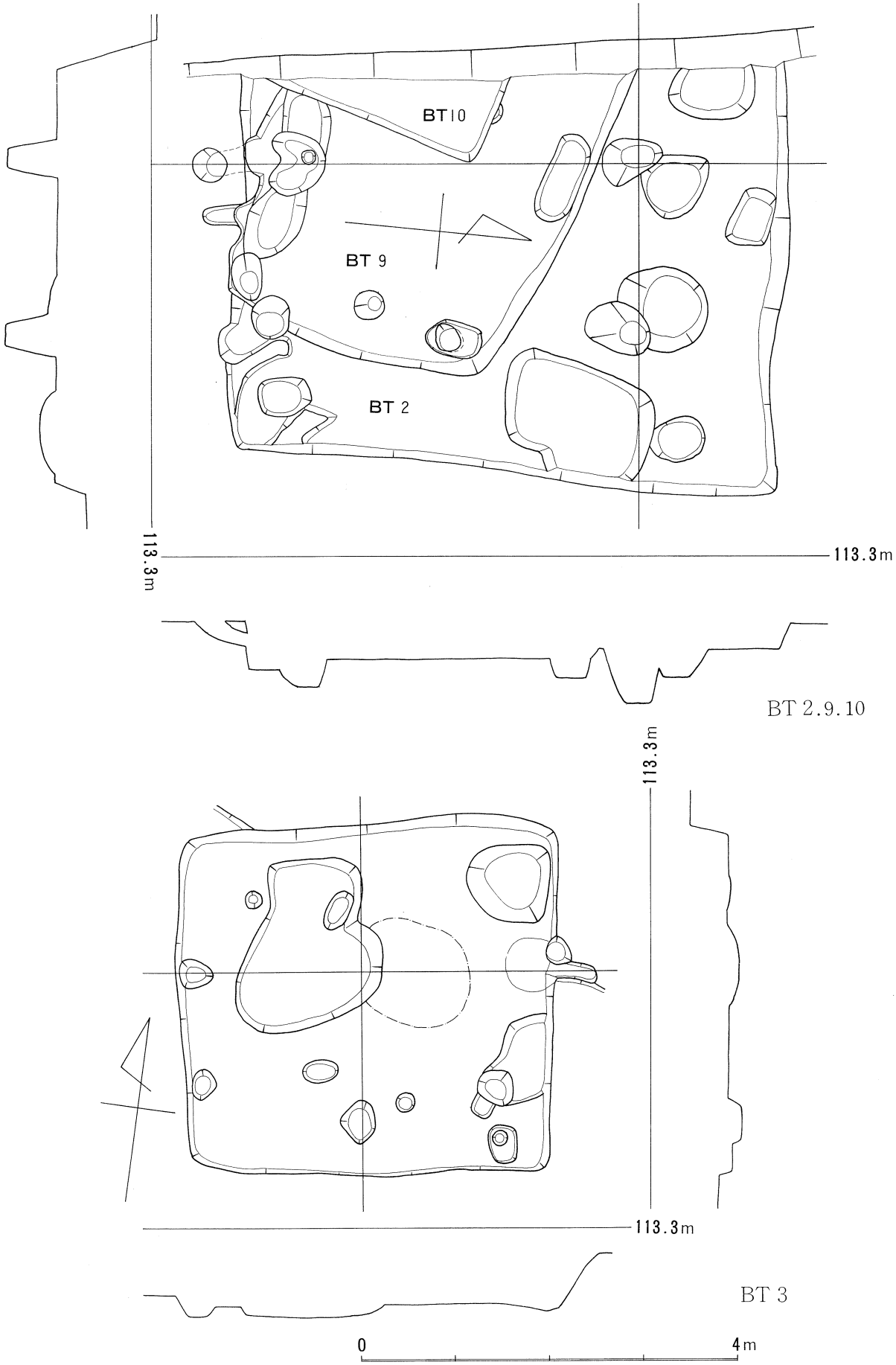


図23．ＢＴ２．３．９．10実測図

５ｍ附近に焼土があり、この部分をカマドとすると、竪穴の東壁に斜めに構築され、南東コーナーに向けて煙通孔を作る構造を持つものと思われる。南北長 5.8ｍ。南北両辺がほぼ並行で、Ｎ６°Ｗの方向にある。

ＢＴ３（図23）　北辺４ｍ、南辺3.84ｍ、西辺3.68ｍ、東辺 3.8ｍで、Ｎ９°30′Ｗの方向にある。カマドは北東コーナーより南 3.5ｍ程で、東壁に垂直に設けられ、竪穴外へ煙出しが掘られる。煙出しは竪穴の肩部より25cm程のび、約67度の急角度で立ち上る。

ＢＴ４（図24）　ＢＴ５を切る住居跡。北東コーナー部分が調査地域外に出る。南北 4.1ｍ、東西４ｍでほぼ正方形プランである。Ｎ16°30′Ｅの方向にある。カマドは南東コーナーより１ｍ北で、東壁に対し55度の角度で取り付く。カマドの焚口西側は各２個ずつの河原石を内外２枚重ねに、立て配している。カマドには、長胴甕がすえられた状態で出土している。カマドの奥から南東コーナーにかけて幅30cmの盛土がなされているが、その横断面で半円形の煤の堆積層が認められ、煙出しの施設であることが判明している。その堆積層は水平で、カマドの床面から約10cm程高位にある。すなわち、竪穴内では水平に煙を導き、竪穴外で、煙突等の施設により、急角度で排煙していたものと考えられる。この煙通孔に接っして西側に径40cm程の浅い窪みがあり、さらにその西側で、南壁に接っして、直径56cm程、深さ50cm程のピットが穿たれている。このピットには灰が充満していた。

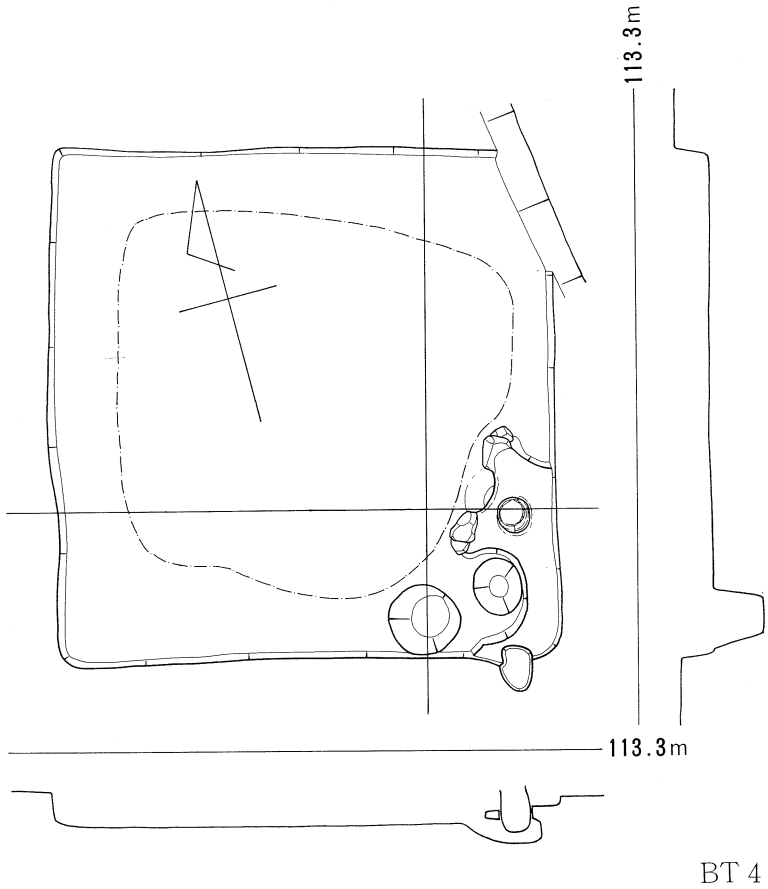
ＢＴ５（図24）　ＢＴ４によって切られ、東半分が調査地域外に出る。南北長 3.2ｍで、Ｎ22°30′Ｅの方向にある。壁溝や柱穴は認められない。

ＢＴ６（図25）　Ｎ31°Ｅの方向にあり、北辺4.16ｍ、南辺４ｍ、東辺3.88ｍ、西辺４ｍの規模を持つ。カマドは北辺のやや東寄りで、北壁に対してほぼ垂直に付く。煙出しはカマドの南東奥部から北壁に対して約20度の角度で、長さ50cm程のびる。現存ではわずかに竪穴外に出る程度で、その底部も約30度の勾配でゆるやかであり、従って、竪穴外で急角度に排煙させるものと思われる。カマドと東壁との間、すなわち竪穴の北東コーナーに、径80cm程の竪孔が穿たれ、やはり、灰の多い土が堆積していた。柱穴はなかったが、壁溝がカマドの西側から西辺にかけてＬ字形に掘られている。幅24cm、深さ12cm程度で、その南端、竪穴の南西コーナー附近に、径50cm程の尖底のピットが穿たれている。

ＢＴ７（図25）　北東コーナー部分が調査対象地域外にある。南北4.64ｍ～4.96ｍ、東西4.12ｍ～4.32ｍの規模で、東西両辺が並行に近かく、Ｎ30°30′Ｅと大きく東にふれている。カマドは南東コーナーより北へ 1.5ｍ程の位置にあったらしく、竪穴外へのびる煙り出しが残っている。この煙出しは竪穴の肩部から１ｍ程で、東壁に対し約30度程北へふれている。その基部附近に径30cm、深さ10cm程のピットがあり、煙り出しはその肩部よりほぼ水平にのび、その外端部で垂直に立ち上っている。従って、竪穴外１ｍ程水平に煙を導き、その端部で、垂直に近い角度で煙突等の施設が設けられたものと思われる。

ＢＴ８（図26）　東西2.96ｍ、南北 2.8ｍ～ 3.2ｍの規模であるが、床面はほぼ正方形である。Ｎ９°30′Ｗの方向にある。南東コーナーより50cm程北の位置にカマドがある。カマドの奥部は竪穴の東壁面に接っし、約25度の勾配を持つ煙り出しが竪穴外へ80cm程のびる。煙り出しは東壁に対して約15度程南へふれている。

ＢＴ９（図23）　ＢＴ２を切り、ＢＴ10に切られている。西辺が調査地域外に出る。北壁及び東壁はやや不正確であるが、南北長３ｍ程度である。この住居跡には、南辺に２基のカマドが付く。両者は、カマドの中心で約50cm程の間隔があり、南壁に対して垂直に作り付けられる。現状では、カマド部分は、長さ約１ｍ、幅60cm程にわたって、最深所で竪穴床面から21cmの溝状の土坑が出来あがっている。両者



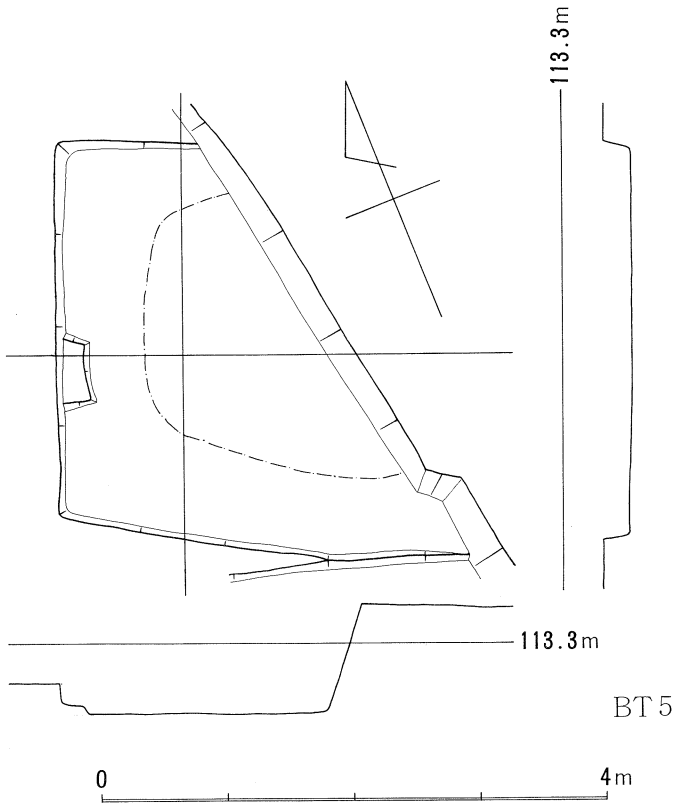


図24．ＢＴ４．５実測図

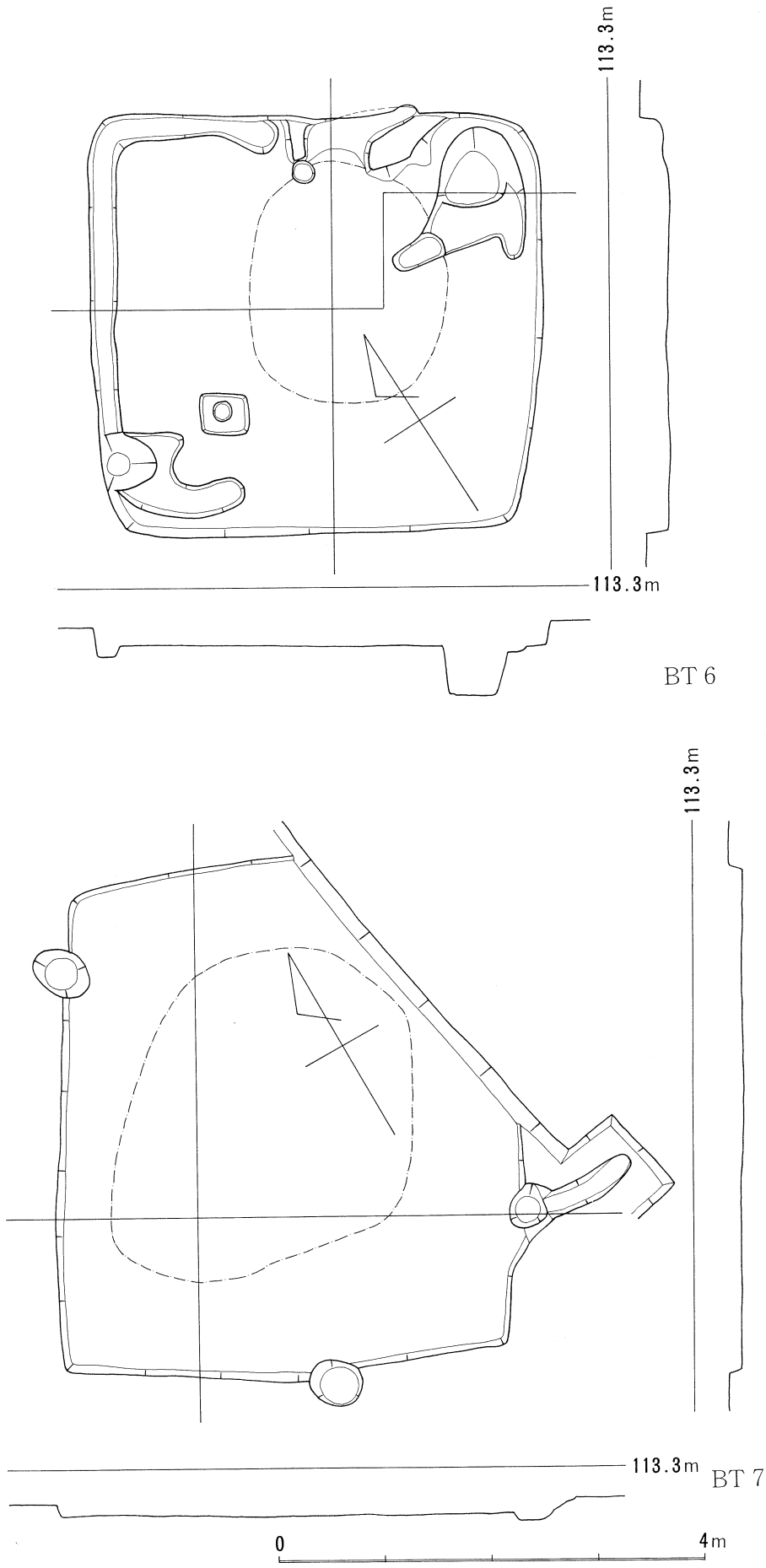


図25．ＢＴ６．７実測図

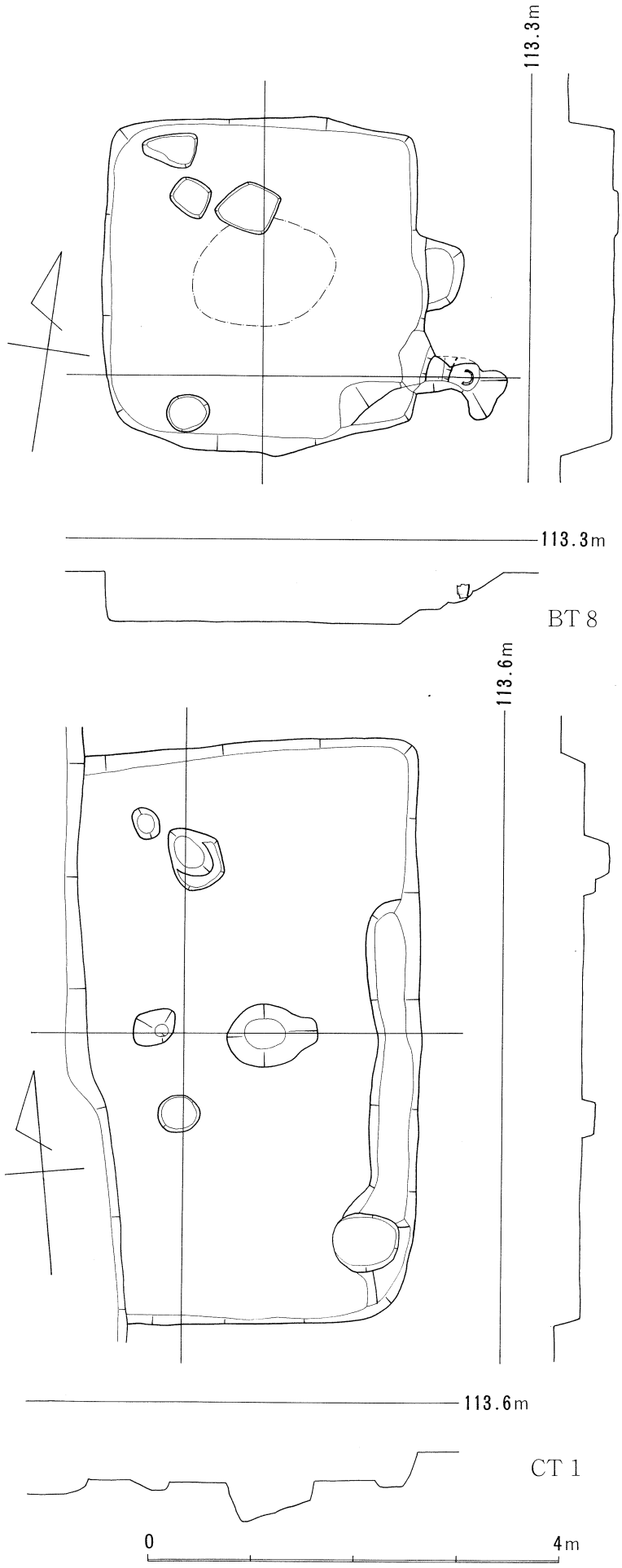


図26. ＢＴ８．ＣＴ１実測図

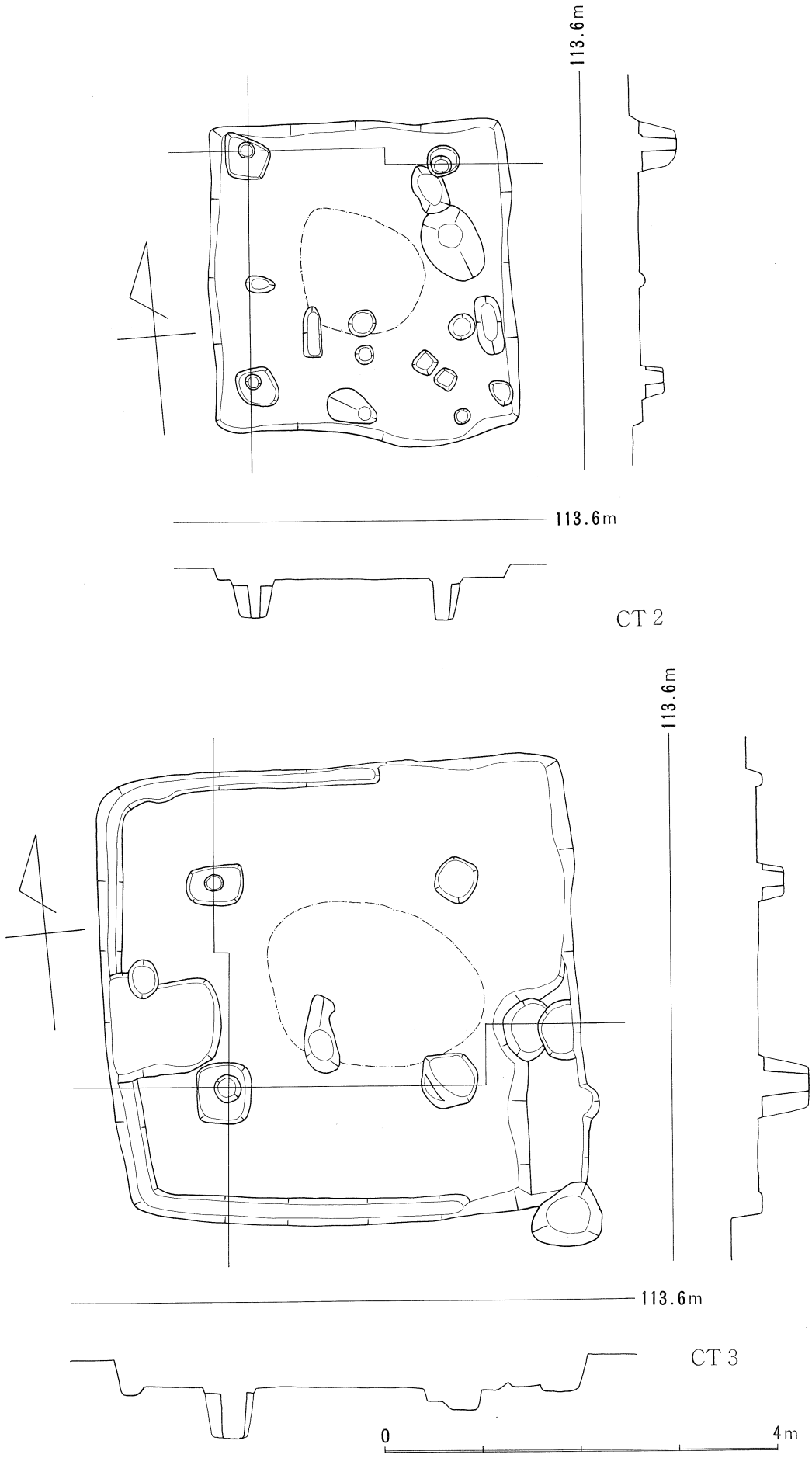


図27．ＣＴ２．３実測図

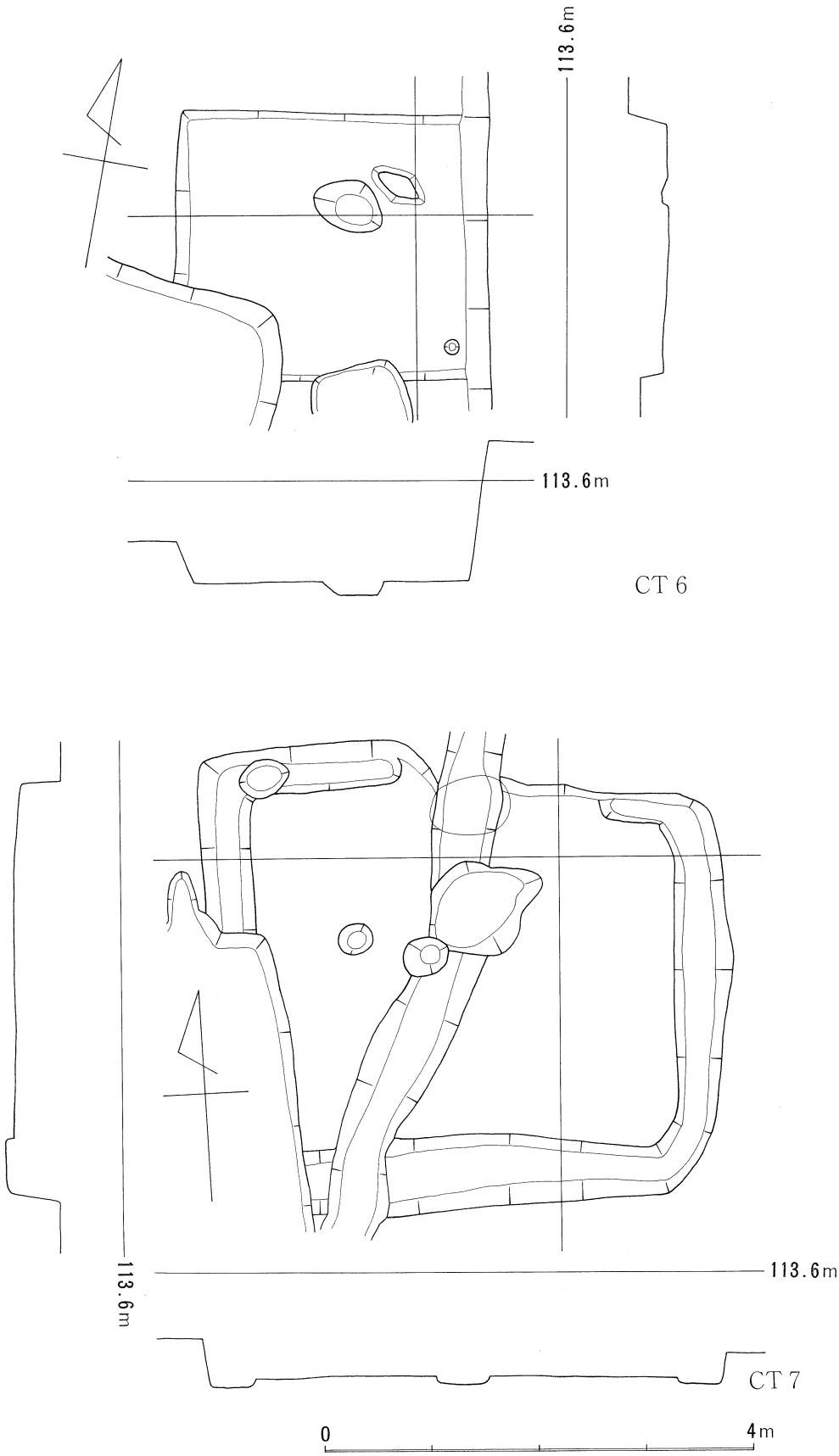


図28．ＣＴ６．７実測図

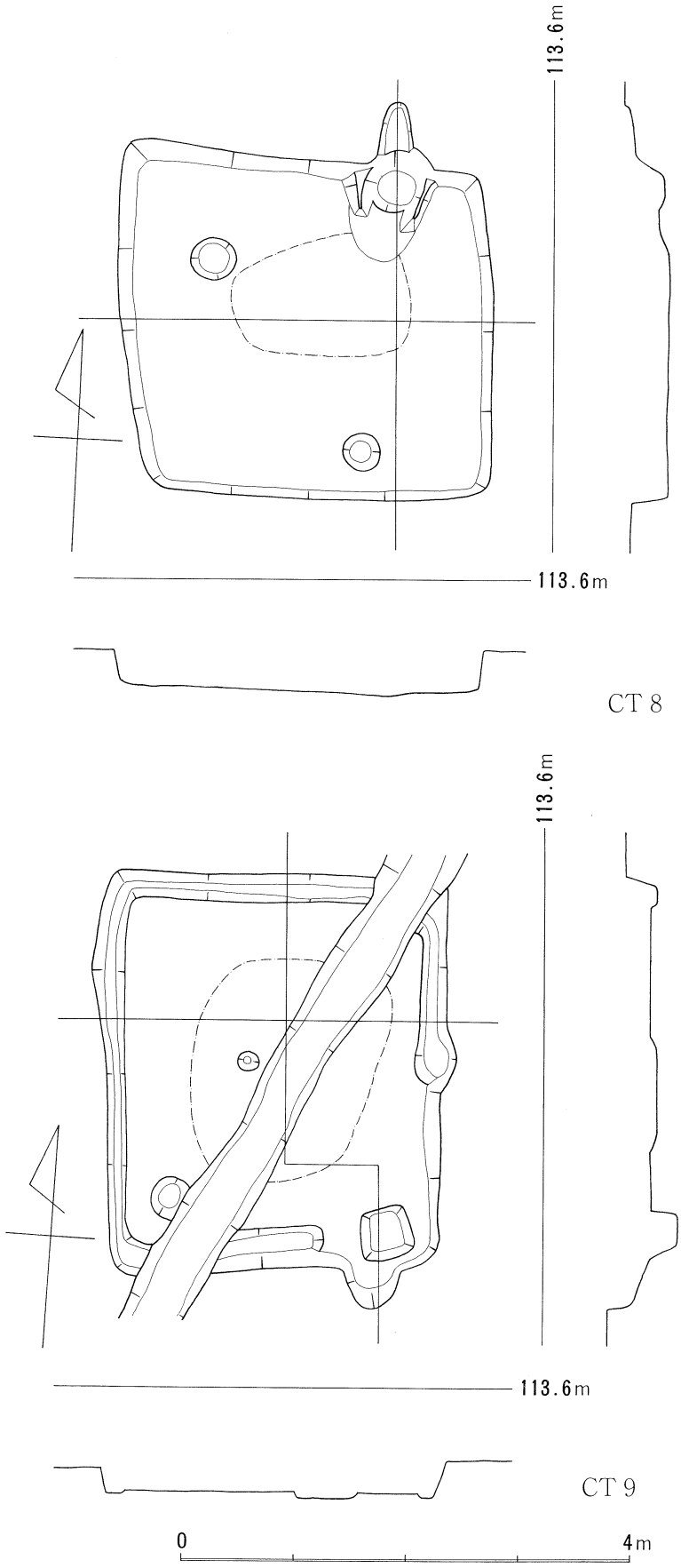


図29．ＣＴ８．９実測図

ともカマドの奥部は南壁に接っし、奥部から竪穴外へ煙を導き出す煙通孔が掘られている。この煙通孔は、竪穴の床面の位置から、直径40cmのトンネルである。その勾配は両者とも約50度と急角度であり、竪穴肩部より20cm南で口を開けている。両者ともカマド天井部の奥部がアーチ状に遺存していた。南辺はN 6°30′Wの方向にある。

BT10（図23）　BT9を切り込み、北東コーナー部だけを調査し得た。N17°30′Eの方向にあるが、規模等は不明。

CT1(図26)　西側半分が攪乱され消失している。南北長 5.7mを計る。南北両辺が並行で、N 2°Eを計る。カマドは南東コーナーより50cm程北で、東壁に垂直に作り付けられている。壁溝については、東辺に、カマドから北へ3m程にわたり溝状に窪むものが見られる。

CT2（図27）　CT1によって切られている。東辺 3.2m、西辺3m、北辺 3.2m、南辺3mでほぼ正方形プランを呈している。壁溝、柱穴とも認められず、カマドの位置も判然としない。中軸線はN 2° Eの方向にある。

CT3（図27）　東西 4.8m、南北 4.8mでほぼ正方形プランを持つ。カマドは東壁のやや南寄りに付く。カマドは旧状を保たないが、焼土等の遺存状態から東壁に対して垂直に作り付けられていたと考えてよい。カマドと南壁との間は約70cm程の幅で土壇状に掘り残されている。4本の柱穴があり、南北の柱間が東西両側とも約 2.1m、東西の柱間が南北両側とも 2.4mを計る。竪穴の東西両壁及び北壁に対しては約 1.2mと等間隔であるが、南壁に対しては約 1.5mとやや間が広くなっている。壁溝は西半分にのみ掘られ、幅約24cm、深さは竪穴の床面から8cm程と浅いものである。壁溝は西半の中央部で南北90cm、東西90cm程の出張る部分がある。軸線は磁北にある。

CT4　欠番

CT5　欠番

CT6（図28）　CT7に切られ、東半分は調査地域外、北側はM20によって切られている。規模は不明。N 5。Eの方向にある。

CT7（図28）　CT6を切り、CT8に切られる。また新しい溝が横断している。東西 4.8m、南北 3.8m～ 4.4m。北辺のほぼ中央部に焼土が認められ、カマドのあった位置と考えられる。壁溝は四周するが、焼土を中心に、長さ約 1.8mにわたって掘り残されている。幅32cm～72cm、深さ4cm～8cmである。ほぼ磁北の方向にある。

CT8（図29）　CT7を切る住居跡である。南北両辺とも 3.2m、北辺 3.1m、南辺 2.8mの規模である。カマドは北壁で、北東コーナーより50cm程西側に、垂直に付く。カマドの奥部は竪穴の北壁よりわずかに外側にあり、煙り出しが40cm程残っている。カマド奥部は30度の勾配をもって約40cm程立ち上り、わずか3度の勾配しかもたない煙出しに続く。N 6°30′Wの方向にある。

CT9（図29）　東西約3m～ 3.1m、南北3.5m～3.6mで、CT8と同じ方向を向く。壁溝は南辺の東側約3分の1と東辺の南側約2分の1を除いて四周している。幅15cm前後、深さ5cm程。カマドは壁溝の切れる南東コーナー附近にあったようで、南東コーナーより30cm程北側に焼土が認められた。N 3°Wの方向にある。

CT10（図30）　西側の大半が調査地域外にでる。南北長 4.6m～5m。N 4° 30′ Eの方向にある。

CT11（図30）　CT12を切る。N 8°30′Eの方向にある。南北長 3.1m、東西 3.2m～ 2.3m。

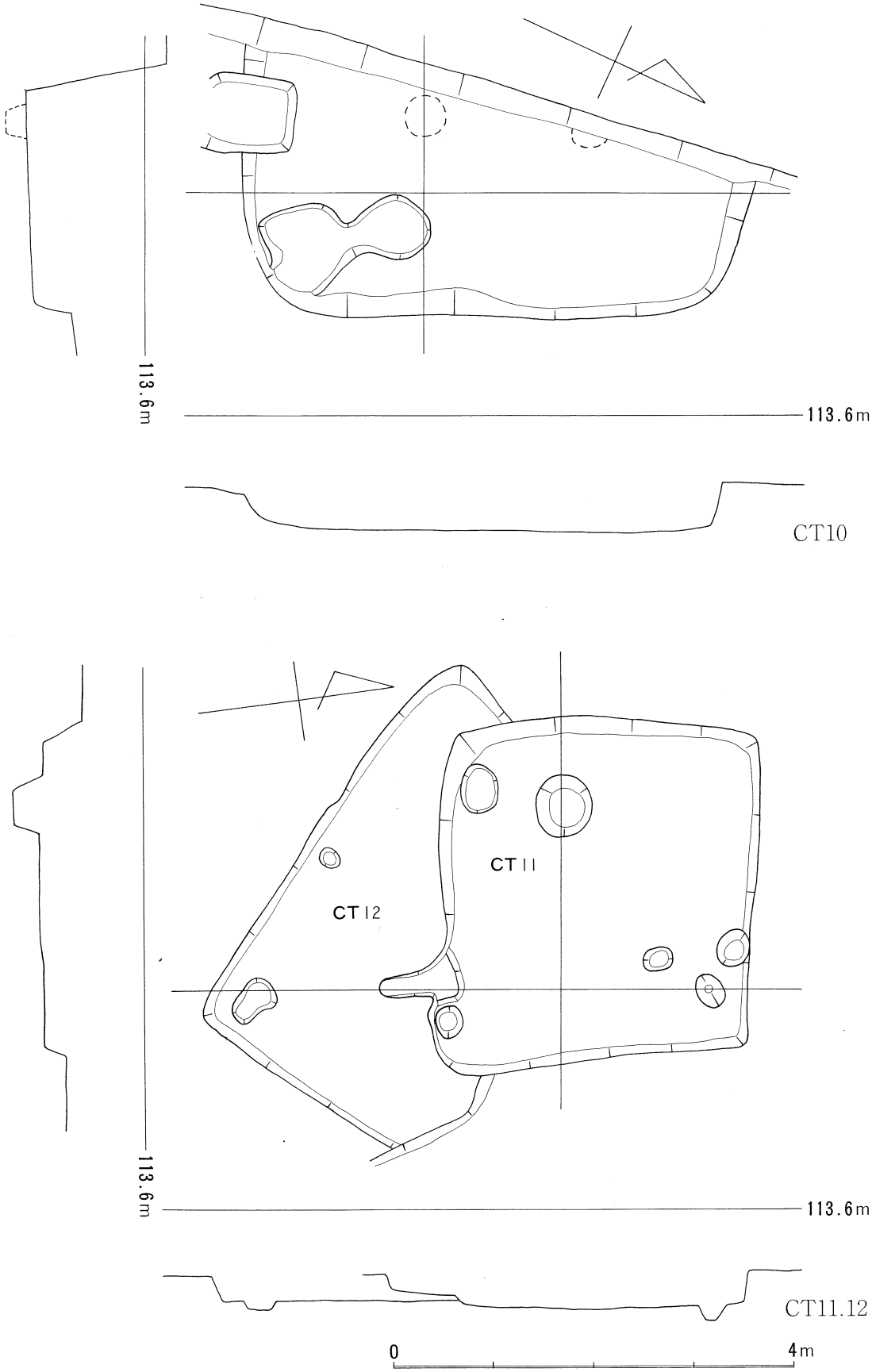


図30．ＣＴ10．11．12実測図

カマドは、竪穴の南壁の外側に、長さ56cmの煙り出しの部分が遺存している。煙り出しは、竪穴床面より８cm程高い位置から、約５度程のゆるい勾配がつけられている。

ＣＴ12（図30）　ＣＴ11に切られている。南北 4.3m、東西は 3.4m以内で、長方形プランを持つ。N43°30′Ｗと大きく西にふる。

ＣＴ13（図31）　東西長２ｍ、南北長 2.3mと極めて小規模である。カマドの位置は不明。

以上のＡ地区からＣ地区までの計31棟が才２住居跡群のうちの竪穴式住居跡群である。これらを構造的に分類しておこうと思うが、柱穴を持つものが極めて少なく、従って、カマドの形態を中心に分類しておきたい。まずカマドが竪穴のコーナーから１ｍ程離れ、壁面に対して斜めに作り付けられるもの（ＡＴ６・11・13、ＢＴ２・４・６、ＣＴ５）がある。これらは、煙り出しの施設の一部が竪穴内に設けられるもので、これらはさらに、煙り出しが最近の竪穴のコーナー部分まで引き出されるもの（ＡＴ11、ＢＴ4)とコーナーまでの途中で竪穴外へ出るもの（ＡＴ６・13、ＢＴ２・６、ＣＴ５）とがある。ただし、ＣＴ５については、カマドの横に土坑は認められたものの、煙り出しの施設は認められておらず、除外しなければならないかもしれない。カマドが壁面に対して斜めに作り付けられるものは才１住居跡群の中でも認められ、Ｂ型としたが、ここでは煙り出しの施設が認められなかった。ここではとりあえず、Ｂ－１型とし、煙り出しが竪穴のコーナーまでくるものをＢ－２型、コーナーまでの途中で竪穴外へ出るものをＢ－３型としておく。Ｂ－２型のものはいずれも煙出しの横に灰の充満したピットが認められ、Ｂ－３型のものでは、ＢＴ６にのみ認められた。また、Ｂ－２型の煙り出しはほぼ水平であり、Ｂ－３型ではわずかな勾配を持っている。なお、カマドの作り付けられる壁面は、Ｂ－３型のＢＴ６が北壁面であるのに対し、他はいずれも東壁面である。次に、竪穴のコーナー附近で、竪穴の壁面に対して垂直方向に作り付けられるものがある（ＢＴ１・７・８、ＣＴ１・８・９・11）。これらのうち、煙り出しの施設が明瞭なもの（ＢＴ１・７・８、ＣＴ８・11）と検出されなかったもの（ＣＴ１・９）とがある。後者については、才１住居跡群のうちＣ型とした２棟が同様のものである。後者は、Ｄ型としたもののうち１棟に認められる。前者については、煙り出しは竪穴外に設けられるが、その立ち上りが極めて急角度であるものがある。ＢＴ８の１棟のみであるが、Ｄ－１型とする。他のＢＴ１、ＢＴ７、ＣＴ８、ＣＴ11は極めてゆるやかな勾配を持っており、これをＤ－２型とする。残りのうちＡＴ10を除いて、他は、カマドが竪穴の壁面の中央附近に作り付けられている。このうち、煙り出しの施設の認められなかったもの（ＡＴ３、ＣＴ７）がある。才１住居跡群でＡ型としたものであるが、カマドの部分を除いて壁溝が四周するものはＣＴ７だけである。柱穴は認められなかったが、才１住居跡群の柏原北ＣＴ１・５とともにＡ－１型とし、ＡＴ３の壁溝の認められないものをＡ－２型とする。他のＢＴ３及びＢＴ９をＡ－３型とするが、これらは、ともに、煙り出しはカマドの奥部から急角度で立ち上り、Ｄ－１型としたＢＴ８に構造的には一致する。残ったＡＴ10は、竪穴のコーナーに作り付けられるが、その方向は竪穴の対角線の方向にある。Ｅ型としておく。

以上をまとめると次の通りである。

Ａ－１型　（柏原北ＣＴ１・５）ＣＴ７

Ａ－２型　ＡＴ３

Ａ－３型　ＢＴ３・９

Ｂ－１型　（柏原北ＣＴ２・６・７）

Ｂ－２型　ＡＴ11、ＢＴ４

Ｂ－３型　ＡＴ６・13、ＢＴ２・４

Ｃ　　型　（柏原北ＣＴ４・10）ＣＴ１・９

Ｄ－１型　ＢＴ８

Ｄ－２型　ＢＴ１・７、ＣＴ８・11、（柏原北ＣＴ３・９）

Ｅ　　型　ＡＴ10

これらを竪穴の方位及び床面積で見れば次のようになる。

Ａ－１型　磁北、19.7㎡

Ａ－２型　Ｎ７°30′Ｗ、20.5㎡

Ａ－３型　Ｎ６°30′～９°30′Ｗ、14.4㎡

Ｂ－２型　Ｎ１°30′～16°30′Ｅ、15.4㎡～16.4㎡

Ｂ－３型　Ｎ11°30′Ｗ～Ｎ16°30′Ｅ、16.4㎡～18.6㎡

Ｃ　　型　Ｎ３°Ｗ～Ｎ２°Ｅ、10.8㎡

Ｄ　　型　Ｎ９°30′Ｗ、8.9㎡

Ｄ－２型　Ｎ６°30′Ｗ～Ｎ30°30′Ｅ、7.8㎡～20.2㎡

Ｅ　　型　Ｎ20°30′Ｅ、22.5㎡

方位は極めてバラエティーに富んでいる。床面積については、Ｄ－２型に20.2㎡と大きいものが１棟入るが、Ａ－１及びＡ－２型さらにＥ型が19.7～22.5㎡、Ｂ－１及びＢ－２型が14.4～15.9㎡、Ｂ－３型が17.7㎡、Ｃ型、Ｄ－１及びＤ－２型が 8.9～10.8㎡とおおよそ近似した規模となっている。住居跡相互の切り合い関係で新古のわかるものは、ＣＴ７→ＣＴ８の関係からＡ－１型→Ｄ－２型の古→新の関係のみである。また、才１住居跡群での切り合い関係からは、Ｃ型→Ｄ－２型となる。

ハ）才３住居跡群竪穴式住居跡

ＦＴ１（図31）　南北長 4.6ｍ、東西は北辺で2.95ｍ、南辺 2.7ｍの長方形プランを持つ。深さは１ｍを計るが、遺物は土器の小片のみであり、カマド等を思わせる焼土等の痕跡は一切認められなかった。住居跡か否かも判断するのに困難を感じるものである。Ｎ12°30′Ｅに中軸線がある。

ＦＴ２（図32）　西側半分が調査地域外にある。南北の長さは５ｍ～ 5.2ｍを計る。深さ58㎝～99ｍまで遺存していた。カマドの位置は不明であるが、南側に集中して10㎝～20㎝の長さの自然河原石が多く散在している。Ｎ４°Ｅの方向にある。

ＦＴ３　欠番

ＦＴ４（図32）　ＦＴ５を切って構築している。西辺部分は調査地域外にあり、北東部に被掘坑がある。南北長2.94ｍで、Ｎ４°Ｗの方向を向く。カマドの痕跡は認められなかった。

ＦＴ５　ＦＴ４により切られ、西半分が調査地域外に出る。カマドは竪穴の南東コーナー部分で、東壁に対して垂直方向に作り付けられている。カマド本体部分に土坑があって不明だが、煙出し部分が残っている。煙出しは、カマドの奥部から竪穴外へ48㎝まで出ている。煙り出しは外側程急勾配で、落差は27㎝、平均勾配は約30度である。規模は、南北 3.8ｍで、東辺はＮ３°Ｗの方向にある。

ＦＴ６（図33）　東側の大半が調査地域外へ出る。西辺は4.44ｍで、Ｎ12°30′Ｅの方向にある。深さ55㎝まで残る。竪穴の下端に、ほぼ一列に直径18㎝～38㎝のピットが、東辺で５基検出された。深さは床面より９㎝～18㎝で、不等間隔であるが、竪穴下端でそろうもので、竪穴式住居跡の構造に直接関連するものと考える。

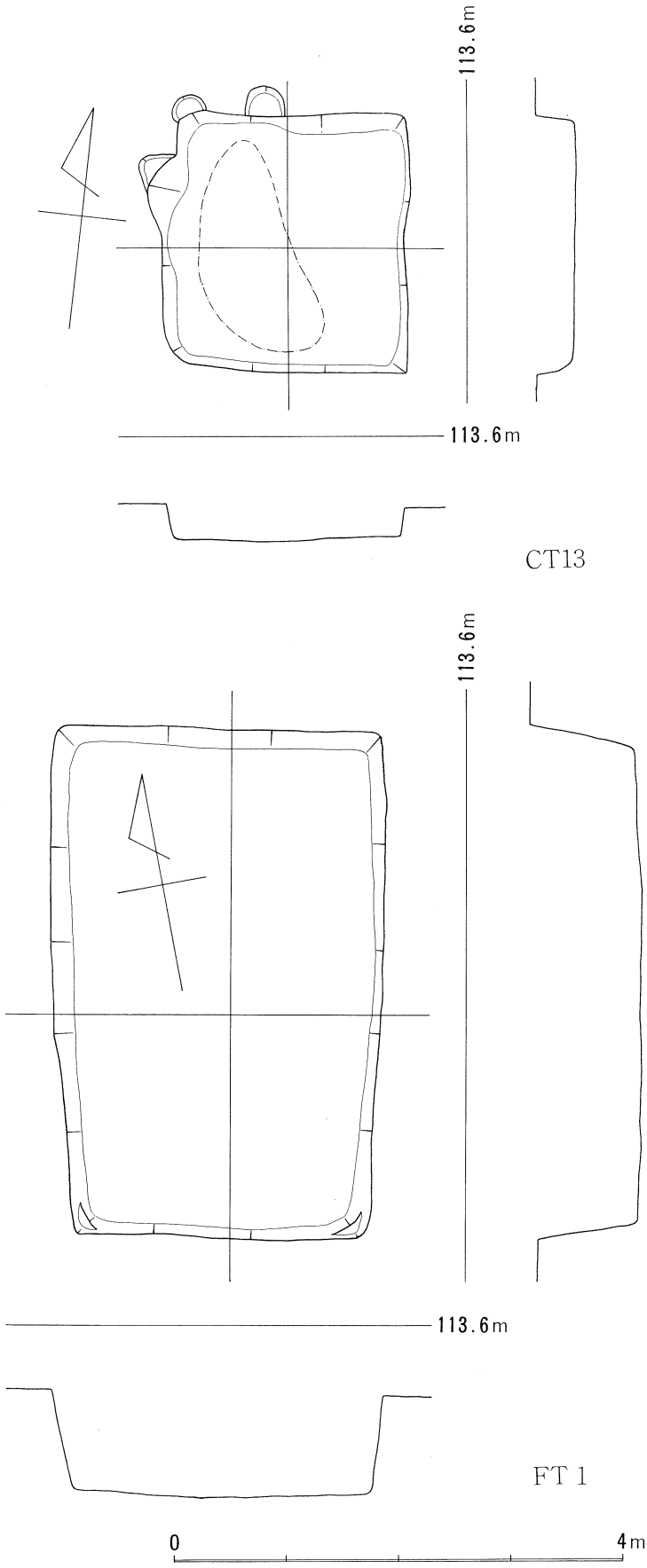


図31．ＣＴ13．ＦＴ１実測図

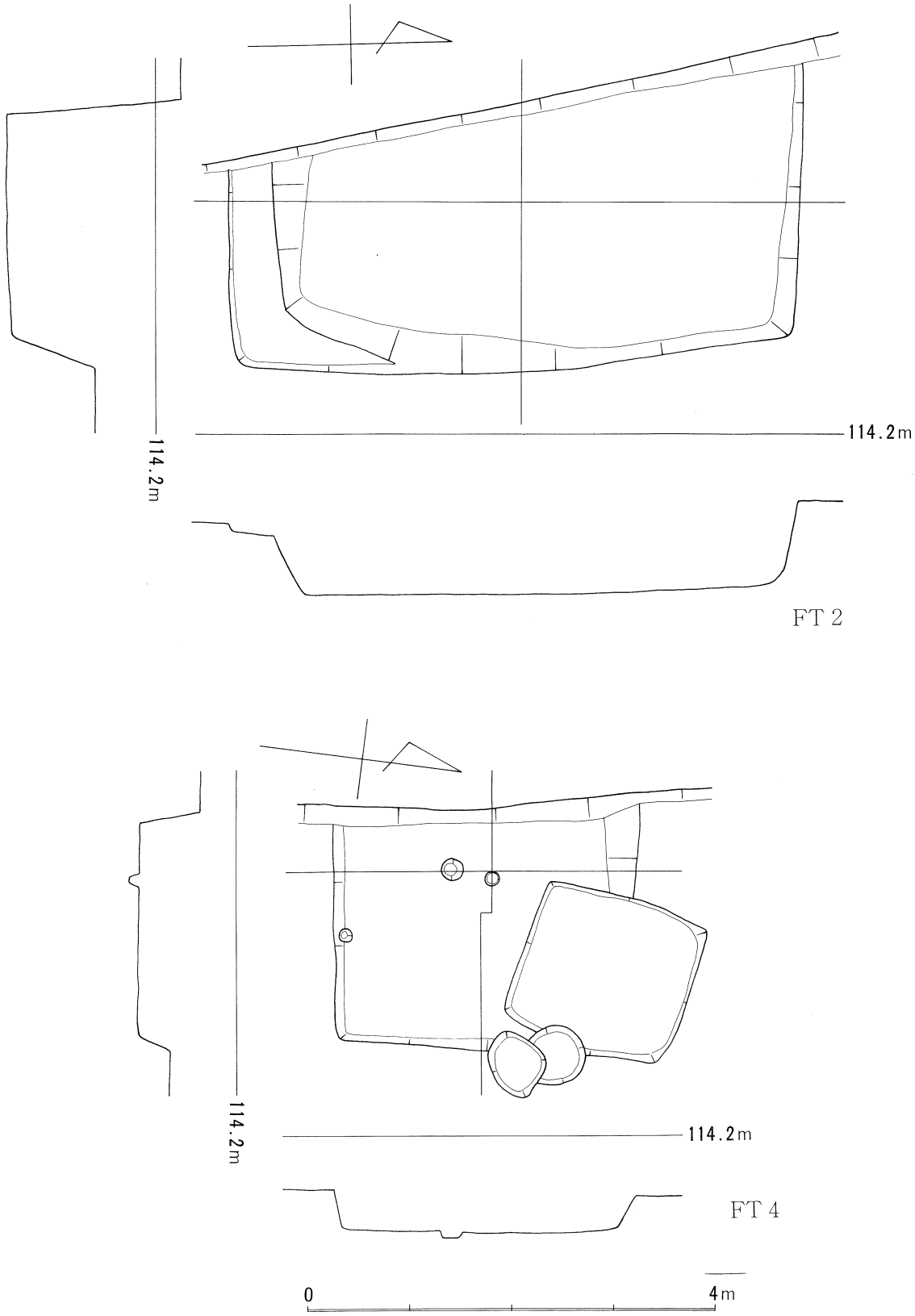


図32. ＦＴ２．４実測図

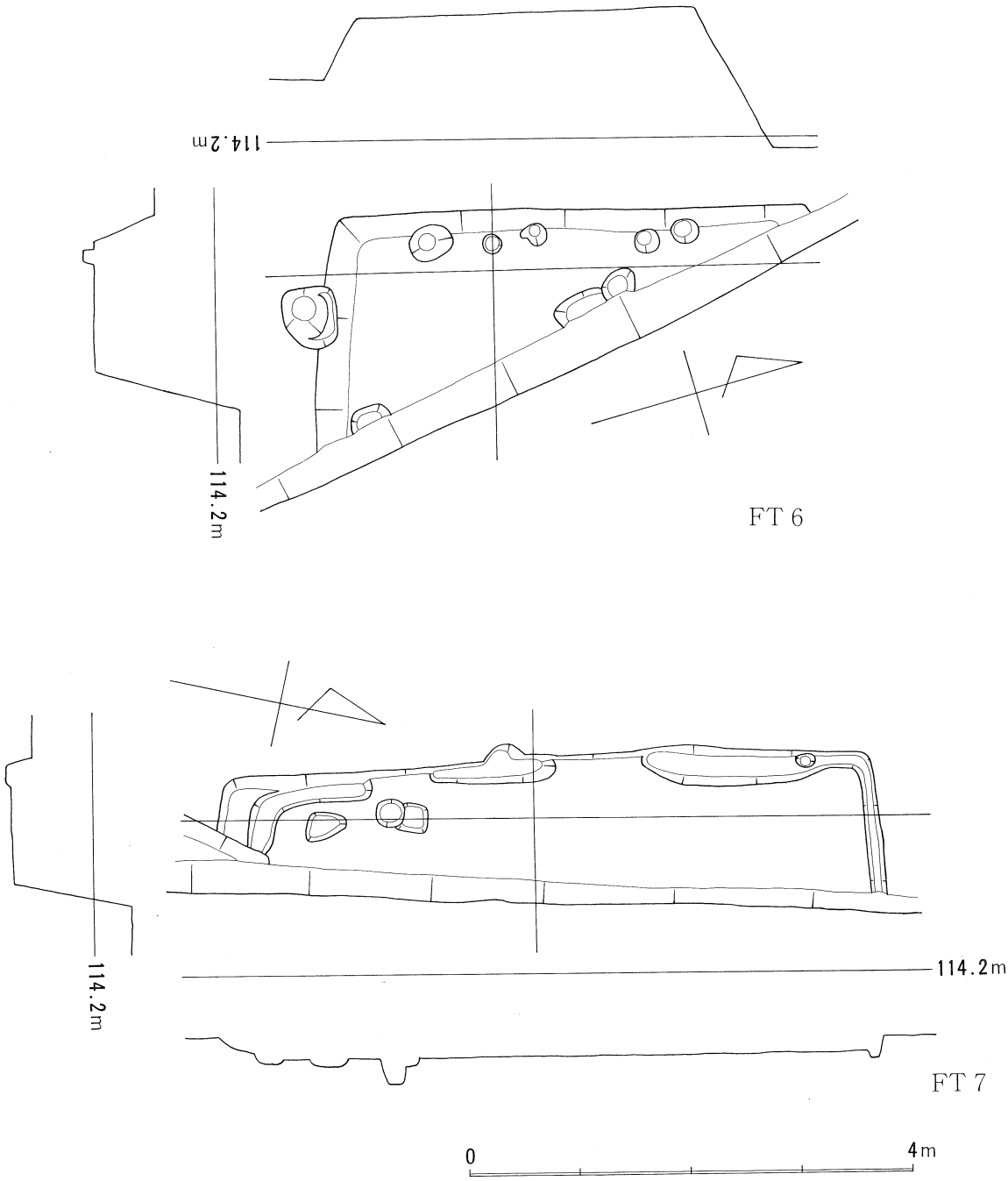


図33. ＦＴ６．７実測図

ＦＴ７（図33）　ＦＴ６に切られ、東側の大半が調査地域外に出る。南北長 5.8ｍ～ 6.1ｍで、西辺はＮ15°Ｗの方向にある。竪穴の下端に、浅く短い溝が走る。北辺部分は幅22cm、深さ7cm～8cm、東西辺には、北辺のものから接続して長さ1.66ｍまで、幅30cm～36cm、深さ7cm～8cm、その南で74cmの間隔をあけ、長さ1.16ｍ、幅24cm、深さ５ｍ、さらに50cmの間隔をもって東辺の南端から南辺にかけて、幅15cm、深さ２ｍ～５ｍの４条である。

ＦＴ８（図34）　ＦＴ10、ＦＴ23を切る住居跡。東西 2.5ｍ、南北は東辺で 2.4ｍ、西辺で 2.1ｍである。並行する東西両辺はＮ12°Ｗの方向にある。カマドは北西コーナー部分に、西辺にほぼ直交してあったらしく、煙出しの施設が北西のコーナーより竪穴外へのびていた。煙り出しは、幅24cm～30cm、長さ70cmで、カマドの奥部が、ほぼ垂直に31cm程立ち上った部分に設けられている。その底部はほぼ水平で、その外端部で約45度の勾配がある。なお、煙出しは西壁に対して18度北にふれている。

ＦＴ９　ＦＴ23が重なり、北辺部のわずかを残すのみである。Ｎ２°Ｗの方向にあるが、規模等不明。

ＦＴ10（図34）　ＦＴ８及びＦＴ23に切られる。南北長2.75ｍ～3.08ｍを計る。北辺はＮ７°30′Ｅの方向にある。南東コーナー部分にカマドが作り付けられている。カマドは、その東壁に当る部分を長さ52cm、幅20cmにわたって竪穴を掘り残し、西壁に当る部分をこえて並行して粘土を盛り上げて構築している。地山の掘り残し部分は高さ20cmまで残っているが、横断面はアーチ状に弯曲している。遺存しているカマドの下端幅は約48cmを計る。長さは不明だが少なくとも地山の掘り残し部分の52cm以上である。カマドからその前面にかけて、長径80cm、短径54cm、深さ3.5cm～8.5cmの浅いダ円形の窪みがある。その奥16cm程の間はほぼ水平で、竪穴の南壁面に当るが、この部分もアーチ状に彎曲していて、カマドの奥部であることがわかる。煙り出しの施設は認められず、おそらく、カマド奥部から直ちに立ち上る煙突が存在していたのであろう。

ＦＴ11（図35）　ＦＴ９及びＦＴ15によって切られ、西半分が調査地域外に出る。規模は不明。東辺はＮ２°30′Ｗの方向にある。カマドは北東コーナー部分に、北壁に対して直交する方向にある。カマドの西壁及び東壁の一部が良く遺存し、底部の窪みからも規模が判明した。カマドの奥部は竪穴の北壁面に当り、カマドの長さは82cmを計る。その中程より前庭部寄りの西側に、長さ40cm程の割石が、下方の石材にもたせかけるように残り、東側にカマドの壁体の一部及びその南側に石材の抜き取り穴があった。東側の石材と西壁の壁体の一部との間隔は36cmで、その奥部では最大幅76cmを計る。カマドの底部には、奥壁より26cmの位置に、半サイした河石を立て、埋め込んだ石製の支脚が残っていた。高さは12cmで、半円形の幅、長さとも10cm程である。遺存しているカマドの壁体は、特にその西壁のものは、高さ22cmまでのこり、その横断面はアーチ状を呈している。煙り出しはカマドの奥部の東端に、竪穴の壁面をわずか５cm程くり込み、垂直に立ち上らせたものがある。

ＦＴ12（図35）　ＦＴ13に北東コーナー部分を切られている。東西4.74ｍ、南北5.02ｍ～5.08ｍで、Ｎ３°30′Ｅの方向にある。南西部に大きな攪乱坑があり、全容は明らかでないが、壁溝がめぐる。幅は22～30cmで、溝底に柵列状の小ピットが認められる。特に、竪穴のコーナー部分のものは比較的明確で、竪穴肩部から壁溝にかけて坑が穿れ、北西コーナーのものには径15cmほどの柱痕も認められる。溝底のピット列は不等間隔で、ピットとして検出し得ない部分もあるが、ピットに接っする竪穴壁面に窪みが見られ、杭状のものを据えつけていた可能性がある。西壁では、竪穴肩部から壁溝にかけて、ほぼ58cm間隔のピットが４基並ぶ。柱痕の認められるものもある。これらは壁溝底にまで及ばない。これら

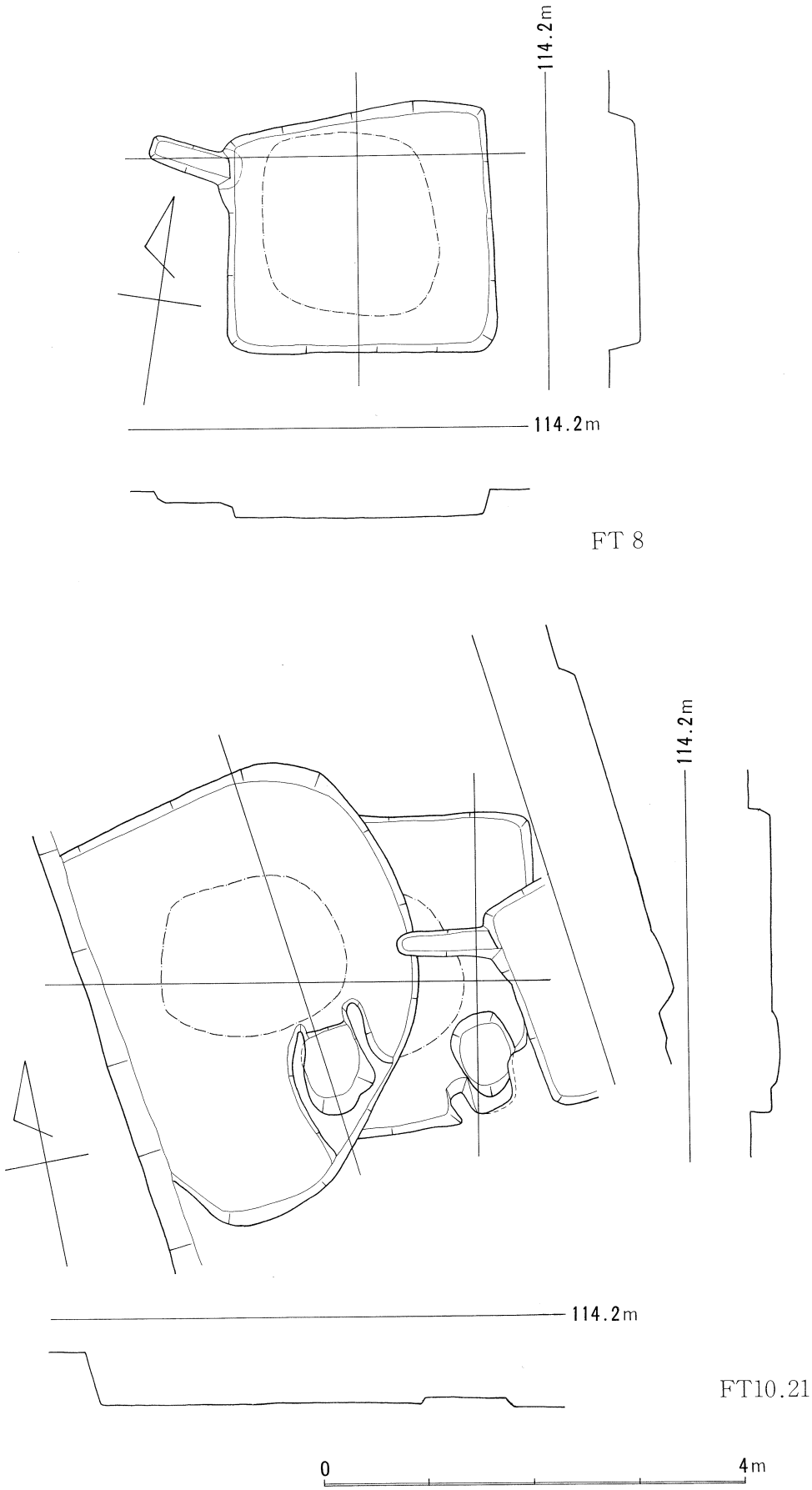


図34. ＦＴ８．10．21実測図

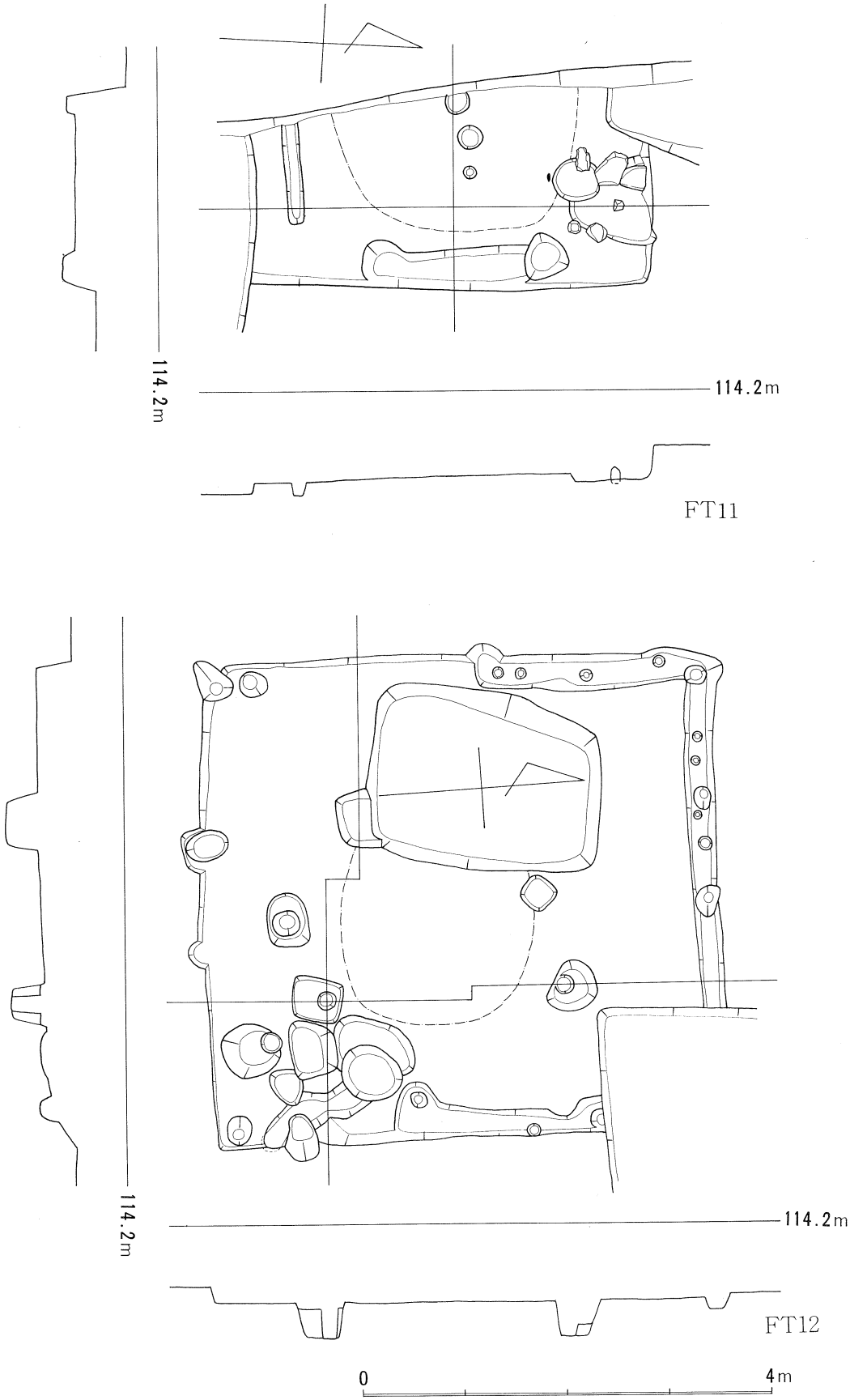


図35．ＦＴ11．12実測図

壁体を構成すると思われる柱穴列の他に、竪穴内に２基の柱穴が認められた。東壁側に２基で、さらに西壁側にも存在していたと思われるが、攪乱坑で消滅している。一辺50cm程の掘り方で、径18cmの柱痕が認められる。柱間は2.34ｍで、並びは東壁とほぼ並行し、1.45ｍ内側に設けられる。北壁からは 1.5ｍ、南壁から1.15ｍの距離にある。カマドは、竪穴の南東コーナーより北１ｍ程のところで、東壁に対して約40度の角度に作り付けられる。煙り出しはカマドの奥部から、東壁に対して約30度の角度で設けられている。煙り出しは竪穴のコーナーには達っせず、30cm程手前で竪穴外へ出るが、ほぼ竪穴壁面で終る。カマドの底面より５cm程下り、ほぼ水平で、竪穴壁面でオーバーハングして立ち上る。なお、壁溝はカマドの部分には及ばない。

ＦＴ13（図36）　ＦＴ14に切られ、ＦＴ12を切る。規模は不明だが、南北長6.57ｍ以上を計る。東側大半が調査地域外へ出る。西辺はＮ８°30′Ｅの方向にある。

ＦＴ14（図36）　ＦＴ13を切る。東側大半が調査地域外に出る。南北長7.16ｍで、西辺はＮ９°Ｅの方向にある。北側５ｍ程の間は、最深70cmの深い坑が出来ている。性格は不明である。

ＦＴ15（図37）　ＦＴ11及びＦＴ16を切る住居跡。西側の大半が調査地域外に出る。南北長6.75ｍで東辺はＮ13°30′Ｅの方向にある。焼土のたまる坑が南東コーナー附近と東壁に接っして、北辺より2.2ｍ南側とにある。また、その間に焼土や炭化物の堆積した径60～76cm、深さ22cmの土坑があった。

ＦＴ16（図38）　ＦＴ15に切られる。南北長6.06ｍ、東西長4.75ｍ～4.93ｍ。Ｎ20°30′Ｅの方向にある。北西部に、東西長 3.5ｍ、南北長1.8ｍ～2.9ｍ、高さ10cm程の地山の掘り残しがあるが、その外側の低所部分には、掘り残しの高さと同じ厚さに、版築状の盛土が見られた。地山の掘り残しと版築状の盛土を切って、壁溝が四周している。幅30cm、深さ6cm～11cmで、カマドの部分には及ばない。主柱穴は認められなかったが、竪穴肩部に並ぶ支柱穴列があった。これは、各コーナーに一基、各辺に３基ずつを配するもので、柱は肩部から壁溝に及び、柱痕はちょうど肩部にある。柱は径10cm～15cm程度で、北辺は 1.2ｍ× 1.2ｍ× 1.2ｍ× 1.2ｍ、東辺は 1.4ｍ× 1.4ｍ× 1.2ｍ× 1.4ｍ、西辺は 1.5ｍ× 1.3ｍ× 1.2ｍ×？となっている。コーナー部分の柱が10cm程内側に入る。カマドは竪穴の南東コーナー部対角線方向に作り付けられている。煙り出しの施設は認められない。

ＦＴ17（図39）　西側の大半が調査地域外に出る。南北長3.45ｍ～3.57ｍで、Ｎ１°30′Ｅの方向にある。カマドは遺存していないが、東壁に接っし、南壁から北へ74cm程の所に、径60cm程の焼土が認められた。また、北壁に、幅13cm～20cm、深さ２cm～４cm程の溝状の窪みがある。

ＦＴ18　欠番

ＦＴ19（図40）　ＦＴ20により切られている。東西長5.56ｍ～ 5.7ｍ、南北3.46ｍと長大である。Ｎ18°30′Ｅの方向にある。東壁に直交する瓢形のピットがあり、焼土があった。南辺から1.46ｍの位置で、長さ88cm、幅30cm～54cmで、深さは４cm～８cm、東壁面でほぼ垂直に立ち上る。

ＦＴ20（図40）　ＦＴ19を切る。西辺部分が調査地域外、北壁が旧河道により一部を残し消滅している。また、東壁に溝が入り込んでいる。カマドの位置は不明。南北長は 3.3ｍを計る。Ｎ３°30′Ｅの方向にある。

ＦＴ21（図34）　溝と調査地域外にかかるため、北西部のみ検出した。Ｎ１°30′Ｅの方向にあり、幅30cm～38cmの壁溝がめぐる。

ＦＴ22　北東部のみ調査し得た。Ｎ５°30′Ｅの方向にある。

ＦＴ23　ＦＴ９及びＦＴ10を切る。重複がはげしく、正確なプランを検出し得なかったが、およそ

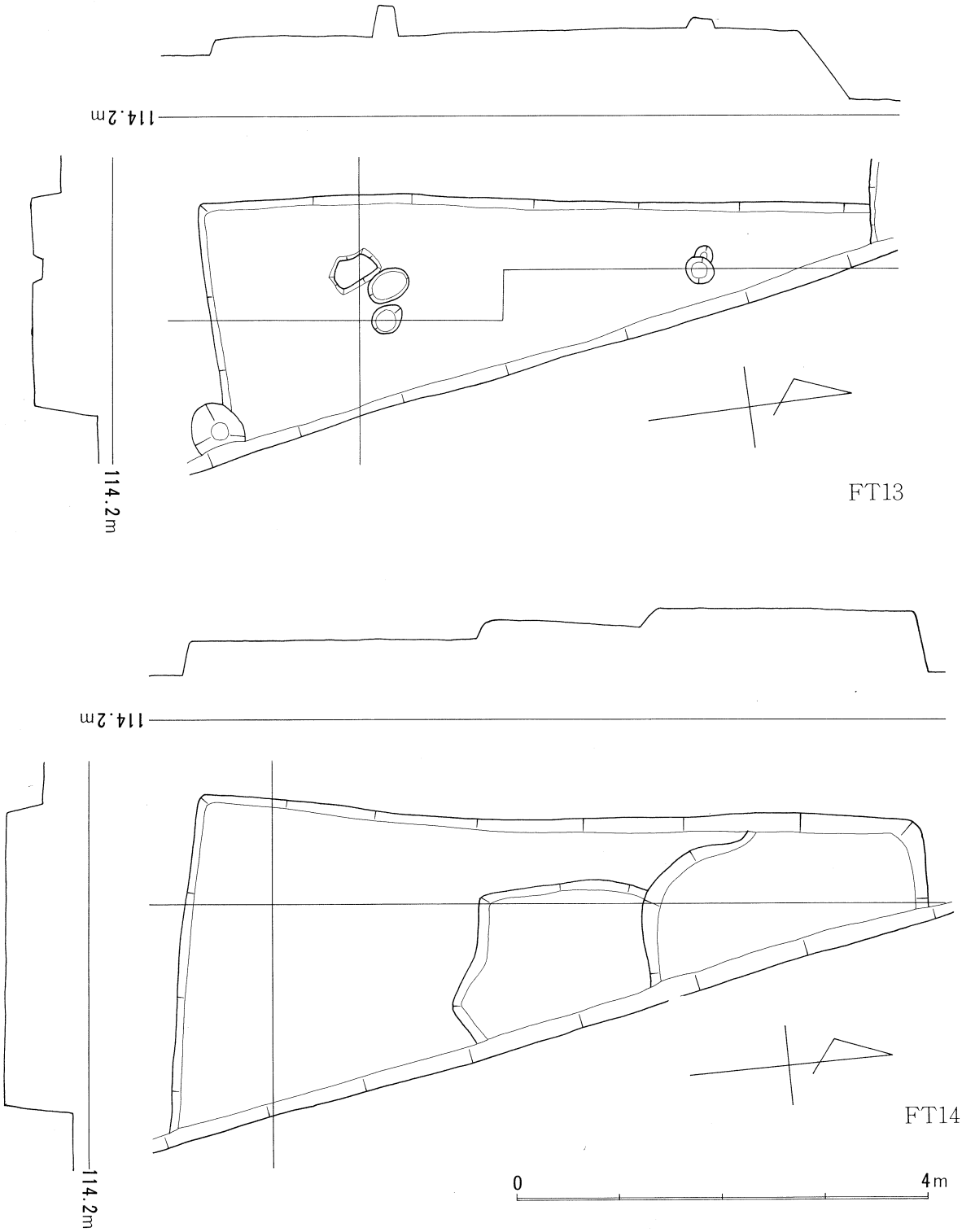


図36．ＦＴ13．14実測図

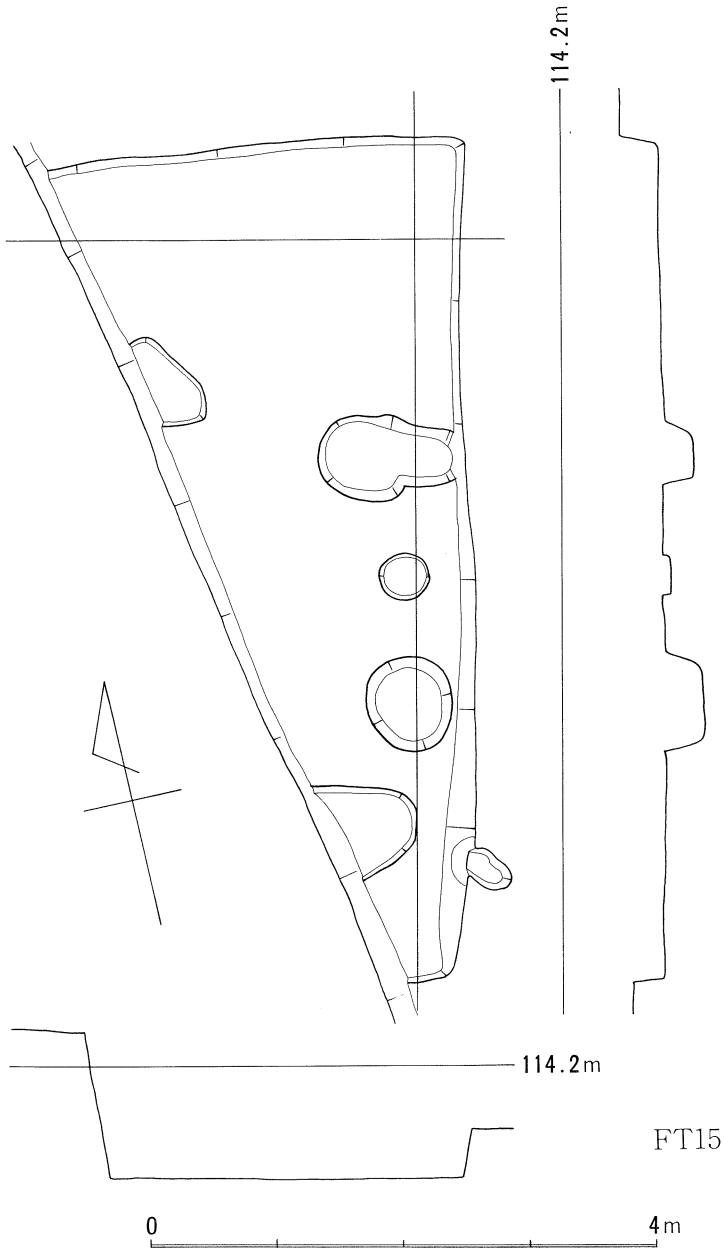


図37. ＦＴ15実測図

一辺 3.6mの方形のプランで、N 24° 30′ W の方向にある。カマドは南辺の中央よりやや東寄りに、壁面に対して垂直に付く。カマドはその床面を５cm程窪ませ、奥部で約70度の角度で立ち上る。多数の平瓦、丸瓦が散在していたが、いずれもカマド床面に堆積した炭・灰・焼土等の上面にあり、また、焚口附近に、別に堆積した焼土層にくい込んで出土しているものがあり、焚口天井部及び焚口入口両側を構築するために用いられていたものと考えられる。

以上が才３住居跡群の中の竪穴式住居跡でＦＴ１の住居跡か否かのものを含めて計21棟を検出している。カマドの位置や形態の知れるものは８棟である。分類すれば、壁面の中央で、壁面に垂直に作り付けられ、煙り出しを持たないＡ－２型にＦＴ19、カマドが斜めに付き、竪穴内に煙道を持って、竪穴コーナーまでに竪穴外へ出るＢ－３型にＦＴ12、煙り出しを持たないカマドが竪穴のコーナーに付くＣ型

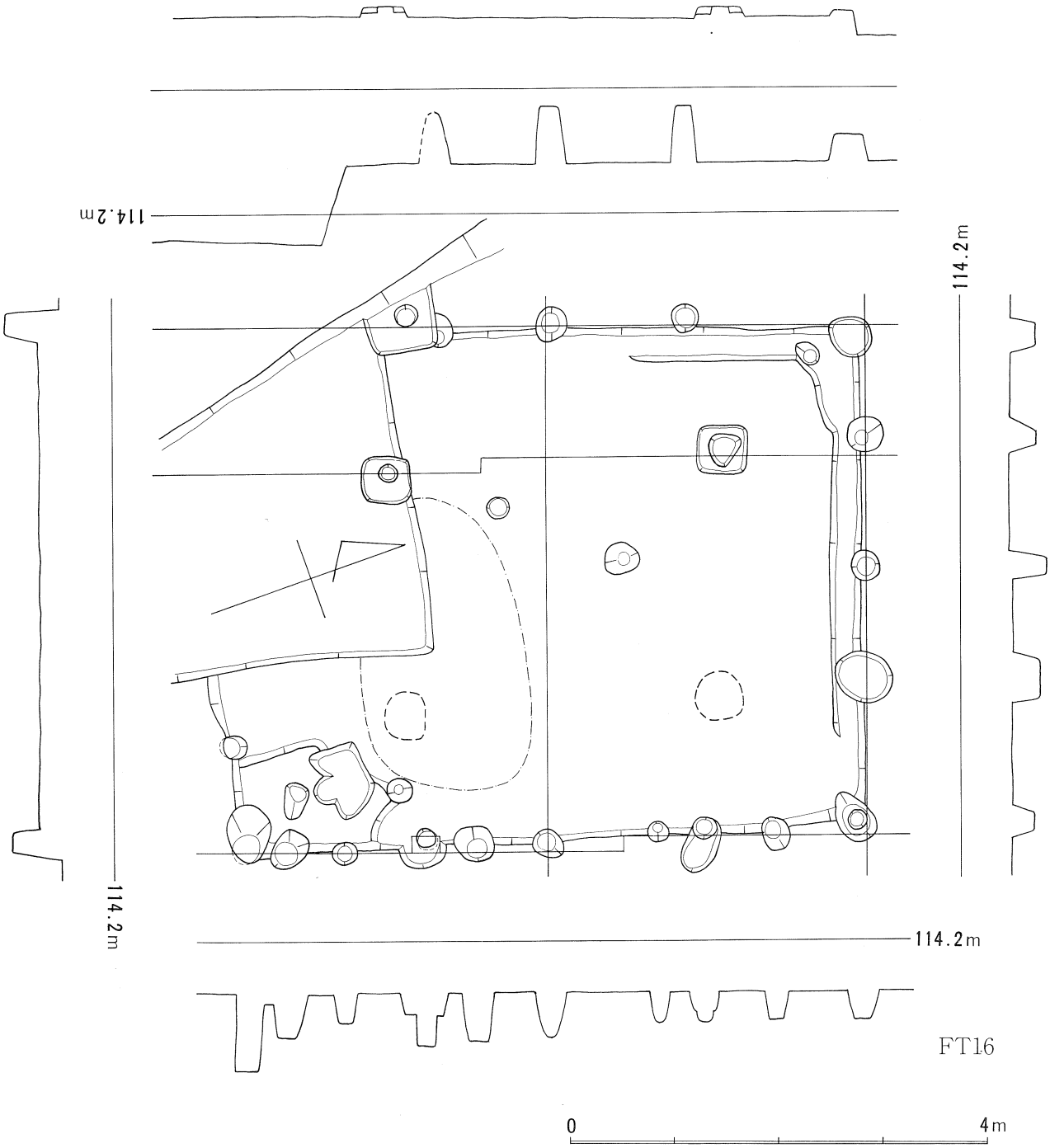


図38．ＣＴ16実測図

にＦＴ10・11・13、竪穴のコーナー附近にカマドが付き、急勾配の煙り出しの付くＤ－１型にＦＴ５、Ｄ－１型と同様であるが、煙り出しの勾配が水平に近いＤ－２型にＦＴ８、竪穴のコーナーで、対角線方向に付くＥ型にＦＴ16がある。これらの中で、ＦＴ11に石製支脚が残り、焚口に石材が使用されている。ＦＴ23では焚口に瓦が利用され、ＦＴ10ではカマドの壁体に竪穴の掘り残しを利用する等の工夫等が見られる。建物の構造に関しては、ＦＴ12に４本の主柱穴がある。ＦＴ12を含めＦＴ７、ＦＴ16、ＦＴ21、ＦＴ７等に四周する壁溝が認められる。このうちＦＴ16では、竪穴の各コーナーと各辺に３基の

支柱穴があり、ＦＴ12には杭列状のピットが認められている。杭列状のピットについては、ＦＴ６で、壁溝は認められないものの、竪穴壁面下端にピット列があった。規模の知れるものは、ＦＴ１（13.2m²）、ＦＴ８（5.6m²）、ＦＴ12（23.9m²）、ＦＴ19（19.3m²）、ＦＴ23（13m²）のわずか５棟であるが、ＦＴ13・14・15は一辺が6.57ｍ～7.16ｍの大規模なものとなっている。規模の知れるものでは、５m²前後、13m²前後、20m²前後、に大別できる。５m²前後と思われるものは一辺が２ｍ代のＦＴ８・10、13m²前後は一辺４ｍ代のＦＴ１・６、３ｍ代のＦＴ５・17・20・23、20m²前後は一辺５ｍ代のＦＴ２・７・12・19等が考えられる。さらに、20m²前後をさらにうわまわると考えられるものに、一辺７ｍ前後のＦＴ13・14・15及び29.3m²のＦＴ16をあげることができる。およそ20m²前後の大規模なものに、ＦＴ７・12・16のように四周する壁溝や主支柱穴を持つものが多く、13m²前後以下の小規模なものにはそれらは認められない。カマドの構造の知れるものでは、Ｃ型、Ｄ－１及びＤ－２型には13m²以下の小規模なもののみ、Ａ－２型、Ｅ型に20m²前後以上の大規模なものが占める。なお、カマドの位置について、ＦＴ11が竪穴の北辺、ＦＴ８が西辺に付く以外、他はしり得るものすべて東辺から南東コーナーに付く。また、建物の方位は、ＦＴ７・８・23がやや大きく磁北より西へふるが、他は、磁北を前後するか、東へ振る。

ニ）才４住居跡群竪穴式住居跡

ＦＴ24（図41）　東辺部分が調査地域外に出る。西辺はＮ11°Ｗの方向にあり、南北長7.12ｍ～7.64ｍを計る。幅22cm～40cmの壁溝がめぐる。深さは北辺で７cm、西辺で９cm～10cm、南辺で１cmと西側がやや深かくなる。柱は、竪穴内に４基配されている。柱痕の見られるものは径18～20cmで、柱間は北で3.2ｍ、東で3.62ｍ、南で3.38ｍ、東で3.66ｍを計る。北側及び西側がＮ８°30′Ｗ、南側がＮ８°Ｗ、東側がＮ12°Ｗで、ほぼ竪穴の壁面に並行している。柱はさらに、竪穴の肩部及び壁溝内の２列の柱列がある。南側は不明だが、東辺では、肩部と壁溝内のものとが約16cm程の間隔で内外に並ぶ。外側では、竪穴コーナーの２基を含めて、９基が、北より、70cm×78cm×36cm×75cm×126cm×96cm×116cm×116cmの柱間を以って並ぶ。内側のものは５基で、70cm×190cm×126cm×134cmの柱間を持つ。内外の関係は、外側の２・５・７の各本目に、掘り方を共有する。北側では、外側で５基、内側で４基まで確認している。内外柱列の間隔は20cm程である。柱間は外側で、西より、160cm×68cm×196cm×54cm、内側で106cm×80cm×130cmを計る。北・西両辺の柱列はほぼ並行し、柱痕の知られるものでは径10cm程を計り、主柱穴の２分の１程の太さである。カマドは北壁の多分ほぼ中央に設けられている。壁溝を切り込んでおり、長さ1.56ｍの焼土の堆積した窪みが認められるが、カマド本体は長さ1.12ｍで、竪穴床面より27cmの窪みを作っている。最大幅は1.4ｍである。カマドの奥部は竪穴の壁体に当り、ほぼ垂直に立ち上る。カマドは竪穴壁面に対して垂直方向にあるが、煙り出し等の施設は認められない。

ＧＴ14（図48）　ＧＴ13に切られる。北西コーナー部分が知れるのみで、規模等については明確でない。西辺はＮ30°Ｗの方向にある。

ＧＴ13（図48）　ＧＴ14を切り、ＧＴ11・12に切られる。北西部及び東辺部が不明、カマドの位置も確認できない。Ｎ23°Ｗの方向を向く。

ＧＴ12（図47）　北辺3.62ｍ、南辺4.12ｍ、西辺3.88ｍ、東辺4.1ｍで、カマドの付く南辺はＮ13°30′Ｗの方向にある。カマドは南東コーナーで、南壁に対して約63度とやや斜めにつく。カマド壁体が良く残る。西側で長さ62cm、幅20cm、東側で長さ98cm、幅20cmまで、高さは西側で18cm、東側で23cmまで遺存している。壁体の下端幅は、奥部で28cm、焚口側で48cmを計る。竪穴の南壁から約60cm程の所に、径48cm、深さ６cmのピットが認められるが、他の例からして石製支脚の裾えおかれた位置と考えられる。

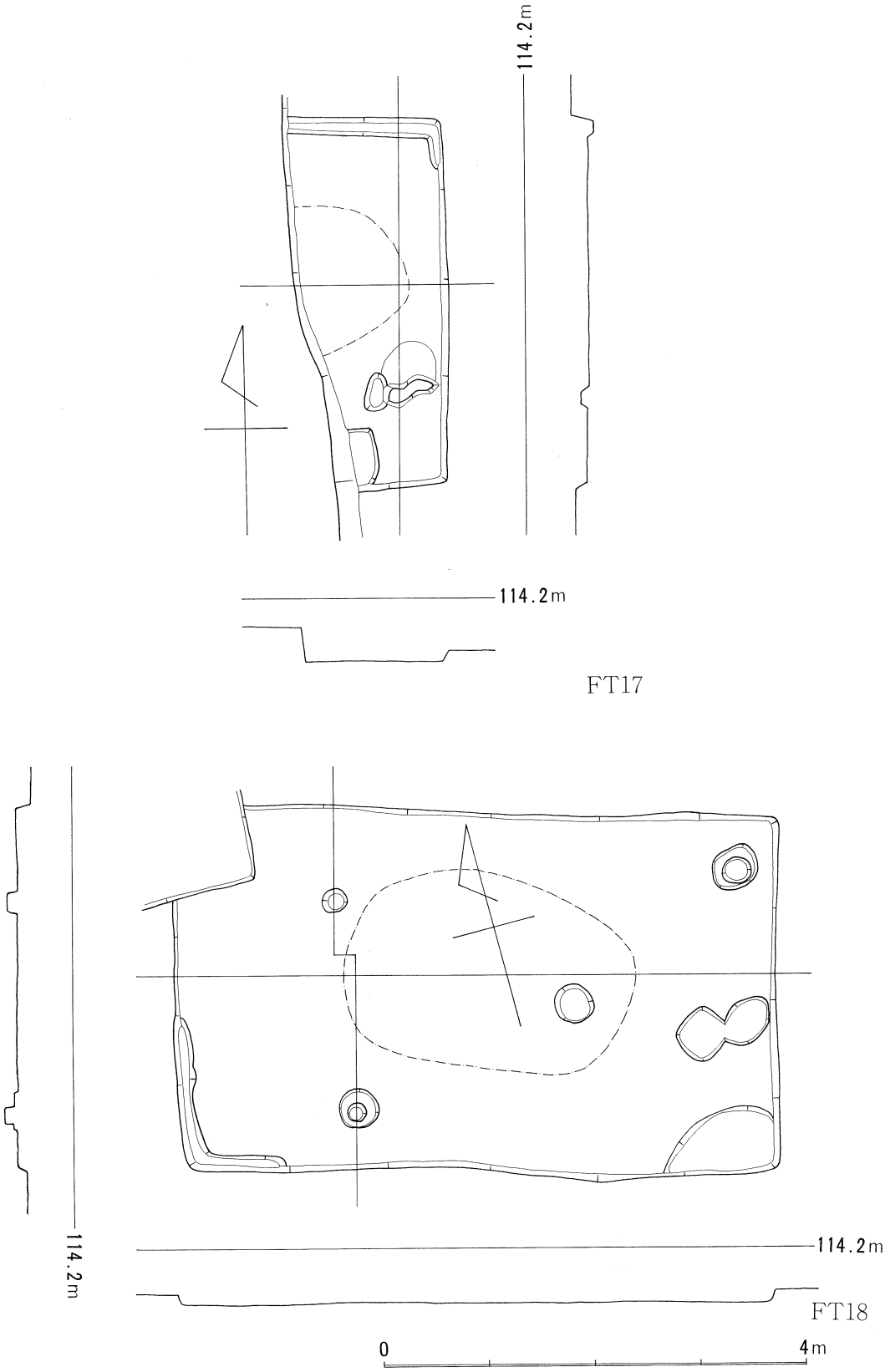


図39．ＦＴ17．18実測図

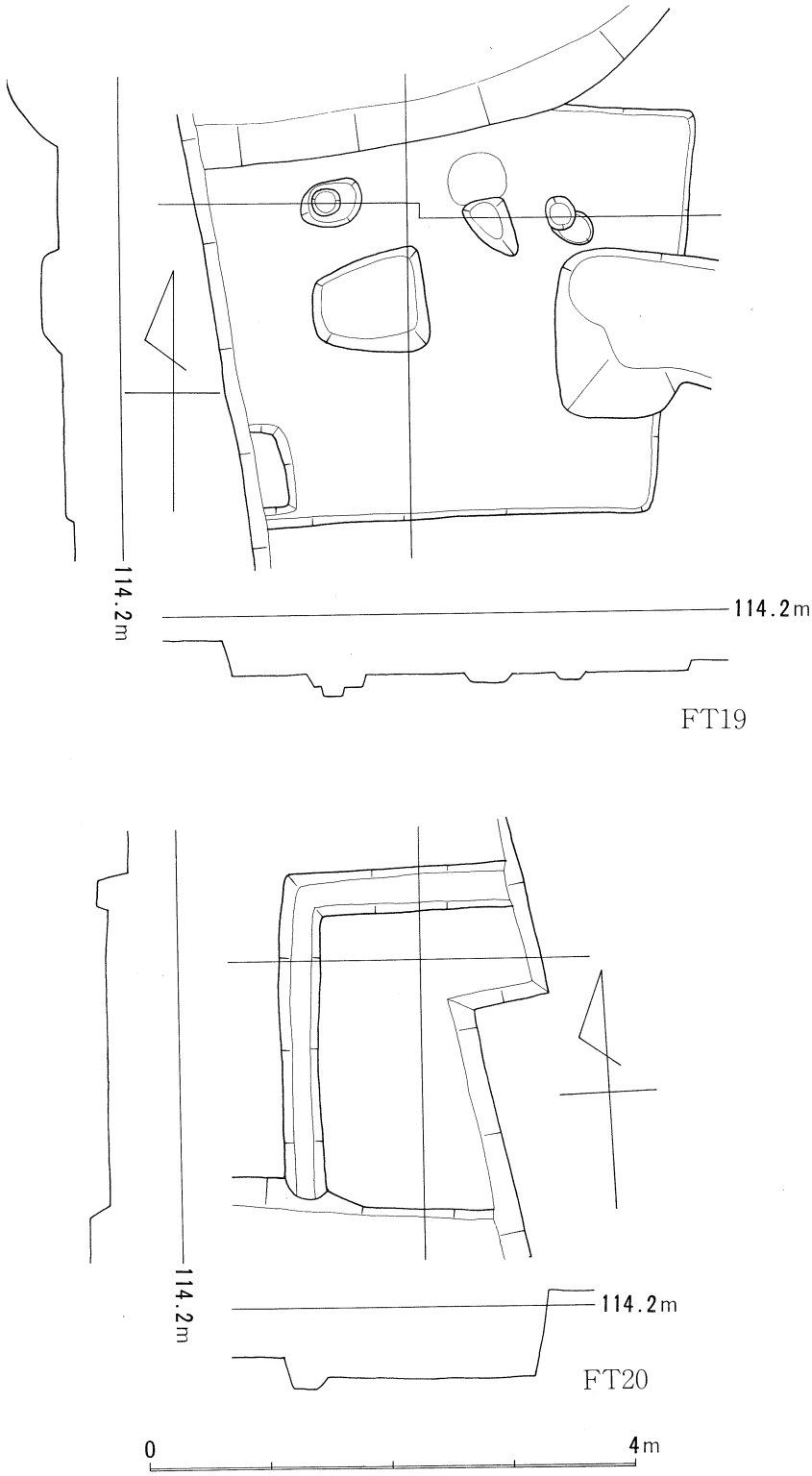


図40．ＦＴ19．20実測図

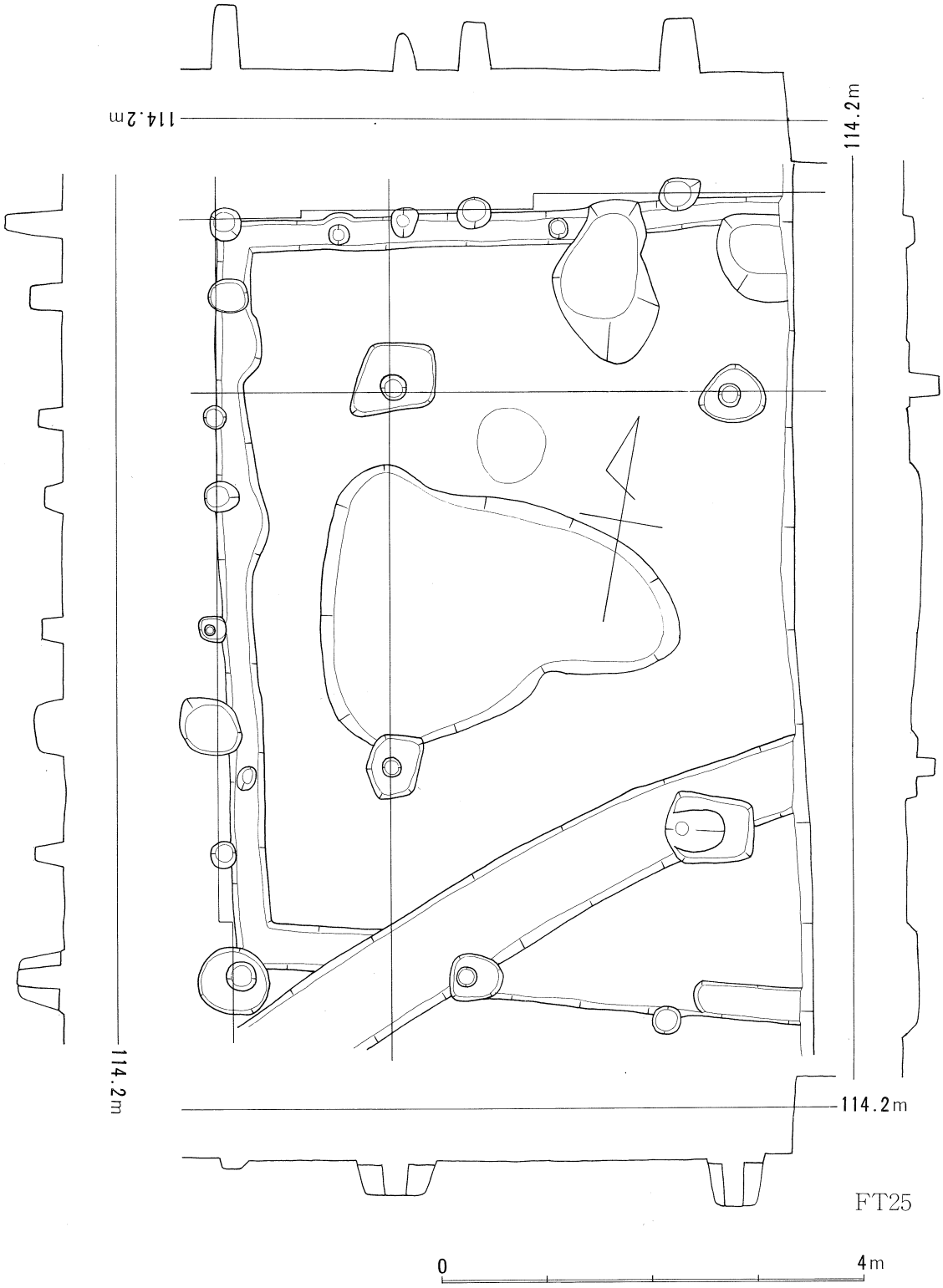


図41．ＦＴ25実測図

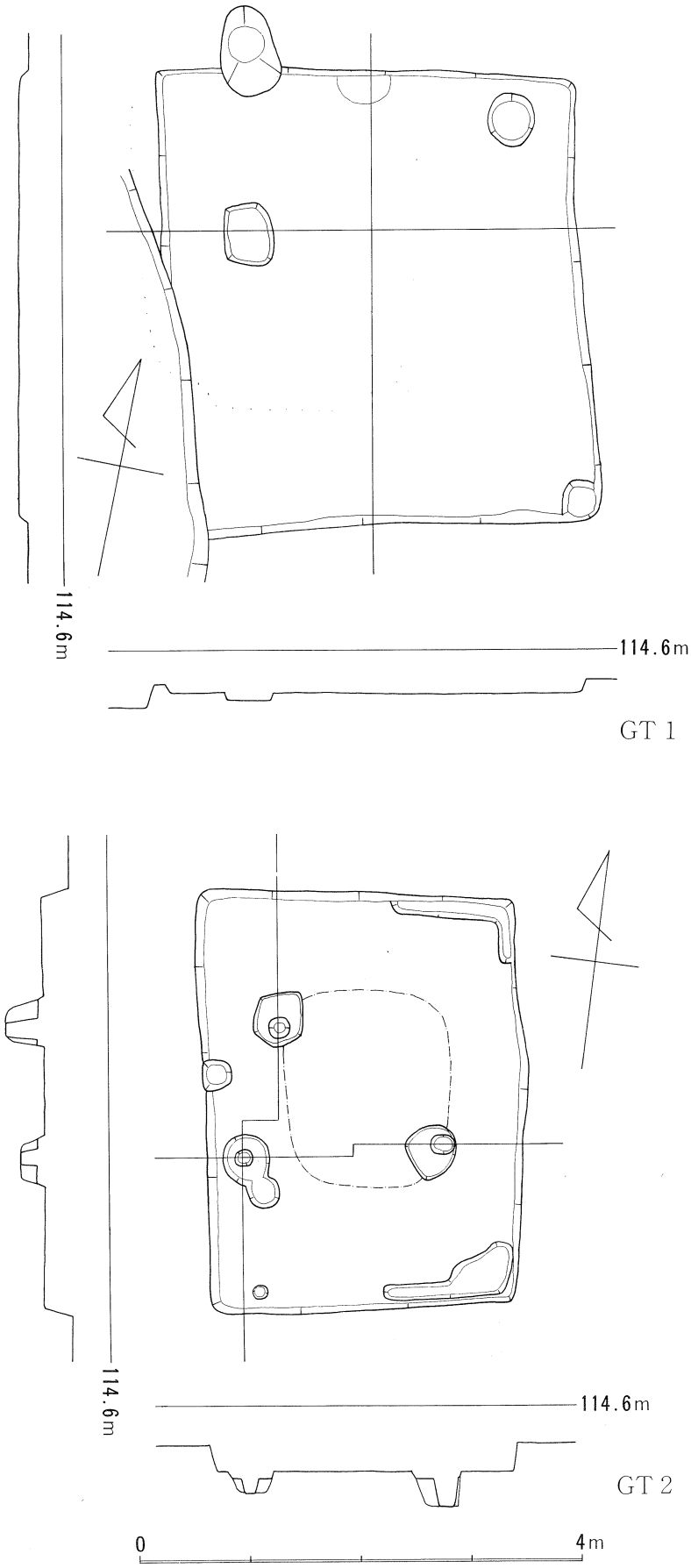
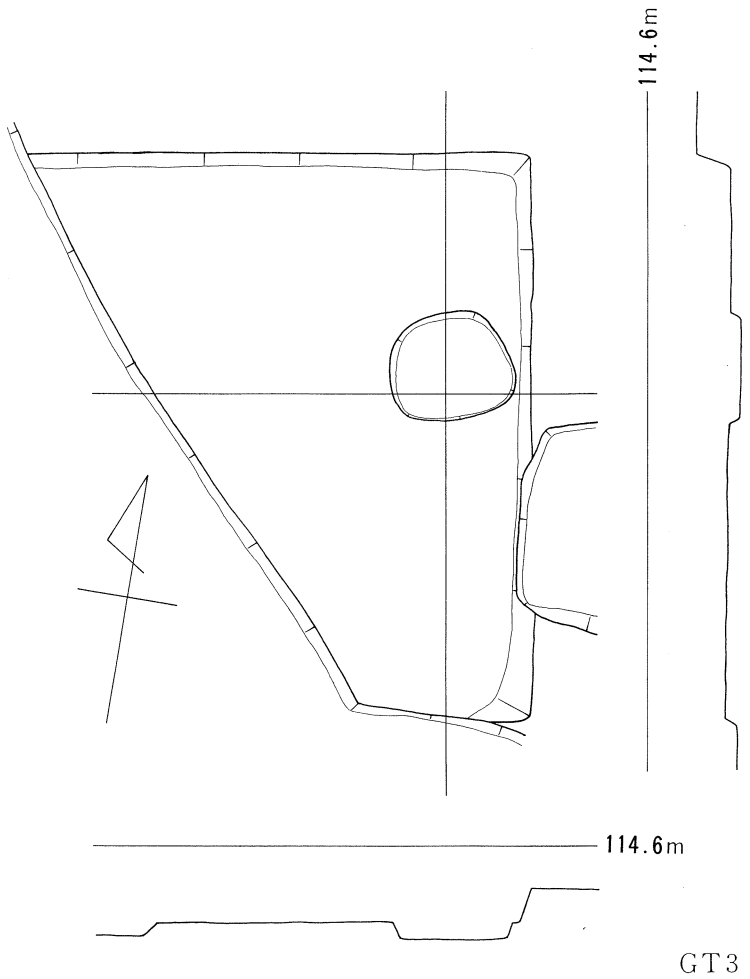


図42. ＧＴ１．２実測図



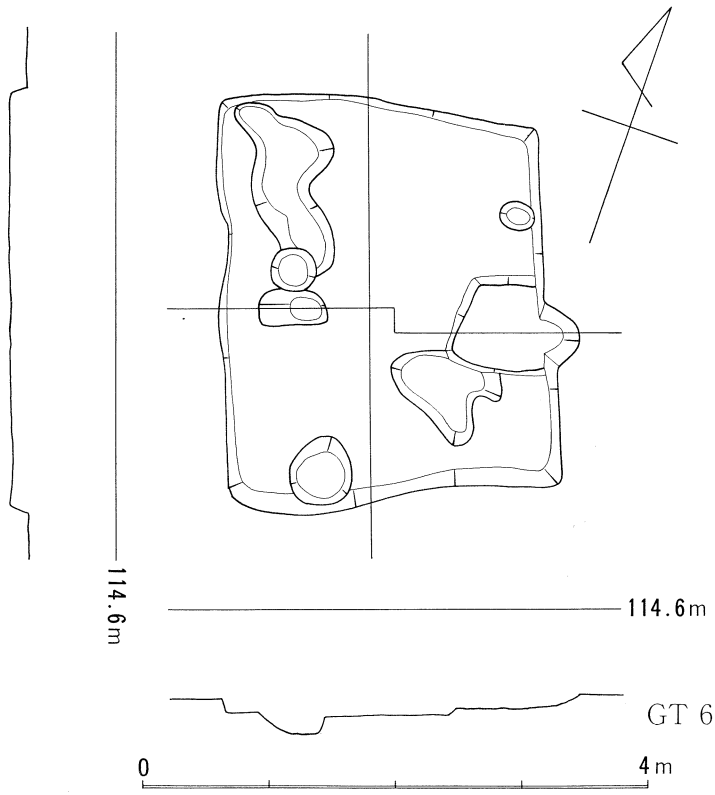


図43. ＧＴ３．６実測図

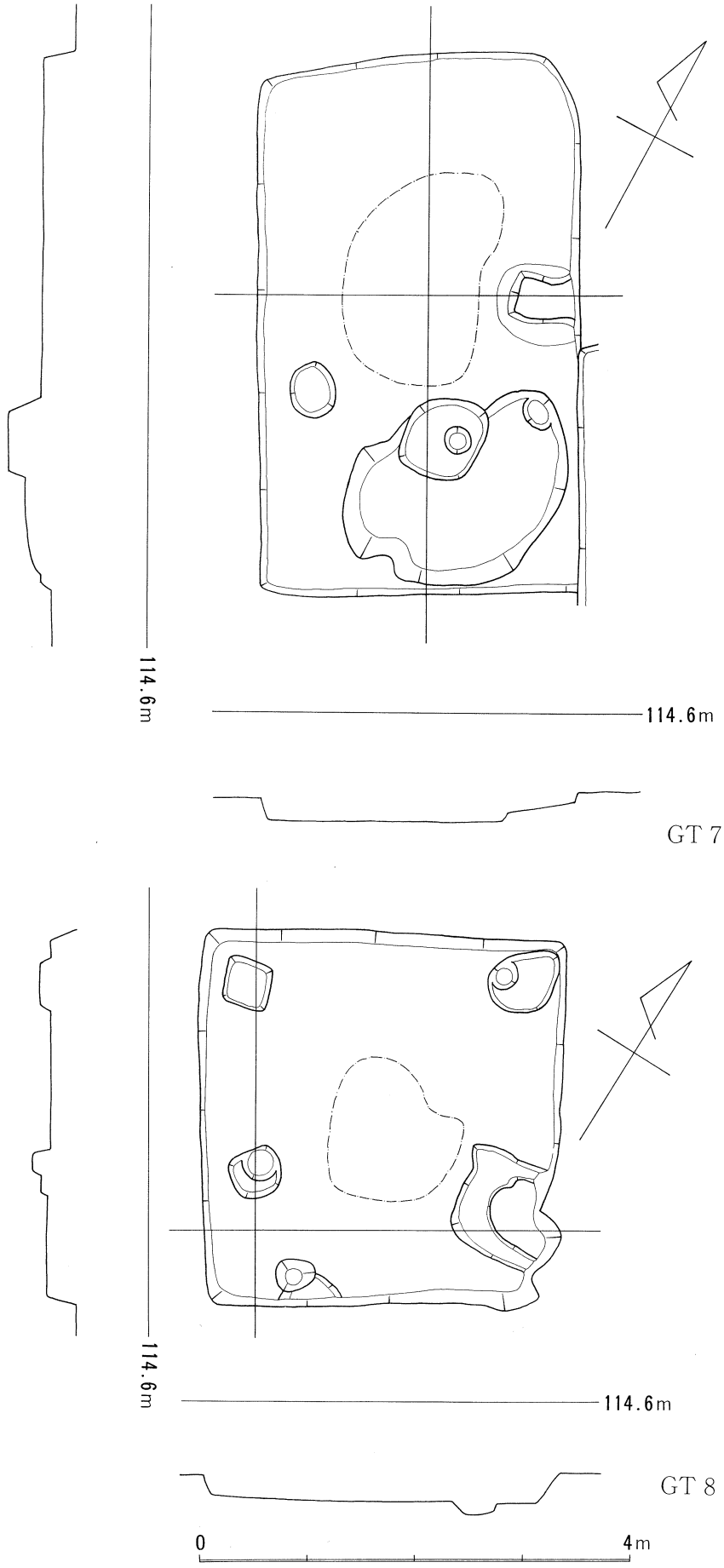


図44. ＧＴ７．８実測図

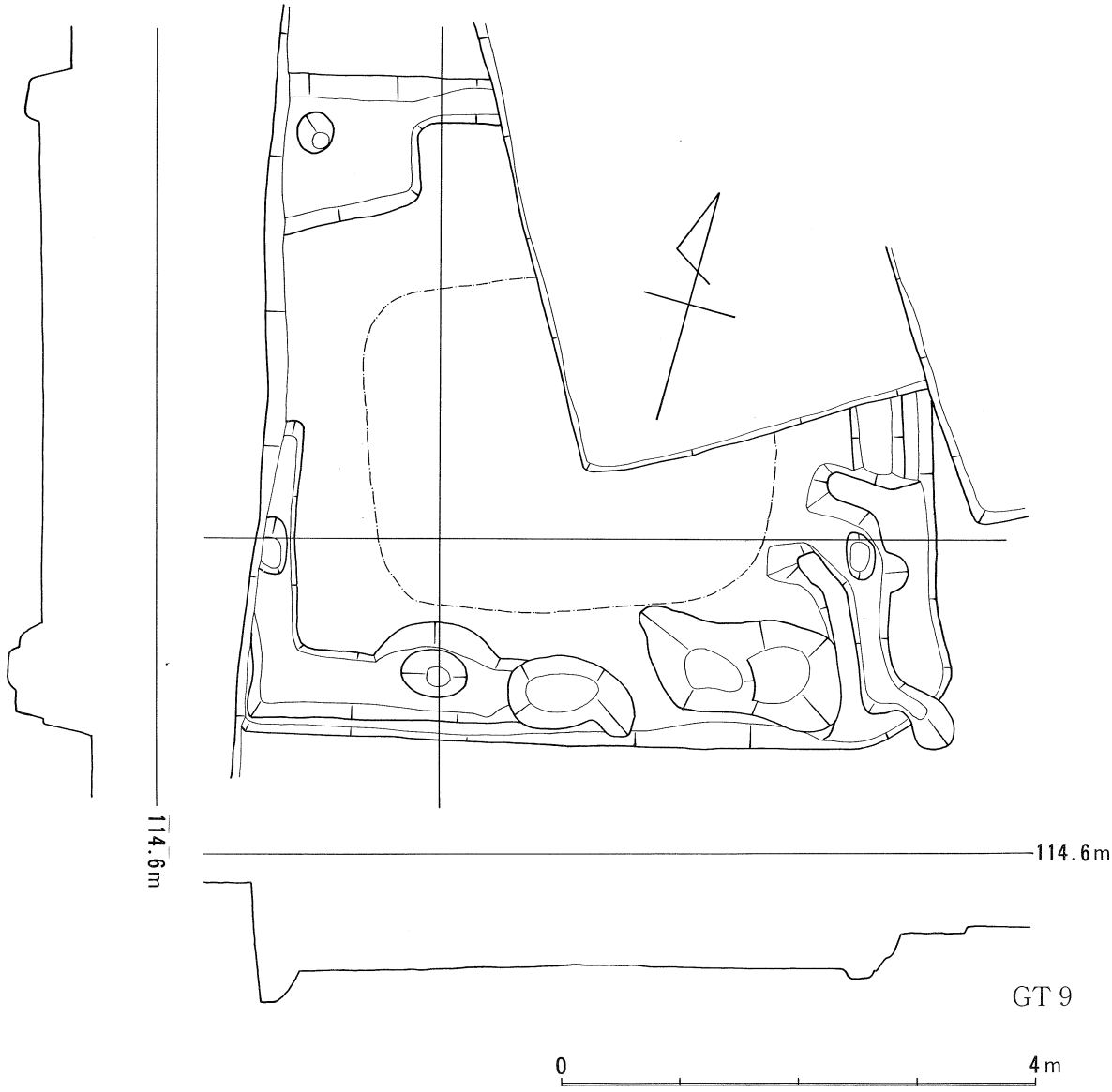


図45. ＧＴ９実測図

カマド底部の窪みは南壁から11cmまでに及び、カマド奥部は南壁より出ず、約45度の勾配で立ち上る。

ＧＴ11（図47）　ＧＴ12に切られ、ＧＴ13を切る。東辺部が調査地域外に出る。南北長5.88ｍで、北辺はＮ７°Ｗの方向にある。カマドの位置等は不明。

ＧＴ10（図46）　東辺部が調査地域外に出る。南北長 5.7ｍで、およそＮ27° 30′ Ｗの方向にある。南辺に被掘坑があり、この坑に半分を破壊されているが、土器の溜る窪みがある。あるいはカマドの位置かと思われる。

ＧＴ９（図45）　ＧＴ７に切られる。西辺部は調査地域外にある。南北長は5.44ｍで、南北両辺が並行していて、Ｎ12° 30′ Ｗの方向にある。カマドは、竪穴の南東コーナーより北側１ｍ程の所で、東壁に対して約40度の角度で取り付く。カマドの壁体の一部が長さ28cmまで残る。壁体の下端幅は奥部で28cm、焚口側で40cmである。煙り出しは、カマドの奥部から、カマドの中軸線に対して 133度の角度で、竪穴の南東コーナーに向けて、長さ 104cmまでのびる。東壁にはそわず、やや斜めに横切る。カマド底部と煙り出し底部とのレベルにはほとんど差がなく水平であり、煙り出しの端部ではほぼ垂直に立ち上

る。またその端部はわずかに竪穴外へ出る。壁溝等は認められないが、壁体に沿った窪みがみられる。深さ50cm～68cmの深みをもつ凸部が数ヵ所にあり、凹凸があるとともに幅も一定していない。

ＧＴ８（図44）　南北3.42ｍ～3.48ｍ、東西３ｍ～ 3.4ｍでＮ29° 36Ｗの方向にある。カマドは東壁に対して60度程の角度をもって斜めに作り付けられている。カマドの北側壁体の一部、焚口の石材等が遺存している。カマド壁体の基部は竪穴の掘り残しがみられ、この部分のみ壁面が窪む。カマドの奥部は逆にわずかに出張る。カマドの幅は64cm、長さは 102cm以内で、奥部は急勾配で立ち上る。なお、カマドは南東コーナーより40cm程北側に位置する。

ＧＴ７（図44）　ＧＴ９・５・６を切りＧＴ８に切られる。南北長5.04ｍ、東西長３ｍと長方形プランを持つ。東西両辺はＮ29° Ｗの方向にある。壁溝や柱痕は認められない。カマドの位置は明確でないが、東壁に接っして、北辺より 2.2ｍの位置に、長さ64cm、幅45cm程の高まりが認められ、その北側で土器が出土していて、カマドの位置かと思われる。

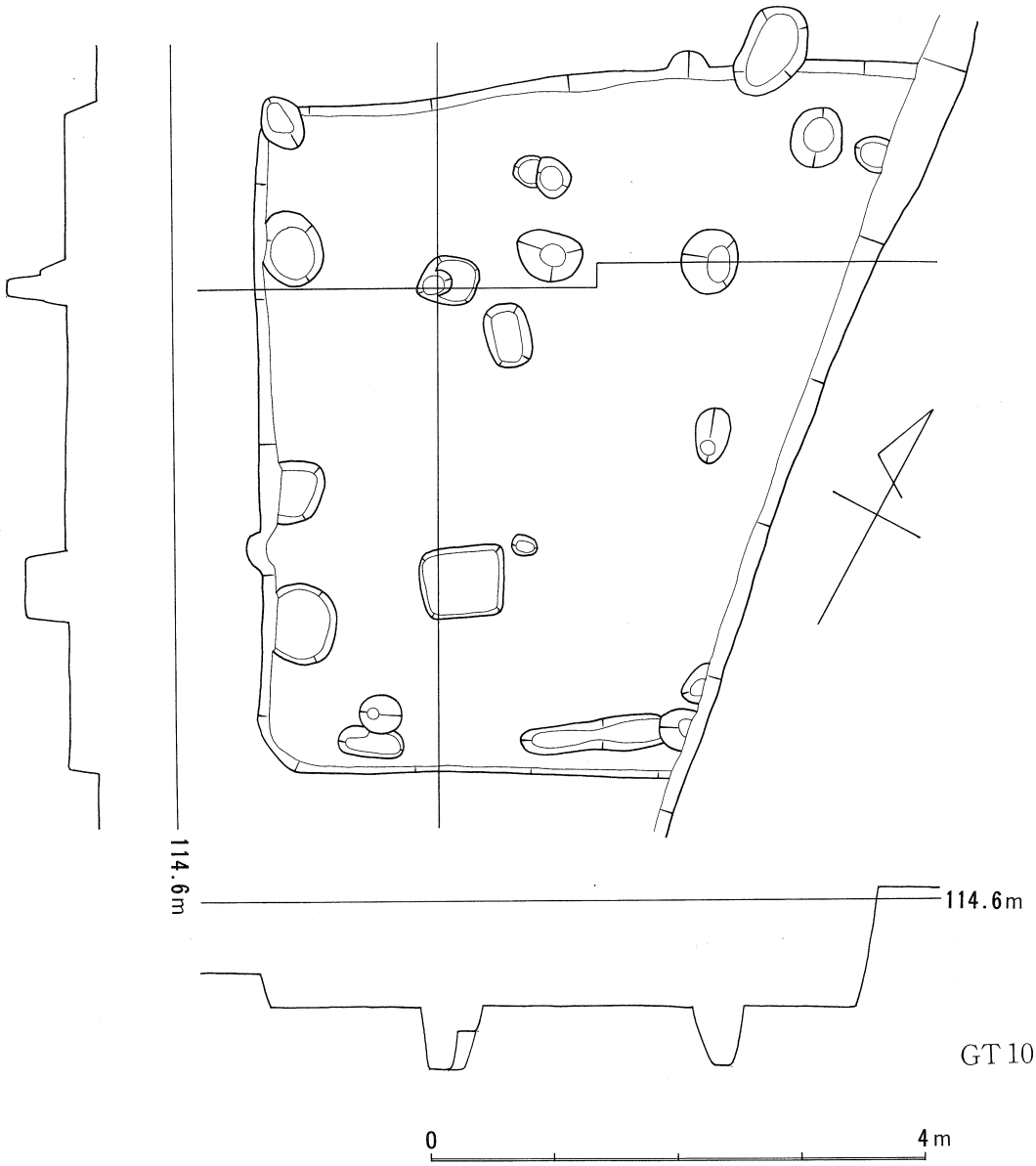


図46．ＧＴ10実測図

ＧＴ６（図43）　ＧＴ５・７に切られる。東西長3.4m、南北長3.1ｍでＮ19°30′Ｗの方向にある。カマドは竪穴の南東コーナーに、竪穴の対角線の方向に向いて作り付けられている。

ＧＴ５　ＧＴ４・７に切られ、ＧＴ６を切っている。カマドの位置は不明、壁溝や柱穴等は認められない。南北長3.1ｍで、Ｎ31°Ｅの方向にある。

ＧＴ４（図48）　ＧＴ５を切る。西半分は調査地域外になる。南北長4.68ｍで、東辺はＮ28°Ｗの方向にある。南東コーナー部が不整形に窪む。カマドの位置と考えられ、対角線方向に作り付けられていたようである。

以上の12棟が才４住居跡群の竪穴式住居跡である。カマドの形態の知れるものは５棟で、ＦＴ24がＡ－１型、ＧＴ８とＧＴ12がＣ型、ＧＴ９がＢ－３型、ＧＴ６がＥ型である。ＧＴ10・７・４については不明な点が多く、きめがたい。ＧＴ12には石製支脚の抜き跡と思われるピットを検出している。建物の構造に関しては、ＦＴ24に壁溝が認められ、竪穴肩部と壁溝内の２列の杭状品のピット列と４本の主柱穴を検出している。また、ＧＴ９には、凹凸があり、不整形な窪みが壁体に沿って四周するのが見られた。規模に関しては全容の知れるものが少なく、ＧＴ12の15.4m²、ＧＴ８の11m²、ＧＴ７の15.1m²、ＧＴ６の10.5m²の４棟が知れるのみである。一辺の規模からすれば、７ｍ代のＦＴ24、５ｍ代のＧＴ11・10・９、４ｍ代のＧＴ４、３ｍ代のＧＴ12・８・７・６・５の４種類に分けることができる。住居跡相互の切り合い関係からは、ＧＴ14→13→11→12、ＧＴ９→７→８、ＧＴ６→5→７→８、ＧＴ６→5→４の関係がある。カマドのＢ－３型やＥ型がＣ型より古い段階のものに見られることが知れる。住居跡の方位に関しては、ＧＴ５がＮ31°Ｅと大きく東へふれる以外、他はすべてＮ11°～30°Ｗと大きく西方へふれる。

ホ）才５住居跡群竪穴式住居跡

ＧＴ３（図43）　西側半分が旧河道により消滅している。南北長4.78ｍを計り、Ｎ９°30′Ｗの方向にある。南東コーナー部分に、20cm程の張り出しがある。この張り出しはほぼ東壁に対し直交する方向にあり、その先端は約35度の勾配を持つ、土師器甕等が出土しており、カマドの位置を示すものと考えられる。

ＧＴ２（図42）　南北長3.66ｍ～3.86ｍ、東西長 2.8ｍ～ 2.9ｍ。Ｎ９°30′Ｗの方向にある。北東コーナー部分に、幅14cm～20cm、深さ1cm～5cmの浅い溝状の窪みがある。南東コーナー部分には東西長 120cmにわたる窪みがあり、その北側で土師器甕が出土しており、南東コーナー部分にカマドのあった可能性が強い。

ＧＴ１（図42）　南西コーナー部分が旧河道に切られている。南北長4.03ｍ～4.26ｍ、東西長 3.8ｍである。Ｎ14°30′Ｗの方向にある。南東コーナーに、径36cm、深さ14cmのピットが見られる。カマドの位置かと考えられる。

以上３棟が才５住居跡群の竪穴式住居跡である。ＧＴ３・２がＣ型、ＧＴ１がＥ型のカマドを持つ可能性が強い。規模は、ＧＴ２が10.7m²、ＧＴ１が15.7m²で、ＧＴ３はＧＴ１よりやや大きい。ＧＴ３・２は同じカマド形態と思われるとともに、Ｎ９°30′Ｗとほぼ同じ向きにある。ＧＴ１はさらに大きく西へふっている。

へ）才６住居跡群竪穴式住居跡

ＨＴ１（図49）　東辺部分が調査地域外へ出る。西辺はＮ.２°Ｅの方向にあり、南北長4.27ｍ～ 4.９ｍを計る。カマドは北西コーナーにある。形態は不明瞭である。

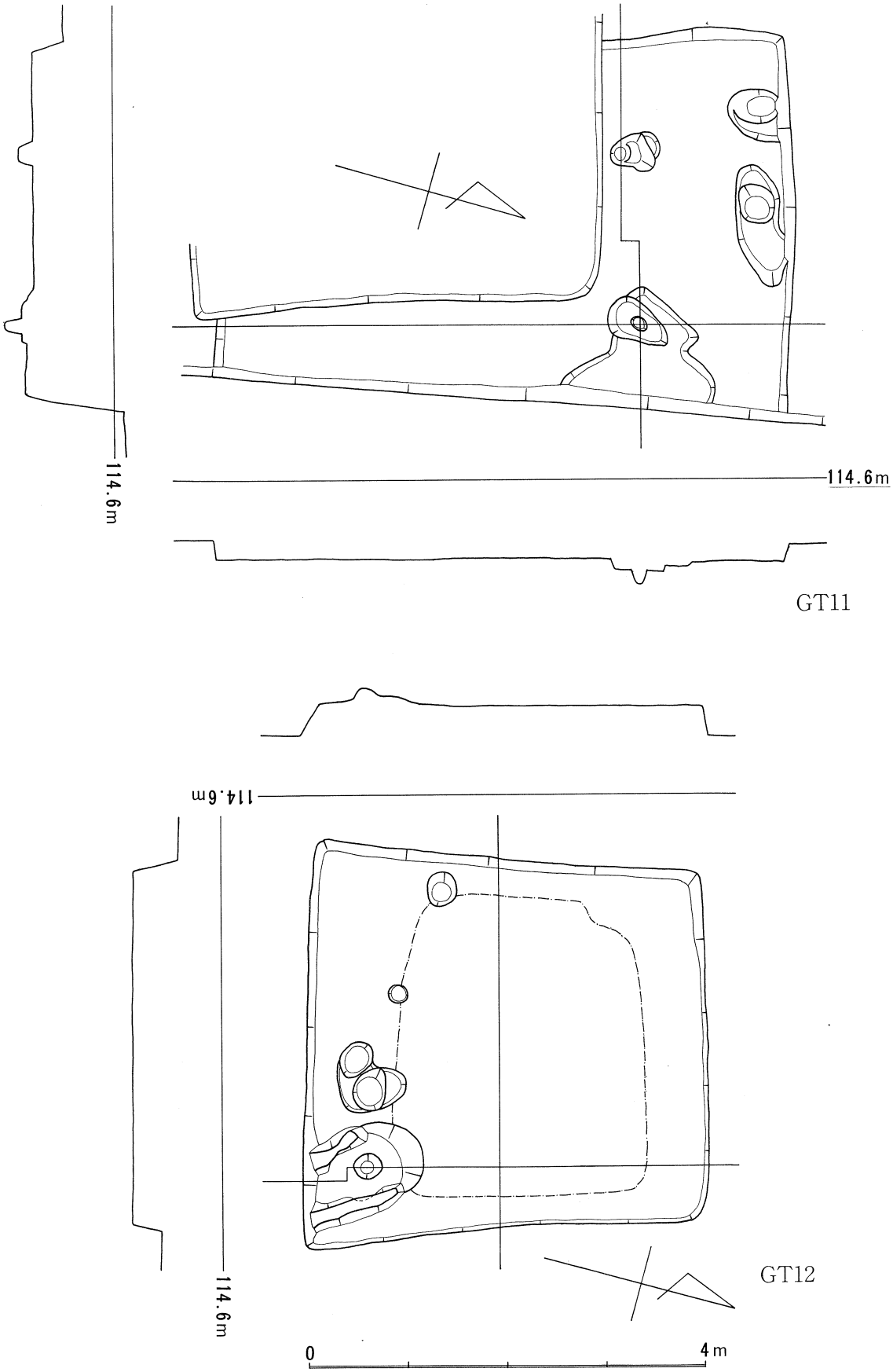


図47．ＧＴ11．12実測図

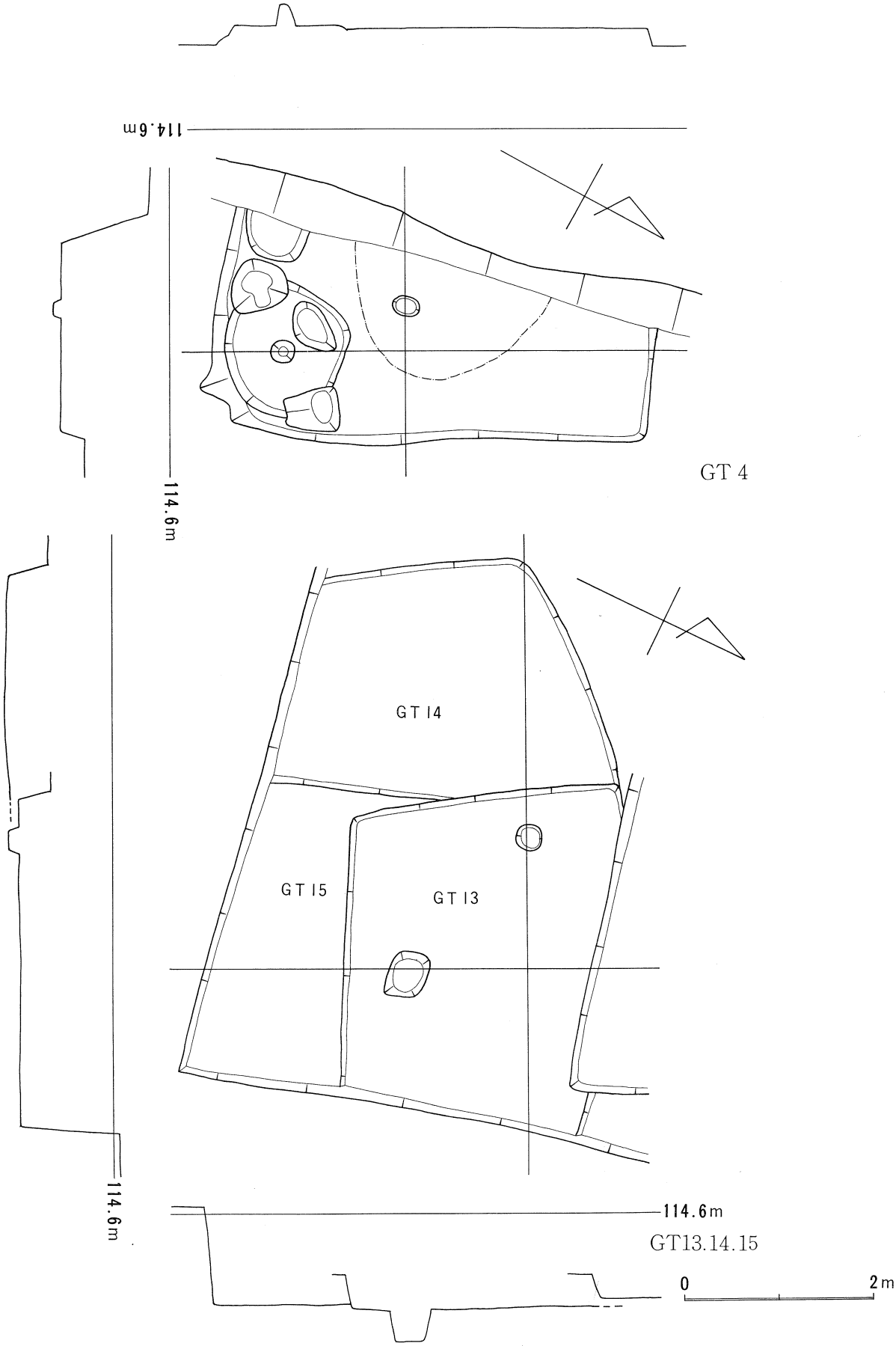


図48. ＧＴ４．13．14．15実測図

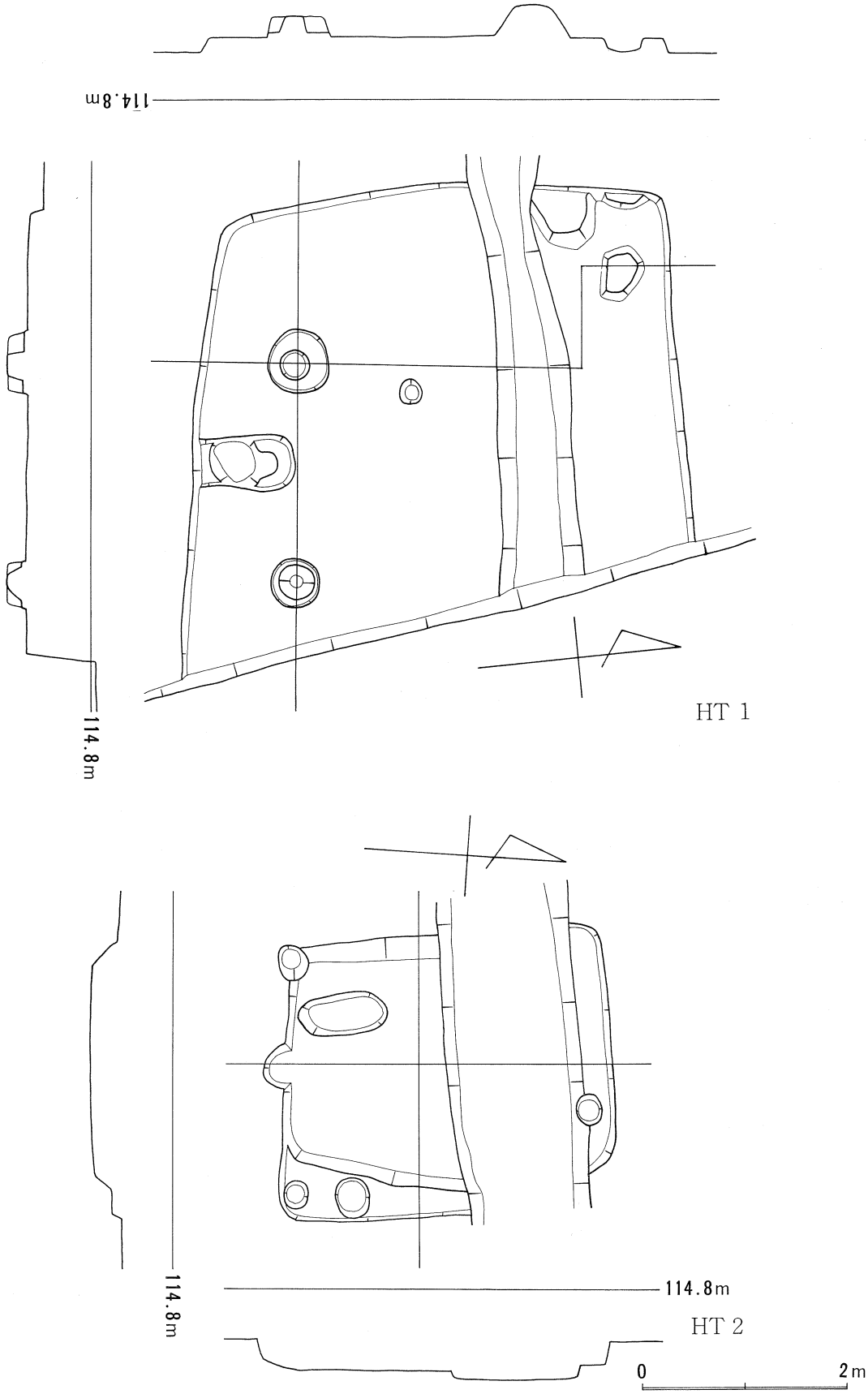


図49．ＨＴ１．２実測図

ＨＴ２（図49）　住居跡の北寄りに幅１ｍ程の溝が走り、北辺部分は不明。東西長2.25ｍで、カマドの位置は不明。

ＨＴ３　西側の大半が調査地域外にあるため、カマドの位置等不明。南北長5.46ｍで、東辺はＮ５°Ｗの方向にある。

才６住居跡群では竪穴式住居跡は３棟である。カマドの位置が知れるのはＨＴ１のみで、他は不明である。また、全体規模の知れるものはない。

ト）才７住居跡群竪穴式住居跡

ＨＴ４（図50）　大半が調査地域外にあり、西辺部分のみ調査し得た。南北長3.34ｍで、西辺はＮ２°Ｅの方向にある。

ＨＴ５（図50）　南西部に被掘坑がある。南北、東西とも2.89ｍで、正方形プランを持つ。また、Ｎ７°Ｅの方向に向く。南東コーナーより70cm程北側で、東壁に接っして焼土が認められ、南東コーナーより36cmの位置に、東壁より外側へ22cm程半円形に張り出す部分がある。この張り出し部分は約30度の勾配を持ち、竪穴の内側が最も深かくなっている。焼土の位置と張り出し部分の位置からすれば、竪穴の南東コーナーよりやや北側で、東壁に対してやや斜め方向にカマドが作り付けられていたものと考えられる。

ＨＴ６（図51）　西半分に被掘坑があり、東半分のみ調査できた。南北長4.66ｍで、東辺はＮ24°Ｅの方向にある。竪穴内に径50cm、深さ９cm～11cmのピットが２基あり、南北に並んでいる。北側のものは東壁から1.26ｍ、北壁から82cm、南側のものは東壁から 121cm、南壁から 120cmの位置にあり、やや北に寄りながらも東壁にほぼ並行して並ぶ。柱痕は確認できなかったが主柱穴である可能性が強く、４本が配されていたものと思われる。カマドの位置は明確でないが、東壁に接っして、南壁より1.96ｍの位置に、長径68cm、短径54cm、深さ６cmのピットがある。ピットの東側はやや竪穴外に出張り、63度の勾配を持って立ち上る。焼土等が認められず、カマドとは断定できない。

ＩＴ11（図55）　南半部は調査不可能であった。北辺はＮ０°30′Ｅの方向にあり、東西長は2.52ｍを計る。幅18cm～32cmの壁溝が走る。深さは3cm～８cmである。柱穴は認められず、カマドの位置は不明。

ＩＴ10　欠番

ＩＴ９（図54）　東半分が調査地域外に出る。南北長3.38ｍで、西辺はＮ16°Ｗの方向にある。北壁に接っして、北西コーナーより 1.8ｍの位置に焼土が認められる。竪穴の北壁中央附近にカマドが設けられていた可能性がある。

ＩＴ８　欠番

ＩＴ７（図54）　東西長 3.2ｍ～3.34ｍ、南北長3.02ｍ～3.18ｍを計り、東辺はＮ44°30′Ｅの方向にある。竪穴の中央附近に焼土が認められるとともに、東壁に接っして、南壁より70cm程北側にも焼土が認められた。この部分には、長径80cmの溝状の窪みがあり、35cmの長さ部分が竪穴外へ出ている。竪穴内の部分は、東壁に対してやや斜めになっている。窪みの底部はほぼ水平で、外端部分はほぼ垂直に立ち上る。溝の窪みの竪穴内部分がカマド、竪穴外の部分は煙り出しである。煙り出しは南壁から１ｍ程の位置にある。

ＩＴ４（図53）　南北長 2.6ｍ、東西長3.18ｍを計り、Ｎ39°30′Ｅの方向にある。北東コーナー部分に径 120cm程の不正円形の土坑がある。深さ18cm程の浅いもので、土師器片が出土している。また、

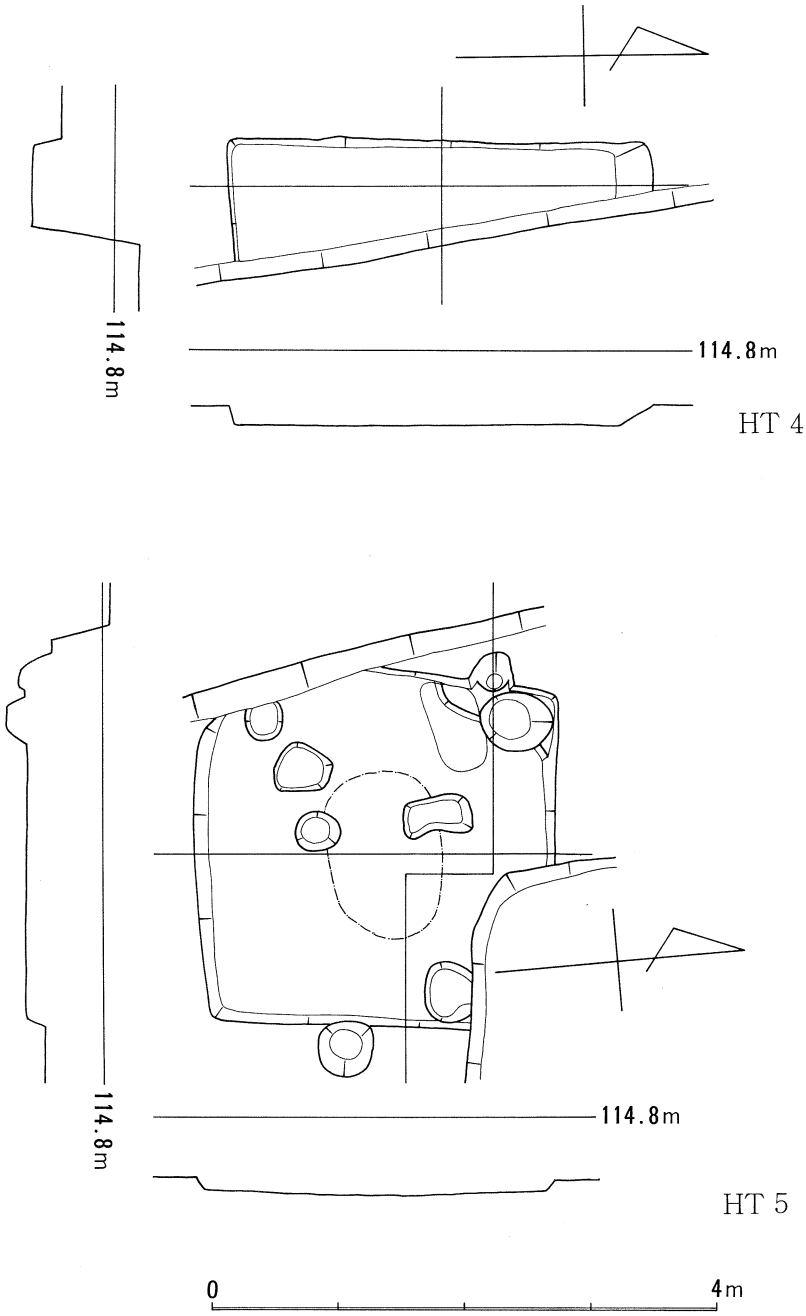


図50．ＨＴ４．５実測図

南壁の中央附近に、86cm×40cm程のダ円形の窪みがあり、須恵器が出土している。カマドは南東コーナーに、東壁にほぼ直交する方向で作り付けられている。カマドの北側に２分の１半截で、長さ46cm、幅30cmの石材が、東壁に接っしておかれていた。附近に河原石が数個散在しており、カマド壁体の骨材と考えられる。煙り出しは、少し南にふって、竪穴外へ長さ46cm、幅21cmの溝状の状態で遺存していた。煙り出しはカマドの底部より５cm程高かく、ほぼ水平である。

ＩＴ６　　北東コーナー部分のみ調査し得た。規模等不明。北辺はＮ42°30′Ｅの方向にある。

ＩＴ３（図52）　　南北長 3.6m～3.72m、東西長2.42m～2.66mを計る。Ｎ 25°30′Ｅ の方向にある。東辺の中程に被掘坑がある。カマドは南東コーナーにある。南東コーナーには、長さ64cm程の瓢形

の窪みがある。南北に長く、北側は幅58cm、南側は38cmで、カマドとカマド前庭部の窪みとすれば、南壁に直交するカマドと考えられる。南側の窪みと南壁の間は20cm程あって、壁体も窪みのカーブに応じて外側へ張り出している。窪みの間は約３度程の勾配で、その外側で25度の勾配にかわる。

ＩＴ５（図53）　西側の大半が調査地域外に出る。5.76ｍ～6.32ｍの南北長を計る。東辺はＮ９°30′Ｗの方向にある。南北90cm、東西１ｍにわたる焼土が東壁のほぼ中央に認められる。この附近には、3cm～6cmの浅い窪みが認められるが、カマドの底部か否かは不明である。焼土部分をカマドの位置とするなら、東壁に直交するものであろう。東壁に並行して、その内側20cm～50cmのところに、南北に並ぶ小ピット群が検出された。一直線に並ばないが、ほぼＮ14°30′Ｗの方向に並ぶ。径６cm～48cm程の不正形のもので、深さ２cm～28cmで、不ぞろいである。焼土の北側に６基あり、北より20cm×20cm×20cm×25cm×25cmと並ぶ。焼土部分をはさんで175cmの間をおいてさらに１基あり、計7基がほぼ一直線上にあり、かつ、規模も６cm～20cmで、概して15cm前後と一定している。焼土の南側では、東側に25cm程平行移動して、４基のピットが、35cm間隔で並ぶ。南端のものは南壁より1.5ｍの北の位置にある。南壁部分には小ピット群は見られないが、北壁部分には、径15cm程のピット２基と径30cm～50cmの大きいもの２基とが見られるが、明確でない。東壁で見られたピット群は、柱痕は認められないが、その規模からして、杭状品の存在が推定され、竪穴の壁体構造と何等かの関係のあるものと思われる。

ＩＴ12（図55）　西側大半が調査地域外にあり、北辺部分に被掘坑があって、南北長3.76ｍ以上、4.56ｍ以内ということのみ知れる。カマドは東壁に直交し、南壁より北60cm程の位置にある。カマドは煙り出し部分を含めて1.24ｍを計る。その内側40cm程の間が竪穴床面より６cm程窪み、床面の焼け方が強い。カマド本体の中央部と考えられる。その外側は16cm程高かく、水平に近い傾斜を持っている。煙り出しの部分に当るものであろう。カマド西側にカマドの壁体が残る。竪穴東壁部分で、上端幅38cm、下端部26cm、遺存部分の先端で上端67cm、下端幅38cmで、ハの字形に開く。カマドと東壁の間は、幅34cmのテラス状の高まりが残され、その西側に、径46cm、深さ50cmのピットが設けられている。

ＩＴ２（図52）　南北3.18ｍ～3.37ｍ、東西３ｍ～3.20ｍ。Ｎ13°Ｗの方向にある。東壁に接っして、南壁より北80cm程のところに焼土がある。焼土の西側、東壁より50cm西側に、南北1.08ｍ、東西88cmのダ円形のピットが、ほぼ南壁に接っして位置する。深さ30cm程で、カマドとは考え難い。このピット附近に小規模なピットが数基存在するが、カマドとは関係しないようである。カマドの位置は、焼土面から土師器甕が出土しており、焼土附近とすることができるが、形態は不明である。

ＩＴ１（図51）　東西4.54ｍ～4.68ｍ、南北3.34ｍ～3.56ｍでＮ５°Ｅの方向にある。南東コーナーから南壁で約1.5ｍ、東壁で約1.8ｍを残し、壁溝が四周する。幅22cm～40cm、深さ３cm～７cmを計る。溝内に須恵器があり、溝は埋まった状態でなかったことが知れる。カマドは、東壁に直交し、南壁から80cm程の位置にある。煙り出しと考えられる長さ36cmの張り出しがある。この内側に長さ76cmにわたる焼土がある。煙り出し部分は13度程の勾配で、カマド部分はほぼ水平である。

以上13棟が才７住居跡群の竪穴式住居跡である。近接するものがあるが、住居跡相互の切り合いはない。柱穴の認められるものはＨＴ６のみで、竪穴内に４本が配されていたものと思われる。支柱穴の明確なものはないが、ＩＴ５で、狭い間隔で並ぶ小ピット列があって、住居の壁体部分の構造に関係する杭等の痕跡と考えられた。壁溝を持つものはＩＴ１とＩＴ11で、ＩＴ１では南東コーナー部分がカマドの構築のため掘り残されていて、これまでにない掘り方を示している。カマドの形態では、Ａ－１型にＩＴ５、Ｃ型にＩＴ３、ＩＴ１、Ｄ－２型にＨＴ５、ＩＴ12、ＩＴ２、ＩＴ７、ＩＴ４があり、ＩＴ９

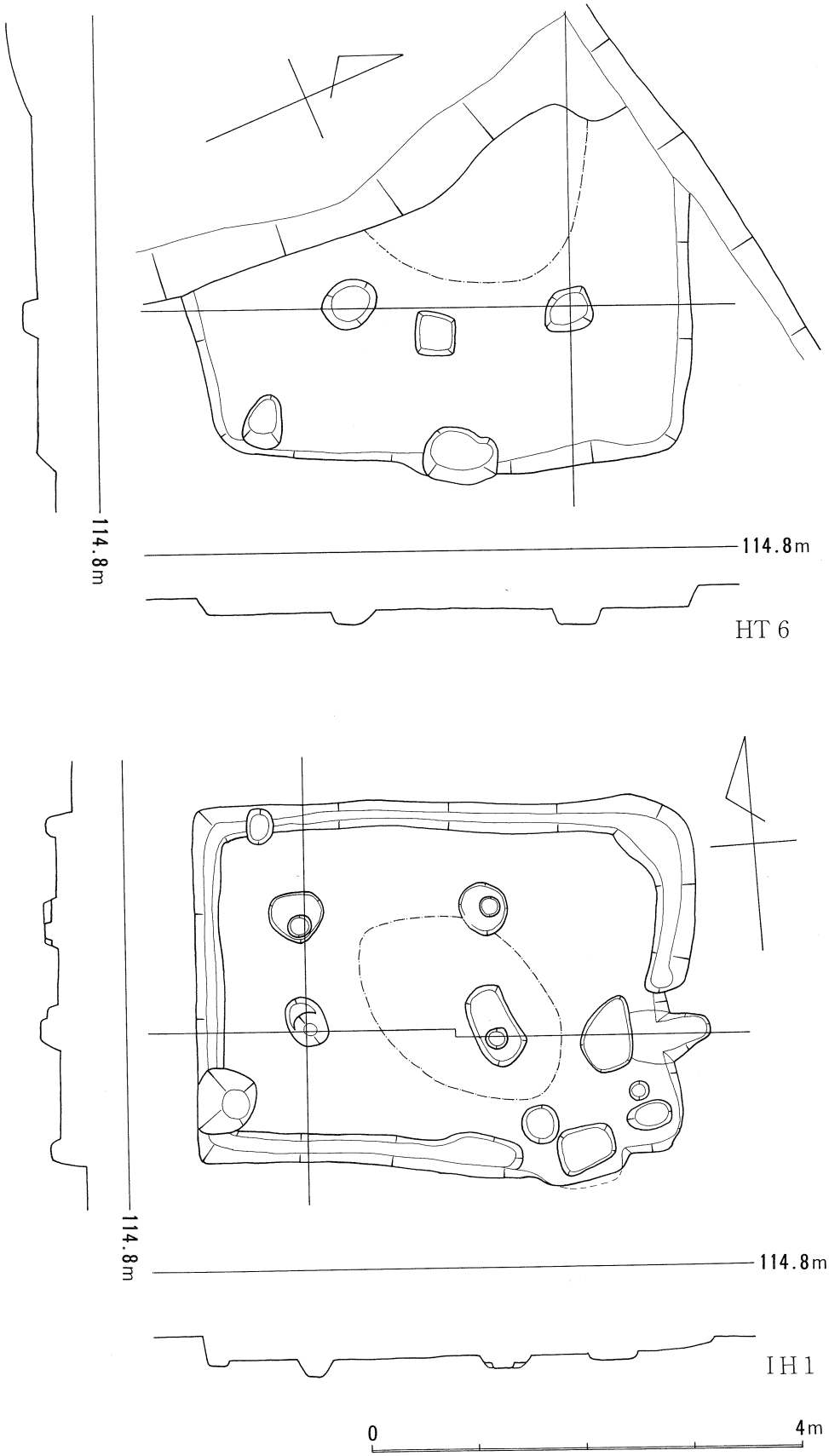
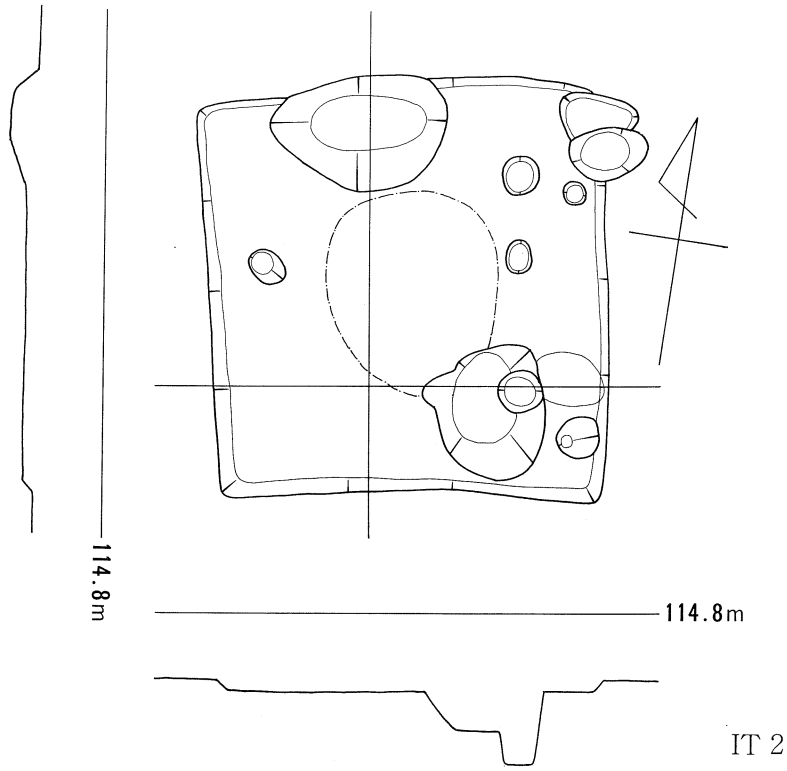


図51．ＨＴ６．ＩＴ１実測図



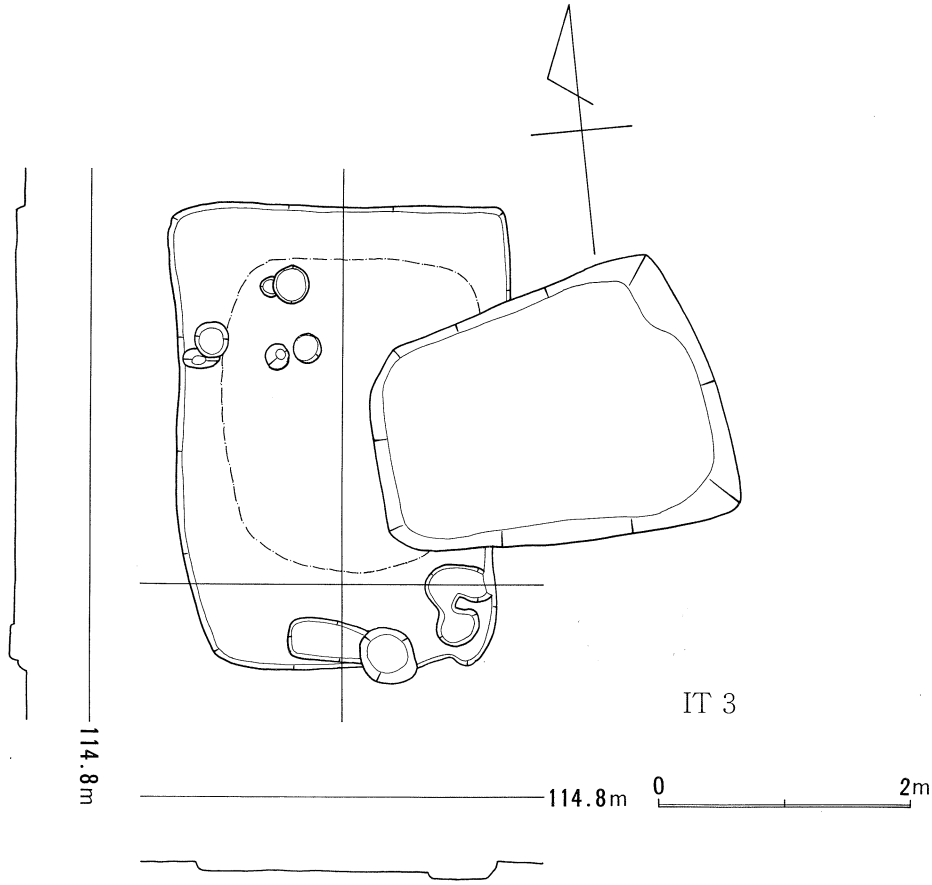


図52．ＩＴ２．３実測図

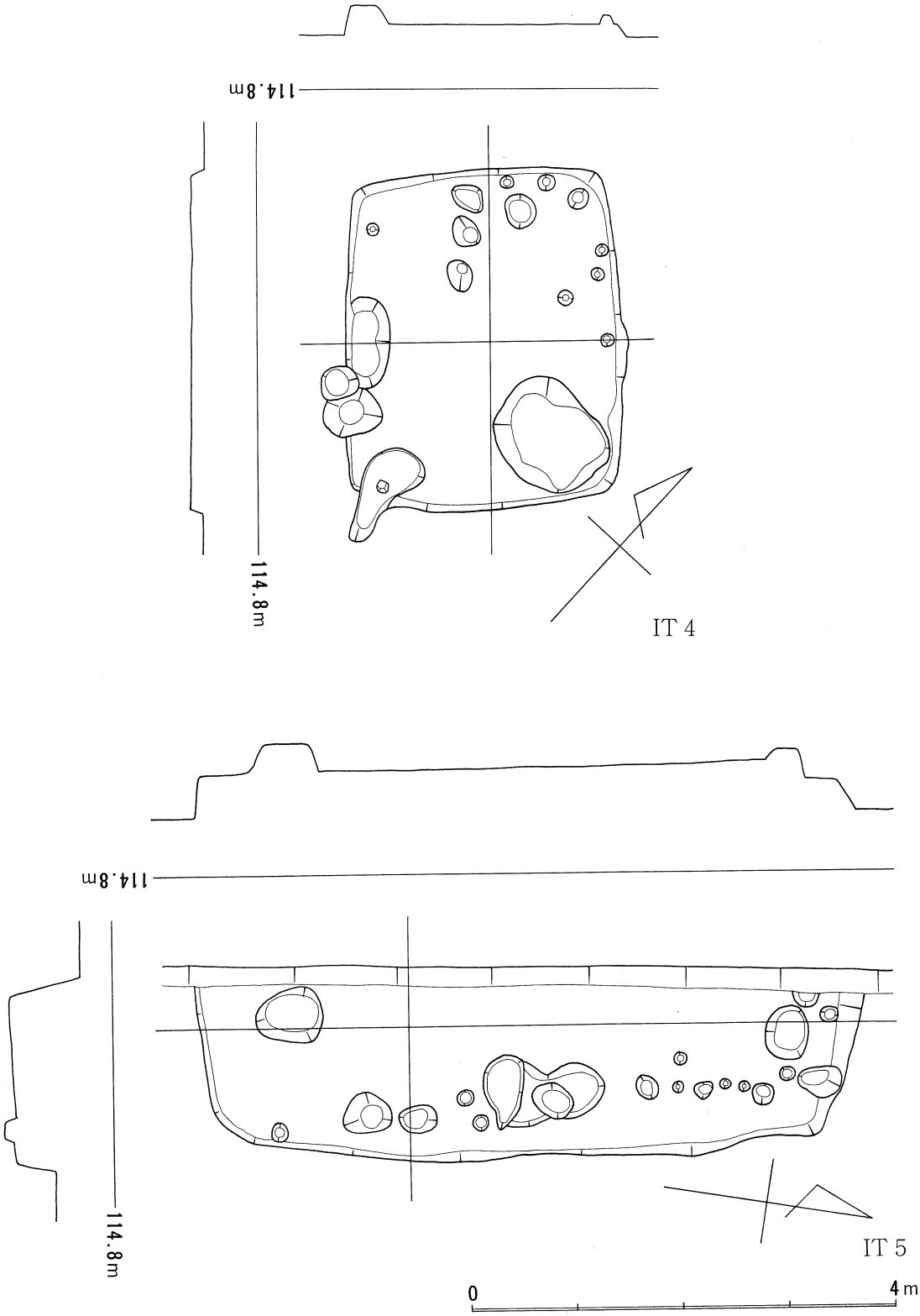


図53. ＩＴ４．５実測図

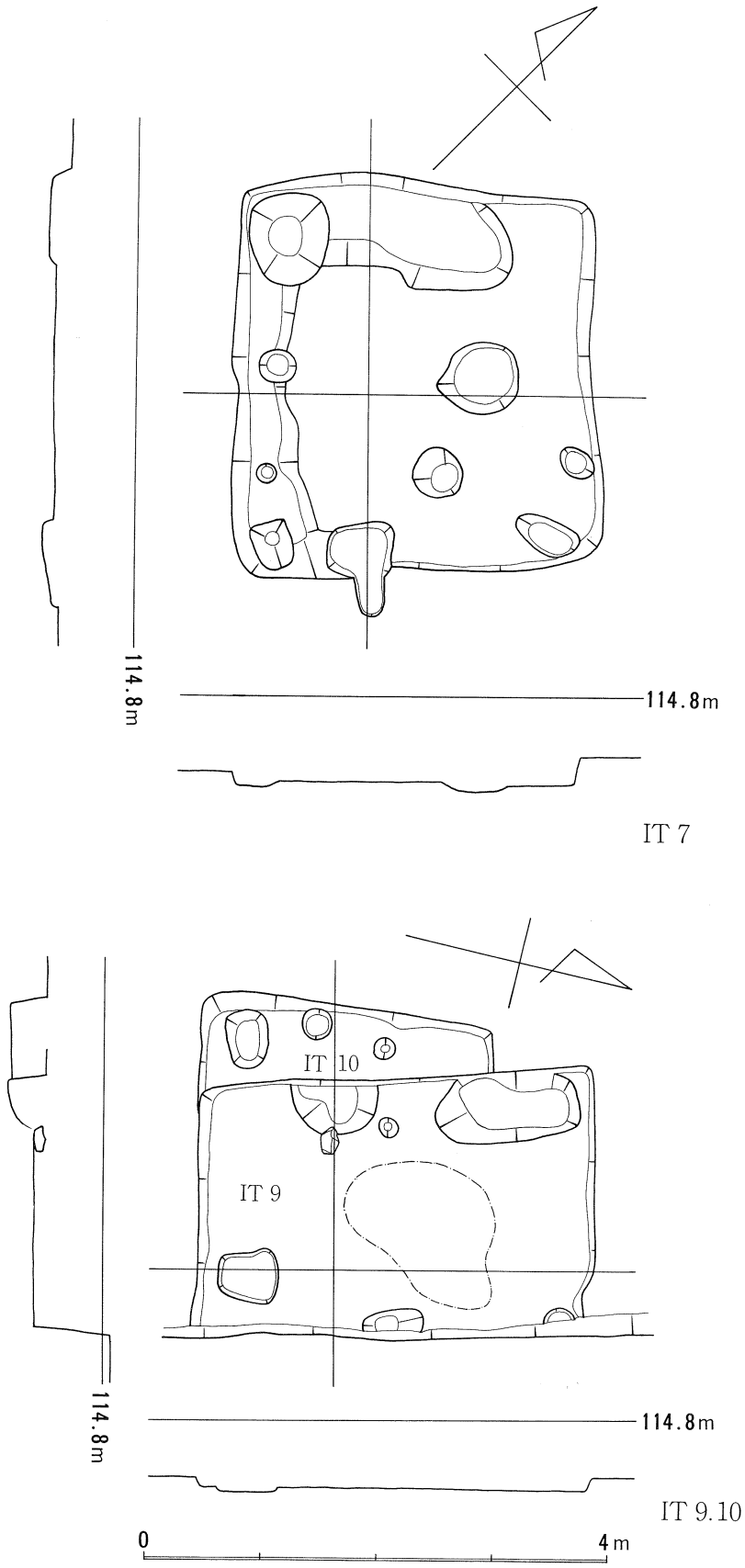


図54. ＩＴ７．９．10実測図

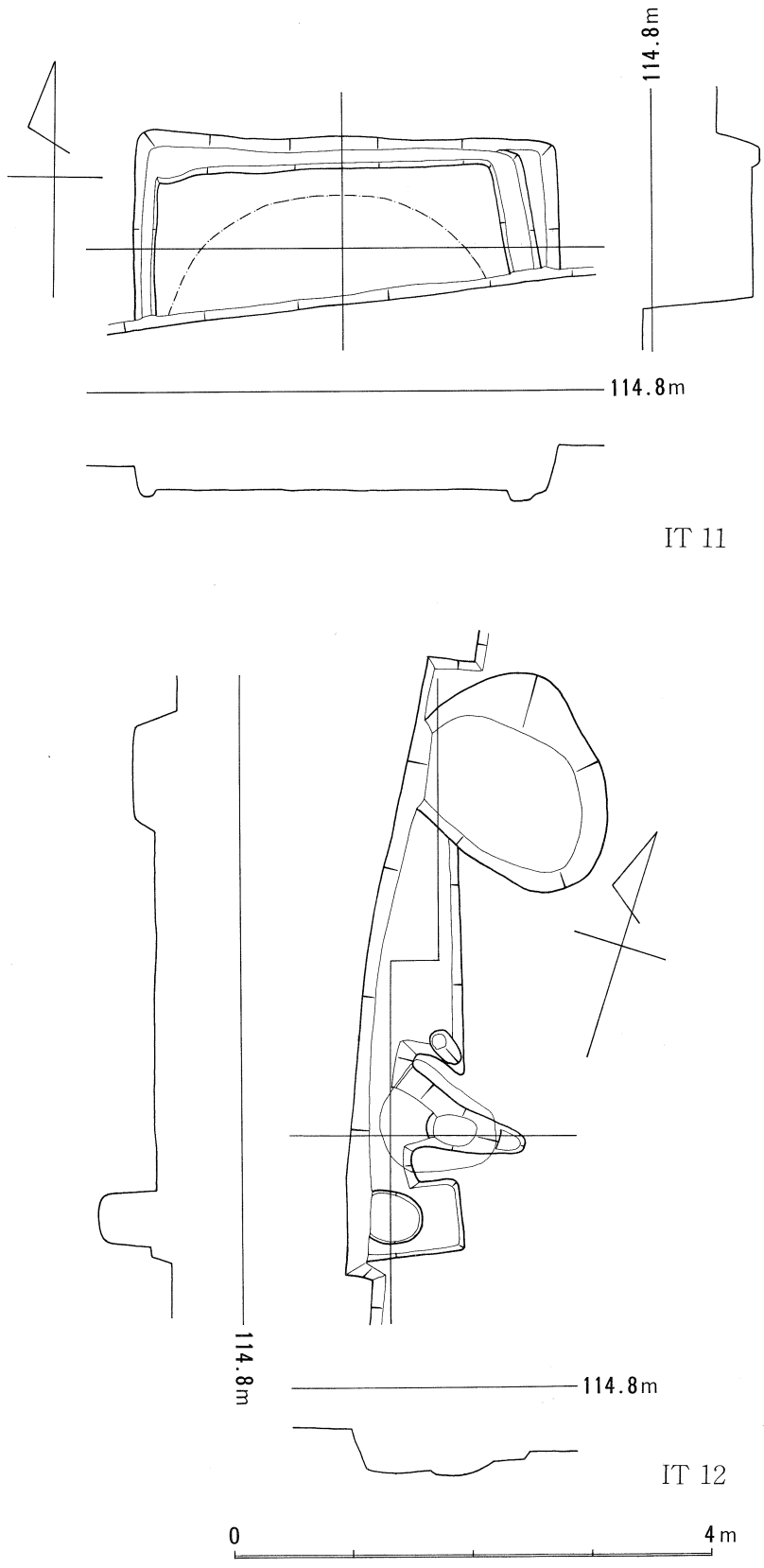


図55．ＩＴ11．12実測図

表２．竪穴式住居跡計測値一覧表

群	No.	南北長（m）	東西長（m）	長さの比率 東西長／南北長	床面積（m²）	方向	主柱穴の有無	支柱穴の有無	壁溝の有無	カマドの形態	備考	プランの分類	床面積の分類
第1住居跡群	柏ＣＴ 1		5.94			N22°30′E	○		○	A－1			Ⅴ～Ⅷ
	2	5.5	4.7	1：0.85	25.9	N 1°36′W				B－1		Ⅰ	Ⅵ
	3	2.74	2.55	1：0.93	7	N 9°30′W				C－3		Ⅰ	Ⅰ
	4	3.85	4	1：1.04	15.4	N12°30′E				C－1		Ⅰ	Ⅲ
	5	4.4	4.65	1：1.06	20.5	N22°30′E	○		○			Ⅰ	Ⅳ
	6					N 1°30′W				B－1			
	7	6.3	5.6	1：0.89	37.8	N 1°30′W		○		B－1		Ⅱ	Ⅷ
	⑧												
	9		2.85			N 9°30′E				C－3			Ⅱ～(Ⅲ)
	10	(4)	(4)	(1：1)	16	N 6°30′E				C－1		Ⅰ	Ⅲ
第2住居跡群	ＡＴ 1												
	2	3.8				N 4°30′W							Ⅲ～Ⅴ
	3	5	4.1	1：0.82	20.5	N 7°30′W				A－1		Ⅱ	Ⅳ
	4	5				N 9°30′W					カマド横にピット		Ⅲ～Ⅴ
	5	4.4				N 9°30′W							Ⅲ～Ⅴ
	6	4.65	4	1：0.86	18.6	N11°30′W				B－3		Ⅱ	Ⅳ
	7												
	⑧												
	⑨												
	10	3.75	6	1：1.6	22.5	N20°30′E				D		Ⅵ	Ⅴ
	11	4.6	3.35	1：0.73	15.4	N 1°30′E				B－2	石製支脚、カマド焚口に石材、カマド横にピット	Ⅲ	Ⅲ
	⑫												
	13	4.38	4.12	1：0.94	18.1	N 8°30′E						Ⅰ	Ⅳ
	14	5.1				N 3° E				B－3			Ⅴ～Ⅵ
	ＢＴ 1	2.8				N 9°30′E				C－3			Ⅱ～(Ⅴ)
	2	5.8				N 6° W				B－3	ＢＴ9.10に切られる		Ⅵ～Ⅶ
	3	3.7	3.9	1：1.05	14.4	N 9°30′W				A－2		Ⅰ	Ⅲ
	4	4.1	4	1：0.98	16.4	N16°30′E				B－2	長胴カメ原位置、ＢＴ５を切る、カマド焚口に河原石、カマド横にピット	Ⅰ	Ⅲ
	5	3.2				N22°30′E					ＢＴ４に切られる		Ⅱ～(Ⅴ)
	6	3.9	4.1	1：1.05	16	N31° E			○	B－3	L字形に壁溝カマド横にピット	Ⅰ	Ⅲ
	7	4.8	4.2	1：0.88	20.2	N30°30′E				C－3		Ⅱ	Ⅳ
	8	3	2.96	1：0.99	8.9	N 9°30′W				C－2		Ⅰ	Ⅲ
	9	3				N 6°30′W				A－2	カマド２基、ＢＴ２を切りＢＴ10に切られる		Ⅱ～(Ⅴ)
	10					N17°30′E					ＢＴ９を切る		
	11												
	ＣＴ 1	5.7				N 2° E				C－1	ＣＴ２を切る		Ⅵ～Ⅶ

群	No.	南北長（m）	東西長（m）	長さの比率 東西長／南北長	床面積（㎡）	方向	主柱穴の有無	支柱穴の有無	壁溝の有無	カマドの形態	備考	プランの分類	床面積の分類
第2住居跡群	2	3.1	3.1	1：1	9.6	N 2° E					CT1に切られる	I	II
	③												
	④												
	5	4.8	4.8	1：1	23	磁北	○		○	A－1	コの字形の壁溝	I	V
	6					N 5° E					CT7に切られる		
	7	4.1	4.8	1：1.17	19.7	磁北			○	A－1	CT6を切りCT8に切られる	II	IV
	8	2.95	3.2	1：1.08	9.4	N 6°30′ W				C－3	CT7を切る	I	II
	9	3.55	3.05	1：0.86	10.8	N 3° W			○	C－1		II	II
	10	4.8				N 4°30′ E							III～V
	11	3.1	3.25	1：1.05	10.1	N 8°30′ E				C－3	CT12を切る	I	II
	12	4.3				N 43° W					CT11に切られる		III～V
	13	2.3	2.0	1：0.87	4.6	N 2°30′ W						II	I
第3住居跡群	FT 1	4.6	2.87	1：0.61	13.2	N12°30′ E						IV	III
	2	5.1				N 4° E							V～VI
	③												
	4	2.94				N 4° W					FT5を切る		II～(V)
	5	3.8				N13° W				C－2	FT4に切られる		III～V
	6					N12°30′ E		○			支柱穴は杭列状、FT7を切る		
	7	5.95				N15° W			○？		FT6に切られる		VI～VII
	8	2.25	2.5	1：1.11	5.6	N12° W				C－3	FT10を切る	II	I
	9					N 2° W					FT11を切りFT10・FT23に切られる		
	10	2.91				N 1°30′ E				C－1	FT8・FT23に切れ、FT9を切る		II～(V)
	11					N 2°30′ W				C－1	FT9・FT15に切られるカマド焚口に石材、石製支脚		
	12	5.05	4.74	1：0.94	23.9	N 3°30′ E	○	○	○	B－3	支柱は杭列状FT13に切られる	I	V
	13	6.57				N 8°30′ E					FT12を切りFT14に切られる		VIII以上
	14	7.16				N 9° E					FT13を切る		VIII以上
	15	6.75				N13°30′ E					FT11・FT16を切る		VIII以上
	16	6.06	4.84	1：0.8	29.3	N20°30′ E			○	D	支柱穴は竪穴	II	VII

群	No.	南北長（m）	東西長（m）	長さの比率 東西長／南北長	床面積（m²）	方向	主柱穴の有無	支柱穴の有無	壁溝の有無	カマドの形態	備考	プランの分類	床面積の分類
											肩部、ＦＴ15に切られる		
第3住居跡群	17	3.51				N 1°30′ E							
	⑱ 19	3.46	5.58	1：1.61	19.3	N18°30′ E				A－1	ＦＴ20に切られる	Ⅳ	Ⅳ
	20	3.6				N 3°30′ E					ＦＴ19を切る		Ⅱ～(Ⅴ)
	21					N 1°30′ E			○？				
	22					N 5°30′ E							
	23	3.6	3.6	1：1	13	N24°30′ W				C－1	カマドに瓦利用、ＦＴ9.ＦＴ10を切る	Ⅰ	Ⅲ
第4住居跡群	ＦＴ 24	7.38				N11° W	○	○	○	A－1	支柱穴は杭列状で竪穴肩部と壁溝内の2列		
	25												
	ＧＴ 14					N30° W							
	13					N23° W							
	12	3.99	3.87	1：0.97	15.4	N13°30′ W				C－1	石製支脚のぬき取り痕	Ⅰ	Ⅲ
	11	5.86				N 7° W							Ⅵ～Ⅶ
	10	5.7				N27°30′ W				C－1			Ⅵ～Ⅶ
	9	5.44				N12°30′ W			○	B－3	コの字形に不整形に窪む		Ⅴ～Ⅵ
	8	3.45	3.2	1：0.93	11	N29°30′ W				C－1	カマド焚口に石材	Ⅰ	Ⅱ
	7	5.04	3	1：0.6	15.1	N29° W						Ⅳ	Ⅲ
	6	3.1	3.4	1：1.1	10.5	N19°30′ W				D	カマドに石材	Ⅰ	Ⅱ
	5	3.1				N31° E							Ⅱ～(Ⅴ)
	4	4.68				N28° W				D ?			Ⅲ～Ⅴ
第5住居跡群	ＧＴ 3	4.78				N 9°30′ W				C－1			Ⅲ～Ⅴ
	2	3.76	2.85	1：0.76	10.7	N 9°30′ W				C－1		Ⅲ	Ⅱ
	1	4.14	3.8	1：0.92	15.7	N14°30′ W				D		Ⅰ	Ⅲ
第6住居跡群	ＨＴ 1	4.58				N 2° E				D ?			Ⅲ～Ⅴ
	2	2.25	2.25										Ⅰ
	3	5.46				N 5° W							
第7住居跡群	ＨＴ 4	3.34				N 2° E							Ⅱ～(Ⅴ)
	5	2.84	2.84	1：1	8.1	N 7° E				C－3		Ⅰ	Ⅱ
	6	4.66				N24° E	○						Ⅲ～Ⅴ
	ＩＴ 12					N19°30′ W				C－3			
	11		3.52			N 0°30′ E			○？				Ⅲ
	⑩ 9	3.38				N16° W							Ⅱ～(Ⅴ)
	⑧ 7	3.27	3.1	1：0.95	10.1	N44°30′ E						Ⅰ	Ⅱ
	6												
	5	5.54						○		A－1	支柱穴は杭列状		Ⅵ～Ⅶ
	4	2.6	3.18	1：1.22	8.3	N39°30′ E				C－3	カマドに石材	Ⅲ	
	3	3.66	2.54	1：0.69	9.3					D		Ⅳ	Ⅱ
	ＩＴ 2	3.27	3.1	1：0.95	10.1	N13° W				C－1		Ⅰ	Ⅱ
	1	3.45	4.61	1：1.34	15.9	N 5° W			○	C－3		Ⅳ	Ⅲ

はＡ－１型である可能性がある。

チ）まとめ（表２）

以上、才１住居跡群から才７住居跡群まで、計93棟の竪穴式住居跡群を検出した。各々の時期的な問題は次項で扱うので、ここでは、竪穴式住居跡を形態的に分類する。分類項目は、住居の床面積、竪穴の平面形、カマドの形態、支柱穴、壁溝等である。

◦床面積の分類（図56）

床面積の知れるものは40棟、南北、東西両長とも不明のものは14棟、東西長のみ知れるもの４棟、南北長のみ知れるもの35棟である。床面積の知れる40棟について、まず、床面積が ±3 m²以内で分布するものをグループ化すると次のようになる。

（Ⅰ）	4.6～７m²（± 2.4m²）	柏原北ＣＴ３・ＣＴ13・ＦＴ８
（Ⅱ）	8.1～11m²（± 2.9m²）	ＢＴ８・ＣＴ２・８・９・11・ＧＴ２・６・８・ＨＴ５・ＩＴ２・３・７
（Ⅲ）	13～16.4m²（± 2.6m²）	柏原北ＣＴ４・10・ＡＴ11・ＢＴ３・４・６・ＦＴ１・23・ＧＴ１・７・12・ＩＴ１
（Ⅳ）	18.1～20.5m²（± 2.4m²）	柏原北ＣＴ５・ＡＴ３・６・13・ＢＴ７・ＣＴ７・ＦＴ19
（Ⅴ）	22.5～23.9m²（± 1.4m²）	ＡＴ10・ＣＴ５・ＦＴ12
（Ⅵ）	25.9m²	柏原北ＣＴ２
（Ⅶ）	29.3m²	ＦＴ16
（Ⅷ）	37.8m²	柏原北ＣＴ７

表３．竪穴式住居跡床面積分類表

（Ⅰ）３棟、（Ⅱ）・（Ⅲ）が各12棟、（Ⅳ）７棟、（Ⅴ）３棟、（Ⅵ）・（Ⅶ）・（Ⅷ）が各１棟で、床面積 8.1m²～16.4m²の間に半数以上が分布し、18.1m²～20.5m²のものがこれに次ぎ、22.5m²以上また７m²以下のものが極めて少ないことが知れる。

次に、図56に床面積の知れる40棟について、南北及び東西長の相関表を作成し、これに床面積の各グループを区別した。このグラフを用い、南北あるいは東西のどちらか一方の長さのみ知れるものを加えてみた。このグラフからは、床面積の各グループにおける南北長及び東西長の上・下限が知れるので、どちらか一方の長さがわかれば床面積もある程度推察できる。南北長のみ知れるものでは、ＦＴ13・14・15・24が 6.5m～ 7.3mで、この南北長は（Ⅷ）以下にはなく、従って、（Ⅷ）あるいはこれ以上の床面積が考えられる。ＢＴ２・ＣＴ１・ＦＴ７・ GT10・11・ＩＴ５は 5.5m～ 5.9mで、この長さは（Ⅵ）以下では認められず、また、（Ⅶ）のものには及ばない。従って、（Ⅵ）あるいは（Ⅶ）の規模が妥当である。ＡＴ14・ＦＴ２・ＧＴ９は 5.1m～ 5.4mで、（Ⅴ）以下には認められず、（Ⅵ）には及ばない。従って、（Ⅴ）あるいは（Ⅵ）の床面積と見てよかろう。（Ⅴ）・（Ⅳ）・（Ⅲ）では、南北長の範囲がほぼ一致している。上限は５mであり、下限は 3.4mであるが、（Ⅱ）に 3.7mを計るものがあり、従って、５m以下、 3.8m以上のものは（Ⅲ）・（Ⅳ）・（Ⅴ）のいずれかの床面積を持

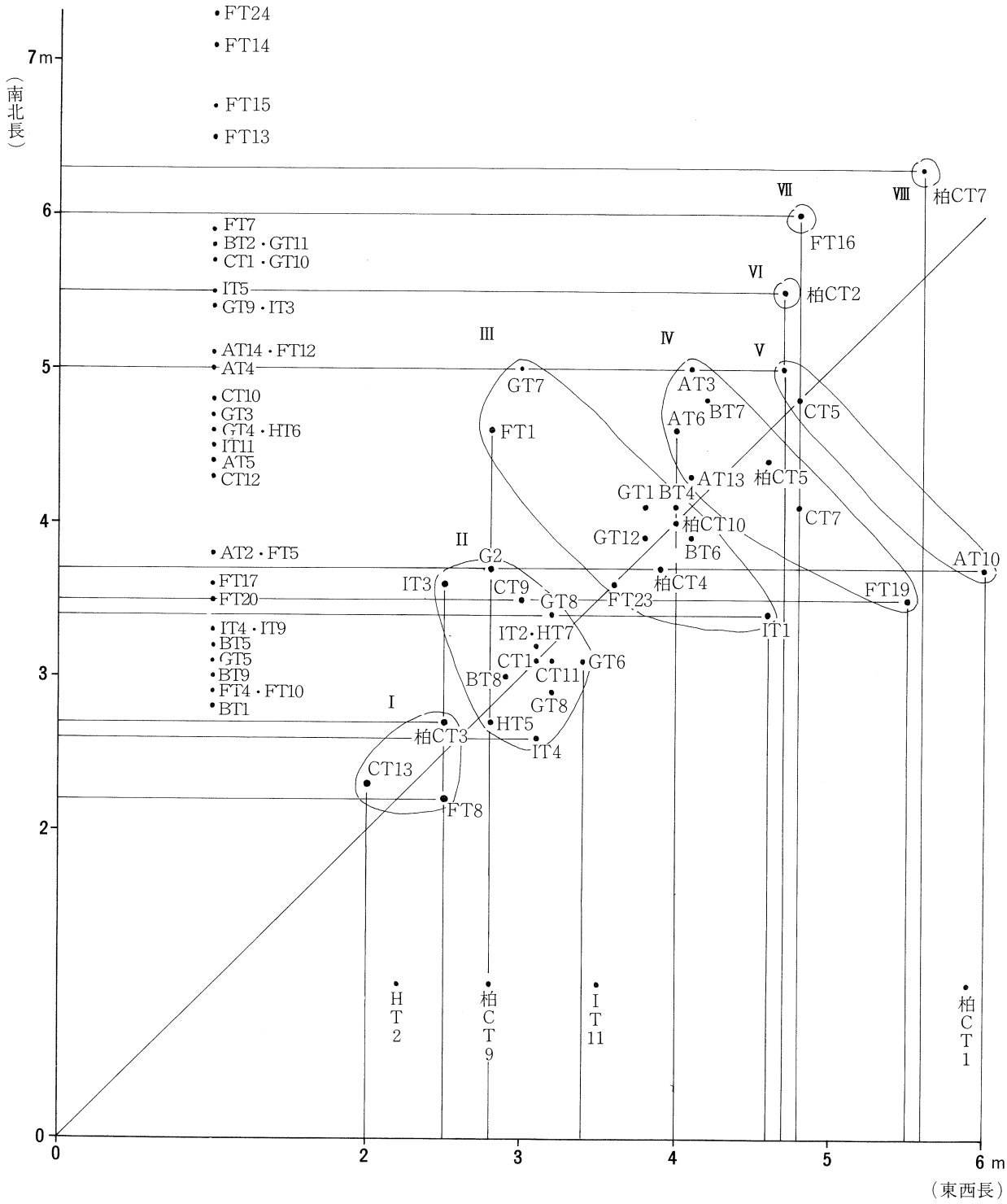


図56. 竪穴式住居跡床面規模分布図

つものと考えることが可能である。これには、ＡＴ２・４・５・ＣＴ10・12・ＦＴ５・ＧＴ３・４・ＨＴ１・６がある。（II）の上限は 3.7m、下限 2.6mとなっているが、（Ｉ）の上限が 2.7mであり、従って 2.8m以上、 3.7m以下のＢＴ１・５・９・ＦＴ4・10・17・20・ＧＴ5・ＨＴ４・ＩＴ９は（II）が有力であるが、（III）・（IV）・（Ｖ）の規模を有する可能性もある。南北長 2.7m以下のものはな

く、従って（Ⅰ）のグループに入るものはない。

次に東西長のみ知れるものでは、ＨＴ２が 2.2ｍで、（Ⅱ）の下限 2.5ｍに及ばず、従って（Ⅰ）の規模を持つ可能性が強い。柏原北ＣＴ９は 2.7ｍで（Ⅰ）の上限 2.5ｍより長く、（Ⅲ）の下限に一致する。従って、（Ⅱ）の可能性が強く、あるいは（Ⅲ）に入るかもしれない。ＩＴ11は 3.5ｍで、（Ⅱ）の上限以上であり、（Ⅳ）の下限に達っしない。従って（Ⅲ）と考えることができる。柏原北ＣＴ１は 5.9ｍを計る。（Ⅳ）の上限以上であり、従って、（Ⅴ）～（Ⅷ）の大規模なものとなる。

◦竪穴の平面形の分類（図57）

竪穴の平面形については、南北・東西両長の知れる40棟が対象となる。図57に、南北長を 100とした場合の東西長の割合いを算出し、竪穴の平面形態を作り出した。長さは平均値であるので、正確な平面形を示すものではない。南北長 100に対して東西長 100のラインを境に上の位置にくるものは東西に細長く、下にくるものは南北に長い。量的には東西に長いものは約２分の１程で、南北に長がく作られているものが多数を占る。東西長が90から 110までの間、すなわち、東西長が±10の範囲に入る平面形が正方形に近いものが22棟で過半数を占めている。±20までにはさらに10棟加わる。±20以上の視覚的にも長大に見えるものは９棟で少ない。長大なものをあげるとＦＴ19－ 161、ＡＴ10－ 160、ＩＴ３－ 134、ＩＴ４－ 124、ＧＴ２－76、ＡＴ11－73、ＩＴ３－69、ＦＴ１－61、ＧＴ７－60等で、東西に長いもの13棟中４棟、南北に長い23棟中５棟で、長大なものは東西方向に長細く作られることの多いことが知れる。平面形を分類することは困難であるが、±10単位で以下にまとめておく。

◦主柱穴、支柱穴、壁溝の分類

主柱穴、支柱穴、壁溝のいずれかが認められるものは93棟中16棟である。壁溝については、いわゆる溝として開削された状態で用いられたかどうかの疑問のあるものもある。これは、ＦＴ12で詳細に観察した結果、溝底に杭列を思わせるピット列が認められ、溝底に凹凸があって、溝としての機能よりも杭状品を打ち込んで、竪穴の壁体に何等かの構造をもたせ、溝は埋められていたのではないかと考えられるものが存在するからである。竪穴式住居跡の構造に関して重要な点であるが、ここでは、そうした壁溝も含めて分類しておくこととする。

まず、主柱穴を持つものは、柏原北ＣＴ１・５、ＣＴ５、ＦＴ12・24、ＨＴ６の６棟である。いずれも４本配されている。主柱穴で囲まれる面積と竪穴の床面積との関係は、柏原北ＣＴ５で20.5㎡に対して５．３㎡で3.87分の１、ＣＴ５で23㎡に対して5.04㎡で4.56分の１である。どちらか一方の面積が不明なものを長さで比較すると、柏原北ＣＴ１で5.94ｍに対し3.15ｍで、1.89分の１、ＦＴ12で5.05ｍに対し2.34ｍで2.16分の１、ＦＴ24で7.38ｍに対し3.62ｍで2.01分の１、ＨＴ６で4.66ｍに対し2.14ｍで2.18分の１である。すなわち、床面積に対して約４分の１、長さに対して２分の１がいずれの住居跡に対しても基準となっていることが知れる。これら主柱穴の存在するもので、竪穴の平面形の知れる柏原北ＣＴ５、ＣＴ５、ＦＴ12ではいずれも平面形Ⅰ型、すなわち、南北に対する東西の長さが±10でほぼ正方形に近いものとなっている。規模に関してはⅢからⅧまでの間で様々であるが、平面形と柱の配置に関しては規格性がうかがえる。

主柱穴のある６棟に関して、このうちＨＴ６を除けばいずれも壁溝を持つ。さらに支柱穴（杭状のものも含む）をも伴うものは、ＦＴ12とＦＴ24の２棟のみとなる。

次に、支柱穴は５棟に認められるが、このうち主柱穴の認められないものは、柏原北ＣＴ７、ＦＴ６、ＩＴ５の３棟で、これらにはいずれも壁溝は伴わない。

(Ⅰ)	±　0 ～ ±　10	ＧＴ６（110）、ＣＴ８（108）、柏原北ＣＴ５（106）、ＢＴ３・６・ＣＴ11（105）、柏原北ＣＴ４（104）、柏原北ＣＴ10・ＣＴ２・５・ＦＴ23・ＨＴ５（100）、ＢＴ８（99）、ＢＴ４（98）ＧＴ12（97）、ＩＴ２・７（95）、ＡＴ13・ＦＴ12（94）、柏原北ＣＴ３・ＧＴ８（93）、ＧＴ１（92）
(Ⅱ)	±　11 ～ ±　20	ＣＴ７（117）、ＦＴ８（111）、柏原北ＣＴ７（89）、ＢＴ７（88）、ＣＴ13（87）、ＡＴ６・ＣＴ９（86）、柏原北ＣＴ２（85）ＡＴ３（82）、ＦＴ16（80）
(Ⅲ)	±　21 ～ ±　30	ＩＴ４（122）、ＧＴ２(76)、ＡＴ11（73）
(Ⅳ)	±　31 ～ ±　40	ＩＴ１（134）、ＩＴ３（69）、ＦＴ１（61）、ＧＴ７（60）
(Ⅴ)	±　41 ～ 59	な　　し
(Ⅵ)	±　60 以上	ＡＴ10（160）、ＦＴ19（161）

表４．竪穴式住居跡平面形分類表

以上、柱穴、支柱穴、壁溝等住居構造に関連すると考えられるものについて、大分類すると、全体の82％強に当る住居跡について、これらのいずれも認められないものと、いずれか１つ以上のものが認

壁溝に関しては、ＣＴ５がカマド位置の反対側でコ字形にめぐるものがある以外、他はすべて、カマド部分を除いて四周する。カマドの位置によって、竪穴の一辺の中央が掘り残されるものとコーナー部分が掘り残されるものとがある。

ＡＢＣ１	ＦＴ24
ＡＢＣ２	ＦＴ12
Ａ０Ｃ１	柏原北ＣＴ１、柏原北ＣＴ５
Ａ０Ｃ３	ＣＴ５
Ａ　０　０	ＨＴ６
０　Ｂ　０	柏原北ＣＴ７、ＦＴ６、ＩＴ５
００Ｃ１	ＣＴ７
００Ｃ２	ＣＴ９、ＦＴ16、ＩＴ１
００Ｃ？	ＦＴ７、ＦＴ21、ＩＴ11

表５．竪穴式住居跡主・支柱穴・壁溝等分類表

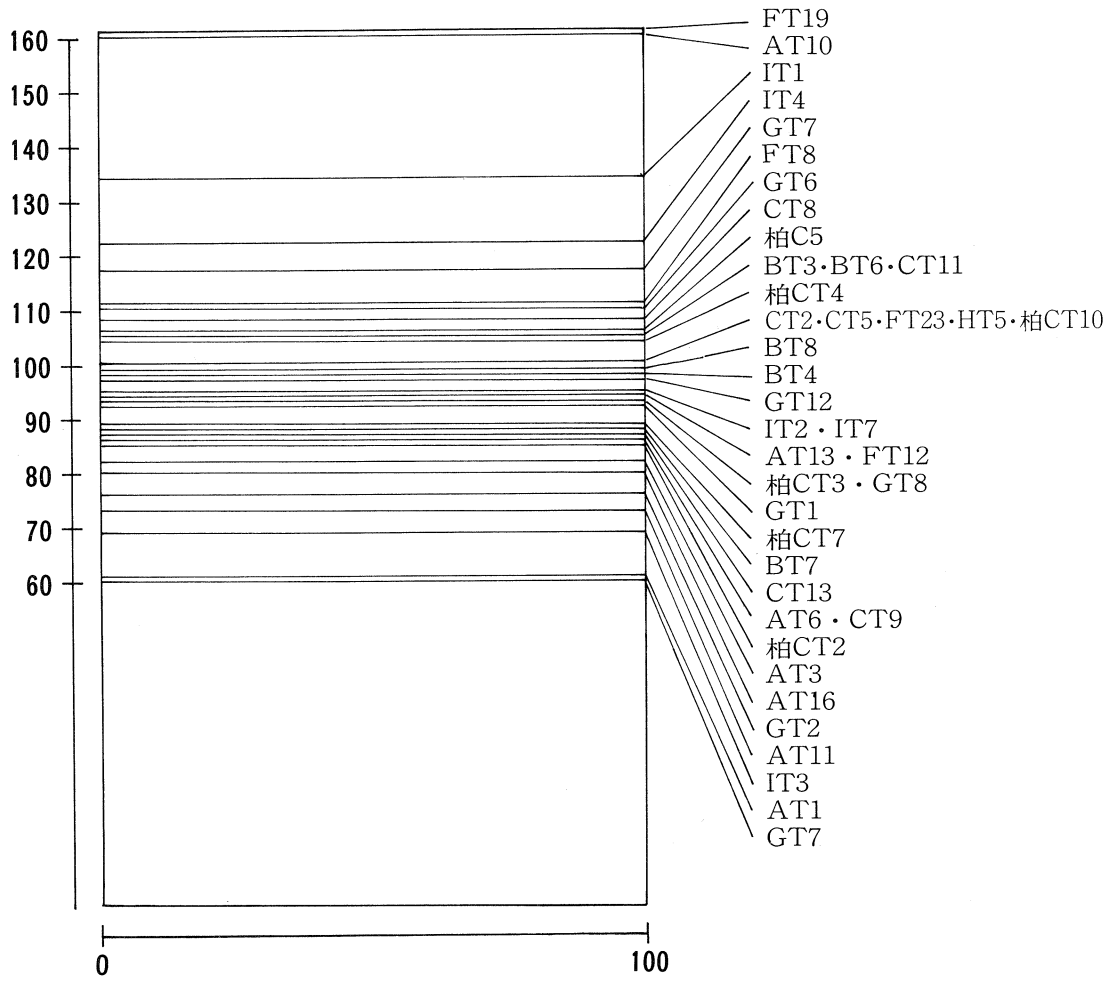


図57．竪穴式住居跡平面形態比較図(南北長100に対する東西長の比)

められるものの17%強の住居跡とに分類できる。後者に関して、主柱穴をもつものをA類、支柱穴を持つものB類、壁溝を持つものをC類とし、C類については、竪穴の一辺の中央附近を掘り残すものをC－1、コーナーを掘り残すものをC－2、3辺にのみ認められるものをC－3とする。また、欠けるものを0で現わすと次のように分類できる。

◦カマドの形態分類（図58）

カマドは、竪穴内で作り付けられる位置及び壁面に対する方向によって、次の4類に大別できる。

A類　竪穴の壁面の中央に、壁面に対して直交する方向に作り付けられるもの。

B類　竪穴のコーナーより1m程離し、壁面に対して斜方向に作り付けられるもの。

C類　竪穴のコーナー附近にあって、壁面に対して直交する方向に作り付けられるもの。

D類　竪穴のコーナーにあって、竪穴の対角線方向に作り付けられるもの。

これらはさらに、カマドの奥部から作り出される煙り出しの施設の有無やその方向、勾配等によって細分することができる。

A－1類　煙り出し施設の認められないもの。

A－2類　煙り出しの施設が認められるもの。煙り出しはカマドの方向で竪穴外に設けられ、その勾配は垂直に近い。

B－1類　煙り出しの施設の認められないもの。

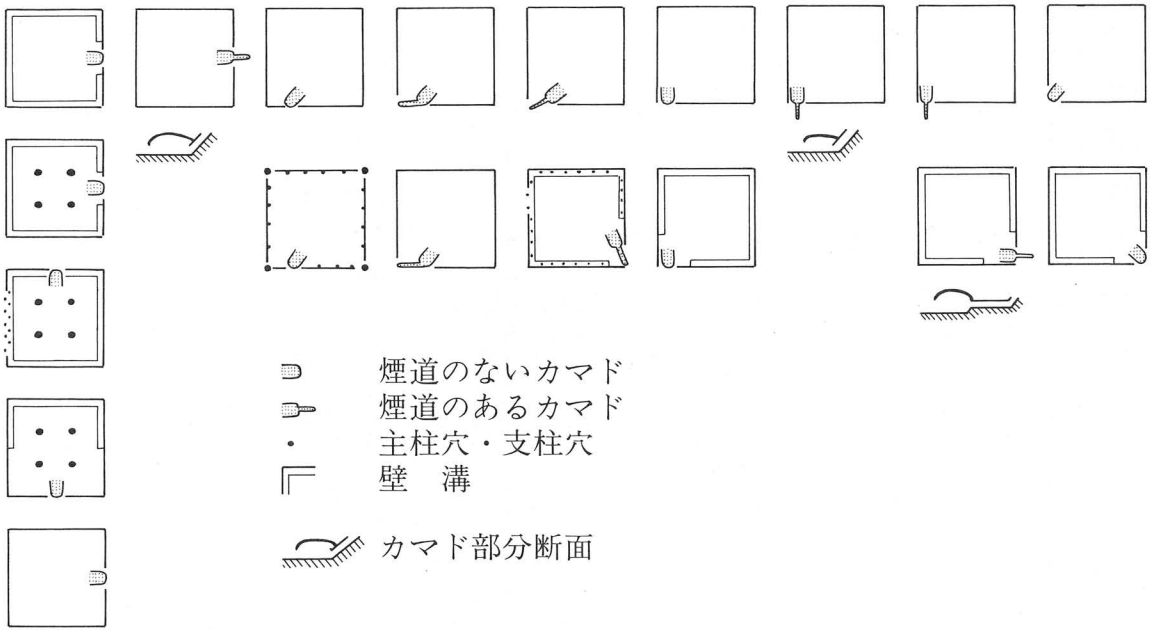


図58．カマド形態分類模式図

B－2類　煙り出しの施設が認められるもの。この場合、煙り出しは竪穴内で、カマドの作り付けられる壁体に並行して土壇を作り出す。

B－3類　煙り出しの施設が認められ、竪穴内に作り付けられるが、カマドのある壁面に対して斜方向にあるもの。

C－1類　煙り出しの施設の認められないもの。

C－2類　煙り出しの施設がカマドの方向に、竪穴外に作り出されるもの。この場合、煙り出しはカマドの奥部から直ちに急勾配で立ち上る。

C－3類　煙り出しがカマドの方向で竪穴外へ作り出されるが、煙り出しの勾配は、カマドの奥部からほぼ水平に作り出される。

D類には煙り出しの施設の認められるものはない。

以上、カマドの形態に関しては、4分類され、さらに9細分できる。各々の該当住居跡については表2に併示した。カマドの知れるものは計55棟で、このうち3棟は形態が不明である。各々の棟数は次の通りである。

A－1類　7、A－2類　2、B－1類　3、B－2類　2、B－3類　6、C－1類　13、C－2類　2、C－3類　12、D類　5、不明の3棟は、1棟がA－1類、2棟がD類に入るかと思われるものである。

カマドの形態はこのように分類でき、かつ数量分布もC－1・C－3類→A－1・B－3・D→A－2・B－1・B－2・C2と見ることができる。これらの中でA－1類、B－1類　B－3類、C－1類　C－3類に柱穴や壁溝等を持つものと持たないものとがある。

A－1類7棟のうち、壁溝を持たないものは1棟（AT3）で、他の6棟にはすべて壁溝が伴う。また、この6棟は壁溝だけのもの（CT7）、壁溝に主柱穴のあるもの（柏原北CT1・5）、さらに支柱

穴の認められるもの（ＦＴ24）、壁溝がカマドのない３面にのみめぐるもの（ＣＴ５）、壁溝がなく支柱穴のみ認められるもの（ＩＴ５）と極めてバラエティに富んでいる。

Ｂ－１類では、３棟のうち１棟に、支柱穴の見られるもの（柏原北ＣＴ７）がある。

Ｂ－３類にもＦＴ12の１棟のみ、壁溝と支柱穴のあるものがある。

Ｃ－１類ではＣＴ９の１棟に壁溝がめぐり、Ｃ－３類でもＩＴ１に壁溝のめぐるものが見られる。Ｄ類にもやはり１棟のみ（ＦＴ16）に壁溝のめぐるものがある。

このように、９細分されたカマド形態の中に、Ａ－１類を除いて、最少数の棟数で壁溝等の見られるものが加わる。従って、９細分したものをさらに19にまで微細分することができるが、82％強の住居跡で壁溝や柱穴等が認められないので、ここでは９細分することにとどめ、19細分が可能であることを注記しておくことにとどめる。

以上、住居の床面積、竪穴の平面形、カマドの形態、主柱穴、支柱穴、壁溝等の竪穴式住居跡の各項目について分類した。その結果については表２にすべて記載しておいた。

Ⅱ．掘立柱建物跡（図59～84）

イ）才１住居跡群掘立柱建物跡

柏原北ＣＨ１（図59）　Ｎ２°30′Ｗの方向にある南北棟。東西柱列は３間、南柱列３間、北柱列は２間。6.3ｍ×４ｍで25.2㎡の規模を持つ。柱穴は一辺50㎝～70㎝の方形掘り方で、柱痕は20㎝～30㎝。この建物では、南柱列の中央の２基は西側柱通りより30㎝程外側へ出ている点に特徴が見られる。

柏原北ＣＨ２（図59）　２間×３間の南北棟で、Ｎ11°Ｗの方向にある。7.9ｍ×4.9ｍで、38.71㎡の規模を持つ。柱穴は、径50㎝～80㎝の円形の掘り方で、柱痕は25～30㎝を計る。

柏原北ＣＨ３（図60）　7.7ｍ×4.2ｍの南北棟で、32.34㎡の規模を持つ。Ｎ７°30′Ｅの方向にある。２間×５間で、柱間は不均等である。東西両側の南北柱列は、その中央の３基が両端２基の柱通りより約20㎝程外側に位置する。柱穴は径45㎝～80㎝の円形掘り方で、柱痕は20㎝～30㎝である。

柏原北ＣＨ４（図60）　西側へのびる建物。２間×２間以上で、束柱を持つ可能性がある。Ｎ６°Ｗの方向にあり、4.2ｍ×2.1ｍ以上の規模である。柱穴は円形の掘り方で、径50㎝～60㎝、柱痕は20㎝程である。

才１住居跡群では以上４棟の掘立柱建物跡を検出している。いずれも柱通りの方向は一定せず、磁北より西に振れるものはＮ２°30′Ｗ～Ｎ11°Ｗの間に、東にふれるものはＮ７°30′Ｅにある。すべて南北棟で、ＣＨ４は倉庫と思われる。

ロ）才２住居跡群掘立柱建物跡

ＡＨ１（図61）　２間×２間の建物で、束柱を持つ。南北、東西とも4.7ｍで、22.09㎡の規模がある。柱穴は方形の掘り方で、一辺40㎝～50㎝を計る。柱痕は径20㎝程である。Ｎ２°Ｅの方向にあり、柱間も2.35ｍで統一されている。

ＡＨ２（図62）　３間×２間と思われるもので、束柱を持つ。南北7.6ｍ、東西は推定で５ｍであり、38㎡の規模を持つと思われる。柱穴は径40㎝～70㎝の円形で、柱痕は18㎝～25㎝程と思われる。Ｎ４°Ｗの方向にある。ＡＨ１に近接する。

ＡＨ３（図63）　３間×２間であるが束柱はない。6.9ｍ×4.6ｍで、31.74㎡の規模を持つ。Ｎ４°Ｗの方向にあり、ＡＨ２と同一方向に向く。一辺50㎝～70㎝の方形の柱穴で、柱痕は20㎝～30㎝を計る。ＡＴ５を切っている。柱間は2.3ｍで統一されている。

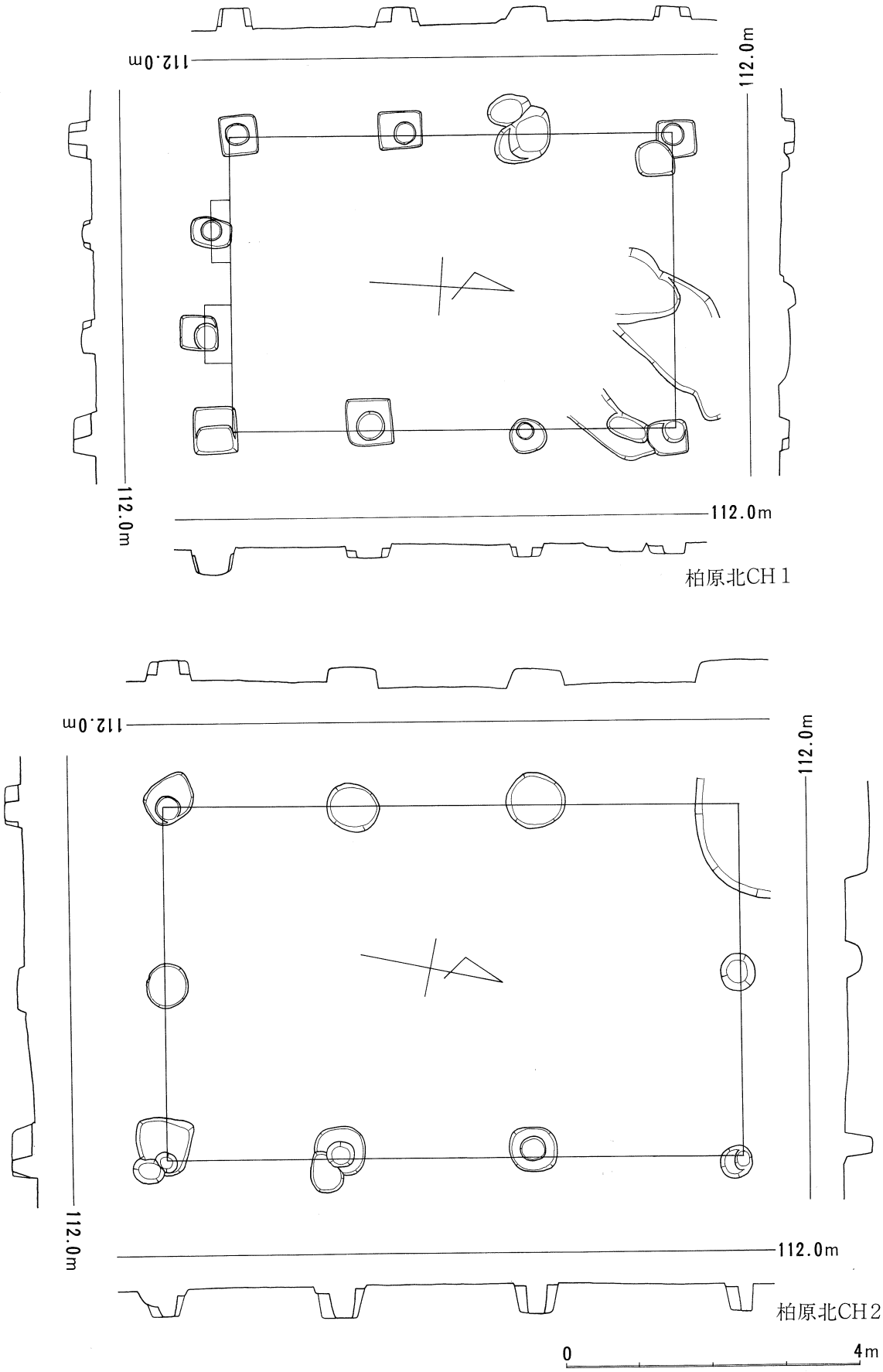


図59．柏原北ＣＨ１．２実測図

群	No.	間数（南北×東西）	規模（南北×東西）m	面積 m²	方向	柱穴掘方 m	柱痕規模 m	柱間 m 北(東から)	南(東から)	東（北から）	西（北から）	平面形比率	備考	柱間寸法
第1住居跡群	柏原北	3×3	6.3×4	25.2	N 2°30′W	方50～70	20～30	12 ×2	1.33×1.33×1.33	2.1×2.1×2.1	2 ×1.75×2.25	62～66	北側列は2間 南柱列中央2基30cm程外	大
	CH1													
	2	3×2	7.9×4.9	38.71	N11° W	円50～80	25～30	2.45×2.45	2.45×2.45	2.8×2.8×2.3	2.8×2.8×2.3	62～66	CT1を切る	大
	3	5×2	7.7×4.2	32.34	N 7°30′E	円45～80	20～30	2.2×2	1.85×2.05	1.5×1.4×1.6×1.4×1.8	1.6×1.5×1.5×1.3×2.1	55	東西柱列中央3基20cm外	小
	4	2×2束以上	4.2×2.1以上	(17.64)	(N 6° W)	円50～60	20	2.1×？		2.4×1.8		90～100		大
第2住居跡群	AH1	2×2束	4.7×4.7	22.09	N 2° E	方40～50	20	2.35×2.35	2.35 ×2.35	2.35×2.35	2.35×2.35	90～100		大
	2	3×(2)束	7.6×(5)	38	N 4° W	円40～70	18～25	2.5×？	2.5×？	2.4×2.8×2.4		62～66	AT3を切る	大
	3	3×2	6.9×4.6	31.74	N 4° W	方50～70	20～30	2.3×2.3	2.3×2.3	2.3×2.3×2.3	2.3×2.3×2.3	62～66	AT5を切る	大
	4	3×2束	4.9×4.4	21.56	N21° W	円40～60	20	2 ×2.4	2 ×2.4	1.70×1.5×1.7	1.7×1.5×1.7	90～100	AT6を切る	大
	5	5×2	9.4×4	37.6	N23° E	円55～70	20	2 ×2	2 × 2	1.9×1.9×1.9×1.9×1.8	1.9×1.9×1.9×1.9×1.8	43～46	AT10・AT1を切る	大
	6	5×3	10.5×4.7	49.35	N 7°30′W	方60～70	20～25	1.4×1.8×1.5	1.8×1.4×1.5	2.1×2.1×1.8×2.1×2.1	2.1×2.1×2.1×2.1×2.1	55	AT11・AT13を切る	大
	7													
	8													
	BH1	5 × 2	12 ×5.5	66	N 8°30′E	方50～80	20～30	2.6 ×2.9	？ × ？	2.5×2.5×2.5×	2.2×2.4×2.5×2.5×2.4	43～46		大
	2	2 × 2	3.3 × 3.1	10.23	N 3° W	方50～70	20	1.55×1.55	1.55×1.55	1.65×1.65	1.65×1.65	90～100	HB3に切られる	小
	3	2×2束	3.1 × 3.1	9.61	N 6° W	円40～60	12～20	1.4 ×1.7	1.4 ×1.7	1.55×1.55	1.55×1.55	90～100	HB3に切られる	小
	4	3×2束	5.4 × 3.9	21.06	N 0°30′W	円40～60	20	1.8 ×2.1	1.8 ×1.5	1.6×1.8×2.0	1.8×1.8×1.8	72	HB2を切る	大
	5	3×2束	5.2 × 3	15.6	N 4°30′E	方50	15～20	1.5 ×1.5	1.5 ×1.5	1.65×1.4×2.15	1.65×1.4×1.65	62～66	BT8を切る	小
	6	2×2以上	3.4×1.5以上	(10.2)	N12°30′W	円40～50	20	？ ×1.5	？ ×1.5		1.7× 1.7	80～88		小
	7	3×2束	4.45×4	17.8	N 5°30′E	方55～80	25～30	2.1 ×1.9	1.9 ×2.0	1.65×1.4×1.4	1.65×1.4×1.4	90～100	BT7を切る	小
	CH1	1以上×5以上	4.9×9以上	(55.125)	N 1° W	方60～90	30					36～39	CH10・CT11を切る	大
第3住居跡群	EH	4以上×2以上	4.2以上×4.1	(28.7)	N 2°30′E	方70	30		1.9 ×2.2	×2.1×2.1	×1.95×1.95	36～39		小
	FH1	4以上×2	7.55以上×3.4	(32.1)	N 7°30′E	方60～70	20～25	1.7 ×1.7		1.7×2.2×1.65×2×		36～39	FT2.FT5を切る	小
	2	3以上×2×以上	3.7以上×1.3以上		N10°30′E	方60～70	15～25	1.3 ×		1.7×2×		？	FT2を切る	大
	3	5 × 2	8.9×3.85	34.625	N 3° E	方60～80	20～30	1.95×1.9	1.75 ×1.95	1.75×1.8×1.6×1.75×2	1.75×1.8×1.6×1.75×2	43～46	FT16を切る	小
	4	3 × 2	6.7 × 4.9	32.83	N 4°30′E	方70～80	25～35	2.5 ×2.4	2.5×2.4	2.4×2.1×2.2	2.4×2.1×2.2	90～100	FT19・FT21を切る	大
第5住居跡群	GH3	3×2	5.25×4.25	22.3125	N11° W	方40～65	15～25	2.35×1.9	×1.5 ×	1.75×1.75×	1.75×1.75×	80～88		大
	2	3×2束	5×4	20	N 6° E	方50～80	20	2 ×2	2.3×1.7	1.8×1.6×1.6	1.7×1.4×1.9	80～88		大
第7住居跡群	HH1	2×			N 1° E									
	IH5	3×2以上	6.6以上×	(48.4)	N13° W	方60～70		2.2 ×2.2		2.2×2.2×2.2×	2.2×2.2×	43～46		大
	4	5×2	4.4	42.51	N14°30′W	方60		1.95×1.95	×1.7	2.05×2.05×	1.8×	36～39	IT7．IT9を切る	小
	3	5×2	10.9×3.9 8×3.15	25.2	N 5° E	円18～50	15	2 ×1.15	1.15×2 1×1×1.5	2.05×2.7×2.05 2.3×1.7×1.5×1.5×1	1.8×1.3×1.7×1.5×1.5	36～39	IT5を切る	小
第8住居跡群	IH2	3×3	5.1 × 3.5	17.85	N 3° E	円30～60		1.25×1×1.25	1×1×1.5	1.7×1.7×1.7	1.7×1.7×1.7	55		小
	1	3以上×2以上	3.2 ×		N20°30′E	円40～60	20				1.6×1.6			
第9住居跡群	KH1	3×5	4.1 × 6.2	25.42	N37° E	円30～40	18	1.2×1.0×1.3×1.2×1.2	1.2×1.3×1.3×1.2×1.2	1.45×1.45×1.2	1.45×1.45×1.2	62～66		大
	LH1	4×3以上	7.4×3.9以上		N29° W	円40～60	20	×1.3×1.3×1.3	×1.2×1.2		1.6×2.1×2.1×1.6	？		大

表6　掘立柱建物跡計測値表

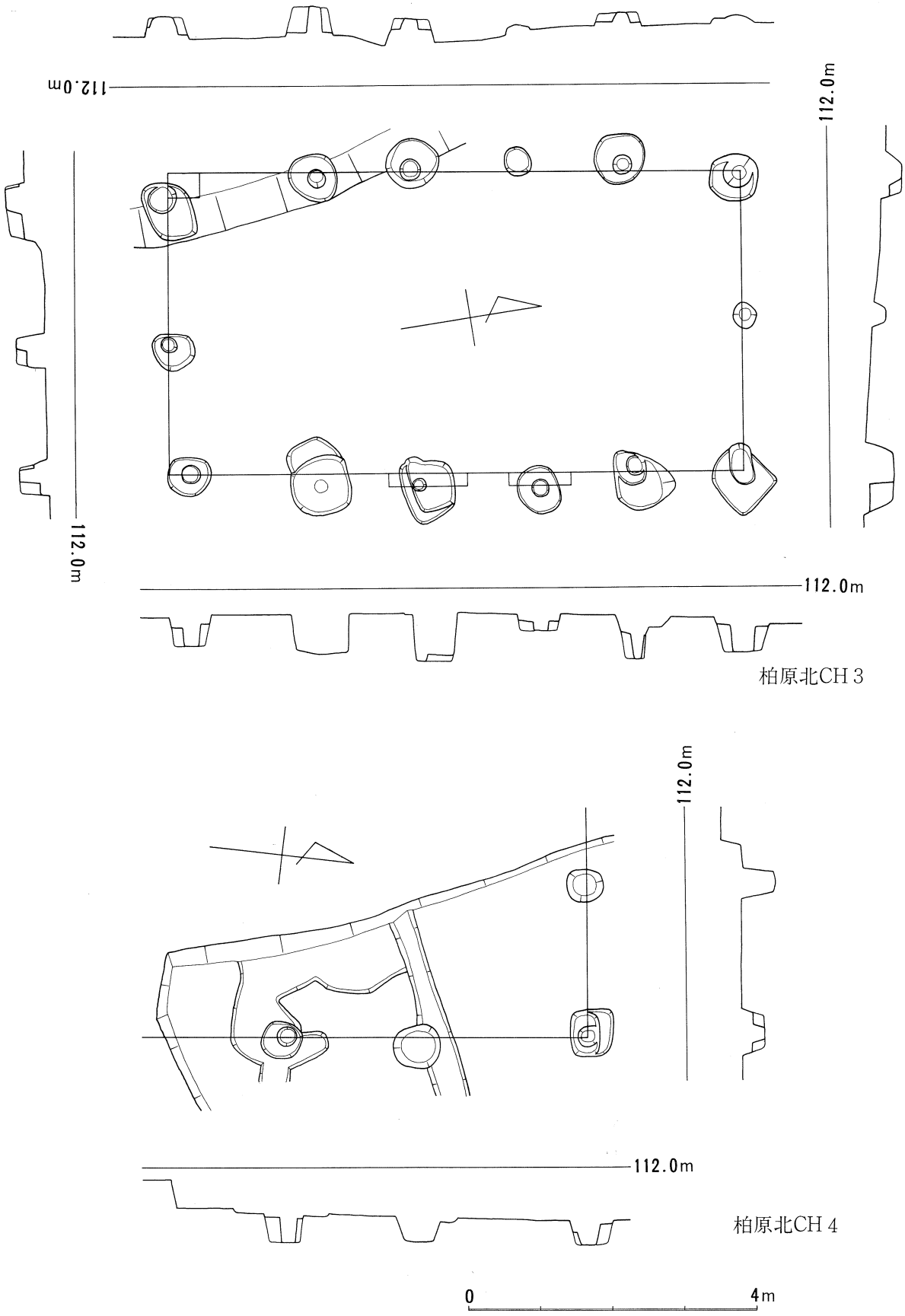


図60．柏原北ＣＨ３．４実測図

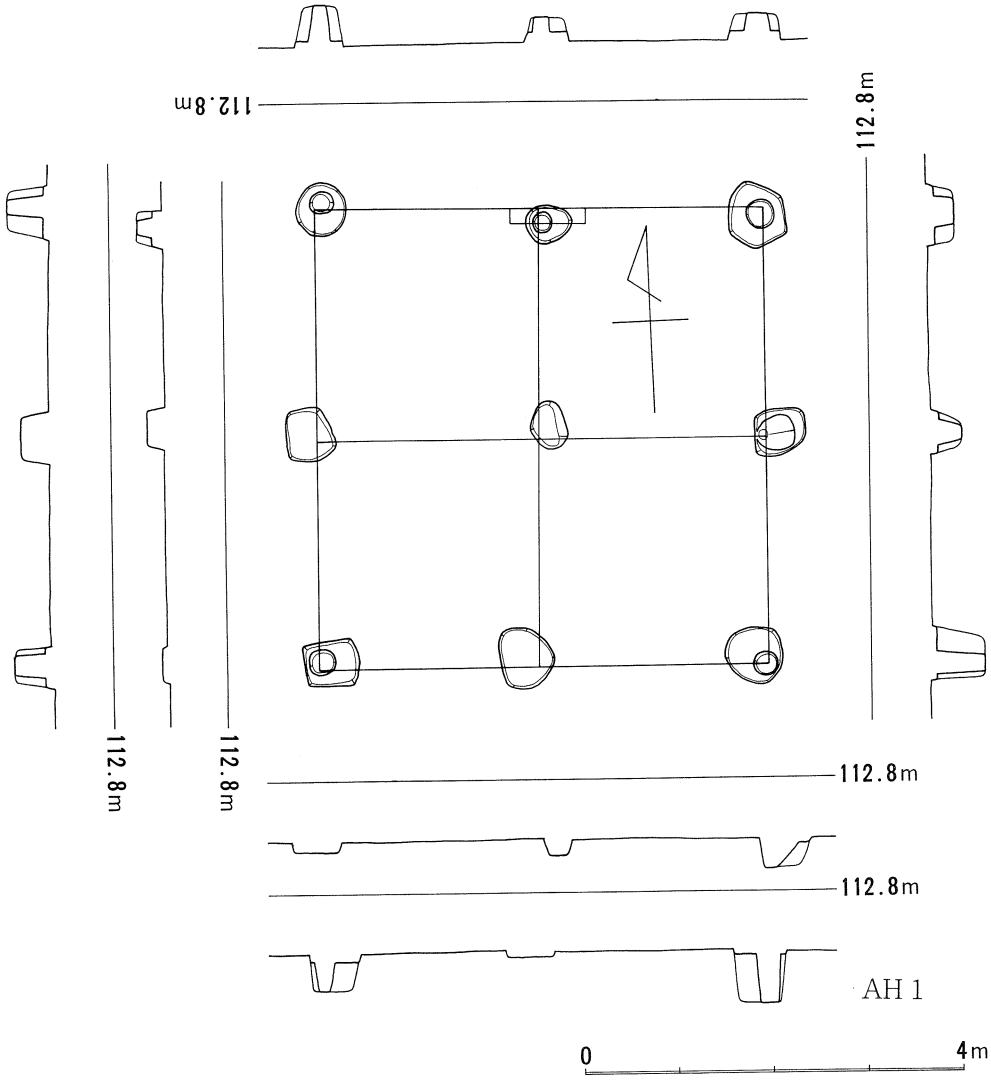


図61．ＡＨ１実測図

ＡＨ４（図64）　３間×２間で、束柱を持っている。 4.9m× 4.4mで、 21.56m²の規模を持つ。円形の掘り方の柱穴で、柱痕は20cm程。Ｎ21°Ｗの方向にあり、ＡＴ６を切っている。ＡＨ３に近接している。

ＡＨ５（図65）　５間×２間で、 9.4m×４ｍ、37.6m²の規模である。Ｎ23°Ｅと大きく東にふれる建物である。柱穴は径55cm～70cmの円形で、柱痕は20cm程。柱間は南北両柱列が２ｍ、東西柱列は南端のみ 1.8mで、他は 1.9mで統一されている。ＡＴ10、ＡＴ11を切っている。

ＡＨ６（図66）　５間×３間で、ＡＴ11とＡＴ13を切っている。10.5m×4.7mで、49.35m²の規模を持つ。一辺60cm～70cmの方形の柱穴で、20cm～25cmの柱痕である。柱間は東西柱列が 2.1m、南北両柱列が･1.4m、 1.5m、 1.8mである。

ＡＨ７　３間×６間の東西棟と思われるが、柱穴の確認できない部分や柱通りの悪い部分があり、建物としては疑問の余地がある。

ＡＨ８　ＡＨ7と同様疑問の残る建物。3間×４間の東西棟の可能性もある。

ＢＨ１（図67）　５間×２間で、12m× 5.5mの66m²の規模を持つ。一辺50cm～80cmの方形の柱穴

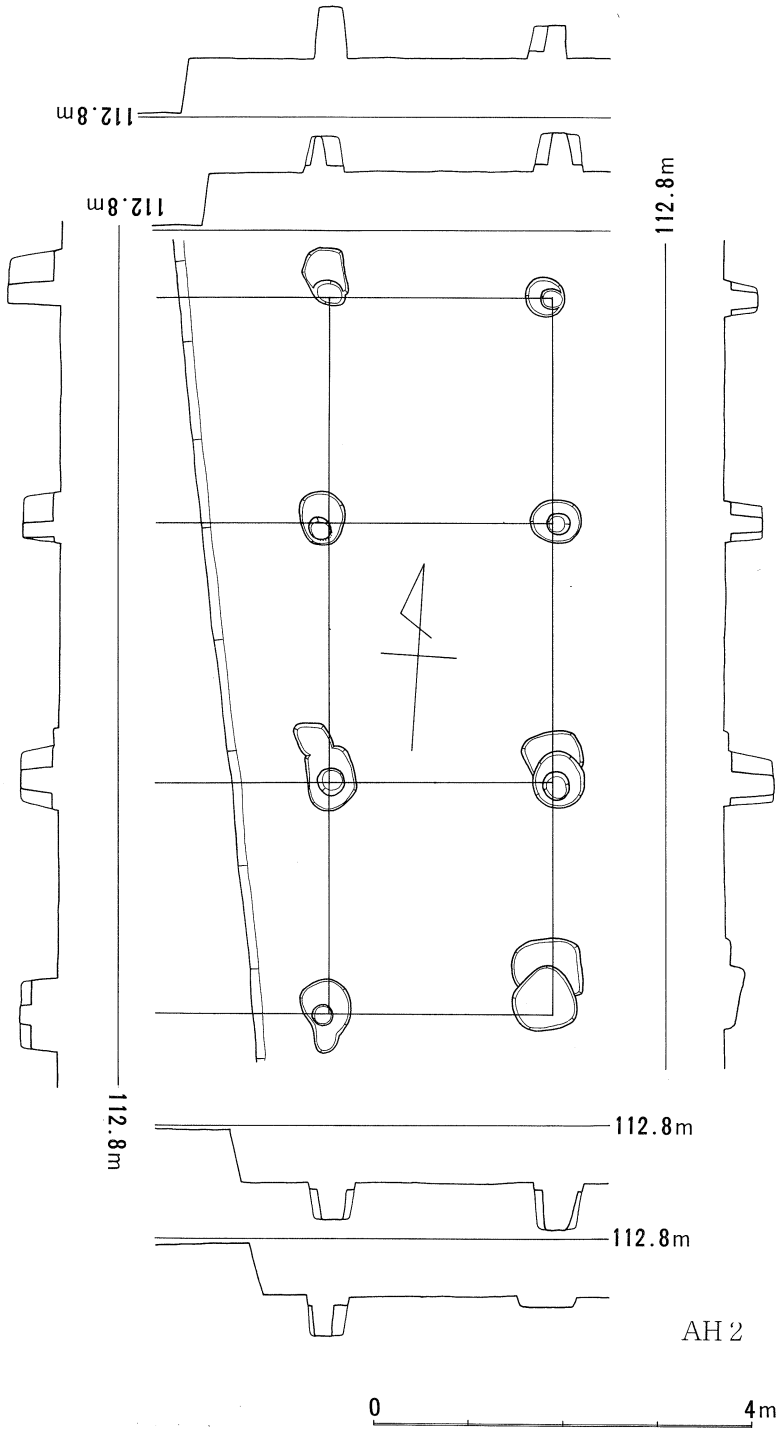


図62．ＡＨ２実測図

で20cm～30cmの柱痕を見る。N8°30′Ｅの方向にある。

ＢＨ２（図68）　２間×２間で、 3.3m× 3.1mの規模で 10.23m²ある。方形の柱穴で一辺50cm～70cmを計る。柱痕は20cm程。柱間は、南北両柱通りを1.55m、東西で1.65mに統一している。ＢＨ３に切られている。Ｎ３°Ｗの方向にある。

ＢＨ３（図68）　２間×２間で束柱を持つ。 3.1m× 3.1mの方形プランで、9.61m²の規模を持つ。柱穴の掘り方は円形で、ＢＨ２を切る。Ｎ６°Ｗの方向にある。

ＢＨ４（図69）　束柱を持つ建物で、３間×２間、 5.4m× 3.9mで 21.06m²の規模を持つ。Ｎ０°

30′ Wの方向にあり、柱穴は40cm～60cmの円形である。

ＢＨ５（図70）　３間×２間で、束柱を持つ。 5.2m×３ｍで、15.6m²を計る。Ｎ４°30′Ｅの方向にある。柱穴は方形で、一辺50cm、柱痕は15cm～20cm程である。ＢＴ８を切る。

ＢＨ６（図70）　２間×２間以上で、束柱を持たない。径40cm～50cmの円形の柱穴で、柱痕は20cm程。3.4m× 1.5m以上の規模であり、２間×２間かと思われる。N12°30′Wの方向にある。

ＢＨ７（図71）　３間×２間で、束柱を持つ。一辺55cm～80cmの方形の柱穴で、4.45m×４ｍ、17.8m²の規模を持つ。Ｎ５°30′Ｅの方向にあり、ＢＴ７を切る。

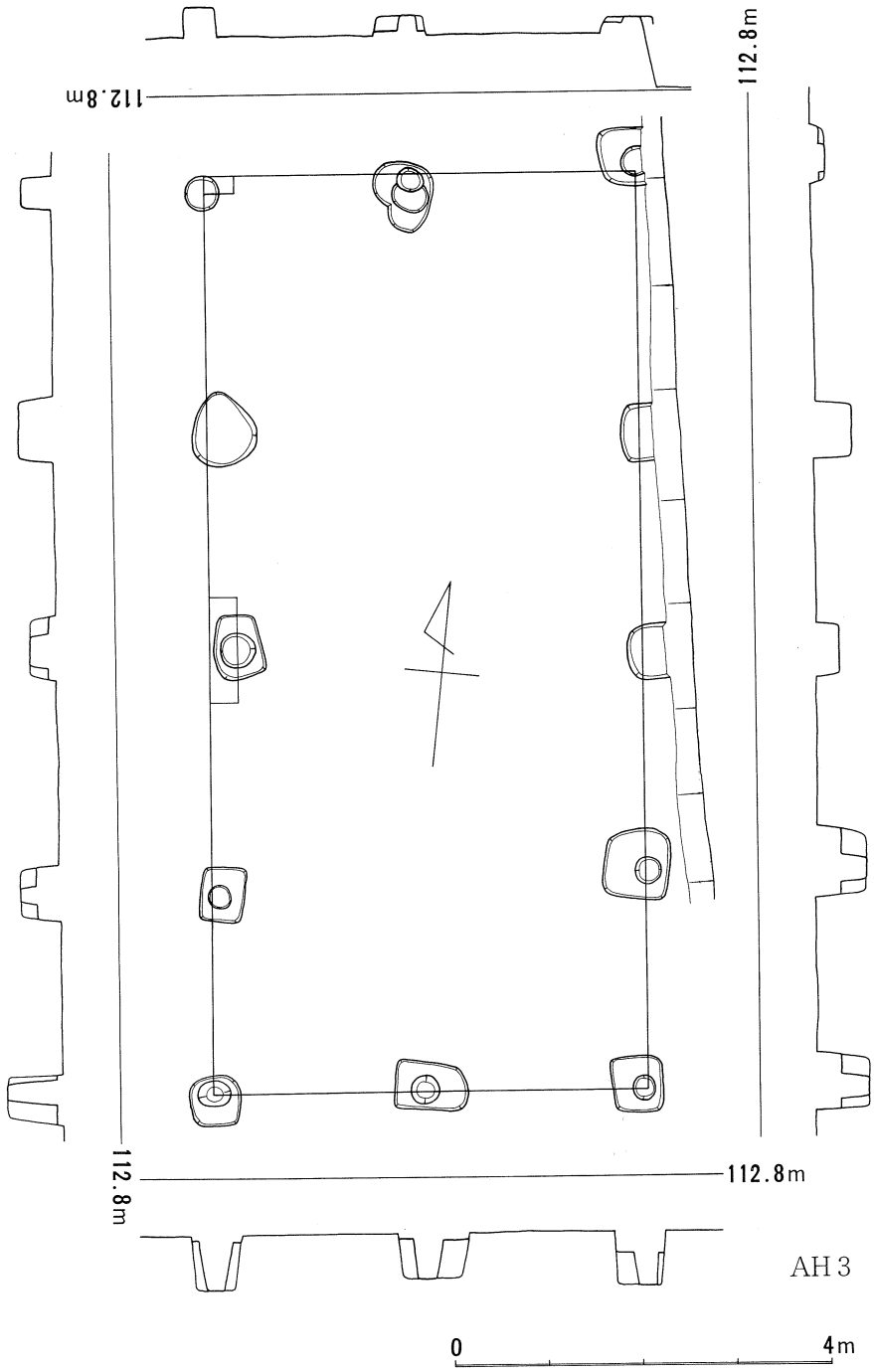


図63．ＡＨ３実測図

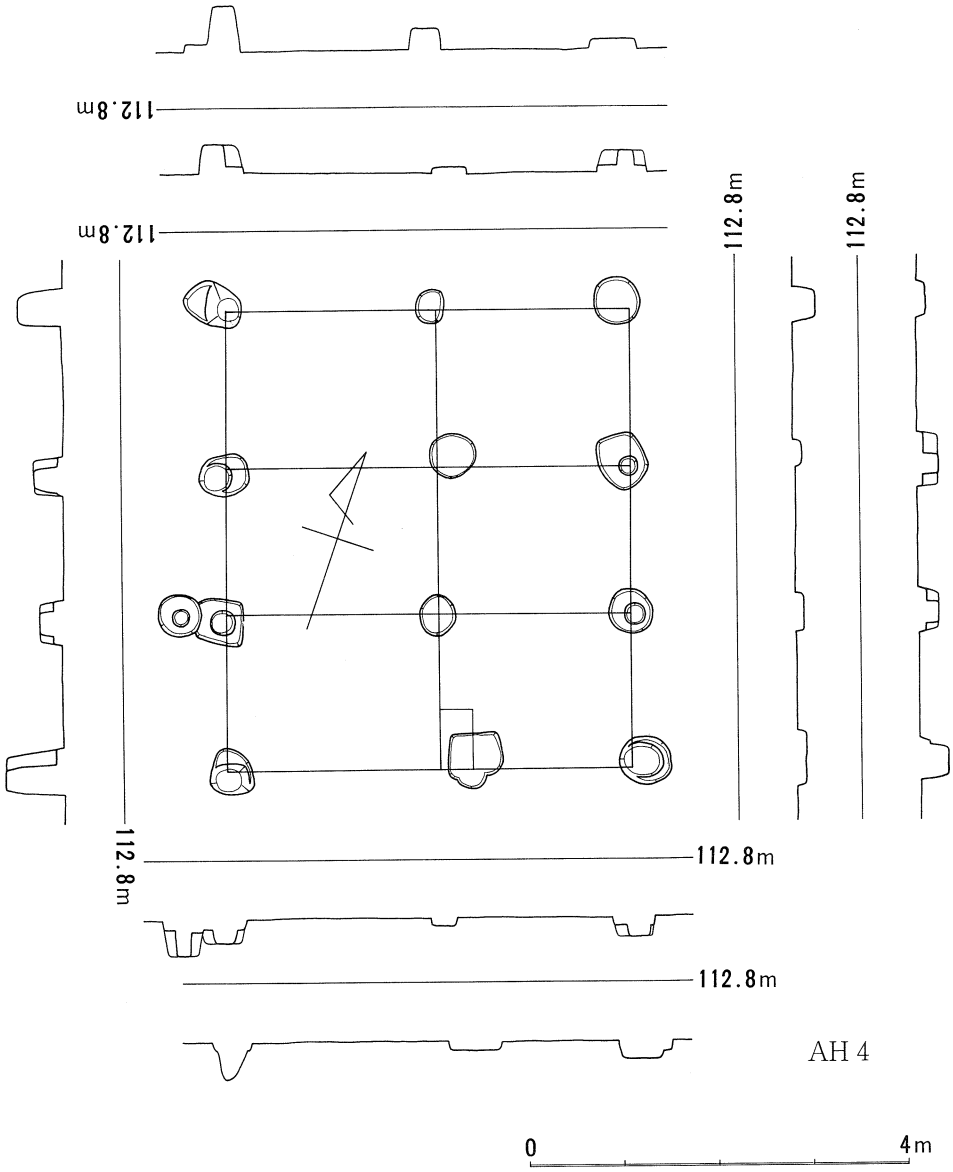


図64．ＡＨ４実測図

ＣＨ１（図72）　ＣＴ10、ＣＴ11を切る東西棟の建物、１間以上×５間以上のもの。一辺60cm～90cmの方形の柱穴で、柱痕は30cmを計る。Ｎ１°Ｗの方向にある。

以上16棟が才２住居跡群の掘立柱建物である。ＡＨ７・８は疑問の多い建物で、省略して14棟を類別すると、２間×２間が３棟～４棟（ＢＨ６を含む場合）で、束柱を持たないものが１棟ある。３間×２間が６棟で、束柱を持たないものが１棟ある。５間×２間が２棟、５間×３間が１棟で、ＣＨ１もこのどちらかに入るものと思われる。束柱を持つものを倉庫とすれば、２間×２間ではその規模が 22.09m²、束柱を持たないＢＨ２あるいはＢＨ６等も同様に倉庫であろう。３間×２間については、15.6m²～38m²までの規模があり、これは５間×２間あるいは５間×３間の37.6m²～66m²の最小規模に近いものが含まれ、束柱を持たないＡＨ３の 31.74m²をも倉庫とするには早計すぎる。建物の分布は、２間×２間あるいは２間×３間の建物群と２間×５間あるいは３間×５間の建物群とが交互に群在して分布する。

ハ）オ３住居跡群掘立柱建物跡

ＥＨ１（図73）　４間以上×２間で、Ｎ２°30′Ｅの方向にある。一辺70cmの方形の掘り方で、4.2ｍ以上×4.1ｍを計る。

ＦＨ１（図74）　４間以上×２間、7.55ｍ以上×3.4ｍの規模。Ｎ７°30′Ｅの方向にあって、柱穴は一辺60cm～70cmの方形。ＦＴ２、ＥＴ５を切っている。

ＦＨ２（図75）　３間以上×２間以上。Ｎ10°30′Ｅの方向で、ＦＨ１と重なるが切り合い関係はない。柱穴は一辺60cm～70cmの方形の掘り方。ＦＴ２を切っている。

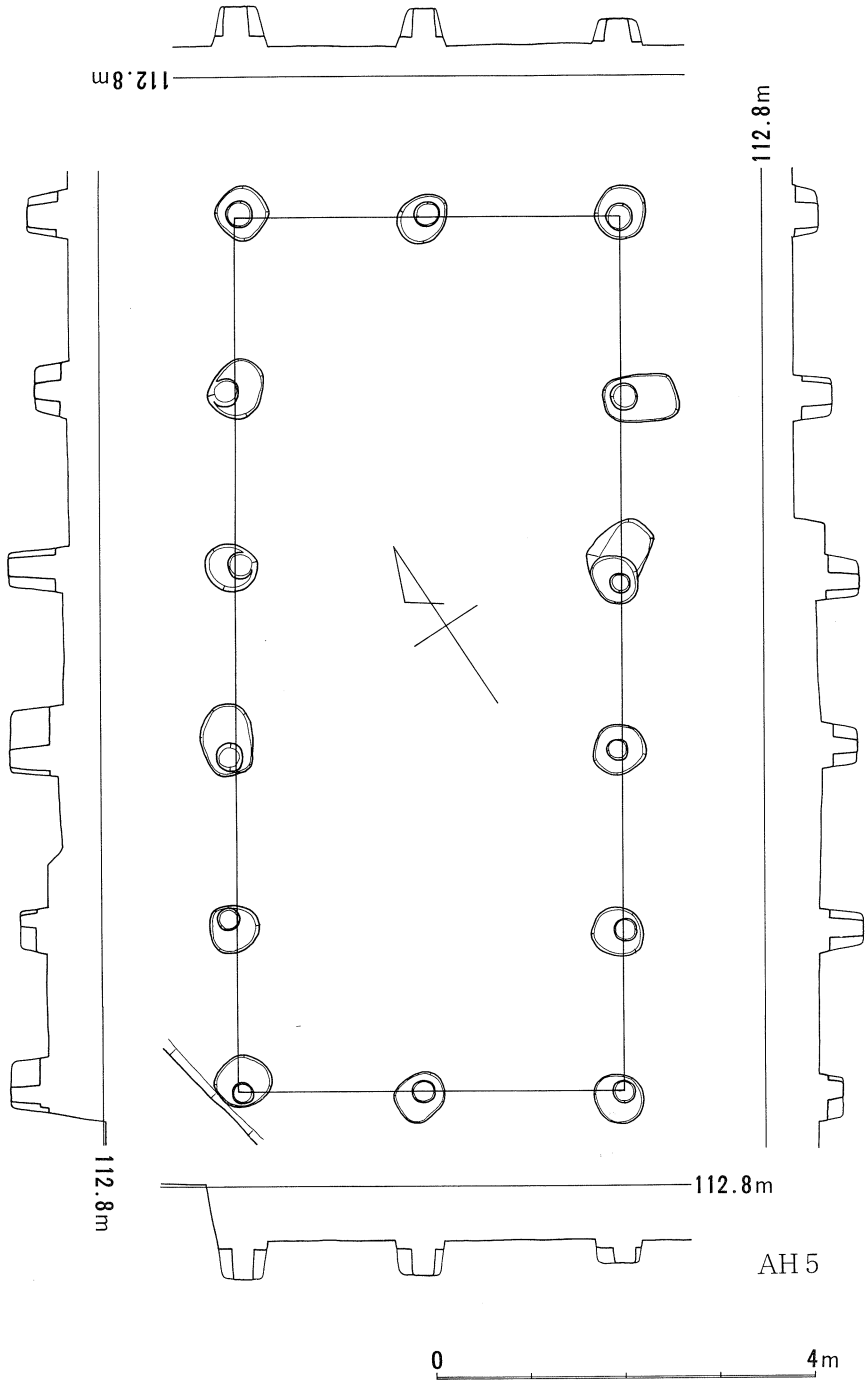


図65．ＡＨ５実測図

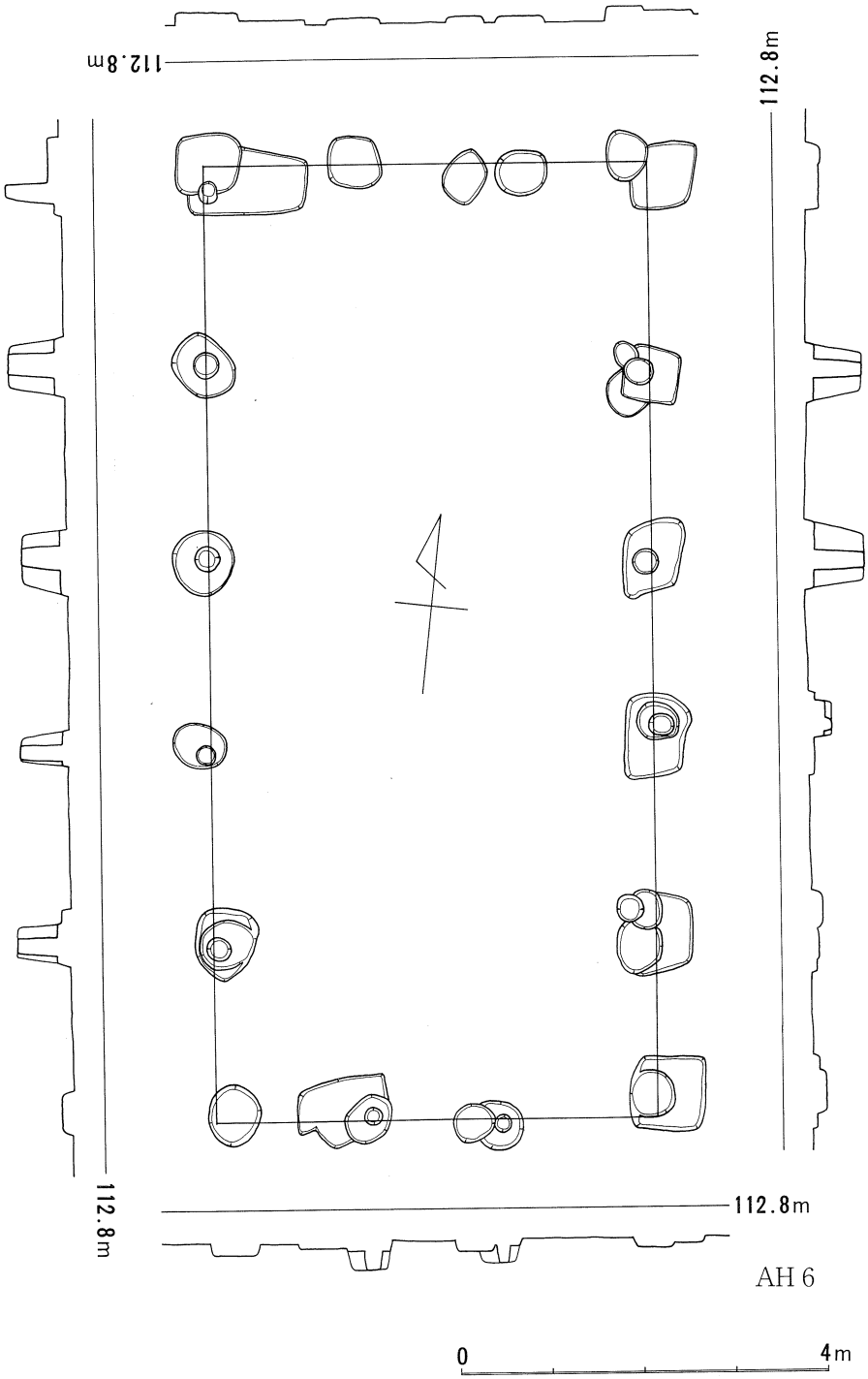


図66．ＡＨ６実測図

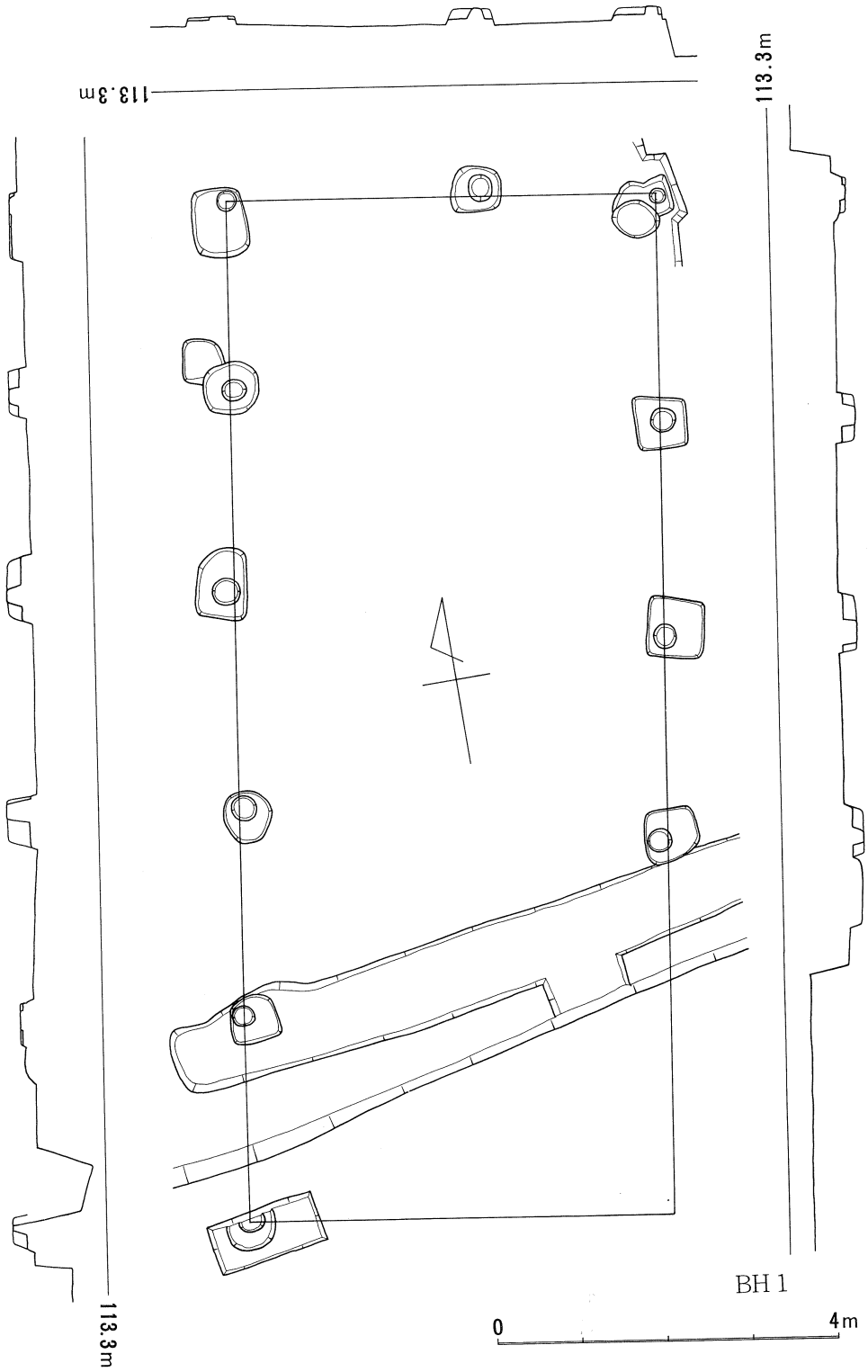


図67. ＢＨ１実測図

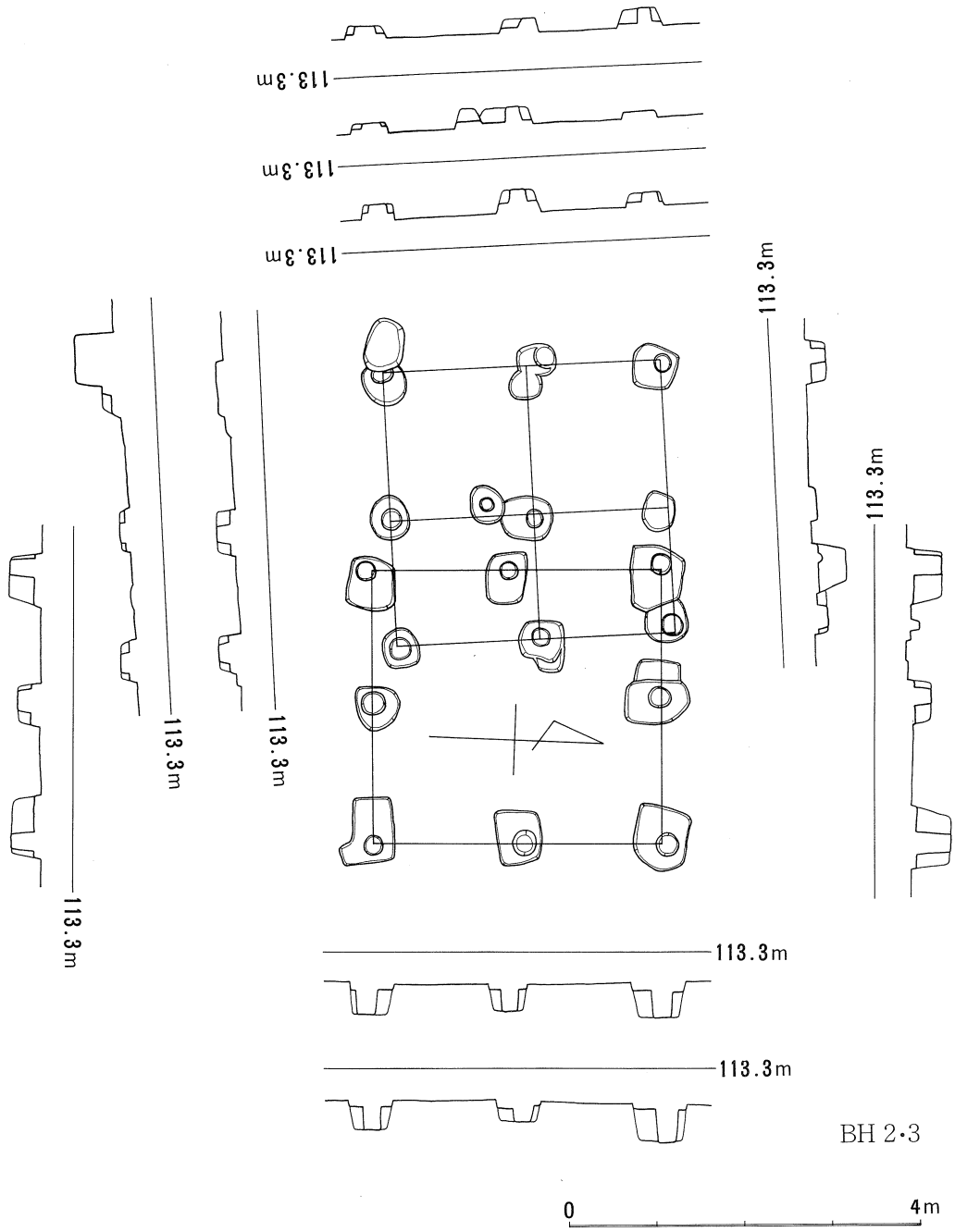


図68．ＢＨ２．３実測図

ＦＨ３（図76）　　５間×２間で、 8.9m×3.85m、34.265m²である。Ｎ３°Ｅの方向にあり、柱穴は一辺60cm～80cmの方形の掘り方。ＦＴ16を切っている。

ＦＨ４（図75）　　３間×２間で、 6.7m× 4.9m、 32.83m²の規模を持つ。Ｎ４°30′Ｅの方向にあり、一辺70cm～80cmの方形の柱穴を持つ。ＦＴ19、ＥＴ21を切る。

以上が才３住居跡群の掘立柱建物跡である。束柱を持つものがなく、５棟中３棟までが２間×５間あるいはこのように復原し得るもので、３間×２間のものについても、 32.83m²と規模が大きい。ＦＨ２・３を除き、他の４棟はＮ２°30′Ｅ ～ Ｎ４°30′Ｅの間にあり、ＦＨ２・３は重複しながらもＮ７°30′

E ～ N10° 30′ E の間に入る。柱穴もすべて方形の掘り方である。規模はすべて30m²前後、あるいは復原できる。

ニ）オ５住居跡群掘立柱建物跡

ＧＨ３（図79）　３間×２間であるが、南側柱列は３間である。5.25m×4.25mで、22.3125m²となる。N11° W の方向にあり、ＧＴ３を切る。一辺40cm～65cmの方形の柱穴である。

ＧＨ２（図79）　３間×２間で束柱を持つ。５ｍ×４ｍで、20m²の規模を持つ。一辺50cm～80cmの大形の柱穴、Ｎ６°Ｅの方向にある。ＧＴ２を切っている。

オ４住居跡群には掘立柱建物は検出できず、オ５住居跡群でも、３間×２間の２棟のみである。方位は異なるが、間数や規模、柱穴の形状など共通する点が多い。

ホ）オ７住居跡群掘立柱建物跡

ＨＴ１　２間×１間以上で、東へのびる。Ｎ１°Ｅの方向にある。

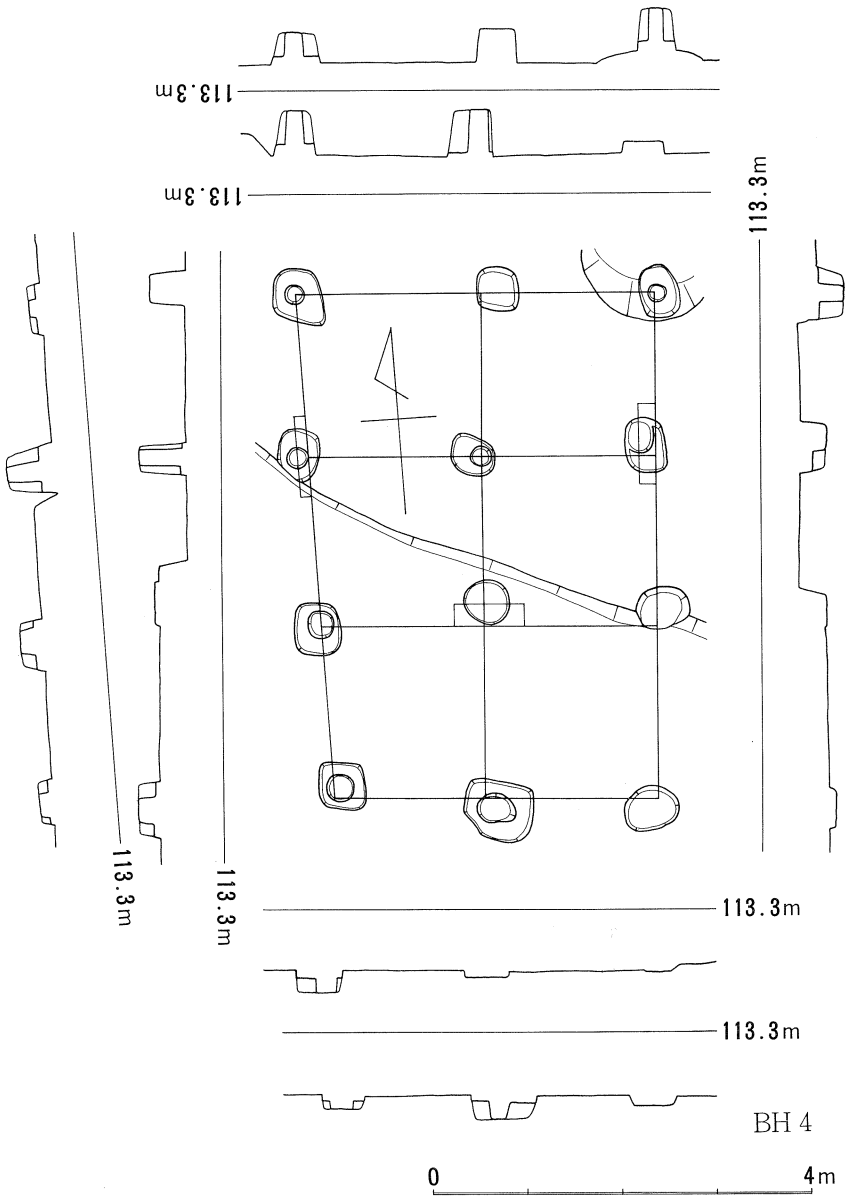


図69．ＢＨ４実測図

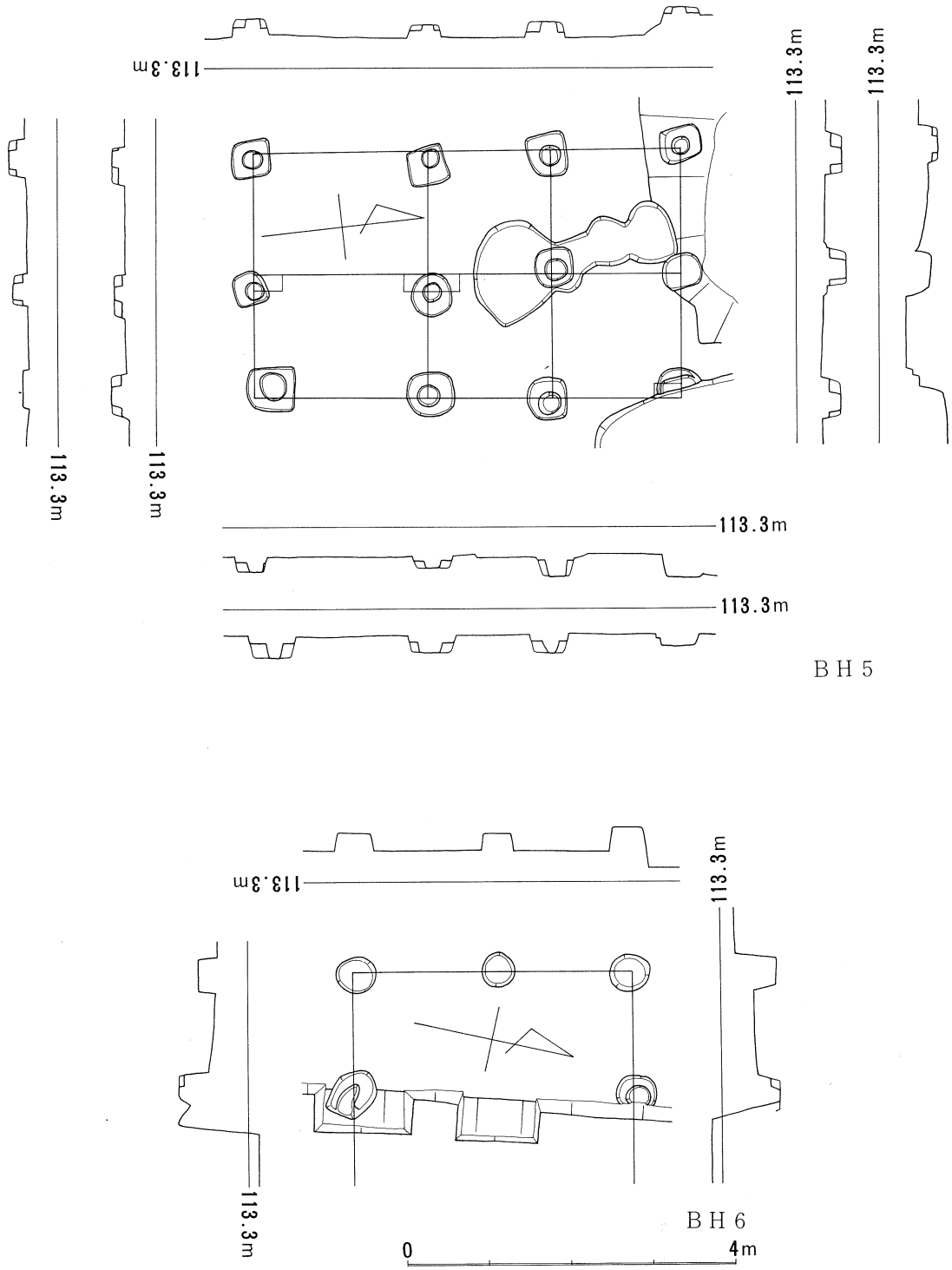


図70．ＢＨ５．６実測図

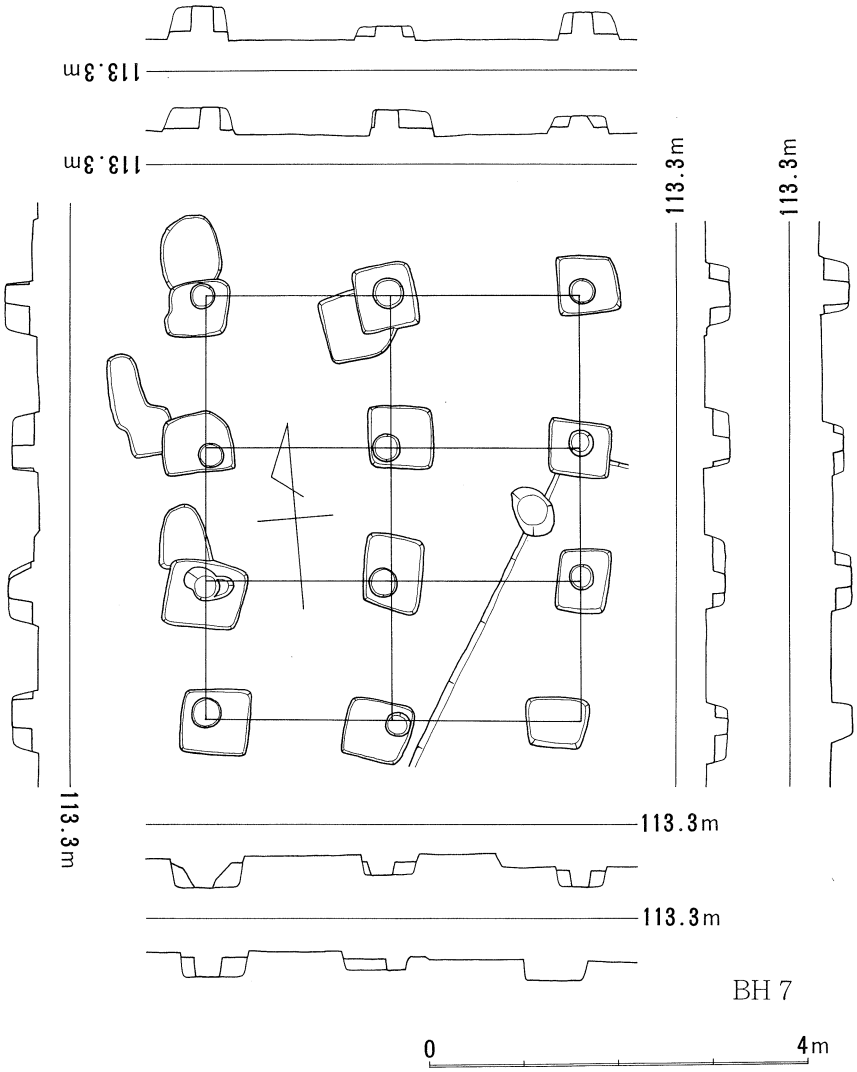


図71. ＢＨ７実測図

ＩＨ５（図82）　３間以上×２間で、 6.6m以上× 4.4mの規模。N13° Wの方向にあり、ＩＴ11に重なるが切り合いはない。柱穴は一辺60cm～70cmの方形の掘り方。

ＩＨ４（図83）　５間×２間で、10.9m× 3.9m、 42.51m²の規模を持つ。一辺60cmの方形の柱穴で、方位はN14° 30′ Wにある。ＩＴ７、ＩＴ９を切る。

ＩＨ３（図82）　５間×２間で25.2m²と小さい。Ｎ５°Ｅの方向にある。径18cm～50cmの円形の柱穴で、柱痕は15cm程。ＩＴ５を切っている。

以上の４棟では、柱間規模の小さいＨＴ１とＩＨ３が東にふれ、大きいものは西にふれる。ＨＴ１は東にのび、あるいは２間×２間程度の倉庫となる可能性がある。

へ）オ８住居跡群掘立柱建物跡

ＩＨ２（図81）　３間×３間であるが、南北 5.1m、東西 3.5mで、南北棟となる。 17.85m²の規模を持つ。Ｎ３°Ｅの方向にあり、径30cm～60cmの柱穴である。

ＩＨ１（図81）　３間以上×２間以上。おそらく南北棟であろう。N20° 30′ Eの方向にある。

ト）オ９住居跡群掘立柱建物跡

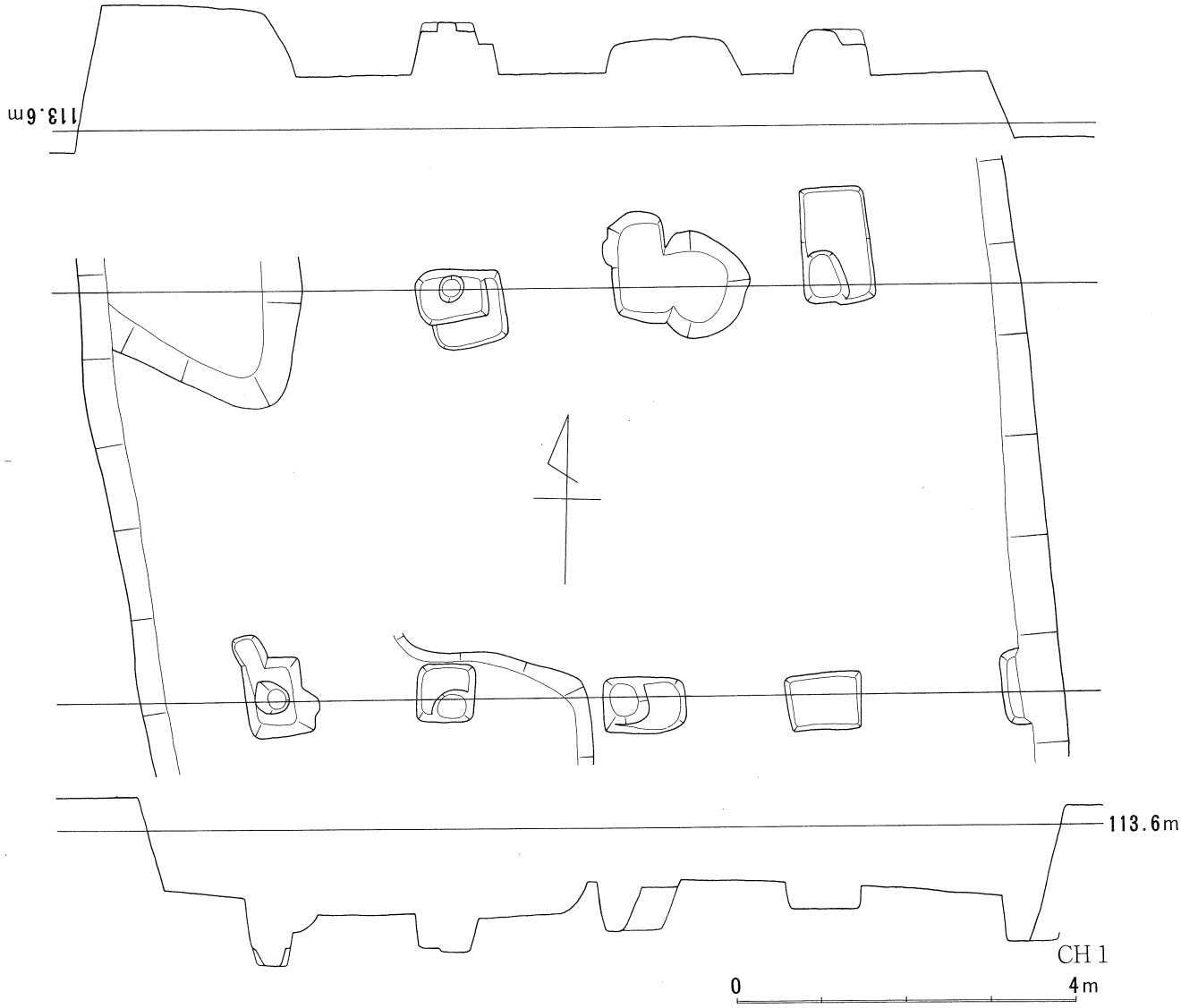


図72．ＣＨ１実測図

ＫＨ１（図84）　３間×５間で、Ｎ37°Ｅの方向にある。4.1m×6.2mで、25.42m²を計る。

ＬＨ１（図84）　４間×３間以上で7.4m×3.9m以上の規模を持つ。Ｎ29°Ｗの方向にある。

チ）まとめ(表６)

以上不確実な２棟を除く33棟については、ほぼ竪穴式住居跡群と重複するが、才４、才６住居跡群には認められず、逆に、才８、才９住居跡群に分布する。各建物群のグループ化や編年については次章にゆずり、ここでは、間数、規模、柱穴掘り方、方向、柱間寸法等の各項目について分類しておくこととする。なお、調査外に掛るものについては、復原しているものもある。表6に数値一覧表を作成しているが、復原数値はカッコ書きしている。

◦間数の分類

間数を分類すると次のようになる。

２間×２間（束柱を持つもの）－３棟　柏原北ＣＨ４、ＡＨ１、ＢＨ3

２間×２間（束柱を持たないもの）－２棟　ＢＨ２・６

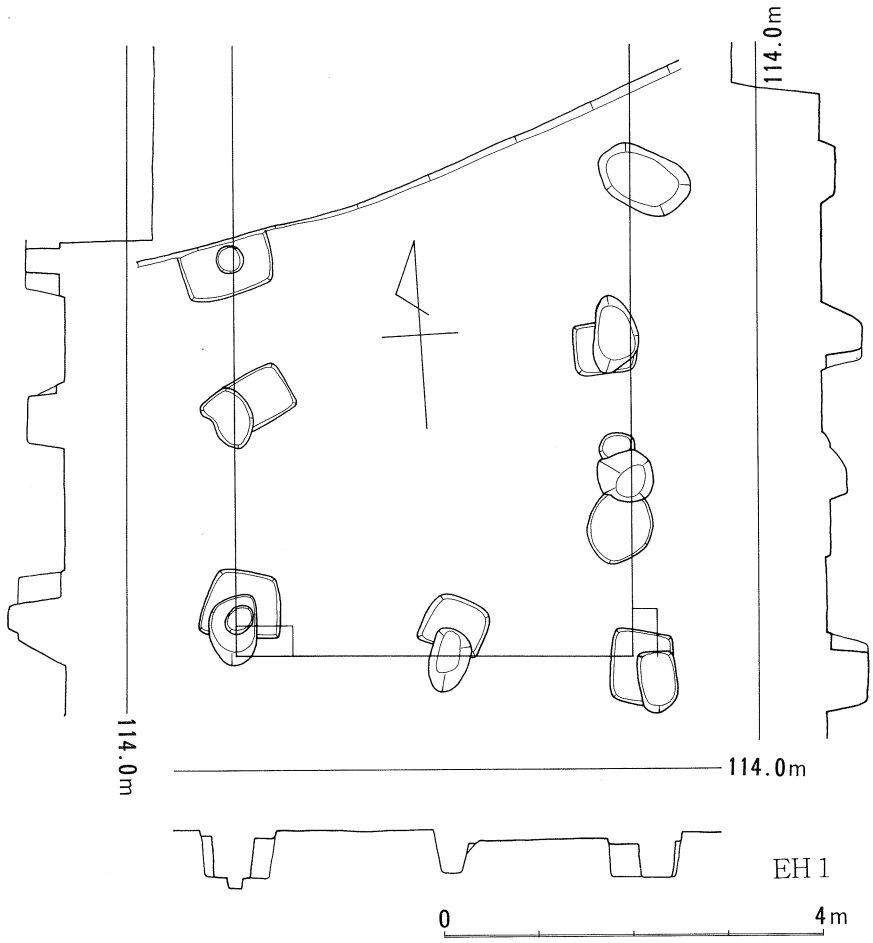


図73．ＥＨ１実測図

２間×３間（束柱を持つもの）－６棟　ＡＨ２・４、ＢＨ４・５・７、ＧＨ２

２間×３間（束柱を持たないもの）－４棟　柏原北ＣＨ２、ＡＨ３、ＦＨ４、ＧＨ３

３間×３間－２棟　柏原北ＣＨ１、ＩＨ２

５間×２間－10棟　柏原北ＣＨ３、ＡＨ５、ＢＨ１、ＣＨ１、ＥＨ１、
ＦＨ１・３、ＩＨ５・４・３

５間×３間－２棟　ＡＨ６、ＫＨ１

４間×３間以上－１棟　ＬＨ１

以上８種類に分類できる。束柱を持つものは２間×２間あるいは２間×３間に限られる。

◦規模の分類（図85）

建物の規模（面積）について、上記間数の分類に従って比較できるグラフを作成した。およそ３㎡、１坪程の差を基準に類別すると表８のごとく11に分けることができる。２間×２間では、束柱をもたないものに規模の大きいII・IIIがなく、２間×３間では、逆に、束柱を持たないものに規模の小さいIIがない。また、２間×３間のものの中には、５間×２間の規模に匹適するものも見られる。５間×３間のものはいずれも５間×２間の規模の中に包括される。３間×３間も２間×２間あるいは２間×３間の規模にほぼ等しい。なお、別表はグラフを表にかえたものである。

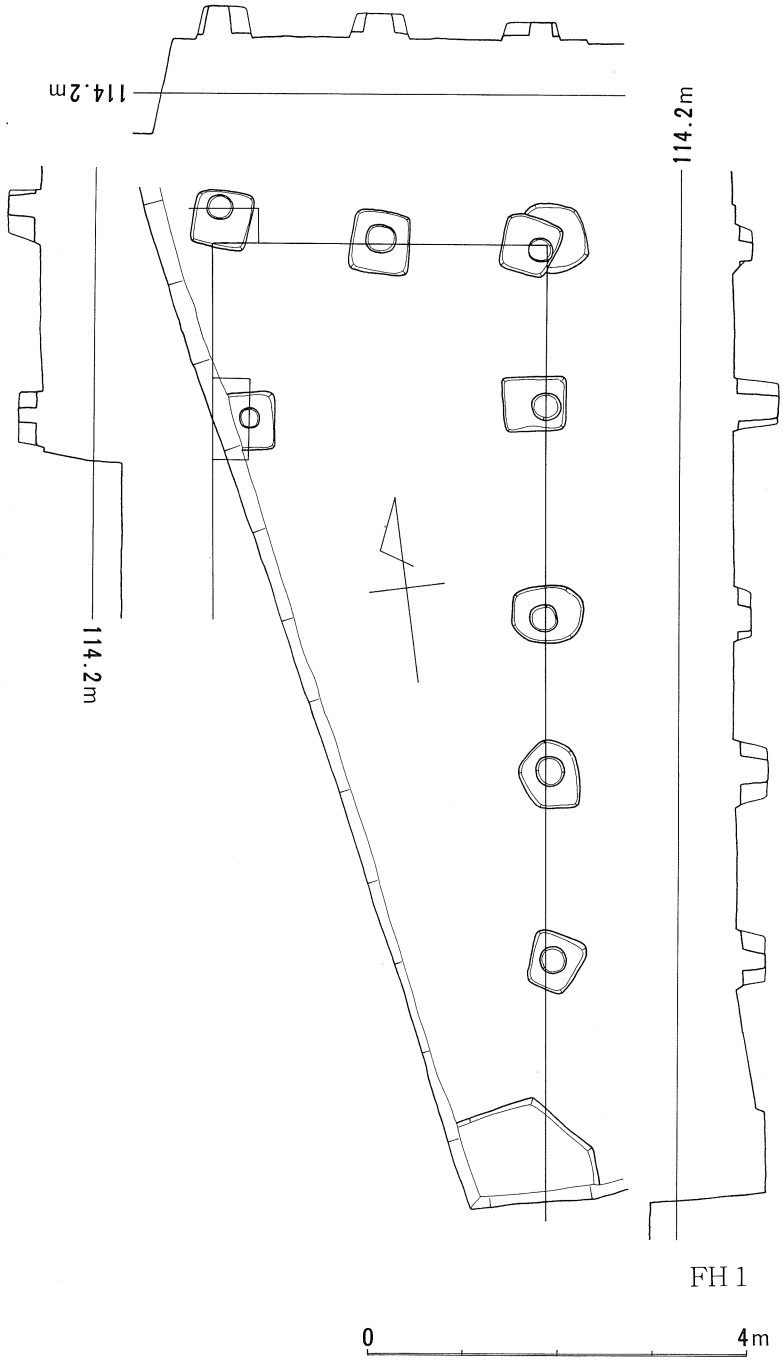


図74. ＦＨ１実測図

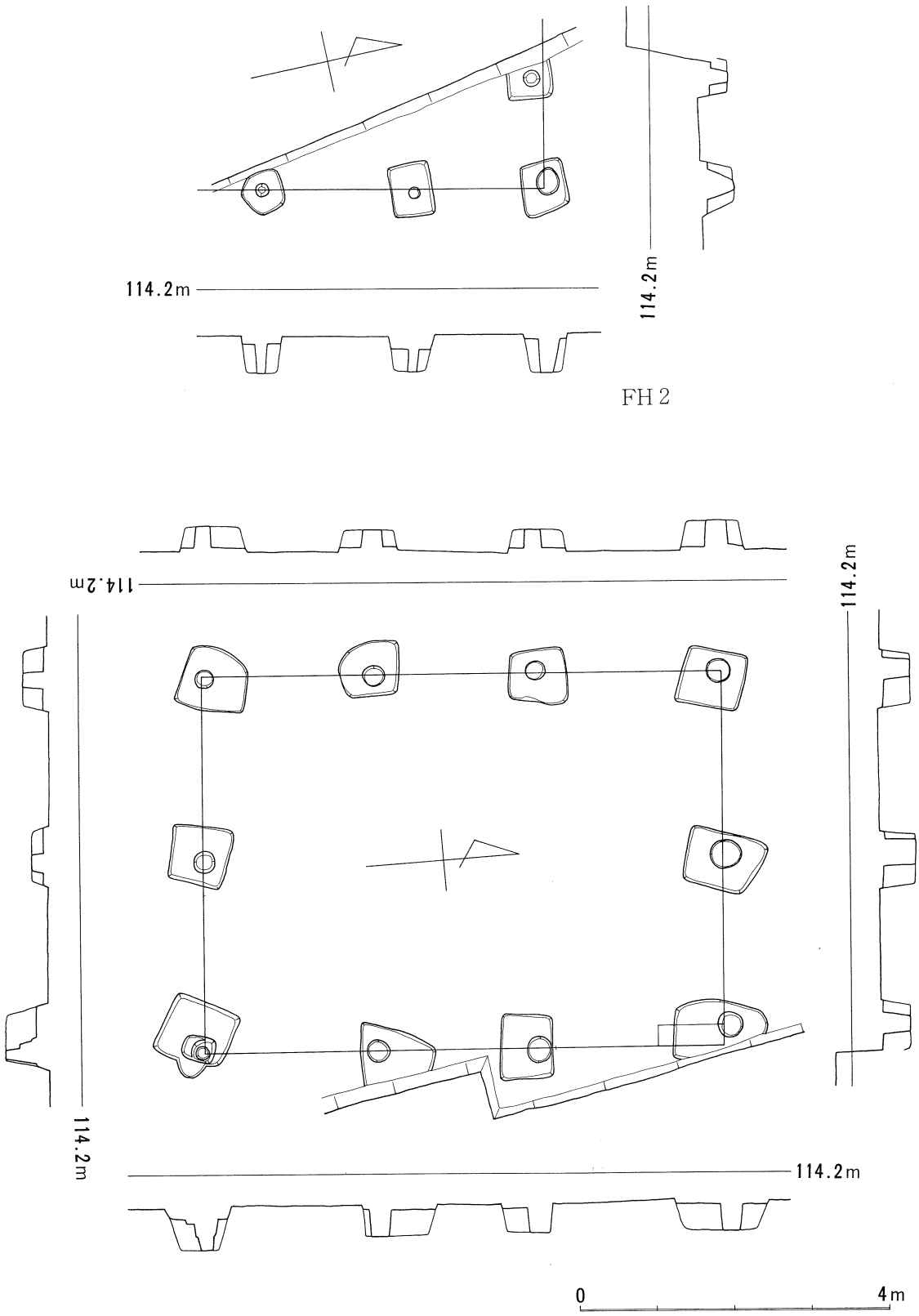


図75．ＦＨ２．４実測図

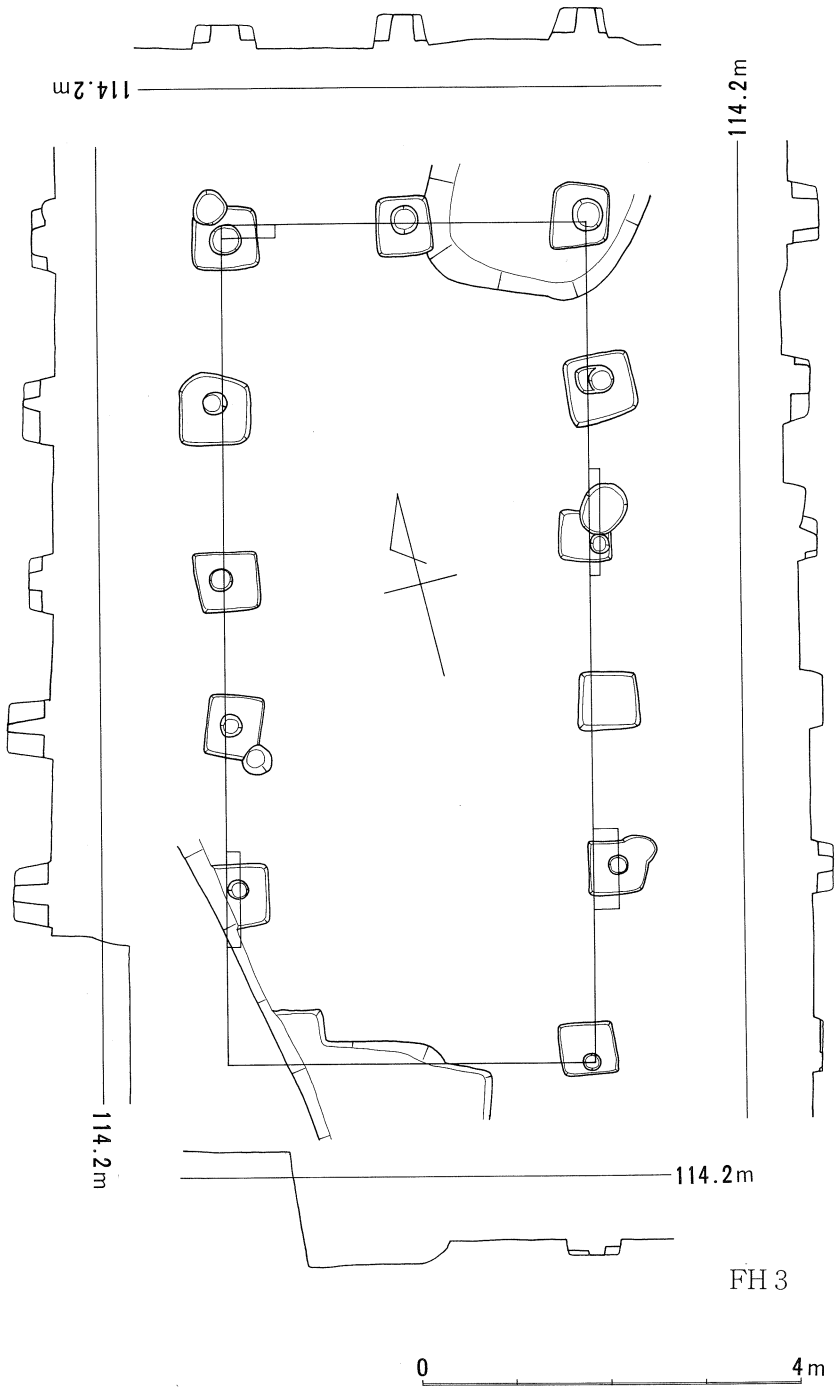


図76．ＦＨ３実測図

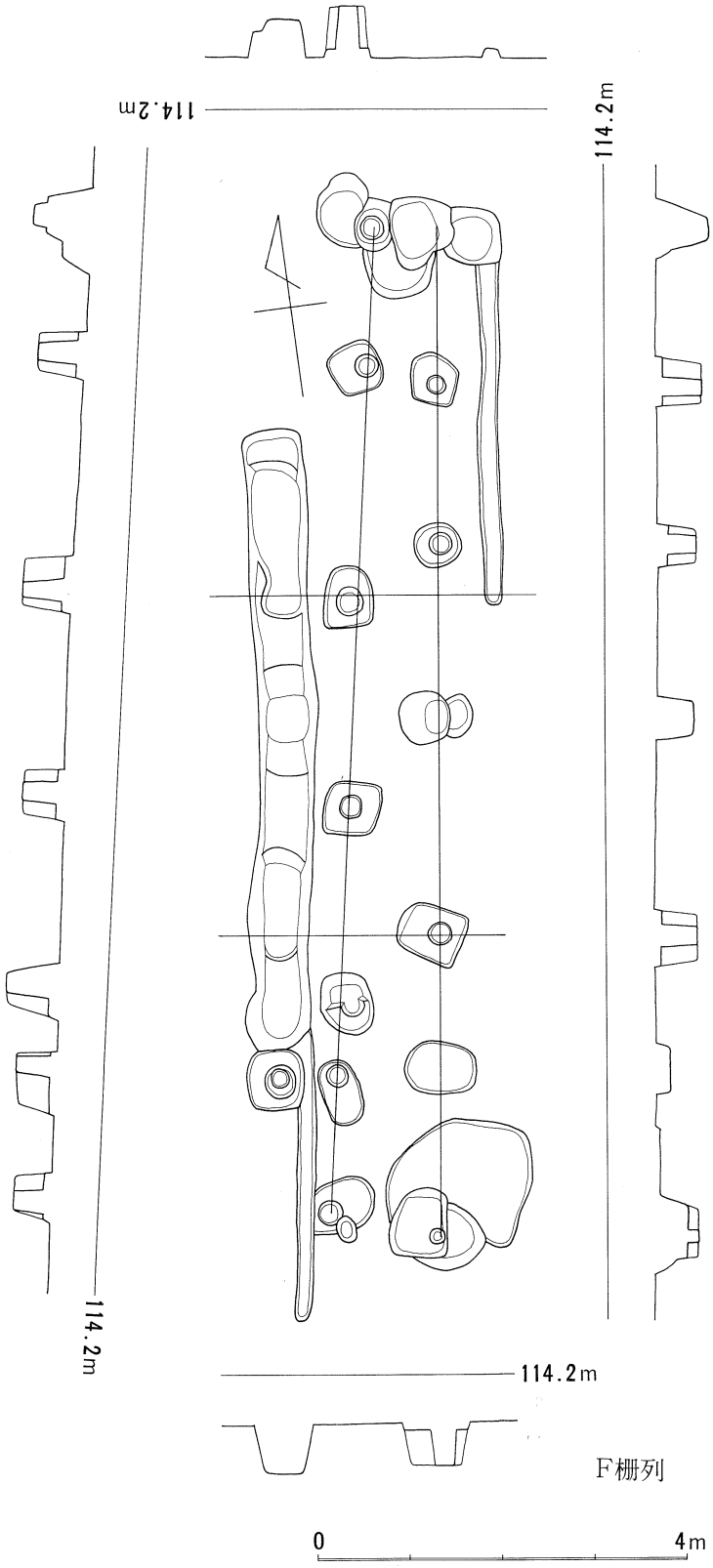


図77．F柵列実測図

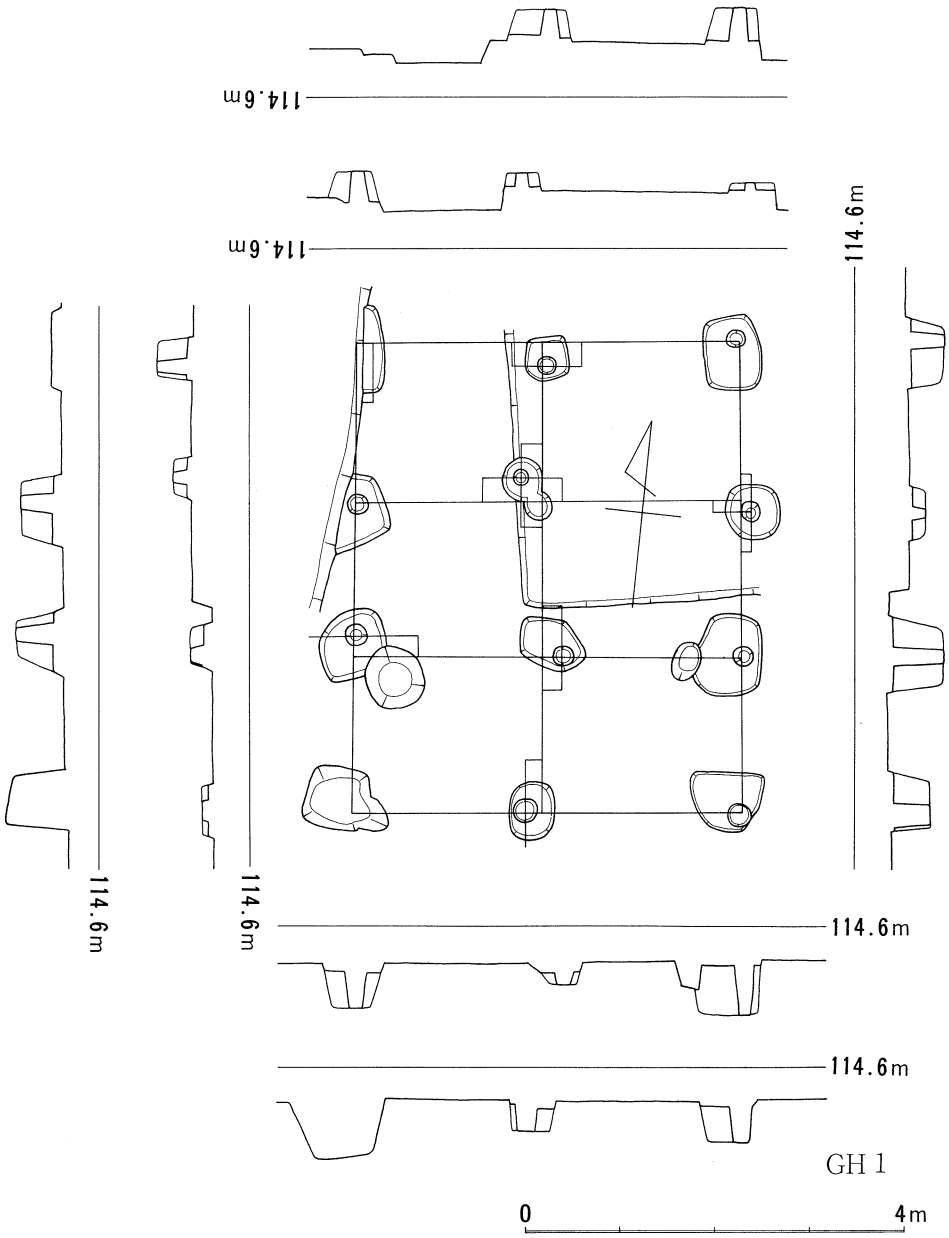


図78．ＧＨ１実測図

◦方位の分類

建物の軸線方位は、建物が正四角形に復原できることが極めて少なく、別表に示した数値についてはある程度の誤差を考慮に入れなければならない。ともかく、方位による分類では、磁北に対して東へふれる一群と西へふれる一群とに大別できる。東にふれる一群では、N37°ＥのＫＨ１、N23°ＥのＡＨ５、真北（昭和45年で磁北に対して６°40′東の方向）に近かく、Ｎ４°30′Ｅ～Ｎ８°30′Ｅの間に集中する柏原北ＣＨ３、ＢＨ１、ＢＨ５、ＢＨ７、ＦＨ１、ＦＨ４、ＧＨ２、ＩＨ３、磁北に近かく、Ｎ１°Ｅ～Ｎ３°Ｅの間にあるＡＨ１、ＥＨ１、ＦＨ３、ＨＨ１、ＩＨ２、さらに、N10°30′Ｅの方向にあるＦＨ２の５群に分けられる。

西にふる一群では、磁北に近かく、Ｎ１°Ｗ～Ｎ０°30′ＷのＢＨ４、ＣＨ１、Ｎ２°30′～４°Ｗ

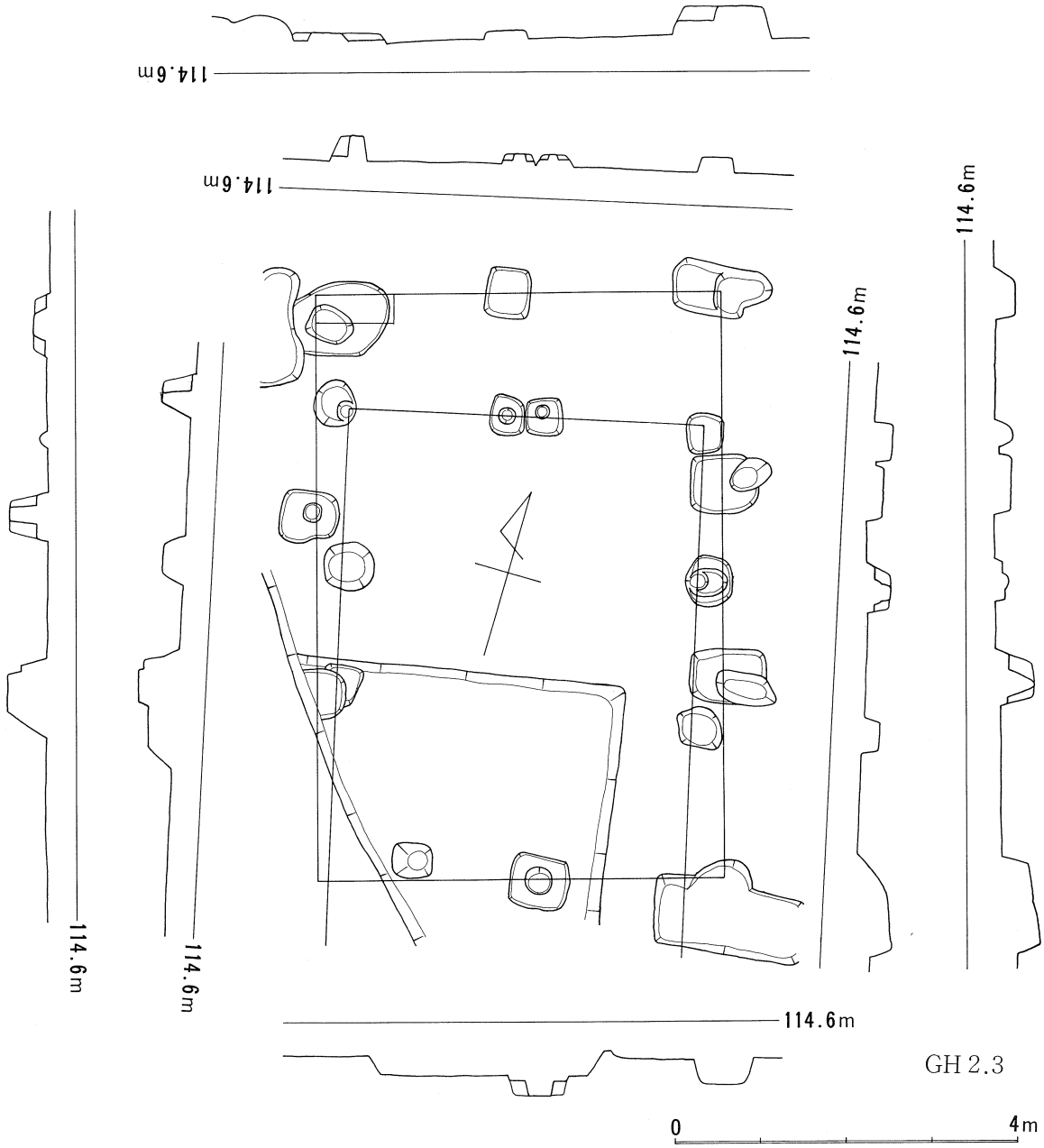


図79．ＧＨ２．３実測図

の柏原北ＣＨ１、ＡＨ２、ＡＨ３、ＢＨ２、Ｎ６°Ｗ～Ｎ８°Ｗの柏原北ＣＨ４、ＡＨ６、ＢＨ３、条里方向（Ｎ12° 30′ Ｗ）に近かく、Ｎ11° Ｗ～ Ｎ14° 30′ Ｗの柏原北ＣＨ２、ＢＨ６、ＧＨ３、ＩＨ５、ＩＨ４、Ｎ21° ＷのＡＨ４、Ｎ29° ＷのＬＨ１の６群に分けられる。ただし、これは、建物方位の密集程度から分けたもので、必ずしも分類し得たものではない。グループ分けしたものの方位差は30分から３度30分までの粗密があり、各グループ間にも、大きくふれるものは別として、１° 30′ ～ ３° の極めて近い方位を示すものである。すなわち、建物方位は極めて不統一といわざるを得ず、他の分類項目と総合させた上で再構成する必要がある。ただ、現存条里方向に一致、あるいは近似する一群、真北に近い一群、磁北に近い一群、これらと大きくずれるもの等が方位分類の目安になるだろう。

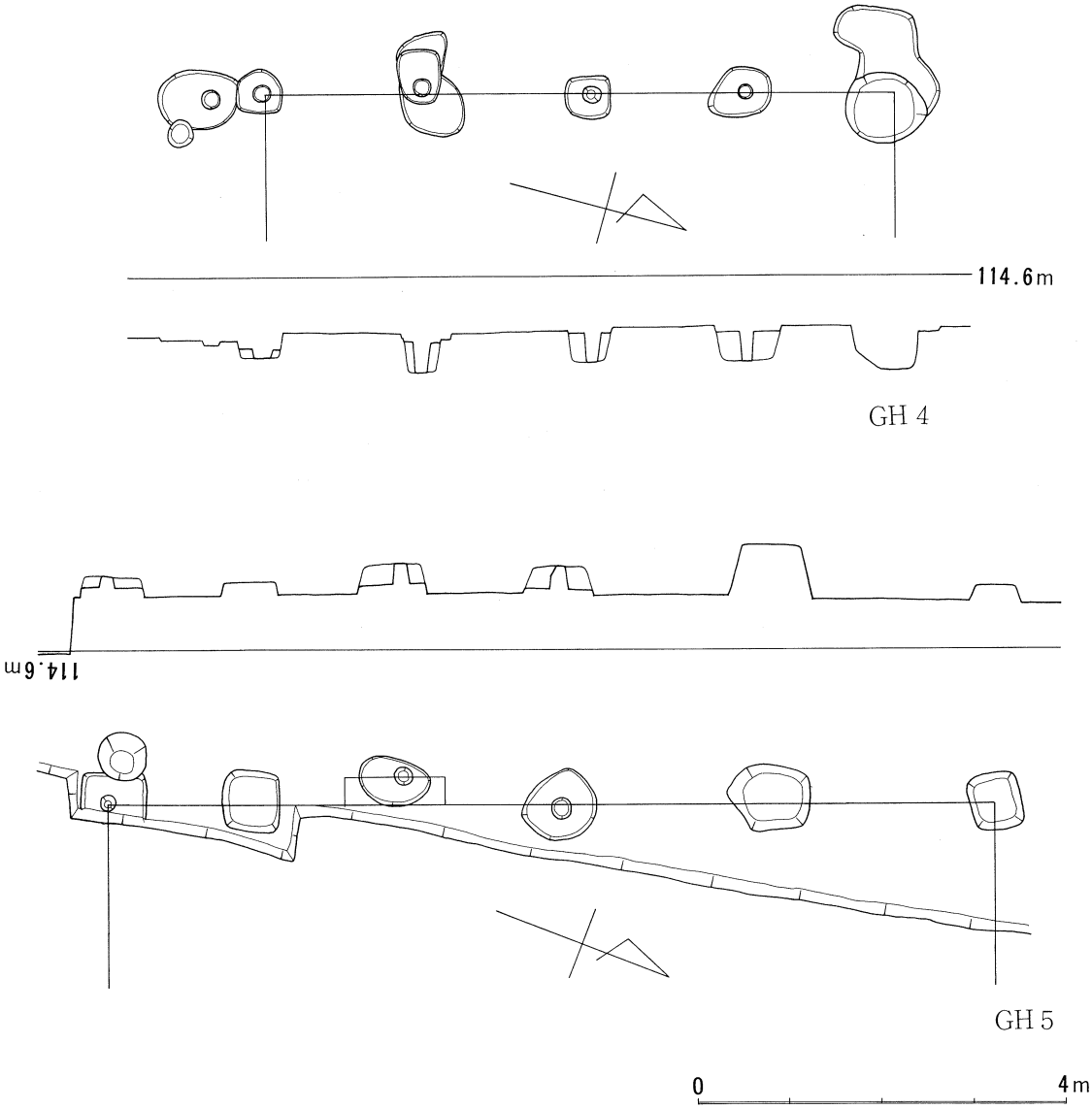


図80．ＧＨ４．５実測図

◦柱間寸法による分類

建物の柱間寸法は、１ｍから 2.9ｍの間で、33通りがある。これは図面上の操作であるが、これを間数分類毎に見ていくと表９のようにまとめることができる。

なお、この中で、ＧＨ３、柏原北ＣＨ１については、北側柱列の２間の数値をとっている。以上の類別の基準は、柱間寸法が２ｍ以上のもの、２ｍ未満のもの、２ｍの前後にまたがるもの、柱間寸法の差の大きいものと小さいもの等によっている。これを建物規模を加えてまとめると表10のようになる。

すなわち、(I) 2.1ｍ以上の大寸法で柱間を決めているもの、(III) 2.1ｍ以下の小寸法で柱間を決めているもの、(II)大小の両寸法を混在させているものに大別できる。同一間数のものの間では、当然ながら、(I)の大寸法をとるものは規模が大きく、(III)の小寸法をとるものは規模が小さい。(II)の場合、２間×３間のＢＨ５、２間×５間のＦＨ１、ＩＨ３・４、柏原北ＣＨ３等は、大寸法が 1.7～ 2.3ｍの比較的短い柱間が１ヵ所に見られ、その分他の箇所の寸法が小さくなっており、むしろ(III)に入れるべきである。

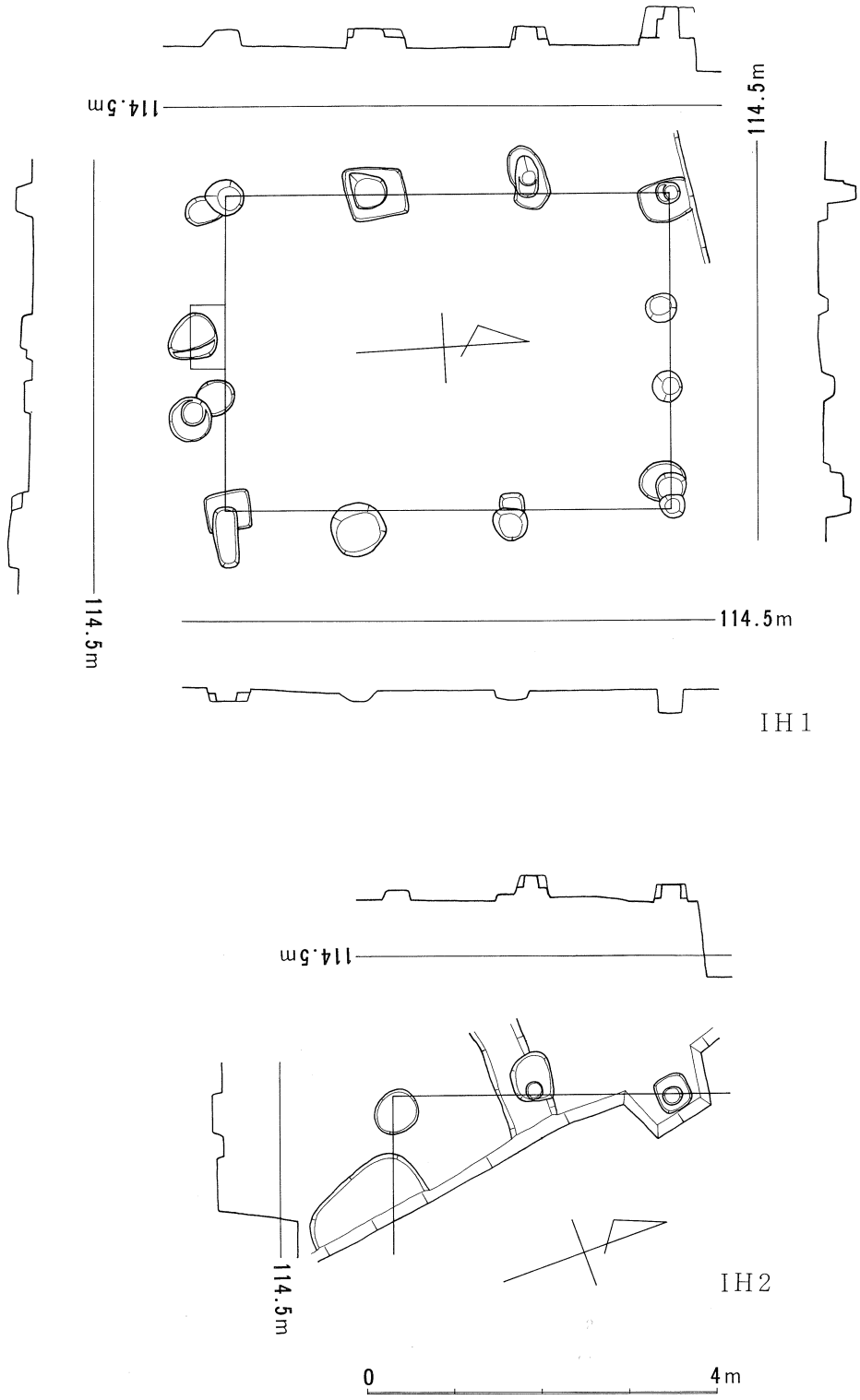
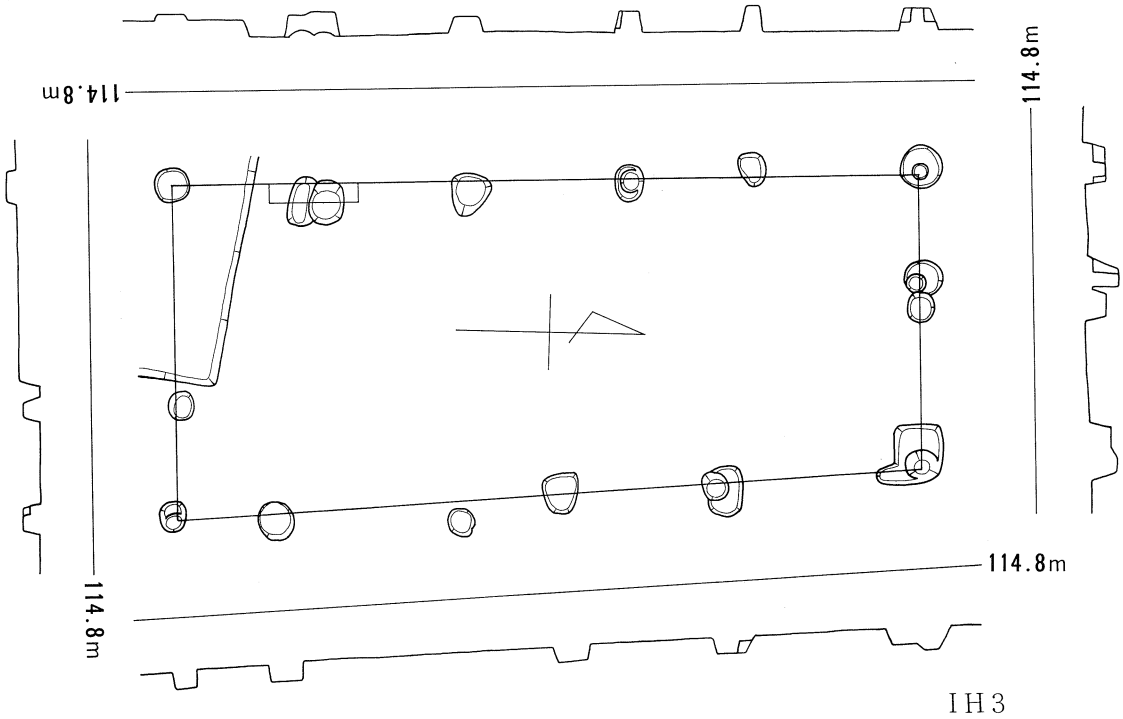


図81．ＩＨ１．２実測図



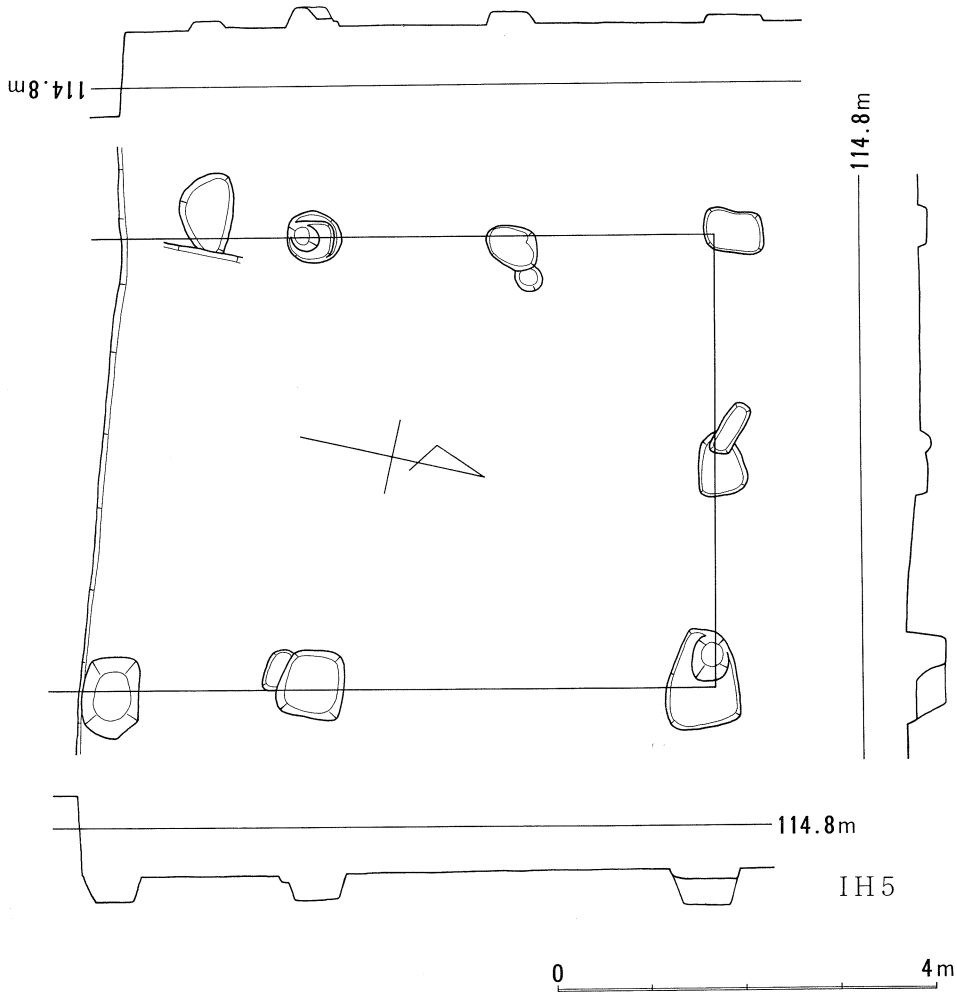


図82. ＩＨ３．５実測図

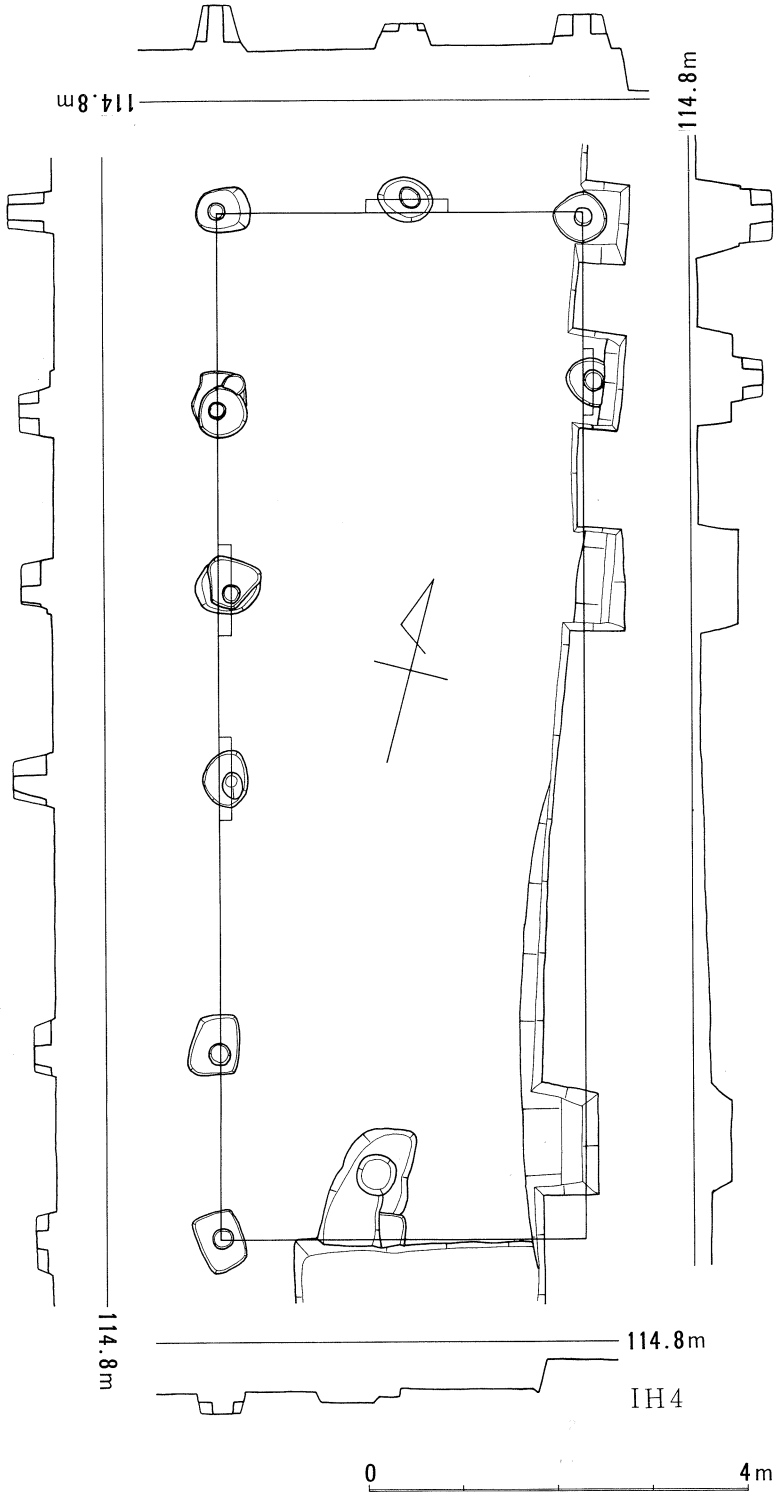
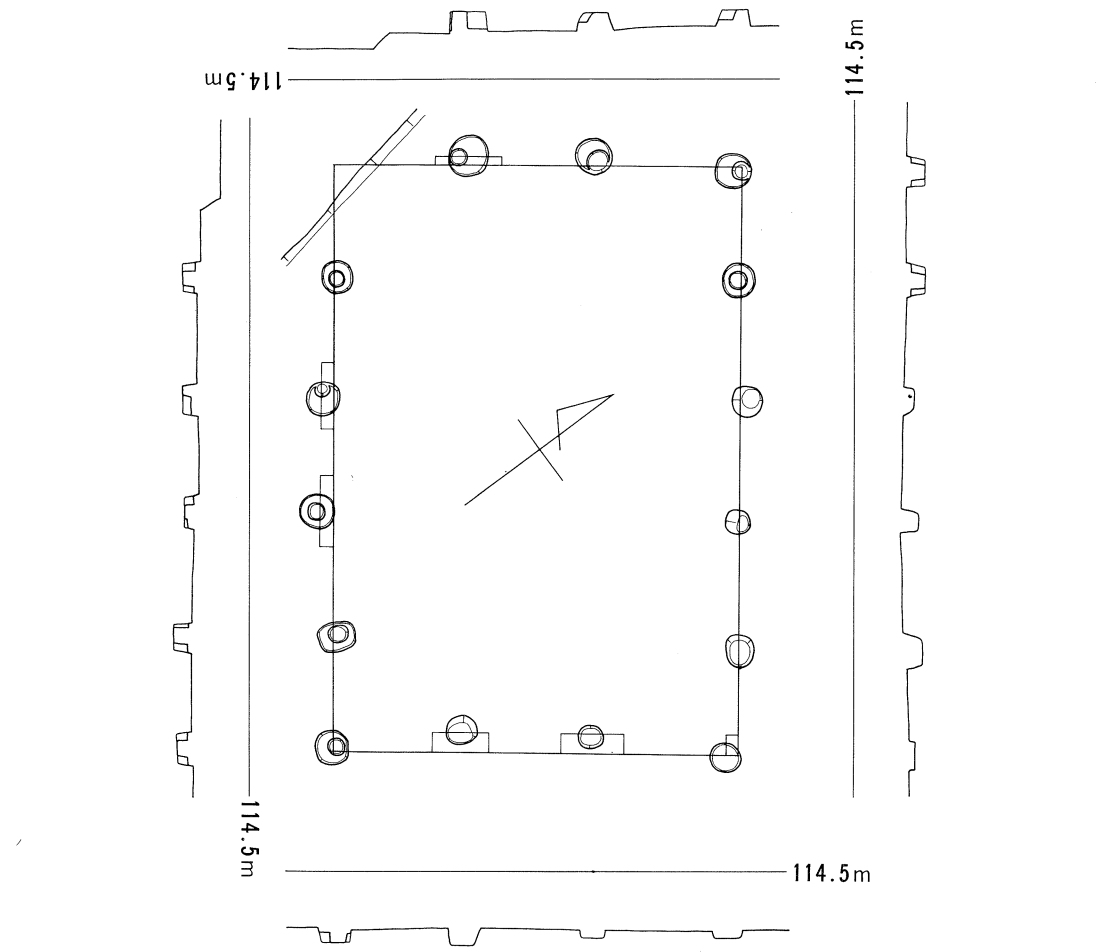


図83. ＩＨ４実測図



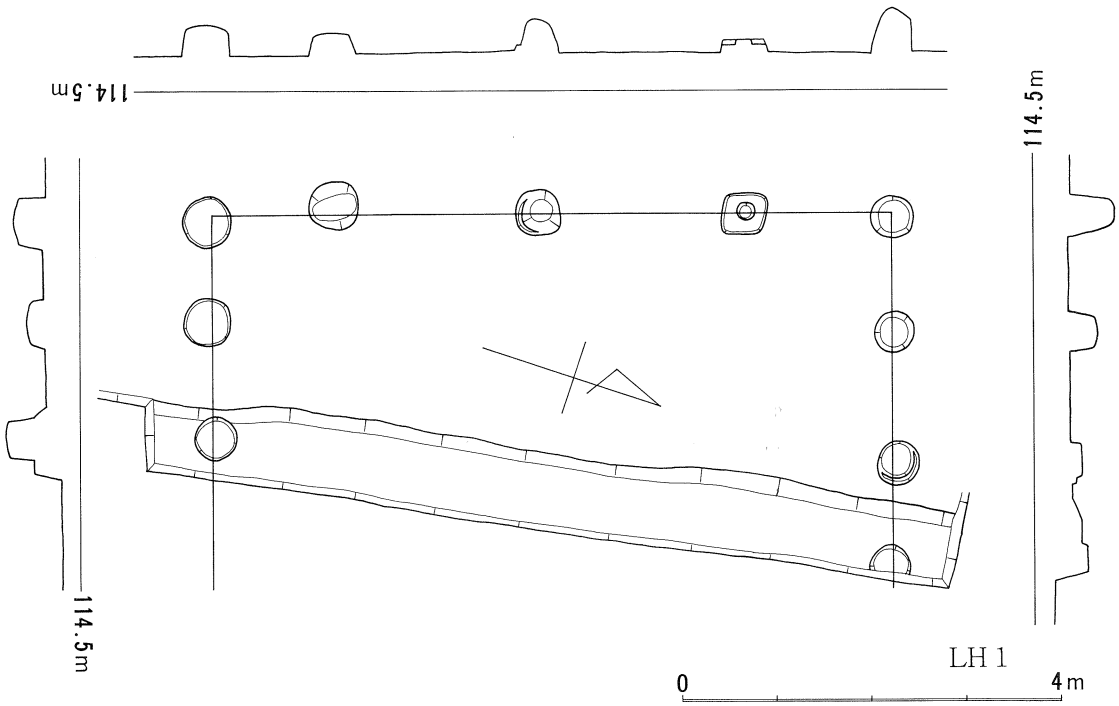


図84．ＫＨ１．ＬＨ１実測図

	面　　積	2間×2間	2(3)×3間	2(3)間×5間
Ⅰ	9.6～10.2	BH2・BH3・BH6		
Ⅱ	15.6～17.8	柏原北CH4	BH5・BH7・IH2	
Ⅲ	20　～22.4	AH 1	AH4・BH4・GH3・GH2	
Ⅳ	25.2～25.4		柏原北CH1	IH3・KH1
Ⅴ	28.7			EH1
Ⅵ	31.7～34.2		AH3・FH4	柏原北CH3・FH1・FH3
Ⅶ	37.6～38.7		柏原北CH2・ＡＨ２	AH5
Ⅷ	42.5			IH4
Ⅸ	48.4～49.3			AH6・IH5
Ⅹ	55.1			CH1
Ⅺ	66			BH1

表７．掘立柱建物跡間数別面積分類表　　（単位：m²）

間　　数	柱間寸法	建　物　番　号
2間×2間	1.8× 2.2	柏原北CH 4
	2.35	AH 1
	1.4× 1.7	BH 2・BH 3・BH 6
2間×3間	2.1～ 2.8	AH 2・AH 3・柏原北CH 2・FH 4
	1.75～2.35	GH 3
	1.4～ 2.4	AH 4・BH 4・BH 5・BH 7・GH 2
3間×3間	1.75～2.25	柏原北CH 1
	1.25～ 1.7	IH 2
5間×2間	1 ～2.3	柏原北CH 3・ IH 3
	2.2～ 2.9	BH 1・IH 5
	1.6～ 2.0	AH 5・FH 3
	1.6～ 2.2	FH 1・EH 1
	1.7～ 2.7	IH 4
5間×3間	1.4～ 2.1	ＡＨ６
	1.2～1.45	KH 1
4間×？	1.2～ 1.6	LH 1

（単位：m）

表９．掘立柱建物跡間数別柱間寸法分類表

間　数	建物名	1	1.15	1.2	1.25	1.3	1.35	1.4	1.45	1.5	1.55	1.6	1.65	1.7	1.75	1.8	1.85	1.9	1.95	2.0	2.05	2.1	2.15	2.2	2.25	2.3	2.35	2.4	2.45	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9
2間×2間	柏原北 CH4															1						1						1						
	AH1																										8							
	BH3							2			4			2																				
	BH2										4		4																					
	BH6									2				2																				
2間×3間	AH2																											2		2			1	
	AH4									2				4						2								2						
	BH4									1		1				6				1		1												
	BH5							2		4			3										1											
	BH7							4					2					2		1		1												
	GH2							1				2		2		1		1		2						1								
	柏原北 CH2																									2			4				4	
	AH3																									10								
	FH4																					2		2				4		2				
	GH3									1					4			1									1							
3間×3間	柏原北 CH1					3	3								1					3		3			1									
	IH2	3			2					1				6																				
5間×2間	柏原北 CH3					1		2		3		2				1	1			1	1		1	1										
	AH5															2		8		4														
	BH1																							1				2		5	1			1
	CH1																																	
	EH1																	1	2			2		1										
	FH1												1	3						1				1										
	FH3											2			5	2		1	2	2														
	IH3	1	2			1				4				2		1				2						1								
	IH4													1		1			2		4											1		
	IH5																							7										
5間×3間	AH6							2		2						3						9												
	KH1			8		4			4																									
4間×？	LH1			2		3						2										2												

表8　掘立柱建物跡柱間寸法計測値一覧表(教字は間数)　　単位：m

	柱間寸法	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI
I	2.2～ 2.8							2				
	2.2～2.35			1			1			1		1
	2.1～ 2.5						1					
II	1.65～ 2.4		1	1	1	1	1					
	1.4～ 2.4		1	2	1	1	1					
	1.7～ 2.7								1			
	1～ 2.3				1		1					
III	1.4～ 2.1		1	1			1	1				
	1.4～ 1.7	3										
	1～ 1.7		1		1							

（単位：m）

表10．掘立柱建物跡柱間寸法分類規模別一覧表

また、3間×3間の柏原北ＣＨ１では1.75mの小寸法が1ヵ所で見られるのみで、他は2m～2.25mで、(I)の大寸法に入れるべきである。さらに、2間×3間のＡＨ４、ＧＨ３・２等の場合、そのプランは方形に近かく、従って、2間側が大寸法、3間側が小寸法である。規模は2間×2間のＡＨ１に極めて近かく、(I)の大寸法の類としてよい。3間×5間のＡＨ６についても、規模やプランはＣＨ１やＩＨ５に近かく、小寸法は短辺の3間に用いられているのであって、長辺の5間はほぼ 2.1mで統一されている。従って大寸法の(I)の類とするのが良い。このように見てくると、(I)～(III)の区別も、柱間 2.1m以上の大寸法を持つものと 2.1m以下の小寸法を持つものの2類に大別できる。

間数	大寸法	小寸法
2間×2間	柏原北CH４・AH１	BH２・BH３・BH６
2間×3間	柏原北CH２・AH２・AH３・AH４・ＦＨ４・GH２・GH３	BH４・BH５・BH７
3間×3間	柏原北CH１	IH２
2間×5間	AH６・BH１・CH１・IH５	柏原北CH３・AH５・EH１・FH１・FH3 IH３・IH４・KH１

表11．掘立柱建物跡柱間寸法分類間数別一覧表

◦平面形の分類（図85）

建物の長辺を 100にした場合の短辺の割合いを別表に示している。2間×2間の場合、正方形であることを示す 100のものとわずかに長方形となる88、94のものとがある。2間×3間では、62～66、72、80～81、90～91、98、に細分できる。3間×3間では63～67だけである。5間×2間では、36～39、43～46、55、66、5間×3間では45と66である。総じて、90～ 100、80～88、72、62～66、55、43～46、36～39の7類に分けることができる。各々の建物を連挙すると次の通りである。

間　　数	90～100	80～88	72	62～66	55	43～46	36～39
2間×2間	AH1・BH2・BH3・柏CH4	BH6					
2間×3間	AH4・BH7	GH2・GH3	BH4	AH2・AH3・BH5・柏CH2			
3間×3間				柏CH1・IH2			
2間×5間					柏CH3	AH5・BH1・GH1・FH3・IH5	EH1・FH1 IH3・IH4
3間×5間				KH1		AH6	

表12．掘立柱建物跡平面形分類間数別一覧表

これらを柱間寸法の大小で分けると次のようになる。

平面形比率	大寸法					小寸法				
	2間×2間	2間×3間	3間×3間	2間×5間	3間×5間	2間×2間	2間×3間	3間×3間	2間×5間	3間×5間
90～100	柏CH4・AH1	AH4・FH4				BH2・BH3				
80～88		GH2・GH3				BH6				
72							BH4			KH1
62～66		柏CH2・AH2・AH3	柏CH				BH5	IH2		
55									柏CH3	
43～46				BH1・CH1・IH5	AH6				AH5・FH3	
36～39									EH1・FH1・IH3・IH4	

表13．掘立柱建物跡平面形分類柱間寸法・間数別一覧表

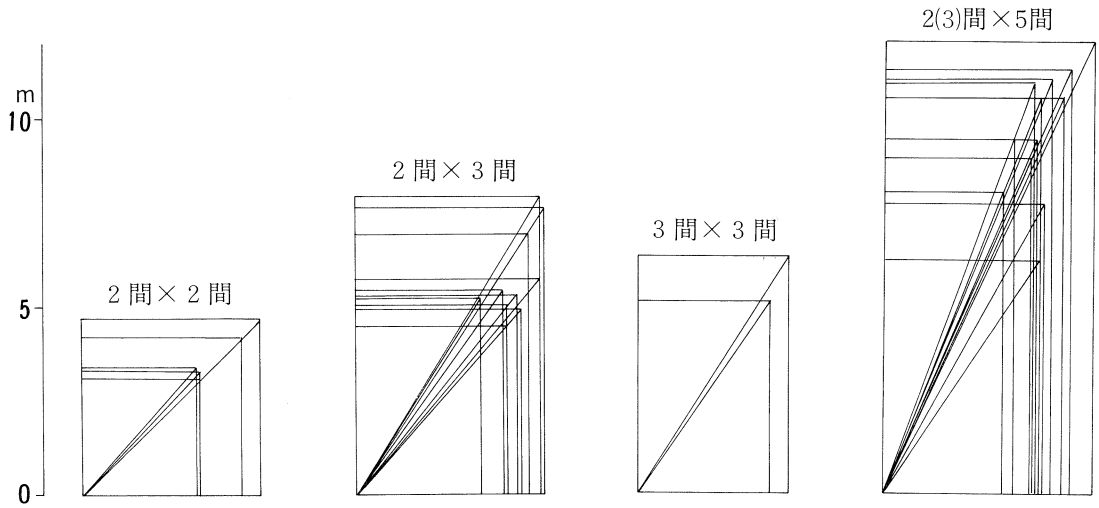


図85．掘立柱建物跡平面形比較図

すなわち、２間×２間の建物で長方形プランとなるものは柱間小寸法のＢＨ６に限られる。２間×３間の建物では、正方形、長方形両プランとともに大小の寸法がある。３間×３間の建物では、大小両寸法があるが長方形プランに限られる。２間×５間あるいは３間×５間の建物では、短辺が長辺の約２分の１以上になるものは小寸法に限られ、また約３分の１となるものも小寸法に限られる。その中間に入るものでは大小両寸法のものが見られる。さらに方位を加えてみると次のようになる。

	90～100	80～88	72	62～66	55	43～46	36～39	?
N37° E				(KH1)				
N23° E						(AH5)		
N10°30′ E								FH2
N4°30′～8° E	(BH7)・FH4	GH2		(BH5)	(柏原北CH3)	BH1	(FH1)・(IH3)	
N1°～3° E	AH1				(IH2)	(FH3)	(EH1)	
N0°30′～1W			(BH4)				CH1	
N2°30′～4° W	(BH2)			柏CH１・AH2・AH3				
N6°～8° W	(BH3)柏CH4							
N11°～14°30W		(BH6)・GH3		柏原北CH2	AH6	IH5	(IH4:	
N21° W	AH4							
N29° W								LH1

( )は小寸法

表14．掘立柱建物跡方位分類平面形・柱間寸法別一覧表

以上、掘立柱建物跡について、間数、規模、方向、柱間寸法、平面形態等の項目について分類した。これらを総合して16種類の建物に区別することができた。特に、柱間寸法、平面形、方向が分類の基準になり、間数、規模については各種類の中に包括させた。これが時期差を示すものか、あるいは集落単位を示すのか等については後章で再検討することとする。

Ⅲ．溝状遺構（図86）

溝状遺構については、特に各住居群単位では記述しない。また、溝状遺構と関連すると思われる他の遺構についてはここに合せて記述する。溝状遺構については、網羅的に説明することを避け、また、旧河道状のものはここで取り上げた。

柏原北ＣＭ１　　幅4.1ｍ～6.7ｍの東西溝。ほぼＷ－Ｅの方向にある。大別して２度にわたる堆積が見られる。最初は幅4.1ｍ～6.7ｍ、深さ25cm程の比較的幅広くて浅い溝であって、この溝の堆積後、そのほぼ中央に、幅0.7ｍ～2.2ｍの新たな溝が形成される。この溝は東半分が幅70cm程であり、西半分が広がって２ｍ程となっている。深さは29cm程で、幅の広い西半分では、東半分と同じ幅で２段掘りとなっている。最深所には厚さ20cm程にわたって淡茶灰色の砂利層が形成されており、水流のあったことが考えられる。

柏原北ＡＭ１　　カーブしながら北東から南西にのびる。幅１ｍ～ 1.2ｍで、ゆるやかに西へ傾斜している。深さ40cm～45cmで、溝底に10cm前後の河原石が見られる。堆積土は単純で、溝底には部分的に細砂の堆積が認められる。

柏原北ＡＭ２・３　　頭初２条と考えていたが、結果的には一条の溝である。ほぼＷ－Ｅの方向にある。幅 3.8ｍ～ 5.2ｍで、西側程幅が広い。やはり西傾する。この溝にも２度にわたる堆積が認められる。頭初の溝幅は不明だが、深さ45cm程あり、埋土は単純である。この溝が埋った後、その北側肩部を残して、幅3.1ｍ～4.6ｍの溝が新たに掘られる。深さ40cmで、そのほぼ中央に、幅70cm程、深さ35cm程の溝が掘られ、２段掘りとなっている。一段目には２層にわたる堆積土が認められ、多量の遺物を包含している。下層は厚さ８cm程で、砂礫層であり、二段目が埋った後に水路として利用された可能性が強い。２段目は４層の堆積層が認められる。上３層はすべて砂層であり、最下層は厚さ２cm程で砂泥の堆積が見られる。水路として利用されたと考えるなら、一段目の砂礫層の堆積まで、４回にわたる水路面が形成されていることになる。なお、この溝状遺構は、才１住居群の北端を画している。

ＡＭ１　　東西溝で、その垂線は10度程西にふれる。幅1.6ｍ×2.9ｍ。堆積層は上下２層に大別できる。下層は幅1.6ｍ～2.9ｍで、深さ0.88ｍである。深さ45cm～60cm程で、幅 1.4ｍ程の２段掘りの溝が形成される。この二段掘り部分から上段にかけて礫の堆積があり、その上層に砂が堆積している。その上層は、下層の北肩部を残し、南側肩部とほぼ一致して、幅2.04ｍ、深さ60cmの溝となる。二段掘りとはなっていない。上層でもやはり最深所に礫が堆積している。上下両層ともゆるやかに西側に傾斜している。この溝は才１住居群の南端を画している。

ＡＭ５　　磁北に対し45度程の方向で、ほぼ一直線にのびる。ＡＴ13やＡＨ７・８等の柱穴を切り込んでいる。幅35cm～45cm、深さ12cm～15cmで、高低差はほとんどない。横断面はＵ字形を呈している。埋土は単純である。

ＡＭ６　　ＡＭ５から派生するように、Ｎ23°Ｗの方向に走る。ＡＭ５に切られる。深さ14cm程で高低差は少ない。横断面は皿状を呈する。埋土は単純である。

ＢＭ１　　南東－北西に走る。幅１ｍ～ 1.2ｍであるが、南端部分は40cmと狭くなっている。深さ14cm程で、埋土は単純である。

ＢＭ２　　東西溝で、その垂線はＮ30°Ｗの方向にある。幅 2.2ｍ～ 3.2ｍと広狭があるが、溝底はほぼ一定している。深さ50cm～54cmで、横断面は皿状を呈している。堆積土は流水を思わせるもので、溝の西側に砂がたまり、中央の窪みに砂礫が堆積する。最後に、溝全体に礫石の堆積が認められるのである。人工的ではなく、旧河川を思わせるが、泥土の沈積がなく、水の停滞は少なかったもののようである。

ＣＭ17　　幅 3.6ｍ～４ｍで、ほぼ東－西に走る。掘り方は三段掘りになっていて、最深所は南寄りに走り、幅約１ｍで、深さ1.19ｍを計る。二段目は幅約 2.3ｍで、深さ74cm～84cmである。最上段は幅 3.6ｍ～４ｍで、深さ31cm～44cmを計る。最深所には厚さ10cm程にわたって植物遺体の堆積が認められる。二段目の深所に一部砂の堆積が認められるが、溝としては二段目までが埋った時点で再度流水があったようで、最上段の底所に、幅２ｍ程、厚さ15cm程の砂の堆積が認められる。従って、下方二段目までが第１次の流路であり、最上段部分が第２次流路として利用されていたことがうかがえる。

ＣＭ19　　ＣＭ17よりわずかに東によるが、ほぼ並行する。幅0.8ｍ～1.6ｍで、ほぼ直線的に走る。深さ50cm程で、横断面はＵ字形に近い。

ＣＭ13　　二条の溝が重複している。北側に幅75cm～85cm、深さ28cm～34cmの新しい溝が走る。溝内には、上方に厚さ14cm程の炭化物を多量に含んだ堆積土があり、下方には礫石を含んだ土の堆積が見られる。この溝に切られた状態で、その南側に幅10cm～40cmまで残る溝がある。北側が不明であるが、深さ16cm～25cmまで計れる。埋土には焼土、炭化物、灰が多量に含まれている。N4°Wの方向にある。

ＣＭ９　　幅 1.4m程で、N10°Eの方向にあり北端は完結している。深さ13cm程。

ＣＭ８　　やや弯曲するが、ほぼ南－北にのびる。幅は70cm程でほぼ一定で、深さ29cm～40cm程で高低差はない。溝底には厚さ5cm～10cmの灰褐色の砂質土が堆積し、流水のあったことが考えられる。なお、南端は完結している。

ＣＭ２　　東西溝で、その垂線はN20°Eにあり、直線的である。幅は１ｍでほぼ一定し、深さも44cm程で高低差はない。埋土も単純である。

ＣＭ１　　ＣＭ２とほぼ並行する。幅2.6m～3.7mで、深さは18cm～21cmと浅い。なお、ＣＭ１・ＣＭ２は第２住居跡群の北端を界する。

Ｄ地区旧河道跡　　Ｄ地区の範囲内で、幅60mにわたって旧河道状の地形を呈す。ＤＭ11は、N10°Eの方向に、幅10m以上にわたって、厚さ50cm以上の礫石や砂の堆積が見られるもの。ＤＭ７、ＤＭ９等は北東－南西に走る小流路で、離合し、枝分れする。やはり、砂利や砂の堆積が見られるが、ＤＭ11の堆積後に形成された可能性が強い。ＤＭ１は、その北側が沼沢地状の状況にあるが、礫層や砂層、粘質土層等が互層に堆積する。幅5m～7m、深さ 1.2m以上にわたる。この河道内には多量の遺物の包含が認められた。その他、ＤＭ３、ＤＭ５等の小河道跡が幾条にも認められるが、ＤＭ１を主として、その堆積層から示されるように、何回もの氾濫により、幾条かの小河道が形成され、埋没し、このくりかえしによってできあがったものと考えてよい。

ＥＭ２・ＥＭ３・ＥＭ４　　一カ所で交叉する３条の溝状遺構で、ＥＭ４→ＥＭ３→ＥＭ２という古→新の切り合い関係がある。ＥＭ２は幅1.53m、深さ16cm程の規模で直線的である。横断面は皿状で、３層に区別できる土の堆積が認められる。ＥＭ３は、幅67cm～73cm、深さ16cm～18cmで、３～４層の堆積が認められる。ＥＭ４は幅1.14m～1.65m、深さ36cm～48cmで、南側がやや深くなる。４～６層の堆積土が認められる。横断面は逆台形状で、他の２条と比べ深い。３条とも堆積土にさほどの相違がなく、遺物の出土も極めて少ない。

ＥＭ５　　ＥＭ４と交叉し、ＥＭ４に切られる。幅1.44m～3.12mで、西寄りの幅が広い。深さは24cm～27cm。４～９層の堆積土が認められるが、基本的には３層であり、その中間の黒黄褐色土中に多量の瓦類が包含され、10cm前後から20cm前後の河原石と混在していた。瓦類はほぼ水平堆積で、最大片で長さ15cm程であって、小片が多い。

ＥＭ７　　ＥＭ２～５の北側で、弯曲する溝。幅60cm、深さ35cm程で、埋土は単純である。

ＦＭ３　　N17°Eの方向にある南北溝。長さ 9.8mで、南側 3.1mは幅20cmと細いが、北側 6.7mは幅80cmと広い。深さは、28cm～52cmで、北寄りが浅くなっている。横断面凵字形で、人工的な溝である。この溝跡の東側、芯心で 1.7mの位置に、並行した柱穴列がある。7基の柱穴列で、一辺45cm～65cmの方形の掘り方で、柱間は南より、1.65m×1.65m×2.35m×1.95m×1.75m×1.75mで、総延長11.1mを計り、北側の２基が溝跡より外側へ出る。この柱穴列（Ｓ１）は、 2.4m南側に位置するＦＨ１の東側柱列の延長線上に乗るものであり、３者の有機的な関連性を伺い得るものであるが、性格については明らかでない。この柱穴列と溝跡との間に、N20°Eとやや東にふる６基の柱穴列（Ｓ２）が存在する。南

端及び北端の柱穴がＳ１とほぼ同じ位置にあり、柱間が南より、 2.4m× 2.0m×2.25m× 2.5m× 1.6mで、長さ 10.75mを計る。この柱穴列は、南 4.4mの位置にあり、ＦＨ１と重複するＦＨ２の東側柱穴列と50cm東側で並行する。柱穴は方形の掘り方で、規模はＳ１と同じである。

ＨＭ２　横断面皿底状の東西溝であるが、西端で消滅している。幅 1.5m、深さ38cm程の規模である。ＨＴ１を切り込んでいる。

ＨＭ９　幅約90cm、深さ45cm程の横断面Ｖ字形の東西溝。４層にわたる土砂の水平堆積が認められるが、このうち、上方より３層目に、厚さ８cm程の青灰色の砂層が認められる。溝底より14cm程の位置である。

ＨＭ10　ＨＭ９の北側 2.5m程のところで、並行する東西溝。幅1.65m、深さ35cm程で鉢底状の横断面形を呈す。３層の堆積土が認められる。最下層は厚さ８cm程の細砂層、中層は砂礫層となっている。

ＨＭ15　幅５m程、深さ60cm程の溝跡。南北方向にある。ＨＴ６を切り込んでいる。

ＫＭ１　東西溝。深さ45cm程で、西傾している。幅は、一段掘りになっている部分で70cm、２段掘りの部分で1.6 mを計る。この溝跡には、南北両溝側に杭列が残る。杭は、太いものは半截、細いものは丸太材で、直径５cm程のものを使用している。腐蝕防止のため、いずれの杭も焼きを入れて使用している。間隔は一定でないが、20cm～50cm間隔で、溝下端に打ち込むものと溝傾斜面に打ち込むものとがある。また、２本を近接した箇所に打ち込むものもある。溝内には３層にわたる砂質土の堆積が認められるが、杭の先端は下方の１層目及至２層目までに残り、最上層に達するものは少ない。

ＬＭ１　東西溝。幅３m程、深さ35cm程で、やはりわずかに西傾している。横断面は、北側の幅1.8m程が深くなる二段掘り状を呈し、この部分の南北両下端から肩部にかけて杭列が残っている。間隔は20cm～50cm程、近接して２本を打ち込む等ＫＭ１と同様である。土砂の堆積状況はＫＭ１と異り、大別して２回の堆積で、下層には溝幅いっぱいに、厚さ40cm程の砂礫層が堆積し、杭の先端はこの層内に残る。上層は、濃両側にシルトの堆積があって、その内側に幅１m程、深さ30cm程の溝状の凹部をつくり、砂を堆積させていた。

以上が溝状遺構の主なものである。溝状遺構については、自然溝と人工溝に区別がきるが、後者で、明瞭に水路として掘削されたと判断できるものは、柏原北ＣＭ１、柏原ＡＭ２・３、ＡＭ１、ＣＭ17、ＫＭ１、ＬＭ１の６条である。各々の距離関係は次のように示すことができる。

距　離	等分値	溝　状　遺　構
180	90	柏原北AM2・3 ― AM1
203	101.5	柏原北CM1 ― AM1
385	123.3	柏原北AM2・3 ― CM17
408	102	柏原北CM1 ― CM17
876	109.5	CM17 ― KM1
956	106.2	CM17 ― LM1
1,081	108,1	AM1 ― KM1
1,161	105.6	AM1 ― LM1
1,261	105.1	柏原北AM2・3 ― KM1
1,284	107	柏原北CM1 ― KM1
1,341	103.2	柏原北AM2・3 ― LM1
1,364	104.9	柏原北CM1 ― LM1

表15．溝状遺構間距離計測値一覧表　（単位：m）

溝間の距離は、23m、80m、180m、203m、385m、408m、876m、956m、1081m、1161m、1284m、1341m、1364mの計14通りを得ることができ、100m以上の数値を等分してみた。

なお、23mは柏原北ＣＭ１↔柏原北ＡＭ２・３、80mはＫＭ１↔ＬＭ１の距離である。

現存条里遺構は一坪の長さ 360尺、約 109mであるが、これに近い数値は、溝幅等を考慮して、ＣＭ17－ＫＭ１の 876m（109.5m）、ＡＭ１－ＫＭ１の1081m（108.1m）、柏原北ＣＭ１－ＫＭ１の1284m（107m）等がある。これら４条は、その延長線は現存条里水路とほぼ一致しており、条里水田開発との関連が極めて深いものと考えられる。測量によって得られた数値は、101.5～106.2mのものがあり、統一を欠くが、他の柏原北ＡＭ２・３及びＬＭ１から得られる隣り合うものの数値（23m、80m、180m）に比較すれば、近似値といいうるであろう。柏原北ＡＭ2・3及びＬＭ１については、隣り合うもの以外の関係では、柏原北ＡＭ2・3－ＣＭ17の 385m（123.3m）を除けば、109mに近い数値を得ることができる。溝相互の編年ができれば、条里水田開発過程を知ることのできる可能性がうかがえる。

人工溝で注意すべきはＡＭ３の柱穴列（ＦＳ１）と並行関係にあるものであろう。これは掘立柱建物との関係をうかがわせるものである。建物と関連すると考えられる溝跡はＦＭ３のみであるが、この部類に入り得るものが他にも存在する可能性があるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。あるいは、瓦を多量に包含していたＥＭ５等は寺院との関連も考慮すべきかもしれないが、Ｄ地区旧河道内や、昭和51年度に実施したほ場整備関係調査で、Ｅ地区の西側の小字殿町で整地に伴うと考えられる瓦溜りの存在等を考えれば、直接寺院跡との関連を考慮する必要がなかろう。

その他の水路については、人工的なものか否かの判断のつけがたいものが多く、分類するのは適当でない。

自然溝については、その多くは旧河道であり、他のものについては、その成因を判断しかねる。旧河道については、Ｄ地区からＥ地区にかけてのものが最も大きく、かつ、住居群を明瞭に界している。Ｆ地区にも2条の旧河道,Ｈ地区の礫を堆積した旧河道等も住居群を界するものであって、旧河道の復原が集落の単位を抽出し得る手段となる可能性が強い。

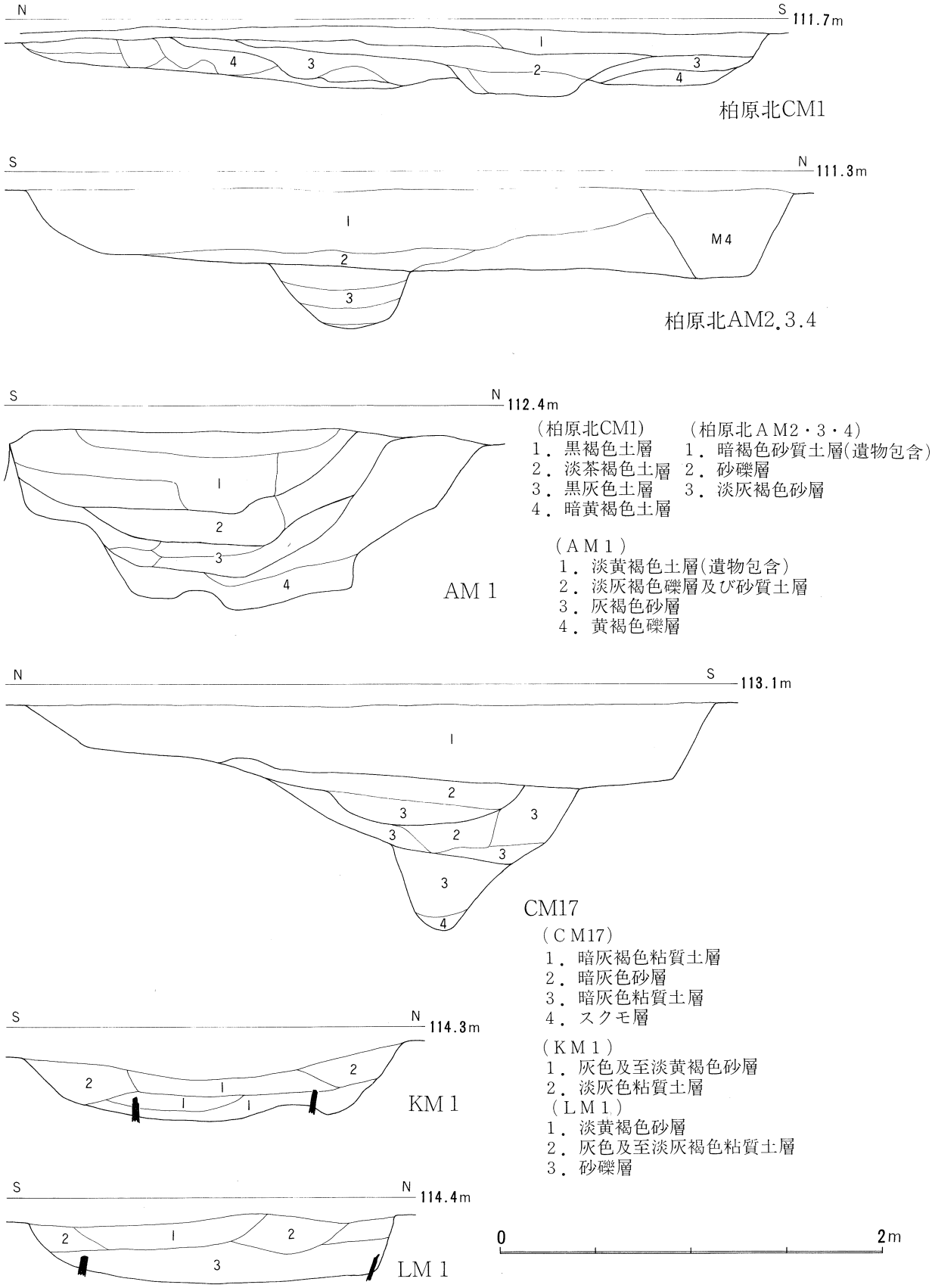


図86．溝状遺構断面土層実測図

Ⅳ．墓　跡（図88・89）

ここでは、Ｄ地区とＫ地区で検出した明確に墓と判断できるもののみを扱う。他の可能性のあるもの等については次のⅤ.土坑の項で扱うこととしたい。

Ｋ地区　ＫＭ１をはさんで南北に各１基を検出している。南のものを１号墓、北のものを２号墓とする。ともにＮ36°30′Ｅの方向にあり、約３ｍの間隔をおいて並ぶ。

（１号墓）　長さ2.05ｍ、幅0.64cmのほぼ長方形プランを呈する墓坑を持つ。両短辺側の２カ所で短辺からほぼ等距離の位置に木質部の痕跡があった。木質部は墓坑を横断し、両長辺に達するもので、幅７cmで、小口材と考えられる。両小口材の間隔は 1.3ｍを計る。墓坑底及び両長辺については明瞭な木質部を検出していないので、木棺の存在は不明とせざるを得ない。また、天井部の構造についても不明である。副葬品はなかったが、南側の小口板にほぼ接して、須恵器杯身が２点、外底部を上にして並べ置かれていた。この２点は東西に並べられたものであるが、南西側に傾斜した状態で出土している。なお、墓坑底に傾斜はない。

（２号墓）　長さ1.4ｍ、幅0.5ｍ～0.56ｍと南棺に比べて小規模である。各辺ともほぼ垂直の壁面を構成している。

Ｄ地区　検出した墓跡は６基以上で、いずれも火葬墓で、人骨の細片の出土を見ている。およそ 200m²の範囲内に11基のピット群が集るが、６基以外は判断しかねた。

（墓１）　長径 1.1ｍ、短径92cmのダ円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さ20cm程が残る。全体に褐色土が堆積し、これを掘り込んで、坑の西寄りに長さ35cm、厚さ15cm程の河原石が入れられている。坑の東寄りには褐色土の上面に土師器の小片、河原石附近に瓦質の火舎片があった。

（墓２）　径1.3ｍ～1.2ｍの不整円形で、深さ25ｍ程が遺存している。坑内に灰褐色土が堆積しているが、これを掘り込む形で、坑のほぼ中央に、長さ40cm～20cmの大小の河原石や割石が４個、小礫が10数個があった。整然とした状態ではない。

（墓３）　長径 1.1ｍ、短径90cmのダ円形の坑で、坑全体に褐色土が堆積し、その中央に掘り込みがあって、掘り込みの西寄りに長さ25cm、厚さ20cm程の自然石がおかれている。

（墓４）　径60cmの円形で、深さ５cm程の遺存状況である。南寄りに片寄って土師器皿が重なり合った状況で出土している。

（墓５）　長径85cm、短径60cmのダ円形プランで、横断面は皿状を呈している。焼土、炭化物、骨片等を含んだ灰褐色土の堆積があり、その上面に、南寄りに２個の石材が置かれていた。

（墓６）　墓２の東側に接するもので、径75cmの円形プランを呈す。ほぼ垂直の掘り方で、やはり、堆積している灰褐色土を掘り込んだ状況で、坑の中央に窪みが認められる。しかし、石材はない。堆積土の上面に、小礫とともに、瓦質の火舎が出土している。これは、窪み部分にあって、窪みの埋土中より出土している。

以上の６基の墓は、墓４・５を除いて、他の４基はいずれも、垂直に掘り込んだ坑を一度埋め、新たに横断面Ｕ字形の坑を掘り、大小の礫石を入れている点に共通性がうかがえる。この新たな坑の埋土中には、土器片とともに、骨粉、炭、灰等が混入している点も共通性がある。墓５については、坑は垂直に掘られていないが、礫石があり、骨粉、焼土、炭等が混入した埋土であって、他の４基にみる垂直な掘り方を省略した形態とも見ることができる。墓４としたものはこれら５基のものと異り、土師器皿を埋め込んだ土坑である。墓かどうか考察する必要がある。

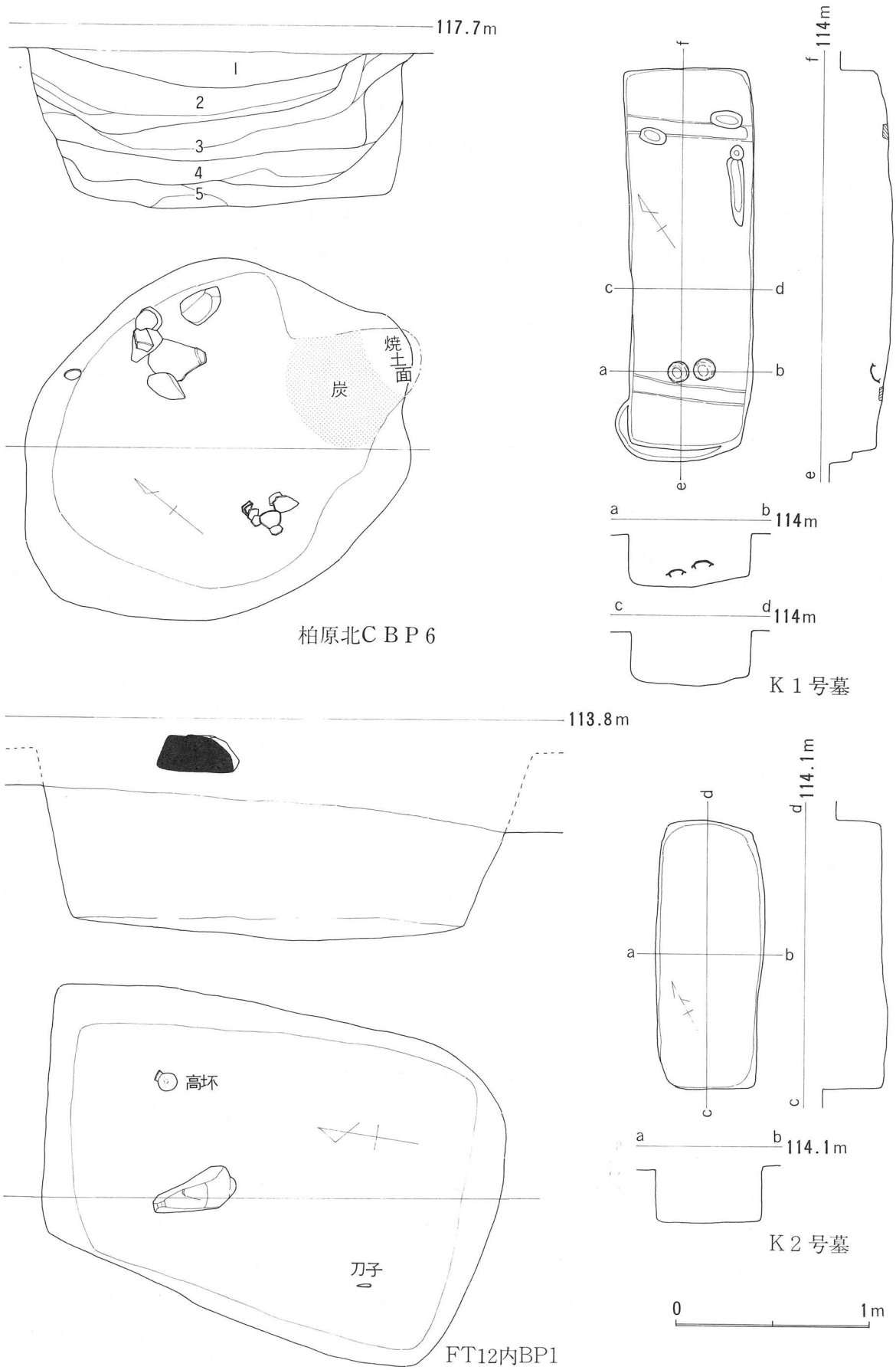


図87．土坑墓、その他土坑実測図(1)

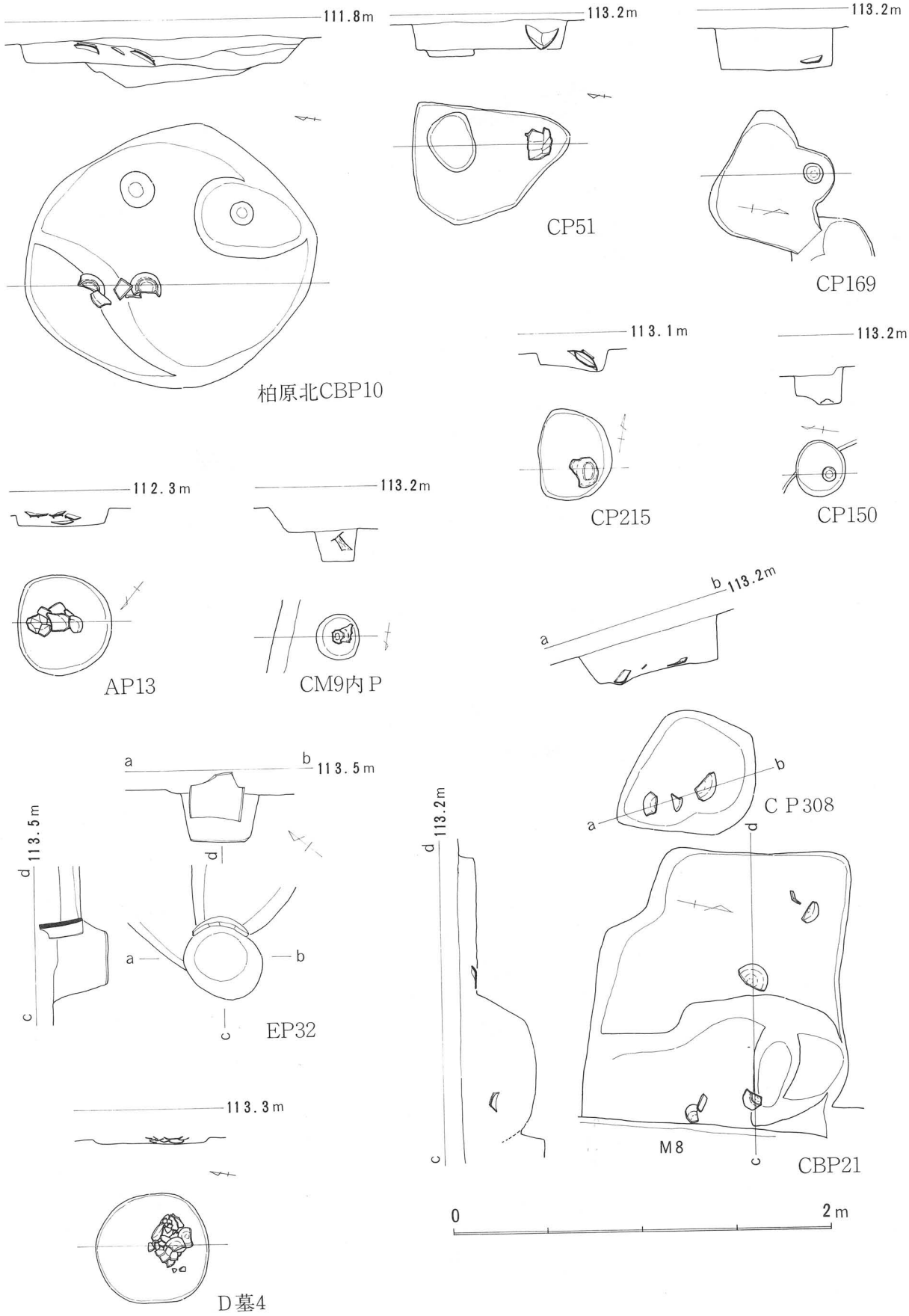


図88．墓、その他土坑実測図(2)

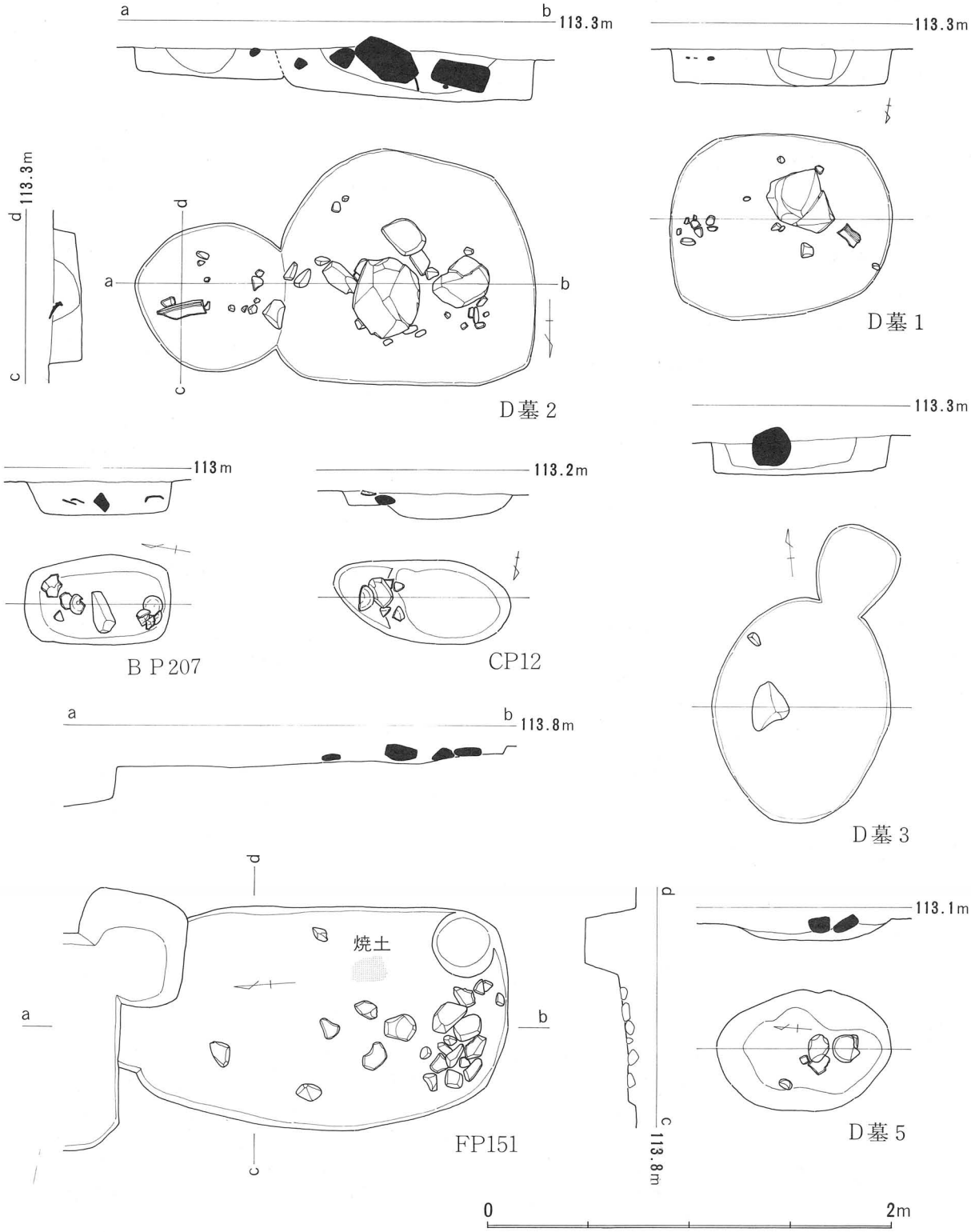


図89．墓、その他土坑実測図(3)

Ⅴ．土　坑

規模の大小を問わず、住居跡、柱穴、溝状遺構等これまで述べてきたもの以外の土坑を扱う。ただし、網羅的に述べることをさけ、特徴的なもののみに限定したい。また、Ⅳ.墓跡の項に含めるべきものもあるかもしれないが、各土坑の性格を考察し得たものについては、後章で再述することとする。

柏原北ＣＢＰ６　　長径 2.1ｍ、短径 1.7ｍのダ円形プランを持つ。深さ82cmで、坑底は中央がやや深くなる。壁面勾配が約70度程の掘り方であるが、ダ円形プランの長径に当る壁面、坑の東壁部分が平面Ｕ字形に掘削されている。この部分の壁はわずかにオーバーハングした状態にあり、壁面の下部から坑底にかけて火を受けた様子が観察できる。また、この前面に灰の堆積が認められた。

土坑内の堆積土は15層に区別できたが、大別すれば３群にまとめることができる。すなわち、最上層は他の土坑等に通有に認められる埋土で、分層できる中間層に土器等の遺物の包含層がある。最大の厚さは45cmである。中層は黄褐色系の土で、極めて地山に近い土層である。厚さ25cm～40cm程で、上層はこの堆積土の東側に及ばず、中層は土坑肩部に一部が出る。下層は土坑底に堆積するもので、淡褐色系のもので、砂粒及至砂質の土である。以上の堆積層にみる３群は、各々性格の異るものであることは判然としている。最下層は砂粒及至砂質土の堆積で、土坑の埋没前に降雨等による自然堆積を思わせるものである。上層は、土坑の埋没後に生じた窪みに、土器片とともに埋め込まれた状況を示す。問題は中間層で、発掘過程で、その上面が土坑底を形成するものと思われた程地山に近い色調、土質を示している。最下層の堆積土の質から見れば、土坑上部が空いていたとは考え難い。また、砂粒層の堆積が、Ｕ字形に掘られた坑壁側で、坑壁の中程以上の位置から見られ、Ｕ字形の部分から流れ落ちた状況を示している。こうした状況を考慮すれば、中間層は土坑の上部、すなわち天井部を構成していたものではないかと推察されよう。復原すれば、土坑に天井を設け、坑壁の一部を外側に掘り窪めて煙り出し部分とする構造が考えられる。すなわち、竪穴式住居跡のカマドの構造に極めて近似したものが考えられる。

柏原北ＣＢＰ４　　柏原北ＣＢＰ６と同じ構造を持つものである。長径1.85ｍ、短径1.75ｍで円形に近い。ほぼ垂直に近い掘り方で、深さ70cmを計る。南西部分がやはり外側に張り出して、平面Ｕ字形に掘り込まれ、この部分の坑壁の下部が火を受けている。また、この部分の坑壁下端から坑底の広い範囲に炭と灰の層が広がっている。ＣＢＰ４では、坑底の中央径１ｍ程の範囲が、極めて固くしまっており、人足により踏みしめられた様子が観察できた。ＣＢＰ６では観察できなかったが、土坑底に入って作業が行われていたことを示す。調査過程の都合もあって堆積土の図面を作成し得なかったが、観察結果からはＣＢＰ６と同様の堆積層を形成していることが判明している。なお、この土坑は柏原北ＣＴ５を切り込んでいる。またＣＢＰ６の北側４ｍの位置にある。

柏原北ＣＢＰ10　　柏原北ＣＨ３の西側に位置する。径1.55ｍの円形プランを持つ。西側の一部が一段高くテラス状になるが、最深25cmで尖底の横断面形を呈す。テラス部分より上方に、北側より順次堆積した３層の土層が認められるが、この最下層部分に、土器類が良好な状態で包含されていた。須恵器杯身、土師器皿、甕等で、テラス底部の上方から、土坑中央、南東方向に向って、流れ込んだように出土している。

ＡＢＰ１　　長さ３ｍの不整形な土坑で極めて浅い。弥生式土器片が散乱している。

ＡＰ13　　径50cmの円形プランのピット。ピットのほぼ中央に、黒色土器埦、灰釉陶器杯が正位置で重なり合って出土した。ほぼ水平位置にあり、上下３重になる部分がある。なお、ピットの深さは10cm程である。

ＢＰ207　　長径72cm、短径45cmの南北に長いダ円形プランのピット。深さ17cmで、埋土中に焼土、炭、灰等が混入している。また、ピットの中央に長さ21cmの石材が短径方向にあり、その南北両側に土師器甕、皿が比較的良好な状態で出土した。南側には土師器の皿が三枚重ねに、裏表になって出土し、北側では甕片とともに皿が裏向きの状態で出土している。石材は西から東へやや傾くが、土器類は北側のものがピットの中央に向かってやや傾向き、南側のものはほぼ水平位置にある。

ＣＰ215　　ＣＴ５の西側にある。長径50cm、短径40cmのダ円形プランで、須恵器を身とし、灰釉陶器の杯を蓋とした状態で出土している。

ＣＰ308　　84cm×69cmの菱形状のピットで、深さ23cmまで残っている。ピットの底部から、須恵器の無高台の杯２片とその間に須恵器の蓋の破片が出土している。

ＣＢＰ20　　ＣＭ８に切られ、現存で 1.4m×1.45mの方形に近い土坑で、その東側が40cmと深く、西側半分は10cm程となっている。西側の段の部分に、その底面から須恵器の杯と皿、東側の深い部分に、埋土の上方部から須恵器杯と皿が出土している。

ＣＰ21　　長径 8.8m、短径 4.2mの長ダ円形で東西に長い。東側３分の１程が深さ７cm程浅く段状となり、西側は13cmと深く、横断面皿状である。段の肩部に長さ15cm、厚さ４cm程の河原石があり、その附近に須恵器杯、蓋等が集っている。

ＣＰ51　　長径85cm、短径70cmの三角形状のピットで、北東部に長径32cm、短径25cmのダ円形の深さ４cm程の坑が穿たれている。南端には土師器羽釜があった。

ＣＭ９内ピット　　ＣＭ９の溝底で検出したピットで、径24cmの円形ピットで、深さ17cmある。このピット内から須恵器の高杯が斜めになった状態で出土している。

ＣＰ150　　径26cm～30cmの円形のピットで、深さが20cm程あるが、その底部から土師器の皿がふせられた状態で出土している。

ＣＰ169　　ほぼ垂直に掘り込まれた不整形な平面形を持つピットであるが、その北端の坑底より土師器皿が正位置で出土している。

ＦＢＰ１　　ＦＴ12を切り込んでいる土坑で、 2.4m× 1.7mの南北に長い長方形プランを持つ。深さ95cmで、横断面凵字形を呈している。埋土の上面で、北西部寄りに、45cm×21cm、厚さ19cmの礫石が置かれ、坑底からは、北東寄りの部分から土師器の高杯、南西部寄りから鉄刀子が出土している。

ＦＰ151　　1.9m× 1.1mのダ円形プラン。長さで20cm～６cmの大小の礫石が多数散在している。すべて坑底にあり、重なり合うことは少ない。また、埋土中に焼土も混入している。

ＧＢＰ６　　径1.95m程の不整円形の土坑。深さ50cm程であるが、南側半分がさらに深くなり、67cmを計る。須恵器杯、土師器皿、杯、甕等比較的多くの土器類を出土している。

Ｅ地区焼土坑Ⅰ～Ⅲ（図90）　　いずれも、長径0.8m、短径0.5mのダ円形で、坑の周囲が赤褐色に焼け、坑内に焼土、炭化物、灰等が堆積していた。深さがわずかに10cmと極めて浅く、堆積の層序はない。横縦・横断とも浅い皿状で、坑底に高低差はない。坑内堆積層には遺物は皆無であり、時期は不明である。ただ、焼土坑Ⅰの西端にＥＰ32があった。焼土坑の性格や本来の構造が不明確なため、関連するピットであるかどうか判断しかねているが、焼土坑西端を切り、径40cm、深さ30cmの円形プランを持つもので、焼土坑Ⅰ側に、平瓦を立てて置いている。焼土坑が火を受けているのに対し、この平瓦に火を受けた様子は観察できなかった。焼土坑の性格は不明であるが、第３住居跡群の南端にあって、その南側に広がる旧河道跡等からフイゴの羽口やルツボ、鉄鋌等が出土しており、これら遺物類との関連のある

施設ではないかと推察される。

以上は、極めて多数の土拡等のうち、遺物が比較的良好な状態で出土したものを中心に取り上げている。住居群と直接関連すると考えられるものは、柏原北ＣＢＰ６と４の２基である。両者は同じ施設であって、竪穴式住居跡のカマドの構造に近似するところから、これに類した用途の想定されるものである。また、集落を構成する一施設と考えられるものはＥ区焼土坑Ⅰ～Ⅲであろう。ともに、坑底は火を受けて焼けていること、周辺からフイゴの羽口や鉄鋅等が出土している事等から、小鍛冶等の施設が考えられる。Ⅳ.墓跡の項に含めて良いものはＣＰ 125とＦＢＰ１であろうか。ＣＰ 125の土器類は蔵骨器と考え得るであろうし、ＦＢＰ１では、埋土上面の石材は墓標的なもの、坑底の高杯、刀子は供献品とすることが可能である。ＣＰ 150やＣＰ 169は土師器の皿が坑底におかれたものである。Ⅳ.墓跡の項のＤ地区墓４とは性格を異にするものであろうか。ＡＰ13では灰釉陶器、ＢＰ 207では土師器皿が重なり合って出土しているが、これらとも比較検討を要する。

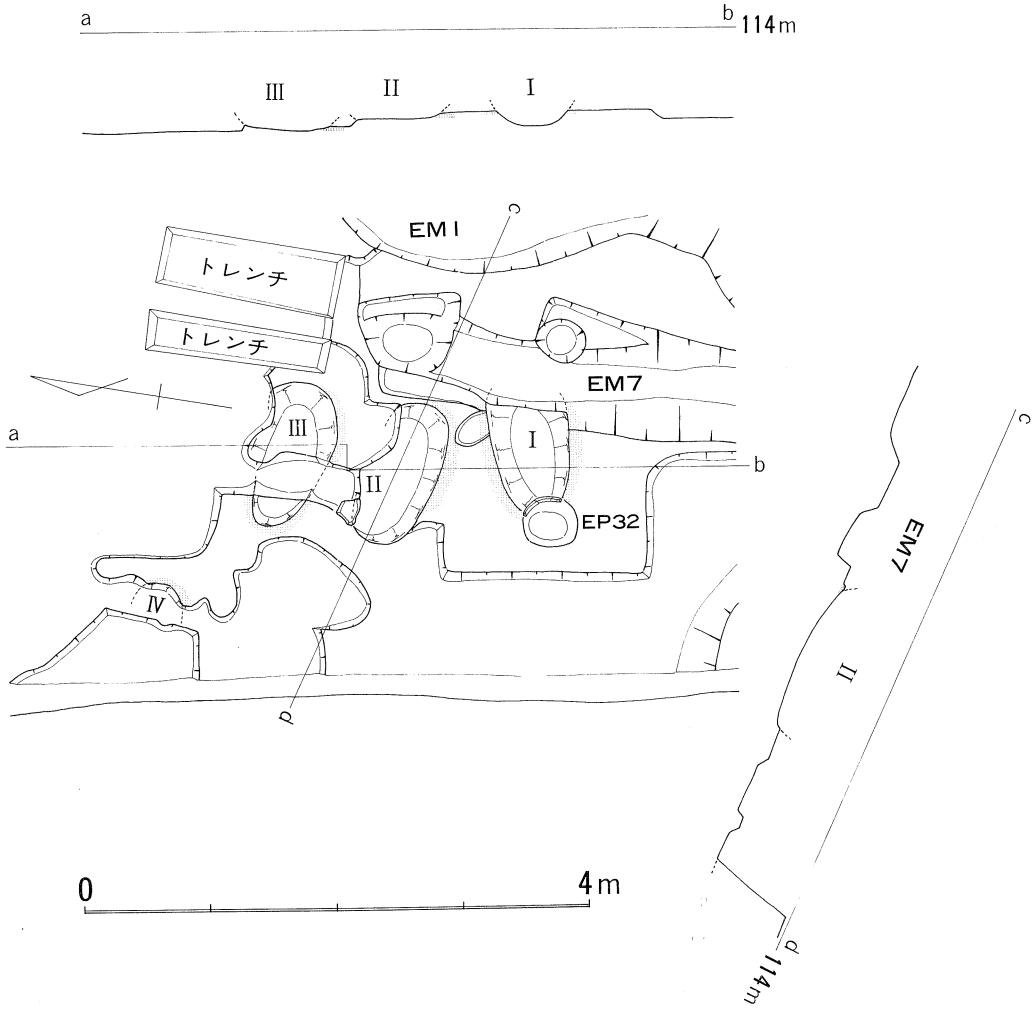


図90. Ｅ区焼土坑Ⅰ～Ⅲ実測図（アミは焼土面）

第二節　遺　　物

第一項　遺物の分類

出土遺物の大半は土器類である。その他に、鉄製品、石製品、土製品、木製品等が少数ながら出土し、また瓦類もある。出土遺物の大半は竪穴式住居跡からであり、次いで、溝状遺構、土坑等からである。また、遺構検出時に出土したものも数多い。掘立柱建物跡から出土するものは極めて少ない。この項では、竪穴式住居跡出土遺物を中心に、遺物の出土状況を述べる。

竪穴式住居跡からの出土遺物としては、須恵器、土師器、施釉陶器、黒色土器等の土器類、紡錘車、釘、刀子等の鉄製品、カマドの構築材料としての瓦等がある。須恵器類には、杯、杯蓋が大半であり、その他に、壺類、甕類、鉢類、平瓶、瓶、高杯、皿等がある。このうち、壺、甕、皿類がやや多く、平瓶、高杯、瓶等は極めて少ない。杯身、杯蓋が大半を占めるが、杯身にも高台を付けるものと付けないものがあり、高台を付けないものにも、口縁部に受部を持つもの、単純に外反するもの、口縁部に特徴を持つもの等の形態差がある。これに法量の差や同一法量での器高の差等を加えていけば、竪穴式住居跡から出土する土器類の器種構成は極めてバラエティーに富んだものとなる。このことは土師器等他の土器類についても同様であるので、以下に、器種別に、基本的な組み合せ関係を抽出し、次項の住居跡別の出土状況の前書きとすることとする。

Ⅰ．須 恵 器

須恵器類には杯身、杯蓋、壺、甕、平瓶、瓶、高杯、皿等がある。まず杯身であるが、大別すれば高台の付くものと付かないものとに分けられるが、法量差等によりさらに細別できる。最初に高台付杯身から述べる。

（高台付杯（杯Ａ類、図 165））

１基の竪穴式住居跡からの複数個の全形の知れる高台付杯について、高さ（器高－高台の高さ）を縦軸、口径を横軸に取り、これに口径指数（＝（高さ÷口径）× 100）を実線で示した。順次説明していくと、ＡＴ３では、口径指数が25以下で小さいもののみ、すなわち口径に比べて高さの極めて低いもののみで、法量に大・中・小がある。高さを変化させず、口径を小さくして法量を変えたものが３点である。

ＡＴ４では、法量、口径指数とも極めて近似したものである。

ＢＴ２では口径指数の極めて小さい２点であるが、口径を変化させず、高さを異にして法量を変えるものである。

ＢＴ８からは12点もの高台付き杯が出土している。口径指数が大きく、法量の小さい一群（19～21、25）、口径指数が小さく、法量も小さいもの（23・24・26）、口径指数が小さく、法量の大きいもの（18）、口径指数、法量とも大きいもの（14～17）の４類に分けることができる。

ＢＴ９では２点だけであるが、法量、口径指数とも同じものである。

ＣＴ６の５点では、いずれにも口径指数は近似するものであるが、法量に大小の２類がある。

ＣＴ11の５点では、法量に大小の２類があるが、法量の小さいグループの３点はいずれも口径指数が大きく異なり、従って４類に分けることが可能である。

（杯A）　　単位：cm

番号	口径	高さ	器高	口径指数	分類
AT2－24	13.8	3.4	3.7	24.6	C 3
AT3－5	14.6	3.6	3.6	24.7	C 3
6	17.2	3.6	3.5	20.9	d
7	18.6	3.5	4.1	18.8	d
AT4－6	13.0	4.2	4.6	32.3	b 2
7	12.7	4.0	4.4	31.5	b 2
8	12.8	3.8	4.3	29.7	b 2
10	13.3	4.2	4.5	31.6	b 2
AT5－24	13.1	3.1	3.5	23.7	b 3
AT13－12	10.5	2.4	2.7	22.9	b 4
BT1－1	10.6	3.5	3.7	33.0	b 2
BT2－1	14.3	2.5	3.0	17.5	c 4
2	14.3	3.0	3.6	21.0	c 3
BT8－14	15.3	4.7	5.1	30.7	c 2
15	16.6	5.0	5.6	30.1	c 2
16	15.3	5.0	5.5	32.7	c 2
17	15.5	4.8	5.3	31.0	c 2
18	14.4	3.8	4.3	26.4	c 3
19	11.5	3.6	3.9	31.3	b 2
20	11.0	3.7	4.0	33.6	b 2
21	11.0	3.4	3.7	30.9	b 2
23	12.7	3.4	3.7	26.8	b 3
24	11.9	3.3	3.5	27.7	b 3
25	10.8	3.6	3.9	33.3	b 2
26	12.6	3.6	4.0	28.6	b 3
BT9－8	12.2	3.8	4.3	31.1	b 2
9	12.7	3.8	4.1	29.9	b 2
CT6－20	11.1	3.6	3.9	32.4	b 2
21	11.8	3.5	3.9	29.7	b 2
22	11.3	3.5	4.0	31.0	b 2
23	12.3	3.7	4.0	30.1	b 2
24	15.7	4.4	5.2	31.2	c 2
25	15.6	4.8	5.2	30.8	c 2
CT11－35	12.1	3.7	4.1	30.6	b 2
36	11.3	4.1	4.8	36.3	b 1
37	12.2	3.0	3.7	24.6	b 3
38	16.2	4.7	5.3	29.0	c 2
39	16.0	4.8	5.4	30.0	c 2
CT12－10	12.3	3.5	3.8	28.5	b 2
30	12.4	3.3	3.9	23.0	b 3
CT13－3	11.7	3.8	4.1	32.5	b 2
5	11.8	3.2	3.7	27.1	b 3
6	14.6	4.7	5.0	32.2	c 3
FT6－2	14.8	3.8	4.3	25.7	c 3
FT25－1	14.4	3.4	4.3	23.6	c 3
2	15.7	4.1	5.0	26.1	c 3
GT1－1	12.0	3.5	4.1	29.2	b 2
GT7－1	14.2	4.6	5.2	32.4	c 2
GT8－12	15.2	3.3	3.9	21.7	c 3
GT9－1	12.6	3.2	4.1	25.4	b 3
GT11－30	16.4	3.7	4.5	22.6	c 3
IT5－25	15.4	6.0	6.8	39.0	c 1
IT6－4	12.5	3.3	3.6	26.4	b 3
IT9－11	16.4	4.0	4.4	24.4	c 3
柏北T3－9	14.8	4.4	5.0	29.7	c 2
柏北T7－6	14.5	3.1	3.7	21.4	c 3
柏北T9－19	16.0	4.4	4.8	27.5	c 2

（杯B）　　単位：cm

番号	口径	器高	口径指数	分類
AT2－7	9.9	3.4	34.3	a
AT4－12	11.3	3.7	32.7	b
13	13.2	4.0	30.3	c
14	14.2	3.1	21.8	c
15	15.0	3.5	23.3	c
AT13－13	12.3	3.3	26.8	b
AT14－20	13.0	3.5	26.9	c
BT1－4	12.1	3.8	30.6	b
5	11.9	3.4	28.6	b
6	11.6	3.5	30.2	b
7	12.6	4.0	31.7	b
BT2－4	10.8	3.9	36.1	b
5	13.0	3.4	26.2	c
6	14.3	2.9	20.7	c
7	15.1	3.8	25.2	c
BT8－28	11.9	3.1	26.1	b
29	12.2	3.6	29.5	b
30	12.2	3.0	24.6	b
BT9－14	13.3	3.2	24.1	c
15	12.2	3.6	29.5	b
BT10－7	12.7	3.7	30.8	b
CT1－5	12.2	3.6	29.5	b
CT5－22	9.9	3.8	38.4	a b
CT8－8	11.8	2.9	24.6	b
CT11－31	12.2	2.9	23.8	b
FT4－7	8.5	3.5	41.2	a
8	10.5	3.0	28.6	b
9	11.5	3.2	29.1	b
FT5－18	9.9	3.7	37.4	a
19	10.6	3.0	28.3	b
FT10－1	15.9	3.8	31.3	c
FT11－20	11.5	3.8	33.0	b
21	11.9	3.5	29.4	b
22	11.6	4.3	37.1	b
FT12－1	11.4	3.5	30.7	b
2	11.9	3.0	25.2	b
FT13－12	9.3	2.9	31.2	a
FT14－12	9.7	3.3	34.0	a
13	9.7	3.6	37.1	a
FT16－17	12.1	3.5	18.6	b
18	14.5	2.7	29.5	c
FT21－20	9.0	4.1	45.6	a
FT25－4	9.5	2.7	28.4	a
5	12.5	4.0	32.0	b
GT3－2	11.6	3.7	31.9	b
3	11.3	3.8	33.6	b
4	10.3	4.3	41.7	b
5	11.8	3.4	28.8	b
GT5－19	12.7	3.1	24.4	b
GT8－18	12.0	4.0	33.3	b
GT9－3	11.3	4.1	36.3	b
GT10－21	10.6	3.1	29.2	b
IT7－7	18.5	3.5	18.9	c
IT10－16	9.0	3.5	38.9	a
柏北T3－8	11.5	3.6	31.3	b
柏北T10－20	11.5	3.5	30.4	b

表16．竪穴式住居跡出土杯A・杯B計測値一覧表

ＣＴ13は法量に大小の２類があり、小規模なものに口径指数の異るものがある。

ＦＴ25はいずれも口径指数の小さいものであるが、法量に大小の差がある。

以上の複数個の高台付杯を出土した竪穴式住居跡では、法量と口径指数によって、１～４類のセットを持っていることになる。これらを１つのグラフにしたもので見ると、口径10.8cm～13.3cm、器高4.2cm～３cmの規模の小さいもの、口径14.3cm～16.6cm、器高2.5cm～5cmの大きいもの、口径17.1cm～18.6cm、器高3.5cm～3.6cmの極めて大規模なものの３種類の法量差がある。法量について、これらよりさらに小さいものがあるので、とりあえずここでは小さいものよりｂ、ｃ、ｄの各類を設ける。さて、これをさらに口径指数で見ると、ｂ類で36以上（ｂ－２）、34～29（ｂ－３）、29～25（ｂ－４）の３類があり、ｃ類で29～33（ｃ－１）、25～24（ｃ－２）、21～18（ｃ－３）の３類、ｄ類では21～19（ｄ－１）の１種があり、計７類に分類できる。全形の知れるものが単数個出土している他の住居跡例についても、グラフで見る通り、大半がこの７類の中に包括される。ただ、ＡＴ13のものは、口径指数が23で法量も小さく、ｃ類に新たにｃ－４を加えることができる。またＩＴ25のものは口径指数が39と極めて大きく、ｂ－１を新たに加えなければならない。従って、計９類を設定できる。なお、ｂ類より法量の小さなものは、全形を知れるものでは竪穴式住居跡からは出土していない。

（無高台杯（杯Ｂ～Ｆ、図 166））

高台の付かない杯類には、口縁部に受部を持つものや口縁部が変化して特徴のあるもの等があるが、ここではまず、口縁部が単純に開くものを杯Ｂとして取り上げる。杯Ｂについても、杯Ａと同様に口径、器高、口径指数を示すグラフを作成した。

(1)杯Ｂ

杯Ａと同様に複数個出土している住居跡毎に比較してみる。

ＡＴ４では４点に全形を知ることができるが、口径指数は30・33と22・23の低いものとがあり、各々に法量の相違が見られるが、特に口径指数の大きいものに顕著である。

ＢＴ１の４点は、いずれも口径指数が29～32と近似している。法量のうえで大小の２類が見られる。

ＢＴ２の４点は、口径指数、法量とも異るものである。

ＢＴ８は法量はほとんど同じだが、口径指数に30のものと25・26の小さいものとがある。

ＢＴ９の２点も法量に大差ないが、口径指数に30と24の大小がある。

ＣＴ７は法量が小さく、口径指数の大きいものと両者とも大きいものとに分かれる。

ＦＴ４のものは口径指数が41と極めて高いものと29のものとに分かれる。

ＦＴ５も口径指数の大小で区別できる。

ＦＴ11の３点はいずれも口径指数が異る。

ＦＴ12も口径指数の大小で区別できる。

ＦＴ14の２点は法量、口径指数とも近似している。

ＦＴ16の２点は法量、口径指数の大小で区別できる。

ＦＴ25の２点は、口径指数は29、32と近似するが、法量に大小がある。

ＧＴ３は法量に大差はなく、口径指数が42と大きいものと29～34のものとに区別できる。

以上から、杯Ｂも一住居跡から２～４類に区別する形態のものの出土していることが知れる。これらを住居跡相互で比較したが、極めて多様で、杯Ａほど各時期を通じた区別は困難である。住居跡の時期差に基く可能性が大きい。口径規模では13cm以上、10cm以上13cm未満、10cm未満の３類に大別できるが、

口径指数の点で特に区別しがたい。なお、単独出土のものについてもほとんど重複してくるが、ＦＴ21出土のものに、口径指数が46と極めて高く、同様に42と高いＧＴ３のものに比べて、法量の小さいものがある。また、口径指数が19で、他に類例があるが、口径が18.5cmと法量の極めて大きいものがＩＴ７から出土している。

(2)杯Ｃ

有蓋で、口縁部に受部を持つもので、柏原北ＣＴ７、ＡＴ２、ＦＴ４、ＦＴ14、ＧＴ６、ＨＴ７、ＩＴ15、ＩＴ11の各住居跡から出土している。これはすでに知られているように時期的に下限のあるもので、これ自体類別はできない。

(3)杯Ｄ

口縁部が外側へ屈折し、外弯しながら斜上方へ開く特異な形態のもので、ＡＴ13とＦＴ25から出土している。量的に極めて少ない。

(4)杯Ｅ

ＡＴ１から１点のみ出土しているもので、口縁部が屈曲して真直ぐに立ち上り、やや外反するものである。

(5)杯Ｆ

ＦＴ４から１点のみ出土している。杯Ｃに似た口縁部であるが、口縁端部を折り曲げ、その部分を内側へ小さくつまみ出した様な状況にある。

（蓋（図168））

蓋には、杯Ｃとセットになるツマミを持たないもの（蓋Ａ）、杯ＡやＢとセットになるツマミを持つものとがあり、後者はさらに、口縁部にかえりを持つもの（蓋Ｂ）と持たないもの（蓋Ｃ）とがある。蓋も杯類と同様に極めて多量に住居跡から出土している。蓋の場合、杯類とセットになるのであるが、杯ほどの用途、形態差は生じてこない。従って、杯ＡやＢと同様に１住居跡内での口径を比較することによって、蓋のセット関係がでてこよう。強いては杯類とのセット関係も生じてこよう。なお、壺類の蓋もあり、その他のものを蓋Ｄとする。

(1)蓋Ａ

ＡＴ13、ＢＴ５・６、ＣＴ６、ＦＴ13・14・25、ＧＴ４・５・９・10、ＩＴ４・５の14住居跡から出土している。杯Ｃとも出土しているのはＦＴ14とＩＴ５の２基のみである。口径は、同心円復原したものをも含めて、9.7cm～11.8cmで、いずれも小ぶりである。時期的な差による形態差がある。

(2)蓋Ｂ

大別すると口径が11cm未満と以上のものとに分けることができる。11cm未満のものは、９cm以上11cm未満の間に納まる。これは、11cm以上のものとの間において、これに対応する杯類の容量の差を示すが、一住居跡内のセット関係を示すものではなく、時期差を示すものである。11cm以上のものについては、大別すれば、11.4cm～14.1cmのものと、16.4cm～18.6cmのものとの大小２類に区別できる。一住居跡に複数個出土しているものについては、ＧＴ10で、口径11.4cmのものと16.6cm～18.6cmのものとの大小２類があり、杯類に対応する蓋類のセットが考えられるところであるが、他の例では、ＦＴ25が11.8cm～14.1cm、ＧＴ９が12.2cm～13.4cmと大差がなく、出土状況だけからは杯身に対応する蓋類のセット、すなわち分類をすることはむつかしい。一応、11cm未満をａ、11.4cm～14.1cmをｂ、16.4cm～18.6cmをｃと区別しておく。この区別は、杯Ａについて区別した、ａ、ｂ、ｃあるいはｄに対応する。また、杯Ｂについても同様に

対応する。ただし、同一住居跡内において、事実対応したセット関係にあるか否かは次項で個別のセット関係を述べる際に明確になるので、ここではこうした区別が可能であることを指摘しておく。

(3)蓋C

天井部にツマミが付き、口縁部にかえりを持たないものである。複数個を出土している竪穴式住居跡毎に見ていくこととする。

柏原北ＣＴ９は口径11cmと15cm～16.6cmの大小2類、柏原北ＣＴ7は14cm～15.1cmの1種類、ＡＴ３は14.2cm、16.2cm、18.4cmの３種類、ＡＴ４は11.6cmと12.6cm～13cmの2種類、ＡＴ13は12.3cm、14.7cm、18.4cm～19cmの３種類、ＢＴ１は11cm～12.9cmの１種類、ＢＴ２は12.4cm、14.8cm～15.5cm、17.4cmの３種類、ＢＴ８は11.5cm～13.2cmと18cm～18.2cmの大小２類、ＢＴ10は12.4cmと15cm～15.8cmの２種類、ＣＴ１は11.8cmと14.8cmの２種類、ＣＴ５は14.6cm～16cmの１種類、ＣＴ６は12.1cm～12.4cmと15.6cm～16.4cmの２種類、ＣＴ11は13.3 cm ～13.7 cmの１種類、ＣＴ13も12.7cm～12.8cmの１種類、ＦＴ10は14.9cm～15.6cmの１種類、ＦＴ６は14.9cm～15cmと19.9cm～21.2cmの２種類、ＨＴ２は11.9cm～12.5cmの２種類、ＨＴ６は12.3cm～12.8cmと17.4cmの２種類。

以上のように、蓋は各住居跡とも１～３種類の大小のセットを持っている。全体的に見れば口径19.9cm～21.2cmの超大型品、17cm以上19cm以下、16.6cm～14cm、13.3cm～11cm、9.9cmの5種類に分けることができる。一応、規模の大きいものからａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅと類別する。この類別では、特に、ｃ・ｄ類の中にあって、個々の住居跡内では、ＡＴ３、ＡＴ４のように、さらに大小２類に分ける必要のあるものも存在することになるが、ＡＴ３ではいずれも同心円復原したもので、むしろいずれもｃ類とすべきかもしれない。ＡＴ３では大小２類が存在する。この規模は、ｅ、ｄ、ｃ、ｂがそれぞれ、杯Ａ及び杯Ｂのａ、ｂ、ｃ、ｄの規模に対応する。しかし、蓋Ｃのａ類は口径20cmを超す大型品であり、杯Ａ・Ｂにはこれに対応する規模のものはなく、あるいは皿類とセットを構成するものであろうか。

(4)蓋D

杯類に対応するもの以外で、竪穴式住居跡ではＢＴ８から１点出土している。口径 6.5cmで、短頸壺の蓋となるものであろう。

（皿（図167 ））

皿類には、口径指数15～17のやや深いものと９の浅いもの、また、12～13とその中間のものとがある。法量は、口径で13.6cm～17.6cmとさほど大差ない。ただ、ＧＴ９の１点は、同心円復原であるが19.5cmを計る大型品である。従って、皿類は口径指数でａ～ｃ類に区別する。ＢＴ２・８ではともにａ類、ＣＴ６・11ではともにａ・ｂ・ｃの各種がある。１点のみ出土している他の住居跡においても各種のものがある。

（その他須恵器）

壺・甕・鉢・平瓶・高杯がある。壺、甕類にはいくつかのタイプがあるが、出土量が少ないので次項で述べることとする。個々の住居跡からも１～２点程度で、セット関係を見ることはむつかしいが、ＡＴ２から壺、平瓶、甕、高杯があり、鉢と甕（ＢＴ９）、鉢と壺（ＧＴ８）、壺と甕（ＦＴ12）等を共伴しているものもある。

II. 土 師 器

土師器類は、甕・鍋・鉢・埦・皿・高杯がある。蓋・高坏は極めて少なく、埦・皿類もさほど多くない。鍋・鉢も出土量は少なく、大半が甕類である。甕類には、球体の胴部をもつ甕Ａ、球体の胴部に把手の

付く甕Ｂ、長胴の甕Ｃに分かれる。甕Ｂ、甕Ｃはともに煮沸用であって、規模等に大差ないが、甕Ａは容量に大きな差があり、用途により区別されていた可能性がある。形態差は除いて、容量差について類別しておく。全形の知れるものが少ないので、口径で比較する。口縁部の外反程度で、口径数値と容量とは比例しないが、およそ22cm前後の大型品、16cm前後の中型品、13cm前後の小型品に分けることができ、さらに口径29.5cm及び 7.1cmの極端に規模の異るものとがある。13cm前後をａ、16cm前後をｂ、22cm前後をｃとし、 7.1cmのものをａ－ａ、29.5cmのものをｃ－ｃとしておく。

Ⅲ．灰釉陶器

埦、皿類があり、ＢＴ９からは埦、皿、段皿が出土している。

Ⅳ．緑釉陶器

ＢＴ２の埦のみである。

Ⅴ．黒色土器

埦、甕類で、甕類には大小がある。

Ⅵ．そ の 他

土製品として土錘、鉄製品に、紡錘車、釘、刀子がある。

以上、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、その他について、竪穴式住居跡出土品をもとに、器種構成を行った。須恵器類においては、杯類に法量、形態の差異によって、供膳用途の差異があった可能性があると考えて細分し、蓋類も杯類に対応させて細分した。土師器においては、球体の胴部を持つ甕Ａに、容量差による用途の違いを考え、やはり細分しておいた。次項の各遺構の出土品の説明は、上記の分類に従って記述していくこととする。上記以外の形態、整形、成形等の差異は時期差を示す可能性があるので、必要に応じて記述する。

第二項　遺物の出土状況

この項は、前項の遺物の分類を基礎に、各遺構の出土品、特に土器類を中心に、その器種構成について記述する。

Ⅰ．竪穴式住居跡

柏原北ＣＴ１（図91）　須恵器杯Ａ、土師器甕Ｃ、灰釉陶器埦が出土している。いずれも小片で埋土中のもののみで、出土状況は不良である。

柏原北ＣＴ２（図91）　埋土中からの小片のみで、出土状況は不良である。須恵器蓋Ｃ、平瓶、土師器甕Ａがある。蓋Ｃは大型のｃ類、甕Ａも大型のｃ類である。

柏原北ＣＴ３（図91）　カマド部分から須恵器杯Ｂ、土師器甕Ｃ、住居跡床面部分から須恵器杯Ａ、蓋Ｃが出土している。杯Ｂはｂ類、蓋Ｃはｄ類で、規模の上でセット関係を考えることができる。杯Ａは大型で深いｃ－２類のものである。

柏原北ＣＴ４（図91）　土師器甕Ｃのみである。

柏原北ＣＴ５（図91）　須恵器蓋Ｃ類がある。ｃ類の規模を持つ。

柏原北ＣＴ６（図91）　図示し得るものの遺物を出土していない。

柏原北ＣＴ７（図92）　第１住居跡群内では最も豊富に遺物を出土している。出土土器類の中に須恵器杯Ａがあるが、他の出土遺物からみて混入品と考えられ、除くことができる。須恵器では、蓋Ｂ、

蓋Ｃとが共伴する。蓋Ｃは２点図示したが、ともにｃ類であり、蓋Ｂも同様の規模をもつ。杯はＡのみで、１点はｃ－３類で口径の割に浅いもの、他は底部のみであるが、ｃ－１あるいはｃ－２類に入ると考えられる深くて容量の大きいものである。杯Ａのうちｃ－３類のものと蓋とはセット関係を考えることができる。他の須恵器類には、花瓶型になるかと思われる小型壺、口径24.5cmを計る大型の鉢がある。

土師器類は、甕Ａ・Ｂ・Ｃ、鍋、鉢、埦等がある。甕Ａはｃ類の3点であるが、口径23.6cm～24.5cmの２点と20.4cmの１点とは区別すべき規模のもので、ｃ類を細分する。甕Ｂとしたものは把手部分が欠損しているが、胴部が口径を凌駕しており、球体の胴部を持つものと考えられ、その規模から把手を付けたものと思われる。甕Ｃは３点図示したが、うち２点は、頸部の径に大差なく、従って容量に差がないと考えられるが、他の１点は頸部径17cmとやや小型である。鍋は口径31.8cmの大型品、鉢は復原できなかった。埦は３点あるが、口径14.2cm、器高３cmのもの、口径17.8cm、器高 4.3cmのもの、高台を付け、口径16.6cm、器高 3.4cmのものといずれも形態を異にしている。

柏原北ＣＴ９（図91）　須恵器蓋Ｃ、杯Ａ、土師器甕Ｃがある。蓋Ｃはｄ類とｃ類、杯Ａはｃ－２類とｂ類とがある。蓋Ｃのｃ類と杯Ａのｃ－２類とはセットとなるが、蓋Ｃのｄ類と杯Ａのｂ類とは蓋の規模が小さく、セットとはなりがたい。甕Ｃは口径26.5cmの大規模なもの。

柏原北ＣＴ10（図91）　須恵器杯Ｂはｂ類で、口径指数30.4で深いものである。土師器は甕Ａがあり、口径29.5cmと極めて大型のｃ類である。

ＡＴ１（図93）　須恵器蓋Ａ、杯Ｅ、壺がある。

ＡＴ２（図93）　須恵器蓋Ａ、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、高杯、平瓶、壺、土師器甕Ａ・Ｃ、鍋、高杯があり、極めて豊富である。蓋Ａは杯Ｃとセットになるものであるが、出土品では規模に差がある。杯Ａはｃ－３類で浅いもの。底部の小片があるが、この部分で見る限りｄ類となる可能性が強い。平瓶は大小各１点、高杯も大小がある。壺は、台付長頸壺になるもの、口縁部が大きく外反するもの、口縁部が短かく、開きの小さいものの各種がある。

土師器では、甕Ａが口径12.8cmのａ類で、規模は小さい方である。甕Ｃは口径23.3cm～23.4cmの同大のもの、鍋は口径30cmの大型品。

ＡＴ３（図94）　須恵器類は蓋Ｃ、杯Ａ、土師器類は甕Ａ、甕Ｃ、高杯、杯がある。蓋Ｃは同心円復原であるがｃ類とｂ類とがある。天井部の小片があるが、残存部の大きさからｂ類に入ろう。杯Ａはｃ－３類とｄ類とがある。ｃ－３類は蓋のＣ類、ｄ類はｂ類とセットになる規模である。土師器の甕Ａにはａ類とｃ類とがある。甕Ｃは２点あるが、ほぼ同大である。

ＡＴ４（図95）　カマドの横にピットが穿れ、このピットの上部に多数の良好な土器類が出土している。須恵器には蓋Ｃ、杯Ａ・Ｂ、壺、土師器類には甕Ａ、鍋、杯がある。須恵器の蓋Ａはいずれもｄ類であるが、うち4点は口径12.6cm～13cmでほぼ同大であるが、１点のみは11.6cmとやや小型である。杯Ａはｂ－２類で、底部のみの小片もこの類であろう。杯Ｂはｂ類１点とｃ類３点があるが、ｃ類には、口径指数30.8と深いもの1点、21.8cm～23.3cmの浅いもの2点があり、計３種類ある。蓋Ａの口径の小さいものは杯Ｂのｂ類と、他の蓋Ａは杯Ａとセット関係を持つことができる。杯Ｂのｃ類に合う蓋は出土していない。壺は台付長頸壺である。

土師器の甕Ａはａ・ｂ・ｃの大・中・小と３種類の規模のものがそろう。鍋は小片で、同心円復原できない。杯は口径19cmの大型のものである。

ＡＴ５（図94）　須恵器杯Ａの１点で、ｂ－３類の浅いもの。

ＡＴ６（図94）　須恵器は杯Ｂの小片があるのみ。土師器は甕Ａ・Ｂ・Ｃがある。甕Ａはｂ類の中型品、甕Ｂは把手部分のみであるが、体部に当る部分の弯曲状況から甕Ｂとすることができる。その他に土錘がある。

ＡＴ７（図94）　土師器甕Ａ１点のみである。口径10cm、器高 9.5cmのａ類で、極めて小規模のものである。

ＢＴ１（図97）　須恵器蓋Ｃ、杯Ａ・Ｂ、皿、壺、土師器の甕Ａ・Ｃがある。蓋Ｃはいずれもｄ類である。杯Ａにはｂ－２類と残在部の規模からｃ及びｄ類とがある。杯Ｂはすべてｂ類で、口径指数28.6～31.7と近似しているが、口径12.4cm～12.6cm、器高3.8cm～4.0cmのものと11.6cm～11.9cm、3.4cm～3.5cmのもの各２点ずつが同形、同大である。蓋は杯Ａのｂ－２類と杯Ｂと合せることができる。壺は口径17.2cmの短頸のものである。

土師器は甕ＡとＣがある。甕Ａはａとｂの２種類があり、甕Ｃのうち口縁部が屈曲する１点は混入品であろう。

ＢＴ２（図98･99）　緑釉及び灰釉の埦は住居跡を切り込むピット内の出土遺物である。さて、ＢＴ２では、須恵器は杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃとがある。杯Ａはｃ－３、ｃ－４で、浅いものとやや深いものがある。底部の小片もｃ類に入るものである。杯Ｂにはｂ類とｃ類がある。ｂ類は口径指数36.1で埦形の形状を示す。ｃ類は、口径指数20.7の浅いものと25.2cm～26.2cmのやや深いものとがある。蓋Ｃはａ・ｂ・ｃの各種があり、ｃ類３点、ａ、ｂ両類各１点である。各々、杯Ａ及びＢのそれぞれと対応させることが可能である。

土師器には甕ＡとＣと杯がある。甕Ａの3点は口径14cm～15.2cmでほぼ同規模のａ類に入る。他の２点は口径22.7cmと25.6cmでｃ類に入る。甕Ｃは４点あるが、口径21.1cm～23.9cmで大差のないものである。

ＢＴ３（図97）　出土状況不良で、須恵器杯Ａと土師器甕Ｃの小片を出土しているにすぎない。

ＢＴ４（図100）　須恵器は蓋Ａのみである。土師器は甕Ｂ、甕Ｃ、杯とがある。特に甕Ｃの１点はカマドにすえ付けられた状態で出土している。

ＢＴ５（図97）　須恵器蓋Ａのみ出土している。

ＢＴ６（図97）　小片が多いが、土師器甕Ｃが竪穴の壁溝から出土している。甕Ｃは２点あるが１点は口径16.9cm、他のものが21.7cmで、前者は極めて小型のものである。甕Ａはａ類のもの。須恵器は蓋Ａが出土している。

ＢＴ７（図97）　須恵器の蓋Ｃの小破片を出土したのにとどまる。

ＢＴ８（図101）　須恵器の杯類及び蓋が極めて豊富に出土している。蓋にBがあるが、混入品である。蓋Ｄが１点ある他すべて蓋Ｃである。口径11.5cm～13.2cmのｄ類が9点、18cm～18.2cmのｂ類が2点ある。杯Ａはｃ－２類が４点、ｃ－３類が１点、ｂ－２類が４点、ｂ－３類が４点、他にｃ類とｂ類に入ると思われる底部片が各１点ある。蓋Ｃのｄ類は杯Ａのｂ類に合う。蓋Ｃのｂ類は杯Ａのｃ類に合う。杯Ｂはいずれもｂ類であるが、口径指数24～26のもの２点、29のもの１点で、深さが異る。皿は口径15.9cm～17.2cmで容量の小さい方である。須恵器類には他に短頸壺がある。

土師器には甕Ａがある。ａ類とｃ類で、ａ類と規模のかわらない黒色土器甕もある。

ＢＴ９(図99)　須恵器の蓋Ｃ、杯Ａ・Ｂ、皿、鉢、甕、土師器の甕Ａ、灰釉陶器の埦、段皿、皿、黒色土器の埦と緑釉陶器を除くほとんどの種類がある。蓋Ｃはａ、ｂ、ｃの各種類がある。杯Ａはｂ－２類が２点あるが、底部小片はｃ類、口縁部小片はｄ類に入る。杯Ｂはｂ、ｃの２類がある。蓋の数が少ない

が、杯A・Bの各類に合う。皿は口径14.5cm～15cmで小規模な類である。土師器甕Aはa類に入る。

BT10（図102）　須恵器類のみで、蓋Cのd及びc類、杯Bのb類、皿等がある。杯の口縁部の小片はAで、b及びc類に入ろう。

BT11（図97）　須恵器皿のみで、a類の規模の小さい方である。

CT1（図103）　須恵器のみで、蓋Cのc及びdの2類、と杯Aである。

CT2　　欠番

CT3（図104）　遺物の出土状況は不良で、須恵器の蓋Cのb類の小片がある。

CT4　　欠番

CT5（図104）　須恵器蓋Cのc類、杯Aの底部片、杯Bのa類、土師器甕Aのb類、甕B、甕C、皿、灰釉陶器の埦等がある。杯Aはb及びc類と思われるが、蓋Cとは合わない。杯Bは口径指数38.5で深いものである。

CT6（図103）　須恵器蓋Aは混入品である。蓋Cはd類が4点、c類が2点、c類のつまみと思われるものが1点である。杯Aはb－2類が4点、c－2類が2点で、蓋Cとセットになる。皿はa、b、cの各種が各1点ずつある。その他に、台付の小型壺、台付の鉢形状のものの底部片がある。土師器は鍋のみで、口径22cmと小型品である。

CT7（図104）　須恵器蓋Cのe類、杯Aと思われるものの口縁部片、杯Bのb類、土師器の杯がある。

CT8（図104）　須恵器蓋C、杯Bのb類があり、土師器は数少ない高杯がある。出土状況は良好でない。

CT9（図104）　出土状況は良好でないが、蓋C、杯A、杯B、土師器甕Cがある。甕Cは口径19.5cmの小型のものと、22.3cmのものとがある。

CT10

CT11（図103）　須恵器類のみで、蓋Cはいずれもd類、杯Aはb－1、b－2、b－3、c－2の4種類がある。蓋Cはb類に合う。皿もa、b、cの3種類ある。さらに、口径22.2cmを計る壺がある。

CT12（図104）　須恵器杯Bの破片1点のみで、b－2類のものである。

CT13（図105）　須恵器の杯はCで、d類のみ、杯はAで、b－2、b－3、c－3類がある。底部片もb類に入る。蓋はb類に合う。土師器は甕Aで、小規模なa類である。

FT1　　土師器甕Cの口縁部片のみで出土状況は不良。

FT2

FT3

FT4（図107）　須恵器は杯Aがなく、杯B、杯Cと特殊な杯Fがある。杯Bはa類1点とb類2点であるが、b類は口径指数28.6と29.1でほぼ同大である。蓋はBで、杯BあるいはCとセットになろう。ツマミ部分の小片があるが、蓋Bのものとしてよい。土師器は甕Bがある。

FT5（図107）　須恵器は杯Bがある。a類とb類があって、前者は深く、後者は浅目のものである。蓋はBがある。その他、口径35.8cmの大型の壺がある。土師器は大型の鍋の出土を見ている。

FT6（図106）　須恵器杯Aはc－3、蓋Cはa類とc類とがある。杯Aの底部片もc類に入るものと思われるのと、蓋はc類のものと合う。皿が1点あるが、口径12.8cm、器高 1.5cmの非常に浅いものである。土師器は、甕Aと杯がある。甕Aはc類で規模が大きい。

FT7（図107）　須恵器蓋C1点のみで、出土状況は不良である。

FT8（図106）　出土状況は不良で、須恵器杯Cと灰釉陶器の埦の各々小片が混在している。他に杯

Ｂ等がある。

ＦＴ９（図109）　土師器のみで、杯と甕Ａがある。甕Ａはｃ類で大型品である。

ＦＴ10（図107・108）　須恵器は杯Ｂのｃ類と蓋Ｃのｃ類とがあり、セットとすることができる。土師器には、甕Ａのｂ類、甕Ｃ、杯とがある。杯は高台の付くものと付かないものとがある。

ＦＴ11（図106）　須恵器に杯Ｂ、蓋Ｂ、小型の坩形の壺と大型の壺とがある。杯Ｂは３点あり、いずれもｂ類であるが、口径指数が29.4、33、37.1と異なる。特に37.1のものは埦形の丸底である。土師器には、甕Ａと甕Ｃとがある。甕Ａはａ類の小型品が２点ある。

ＦＴ12（図109）　須恵器は杯Ｂ、蓋Ｂ、台付長頸壺、甕があり、土師器には甕Ａ、甕Ｃ、杯がある。杯Ｂはｂ類で、深さに差のあるものである。蓋Ｂは口径10.4cmの小型のもの。土師器の甕Ａは、上半分と底部とがあるが、ともにａ類の小規模なもの。杯は３点あり、うち２点はほぼ同容量であるが、他の１点は大きい。

ＦＴ13（図109）　須恵器のみで、杯Ｂ、蓋Ａ、壺がある。杯Ｂはａ類で蓋Ａとはセットにならない。

ＦＴ14　須恵器杯Ｃ、杯Ｂがあり、これに対応する蓋Ａ、蓋Ｂがある。土師器は甕Ａでｂ類の中規模のもの。

ＦＴ15（図108）　須恵器蓋Ｂと土師器甕Ａ・Ｃがある。蓋Ｂは大型のもの。甕Ａは口径 7.1cmの極めて小規模なものと口径21cmの大規模なものとがある。甕Ｃとしたもののうち１点は肩部がよく張り、あるいは甕ＡかＢである可能性もある。

ＦＴ16（図109）　須恵器の杯Ｂ、蓋Ｃ、甕がある。杯Ｂはｂ及びｃ類があり、口縁部の小片はｂ類に入るものである。蓋Ｃはｃ類である。

ＦＴ17

ＦＴ18

ＦＴ19

ＦＴ20（図110）　土師器のみで、甕Ｃの規模の者干異なる２点、鍋１点がある。

ＦＴ21（図110）　須恵器杯Ｂ１点のみで、ａ類の埦形のもの。

ＦＴ22

ＦＴ23（図106）　土師器杯が2点ある。口径15.7cm、器高3.3cm、同じく22cmと4.4cmの大小各１点である。

ＦＴ24

ＦＴ25（図110）　須恵器に杯Ａ・Ｂの他に特異なＤがある。杯Ａは2点がｃ－3類、底部片はｄ類になろう。杯Ｂはａ、ｂの大小２類ある。蓋はＡとＢがあるが、Ｂは口径11.8cmと13.9cm～14.1cmの規模を計る。蓋Ｂは杯Ｂと合う規模で、蓋Ａに対応する杯Ｃは出土していない。

土師器には甕Ｃがある。甕Ｃ４点のうち、口径27cmを計るものと21.5cmを計るものとがあり、容量の大小がある。また、他の１点は胴部径が口径をうわまわり、甕Ｂになる可能性もある。

ＧＴ１（図111）　須恵器杯Ａのｂ－２類１点のみで、出土遺物は豊富でない。

ＧＴ２（図111）　須恵器蓋Ｂと土師器甕Ｃの２点。

ＧＴ３（図111）　須恵器杯Ｂ、蓋Ｂ、土師器甕Ａがある。杯Ｂは４点あるがいずれもｂ類である。ただし、口径指数でみると、２点は31.9～33.6、他の１点は41.7、残りは28.8で、深さに３種類がある。蓋Ｂは口径10.9cmの小型品である。甕Ａはｂ類の中型品。

ＧＴ４（図111）　須恵器杯Ａ、蓋Ａ・Ｃ、壺、鉢、土師器の蓋、杯が出土している。蓋Ａは他のものと時期

差があり、混入品だろう。須恵器蓋Ｃはａ類、杯Ａ類はｃ類になろう。土師器の蓋は唯一のものである。

ＧＴ５（図111）　須恵器杯Ｂ、蓋Ａ・Ｂがある。杯Ｂはｂ類、蓋Ｂは口径11.8cmでやや小型。

ＧＴ６（図111）　須恵器杯Ｃ・Ａ、蓋があるが、杯Ａは混入品であろう。土師器は甕Ｃが3点ある。ほぼ同一規模のものである。

ＧＴ７（図112）　須恵器杯Ａ・Ｂ、蓋Ｂ、壺、土師器甕Ａ・Ｃ、杯と器種は豊富である。杯Ａはｃ－２類、底部の小片もｃ類であろう。杯Ｂはａ類で、蓋は口径13.8cmを計り、杯Ａに合う。土師器甕Ａはｂ類の中型品。土師器の杯は３点あるが、うち2点は口径15.7cm～15.8cm、高さ3cm～3.1cmでほぼ同規模、他の１点は11.3cm× 2.6cmで、大小２類ある。

ＧＴ８（図112）　須恵器杯Ａ・Ｂ、蓋Ｂ・Ｃ、高杯、土師器の鍋がある。杯Ａはｃ－３類があるが、他の底部の小片は、ｂ類、ｄ類に入ろう。蓋Ｂは小型、蓋Ｃはａ類で、出土した杯類では蓋Ｃがセットになろう。

ＧＴ９（図113）　須恵器の杯Ａ・Ｂ、皿、蓋Ａ・Ｂ、壺、土師器の甕Ａ・Ｃ、杯と豊富に出土している。杯Ａはｂ－３類とｃ類の口縁部片、杯Ｂはｂ類、皿はｂ類の大型のもの、蓋Ｂは口径12.2cm～13.4cmでやや大きい部類のものである。規模では杯Ｂに合う。土師器の杯は同規模、甕Ａはｂ類、甕Ｃも同規模のもの２点である。

ＧＴ10（図112）　須恵器杯Ｂ、蓋Ａ・Ｂ、壺、土師器甕Ａがある。蓋Ｂは大小2類ある。蓋Ａについては時期差があるようであり、混入品であろう。土師器甕Ａはａ類の小型のもの。

ＧＴ11（図112）　須恵器のみで、蓋Ｂの大小各１点、杯Ａのｃ－３類の大型品１点である。蓋と杯はセットにならない。

ＧＴ12（図113）　須恵器の杯Ａの２点は口縁部と低部の小片だが、ともにｃ類で、浅いものとなろう。蓋はＢとＣがある。蓋Ｃはａ類。土師器では甕Ｃの口縁部片がある。

ＧＴ13（図113）　須恵器杯Ａ・Ｂ、蓋Ｂ、甕、平瓶、土師器の鉢がある。杯Ａはｃ類、杯Ｂはｂ類、蓋Ｂは比較的小さいものである。

ＨＴ１（図114）　出土状況は良くない。須恵器は蓋Ｃのｃ類、杯Ａのａ類、土師器甕Ｃがある。弥生式土器が混入している。

ＨＴ２（図114）　須恵器は杯Ａ、蓋Ｃ、皿があり、土師器は甕Ｃ、杯、皿がある。また、黒色土器の甕が１点ある。杯Ａはｂ類とｃ類の口縁部と底部の小片である。蓋Ｃはｄ類とｃ類があり、杯類とセットになる。皿は口径16.1cmでやや大きい。

ＨＴ３（図114）

ＨＴ４　須恵器蓋Ｃの小片のみである。

ＨＴ５（図114）　須恵器杯Ａ、蓋Ｃ、壺、土師器の杯がある。杯Ａはｂ類とｃ類のうちで大型のものの小片がある。蓋Ｃはｂ類、壺は花瓶形の小さなものである。

ＨＴ６（図115）　須恵器杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃ、黒色土器の甕があるが、出土状況は不良である。混入品がある。

ＨＴ７（図114）　須恵器杯Ａ・Ｃ、高杯、鉢、土師器甕Ｂがあるが、出土状況は良くなく、杯Ａ等は混入品であろう。

ＩＴ１（図116）　須恵器杯Ａ、蓋Ｂ・Ｃ、土師器甕Ｃ、杯がある。杯Ａはａ類の小さなもの、蓋Ｂはともに小型品で、蓋Ｃはｂ類の大きなものである。土師器甕Ｃは口径19cmと28.6cmの大小２類ある。

ＩＴ２（図116）　須恵器の杯Ｂ、蓋Ｃ、皿、灰釉陶器の埦がある。

ＩＴ３（図116）　須恵器皿と灰釉陶器の皿がある。出土状況は不良である。

ＩＴ４（図116）　須恵器蓋Ａ、土師器甕Ａ・Ｃがある。甕Ａはｃ類の大きいものである。

ＩＴ５（図116）　須恵器杯Ａ・Ｂ・Ｃ、蓋Ａ・Ｂ、皿、土師器Ａ・Ｃ、杯がある。杯Ｃと蓋Ａとは時期的にセットになるが、他のものと時期差があるようである。杯Ａはｃ－１類とｂ類の口縁部片、杯Ｂはｂ類のもの。蓋Ｂは口径9.7cm～9.8cmの小規模なものである。土師器の甕Ａはａ類である。

ＩＴ６（図117）　須恵器はｂ類の杯Ａ、蓋はＣのｂ類がある。

ＩＴ７（図117）　須恵器の杯Ａ・Ｂ、土師器の甕Ｃがある。杯Ａはｂ類、杯Ｂはｃ類であろう。

ＩＴ８（図117）　土師器甕Ｃの口縁部片のみである。

ＩＴ９（図117）　須恵器のみで、杯Ａ、蓋Ｃがある。杯Ａはｂ類とｃ－３類がある。蓋Ｃはｃ類で杯Ａのｂ類に合う。

ＩＴ10（図117）　杯Ｂ、蓋Ｃ、甕があり、いずれも須恵器類である。杯Ｂはａ類の埦形品、蓋Ｃはｃ類である。

ＩＴ11（図117）　須恵器杯Ｃの小片１点のみがある。

ＩＴ12（図117）　土師器のみで、甕ＡとＣがある。甕Ａはａ類である。

以上、竪穴式住居跡出土土器類を中心に、個々の住居跡の器種構成を見てきた。灰釉や緑釉の施釉陶器、また黒色土器を伴出する住居跡は時期的に限定されてくるであろう。また、須恵器の平瓶や高杯についても、５棟の住居跡から出土しているが、３棟までが蓋Ｂを伴出しており、やはり時期的な限界を見ることができそうである。須恵器杯Ａ～Ｆの特殊なものは４棟から出土している。これらも蓋ＡやＢまた杯Ｃと共伴するものが３棟まであり、時期的に限られよう。杯Ｃは５棟から出土している。これらのうち３棟までが蓋ＡまたはＢが伴出し、杯Ａが伴出するのは１棟のみである。このように、住居跡の器種構成は、土器の形式変化だけでなく、時期的に組合せの変化が生じている可能性がある。次項で検討を要する点である。

Ⅱ．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の場合、柱穴からの出土遺物のみであって、竪穴式住居跡のように器種構成を求めることは無理である。従って、ここでは、柱穴から土器類が出土していることを述べるのにとどめる。

ＢＨ１（図102）　須恵器杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃがある。

ＢＨ５（図102）　坩形の短頭壺がある。

ＢＨ６（図102）　須恵器杯Ａがある。

ＢＨ７（図102）　須恵器蓋Ｃが出土している。

ＢＨ９（図102）　須恵器蓋Ｂ、杯Ａがある。

ＩＨ３（図117）　須恵器杯Ａと思われる小片がある。

ＩＨ４（図117）　須恵器杯Ａの出土を見ている。

Ⅲ．土坑・溝状遺構・その他（図118～150）

土坑やその他の遺構については、その主なものについて、前項で、その説明とともに遺物の出土状況についても略述しておいた。ここで、一括遺物として扱い得るものを取り上げたいが、竪穴式住居跡と性格を異にするものであり、一括性を持たせるためには、次項で述べる遺物の編年作業をも加えねばならないであろう。従って、土坑、溝状遺構、その他の遺構についての遺物の出土状況については、後述することとする。

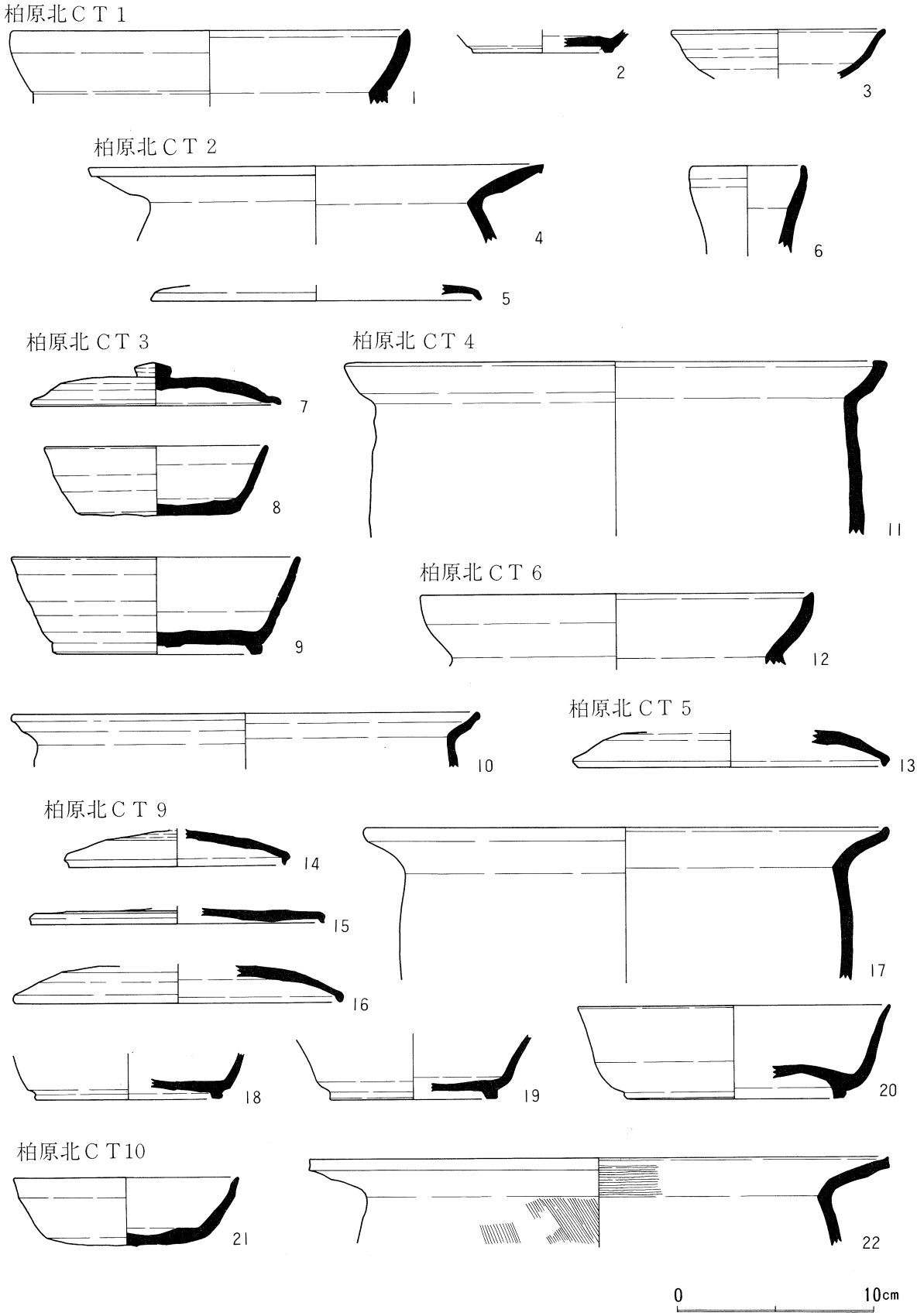


図91．柏原北Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

柏原北ＣＴ７

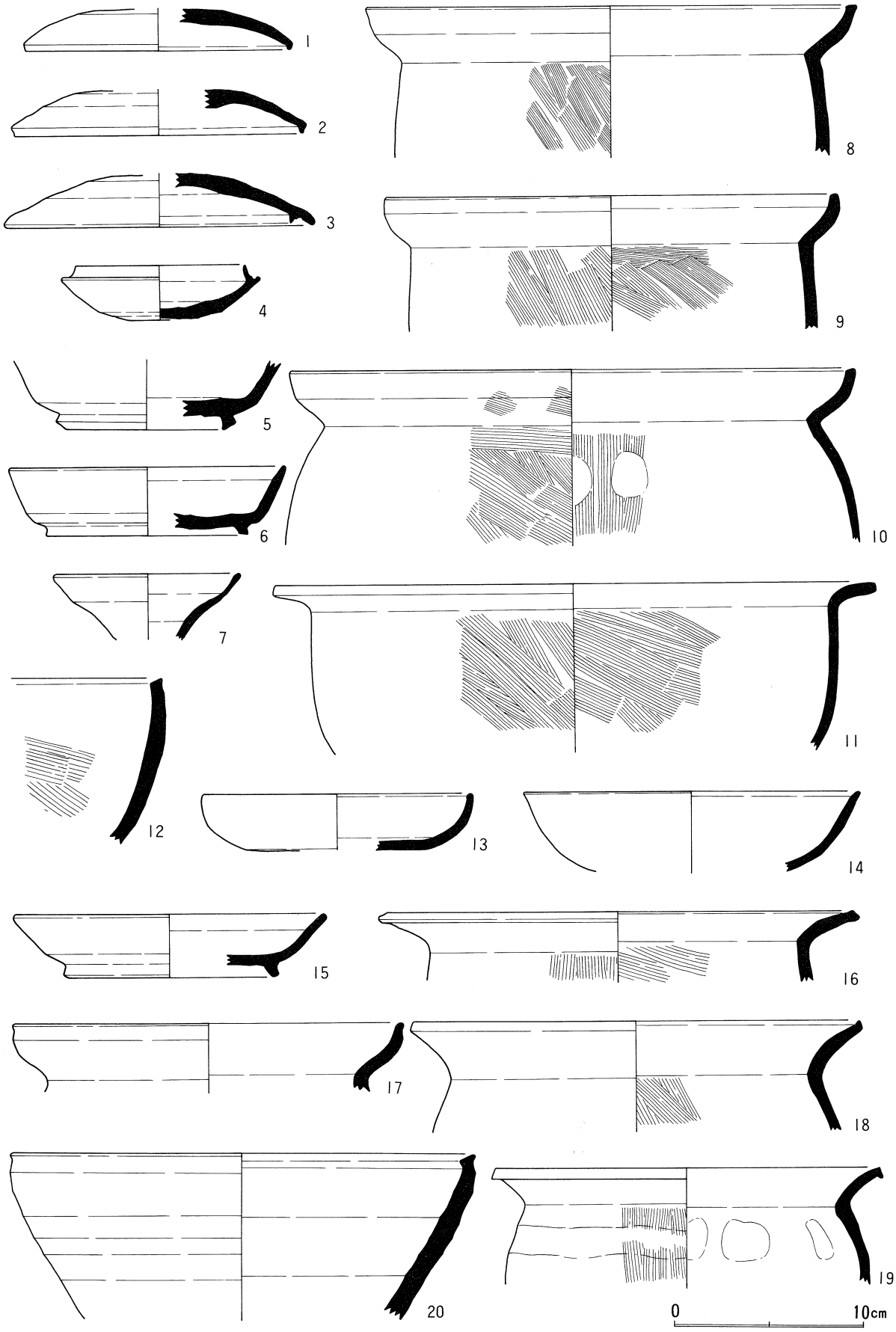


図92．柏原北Ｃ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)

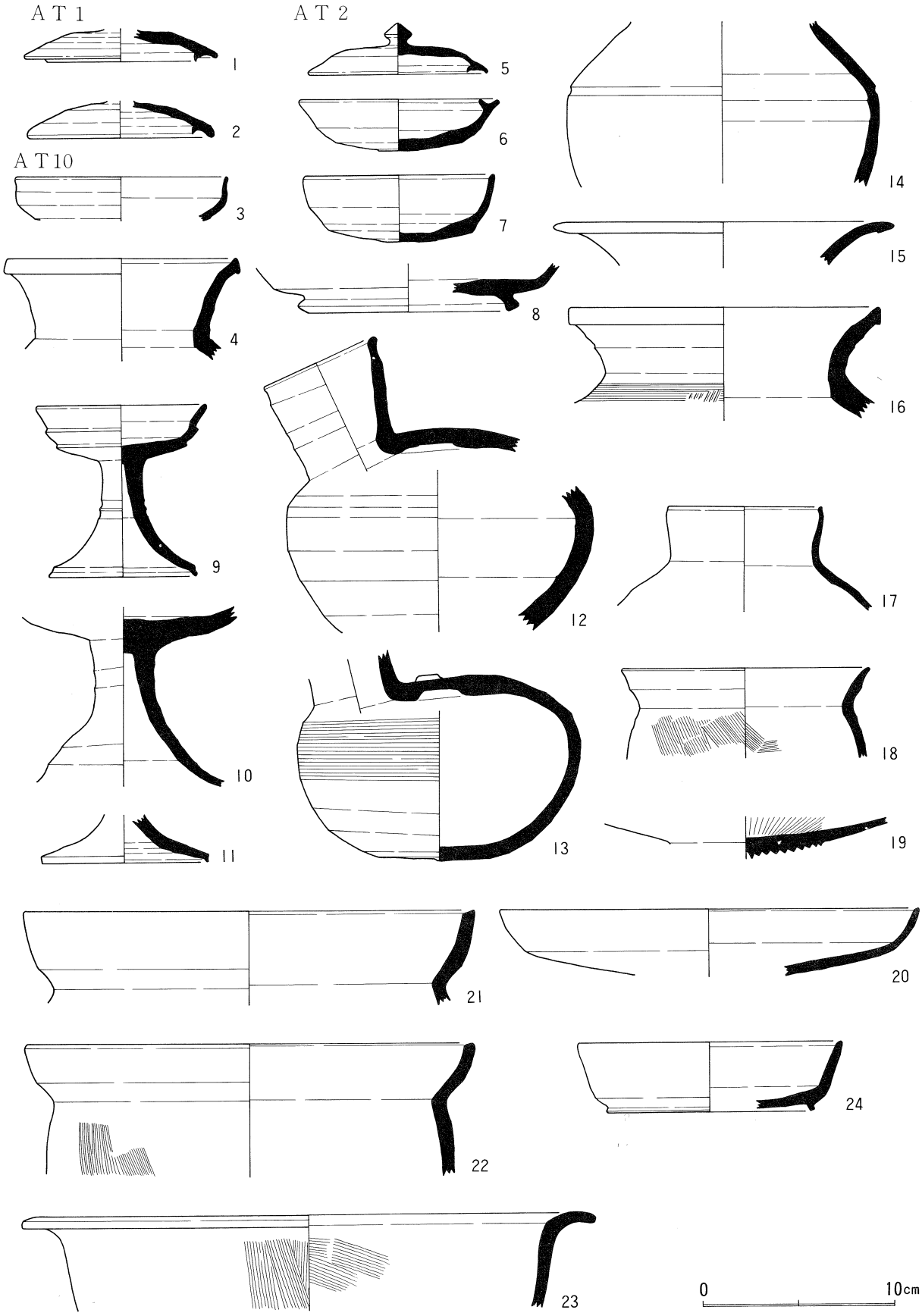


図93. A区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

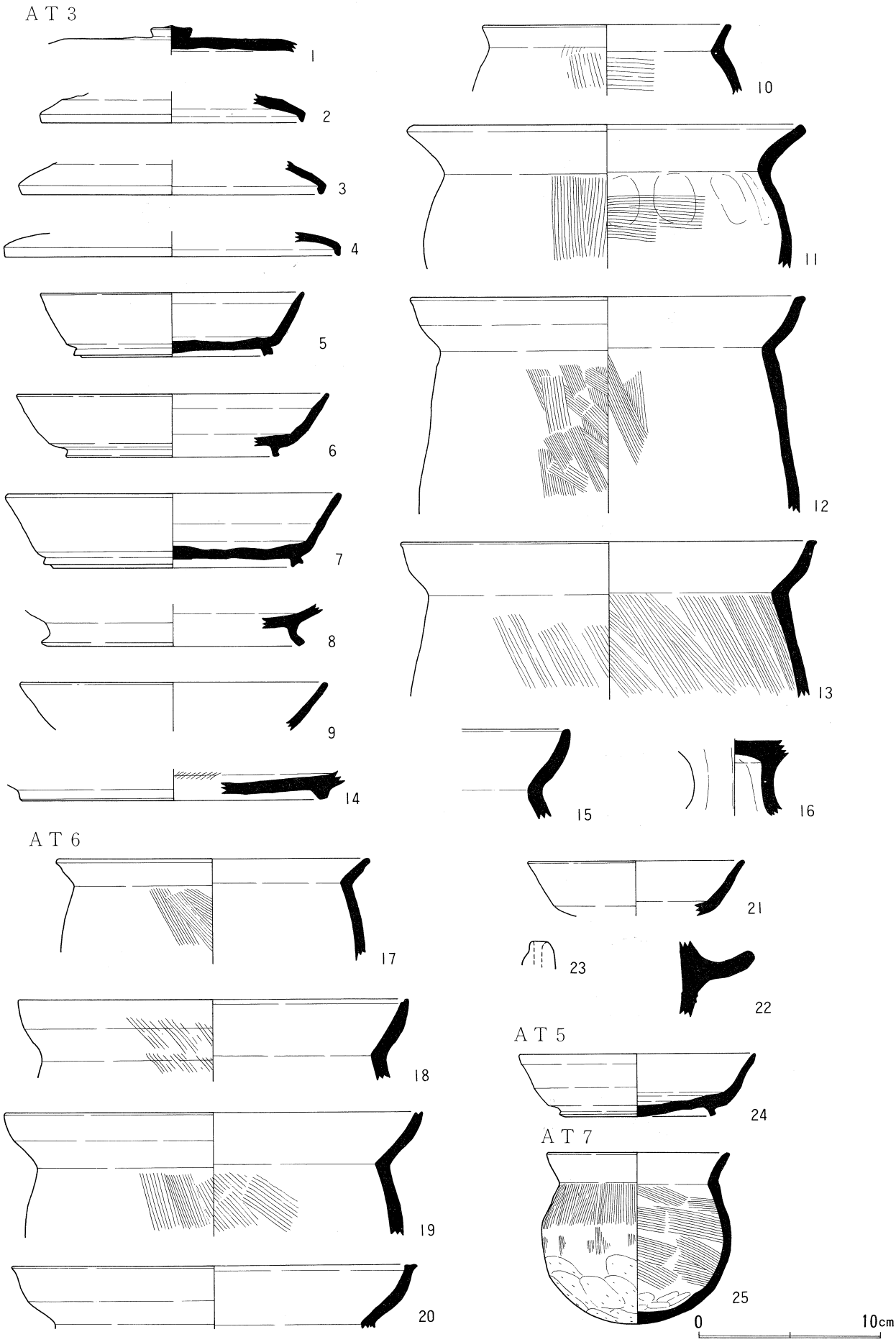


図94. A区竪穴式住居跡出土器実測図(2)

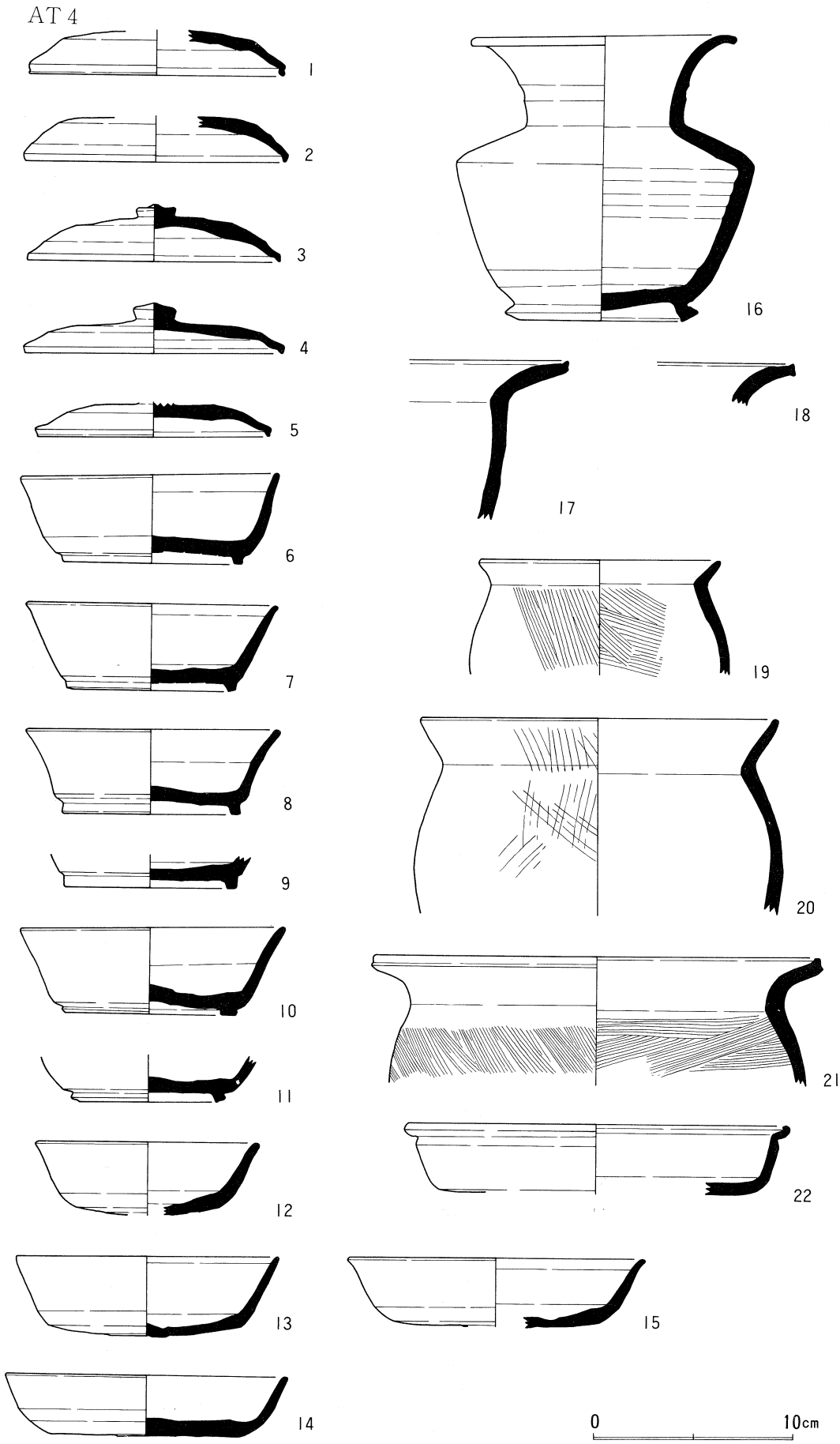


図95. A区竪穴式住居跡出土器実測図(3)

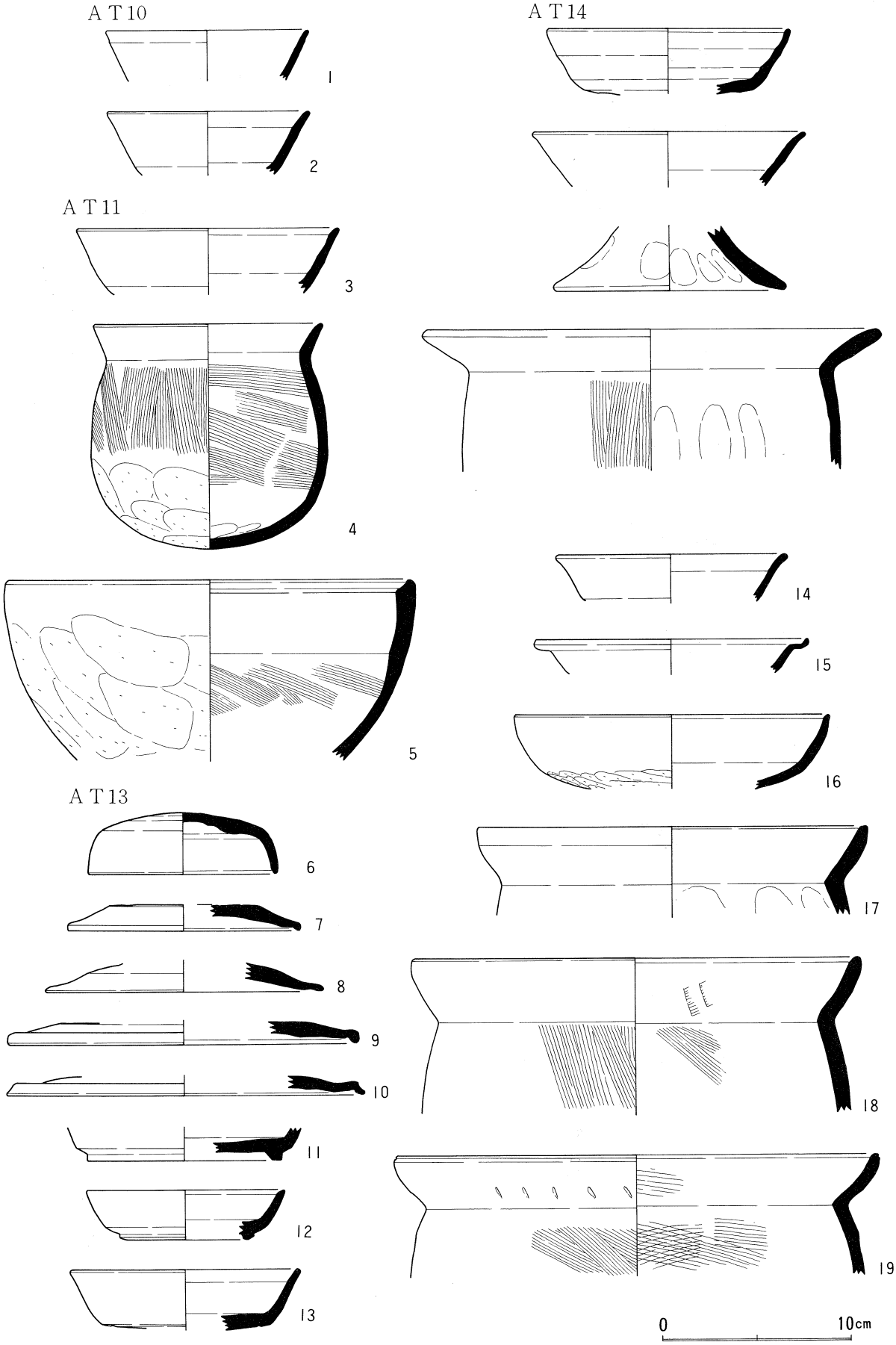


図96. A区竪穴式住居跡出土器実測図(4)

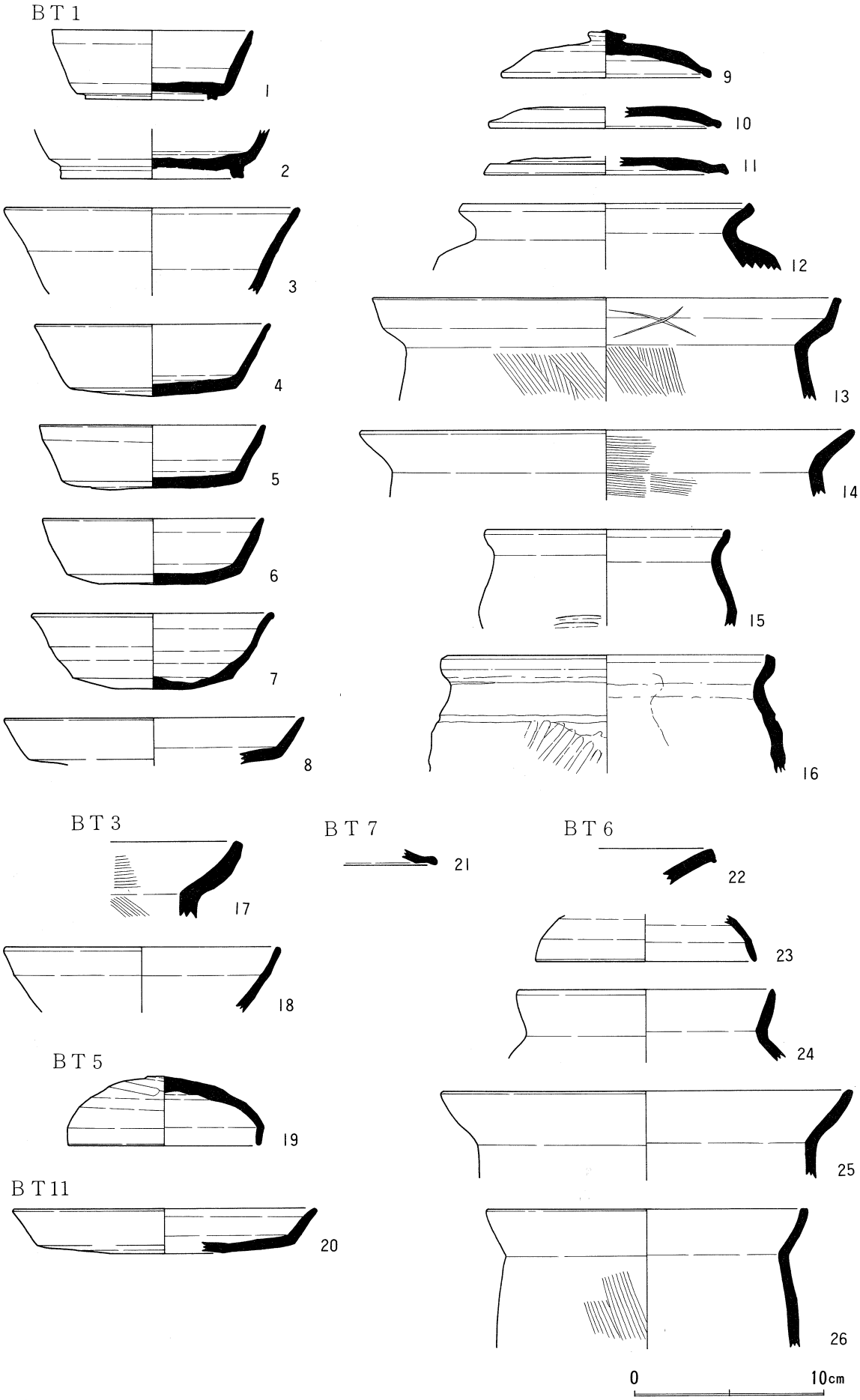


図97．B区竪穴式住居跡出土器実測図(1)

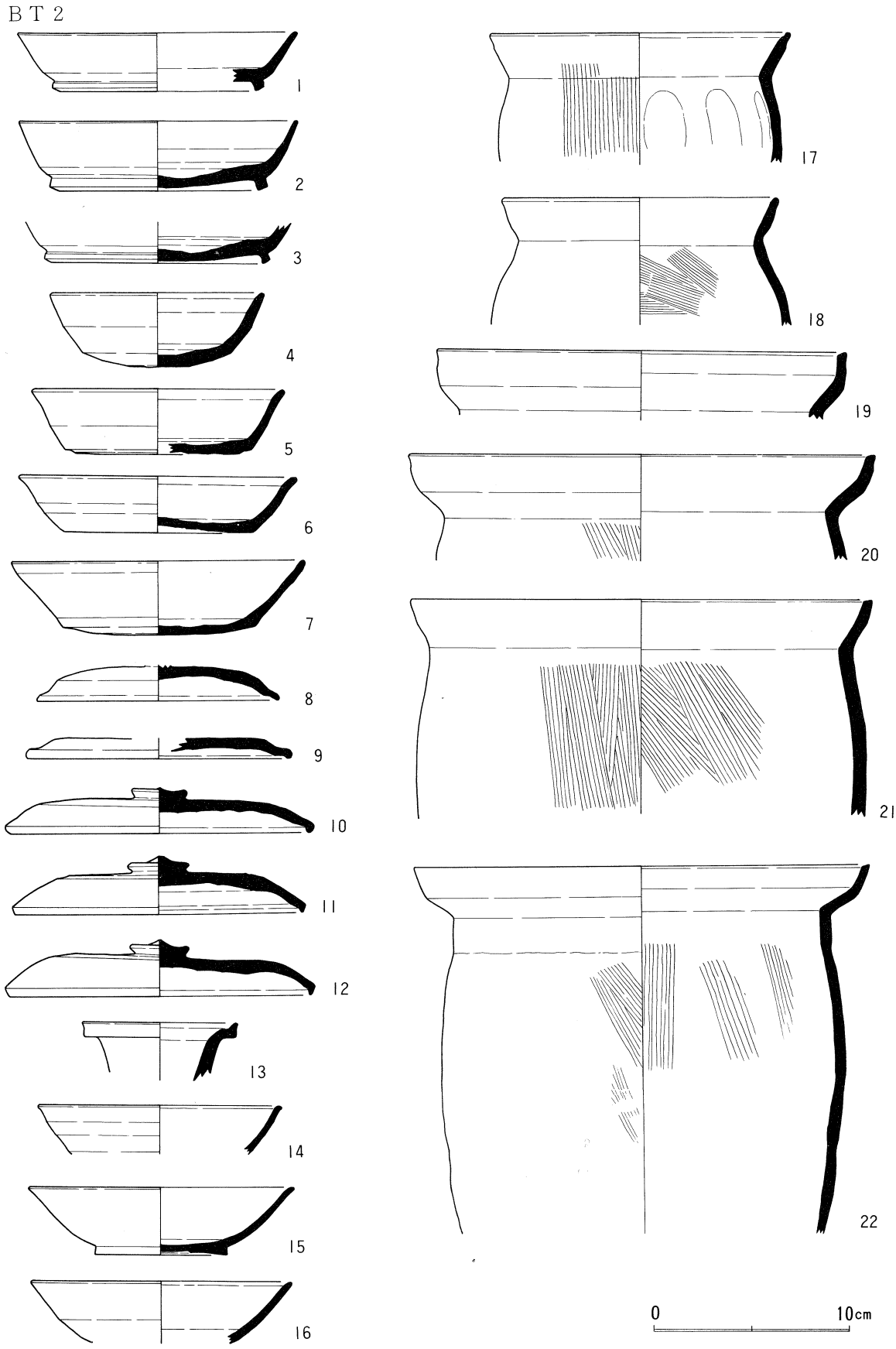


図98．B区竪穴式住居跡出土器実測図(2)

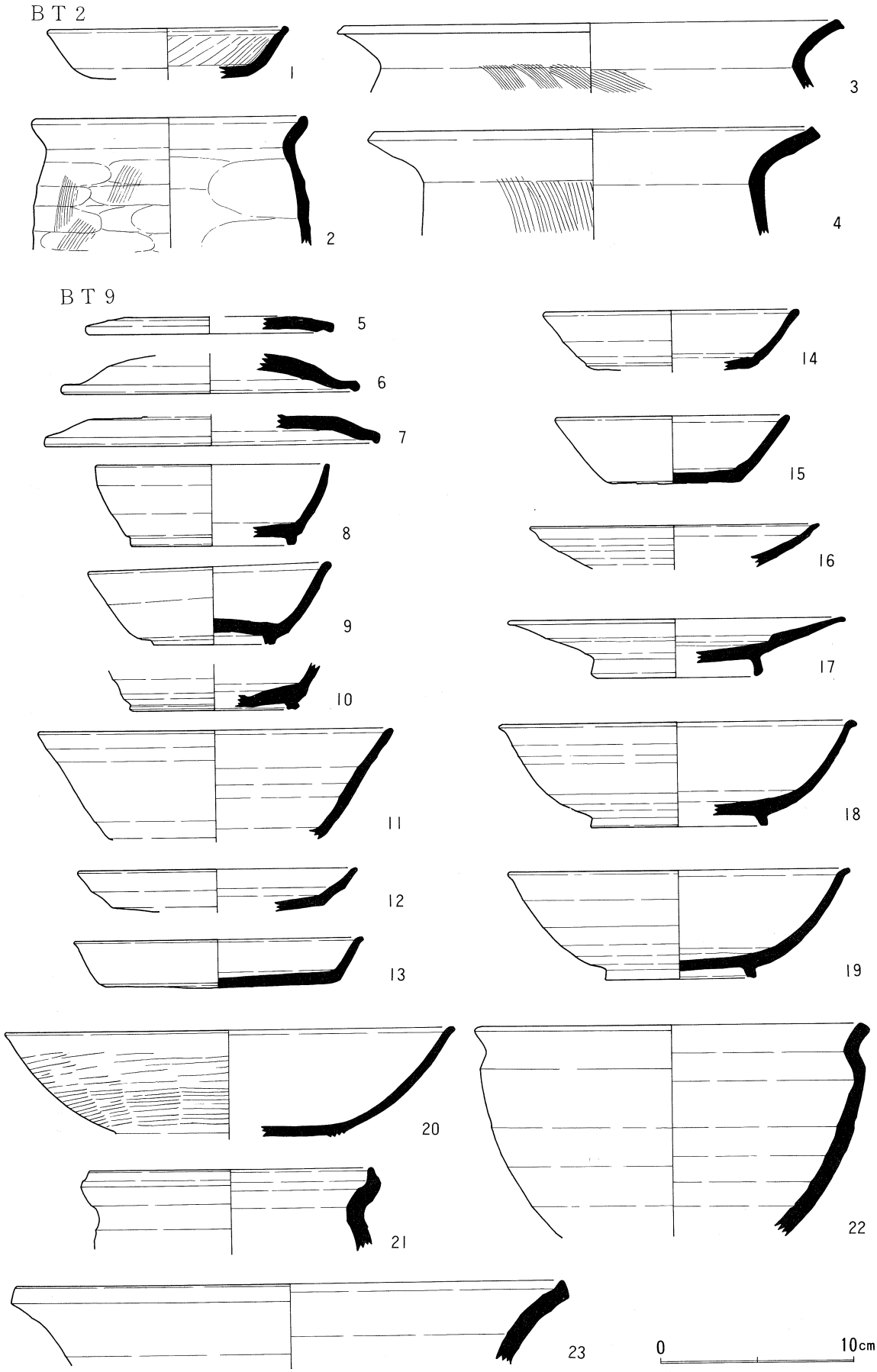


図99．B区竪穴式住居跡出土器実測図(3)

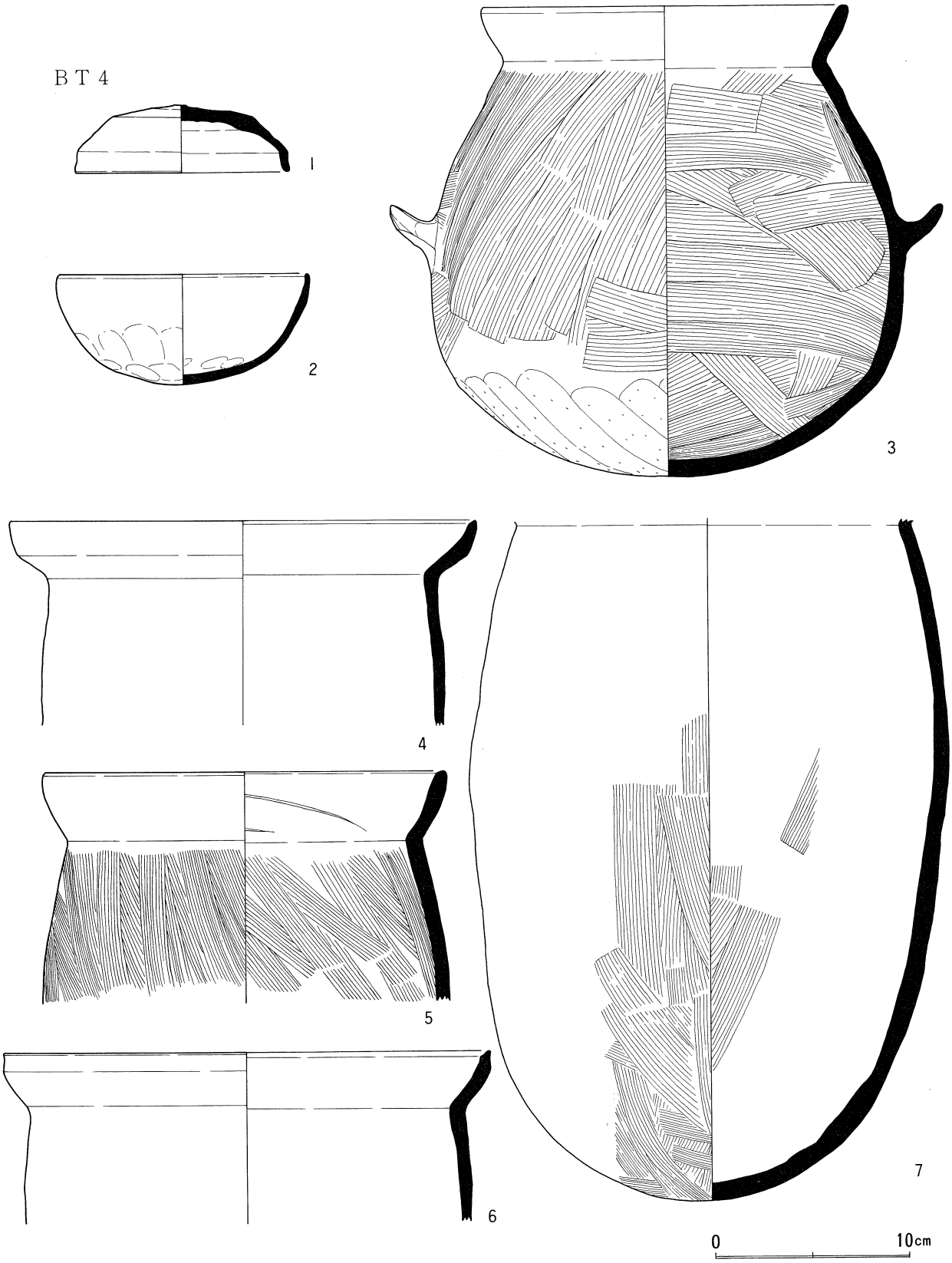


図100．B区竪穴式住居跡出土器実測図(4)

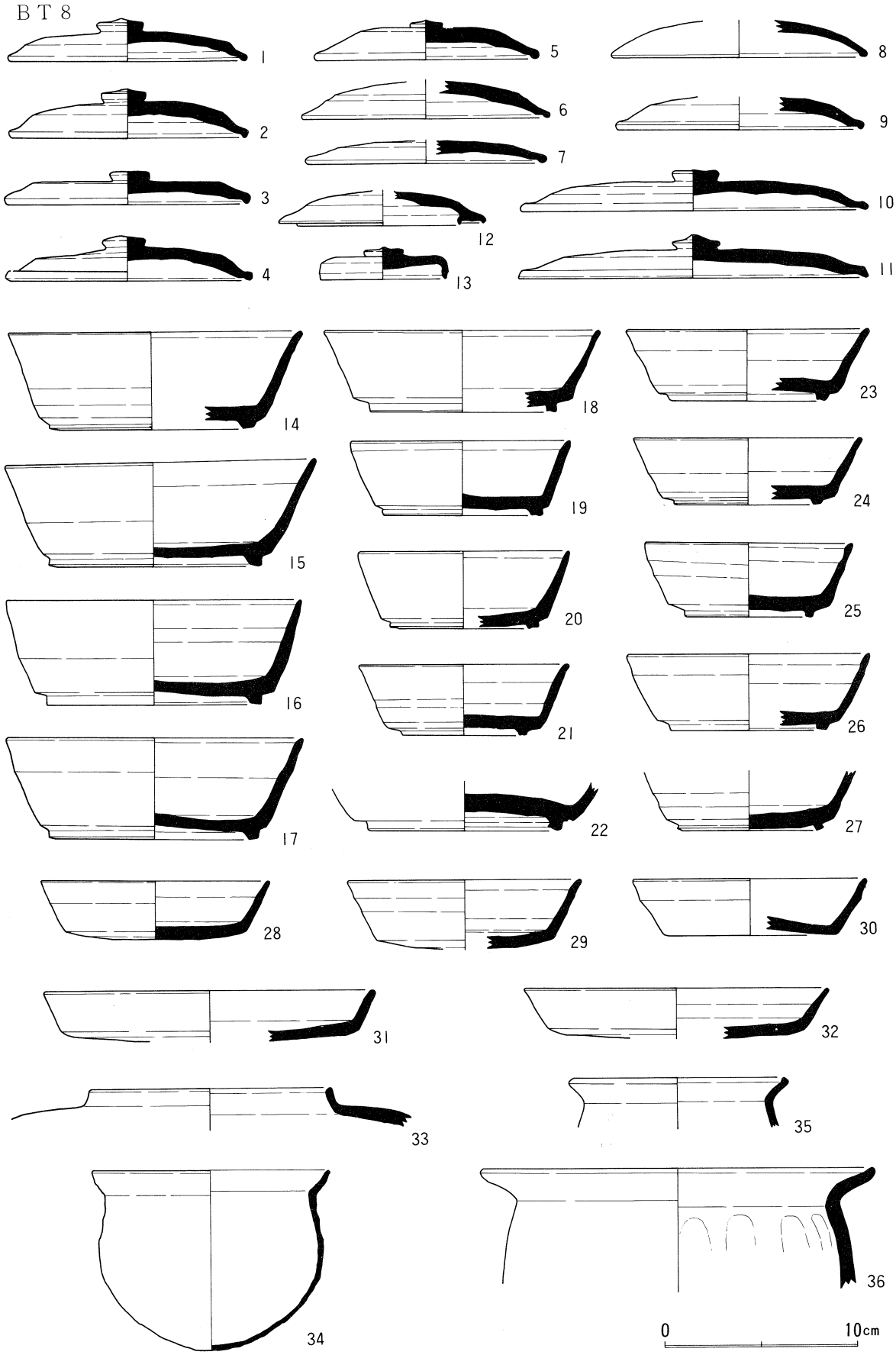


図101．B区竪穴式住居跡出土器実測図(5)

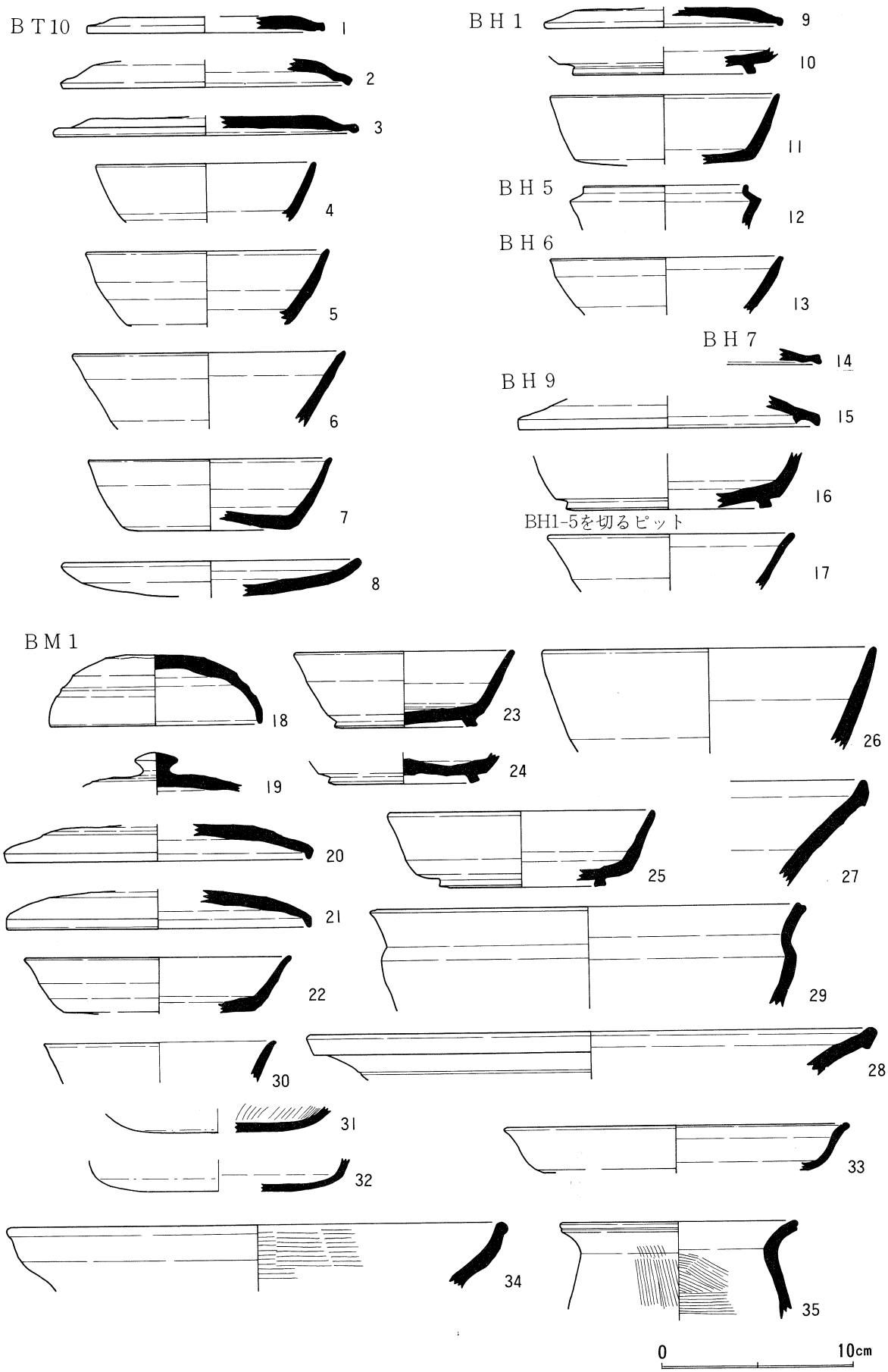


図102. B区竪穴式住居跡出土土器実測図(6)、その他
遺構出土土器実測図(1)

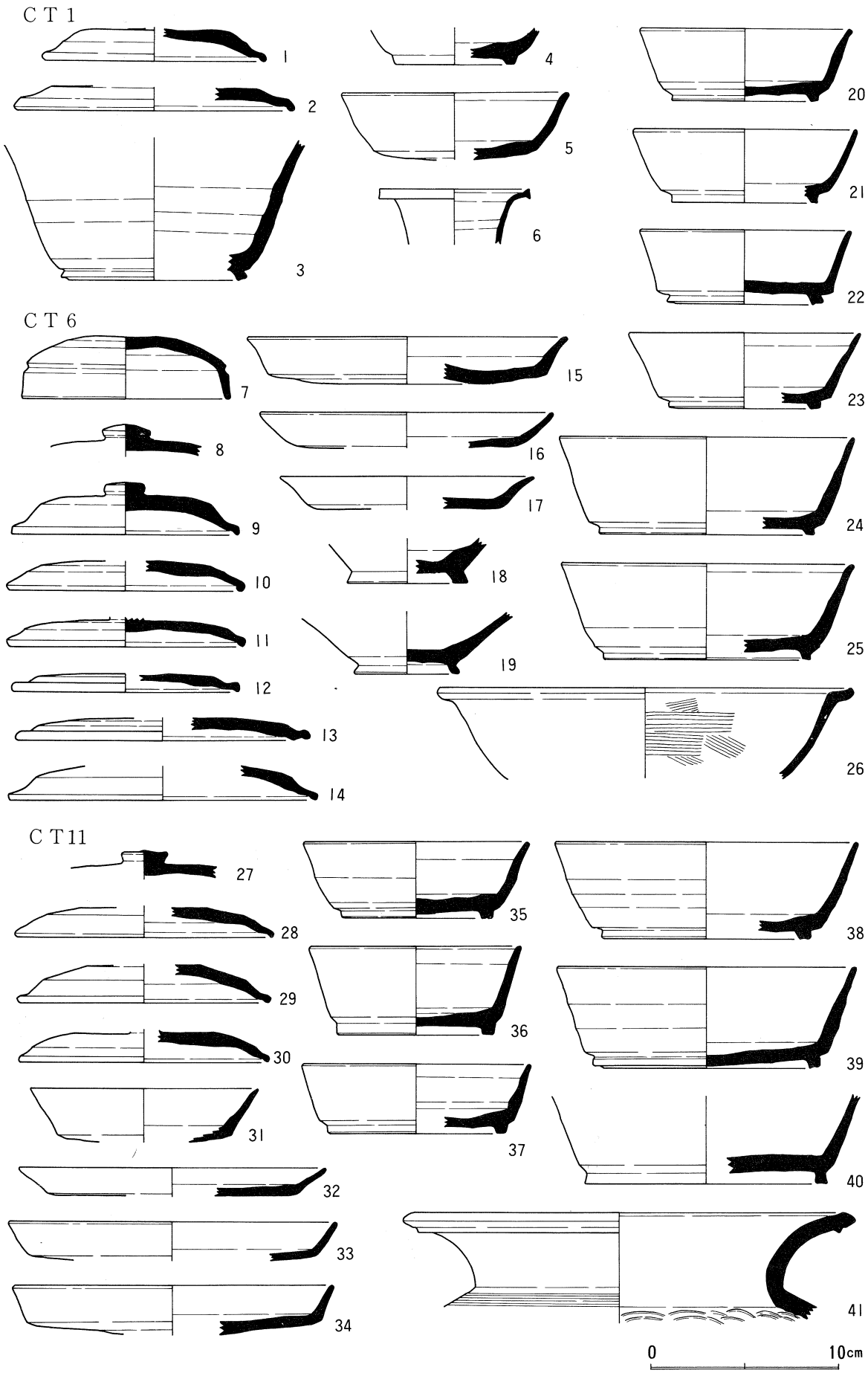


図103．C区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

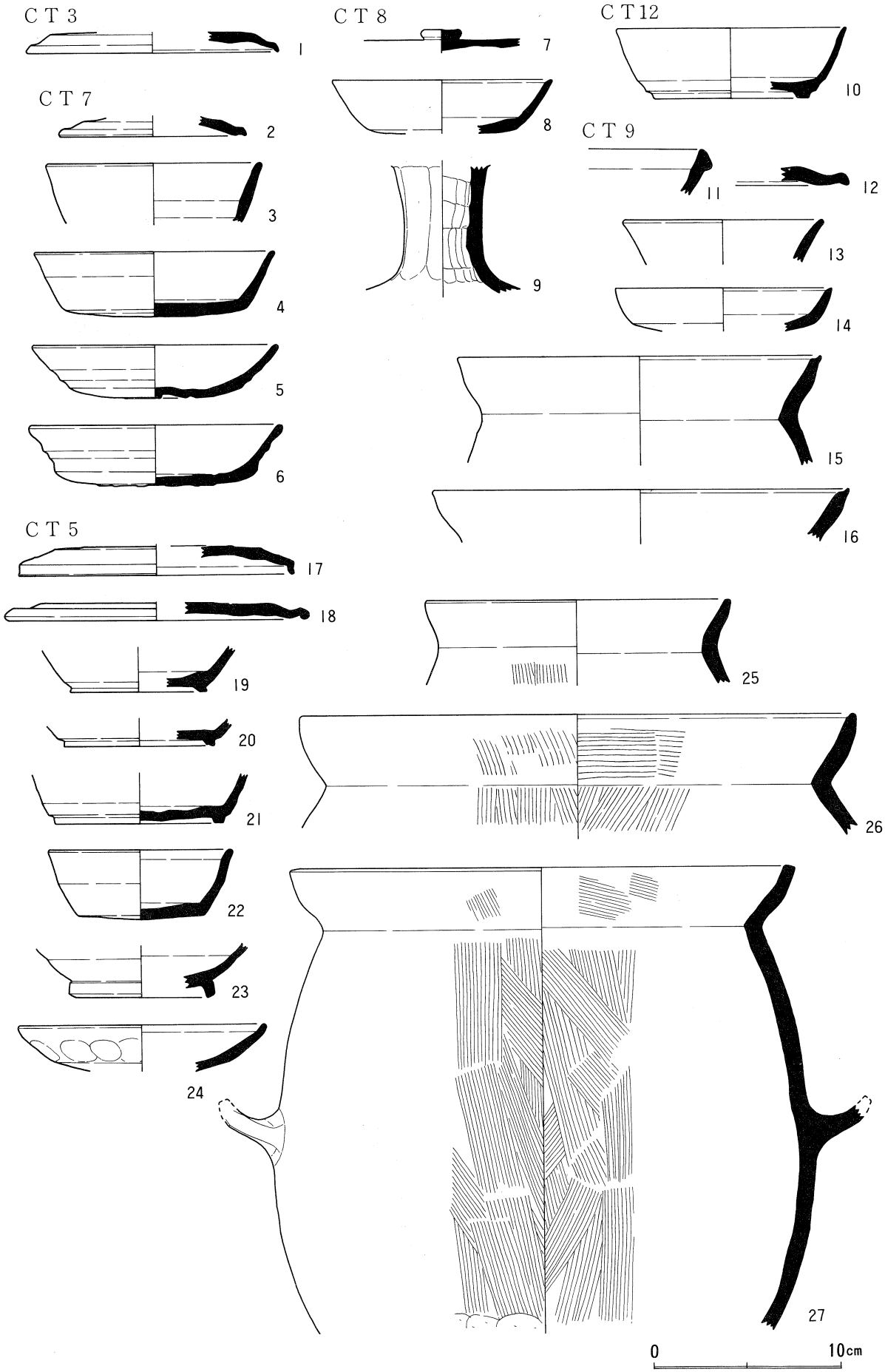


図104．C区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)

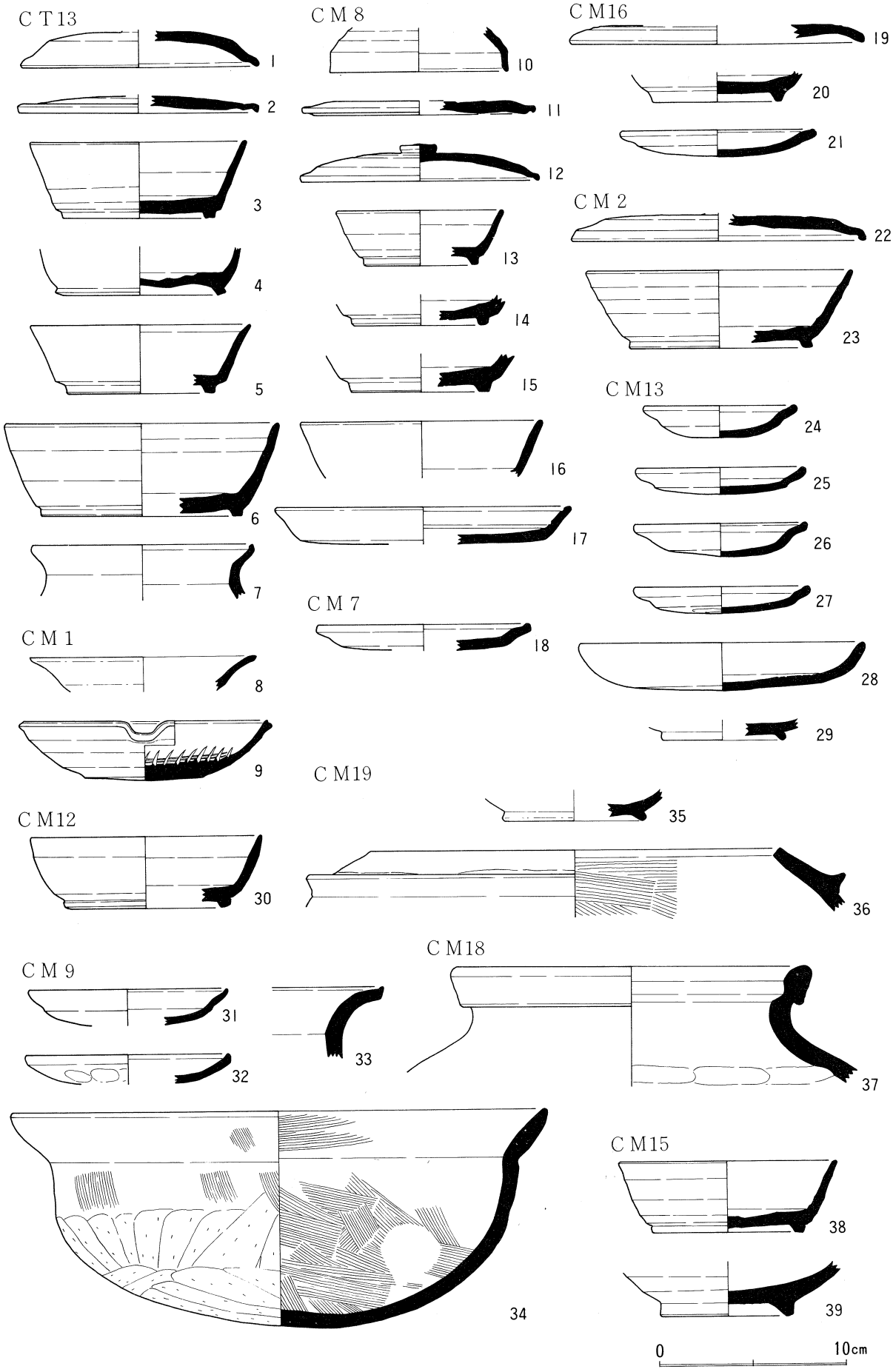


図105．C区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)、その他遺構出土土器実測図(1)

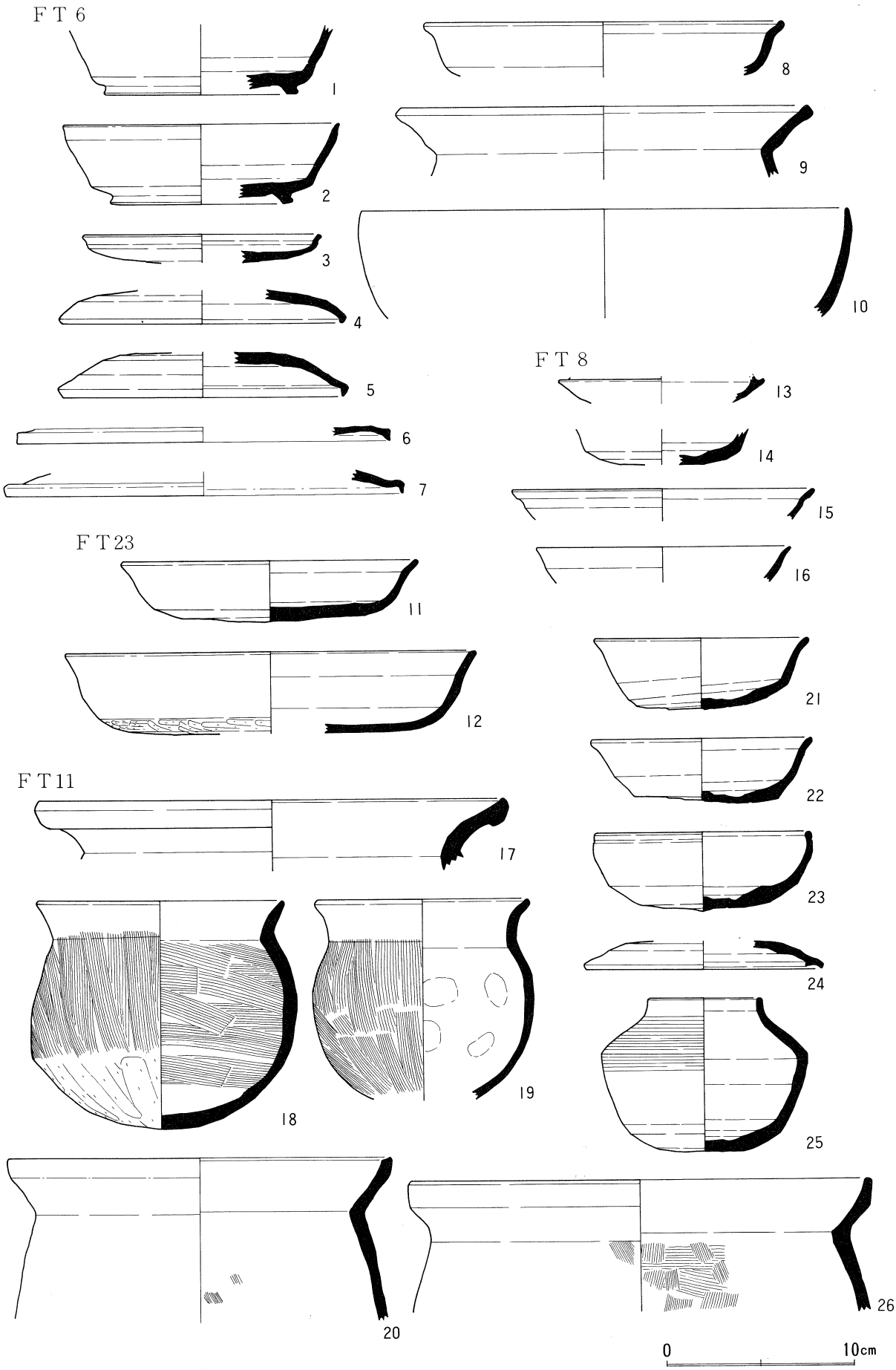


図106. F区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

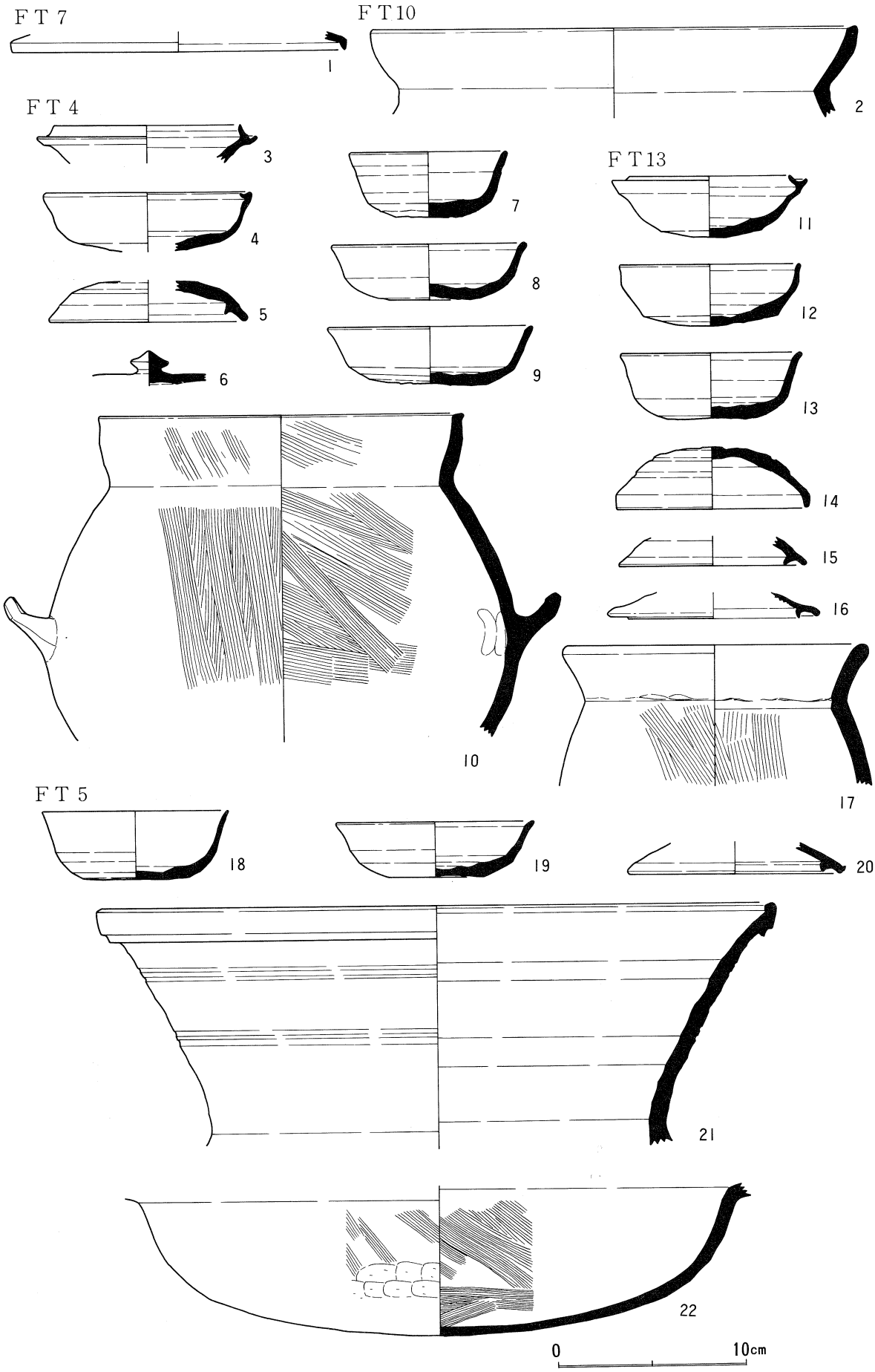


図107．F区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)

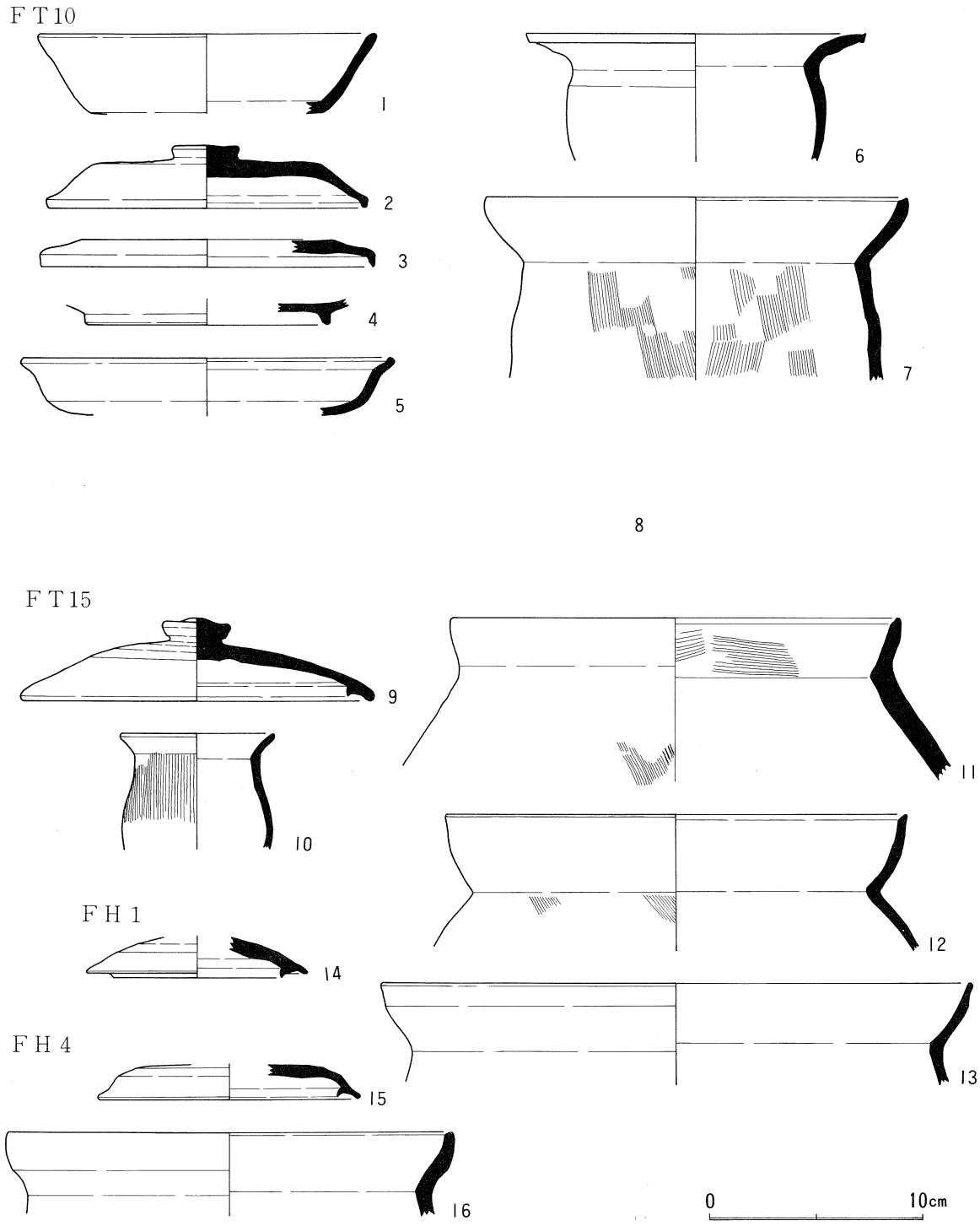


図108．F区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)、その他遺構出土土器実測図(1)

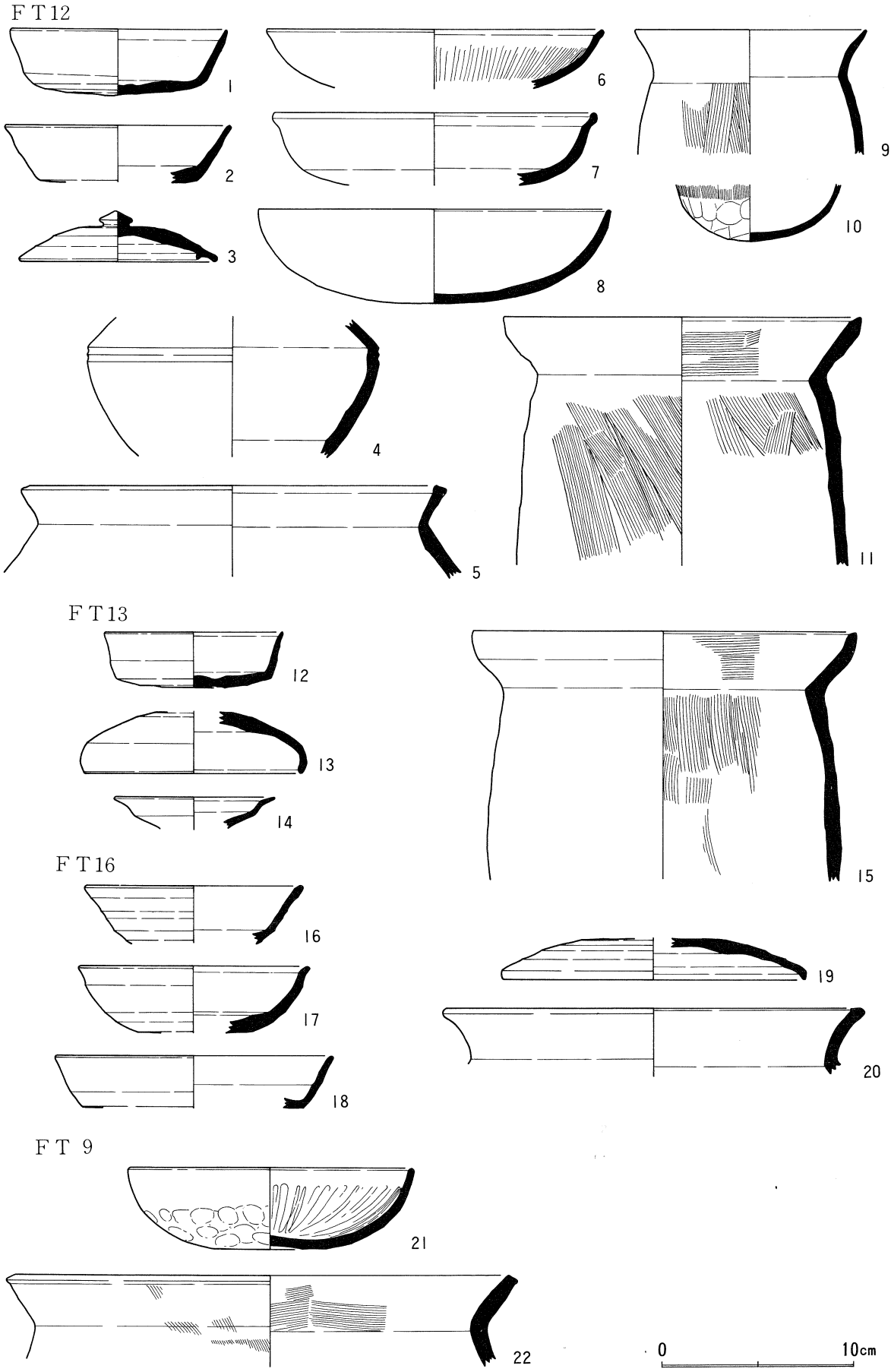


図109. F区竪穴式住居跡出土土器実測図(4)

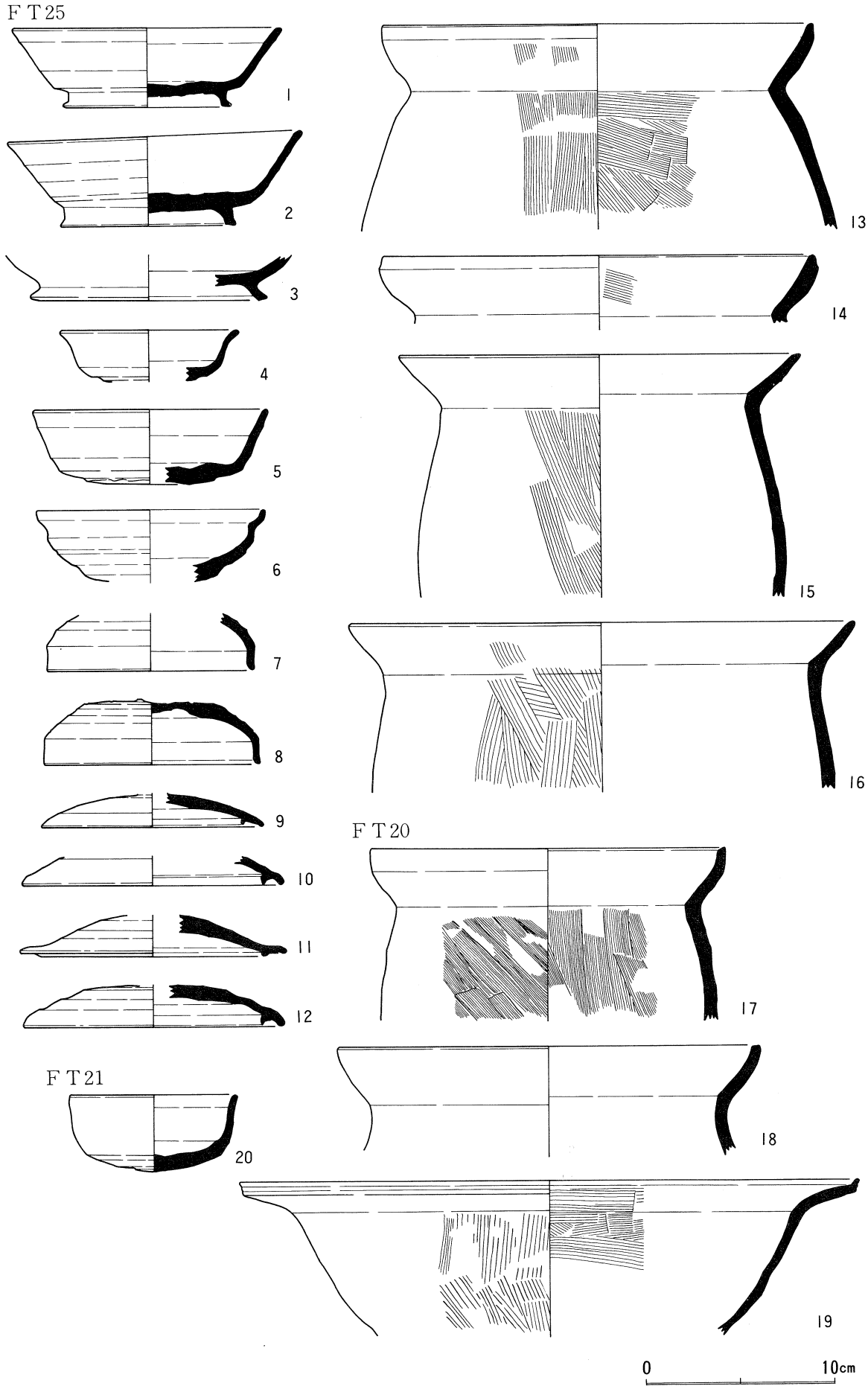


図110．F区竪穴式住居跡出土土器実測図(5)

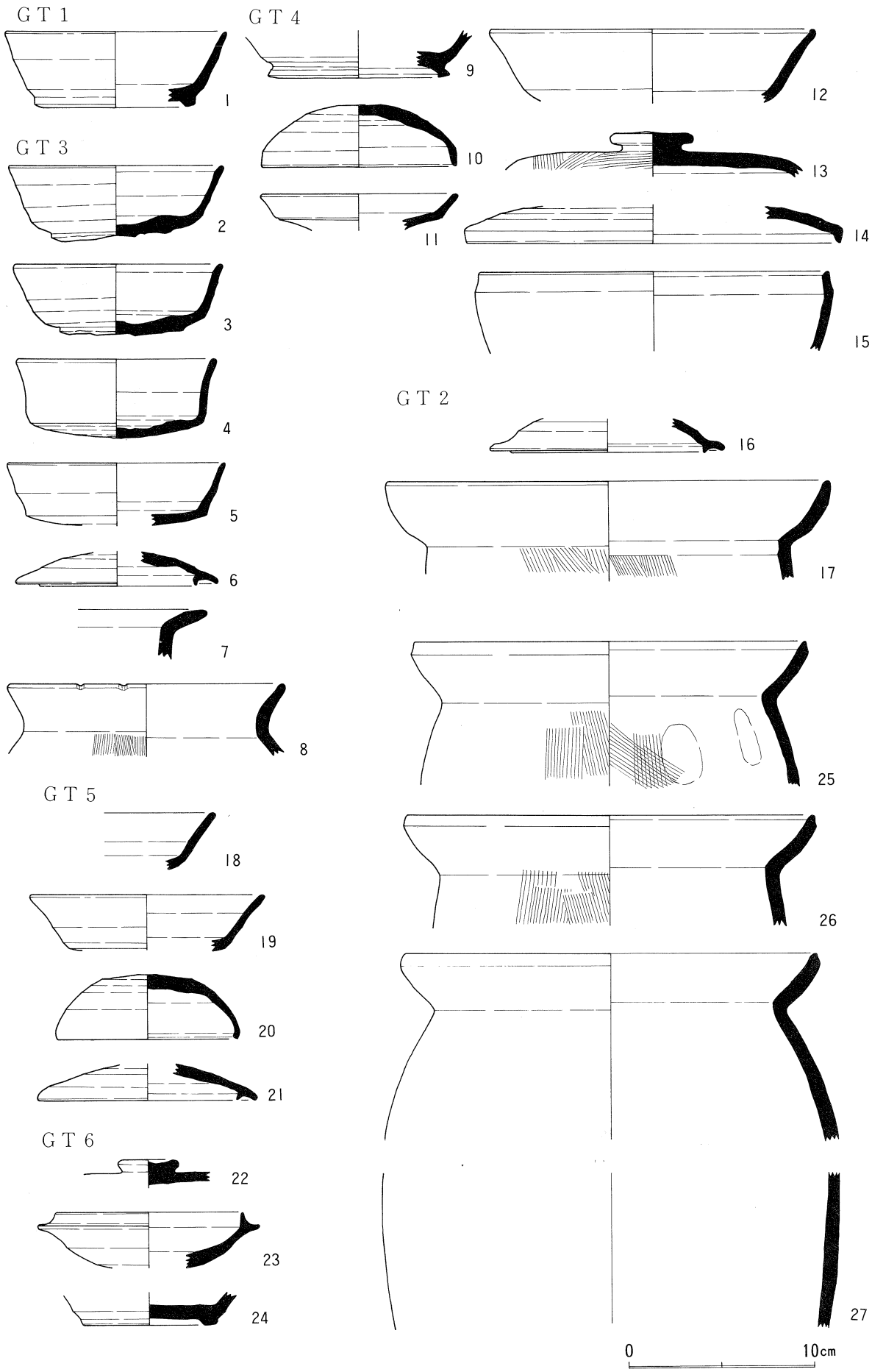


図111. G区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

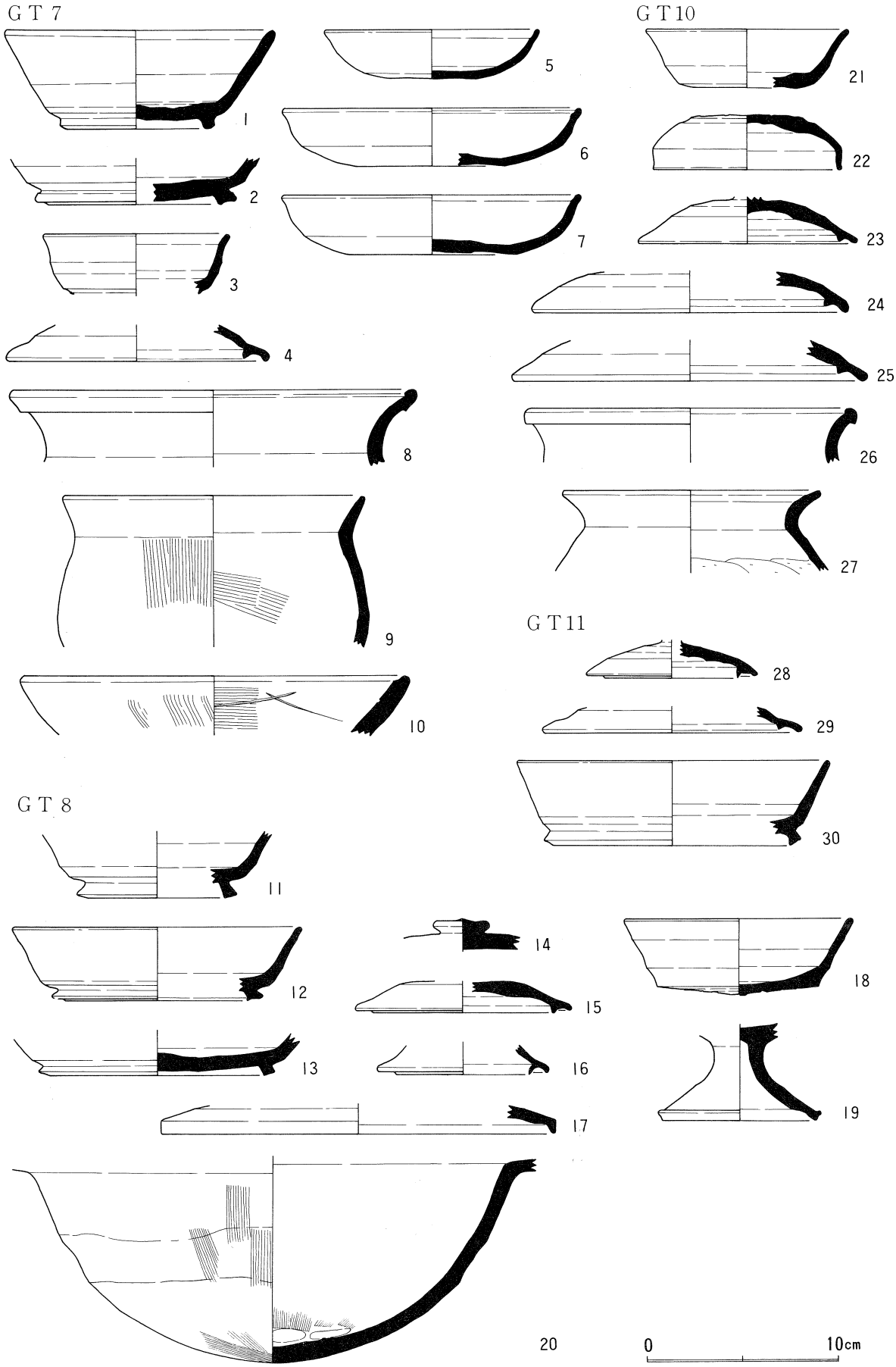


図112. G区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)

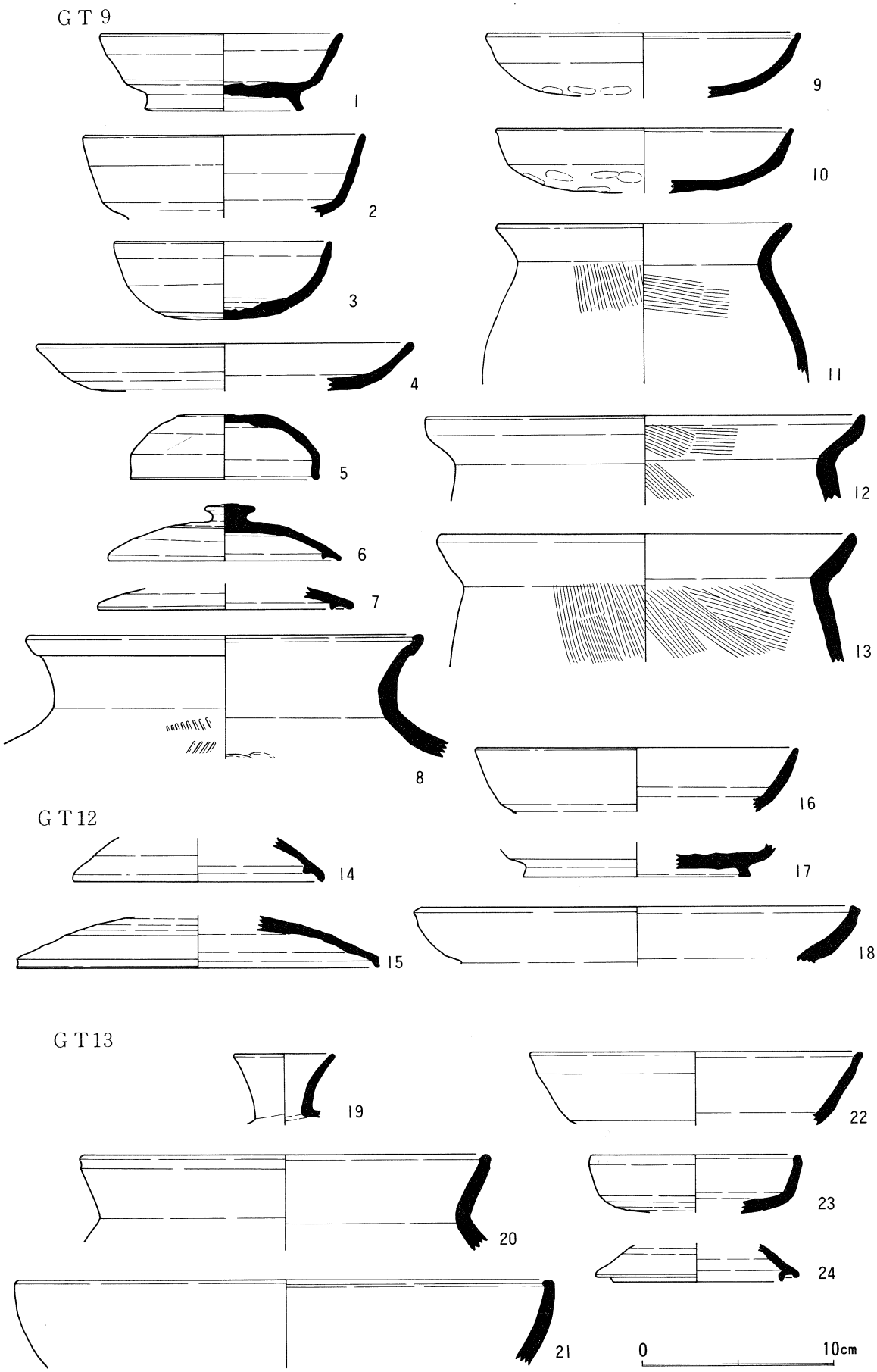


図113．G区竪穴式住居跡出土土器実測図(3)

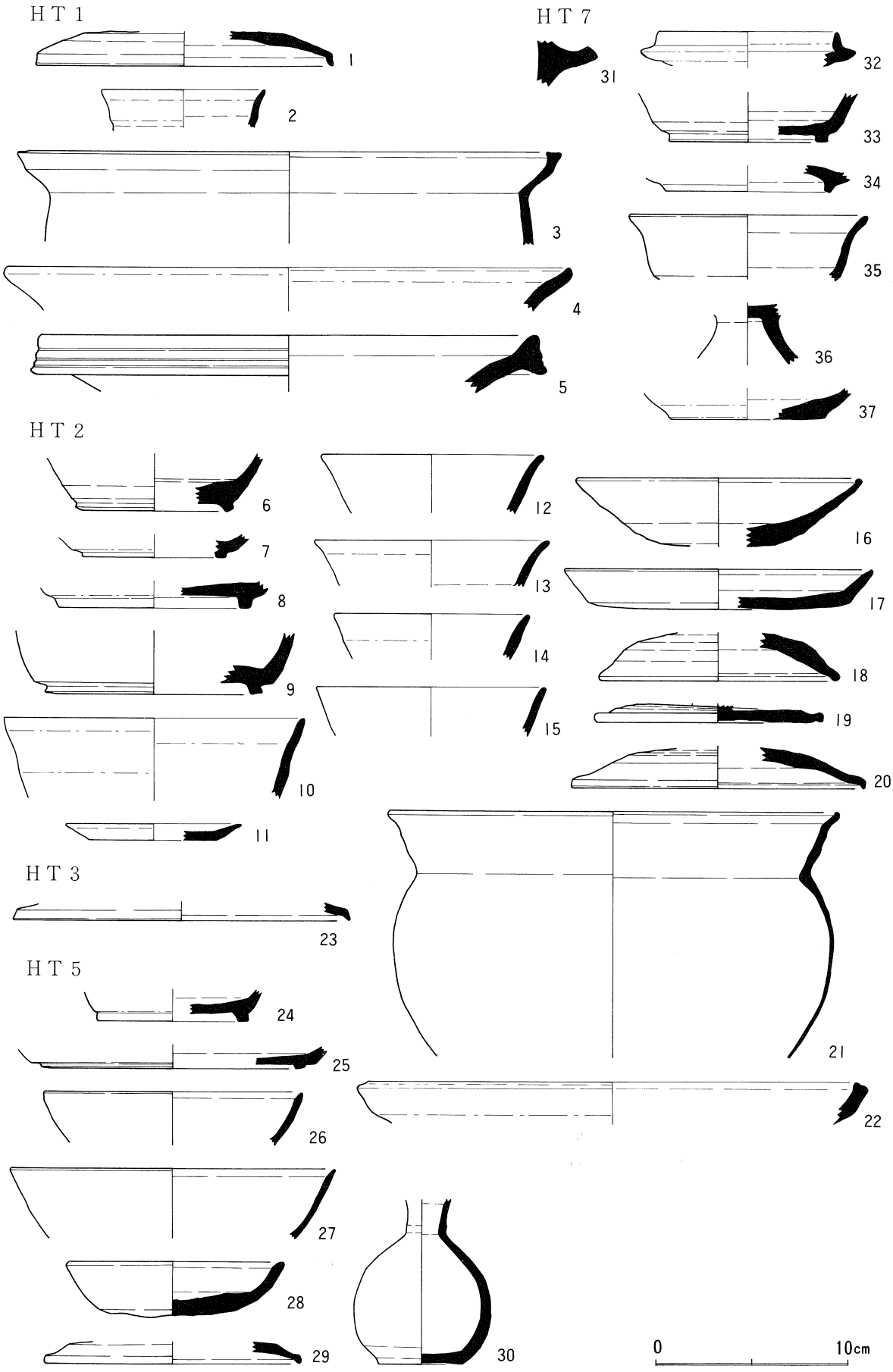


図114．H区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

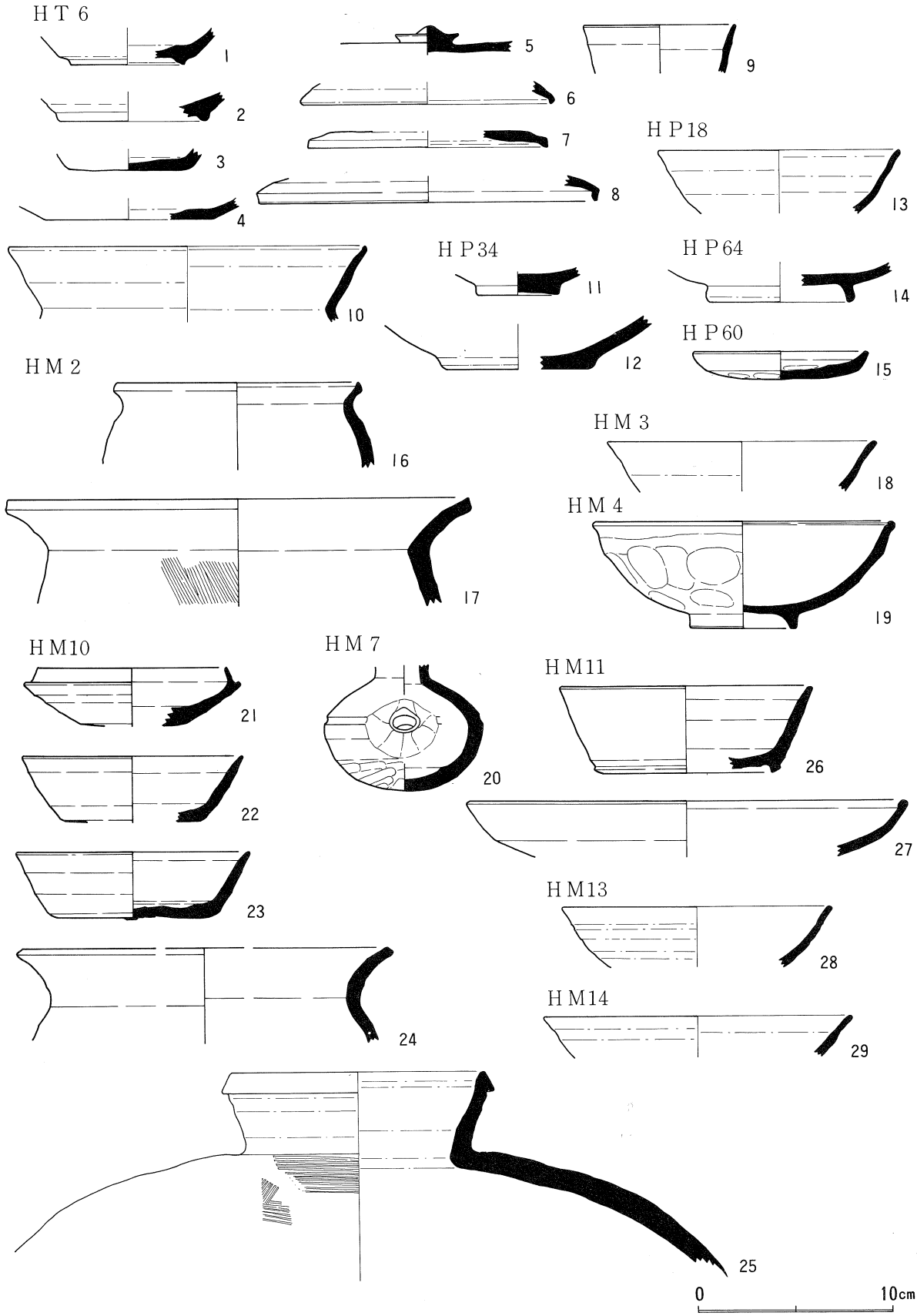


図115．H区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)、その他遺構出土土器実測図(1)

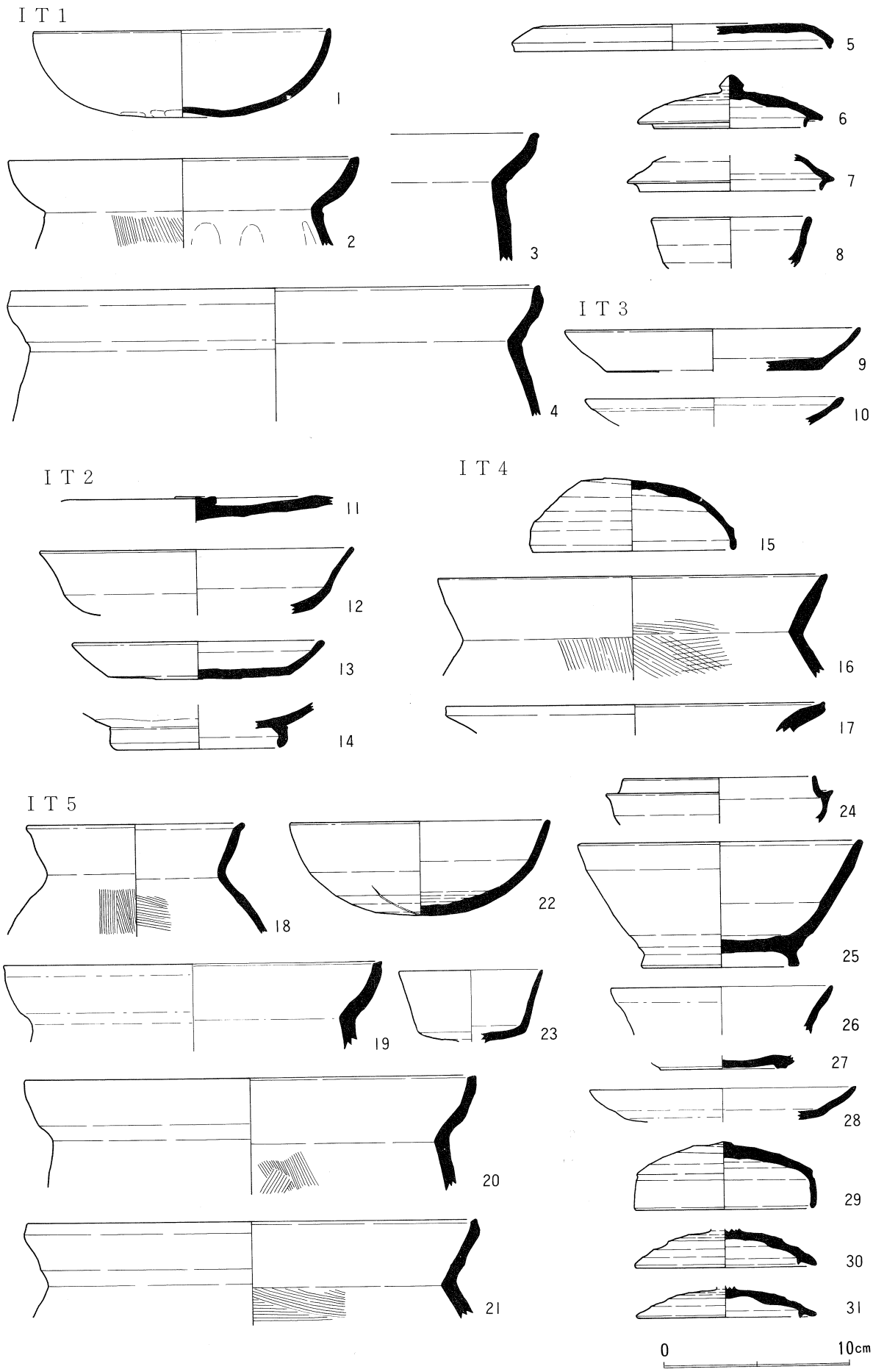


図116. Ⅰ区竪穴式住居跡出土土器実測図(1)

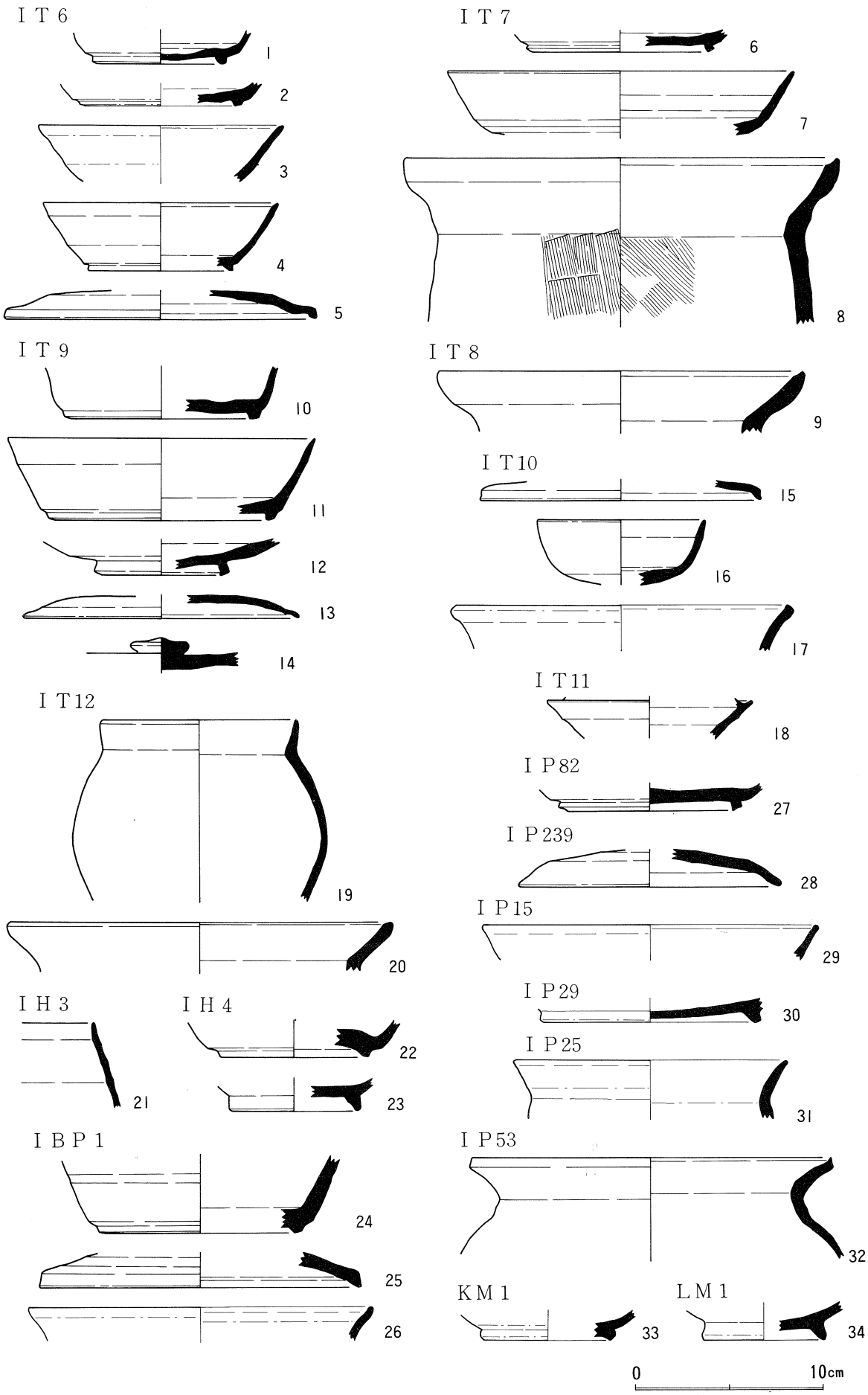


図117．Ｉ区竪穴式住居跡出土土器実測図(2)、その他遺構出土土器実測図(1)

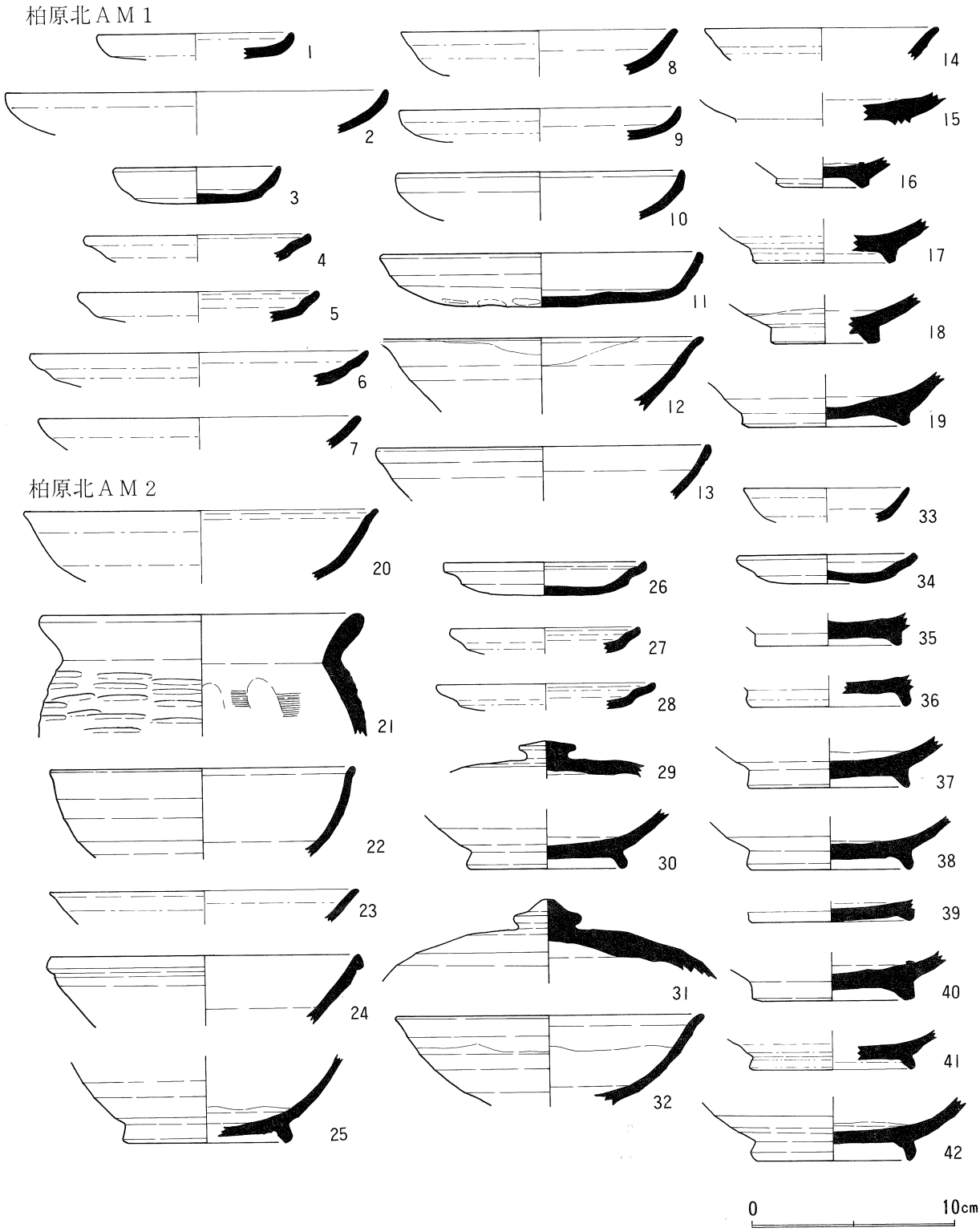


図118．柏原北Ａ区その他遺構出土土器実測図(1)

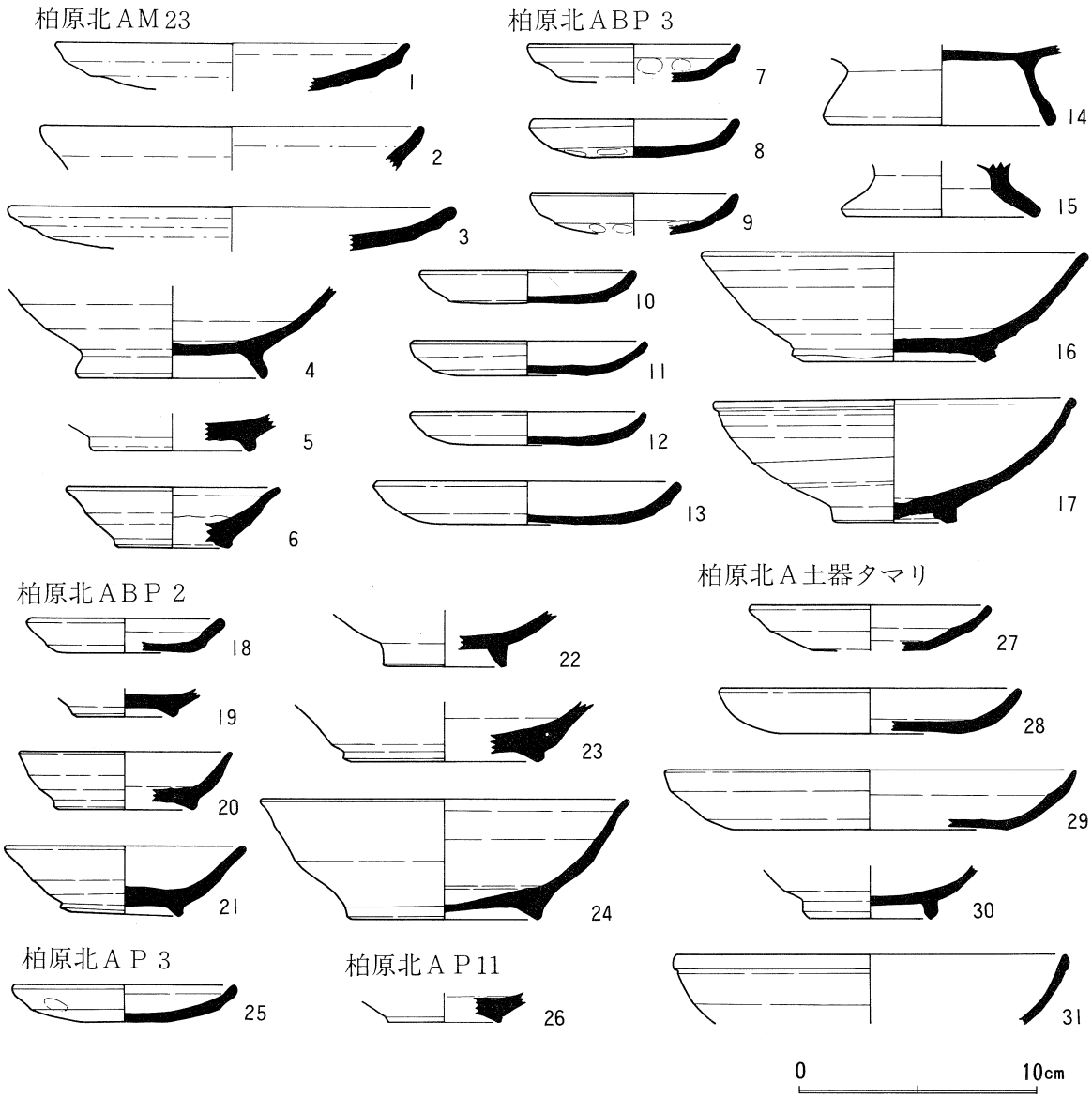


図119．柏原北Ａ区その他遺構出土土器実測図(2)

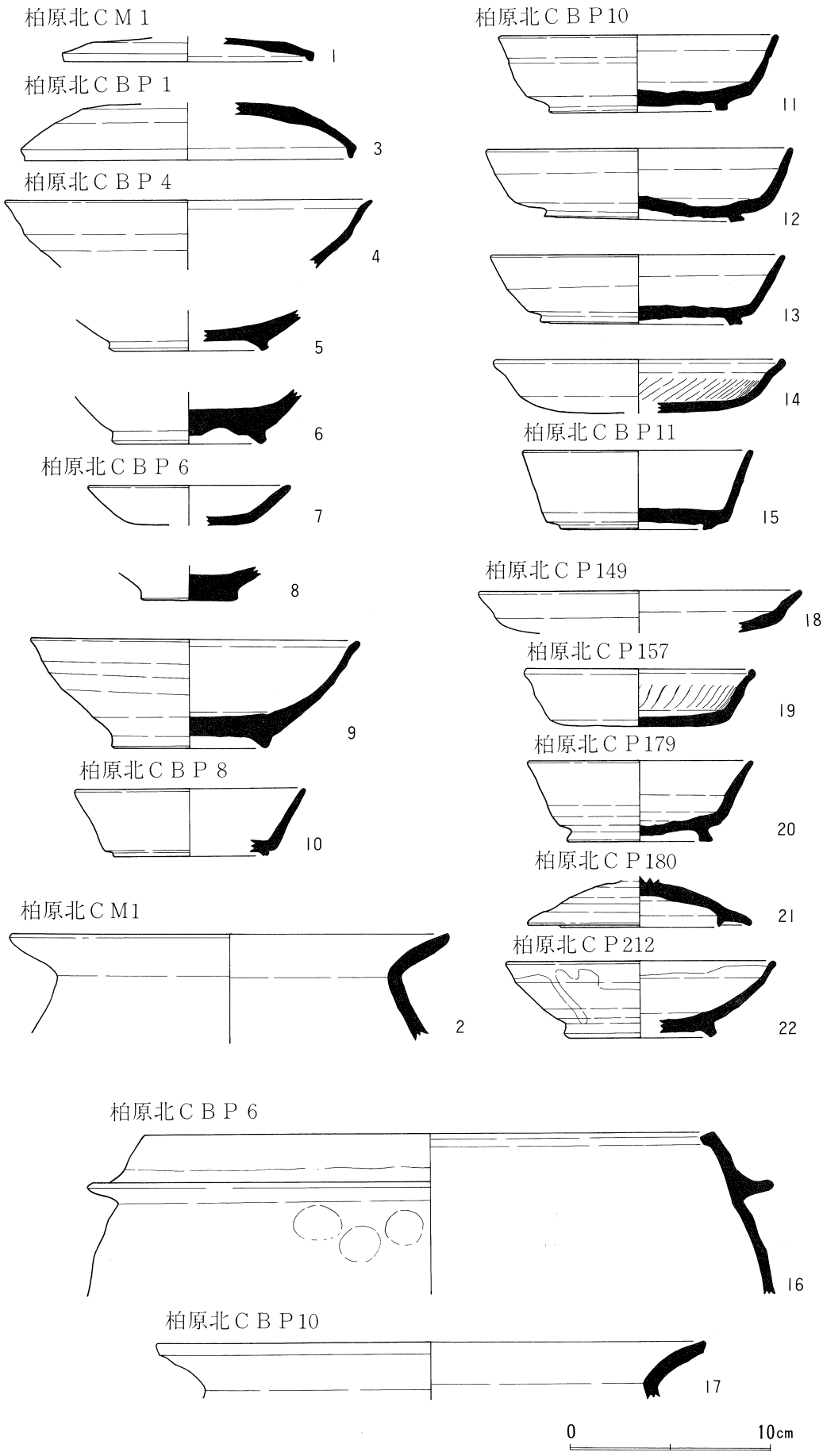


図120．柏原北Ｃ区その他遺構出土土器実測図

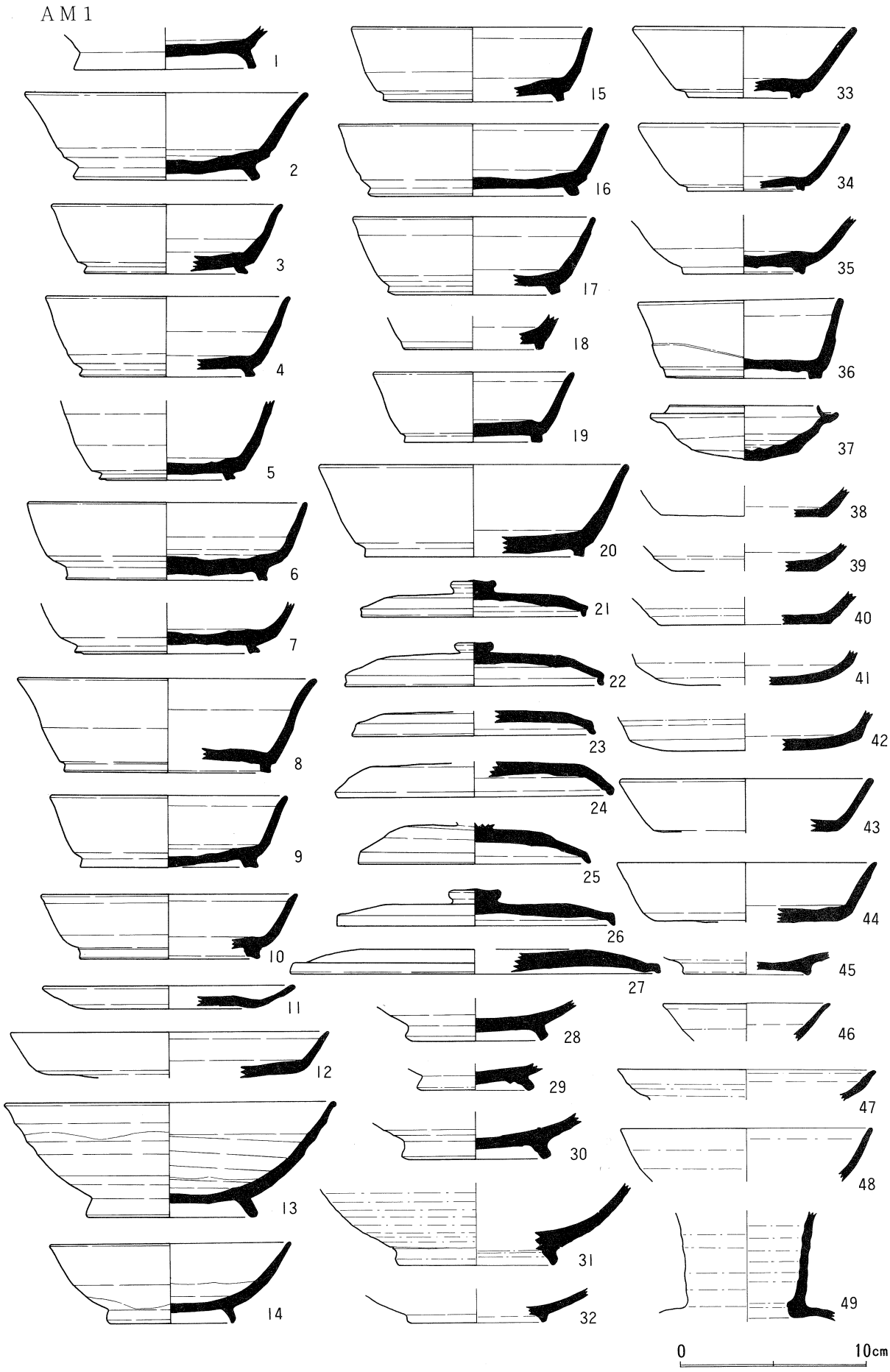


図121．A区その他遺構出土土器実測図(1)

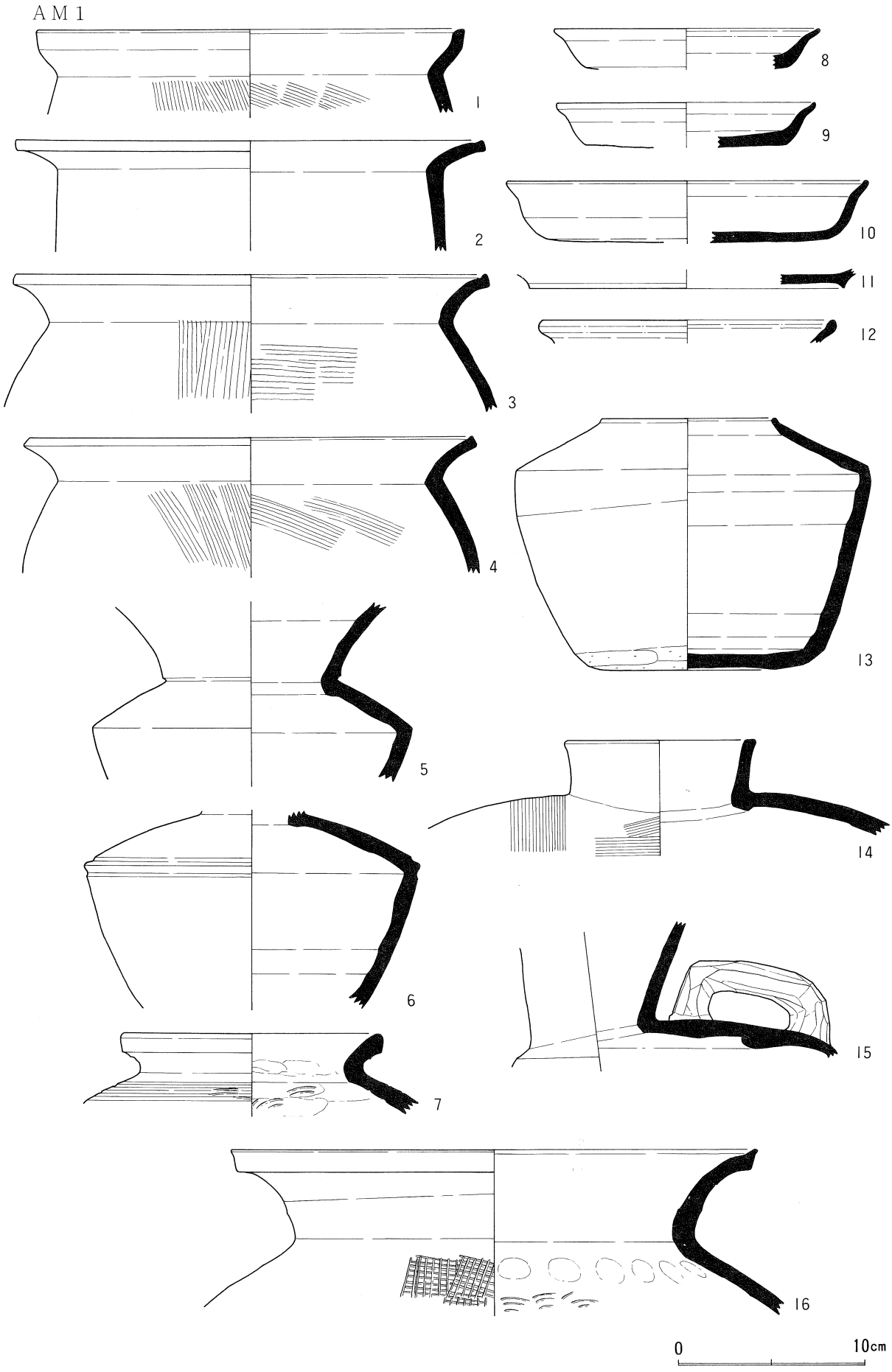


図122．A区その他遺構出土土器実測図(2)

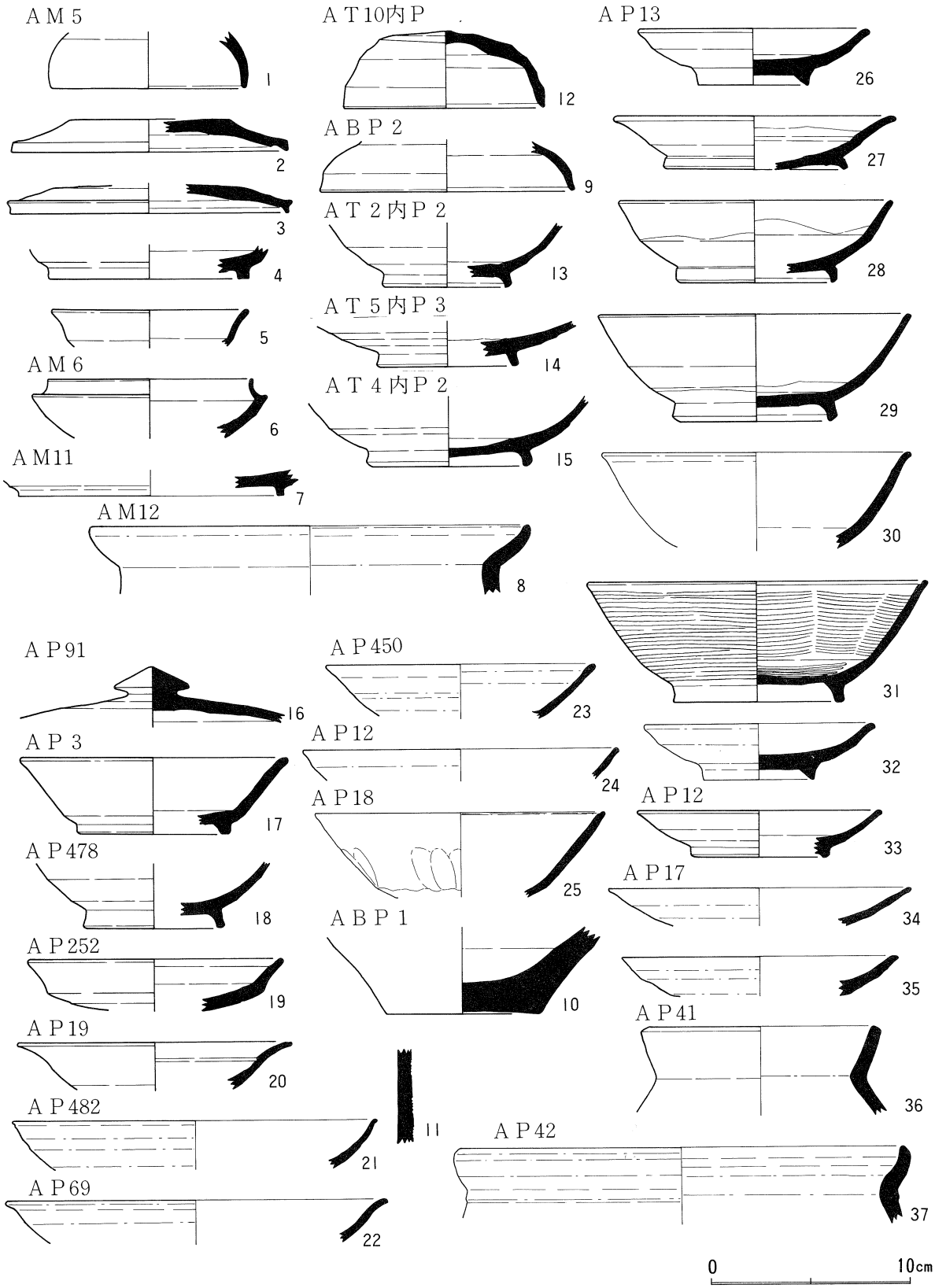


図123．Ａ区その他遺構出土土器実測図(3)

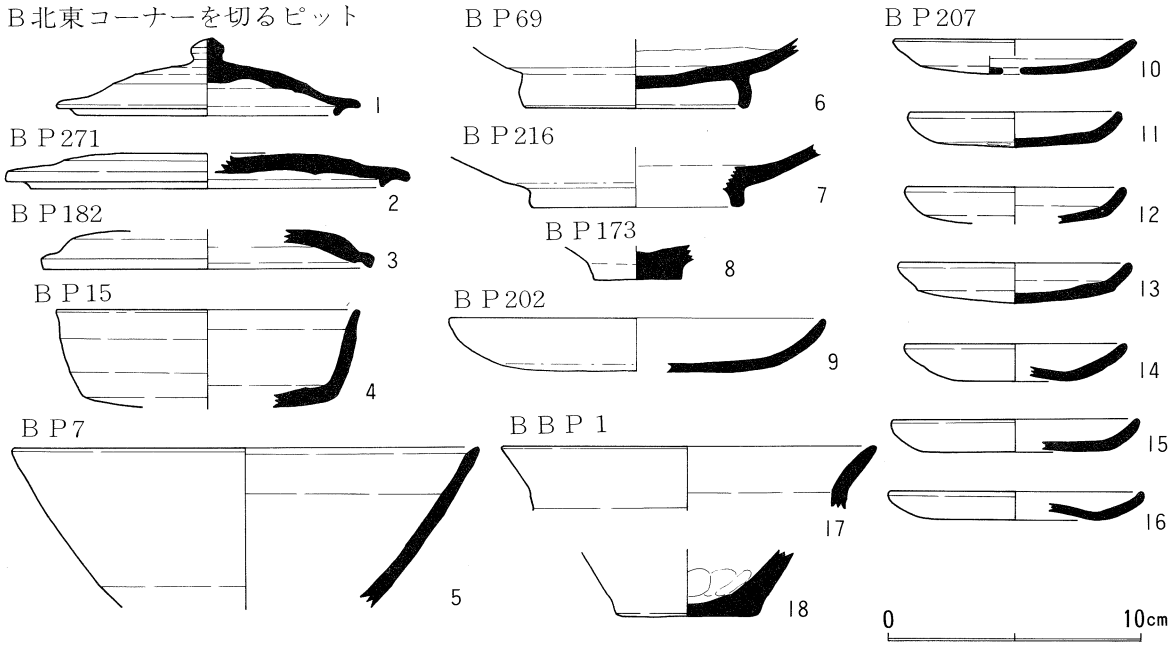


図124．B区その他遺構出土土器実測図(2)

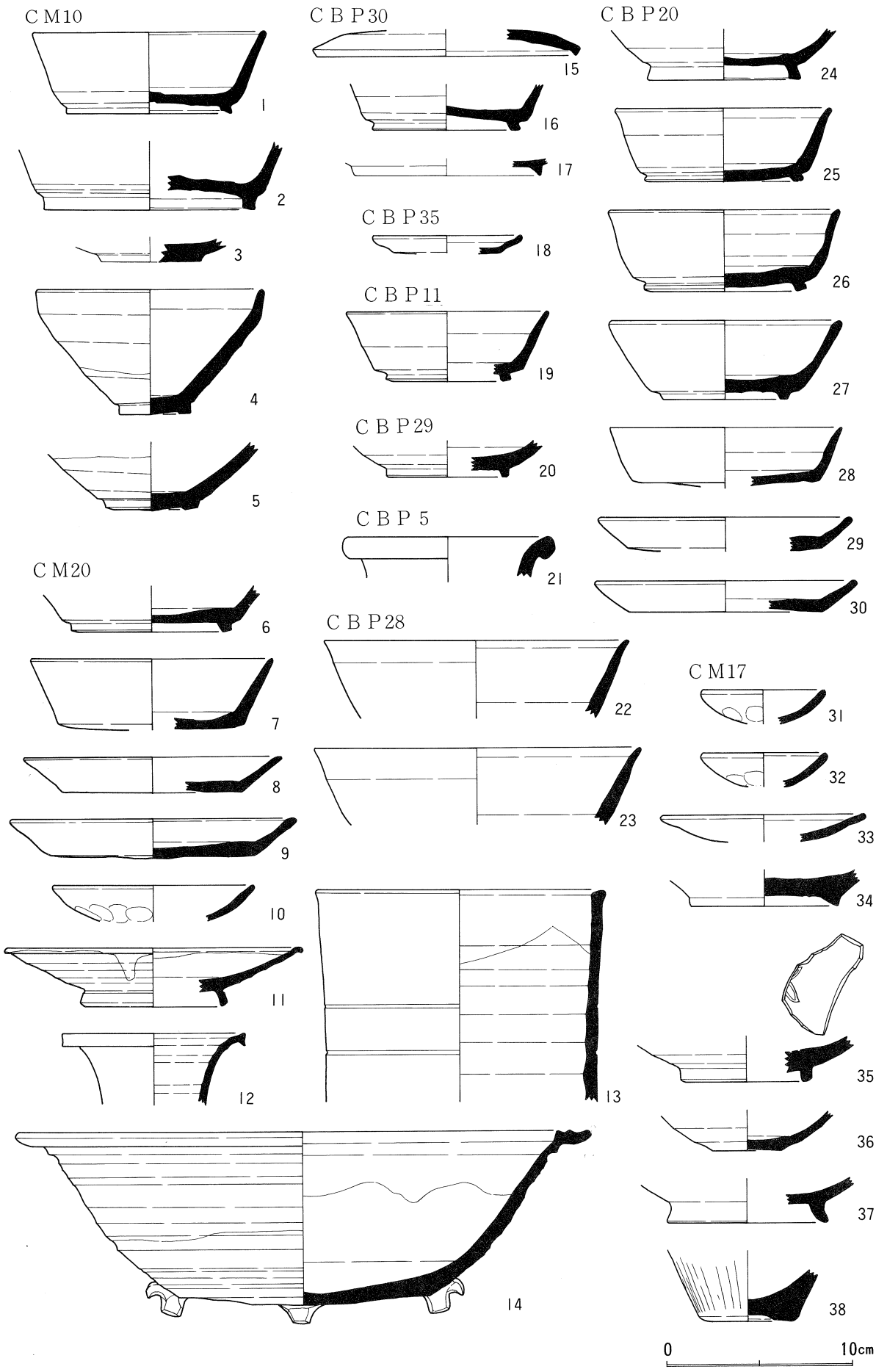


図125．C区その他遺構出土土器実測図(2)

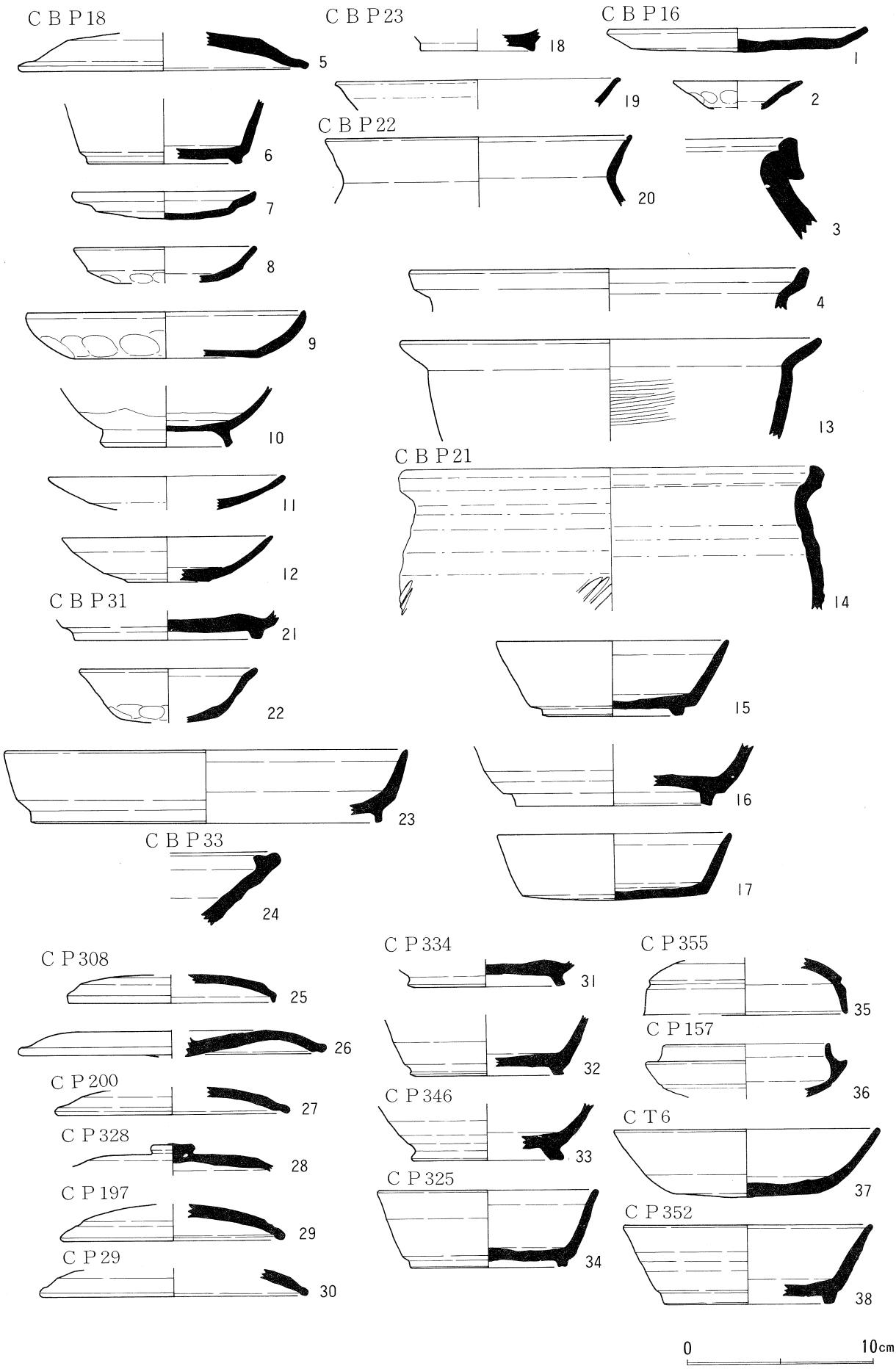


図126. C区その他遺構出土土器実測図(3)

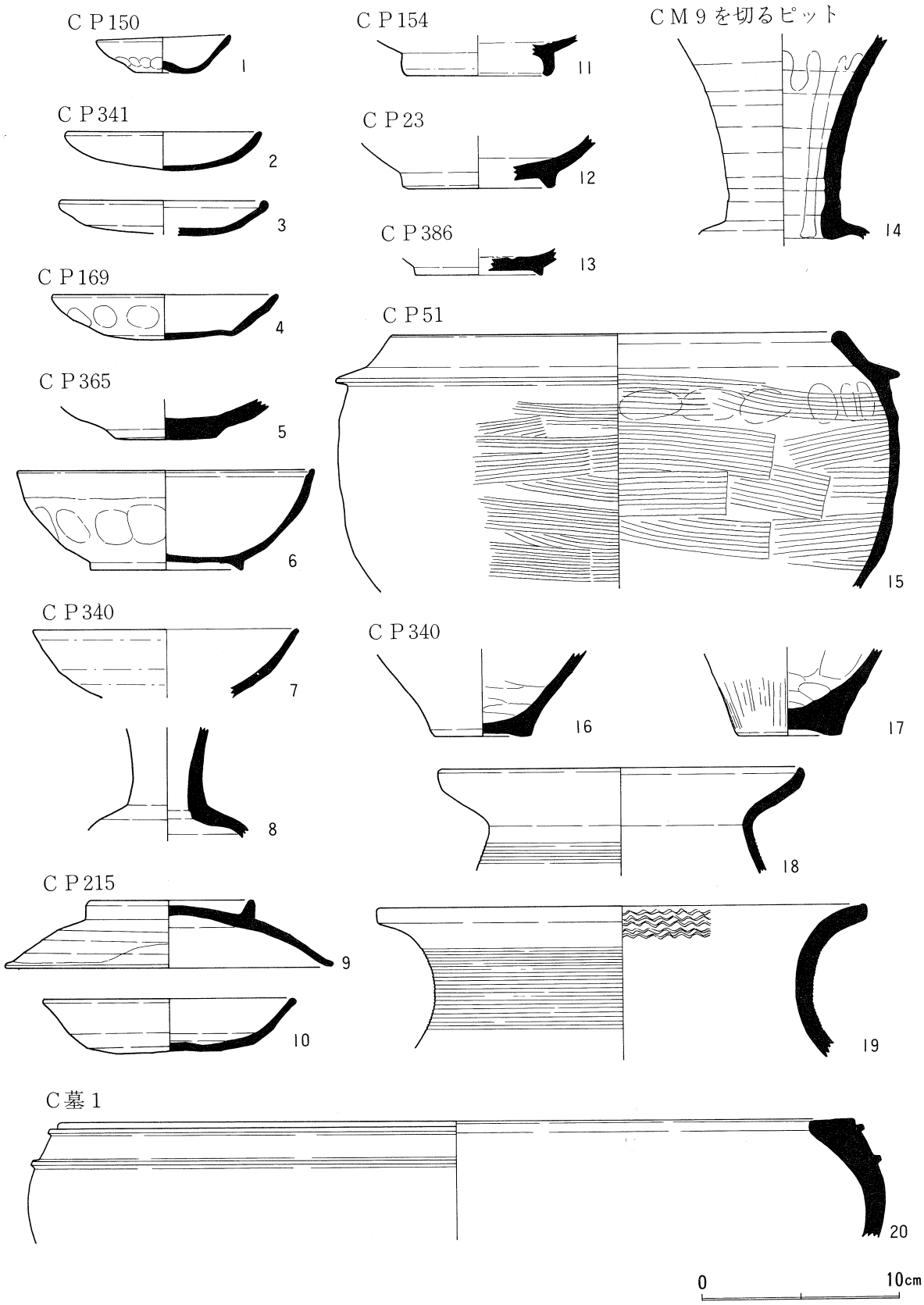


図127．C区その他遺構出土土器実測図(4)

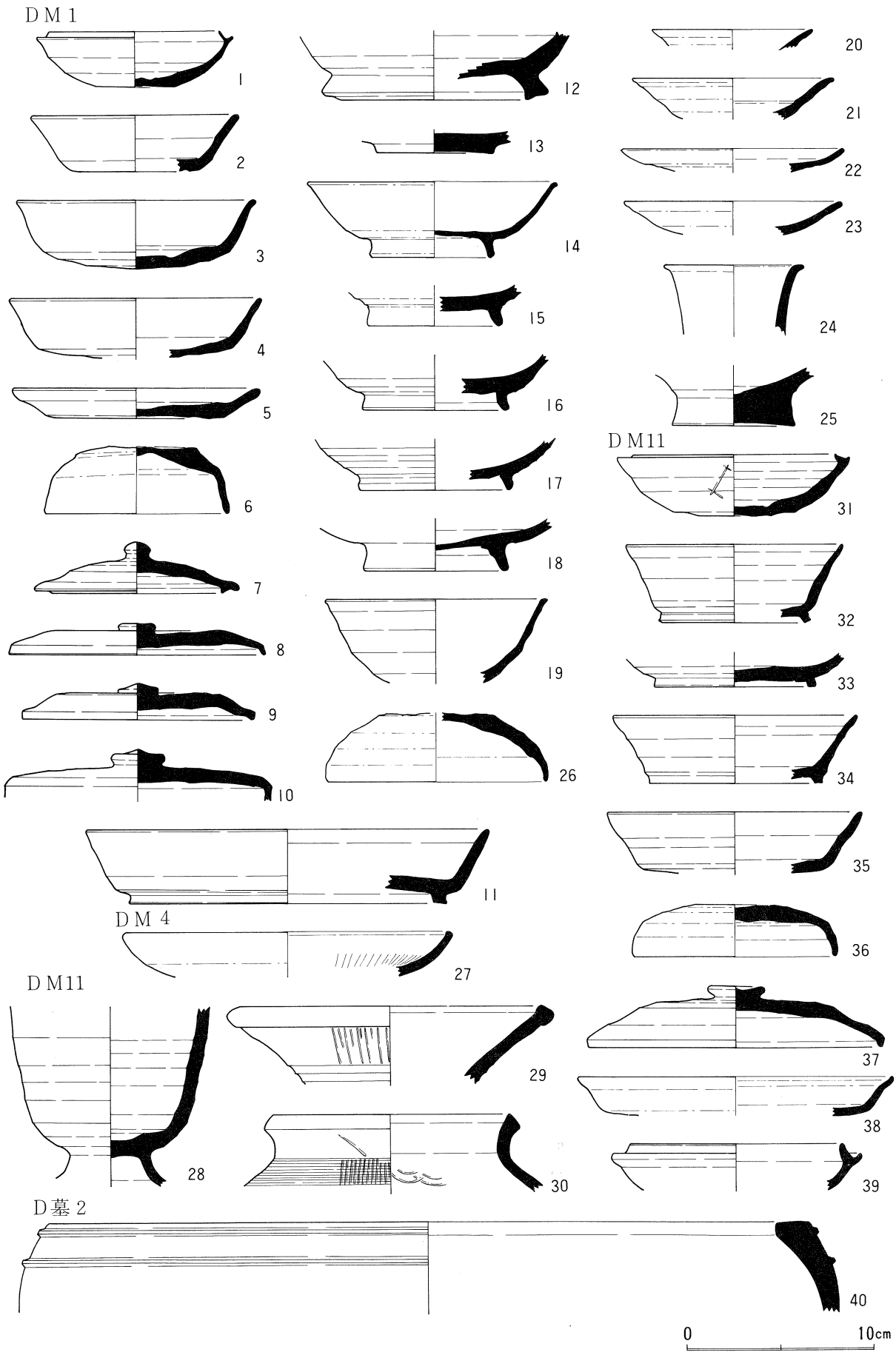


図128．D区その他遺構出土土器実測図

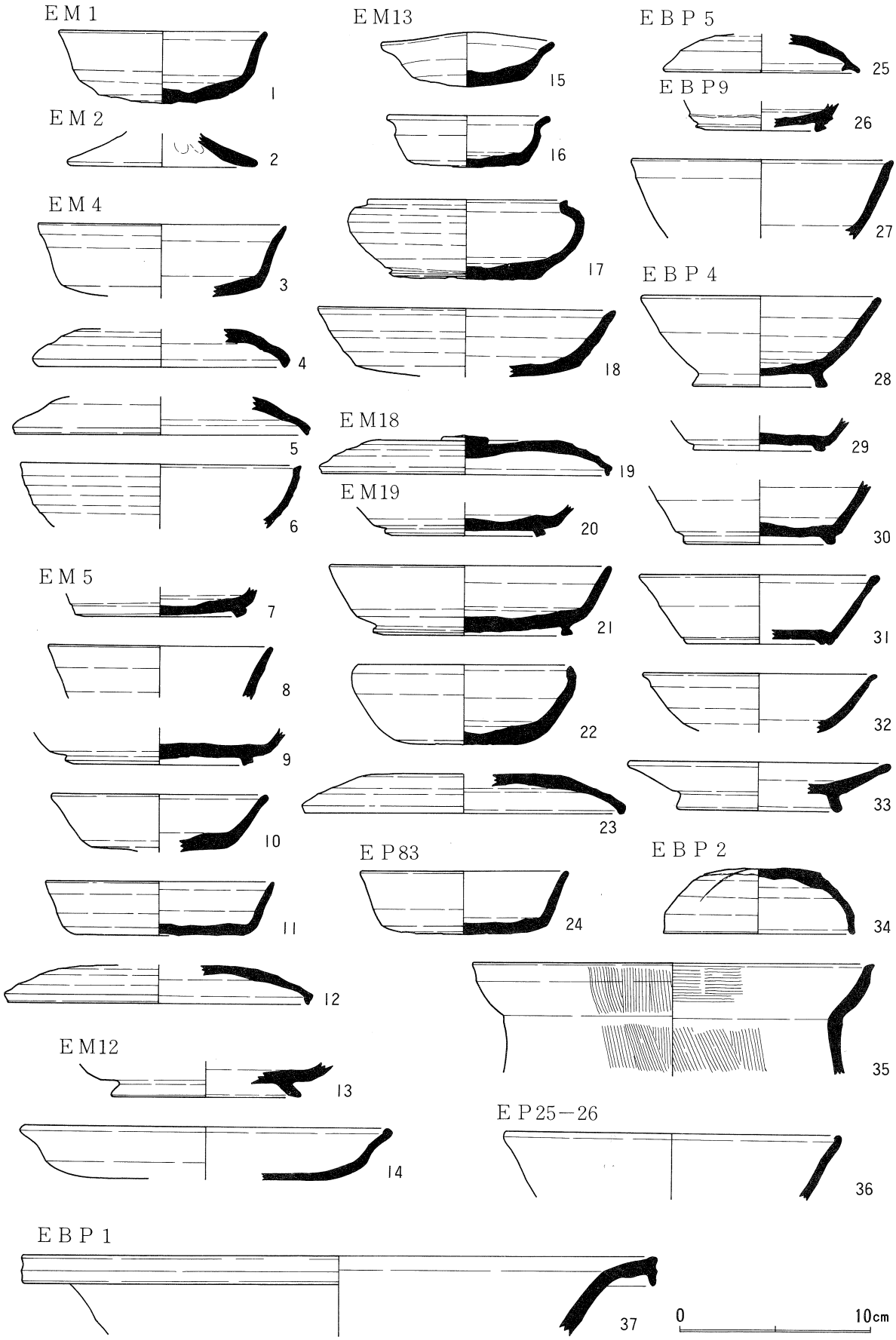


図129．E区その他遺構出土土器実測図

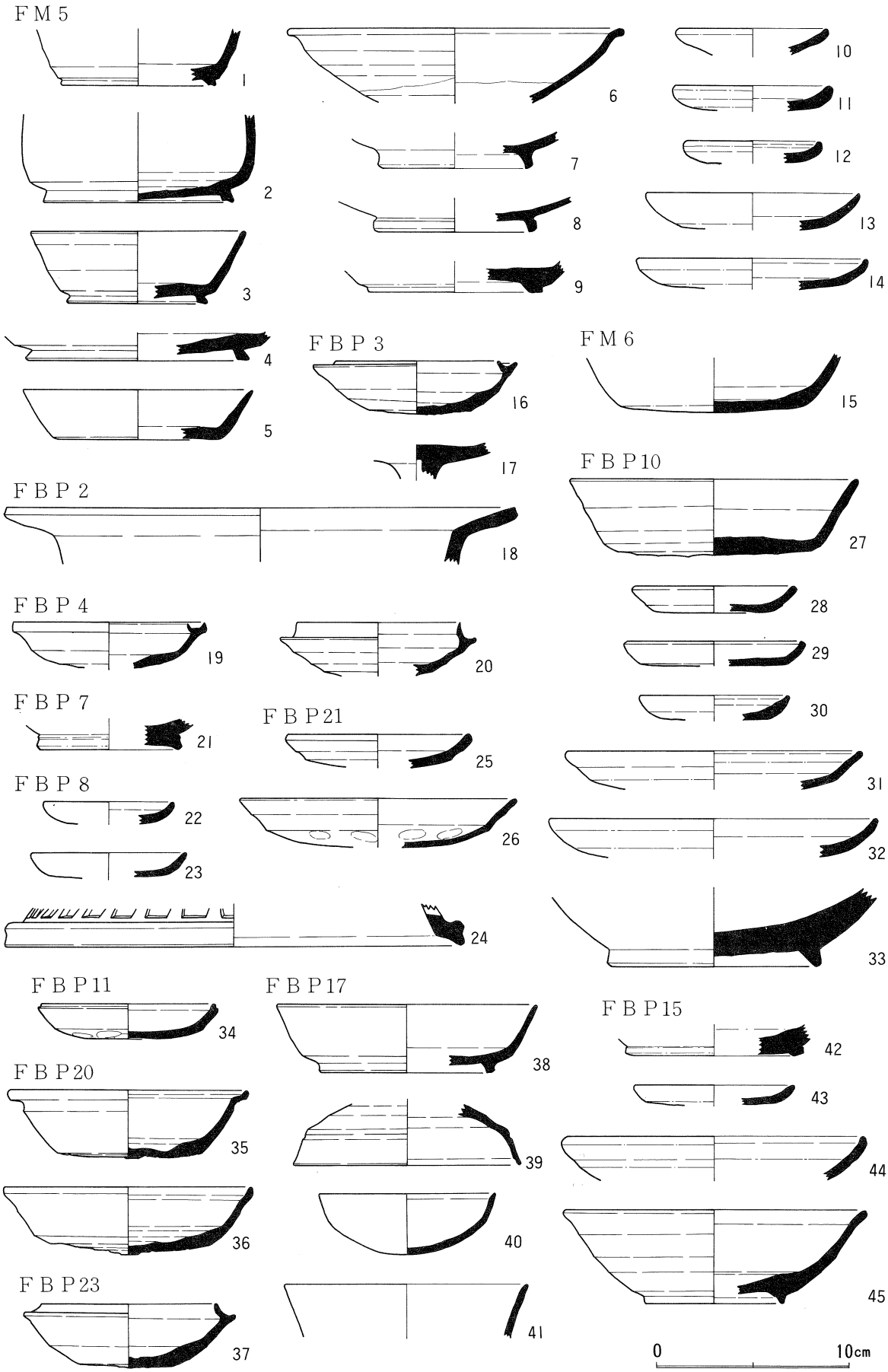


図130．F区その他遺構出土土器実測図(2)

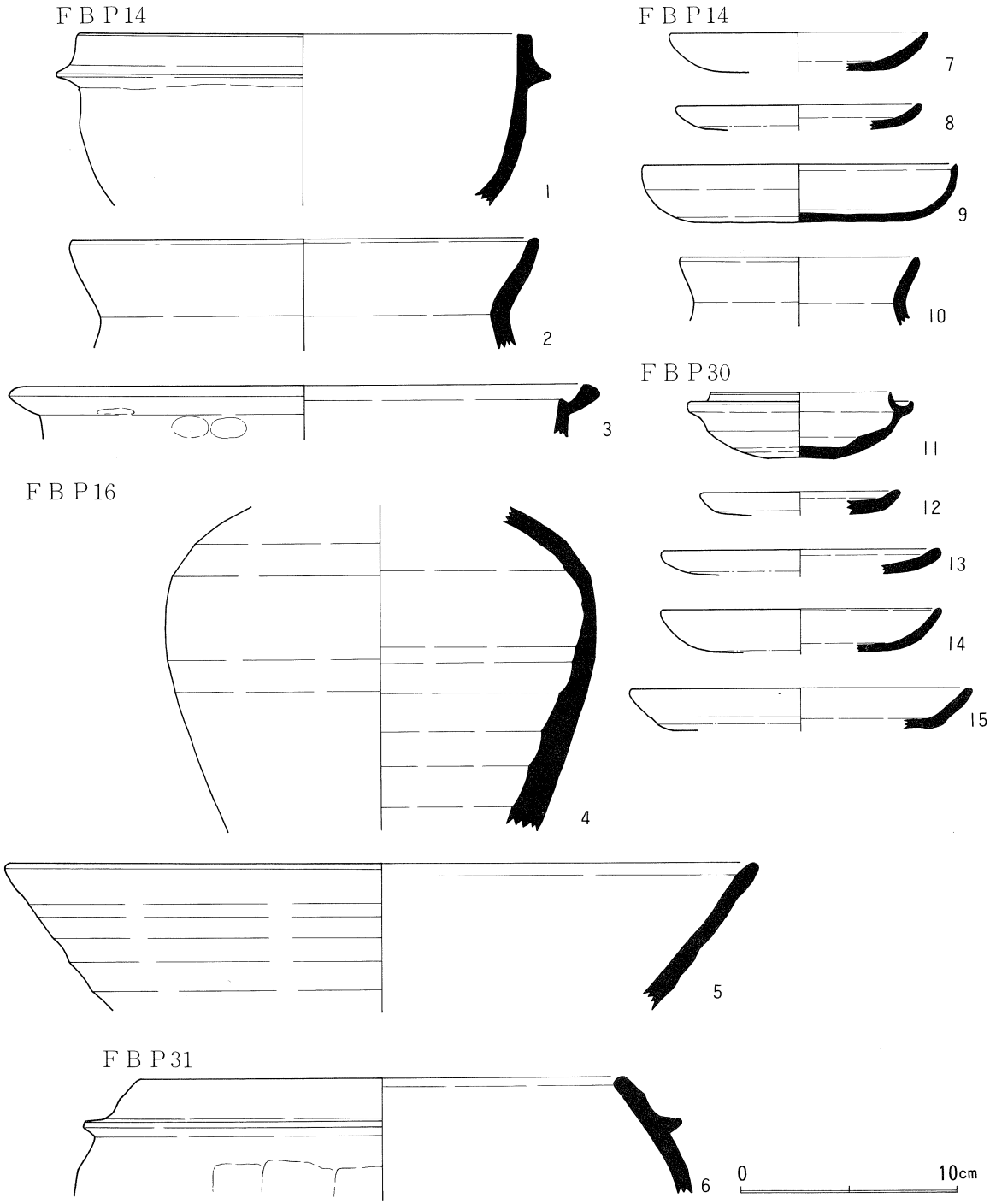


図131．F区その他遺構出土土器実測図(3)

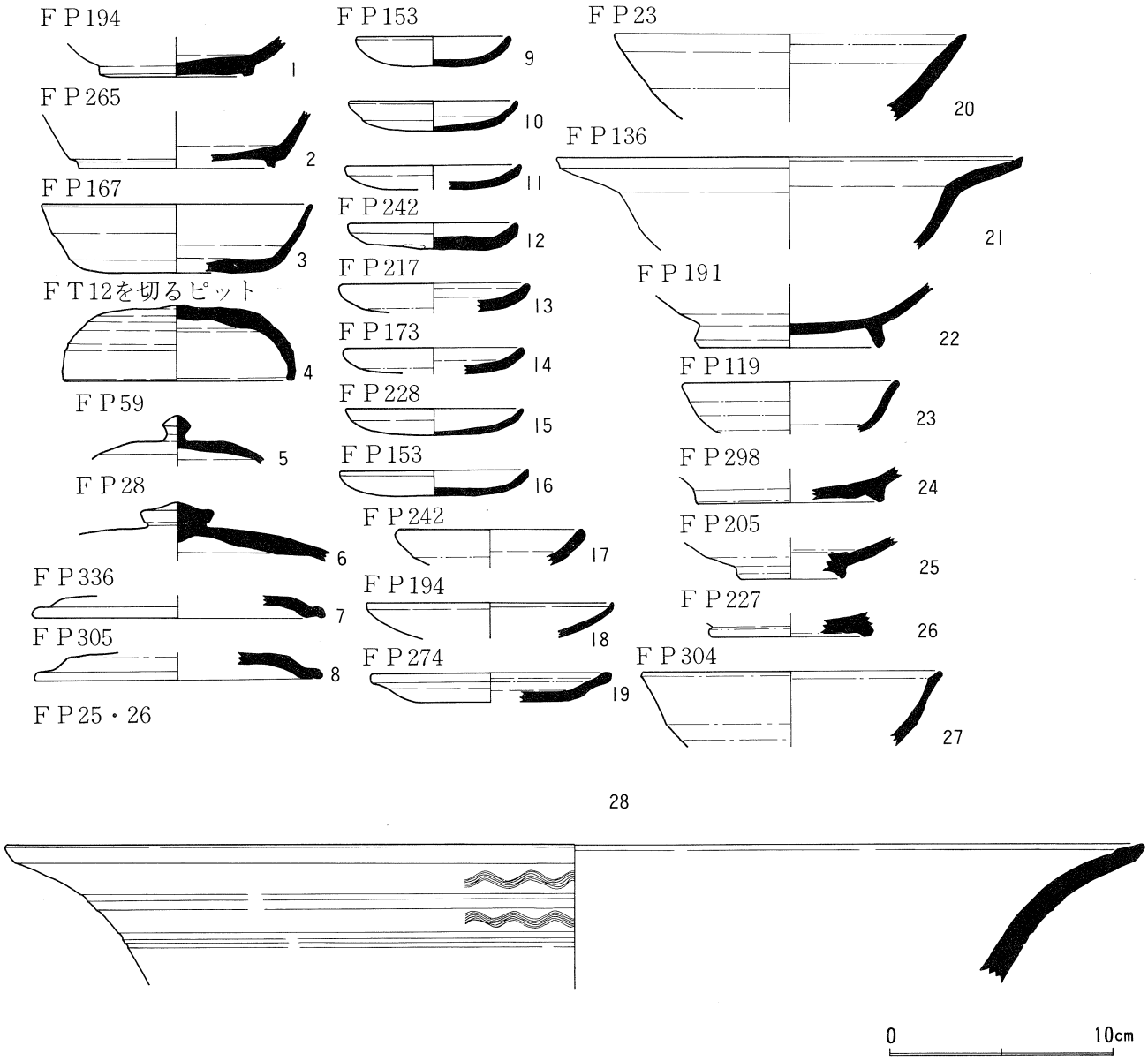


図132. F区その他遺構出土土器実測図(4)

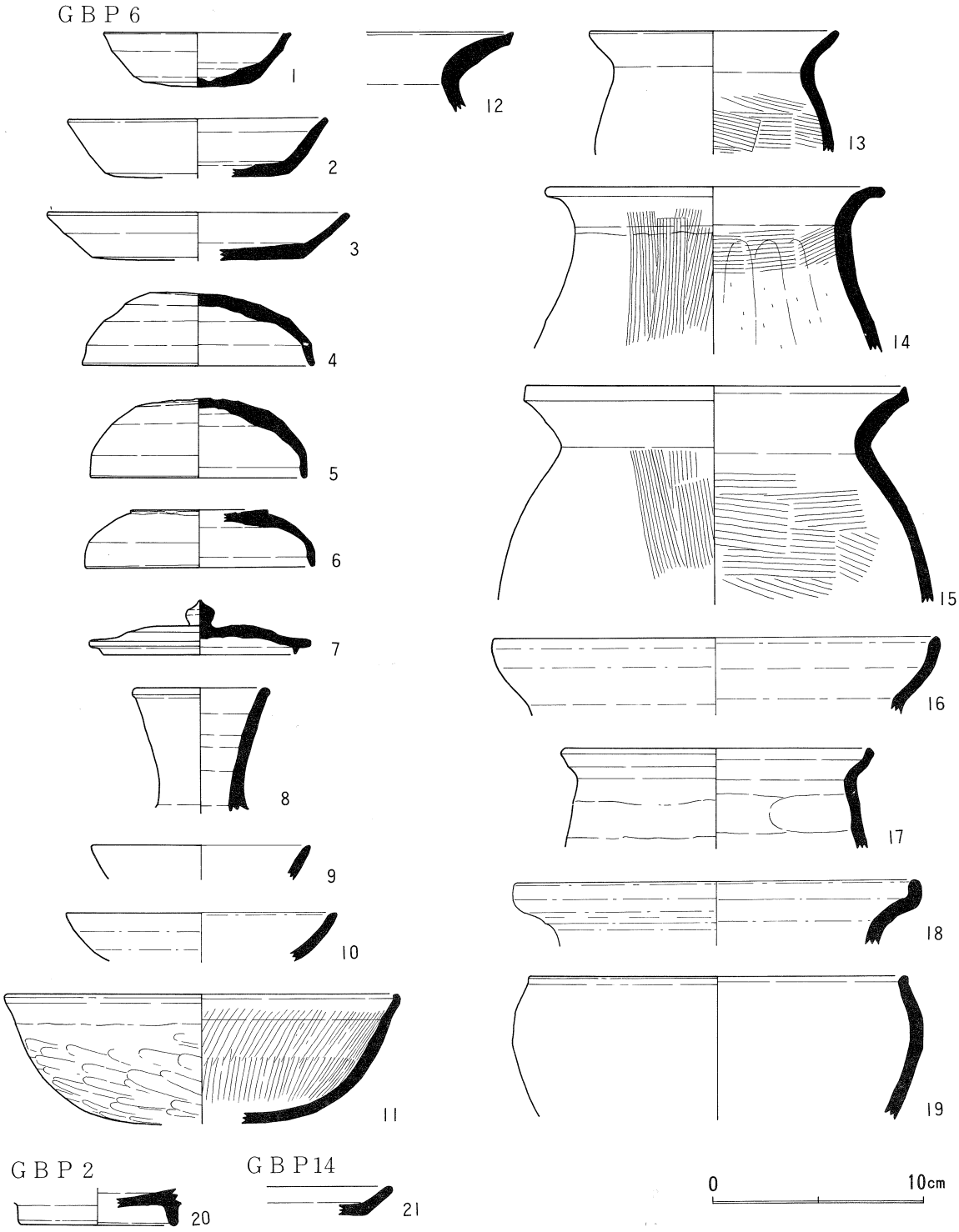


図133．G区その他遺構出土土器実測図(1)

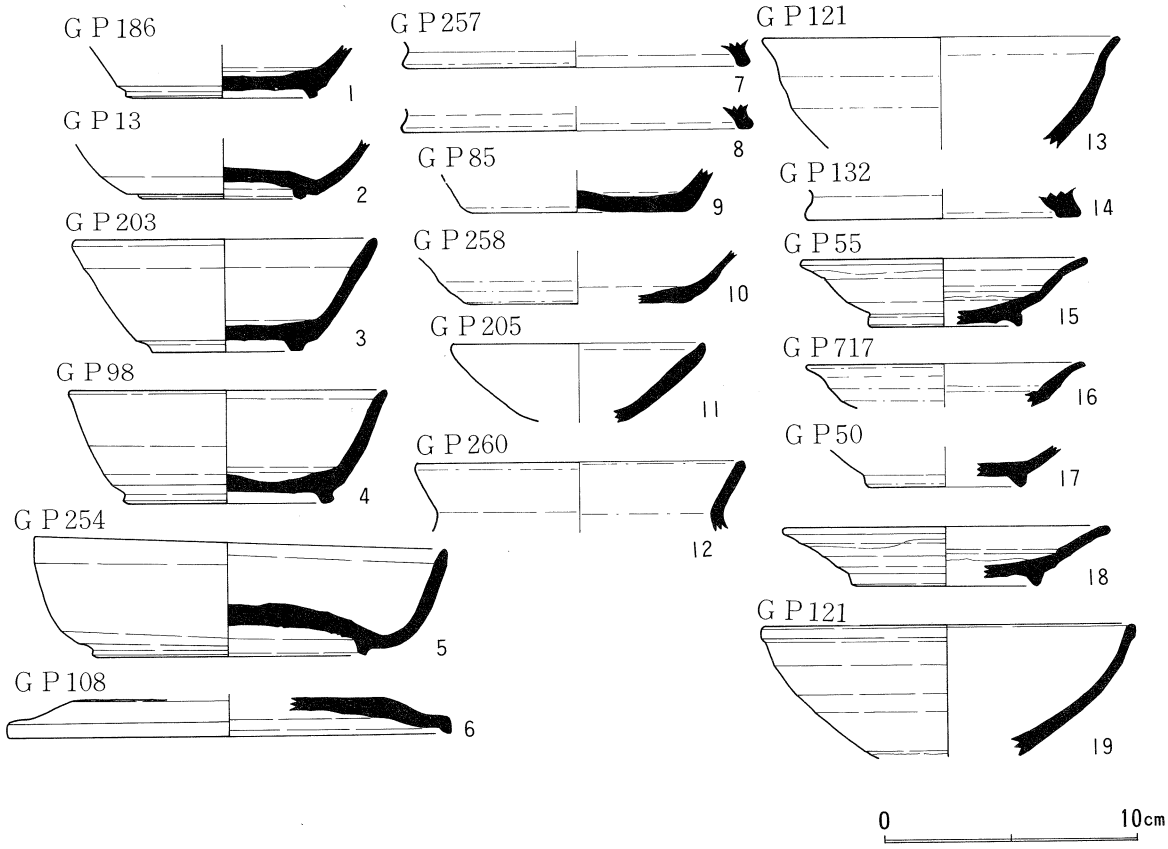


図134．G区その他遺構出土土器実測図(2)

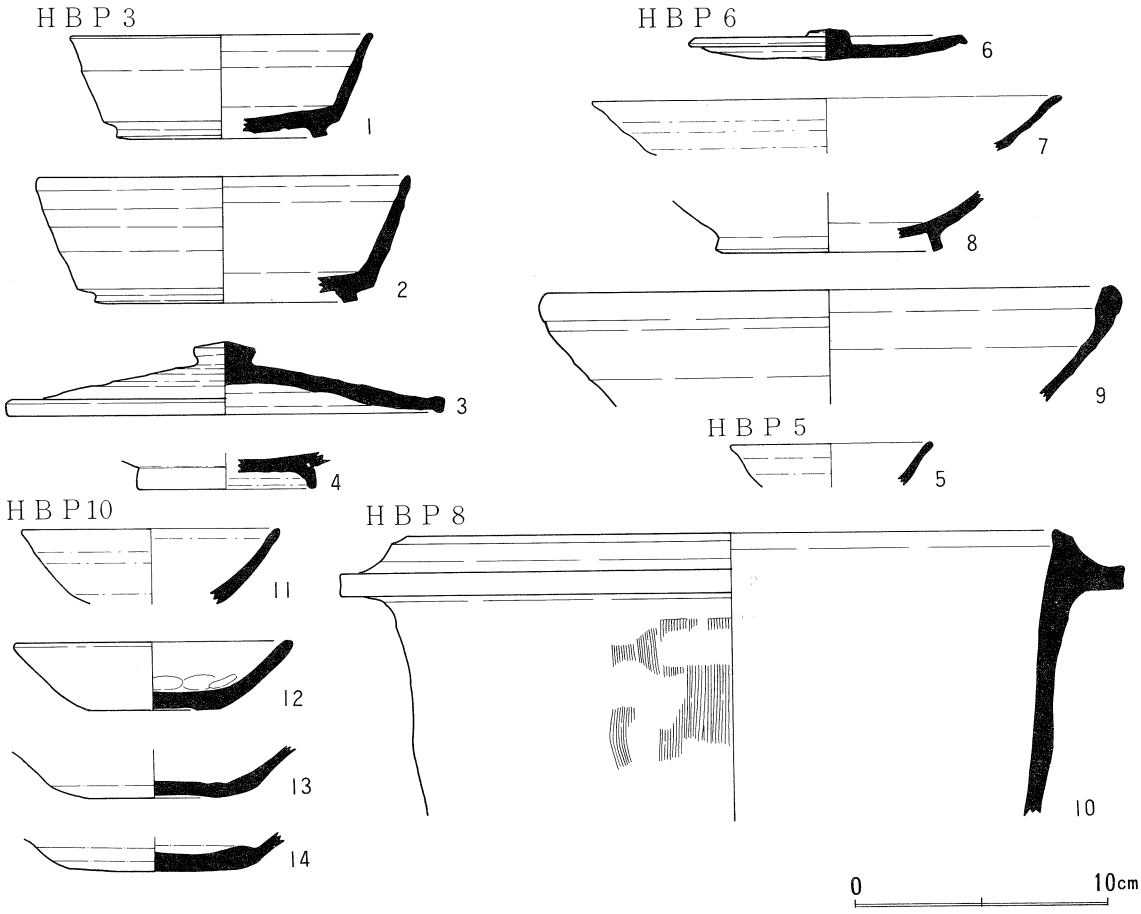


図135．H区その他遺構出土土器実測図(2)

第三項　編年（土器類）Ⅰ（図169・170）

土器類の編年に関して、７・８世紀のものは飛鳥　藤原京、平城京の編年を参考にした。また、施釉陶器や黒色土器等は、平城京、猿投窯跡等を参考にし、その他、北陸編年、平安京編年等を参考にしている。本稿の編年方法としては、これら諸編年を参考にしながら、竪穴式住居跡出土土器類をセットとして把握し、これをもとに、他の遺構出土土器類を編年する。

竪穴式住居跡出土土器類は、住居跡相互の切り合い関係をも参考にして14期に区別した。およそ、飛鳥Ⅰ～Ⅴ期、平城京Ⅰ～Ⅶ期及び平城京跡ＳＤ 650Ａ、ＳＤ 650Ｂに対応させることができる。以下は、第１期～第14期として各期の土器類を説明していく。

Ⅰ．第　Ⅰ　期

（須恵器）

杯Ｂ・Ｃ・Ｄ、蓋Ａ・Ｂ、甕か壺の口縁部と思われるもの等がある。

杯ＢはＦＴ13、ＦＴ21、ＧＴ３から出土している。容量にａ類とｂ類がある。ＧＴ13では、口径指数によって、28.8(1)、31.9～33.6(2)、41.7(3)の３種類に区別できる。最も浅い(1)は、体部と底部との境界に明瞭な稜を取り、篦おこし後の底部をナデあるいは篦により整形し、やや丸味を残す。体部は直線的に開くが、その中程に、外面調整による不明瞭な稜が生じている。同様のものはＦＴ13にも見られる。ＦＴ13のものはａ類で口径指数は31.2で、やや浅い。口縁部の外傾指数は26.3で、ＧＴ３のものより開きが小さい。次の深さの中程のもの(2)は２点あるが、これらはともに底部と体部との境界は不明瞭であり、底部の篦おこし後の調整は不良で、粘土の削り取りが見られない。体部は直線的に開き、外傾指数は35.7～48.1と大きい。ａ類の同様のものは出土していない。最も深い(3)は、底部と体部との境界は丸味をもたせ、底部は篦による調整を施し、丸味をもたせている。体部は外傾指数21.2と垂直近くに立ち上がらせ、口縁部を外反させている。同様のものはａ類のＦＴ21出土のものにも見られる。口径指数45.6と深く、外傾指数25.8と垂直に近い。底部の調整、口縁部の外反もｂ類と同様である。

杯ＣはＧＴ６とＩＴ11から出土している。ＩＴ11出土のものは小片で全形は明らかでない。ＧＴ６出土のものでは、口径11cmと小型で、受部は小さく横にのび、受部の窪みはほとんどない。口縁部の立ち上りも小さい。

杯ＤはＡＴ13に１点ある。口径14.4cmで、口縁部を最初水平に折り曲げ、その端部を上方に引き上げたものである。

蓋Ａは、ＡＴ13、ＦＴ13、ＩＴ14から出土している。口径10cm～11.3cm、高さ3.2cm～4cmの規模の小さいもの。いずれも天井部と口縁部との境界はないが、ＦＴ13のものでは口縁端部が内傾し、ＩＴ14では口縁部のナデ方により、わずかに区別が見られる。

蓋ＢはＧＴ３に１点のみ見られる。ツマミ部分は欠失しているが、口縁部は段をつくることなく、受部は内弯させて口縁端部よりわずか外側まで引き出している。

（土師器）

甕Ａ・Ｃ、鍋がある。

甕ＡはＧＴ３とＩＴ４から出土している。ＧＴ４のものは、口径14.7cmでｂ類の規模のもの。口縁部は単純に短かく開くが、口縁端部がわずかに内傾する。また、端部外面に刻み目が認められる。頸部は「く」の字形であるが、内面に稜を取ることなく、丸くカーブする。体部外面に、縦方向の刷毛目が残

る。ＩＴ４のものは、口径21cmでｃ類の規模を持つ。頸部は内側に稜を取り、「く」の字形で、口縁部は直線的に開く。端部はつまんで横ナデするため、外面がわずかに窪み、端面が段状に窪む。体部外面に縦方向の刷毛目、内面は、一部口縁部内面に残しながら、横及至斜めの刷毛目を施し、調整している。

甕ＣはＦＴ13とＧＴ６とから出土している。ＧＴ６からは３個体分が出土している。３点とも頸部は「く」の字形に開き、口縁部はゆるやかに外弯して開く。端部は小さくつまんで横ナデ調整するため、内側面に不明瞭ながら面を取り、尖り気味に終る。体部は最大径が上方にくるようで、口径をわずかにうわまわる。内外面縦方向に刷毛目を残すもの、内面が不明のもの、内外面とも不明のものとがある。ＦＴ13のものは、頸部の内側に明瞭な稜を残し、外弯しながら開く口縁部を持つが、弯曲は口縁部上方でわずかに強くなっている。端部にはわずかに内傾する小さな面がある。体部は張りが小さく、最大径は中程にくるようで、口径を凌駕しない。調整は、体部外面は不明だが、内面は、口縁部に横刷毛、体部に縦刷毛が残る。底部についてはいずれも不明である。

II．第　二　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ、蓋Ａ・Ｂ、平瓶、高杯、長頸壺、その他壺類がある。

杯ＣはＡＴ２、ＦＴ14から出土している。口径8.4cm～8.5cmの小規模のもので、第１期のものに比べて口縁部の内傾度が大きく、受部端より、口縁部が低いか、わずかに高い程度になっている。

杯ＢはＡＴ２、ＦＴ５、ＦＴ14、ＧＴ13、ＩＴ１から出土している。ａ、ｂ両類あるが、ｂ類のものでも口径10.8cmで大きくない。口径指数に28.3のもの、34～34.3のもの、37.1～37.4のものがあり、それぞれ第１期の(1)～(3)に対応する。(1)はＦＴ５にある。底部は、口径の半分程の規模で平底になる。外径指数50で第１期のものより口縁部の開きが大きい。口縁部は中程で不明瞭ながら稜を取り、口縁端部は小さく外反する。(2)はＡＴ２とＦＴ14にある。口縁部は体部中程でわずかに内傾し、ＦＴ14では口縁端部が外反する。体部下半分はやや窪み、底部との境界に明瞭な稜を取る。低部は箆による調整が施されるが、平底にならず、丸味を残す。(3)はＦＴ14とＩＴ１から出土している。口縁部の外傾指数はＦＴ14で34.6であり、ＩＴ１もほぼ同じで、第１期のものより開きが大きくなっている。口縁部の外反も端部附近に移動している。底部はわずかに平底風になるが、まだ丸味を残す。ＧＴ13に杯Ｂが１点あるが、(1)のものと同様浅いものである。ただ、口縁部の開きが小さく、端部を内折している点他に例がない。

杯ＡがＡＴ２にある。底部の小片で、ＡＴ２の埋土への混入品で、この時期に含めてよいかどうか疑問であるが、高台は径11.5cm、高さ 0.8cmで、体部下端より内側につく。外側へよく踏んばり、端部が内側に肥厚している。

杯ＥがＡＴ１から出土している。口縁部の小片であるが、口縁部が内弯しながらほぼ垂直に立ち上る。

蓋ＡはＢＴ５とＦＴ14から出土している。規模は第１期のものとかわらないが、口縁部を折りまげ、ほぼ垂直に垂下させている点に変化が見られる。従って、天井部と口縁部との境界が不明瞭ながらも区別される。

蓋ＢはＡＴ１、ＡＴ２、ＦＴ５、ＦＴ14、ＧＴ２、ＧＴ13、ＩＴ１と大半の住居跡から出土している。口径9.8cm～10.7cm、同心円復原したものでも10cm～12.7cmで規模の小さいものである。ツマミは、ＡＴ２、ＩＴ１に見られるが、ともに宝珠形のものである。ただし、ＩＴ１では低いものとなっている。受部の形態は３通りがあり、ＡＴ１、ＡＴ２、ＦＴ14、ＦＴ５では口縁部に段を持たず、受部のかえりは弯曲させながら小さくひき出し、口縁端部より低いかわずかに高くしている。これは第１期のＧＴ３にみら

れた。ＦＴ14の他の１点、ＧＴ２、ＧＴ13では口縁部に段を持たせて天井部と区別している。受部のかえりは前者に似ている。ＩＴ１では口縁部に段を持たないが、受部のかえりが下方に大きく引き出される。

平瓶はＡＴ２から大小２点出土している。またＧＴ13から平瓶と思われる口縁部片がある。ＡＴ２の２点はともに丸味のある体部で、大型のものの口縁部は直線的に小さく開く。その端部は小さく外反する。小型のものの天井部には円形の浮文が付く。ＧＴ13のものは外反して開く口縁部である。

高杯もＡＴ２から３個体分が出土している。全形の知れるものは、口縁部中程と底部との境界部分との２段に段を持つ杯部と、中程に２本の凹線をめぐらせる筒部を持つもので、脚端部は外面する面を持つ。

壺類はＡＴ１、ＡＴ２、ＦＴ５から出土している。ＡＴ２の１点とＡＴ１のものは、短かく開く口縁部を持ち、その端部は上下に肥厚する。ＡＴ２からは長頸壺になると思われるものがある。肩部はナデ肩で、体部との境界に一条の凹線がめぐる。ＡＴ２の他の１点は大きく外反する口縁部片で、その端部は幅広く肥厚している。ＦＴ５の壺は大型で、口縁部の中程とその上方に２条一対の沈線がめぐる。口縁端部は突帯状に肥厚する。

（土師器）

甕Ａ・Ｃ、鍋、杯、皿、壺、高杯がある。

甕ＡはＡＴ２、ＦＴ14、ＧＴ13に出土品がある。ＡＴ２のものは小型のａ類である。口縁部は第１期のＩＴ４のものに似て、口縁部中程に稜がみられるが、端部がわずかに外反し、頸部も「く」の字形に開くが、その屈曲はゆるやかである。体部外面縦、内面斜め及至横刷毛による調整がみられる。ＧＴ13はｃ類で大型である。第１期のＧＴ３のものに似て口縁端部を内傾させるが、口縁部の外傾度は小さくなっている。調整痕は不明。ＦＴ14では、口縁端部がわずかに外反し、体部はナデ肩で、他のものに比べて下ぶくれのものとなりそうである。体部内外面とも縦刷毛調整である。

甕ＣはＡＴ２、ＣＴ９、ＧＴ２、ＩＴ１から出土している。ＩＴ１からは、第１期のＧＴ６のものに似て、口縁端の内外面に面が出来あがるものがある。口縁部は端部附近にやや強目の弯曲がみられ、端部は結果的に外反させたようになっている。また、ＩＴ１からは、第１期のＦＴ13に似て、口縁端部にわずかに内傾する面を取るものがある。これはＡＴ２出土のものも同様である。ただ、面の幅が口縁部の厚みに等しく、口縁部も頸部のやや強いナデによる弯曲で、口縁部の下方に弯曲の強い部分が認められる。これらには、ＡＴ２、ＩＴ１に体部外面に縦刷毛目がみられる。これらの他に、ＣＴ９では、口縁端部をつまみ出し、内傾する段を取るものが出土している。口縁部はむしろ直線的で、ただ、外面に、頸部と口縁端部とに施したナデにより生じた弯曲が認められる。ＧＴ２の出土品は、ＡＴ２のものと同様、口縁部の下方に、頸部へのナデ調整によって生じるやや強い弯曲部分があるが、口縁端部に面取りはなく、丸くおさめられている。内外面に縦刷毛調整痕が認められる。

鍋はＦＴ5から体部、ＡＴ２から口縁部が出土している。ＡＴ２の口縁部は、水平以下にまで外反している。体部の遺存部分には外面に縦刷毛、内面に斜めの刷毛目調整痕がある。ＦＴ５の底部では、体部下半分に箆削り調整痕がある。上半分はＡＴ２と同様の刷毛目調整が施されている。

杯はＩＴ１とＧＴ13とから出土している。ＩＴ１のものは口径16cm、器高 4.7cmを計るもの。底部は中央がやや窪む。口縁端部は内傾する幅のせまい面取りがある。ＧＴ13は大型で、口径28.2cmを計る。口縁端は内側に肥厚し、27.5の外傾指数を持つ。

皿はＡＴ２で１点出土している。口径22cm、器高 3.6cm以上の大型で、口縁部と底部との境界にわずかに稜がある。口縁端部に内傾する面取りがある。

高杯がＡＴ２から出土しているが小片であり、全体を知ることができない。

Ⅲ．第　３　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ・Ｆ、蓋Ａ・Ｂ、皿、壺等がある。

杯ＡはＧＴ９とＩＴ５出土のものがある。ＧＴ９出土のものはｂ－３類、ＩＴ５のものはｃ－１類である。高台は 0.8cm～0.9cmと高い。口縁部の外傾指数は48～58.6で、直線的に良く開く。ＩＴ５出土のものは極めて深いもので、高台は体部直下に付く。外方に踏んばり、その端部は内側に肥厚する。ＧＴ９のものは、高台は体部直下より内側に、外方へ踏んばったものが付く。なお、ＧＴ９からは、ｃ－３類に入るかと思われるものが出土している。口縁部片であるが、高台は体部直下より内側に付き、口縁部の外傾指数30と開きが小さく、体部と底部との境界が丸味を持つものである。

杯Ｂは、ＡＴ14、ＦＴ４、ＦＴ12、ＧＴ５、ＧＴ９からの出土品がある。口径指数24.4～26.9と浅いもの(1)、28.6～30.7と中程度のもの(2)、41.2と深いもの(3)の３類に区別できる点は第１・２期と同じである。(1)はＡＴ14とＦＴ12、ＧＴ５からの出土品がある。いずれもｂ類である。底部は平底となる。口縁部の外傾指数は48、55、71.4で、口径に対して底部径がまだ小さい。口縁部はわずかに外反気味だが、ほとんど直線的である。(2)はＦＴ４、ＦＴ12から出土している。いずれもｂ類である。口縁部の外傾指数は40.9～45で第２期のものとかわらないが、底部の整形が平底風に行われ、丸味が少なくなっている。体部と底部との境界も不明瞭なままである。ＦＴ４出土のものは口縁端部が外反し、第２期のＦＴ14出土のもののおもかげを残す。また、ＦＴ12のものは端部がわずかに内傾し、第２期のＡＴ２の変化と思われる。(3)はＦＴ４のものがある。ａ類であるが、口径 8.5cmで、第１期、第２期と順次小型化している。底部もわずかに平底化しており、口縁端部の外反程度も小さい。(1)～(3)以外に、ＧＴ９、ＩＴ５から埦形の杯が出土している。口径指数36.3で、やや深く、ｂ類のものである。(4)としておく。

杯ＦがＦＴ４から出土している。杯Ｃに似た口縁部を持つが、口縁端部を内側に小さく折りまげ、受部風にしたもの。体部は深みのあるもの。

蓋ＡはＢＴ４・６、ＧＴ５、ＧＴ９のものがある。規模は第２期のものと変らない。ＢＴ４・６、ＧＴ９出土のものでは、第２期のＢＴ５出土のものに似て、口縁部を内傾させ、天井部と区別するが、内傾程度がやや小さくなる。また、天井部に丸味がなくなり、平担に近くなっている。ＧＴ５出土のものも第２期のＦＴ14出土のものに似ているが、口縁端部の屈折範囲が極めて小さくなっている。天井部の丸味は残る。

蓋ＢはＦＴ４、ＦＴ12、ＧＴ５、ＧＴ９、ＩＴ５から出土している。ＦＴ４、ＦＴ12、ＩＴ６のものは口径9.8cm～10.6cmと小さく、ＧＴ５、ＧＴ９のものは11.8cm～12.2cmとやや大きい。第２期にみられた口縁部に段を持つものはない。また、受部の引き出しも小さいものとなっている。つまみはＦＴ４、ＦＴ12、ＧＴ９でみられる。ＦＴ４、ＦＴ12のものは宝珠形であるが、第２期のものに比べ低く、扁平化しつつある。ＧＴ９のものは扁平で、径の大きいものとなっている。

皿がＧＴ９とＩＴ５から出土している。ＧＴ９のものは口径19.5cm、高さ 2.5cm、ＩＴ５のものは14.3cm、 1.3cmと大小２類であるが、口縁部が外傾指数が80、 166.7と大きく開くものである。

壺はＧＴ９から出土している。口縁部が第２期のＦＴ５出土のものに似て突帯状に肥厚するものであ

るが、下方への引き出しがない。

（土師器）

甕Ａ・Ｂ・Ｃ、杯、高杯がある。

甕Ａが、ＢＴ６、ＦＴ12、ＧＴ９、ＩＴ５から出土している。ＦＴ12とＩＴ５のものがａ類、ＧＴ９とＢＴ６のものがｂ類である。ＢＴ６のものは短かく、あまり外傾しない口縁部を持つ。ＧＴ９のものも短かく単純に開く口縁部を持つ。体部はナデ肩で、最大径は下方にくる。ＦＴ12のものは、内側に稜を持つ頸部と外反しながら開き、端部をわずかに内側にまげる口縁部を持つ。体部はあまりはらず、最大径は口径より小さい。ＦＴ12からは、低部を篦削りする小片が出土している。ＩＴ５のものはあまり開かない長い口縁部で、端部を外反させたもの。調整は、ＧＴ９とＩＴ５のものが体部外面を縦、内面を横方向に刷毛目を入れる。ＦＴ12のものは体部外面を縦方向に刷毛目を入れる。

甕ＢがＢＴ４とＦＴ４から出土している。ＦＴ４は体部が球体に近く、最大径が中程にくる。口縁部はあまり開かず、中程で弯曲し、端部はわずかに内傾する面があり、外側に肥厚する。体部外面を縦刷毛、内面を横及至斜めの刷毛目で調整する。口縁部の内外面にも刷毛目が残る。ＢＴ４のものは、体部の最大径が下方にあり、下ぶくれの胴部となっている。口縁部はあまり開かない。ほとんど弯曲せず、頸部のナデによる外面のカーブがみられるにすぎない。体部の刷毛調整はＦＴ４と同様である。内面は底部まで全面に刷毛目がみられるが、外面は底部のみ、全体の４分の１が篦削り調整されている。

甕ＣはＡＴ14、ＢＴ４・６、ＦＴ１・４・12、ＧＴ９、ＩＴ５から出土している。口縁端部に内傾する面を取るものがＢＴ４、ＦＴ１、ＩＴ５から出土している。これらは、第２期のものにも見られるが、口縁端部を折りまげたように弯曲させるものが多く、従って、外面により明確な稜を取るものが多くなっている。口縁端部をつまんで横ナデし、明確な面を取らないものがＧＴ９、ＦＴ12にある。ＦＴ12とＧＴ９の１点は、口縁部が直線的で、頸部への強いナデにより生じる外面の弯曲をみるにすぎず、端部を尖り気味に終らせている。第１期のものにみられた特徴であるが、第１期にみられたような口縁部の弯曲がほとんどない。ＧＴ９の他の１点は、口縁部を折りまげたように弯曲させ、従って、端部下端に稜が生じている。体部は、ＢＴ４の出土品では最大径が中程にあり、第１期のＧＴ６にみられたものに比べ、肩部のはりが少ない。また、口径をさほど凌駕しない。調整は、体部内外面とも縦刷毛目をつけるもので、ＢＴ４の一例では、底部外面まで刷毛目が残る。また、口縁部に刷毛目の残るものがＦＴ12とＧＴ９に見られる。ＢＴ４の一例には、口縁部内面に篦刻線が見られる。これらの他に、口縁部がＢＴ４出土の甕Ｂに似たものがＡＴ14から出土している。端部を丸くした口縁部は直線的に大きく開き、体部はほとんど張らず、底部に向う。体部外面に縦刷毛が残るが、内面には指削り痕がみられる。

高杯がＡＴ14から出土しているが、脚部の小片である。

杯類はＦＴ12、ＧＴ９、ＩＴ５から出土している。ＦＴ12の３点は規模、形態とも異なるもので、一つは口径17.6㎝、高さ３㎝以上と浅いもので、口縁端部が外反している。内面に暗文が残る。二つ目は口径16.8㎝、高さ 3.8㎝で、口縁端部が一度外反し、さらにその端部を内側にまき込んだもの。三つ目は、口径18.4㎝、高さ５㎝と大型のもの。これは第２期のＩＴ１出土のものに類例があるが、口径指数が29.4であり、ＦＴ12の27.2に比べ深みがある。ＧＴ９の２点は全体の２分の１下半分を未調整で残し、従ってその境界部分に稜が見える。口縁端部を小さくまき込んでいる。

Ⅳ．第　４　期

（須恵器）

杯A・B・D、蓋A・B・C、壺がある。

杯Aは、ＡＴ５からｂ－３類、ＧＴ７からｃ－２類、ＧＴ11及びＦＴ25からｃ－３類が出土している。ＦＴ25の２点は、第３期のＧＴ９のものとａ、ｂの差はあるが口径指数がほぼ同じで、形態も同じである。しかし、口縁部の外傾指数が66.7～70であり、第３期に比べてよく外傾する。高台部分も端部が外側へ肥厚する。ＧＴ７のものは、高台が体部下端近くに付き、第３期のＩＴ５のものに近似して深いものであるが、高台は低くなる。ＡＴ５出土のものは第２期のＡＴ２に類品があるが、口縁部の外傾度が大きくなり、高台も端部がわずかに肥厚している。ＧＴ11出土のものはｃ－３類の形態である。第２期のＡＴ２出土のものに類すると思われるが、高台は体部直下よりわずか内側に付くものとなり、高台は端部が内側のみ肥厚するものとなっている。口縁部の外傾指数は40であり、底部との境界に稜が走る。ＧＴ７の底部片は低く、端面が窪み、外側へ肥厚した幅の広い高台で、底部と体部との境界にやはり稜が見える。この稜は第３期のＧＴ９等では甘いものとなっている。

杯BはＦＴ11、ＦＴ16、ＦＴ25、ＧＴ７、ＧＴ10から出土している。口径指数28.4～29.4の浅いもの(1)、32～33のもの(2)、深いもの(3)、椀形のもの(4)と1～4類があるのは第3期と同じである。またａ、ｂ、ｃの３類がある。(1)の浅いものはＦＴ11、ＦＴ16、ＦＴ25、ＧＴ10から出土している。ＦＴ25のものはａ類の小型であり、他はｂ類である。ａ類、ｂ類通じて、口縁部の外反が強くなっている。ｂ類ではＦＴ11、ＧＴ10に見るように平底化し、ＦＴ11では底部と体部との境界の稜がはっきりしてきている。ＦＴ16のものは口径に対して狭い底部だが、明確に平底化している。ａ類のＦＴ25出土のものは底部の調整が不良である。(2)の中程度の深さのものはＦＴ11とＦＴ25にある。ともにｂ類である。底部の調整は不良であり、第３期のものと同様に丸味を残すが、底部と体部との境界に稜が見え、両者の区別が明確化しつつある点第３期のものと異なる。ＦＴ25出土のものの口縁部は直線的であるが、ＦＴ11のものはよく外反する。深い(3)のタイプはＧＴ７から出土している。底部は不明だが、口縁部は第３期のものに比べて、端部だけの外反となっている。椀形の(4)はＦＴ11から出土している。第３期のものに比べて底部の調整が粗く、口縁部は内傾している。この他に、ＦＴ16から規模の大きいｃ類が出土している。

杯DがＦＴ25から出土している。口縁部が受口風に外弯して開く特異なものである。

蓋AはＦＴ25とＧＴ10にある。口縁部を垂直に折りまげ、天井部と区別している点第３期のものと変化がない。ただ、天井部の平担部分が広く、第３期のものより扁平化している。

蓋BはＦＴ11、ＦＴ25、ＧＴ７、ＧＴ10、ＧＴ11から出土している。口径11.4cm～11.4cmの小型のものや12.8cm～14.1cmの中型のものは第Ⅲ期にもみられるが、ＧＴ10からは16.6cm～18.6cmの大型のものが出土している。ＦＴ11、ＧＴ10やＧＴ11では口縁部のかえりは極めて小さく、粘土をつまみ出した程度となっている。ＦＴ25では、かえりをつまみ出した程度のものと第３期のものと大差のないものとが共伴している。

蓋CがＦＴ16から出土している。口径15.8cmのｃ類の規模で、口縁部は屈折せず、小さく垂下させたものである。

壺類はＦＴ11、ＧＴ７、ＧＴ10から出土している。ＦＴ11のものは短頸の坩形の小型のもの。ＦＴ11とＧＴ７・８のものは、口縁端部が突帯状に肥厚するものである。ＦＴ11やＧＴ10のものは第３期のものに比べて上方への肥厚が小さく、玉縁状に変化している。ＧＴ７のものは第３期のＧＴ９の口縁部に似ているが、上方への肥厚が小さくなっている。

（土師器）

甕Ａ・Ｃ、杯がある。

甕ＡはＡＴ５、ＦＴ11、ＧＴ７、ＧＴ10からの出土品がある。ＦＴ11、ＡＴ５、ＧＴ７のものは、第３期のＧＴ９出土のものと似て、口縁部が単純に外反するものであるが、頸部内側の屈曲部に稜が走る。また、体部の最大径が中程にあって球体に近くなっている点も第３期と異なる。体部外面が縦、内面が横刷毛となっている点も共通するが、底部の知れるＦＴ11やＡＴ５では、箆削調整を施しているが、その範囲が広く、体部の半分近くにまで及んでいる。ＦＴ11の他の１点は、口縁端部がよく外反するもので、体部は球体に近い。体部外面を縦刷毛調整するが、内面は刷毛目がない。ＧＴ10出土のものは、単純に外反する口縁部を持つが、体部内面は削り調整となっている。

甕ＣはＦＴ11、ＦＴ25、ＧＴ７から出土している。第３期のものと同様に内傾する面を持つ口縁部のものがＦＴ11から出土している。これらは、第３期のものに見られたような頸部の強いナデが認められない。口縁部の弯曲が中程から上方に見られる点は第３期のものと共通している。口縁部の弯曲が小さく、口縁端部をつまんで横ナデしたものがＦＴ25から出土している。第２、第３期のものに類品があるが、ナデによって生じる面は口縁部の外側にだけあり、従って、端部が尖り気味に終らない点異なる。以上のものは、体部外面を縦刷毛、内面を横及至斜方向に刷毛目を施している。これ以外に、ＦＴ25から、わずかに外弯気味に開く口縁部を持つものがある。体部の最大径が下方にあって下膨れのような胴部になると思われるもので、上記のプロポーションと異なる。体部外面に縦刷毛目が見えるが、内面には残らない。また、ＧＴ７からは、口縁端部に内傾して段を持つ面のみられるものがある。その内面に刻線による印がある。

杯はＧＴ７から３点出土している。第３期のＦＴ12出土の場合と同様に、口縁端部が外反するもの、端部がまきこむもの、ほとんど変化しないものの３形態がある。外反するものは第３期のものより小さく、まき込むものもまき込みが弱くなっている。変化しないものでも口縁部の開きがやや大きくなっている。また、３点通じて底部が平底風に変化していて、丸味をもっている。

Ｖ．第　５　期

杯Ａ・Ｂ、蓋Ｂ・Ｃ、高杯、平瓶、鉢、甕あるいは壺等がある。

杯Ａは柏原北ＣＴ７、ＧＴ８、ＧＴ12等から出土している。全形の知れるものはｃ－３類で、柏原北ＣＴ７、ＧＴ８とも口縁部が第４期のものに比べて外傾度がやや大きくなっている。高台は体部下端よりやや内側に付く。ＧＴ８では端部が外方へ肥厚し、端面が窪む。ＧＴ12の口縁部片もｃ－３類と思われるものである。ＧＴ８、柏原北ＣＴ７、ＧＴ12に底部片がある。

杯ＢはＧＴ８の出土品が全形の知れるものである。口径指数33で第４期までの(2)としたもので、ｂ類である。口縁部の外傾度はかわらないが、外反せず直線的である。底部と体部との境界に明確な稜を取っている。

蓋Ｂは柏原北ＣＴ７、ＧＴ８、ＧＴ12、ＦＴ15からの出土品がある。ＦＴ15、ＧＴ８のツマミは大きく扁平で、中央がやや高いものである。口径は16cm程と大きいもので、口縁部に段はなく、かえりも小さくつまみ出した程度のものである。

蓋Ｃは柏原北ＣＴ７、ＧＴ12・８、ＦＴ７、柏原北ＣＴ２等から出土している。柏原北ＣＴ７、ＧＴ８・12では蓋Ｂと共伴している。口縁部と天井部との区別がなく、端部をつまみ出して垂下させ、その外側に明瞭に稜を取るものと、端部を小さく折りまげ、その外側の稜を甘くしているものとがある。

鉢は柏原北ＣＴ７から出土している。口径24.6cmのもので、直線的な体部を持ち、口縁端部を内側に

まげ、端部を外側へ肥厚させて、内傾する面をつくり出している。

高杯がＧＴ８から出土している。脚部の小片であるが、端部を上方に肥厚させている点第２期のＡＴ２出土品に見る。

平瓶の口縁部と思われるものが柏原北ＣＴ２から出土している。口縁端部附近の外側に一条の凹線をめぐらせ、内弯する。

柏原北ＣＴ７からはあるいは壺の口縁部と思われる小片が出土している。

（土師器）

甕Ａ・Ｂ・Ｃ、鉢、鍋、杯がある。

甕Ａは柏原北ＣＴ２、柏原北ＣＴ７、ＡＴ６、ＡＴ11、ＦＴ９、ＦＴ15、ＩＴ12から出土している。口縁部が短く単純に外反するものがＡＴ11から出土している。第４期のＡＴ５やＦＴ11のもの等と形態、調整は共通しているが、体部の最大径が下方にあり、下膨れに変化しており、体部外面の篦削調整が体部の２分の１にまで及び、内面の刷毛目が底部に及ばない。ＦＴ15のものとＩＴ12のものとは、ａ類とｃ類で規模が異なるが、わずかに内弯気味の短い口縁部が垂直近くに立ち上る点共通している。第３期のＢＴ６のものと共通点があるが、口縁部が一層短く、頸部内面の屈曲部に明瞭な稜が走っており、第３期のものから変化している。柏原北ＣＴ２、柏原北ＣＴ７出土のものはいずれも大型のｃ類である。これらのものでは、口縁部が大きく外反し、その端部を上方あるいは下方へ小さく肥厚させ、外側へ面をつくり出している。第４期までには見られなかったタイプである。ＦＴ９のものも口縁端部に面を取るが、口縁部は極めて短い。ＦＴ15出土の中に、極めて小さな甕がある。口縁部は単純に外反し、体部は下膨れとなっている。体部外面に縦刷毛目の調整痕が残る。第４期のＦＴ11出土の中に同様の調整痕のあるものがあり、その変化したものと思われる。

甕ＢはＡＴ６で把手部分の破片が出土している。また、柏原北ＣＴ７のものは胴部の膨り具合から甕Ｂになるものと思われる。これは、口縁部が弯曲するものであるが、口縁部の中程で強く弯曲し、端部に内傾する面を取っている。体部外面を横及至斜め、内面を縦方向に刷毛目調整している。

甕Ｃは柏原北ＣＴ６、柏原北ＣＴ７、ＡＴ６、ＦＴ15から出土している。柏原北ＣＴ７からは第４期と同様に口縁端部附近に強い弯曲部のみられるものが出土しているが、同時に、甕Ｂと同様に、口縁部の中程で強く弯曲するものがある。この傾向は柏原北ＣＴ６、ＡＴ６出土のものも同様で、第４期からの変化である。口縁端部は、柏原北ＣＴ７では面を取るとともに内側に肥厚し、柏原北ＣＴ６では内傾する面をもつ。ＡＴ６のものでは端面が窪む。調整の知れるものでは、体部外面はやや斜めの縦刷毛、内面は斜め方向の刷毛目調整となっている。ＦＴ15の２点は器壁の極めて薄いもので、第４期のＦＴ25出土のものと共通する。ただし、口縁部は内弯している。なお、ＦＴ15の１点は甕Ａである可能性が強い。

鍋が柏原北ＣＴ７とＧＴ８から出土している。口縁部が大きく外反するが、第２期のＦＴ５のものに比べれば小さい。また、口縁端部に面取りが見られる。体部内外面に斜方向の刷毛目がみられる。ＧＴ８のものは底部片であるが体部は半球形を呈する。体部内外面に刷毛目が残る。底部の篦削りは認められない。

鉢がＡＴ11と柏原北ＣＴ７から出土している。口縁部が幅広く肥厚し、端部に内傾する面がみられる。口縁部内外面をナデ調整し、体部外面の大半を篦削りしている。内面は、下方３分の２まで斜めの刷毛調整を施し、上部３分の１が肥厚する部分で、ナデ調整する。

杯は柏原北ＣＴ7とＦＴ9から出土している。柏原北ＣＴ７からは口縁端部が外反するものと内側にまき込むもの、高台のつくものとがある。ＦＴ９のものは口縁部に変化のないものである。柏原北ＣＴ７の口縁端部が外反するものでは、第４期のものに比べて一層外反度が小さく、内側へまき込むものもわずかに端部が肥厚する程度となっている。ＦＴ９では、内面に暗文、外面底部に指頭圧痕がよくのこる。高台付の杯は、外方へよく踏んばる断面長方形の高台が付き、杯部の口縁部は直線的に大きく開くものである。

Ⅵ．第　6　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃ、皿がある。

杯ＡはＢＴ２とＦＴ６の出土品がある。ＢＴ２のものはｃ－３類とｃ－４類とがある。ＦＴ６のものもｃ－３類である。ｃ－３類のものは、第５期の柏原北ＣＴ７やＧＴ８のものに近似するが、ＢＴ２では高台が体部直下に近く。ＦＴ６のものでは高台端部の肥厚が小さくなっている。ＢＴ２、ＦＴ６の両方から底部片が出土している。ともにｃ類であるが、ＦＴ６のものはｃ－３類と同様の高台を持つ。ＢＴ２のものは第４期のＧＴ12出土のものに似るが、体部直下近くに高台がつく。

杯ＢはＢＴ２から４点出土している。口径指数20.7の浅い(1)、25.2～26.2の中程度の(2)、椀形の(4)がある。(1)、(2)ともに完全に平底化している。椀形の(4)も体部と底部との境界に稜が目立ち、口縁部もよく開いている。

皿はＦＴ６から極めて浅いものが出土している。

蓋ＣはＢＴ２とＦＴ６から出土している。蓋Ｂは共伴しない。口径12cm程のものと、15cm前後のもの、20cm前後のものと大、中、小の差がある。第５期のものに比べて、総体に天井部が平担で、扁平なものとなっている。つまみも大きく、中高であるが、一層扁平なものとなっている。中型品では、口縁部の屈曲はなく、その端部を横断面三角形状に小さくつまみ出している。ＦＴ６の大型のもの、ＢＴ２の小型のものでは口縁部に小さな屈曲が認められる。

（土師器）

甕Ａ・Ｃ、鍋、杯がある。

甕ＡはＢＴ2出土のものがある。4点あるが、口径で14cm～15.2cmのものと22.7cm～25.6cmのものがある。小型のものでは、体部の最大径が口径より小さいものと凌駕するものとがある。前者は、「く」の字形の口頸部で、口縁端部をつまみ出している。後者は頸部のナデが強く、そのために口縁部がやや弯曲したように見え、端部をわずかに外反させている。調整は前者が体部外面を縦刷毛調整し、内面は指ナデ痕が残る。後者は、外面は不明だが、内面に斜め刷毛調整痕がみえる。これらの他に、体部外面を強い指頭による削りを加え、器面に顕著な凹凸を生じさせているものがある。口縁部は短く開き、端部をわずかに内側にまき込んでいる。体部外面に刷毛目痕がわずかに残る。大形のものは、口縁部を大きく外反させ、その端部に面を取るもの。第５期のものに同様のものが見られる。ただし、２点のうち１点は口縁端部に肥厚は見られず、端部をわずかに内側へ弯曲させている。ＦＴ６出土のものも端部の肥厚はない。

甕ＣはＡＴ13、ＢＴ２、ＦＴ20のものがある。口縁部はすべて、その中程に強い弯曲部がある。弯曲部の上半が垂直に立つものもある。また、端部は内傾する面を持つ。体部内外面とも縦方向に刷毛目調整している。体部は口径を凌駕しないようであり、最大径は上方にある。

鍋はＦＴ20から出土している。口縁部は大きく外反するが、その端部は単純ではなく、上方へつまみ出している。体部は外面を縦刷毛調整、内面は口縁部から体部にかけて横刷毛調整している。

杯はＡＴ13とＢＴ２のものがある。ＢＴ２のものは口縁端部をまき込むものであるが、そのまき込みは極めて小さく、内面に沈線状の窪みを残す程度となっている。体部内面に暗文を残す。ＡＴ13のものは口縁端部を外反させるものであるが、その外反は極めて小さいものとなっている。底部外面を篦削り調整している。

Ⅶ．第　７　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、壺がある。

杯ＡはＡＴ３、ＣＴ５、ＩＴ５のものがある。ＡＴ３出土のものが全形を知ることができるもので、ｃ－３類及びｄ類で、いずれも口径指数は低い。高台の位置や口縁部の外傾度等は第６期のものとかわらない。高台は低く、端部の肥厚も小さい。また、端面が窪むものがある。

杯Ｂは柏原北ＣＴ10、ＩＴ７、ＩＴ10のものがある。ａ、ｂ、ｃの各種がある。ＩＴ17のものは口径指数18.9の浅いもの。第６期のものと口縁部の外傾指数はかわらないが、口縁端部の外反は見られない。ＦＴ10は口径指数24.2で中程度の深さであるが、口縁部にやはり外反がなく、直線的である。柏原北ＣＴ10のものは口径指数30.4の深いもの。口縁端部が小さく内側へ折れ、外反する。第６期のＢＴ２出土のものに比べて底部の丸味がなくなっている。ＩＴ10出土のものは埦形品。

蓋ＣはＡＴ３、ＣＴ５、柏原北ＣＴ５、ＦＴ10、ＩＴ10出土のものがある。総じて天井部が平担で、口縁部との境界に稜が目立つようになる。口縁部の段はまだなく、直線的に端部に至る。端部は小さく折りまげて垂下させるものが多い。ツマミは扁平で径の大きいもので、中央の高まりがほとんどなくなっている。

ＧＴ４から壺の口縁部と思われるものが出土している。

鉢がＧＴ４から出土している。体部は埦形で、口縁部が内傾し、内弯している。

（土師器）

甕Ａ・Ｂ・Ｃ、杯、高杯、蓋がある。

甕Ａは柏原北ＣＴ10、ＡＴ3、ＣＴ５、ＦＴ10からの出土品がある。ａ、ｂ、ｃの各種がある。ＡＴ３とＦＴ10にａ類がある。ＡＴ３出土のものは短い口縁部を持つもの。頸部は「く」の字形で、内側に稜を取る。体部外面は縦、内面は横方向。刷毛目調整を施す。ＦＴ10のものは、長く、大きく外反する口縁部を持つ。口縁部は小さく弯曲し、端部を肥厚させて面を取る。ｂ類はＣＴ５のものがある。単純に開く口縁部を持つもので、頸部の屈曲は甘い。ｃ類はＡＴ３と柏原北ＣＴ10のものがある。ＡＴ３のものは「く」の字形に外反する口縁部と上半分のよくはった体部を持つ。体部の最大径は口径より小さい。体部外面は縦、内面は横方向の刷毛目を施す。柏原北ＣＴ10のものは大きく外反し、端部に面を持つ口縁部である。口縁端部附近外面のナデが強く、従って、不明瞭ながら稜が走る。第６期のＢＴ２の出土品に類例がある。ＢＴ２と同様、体部のはりが小さい。

甕ＢがＣＴ５から出土している。口縁部はその中程で弯曲し、端部に外傾する面がある。体部の張りが小さく、最大径は中程にくるが長胴の体部となっている。体部内外面とも縦刷毛調整で、外面底部は篦削りしている。

甕ＣはＡＴ３、ＦＴ10、ＩＴ７、ＩＴ８からの出土品がある。ＡＴ３の２点は口縁部がその中程で弯

曲し、端部の面は水平で、外側へ肥厚させている。ＦＴ10のものは第６期のものと共通している。ＩＴ７、ＩＴ８、ＣＴ５では、内傾する口縁端面が凹む。いずれも体部の内外面を刷毛目調整する。ＣＴ５のものでは、口縁部内面に横方向の刷毛目が残る。

高杯がＡＴ３、ＣＴ８から出土している。

蓋はＧＴ４から出土している。扁平で大きいツマミが付く。

杯はＡＴ３から高台の付くもの、ＧＴ４からは口縁端部をまき込むものが出土している。ＧＴ４の口縁部のまき込みは極めて小さい。

Ⅷ．第　８　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃ、壺がある。

杯ＡはＡＴ４と柏原北ＣＴ９のものがある。ＡＴ４のものはすべてｂ－２類、柏原北ＣＴ９のものはｃ－２類とｂ類の破片である。ｂ－２類では、高台が体部下端近くにつく。端部の肥厚するものがなく、横断面長方形を呈す。口縁部の外傾度が小さくなり、反面、よく外反する。ｃ－２類も同様の傾向にある。

杯ＢはＡＴ４とＨＴ１の小片がある。ＡＴ４からは４点出土している。口径指数30.3～32.7のものと21.8～23.3のものとが各２点ずつある。杯Ａと同様口縁部の外傾度が小さくなっている。口縁端部に小さな外反が認められる。

蓋ＣはＡＴ４、柏原北ＣＴ９、ＨＴ１、ＨＴ４出土のものがある。ＡＴ４では、口縁部に小さな段が見えるものと見えないものとが共伴する。ＡＴ４のものには口縁端部を折り曲げ外反させて垂下させるものがあり、同様のものがＨＴ１、柏原北ＣＴ９からも出土している。また、口縁部外面の段に対応せず、内面を横ナデで窪ませ、口縁端部をつくり出しているものがある。ＨＴ４のものもこの手法である。口縁部に段のあるものもないものも、横断面三角状の端部を持つものである。ツマミはＡＴ４出土のものにみられるが、くびれがほとんどなく、径も小さくなっている。

台付長頸壺がＡＴ４から出土している。口縁端部を大きく外反させている。肩部及び体部は丸味がなく直線的で、高台は端部が肥厚する。

（土師器）

甕Ａ・Ｃ、杯、鍋がある。

甕ＡはＡＴ４から３点出土している。大小があるが、小型のものは形態、調整とも第７期のＡＴ３出土のものに似ているが、口縁部の開きが大きく、体部最大径が下方に移っている。大型のものには２形態ある。口縁部が単純なものはやはりＡＴ３のものに類品があるが、体部最大径が下方に移行している。他の１点は外反した口縁端部を上方に肥厚させ、端面を窪ませるもの。第６期や第７期のものに比べ、頸部の屈曲は甘く、体部の膨りも小さい。外面縦、内面横方向の刷毛目調整を施す。

甕Ｃは柏原北ＣＴ４、柏原北ＣＴ９、ＨＴ１から出土している。柏原北ＣＴ4とＨＴ1のものは、口縁部中程で弯曲させているが、その端部はやや外傾する面を取り、内側また内外両側に肥厚させている。体部も垂直近くにおりる。調整は不明。柏原北ＣＴ９のものは、弯曲しながら外反する口縁部の端部を上方につまみ上げたもの。

鍋がＡＴ４から出土している。第６期のＦＴ20に近似した口縁部片であるが、口縁端部の上方へのつまみ上げは小さい。

杯はＦＴ23から２点出土している。大小があるが、ともに口縁部を外反させる。大型のものは平底で、篦削りしている。

Ⅸ．第　9　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、皿、蓋Ｃがある。

杯Ａは柏原北ＣＴ３とＢＴ１にある。ＢＴ１のものがｂ－2類、他がｃ－2類である。ｂ－２類のものは、肥厚せず、端面を凹ませた極めて低い高台が体部下端よりやや内側に付く。ｂ類に入ると思われる底部片も肥厚せず、端面が凹む。ｃ－２類のものは体部直下に高台が付く。高台は横断面台形に近い。ｂ、ｃ類ともに体部は直線的に開く。

杯Ｂも両住居跡から出土している。いずれもｂ類で、口径指数もＢＴ１の28.6の１点を除けば30.2～31.7でほぼ同形である。体部と底部との境界は明瞭で、平底である。丸味を持つものはない。ＢＴ１出土の１点は外反する口縁部を持つ埦形の底部を持つものである。しかし、これも底部と体部との境界を明瞭にし、底部も平底化をはかっている。

蓋Ｃも両住居跡から出土している。いずれも小型である。ツマミの形態は第８期のものと変化がないが、口縁部にいずれも段が認められ、段を持たないものを伴出していない。口縁端部を垂下させず、屈曲させただけのもの、小さく丸味をもってつまみ出したもの等は第８期のものにない形である。

皿がＢＴ１から出土している。

（土師器）

甕Ａ・Ｃがある。

甕ＡはＢＴ１から出土している。大小３点出土しているが、うち大小の２点は、粗く、深い叩き痕を体部にのこす。口縁部は受口状に屈曲させ、大型のものでは端部を内側につまみ、尖り気味に終らせている。第６期のＢＴ２の出土品に類品があるが、体部調整が異なる。他の１点は大きく外反する口頸部の端部を小さく内側へまげ、面を取る。

甕Ｃは柏原北ＣＴ３とＢＴ１とから出土している。柏原北ＣＴ3のものは短い口縁部でわずかに弯曲する程度であり、頸部と端部のナデによって面に凹凸が生じている。第８期の柏原北ＣＴ14やＨＴ１のものの変化であろう。ＢＴ１のものは単純に外反するもの、内面に刷毛目がみられる。

Ⅹ．第　10　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、皿、壺がある。

杯ＡはＣＴ６、ＣＴ13、ＩＴ６から出土している。ｂ－２、ｂ－３、ｃ－２、ｃ－３類がある。ｂ－２類のものは、高台は体部直下よりやや内側に付き、横断面は方長形あるいは台形に近いものがある。底部と体部との境界に稜を取るものと甘いものとがある。体部が外反気味のものは境界の稜が明確であり、内弯気味のものは甘い。第９期までにみられた高台端面を凹ませるものはほとんどない。ｂ－３類も同様の傾向にある。ｃ類も同様であるが、高台は体部下端に付き、体部の外反はほとんどみられない。

皿はＣＴ６から大小中の３点が出土している。平底で、口縁部は外反気味に開くものと直線的なものとがある。

蓋ＣはＣＴ１、ＣＴ13、ＣＴ６、ＩＴ６からの出土品がある。小型のものと大きいものとの別がある。口縁部に段を持つ。端部は丸味をもって終らせるものが多く、第９期のＢＴ１の出土品のように垂下さ

せず口縁部を屈曲させただけのものもあるが、内側へのまきが大きくなっている。

壺と思われるものの底部片がＣＴ６から出土している。また、ＣＴ１から口縁部が出土している。

（土師器）

甕Ａと鍋がある。

甕ＡはＣＴ13から出土している。ａ類の小型品である。第９期のＢＴ１出土の小型と同様に口縁端部を受口風にするもの。体部は不明。

鍋はＣＴ６から出土している。短く弯曲する口縁部を持つ。内面に刷毛調整痕が残る。

Ⅺ．第　11　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、皿、蓋Ｃ、壺がある。いずれもＣＴ11の出土品である。

杯Ａはｂ－１～３、ｃ－２がある。高台は体部直下に付き、底部と体部の境界は第10期ほど明確でない。体部は直線的で、ｂ類のもので、端部附近がわずかに外反する程度である。高台は横断面長方形で、ほとんど外方への踏んばりがない。端面をわずかに窪ませるものがある。

杯Ｂは口縁部の開きが大きい。

皿は口径の等しいものが３点ある。口縁部の外反するものと直線的なものとがある。外反度は第10期に比べて小さい。

蓋Ｃは小型のものが４点ある。口縁部の知れる３点は、その端部をわずかに肥厚させた程度の丸いものとしている。

甕は口縁端下端に横断面三角状の突帯つけたもの。

Ⅻ．第　12　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、皿、蓋Ｃ・Ｄ、壺がある。

杯ＡはＢＴ８、ＩＴ９のものがあり、ｂ－２、ｂ－３、ｃ－２、ｃ－３類がある。いずれも口縁部は直線的あるいは心持ち内弯気味になる。外反気味のものは少ない。高台は横断面台形状になり、低いものがある。

杯Ｂは口径指数24.6～26.1の浅いものと29.5のやや深いものがある。口縁部の外傾度は42.9～46.2で、３点ともかわらない。底部と体部との境界には明瞭に稜が走る。底部にやや丸味を残すものがある。

皿は同大のものがＢＴ81の２点ある。口縁部は直線的で、開きは第11期のものと変らない。

蓋ＣはＢＴ８から大小２類が出土している。ツマミはくびれの小さい中高のもの、くびれのない中高のもの、くびれがやや大きく中高のもの等がある。口縁部はいずれも段を持って、端部を丸く仕上げている。

蓋ＤはＢＴ８にあるが、ツマミは蓋Ｃと同様のものである。

壺はＢＴ８から短頸のものが出土している。内傾する極めて短い口縁部である。

（土師器）

甕ＡがＢＴ８から大小のものが出土している。小型のものは外反する口縁部の端部をつまみ上げたものである。第９期のＢＴ１出土のものでは端部を上方に曲げ、第10期のものではその折り曲げが小さく、第12期のものでは横断面三角形状につまみ出したものとなっている。大型のものは外反する口縁端部を斜方へ内弯させるもので、体部は膨らず、口径より最大径が小さくなっている。第８期に類品があるが、

口縁部の弯曲、端部の折り曲げ、体部の膨りなどに変化がみられる。この２点の他、ＢＴ８から、内弯し、端部を外反させる口縁部を持つ小型の甕Ａが出土している。器壁が薄く、調整は不明であるが、器壁に凹凸がみられる。

XIII. 第　13　期

（須恵器）

すべてＢＴ９からの出土で、杯Ａ・Ｂ、蓋Ｃ、皿、鉢、壺がある。

杯Ａはｂ－２類が２点の他にｂ類の底部片、ｃ類の口縁部片がある。ｂ－２類では高台は長方形で体部下端に付き、体部は内弯気味に開き、口縁端部を外反させるものと単純に終るものとがある。

杯Ｂは口径指数24.1と29.5があり、深さに差がある。底部に丸味がなく、平底で、体部は大きく直線的に開く。

蓋Ｃは口縁部に段があり、端部は丸く小さい。

皿は２点ある。口縁端部を外反させるもの、体部を上下２段にナデ、その境に稜を取るものとがある。

鉢は口縁部を「く」の字形にした深いもの。

壺は外反する口縁部の端部を上方に肥厚させ、外側に面を取るものである。

（土師器）

甕Ａの小型のものが１点ある。やはりＢＴ９出土のものである。短く外反する口縁部の端部をやや内側につまみ上げたものである。第９期のＢＴ１出土のものに類品があるが、体部の最大径が大きく、端部のつまみ出しもまだ小さいものとなっている。

（灰釉陶器）

埦、皿がある。ＢＴ９の出土である。

埦は２点ある。口径17.8cm～18.6cm、器高5.4cm～5.7cmでほぼ同大である。丸味を持った体部と口縁端部を大きく外反させる特徴を持つ。高台は断面長方形のものを付ける。

皿は一点が段皿である。高台はやや内弯気味の高いものを付ける。段は高台直上よりやや外側に付け、幅の広い直線的な口縁部を持つ。他の一点はやや内弯気味の体部で、口縁端部を屈曲させる。

（黒色土器）

やはりＢＴ９から埦が１点出土している。高台部分が欠失している。口径23.4cm、高さ 5.6cmの大きいものである。口縁端部を外反させ、体部外面に暗文がある。

XIV. 第　14　期

（須恵器）

杯Ａ・Ｂ、皿、蓋Ｃ、壺等がある。

杯Ａは全形を知れるものがない。ＨＴ２・５・６では底部片がある。高台は体部直下に付き、低く、長方形及至台形断面のものが多い。口縁部片はＢＴ10等では心持ち内弯気味で、端部に変化はない。

杯ＢはＢＴ10やＣＴ７等に全形の知れるものがある。

皿はＢＴ10、ＨＴ２、ＩＴ２、ＩＴ３等で出土している。わずかに外反するもの、直線的なもの、口縁部の器壁を薄くするもの等、また、ＢＴ10では底部と口縁部の区別が不明瞭で、底部に丸味をもたせている。

蓋ＣはＢＴ10、ＨＴ２、ＨＴ６等にある。総体に口縁端部のまき込みがほとんどなく、端部内面を小さく窪ませて端部をつくるものが多い。

壺はＨＴ５から花瓶形のものが出土している。平底で、肩部ははらず、最大径は中程にくる。

（土師器）

杯がＣＴ７、ＨＴ２、ＨＴ５から出土している。ＣＴ７の２点は底部に篦おこし痕が残り、ロクロ仕上げで、体部外面にロクロナデの凹凸が残る。ＨＴ２のものは、範囲の狭い平底状の底部と大きく開き、端部を小さく内折するもの。ＨＴ５のものは皿状の浅いものである。

（灰釉陶器）

ＦＴ８、ＩＴ２、ＩＴ３等から埦形品の小片が出土している。ＩＴ２のものは底部片で、高台は高く、中程で内面が内折している。他のものは口縁部片である。

（黒色土器）

ＨＴ２、ＨＴ６から甕が出土している。ともに「く」の字形の頸部、直線的でその端部を外反させながら小さくまき込む口縁部を持つ。ＨＴ２のものでは、体部は最大径を上方に持ち、口径とほぼ同規模となっている。

以上、竪穴式住居跡出土の土器類を第１期～第14期に区別し、順次説明してきた。西暦年代ではおよそ７世紀初頭から10世紀初頭までのものである。土器類を出土した遺構には、その他溝状遺構や土坑等が存在する。ここでは、第１期～第14期の中に納まるものは、後項の遺構の編年で扱うこととし、この14期の以前と以降の土器類を出土しているものを取り上げ、編年的に記述しておくこととする。

第四項　編年（土器類）II

Ｉ．６世紀以前

（須恵器）

６世紀代にさかのぼる杯Ｃ、蓋ＡがＣＰＮ９、ＣＰ 355、ＩＴ５の埋土中から出土している。

杯ＣはＣＰＮ 157とＩＴ５から各々１点出土している。ＣＰＮ 157のものは、口径10.8cmで、受部は体部の延長線上で短かく斜上方にのび、口縁部は外反し、上半分は垂直に立つ。ＩＴ５のものは、受部は外反して水平近くにのび、口縁部はわずかに内傾して立つ。

蓋ＡはＣＰ 355とＩＴ５から出土している。ＣＰ 355のものは天井部に丸味があり、口縁部との境界に凹線をめぐらせて区別する。口縁部はわずかに開く。ＩＴ５のものも同様であるが、天井部は篦削りし、口縁部は垂直である。

これら杯Ｃ、蓋Ａは、近江湖北地方の後期古墳の編年で長浜市中山古墳期に比べて、蓋で口縁端部の面取りがなく、口縁部と天井部との明確な区別は次の近江町黄牛塚古墳期のものにはみられない。両古墳期は大阪府陶邑古窯跡編年でＴＫ10及びＴＫ43に相当するものであり、やはり、両者の中間的な形態である。前項の第１期は長浜市諸頭山２号墳期に相当し、従って、湖北地方では、これら須恵器杯、蓋の間に黄牛塚古墳期、余呉町上ノ山１号墳期の２形式が存在する。当遺跡でも、遺構に伴うものとしては、この間をうめるものは存在していない。

（弥生式土器）

ＣＭ17、ＣＰ 340、ＢＢＰ１、ＡＢＰ１、ＨＴ１から弥生式土器が出土している。特に、新しい時期のものと混在せず、一括して出土しているのはＡＢＰ１とＣＰ 340である。

壺、甕の器種が認められる。

ＣＰ 340からは、甕が出土した。頸部はゆるやかに外反し、口縁部がわずかに立ち上がるものと、頸

部が大きく外反し、口縁部のさらに横へひろがって端部に面をなすものとがある。前者は、肩部外面に櫛描直線文、後者は、頸部外面に櫛描直線文、口縁部内面に櫛描波状文をそれぞれ施す。

ＨＴ１からは、口縁部が斜め上方にひらき端部を上下に拡張する壺が出土した。なお、端面には３条の凹線文を施す。

ＡＢＰ１、ＣM17、ＣＰ 340、ＢＢＰ１から壺あるいは甕の底部が出土した。ＡＢＰ１、ＣM17、ＣＰ 340のものは上げ底の底部をなし、斜め上方に立ち上がる。ＢＢＰ１のものは、外底面は平担である。なお、ＡＢＰ１からは他にも弥生土器破片が出土しているが、器種等は不明である。

あえて、以上の弥生土器の時期的位置づけについてみると口縁端部が上下に拡張し、凹線文を施す壺、外反する口頸部をもち櫛描文を用いる甕などからみると畿内第Ｖ様式併行期に位置づけられるのではないかと思われる。

II．10世紀以降

灰釉陶器、黒色土器については、すでに、竪穴式住居跡の出土土器から編年した第13期及び第14期にすでに出土している。第14期までは、須恵器及び土師器が中心であったが、10世紀以降では須恵器類は姿を消しはじめ、灰釉陶器が中心になり、これに緑釉陶器、黒色土器、陶器が加わる。以下では、施釉陶器、黒色土器を中心に、溝状遺構や土坑等の一括性の高い遺物を中心に編年的に記述していく。編年は、施釉陶器が中心になるので、東海地方の編年に従い、10・11世紀代を５期に区分し、前項の第14期に続けて、第15～19期とする。

イ）第15期

この時期のものには、ＣM20(図125)やＦＭ５(図130)等からの出土遺物に見出せる。ＣM20からは灰釉陶器の皿、壺、土師器の皿、ＦＭ５からは灰釉陶器の埦がある。

灰釉陶器の埦は、同心円復原で口径17.5cmのもので、直線気味に開いた体部から内側へ曲げ、端部を大きく外反させた口縁部を持つ。底部は、高台の付け根外側を箆で強く凹ませ、内側を弯曲させたものと高台付け根の箆押えのないものとがある。ともに端面は弯曲した面を持つ。なお、釉は底部内外面を除いた部分にかかる。

灰釉陶器の皿は、埦と同様に弯曲した内面と箆押えした付け根部分を持つ高台で、端面は弯曲させた面取りがある。体部はやや弯曲し、端部を大きく外反させている。釉は口縁端部附近の内外面にかかる。

灰釉陶器の壺は長頸のもので、外反する口縁端部を下方に肥厚させ、外側に垂直な面を取る。

土師器の皿は口径10.9cmのもの。口縁部がわずかに外反する。底部外面に指頭圧痕がのこる。

ロ）第16期

ＡＰ13（図123）からの一括遺物がある。灰釉陶器の埦、皿、緑釉陶器の埦、皿、黒色土器の埦がある。

灰釉陶器の埦は、口径15.8cm、器高 5.4cmのものと、口径13.8cm、器高 4.2cmのものと大小２類ある。大型のものは内弯する体部と変化のない口縁部を持つ。高台は外傾し、外面を直線的に、内面を弯曲させる。釉は底部内外面を除いた部分にかかる。小型のものは、中程で屈折させる体部と端部をわずかに外反させた口縁部を持つ。高台は大型のものと同様であるが、付け根の外面に箆押えによる沈線が見える。釉は口縁部の内外面にかかる。前期のものに比べ、口縁部の外反がなく、高台内面の弯曲も強い屈曲部分を生じさせている。

灰釉陶器の皿は中程から口縁端部にかけて外反し、高台は外傾して、内面を弯曲させる。釉は口縁部内面に残る。

緑釉陶器の埦は底部が欠失している。体部は内弯し、端部を小さく外反させるものである。釉は深緑色を呈している。

緑釉陶器の皿は口径11.6cm、器高 2.8cmのもの。高台は横断面逆三角状のものが付く。体部は灰釉陶器の皿に似て中程から外反している。釉は埦と同様深緑色を呈している。

ハ）第17期

柏原北ＡＭ１(図118)及び柏原北ＡＭ２(図118)の両溝状遺構はその堆積土層を２層に区別し、下層の出土土器がこの時期に当る。灰釉陶器の埦、皿、壺、土師器の皿、杯、甕Ａ、白磁がある。

灰釉陶器の埦は全形を知れるものはないが、弯曲する体部とやや幅広く外反させる口縁部とを持つものがある。底部は、内面の弯曲がほとんど見られず、外面に稜を持ち、端部を尖り気味に終らせるものと横断面が外傾する長方形状のものとがある。

灰釉陶器の皿は、高台径の小さいものがある。一点は削り出し風に底部の器壁を厚くし、底い高台を付けるもの。他は大きく外傾する横断面長方形状のもの。

灰釉陶器の壺は長頸のものの頸部から肩部にかけての破片がある。頸部は直線的で、口縁部は外反させているようである。肩部の張りは大きいようである。

土師器甕は、器壁の厚いもので、口径は16cmを計る。口縁部は短く、小さく開き、端部を丸く納めた単純なものである。頸部のナデがやや強く、内側に稜を取る。体部はナデ肩で、最大径は口径よりやや大きい程度である。体部内面は、指頭痕が残るが横刷毛調整している。外面は幅広く、深い水平な叩き痕が見られ、器壁に凹凸をつくっている。

土師器杯は平底の口縁部の開きの大きいものがある。全形を知れるものは、口径11.1cm、器高 2.7cmのもので、底部はナデ調整している。

土師器皿は、口縁部に稜を持つものと単純なものとがある。前者は口縁部に段を持たせるように外反させ、端部を内側にまき込む。口径11.1cm～12cmのものと16.8cmを計るものがあり、後者は端部のまき込みがなく、内弯させている。口縁部の単純な後者は、口径16cm、器高 2.7cmを計るものがある。底部は指頭圧痕が残る。

白磁埦は横断面逆台形状の高台を削り出したものである。

ニ）第18期

柏原北ＡＭ１、柏原北ＡＭ２のそれぞれの上層のものをこの時期に当てる。灰釉陶器の埦、皿、壺、土師器の杯、皿、白磁等がある。

灰釉陶器の埦で大型品の全形を知れるものは、口径13.4cm、器高 4.1cmを計るものと口径15.6cm、器高 5.1cmのものとがある。前者は、弯曲の小さい体部と小さく外反させる口縁部を持つ。高台は高さ 1.2cmの高いものが付く。後者は断面三角形状の低い高台で、体部は中程で弯曲し、端部を外反させている。高台部分だけを見ると、内面に弯曲するものはなく、外反気味の高いものが多い。小型埦は口径10.2cm、器高 2.9cmのものと９cm、 2.5cmのものとがある。高台はともに外面を垂直にした断面逆台形状のものである。体部は前者は大きく開き、口縁部を外反気味にしている。後者は開きが小さい。

灰釉陶器の皿は、高台は埦の小型のものと同様である。体部は口縁部を外反気味にするものと内弯気味のものとがある。

土師器の杯は円筒状の底部を持つもので、底部外面に糸切り痕を残す。

土師器の皿は、口縁部に段を持つものと単純なものとがある。柏原北ＡＭ2の上層からは、口縁部に段

を持ち、端部にまき込みの見られるものと、内弯して終るものとがある。口縁部の単純なものは大小２類があるが、前期のものに比べ、口縁部はよく外傾し、底部の丸味がなくなっている。

白磁は埦形品の口縁部片で、口縁端部に玉縁を作り出しているが、極めて小さく、玉縁下端に沈線を引いて区別している。

ホ）第19期

柏原北ＡＭ２上面の土器溜り、ＣＭ17(図125)、柏原北ＣＢＰ６(図120)等の出土遺物がある。山茶埦の埦、土師器杯、皿、白磁、青磁等がある。

山茶埦の埦は、口径16.3cm、器高 4.6cmのものと16.4cm× 5.4cmのものとがある。ともに体部は内弯し、口縁端部を小さく外反させている。底部は底い台形状のもの、後者は逆三角形状の低いものである。

土師器の杯は、低い円筒状の高台部分で、底部外面の糸切痕はみられない。

土師器皿は大型のものはなく、最も大きいもので口径13cmであり、９cm前後のものが多い。口縁部に段を持つものが１点あるが、端部のまき込みはなく、斜上方に立つ。他は単純な口縁部で、内弯気味となる。底部は指頭痕があり、口縁部を１～２度ナデして、不明瞭な稜が見られる。大きいものも同様の整形である。

白磁は埦と壺形のものとがある。埦は口径15.3cmで、径 5.2cmの小さい削り出しの高台がつく。内面に段を持つ。体部は内弯し、口縁端部は小さく外側にまき込み、玉縁状にしている。壺と思われるものは、小さな平底を有するものである。

青磁は埦形品で、長方形断面の高台を持つ。

以上、10世紀前半から12世紀前半まで５期に区分し、比較的良好な出土遺物のみられる溝状遺構、土坑を中心に、編年的に記述した。遺構を選択したため、すべての器種を説明できなかったが、後項で各遺構の編年を行う時に補っていく。なお、別図に、これまでの説明に従って編年図を作成した。また、出土遺物の個々の説明は上記を持ってかえることとし、特に観察表は作成しなかった。

第五項　瓦類（図152～164）

Ⅰ．瓦の出土状況

瓦類は、ＡＭ１、ＤＭ１、ＥＭ５等から比較的多量に出土している。その他、ＥＭ12、ＥＭ２、ＥＭ３、ＥＭ18、ＥＭ10、ＦＭ５、ＥＢＰ６、ＤＰ 171、ＥＰ21、ＥＰ32、ＥＰ７等から出土している。出土地域の分布は、ＤＭ１からＥ区にかけてに集中する。かつて、ほ場整備工事に伴う発掘調査で検出した瓦溜りはＥ区の西隣、小字殿町であって、井口遺跡における瓦の出土地域はこの附近に集中する。瓦は、これら溝状遺構や旧河道を中心とし、その他土坑から若干のものが出土しているが、ＡＴ３やＦＴ23などの住居跡からも出土しており、注意される。特に、ＦＴ23からは、カマド部分から、比較的良好な状況で出土している。その状況はカマドの焚口やその天井部の構築材料とされていた可能性の極めて高いものであった。

Ⅱ．平瓦（図152～164）

平瓦は、比較的遺存状況の良好なものでは、ＦＴ23出土のもので、長さ37.5cm、幅は21.1cm以上、弧深 2.9cm以上を計り、ＥＰ32出土のものでは、一端が30.3cm、他端が29cm以下で、弧深は 6.4cmである。裏面の叩き痕には三通りが見られる。一つは縄目、二つは斜格子、三つ目は叩き痕を箆削りして消し去るものである。その数量は、平瓦99点中縄目叩き27、格子叩き23、箆削り46、不明３で、およそ、１：

１：２の割合となっている。これらは、たとえば、ＦＴ23のカマド構築材料とみられるものでは、縄目叩き２、格子叩き１、篦削り３となり、他の諸遺構でも混在して出土している。

Ⅲ．丸瓦（図160～163）

出土地点が不明であるが、完形品の１点では、長さ40.8cm、幅11.6cm～18.9cm、弧深は5.3cmを計る。ＦＴ23出土のものでは、長さは不明だが、幅が9.1cm～12cm以上、11.2cm～13.8cm以上を計るものがあり、ほぼ同規模のものといえる。丸瓦は20点あるが、このうちＥ区出土のものの中に玉縁を持つものがある。玉縁と認められるものはこの１点のみで、他は行基葺式のものであろう。

Ⅳ．軒丸瓦（図164）

軒丸瓦は、複弁八葉となるものがＡ～Ｃの３種類、複弁六葉のものがＤ類の１種類、単弁八葉のものがＥ・Ｆの２類、その他に、Ａ～Ｆとは異なるが、詳細不明のものＧ類がある。溝状遺構等遺構からは、Ａ類がＥＭ７、Ｂ類がＤＭ１及びＥM14、Ｅ類がＤＭ１、Ｆ類がＣM20及びＤＭ１から出土している。

Ａ類　　直径は復原して19.8cmを計る。中房は直径 9.1cmで圏線をめぐらせ、１＋６＋12の蓮珠を配する。蓮珠には圏線がない。中房は蓮弁より高い。蓮弁は複弁の八葉で、間弁が弁高より高く、弁の外側で連続している。弁長 3.3cm、弁幅3.7cm～4.0cmを計る。外区と内区との間に圏線をめぐらせる。外区の内縁には、復原数で38個の、比較的密に蓮珠を配している。蓮珠の外側にも圏線をめぐらせている。外区外縁は幅、高さとも 1.5cmで、複合した鋸歯文が配されている。色調は黒褐色を呈していて極めて硬質である。丸瓦部との接合法は不明であるが、瓦当裏面及び周縁に縄目の叩き痕がナデ調整で消された様子が観察できる。厚さは外区内縁で 2.1cmを計る。２点ある。

Ｂ類　　外区は不明。中房は直径 7.7cmで圏線をめぐらせる。１＋８＋８の蓮珠が配され、蓮珠には圏線がめぐっている。弁は複弁八葉で、間弁は弁の外側で連続する。弁長 3.4cm、弁幅 3.9cmを計る。瓦当面は扁平ではなく、凸面を形成している。色調は灰白色を呈し、やや軟質である。丸瓦との接合法は、その剝離状況から、瓦当裏面の凹部に丸瓦をさし込む方法を取っているものと考えられる。凹部が瓦当面の内区外端附近にあり、この部分に補強粘土が残っている。外区部分については不明だが、丸瓦の接合位置と他の例による接合方法とを参照するなら、外区内縁は無文となる幅になる。Ｂ類は２点ある。

Ｃ類　　復原で直径17.6cmとなる。中房に圏線をめぐらせ、１＋６＋12の蓮珠を配している。直径は 7.3cmを計る。弁は、弁長3.2cm～3.4cm、弁幅は3.8cm～3.4cmで、八葉を配する。間弁はＡ・Ｂ類と異なり、独立している。間弁は弁高より高い。外区との間に界線をめぐらせ、外区内縁に蓮珠を密に配している。外区外縁は無文で、幅 0.5cm、高さ 0.6cmと低い。その高さは間弁と等しく、中房の蓮珠より低い。灰白色を呈し、やや軟質である。瓦当裏面には布目が残る。布目は、丸瓦部側底面直下には及ばず、この部分は篦切り痕が認められる。いわゆる一本造りの技法であるが、丸瓦部は模骨を全周するのではなく、半周よりやや多めに巻き、丸瓦部側低面の不要部分を一部切りとったと考えられる状況にある。大津市榿木原瓦窯跡跡出土瓦では、この手法に近いものは方形瓦であるサソリ文のものに認められる。軒丸瓦では、模骨に巻く丸瓦部の粘土は全周し、下半分の不要部分を切り取っているため、切り取り痕は下半分の周縁に残ることになる。Ｃ類では、瓦当面裏の布目は、下半分の周縁にも残っており、模骨は瓦当裏面の中央ではなく、下端に合せた下寄りに当てられ、その空隙のできた上半部に丸瓦部の粘土を半周させていると考えられる。瓦当の厚味は外区内縁で 3.3cmと厚く、瓦当裏面と模骨との間にさらに粘土を加えている様子が知れる。このタイプは１点のみである。

D類　　A～C類と異なり、複弁六葉のものである。瓦当面の直径は17.4cmで規模は大差ないが、中房の直径が 4.8cmと小さく、蓮珠も１＋４と少ない。弁は三重線で表現し、弁長4.2cm～4.6cmであるのに対し、弁幅が4.2cm～5cmと広くなっている。複弁の二つの子葉の間には稜がはいらない。外区とは圏線で区別されるが、内縁はなく、無文の外縁のみとなっている。外区、内縁とも扁平で極めて肉の薄いもので、外縁の高さ 0.2cm、内縁で 0.3cmを計るにすぎない。瓦当の厚さは２cmである。丸瓦部は瓦当に喰い込ませている。D類も１点のみ出土している。

E類　　次のF類とともに単弁のものであるが、この種のものは１点のみ出土している。瓦当面の直径は、復原で16cm、中房は直径 4.3cmを計る。中房の中央には、直径 2.7cm、高さ１cmの半球状の大きな蓮珠を置き、この周囲に15個の小さな蓮珠をめぐらせている。中央の大きな蓮珠は十字を刻んで４等分され、十字の交点に１個、四等分された各所に１個ずつの蓮珠がみられる。蓮弁は八葉で、弁長 3.6cm、弁幅2.6cm、弁高0.5cm～0.6cmで、高い子葉を持つ。界線で外区と区別し、外区内縁に密に蓮珠をめぐらせる。内縁の幅は 0.9cmと狭い。外縁には圏線がめぐり、幅 0.8cm、高さ 0.3cmの規模となっている。丸瓦部は瓦当に喰い込ませ、複弁のものにくらべてやや中央寄りにくる。黒灰色を呈し、硬質である。

F類　　E類と全ったくモチーフは同じであるが、瓦当面の直径が18.2cmと大きく、中房も 5.5cmでやはり大きい。しかし、中央の規模や形態、蓮弁の大きさ等E類と同様である。瓦当面や中房の大きさとともにE類と異なる点は、外区内縁が幅 1.3cmと広く、蓮珠が３cmと広い間隔を取って配されている点にある。外区外縁は幅 0.9cm、高さ 0.5cmで、やはり圏線がめぐる。暗灰色を呈し、E類に比べて軟質である。厚味は21cmで、E類より薄い。丸瓦部の接合法はE類と同じである。F類の出土量は最も多く、５点を数える。

G類　　詳細は不明だが、外区内縁に蓮珠を持たない複弁のものと思われる。

以上、軒丸瓦は、複弁八葉のものが３～４種、六葉のものが１種、単弁八葉のものが２種で、計３類６～７種のものが出土している。A・C類は川原寺系の系譜をひくものであろうが、A類の外区外縁の鋸歯文は複合したものとなっており、C類では無文となっている。中房の蓮珠も１＋６＋12と変化している。B類は川原寺系のものと思われるが、中房の蓮珠の数が１＋８＋８と変化している。D類は特異なモチーフで、びわ町満願寺遺跡出土の複弁六葉、同町下八木出土の複弁四葉のものと共通したモチーフといえる。単弁のE・F類は、井口遺跡出土瓦を特徴づけるもので、特異な中房を見るものは、秦荘町蚊野・野々目遺跡、湖東町小八木遺跡等、湖東地方にその分布を見る。湖北地方の単弁の軒丸瓦は、白鳳期に入る米原町三大寺遺跡、長浜市大東遺跡等で出土しているが、これらは外区外縁に三重圏をめぐらせるものである。

V．軒平瓦（図164）

軒平瓦は四重弧文のものと※印の連続スタンプを押した特異なものとの２種類がある。

a類　　四重弧文で、いずれも段顎形式である。瓦当面の幅と顎の幅が等しくなっている中顎のものである。

b類　　※印を７回連続的にスタンプした特異なものである。スタンプは縦 3.5cm、横４cmのものである。無顎で、両側縁には桶巻造りを思わせる糸切痕が見られる。

以上が出土した瓦類である。他遺跡で類例を見ることのできるものもあるが、その時期を決定し得るものではない。軒丸瓦で見ると、白鳳期に位置するものより、形式的に変化したものである。湖北地方の白鳳期としてほぼ確実な三大寺、大東両遺跡出土瓦と比較するなら、丸瓦に玉縁を持つものが１点で

あるが、出土していること、平瓦の叩き痕に縄目のものがあり、斜格子のものと１対１の割合いになっていること、単弁系のもので外区外縁に３重圏がみられないこと、複弁系のものが出土していること等々の相違がある。

次に、瓦の出土した遺構での伴出土器についてみてみると、まず、カマドの構築材としたＦＴ23は第８期の住居跡である。住居跡の床面から瓦が出土しているＡＴ３は第７期に位置付けたものである。ＡＭ１からは、その下層から出土しているが、ＡＭ１下層は第４期から第11期までの土器類が出土している。ＢＭ１は、第２期とさかのぼるものもあるが、他はすべて第４期～８期の間に納まる土器類である。ＤＭ１は旧河道であるが、ここでは比較的多量の軒瓦を出土しているが、同時に、第２期～第８期の土器類も出土する。ＥＭ５は瓦、土器、礫石等を多量に含んだ溝状遺構で、第８期の土器類が出土している。ＦＭ５では、第４～８期の土器類がある。以上の伴出土器類で見ると、第９期以降の土器類をみることが少なく、第８期のものを最も新しいものとするものが多い。特に、ＦＴ23からは廃材としての瓦を利用したと考えられ、従って、出土瓦は少なくとも第８期には廃棄されていたものと考えることができる。形式的に白鳳期にさかのぼらないものと考えれば、瓦類は第６・７期におくことができる。すなわち、８世紀の第１四半期頃にその年代を置くことが可能である。

第六項　鉄製品（図151）

鉄製品として刀子、鉄釘、鉄斧、鍬先、紡錘車、鉄鏃、その他がある。

ＡＴ３（２）、ＦＴ６（４）より刀子が出土している。(2)は両端を欠くが断面三角形を呈し、残存長6.4cmをはかる。(4)は完形品で長さ16.2cm（刃部長10.5cm）、刃部最大幅 1.9cmをはかる。刃部断面は三角形、柄部は方形をなすが、柄部には木質が残り、刃部と柄部との境には留め金具が残る。

鉄釘はＡＴ３（５）、ＦＴ６（７）、柏原北Ｃ（６）より出土している。(5)は、残存長14.1cm、幅 1.0cm～ 0.8cmをはかり断面は方形を呈し、頭部はひとまわり大きい。(6)は頭部を欠くが、断面方形で、先端が尖る。残存長は15.7cmである。

住居跡に伴うものではないが、鉄斧（12）が出土した。鉄板の上方をたたいて薄くのばし、左右から折りかえして柄をさしこむ袋部をもつ袋斧であり、長さ11.0cm、袋部幅 4.0m、最大刃部幅 5.7cmをはかる。刃先がやや広くなっている形状より古墳時代に位置づけられるものかと思われる。

鍬先が柏原北ＣＴ3より出土しているが、いわゆる身・柄が木製でその先端にはめこむ風呂鍬にあたるものである。表面の鉄錆が著しく全体の形状は判然としないが、断面で観察する限り、Ｙ字形を呈す。残存長15.5cm、幅 3.4cmをはかる。

ＡＴ３からは、紡錘車が２点出土した。両点とも円板形のもので径が 3.8cmである。

ＦＴ12内ＢＰ１より鉄鏃が出土している。残存長 6.8cmをはかり、一端は屈曲し、もう一端は尖る。木質が付着している。

その他、用途不明の鉄製品として(8)、(9)、(11) があげられる。(8)はＡ地区包含層からの出土であるが、Ｌ字形をなし、断面は長方形である。また、(11)は復原径10.5cm余りをはかると思われる円板形の鉄製品で、円形の透しが、少くとも5ヶ所に施されていると推定される。なお、縁辺部は斜めにカットされている。

以上、鉄製品の時期的出土量は、古墳時代にさかのぼるものから平安時代に下る時期のものまで万遍なく出土している。

図152		
No.	出土地点	叩き
1	ＡＭ１	Ⅰ
2	ＡＭ１	Ⅰ
3	Ａ	Ⅰ
4	ＡＭ１	Ⅰ
5	ＡＭ１下	Ⅰ
6	ＡＭ１	Ⅰ
7	ＤＭ１	Ⅰ
8	ＤＭ１	Ⅰ
9	ＤＭ１	Ⅰ
10	ＤＭ１	Ⅰ

図153		
No.	出土地点	叩き
1	ＤＰ171	Ⅰ
2	ＤＭ１	Ⅰ
3	ＥＭ２	Ⅰ
4	ＥＭ５	Ⅰ
5	ＥＢＰ７	Ⅰ
6	ＥＭ５	Ⅰ
7	ＥＭ５	Ⅰ
8	ＦＴ23	Ⅰ
9	ＦＴ23	Ⅰ

図154		
No.	出土地点	叩き
1	Ｂ	Ⅰ
2	Ｂ	Ⅰ
3	Ｂ	Ⅰ
4	Ｂ	Ⅰ
5	Ｂ	Ⅰ
6	Ｂ	Ⅰ
7	Ｂ	Ⅰ
8	Ｄ	Ⅰ
9	Ｄ	Ⅰ
10	Ｄ	Ⅰ
11	Ｄ	Ⅰ

図155		
No.	出土地点	叩き
1	Ｄ	Ⅰ
2	Ｅ	Ⅰ
3	Ｅ	Ⅰ
4	Ｅ	Ⅰ
5	Ｅ	Ⅰ
6	Ｅおちこみ Ⅱ	Ⅰ
7	Ｅ	Ⅰ
8	Ｅ	Ⅰ

図156		
No.	出土地点	叩き
1	Ｅ	Ⅰ
2	Ｅ	Ⅱ
3	Ｅ	Ⅱ
4	Ｅおちこみ Ⅲ	Ⅱ
5	Ｅ	Ⅱ
6	Ｅ	Ⅱ
7	Ａ	Ⅰ
8	Ｅ	Ⅱ
9	Ｅ	Ⅱ
10	Ｆ	Ⅱ
11	Ｅ	Ⅱ
12	Ｂ	Ⅱ

図157		
No.	出土地点	叩き
1	ＥＴ23	Ⅰ
2	ＤＭ１	Ⅱ
3	ＤＭ１	Ⅱ
4	ＤＭ１	Ⅱ
5	ＥＭ２	Ⅱ
6	ＥＭ５	Ⅱ
7	ＥＭ５	Ⅱ
8	ＥＭ５	Ⅱ
9	ＥＭ５	Ⅱ
10	ＥＭ３	Ⅱ
11	ＥＭ５	Ⅱ

図158		
No.	出土地点	叩き
1	ＦＴ23	Ⅱ
2	ＦＴ23	Ⅱ
3	ＦＭ５	Ⅱ
4	ＦＴ23	Ⅲ
5	ＥＢＰ６	Ⅲ
6	ＤＭ１	Ⅲ
7	ＥＰ32	Ⅲ

図159		
No.	出土地点	叩き
1	Ｅ	Ⅲ
2	Ｅ	Ⅲ
3	Ｅ	Ⅲ
4	Ｅ	Ⅲ
5	Ｅ	Ⅲ
6	Ｅ	Ⅲ
7	ＥＭ12	Ⅲ
8	Ｅ	Ⅲ
9	Ｅ	Ⅲ
10	Ｅ	Ⅲ
11	Ｅ	Ⅱ
12	Ｅ	Ⅲ
13	Ｅ	Ⅲ
14	Ｅおちこみ Ⅳ	Ⅲ

表17．瓦類出土地点一覧表（Ⅰ：叩き痕を消すもの、Ⅱ：縄目叩き、Ⅲ：格子目叩き）

第七項　その他遺物（図151）

ＢＴ３、Ｅ地区落ち込みよりフイゴの羽口（14）が出土している。羽口は住居跡から鉄滓とともに出土することが多く、集落内での鍛治場の存在が想定される。また、同じ落ち込みよりルツボの破片（13）も出土しているが、だ円形を呈する埦形のもので、口縁部に片口状のそそぎ口をつけるものと思われる。胎土には砂・小石を多く含み、片口部内面には、鉄の溶解物（黒褐色）が付着する。羽口ともども鍛治場の存在を飽沸させる。

その他では、Ｃ地区で遺構検出過程で、動物文様のある石鋳帯が出土している。縦 3.5cm、横 3.9cm、厚さ 0.8cmで、裏面の４コーナーに２個一対の貫通した小孔が穿たれている。表面レリーフは獅子かと思われる動物文様を浮き彫りし、毛や顔、足等を線刻して表現するものである。材質は軟玉らしく、中国の遼寧省葉茂台の墳墓から類品が出土しているといわれる。

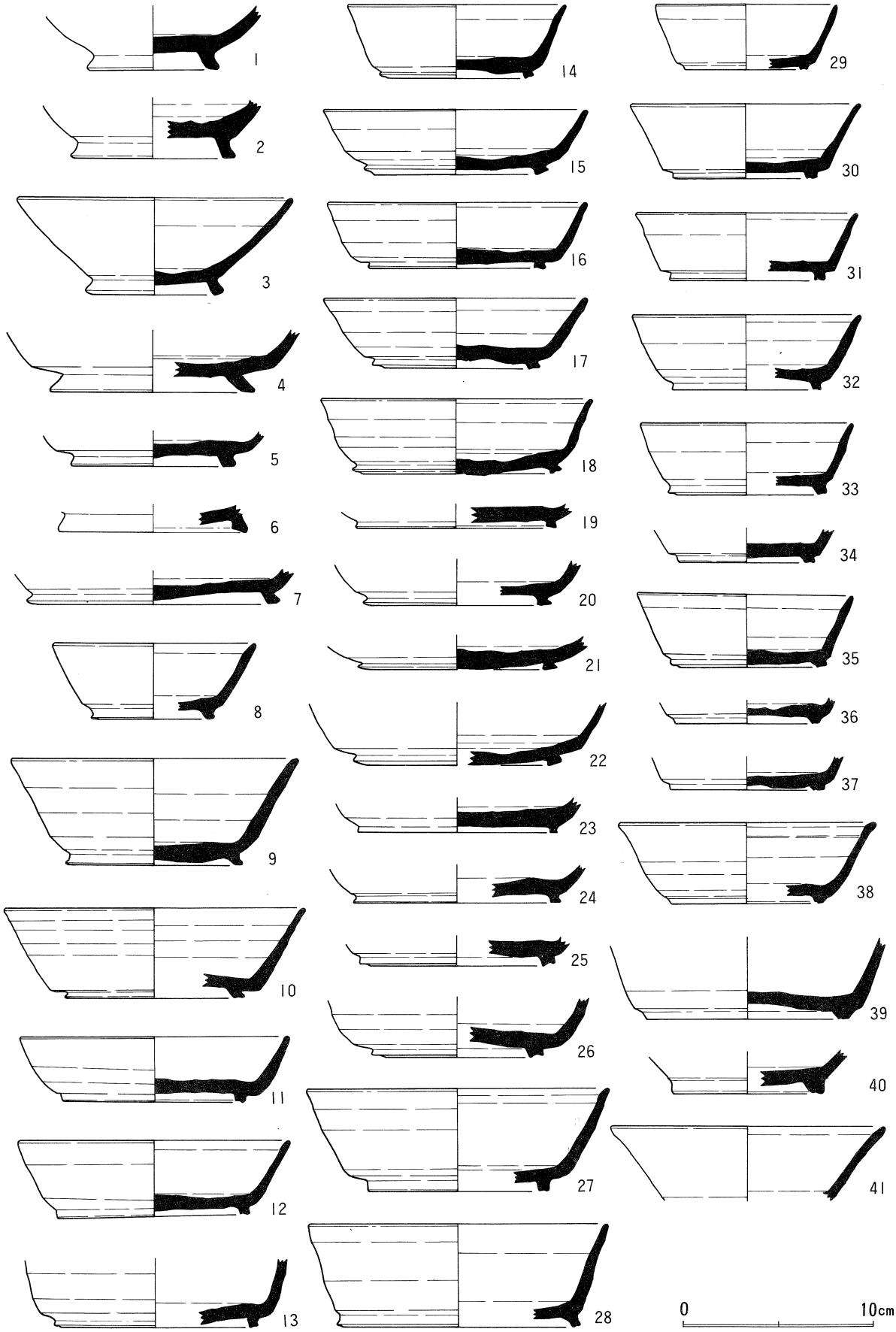


図136．須恵器坏A実測図(1)

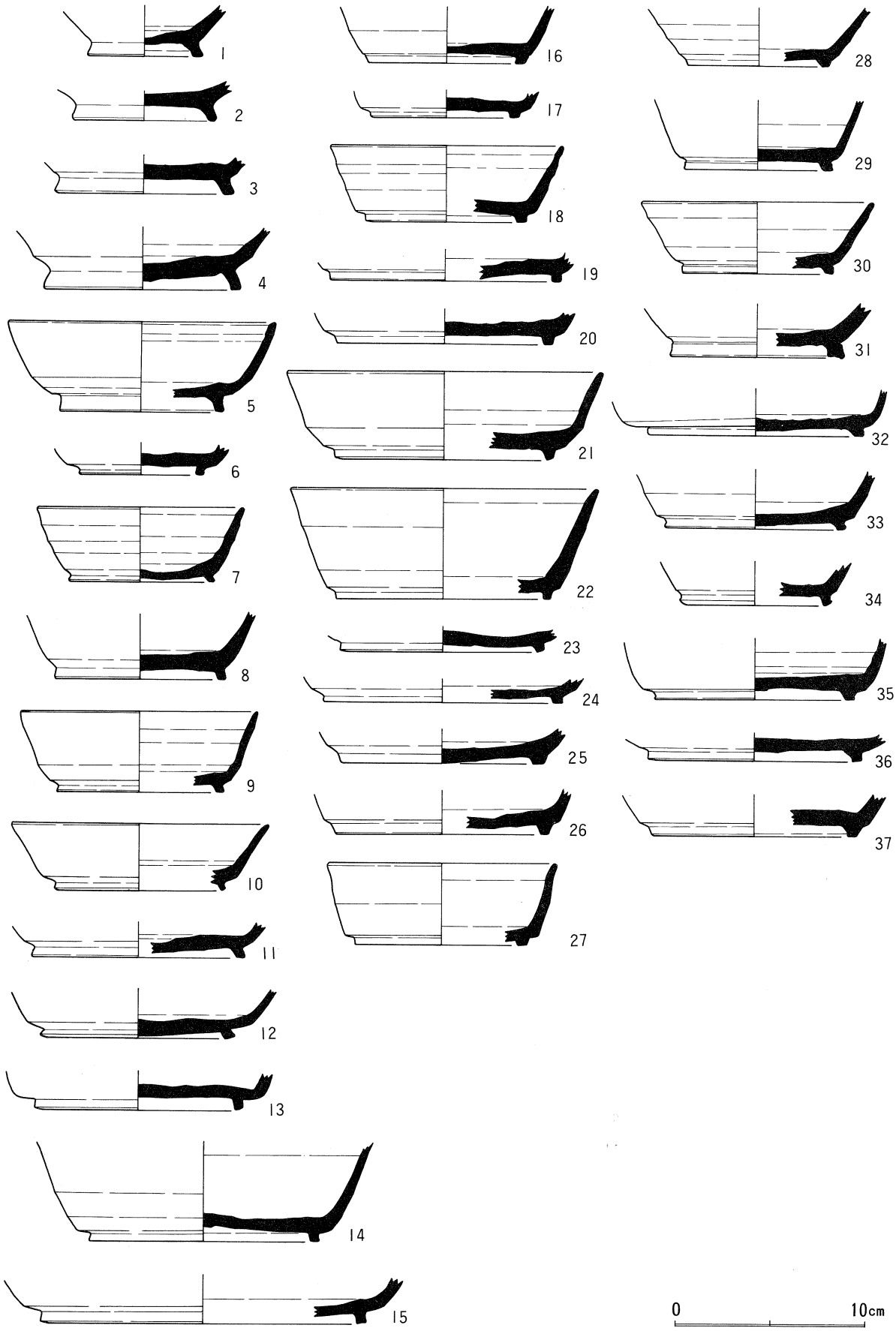


図137．須恵器坏A実測図(2)

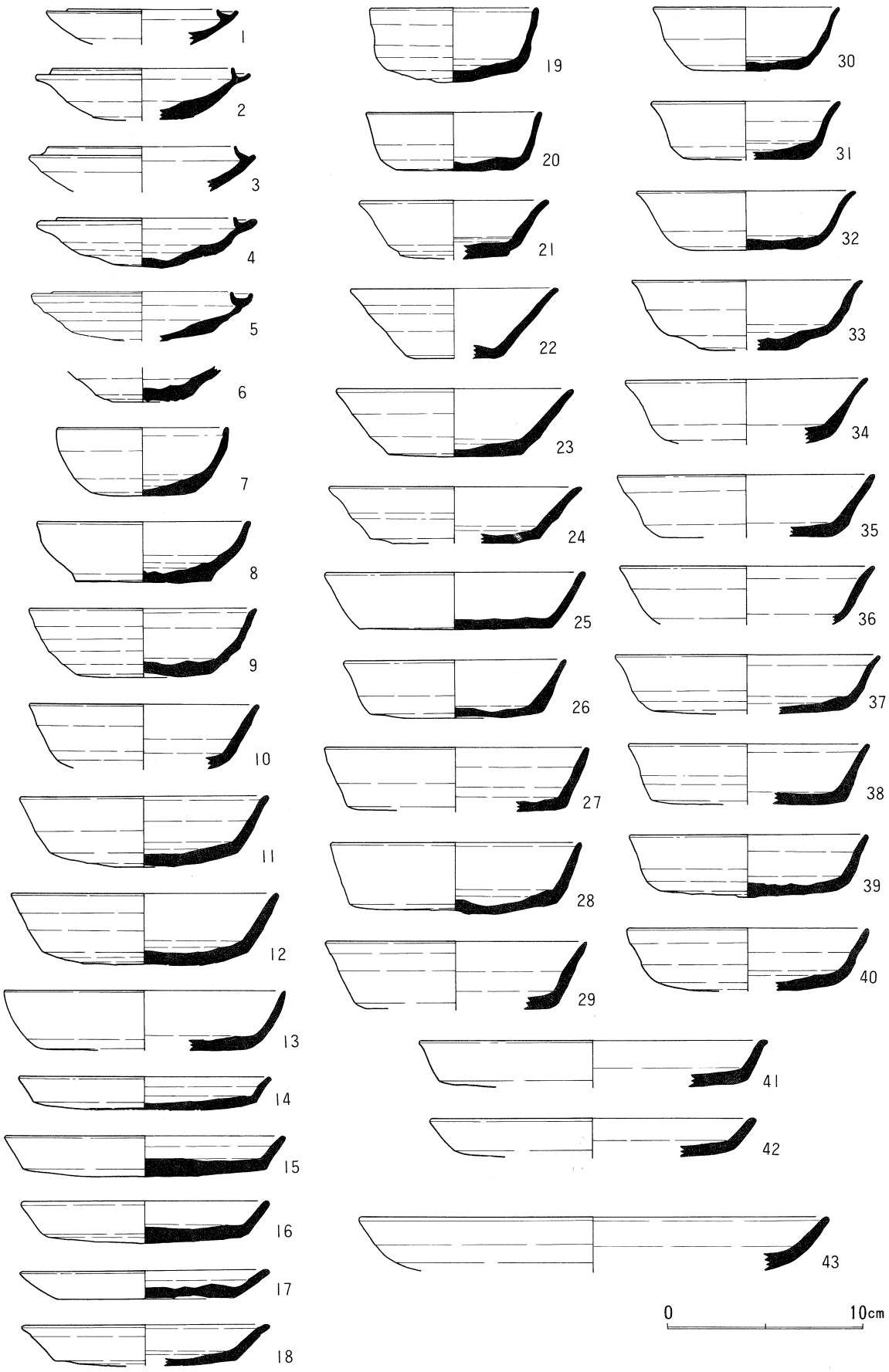


図138．須恵器坏B・C・皿実測図

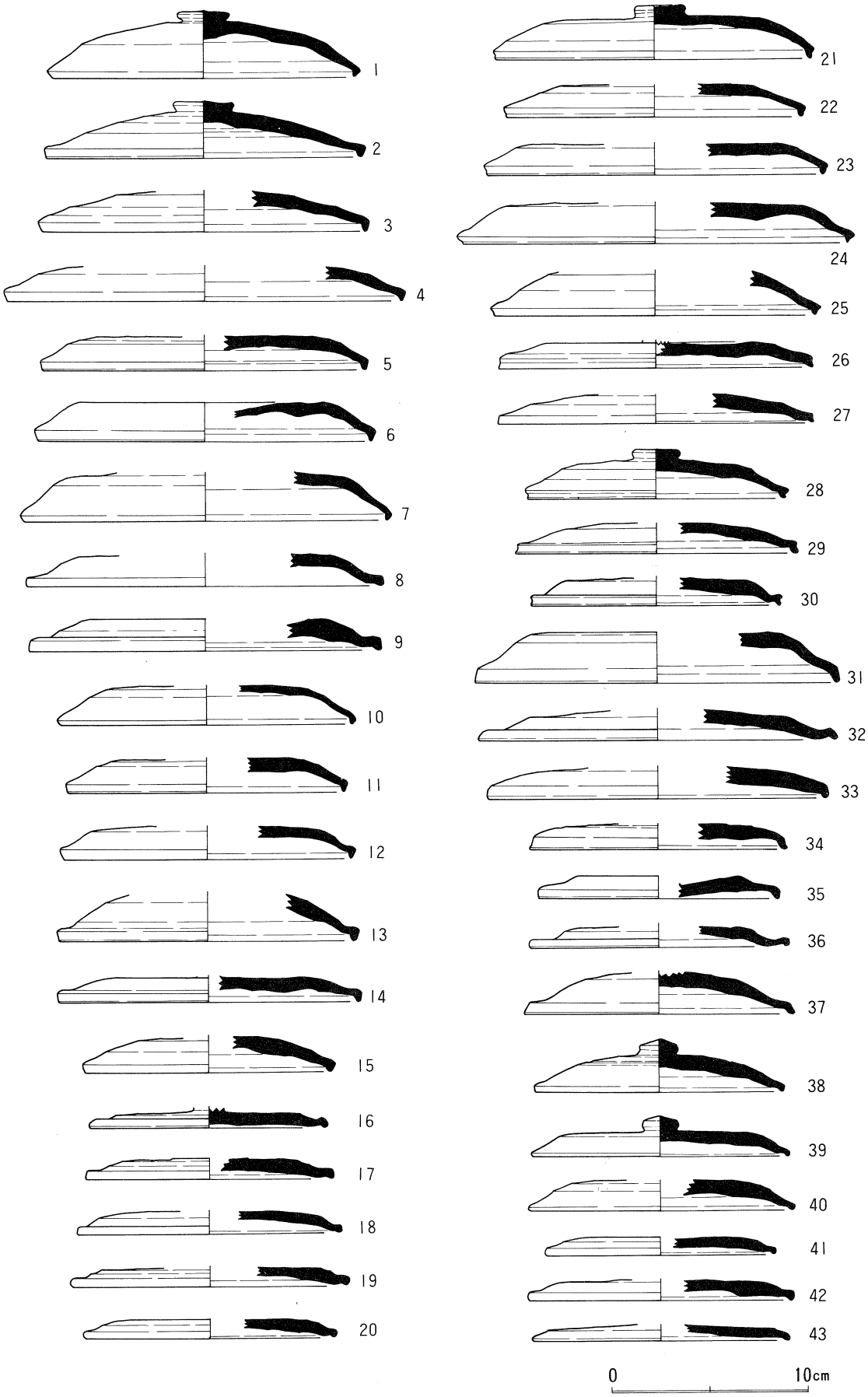


図139．須恵器蓋Ｃ実測図

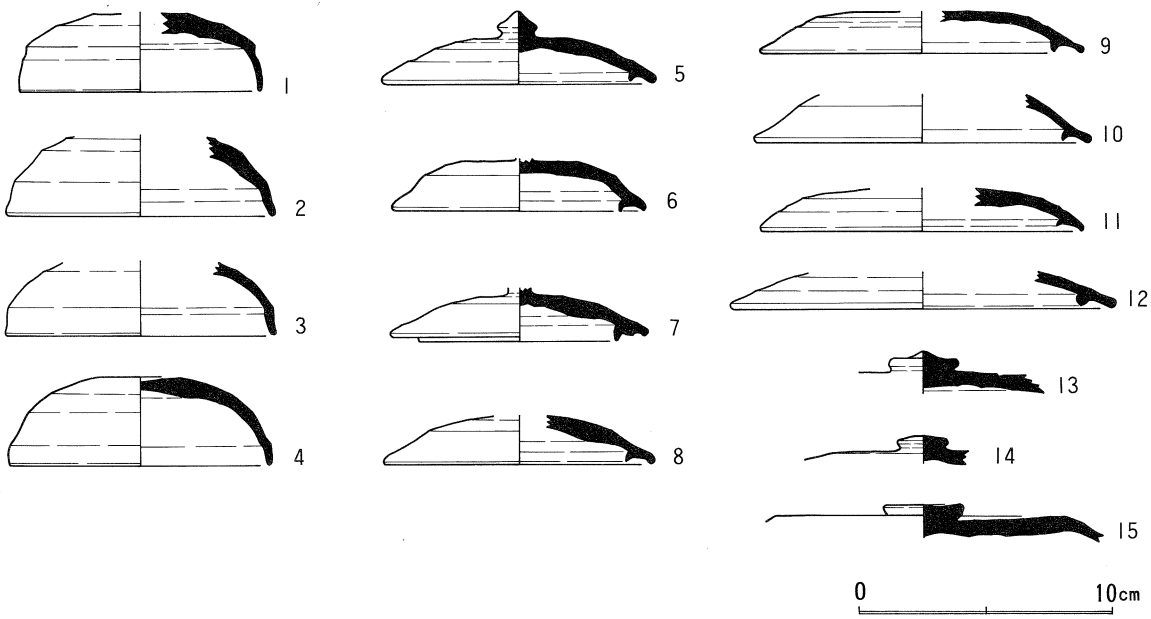


図140．須恵器蓋Ａ．Ｂ実測図

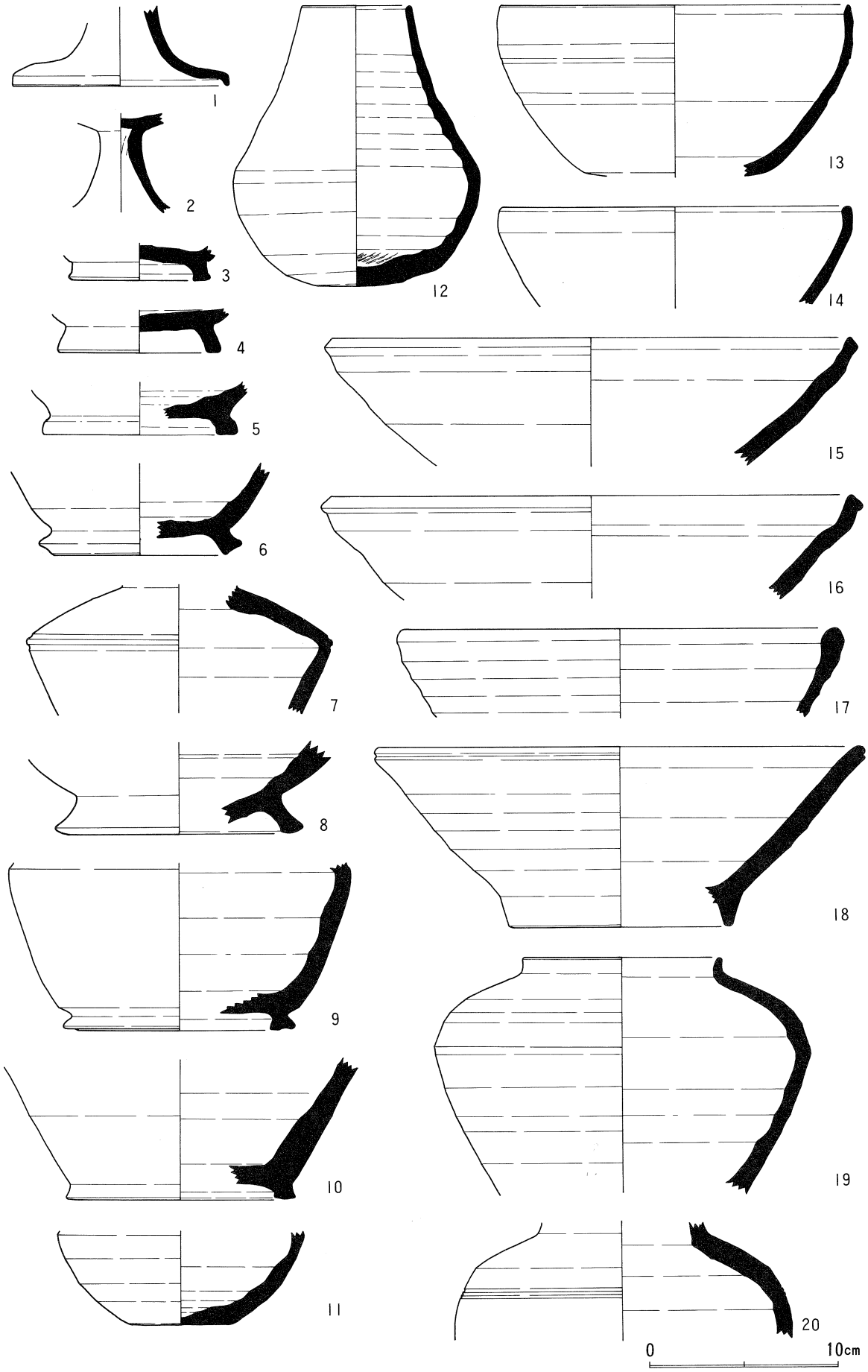


図141．須恵器高坏．壺．鉢等実測図

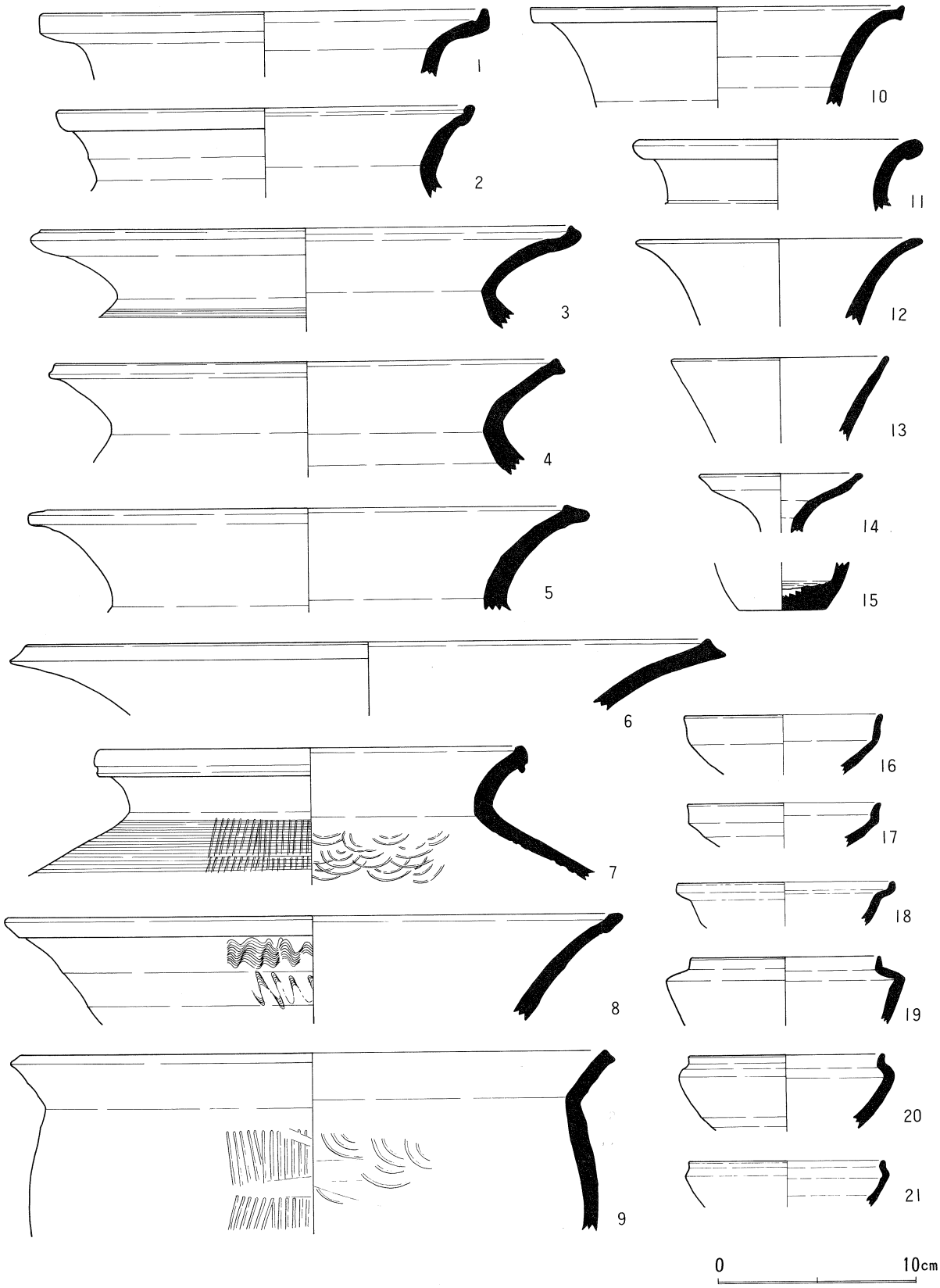


図142．須恵器坏D～F．壺．甕等実測図

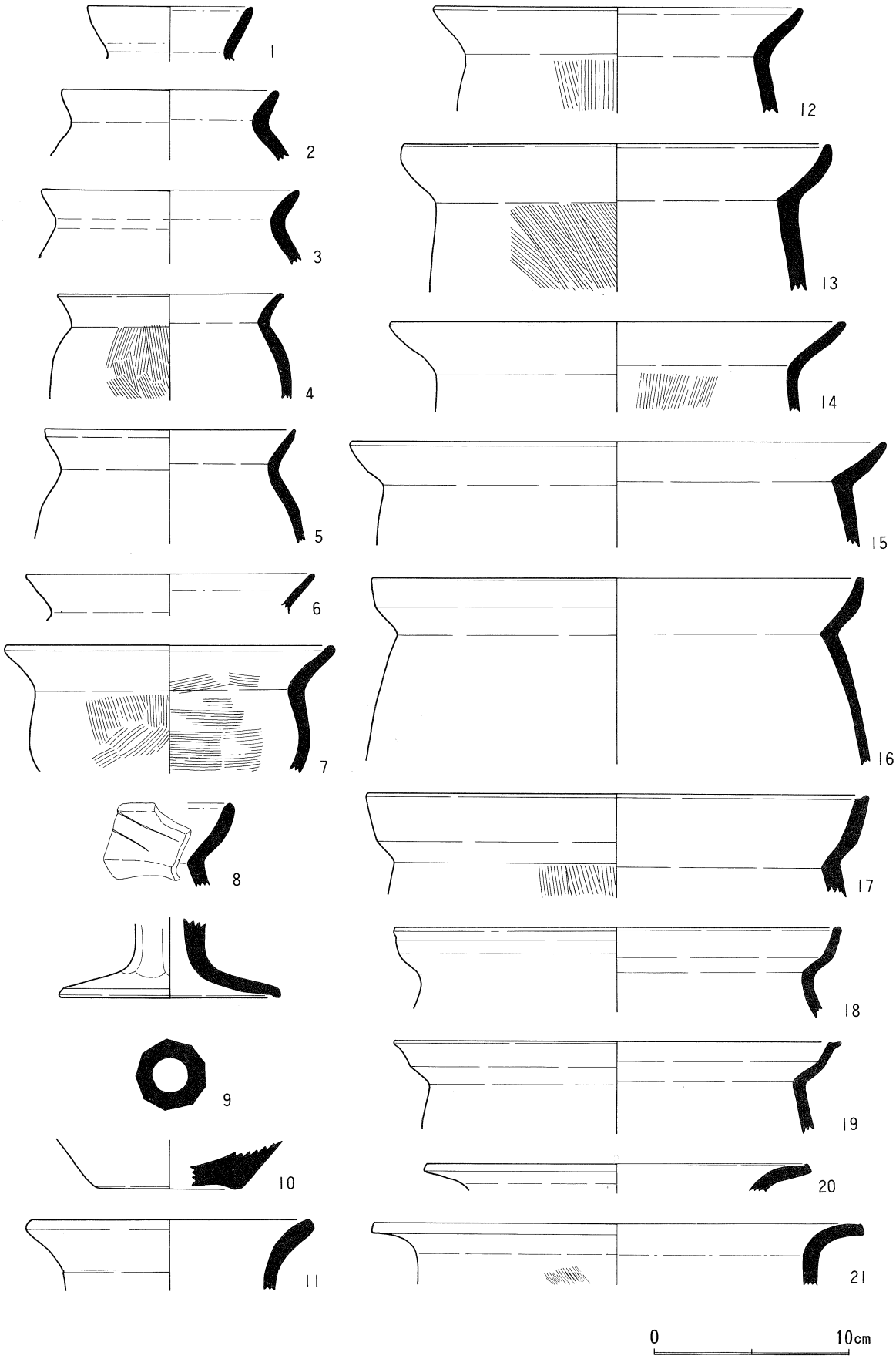


図143．土師器甕A．C．高坏等実測図

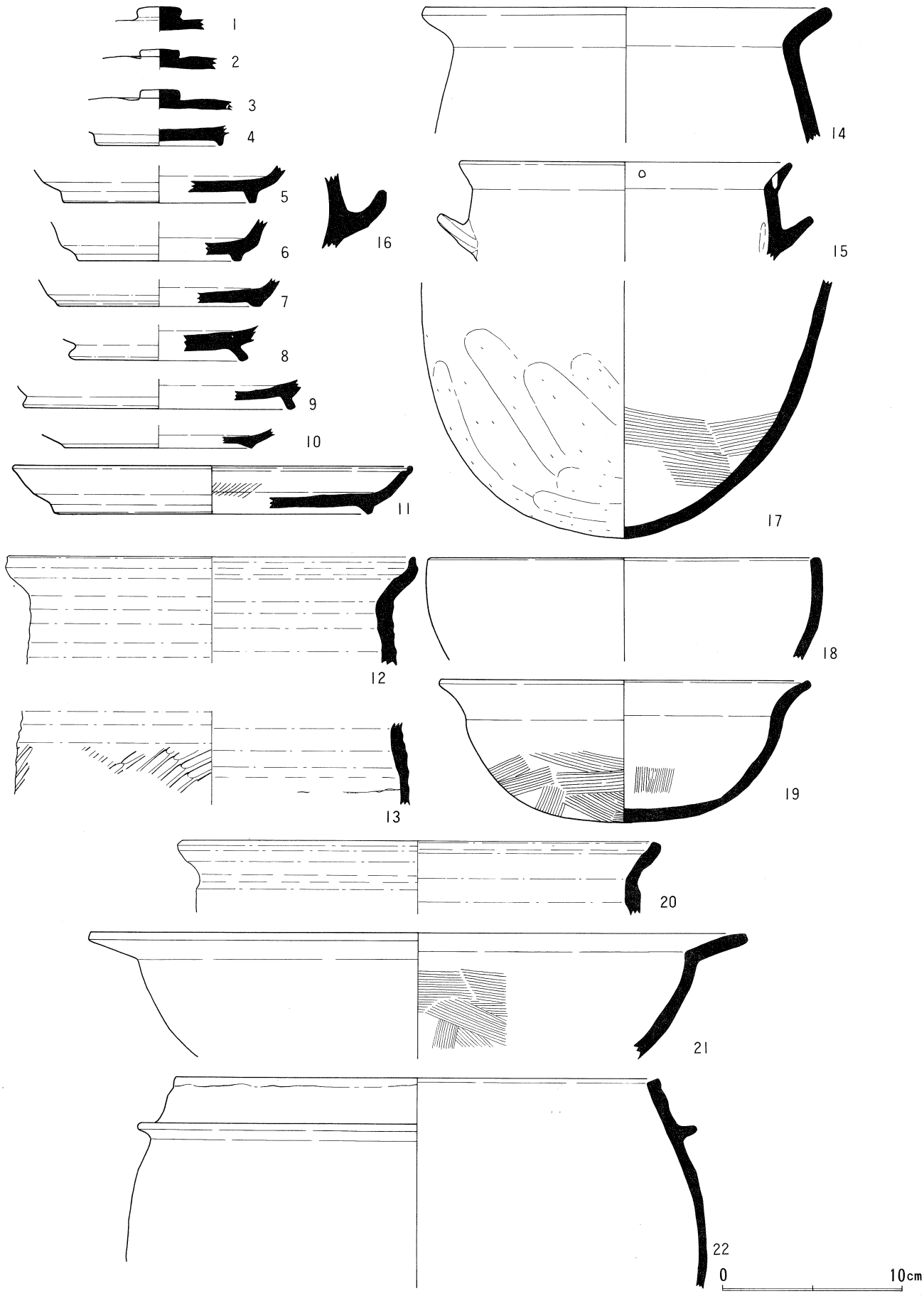


図144．土師器蓋．坏．鉢．鍋．甕B．羽釜等実測図

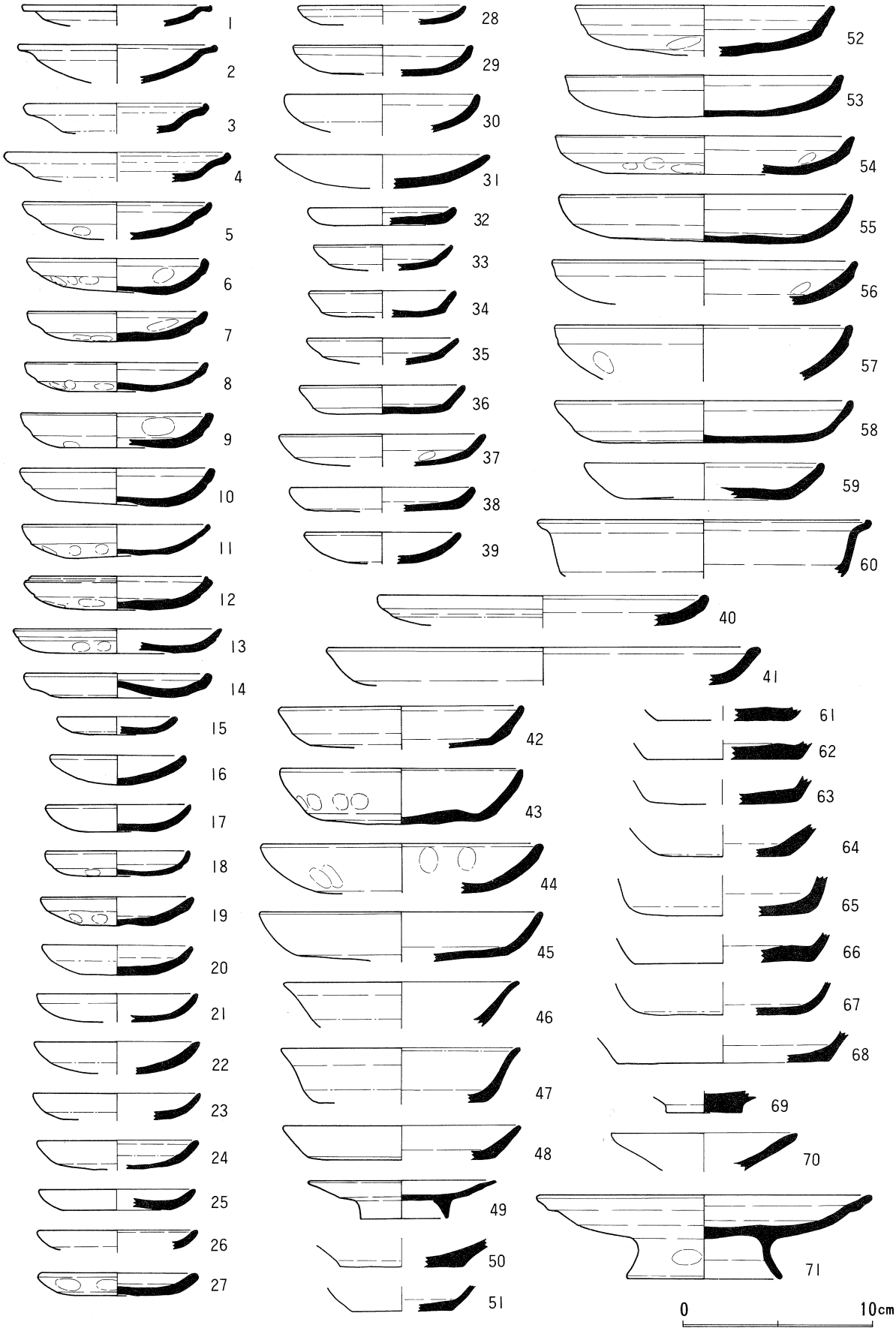


図145．土師器皿等実測図

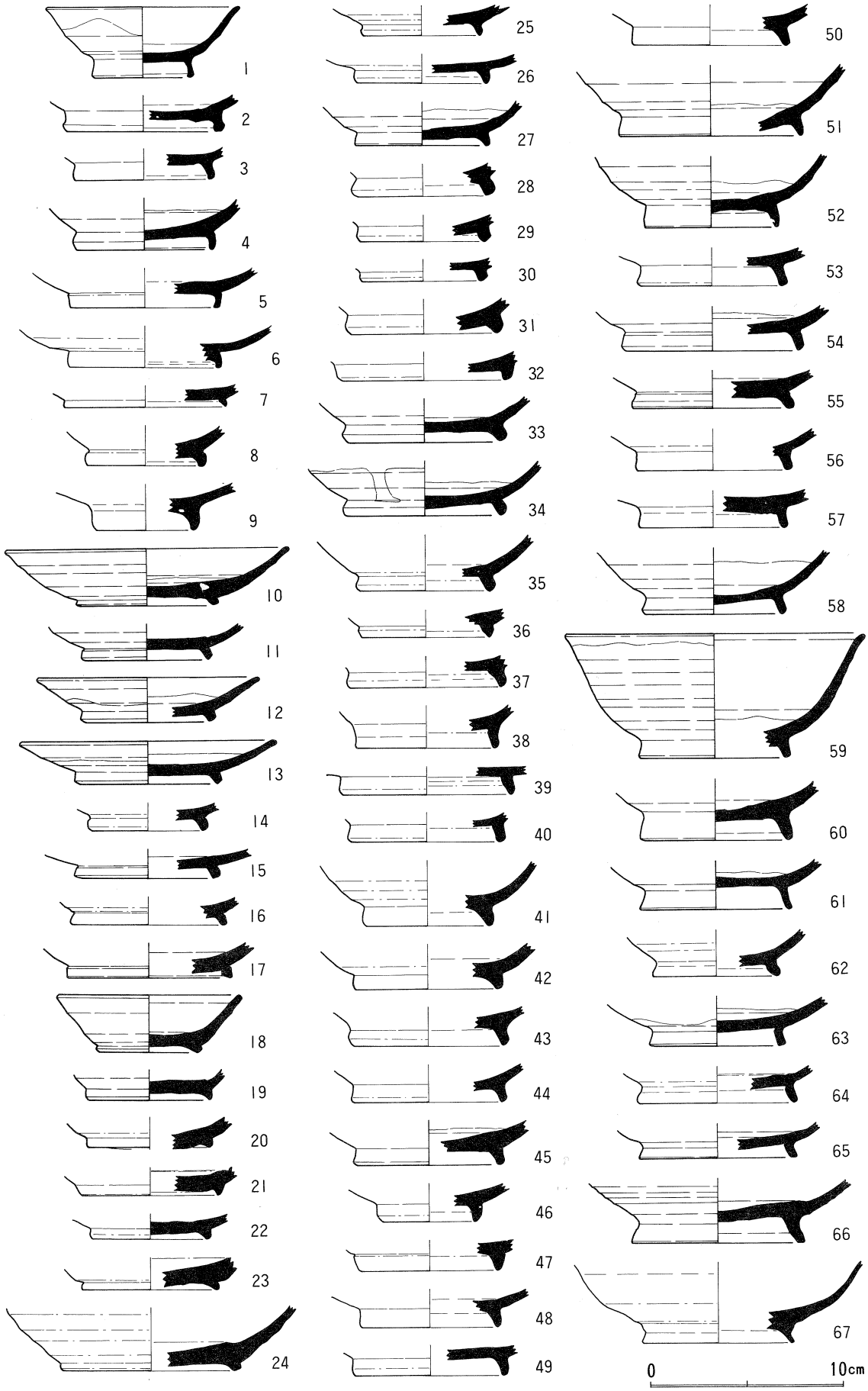


図146．灰釉陶器等実測図(1)

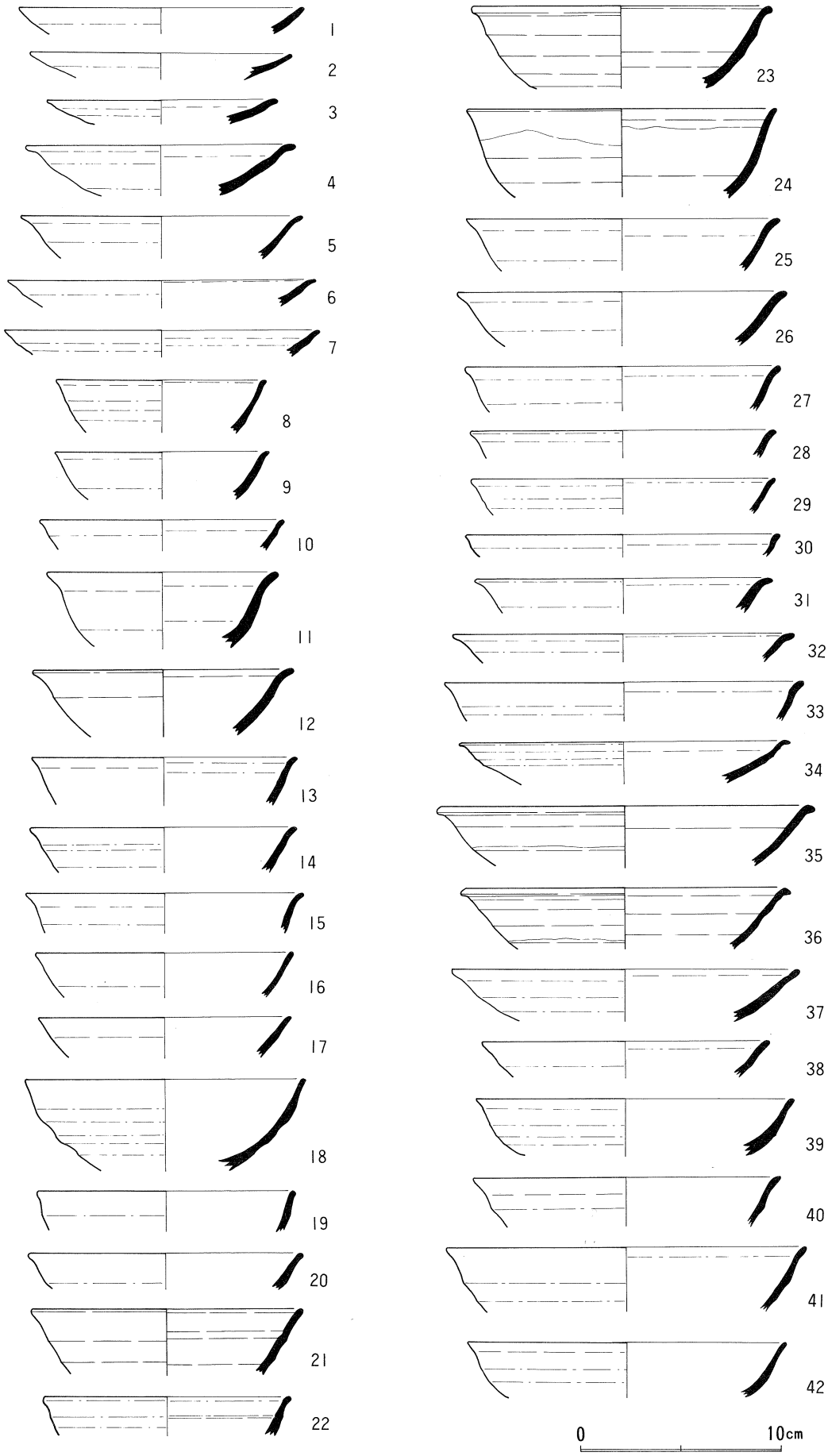


図147．灰釉陶器等実測図(2)

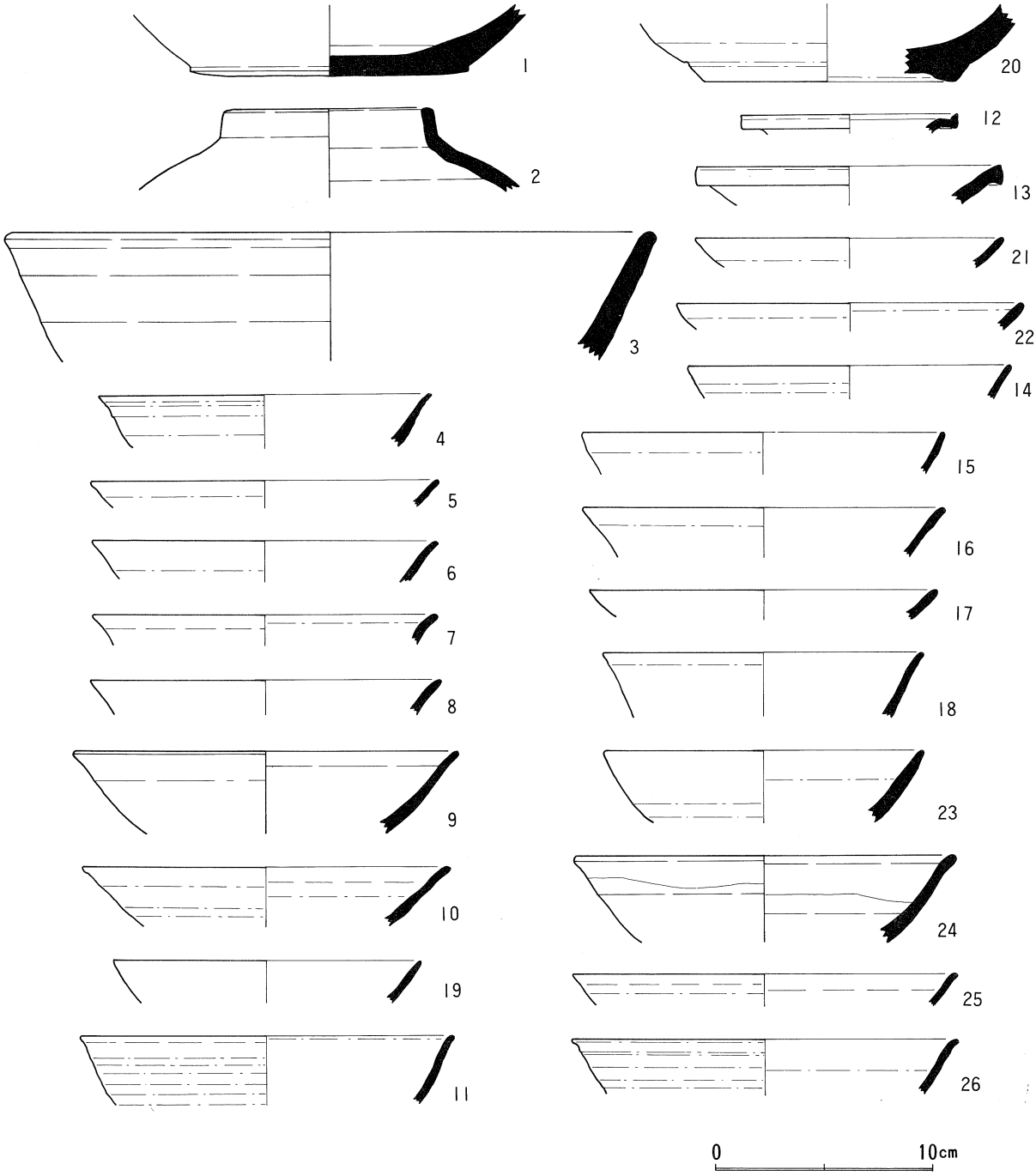


図148．須恵器、灰釉陶器等実測図

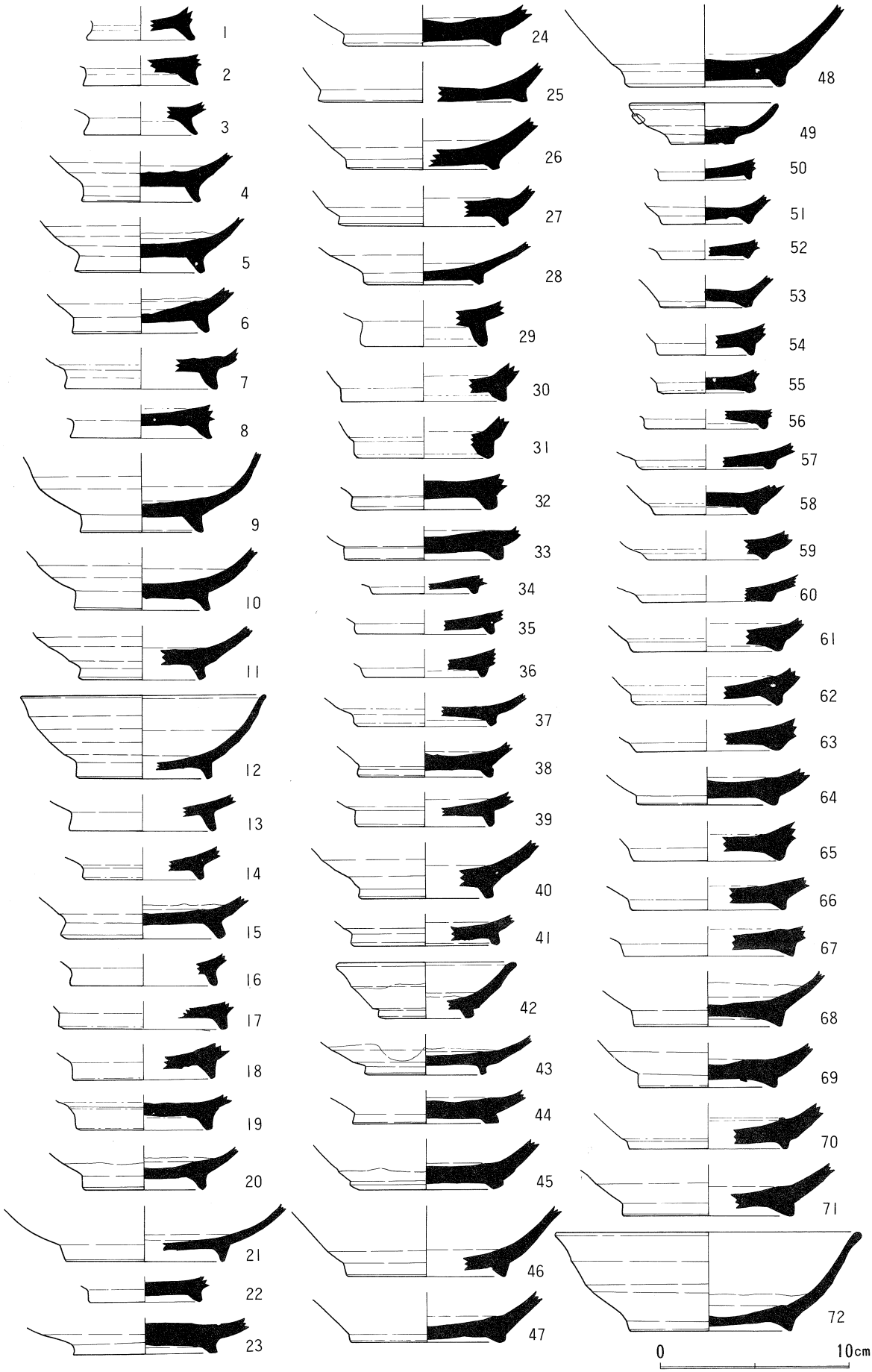


図149．山茶埦等実測図

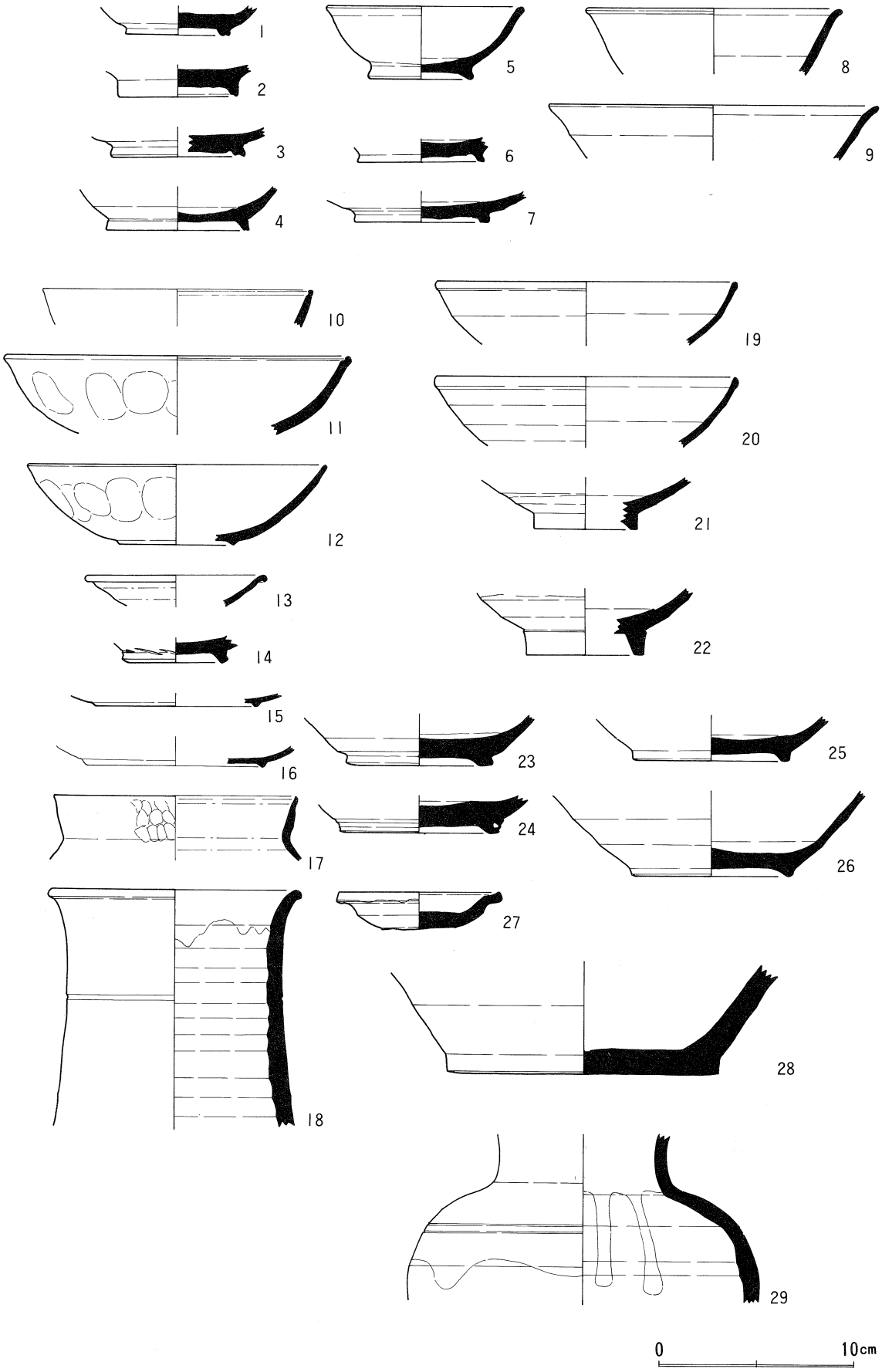


図150．緑釉陶器(１～９)．黒色土器(10～17)．白磁(19～22)．その他陶器実測図

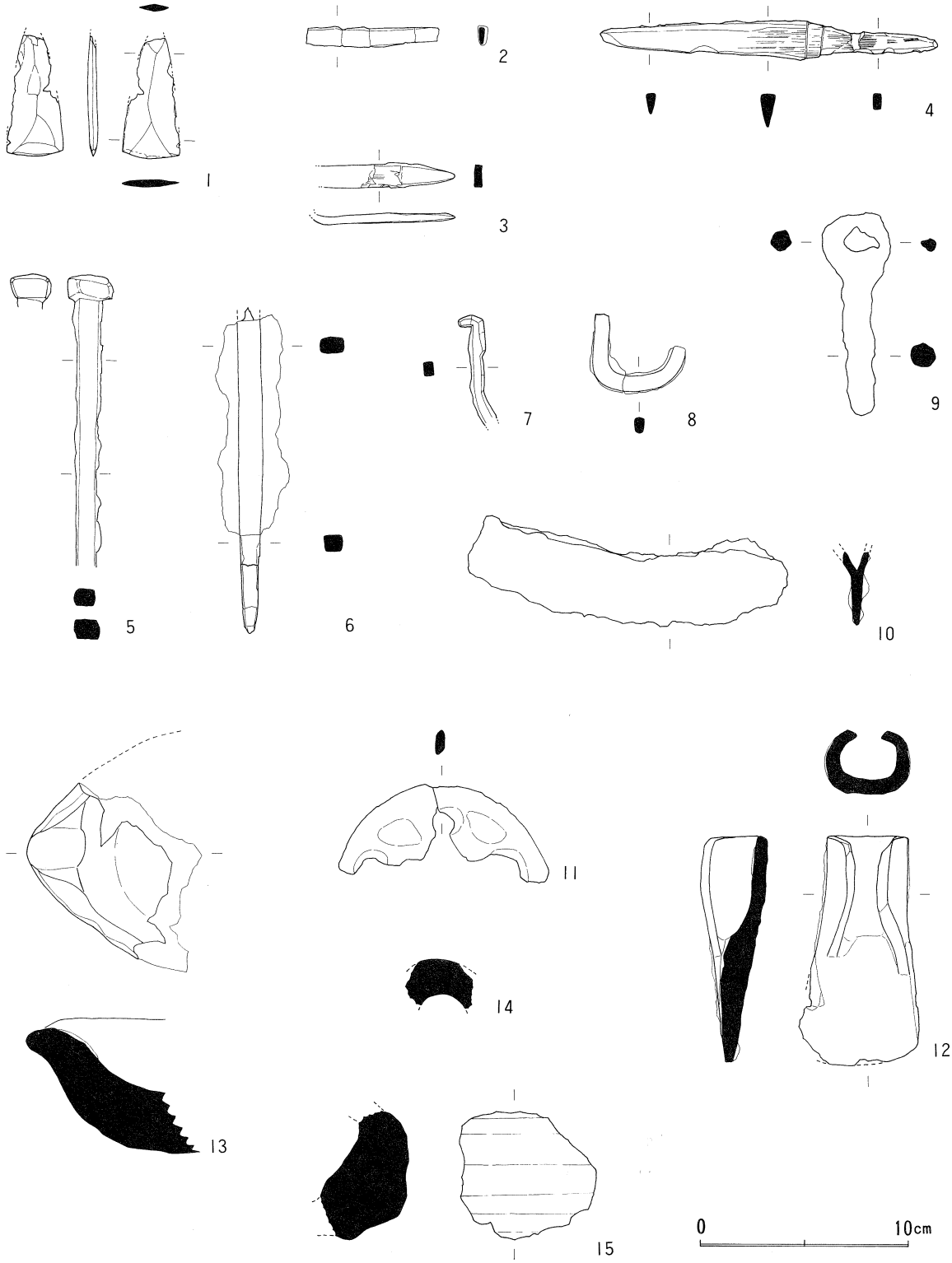


図151．鉄製品(2～12)、ルツボ(13)、羽口(14)、石鏃(1)、不明土製品(15)実測図

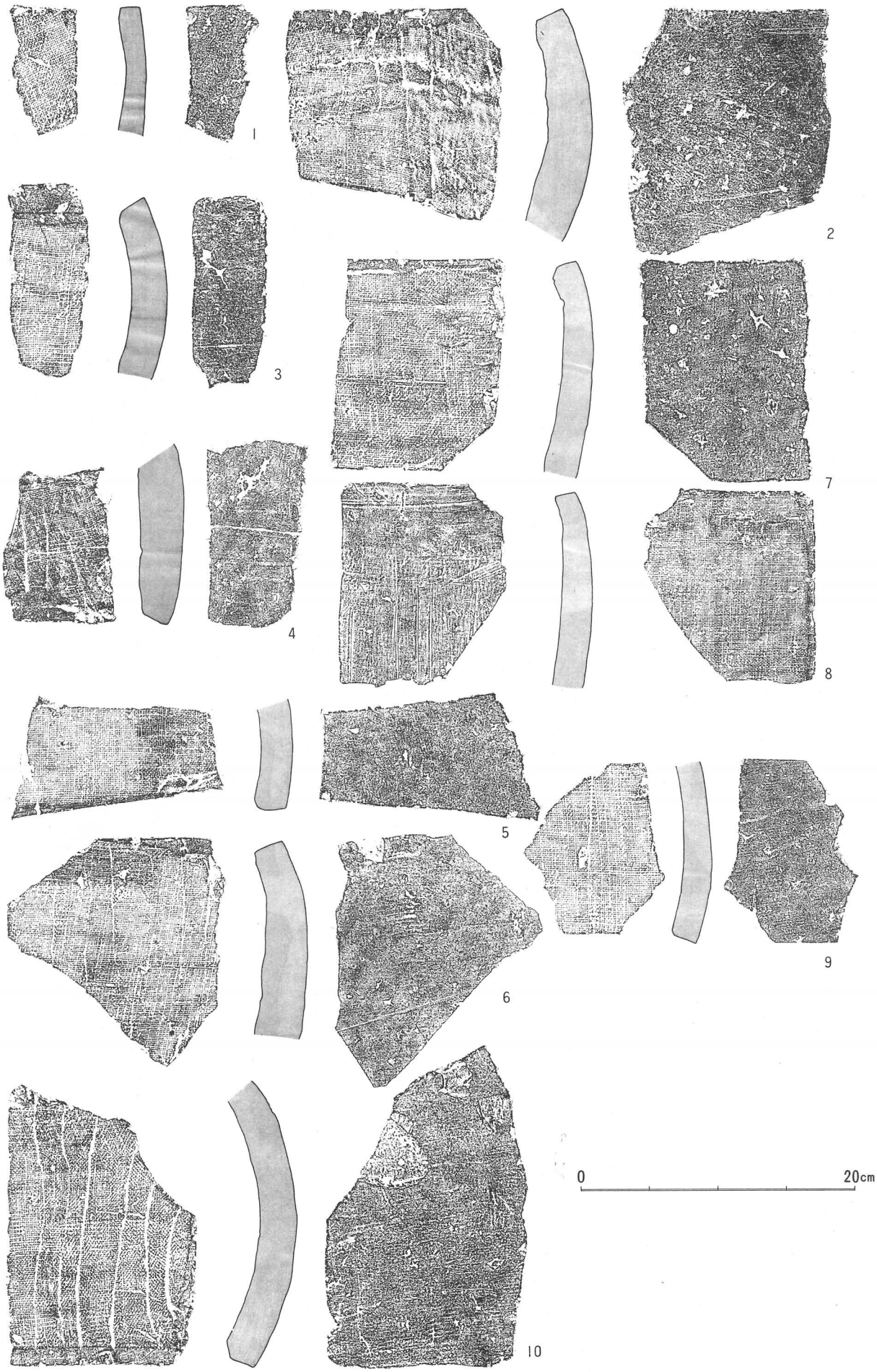


図152．平瓦拓影(1)

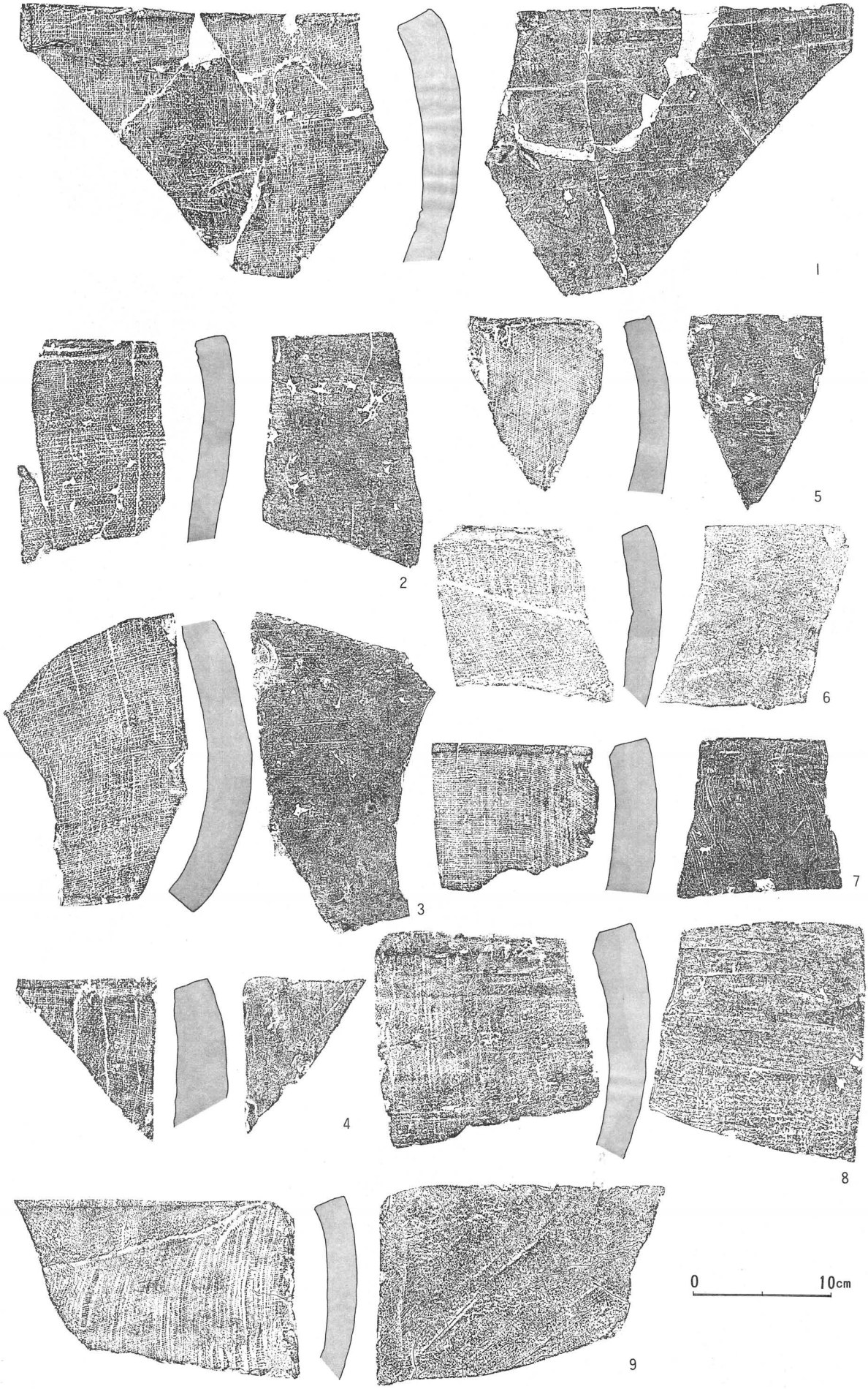


図153．平瓦拓影(2)

図154．平瓦拓影(3)

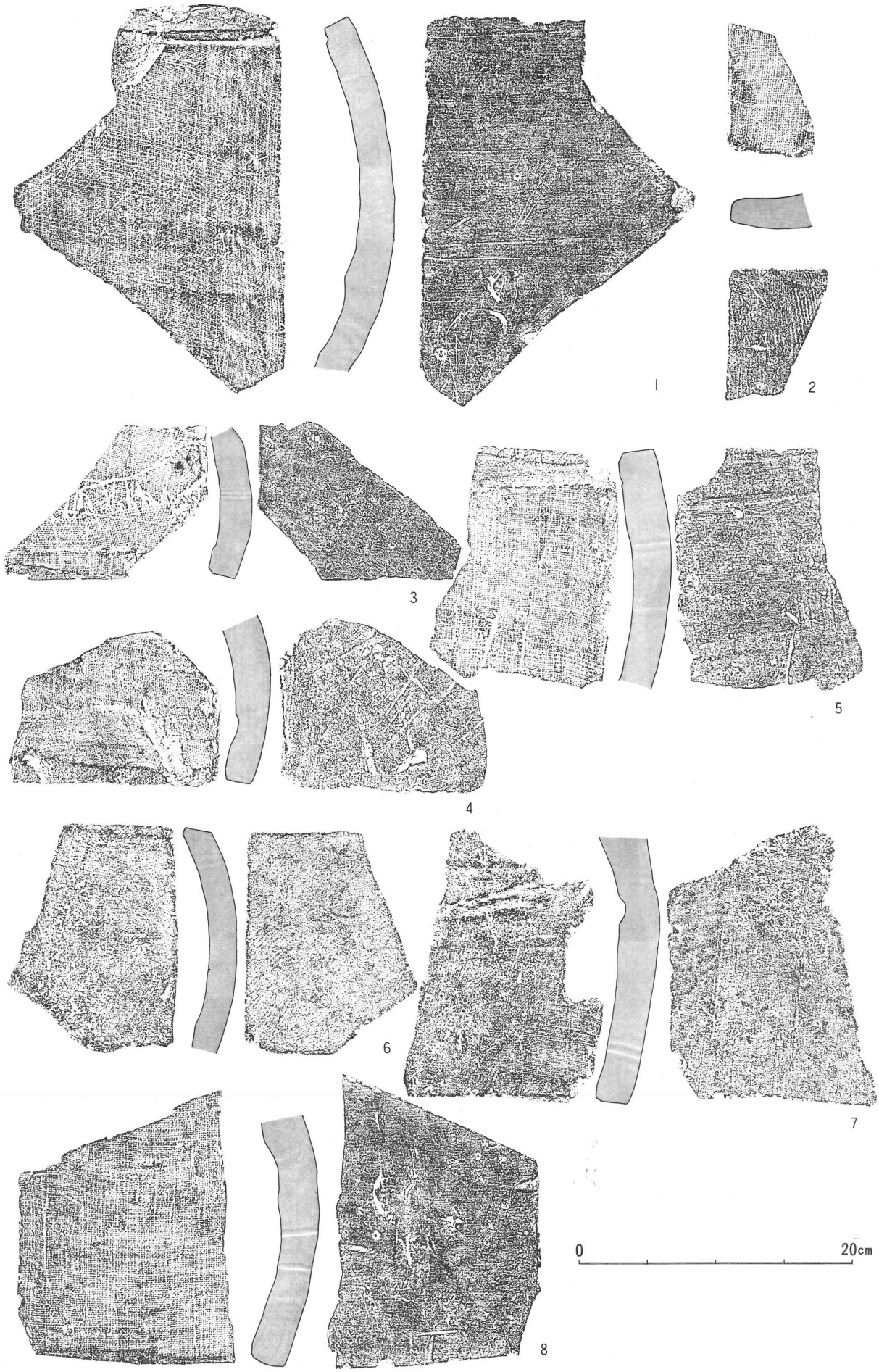


図155．平瓦拓影(4)

図156．平瓦拓影(5)

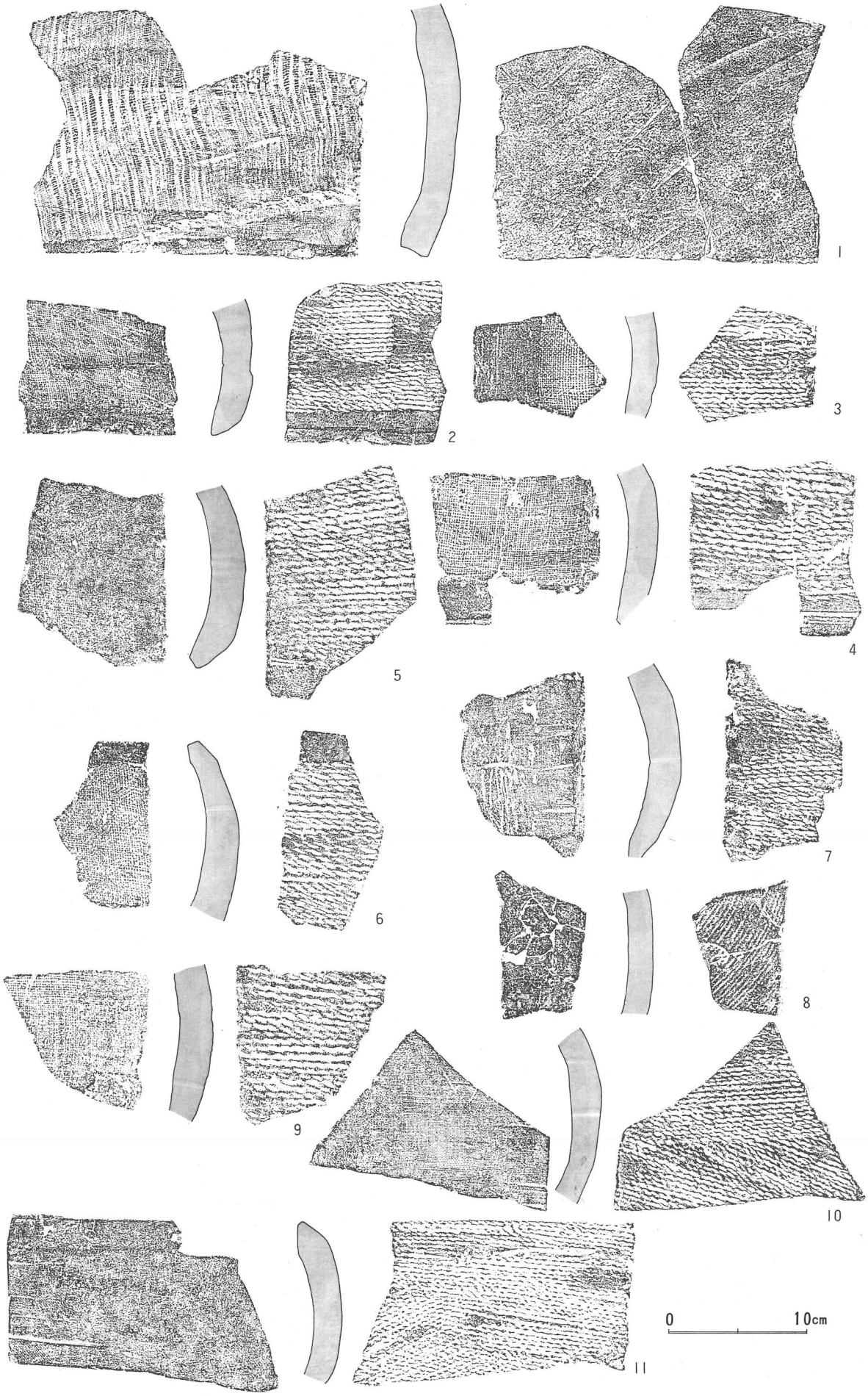


図157．平瓦拓影(6)

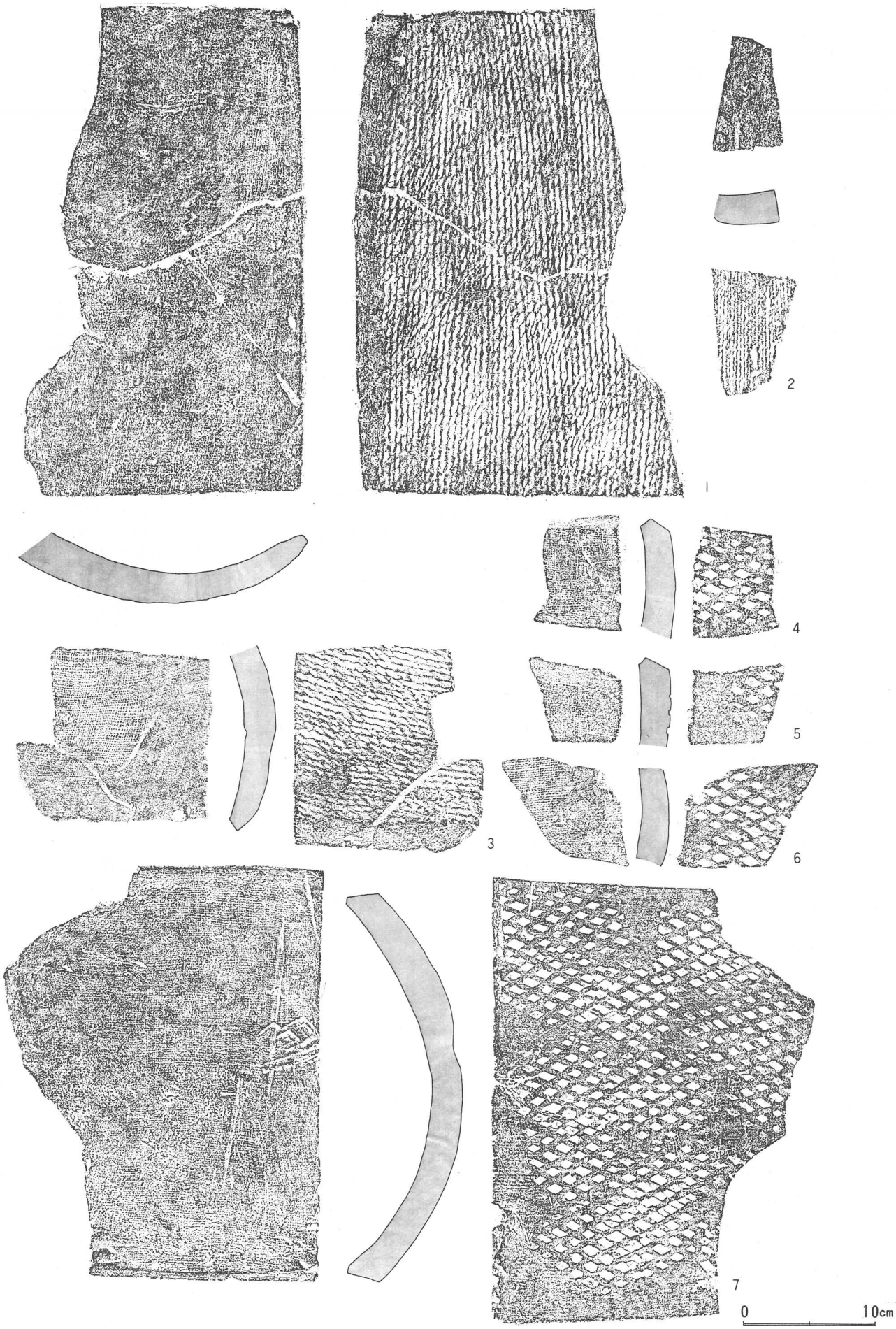


図158．平瓦拓影(7)

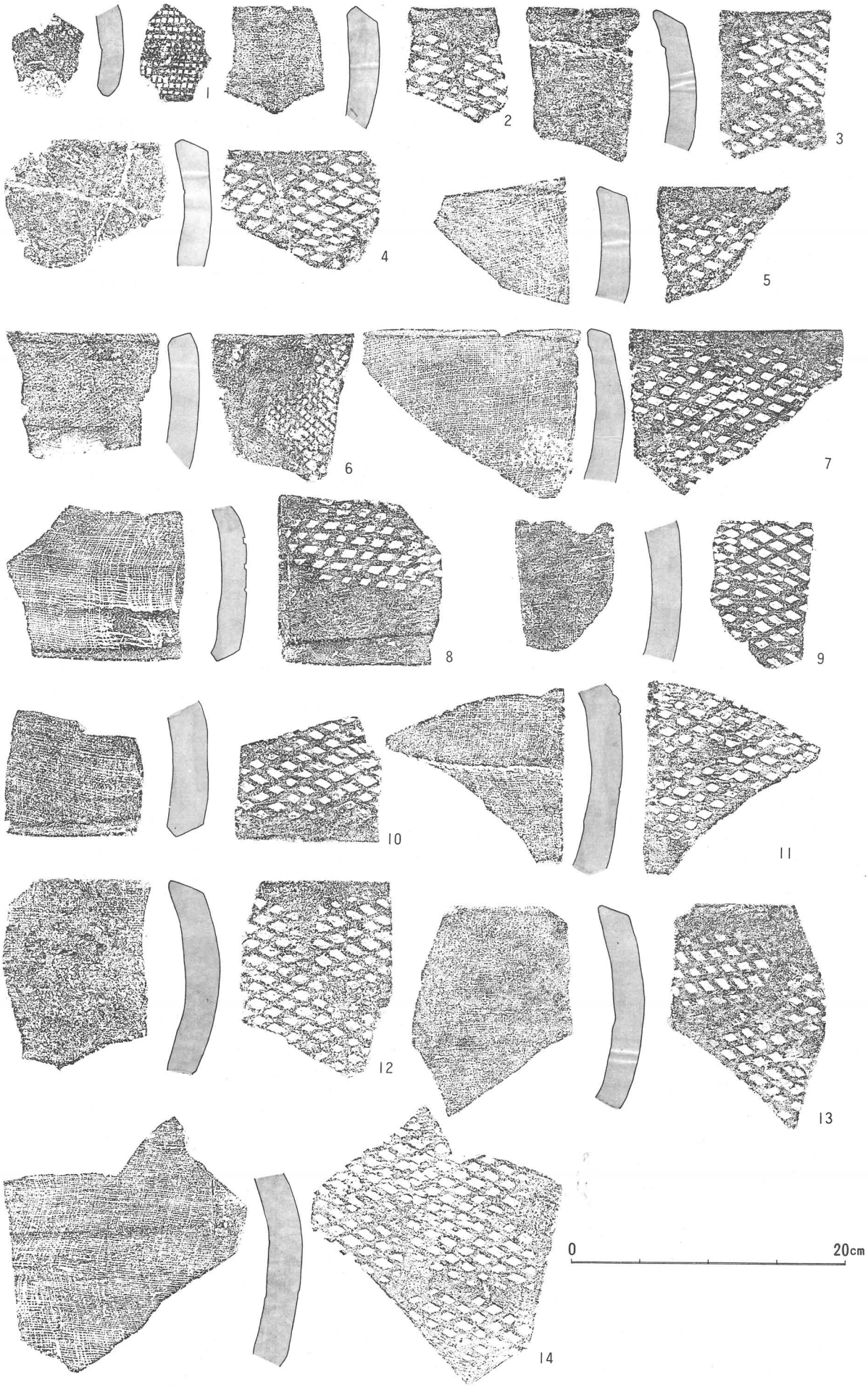


図159．平瓦拓影(8)

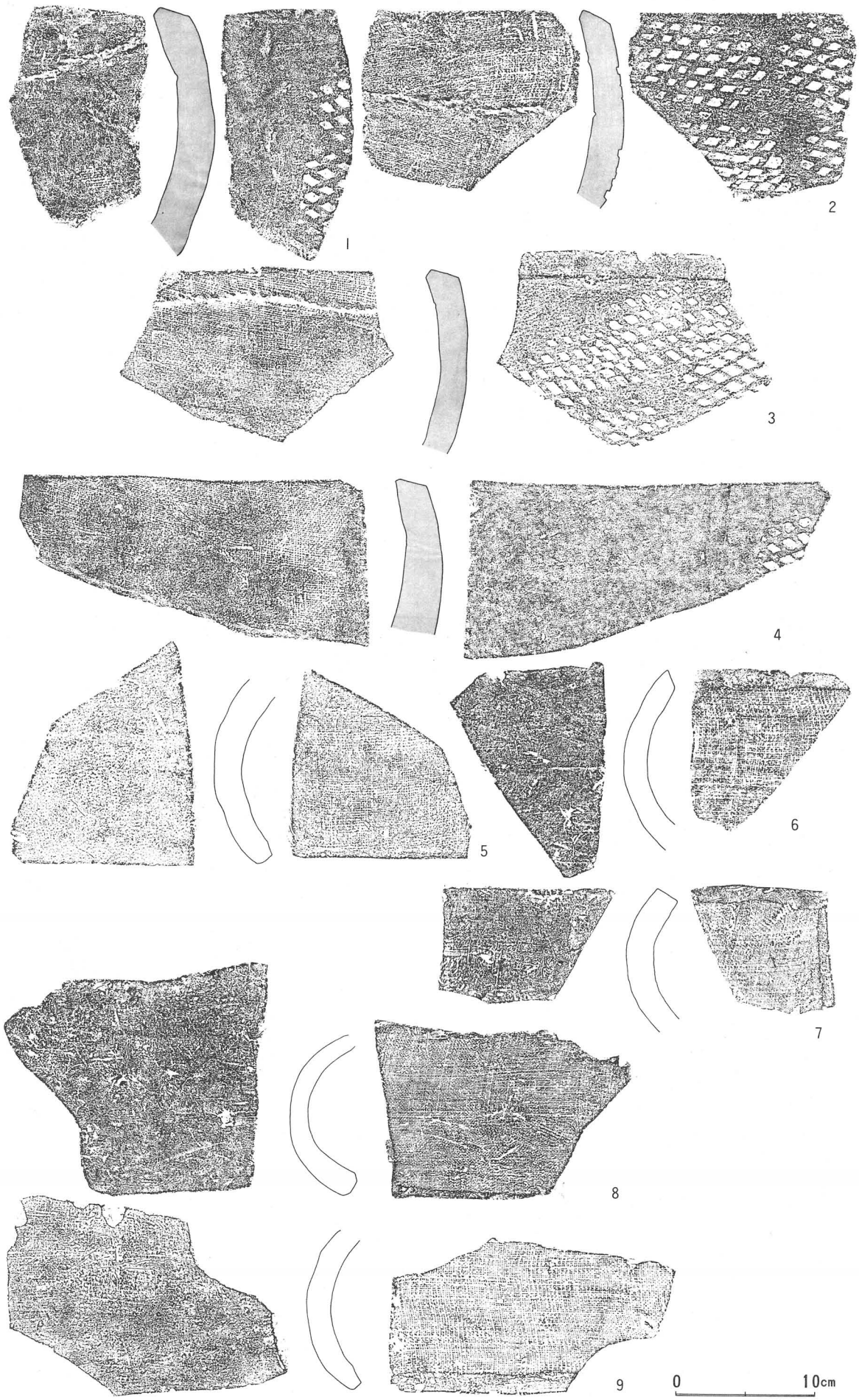


図160．平瓦拓影(9)、丸瓦拓影(1)

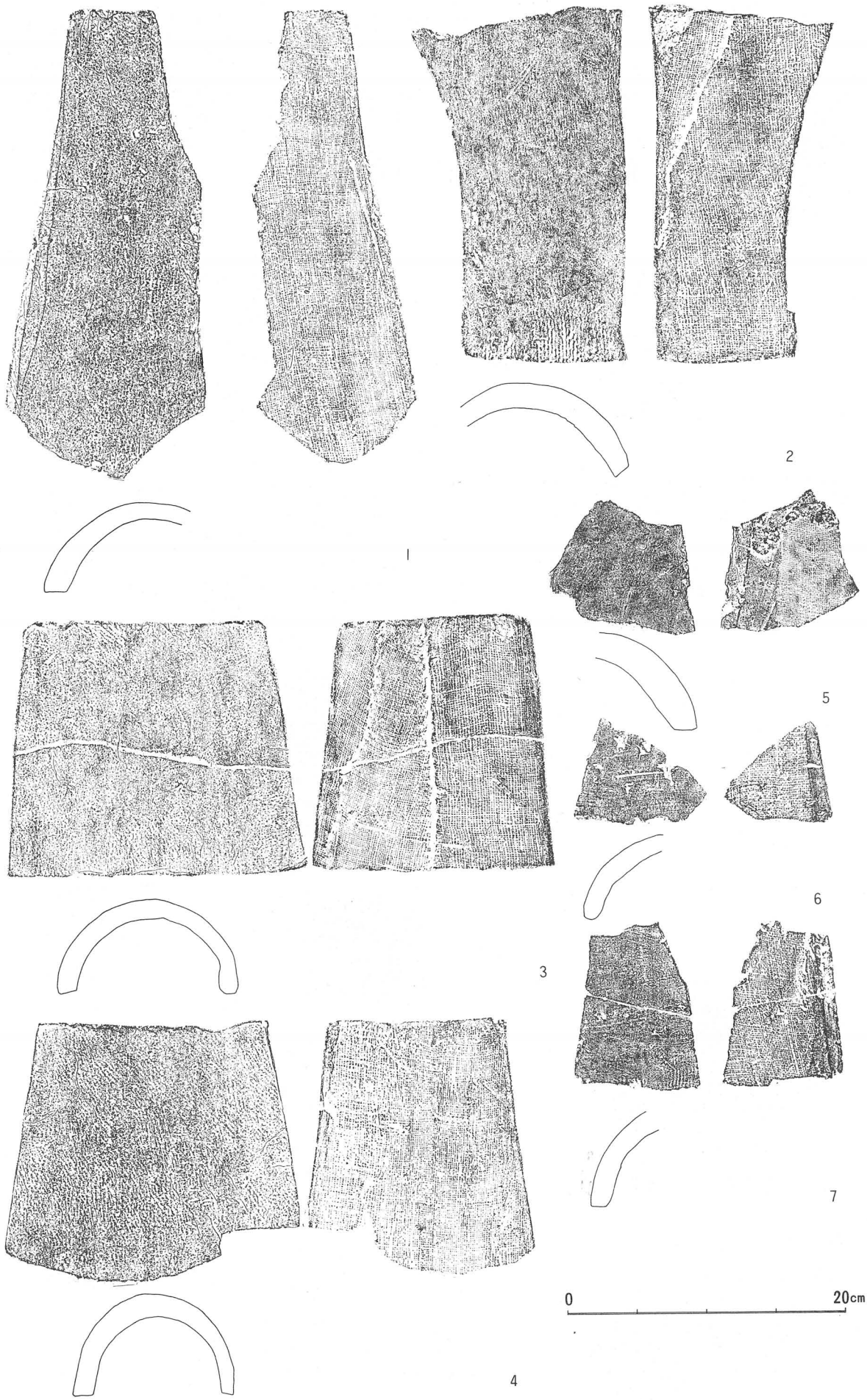


図161．丸瓦拓影(2)

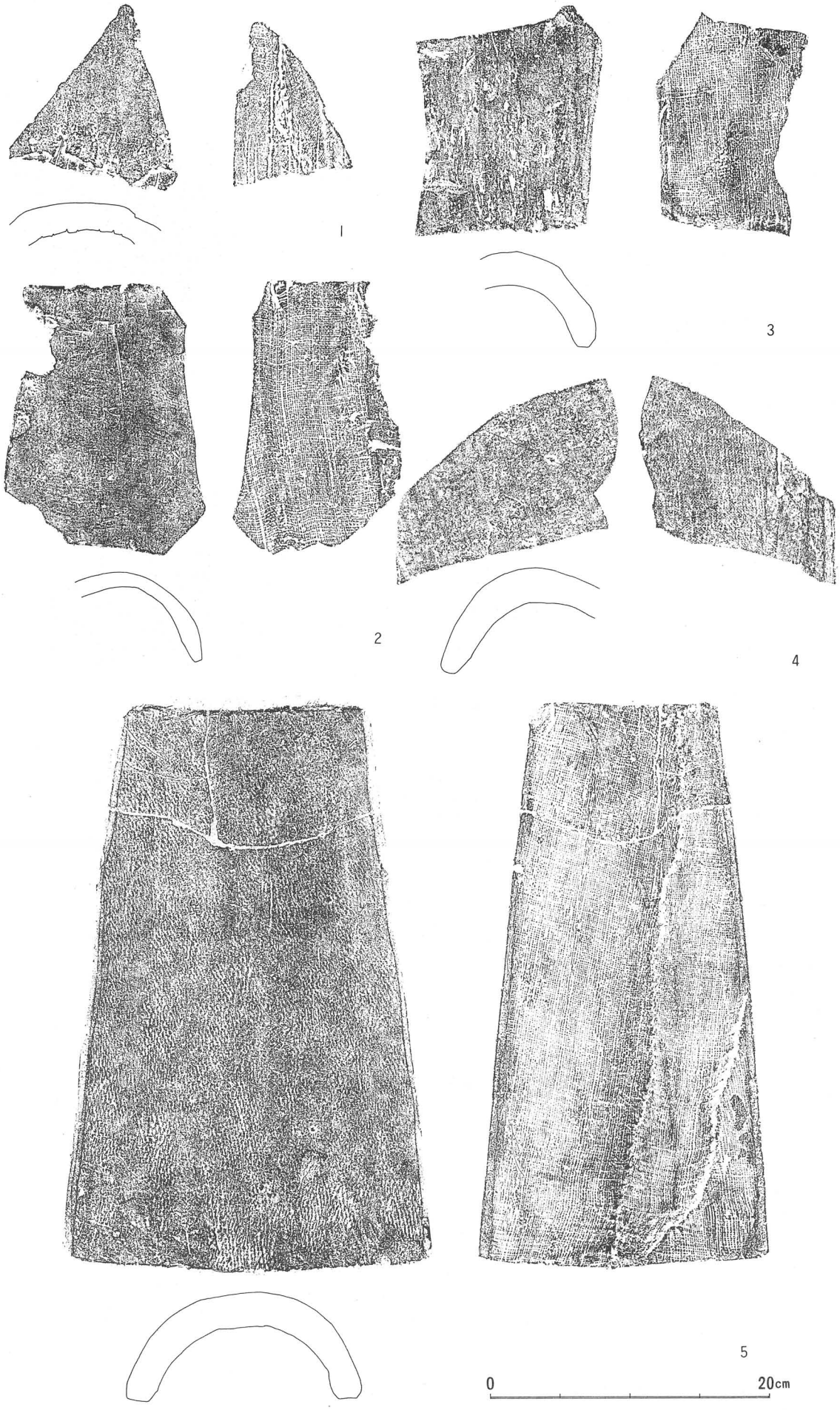


図162．丸瓦拓影(3)

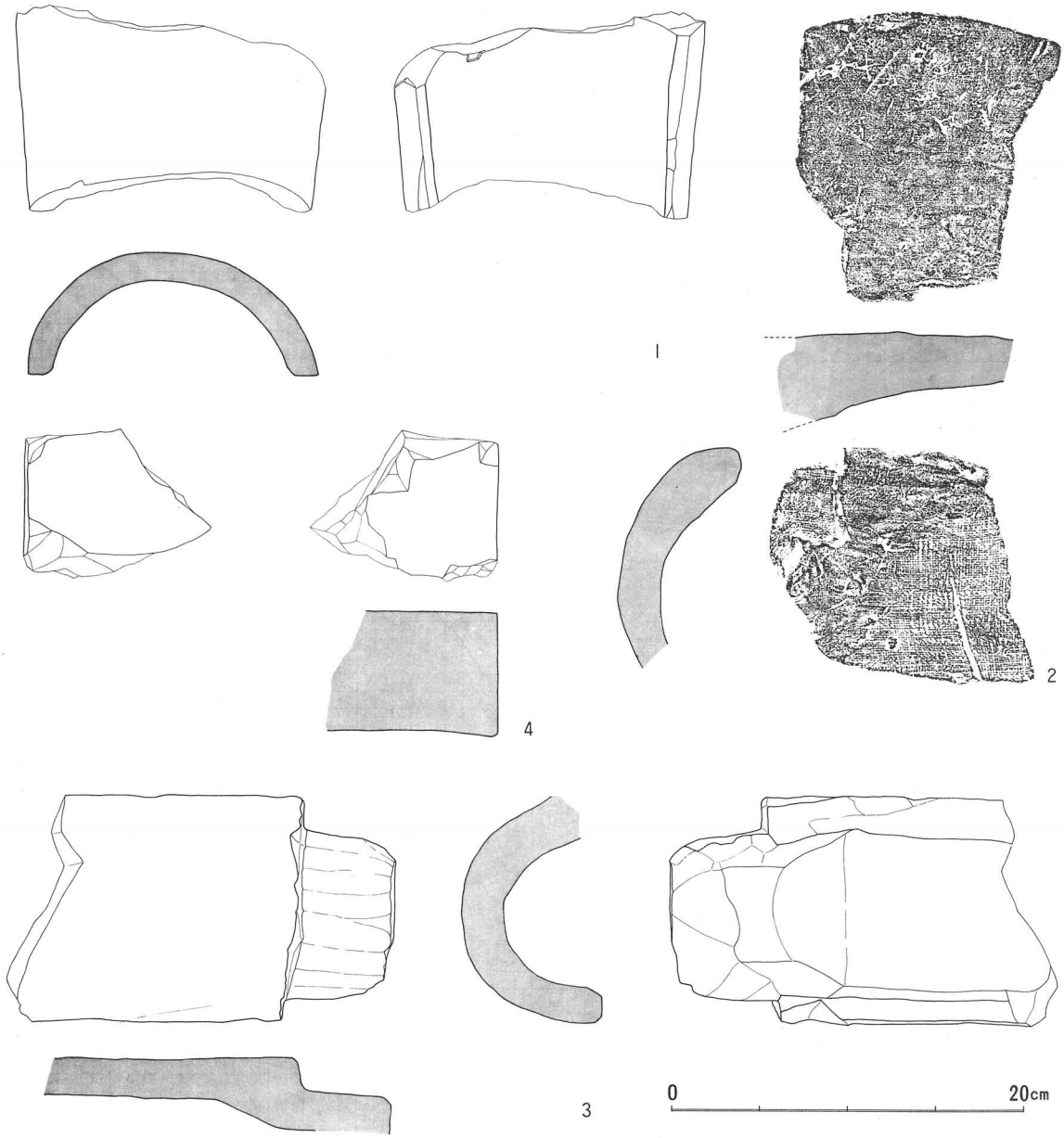


図163．丸瓦、軒丸瓦、塼拓影及び実測図

図164．軒丸瓦(１～14)、軒平瓦(15～22)拓影及び実測図

第四章　遺構・遺物の変遷

第一節　遺　　構

第一項　竪穴式住居跡

竪穴式住居跡については、オ一章　オ一節　オ二項　I)竪穴式住居跡の項で、各住居跡の記述のまとめとして、特に、カマドの形態、平面形、床面積について分類を行った。前項で、土器類の編年的記述を竪穴式住居跡の出土土器を以って行ったので、今ここで、その編年に従い、分類した住居跡の構造の各部の変遷を見てみることにする。

Ｉ）カマドの構造

カマドの構造については、カマドが取り付けられる位置、方向、煙り出しの傾斜角等によって９類に分類した。今、この９類に、壁溝、主柱穴、支柱穴のいずれかを１以上有するものを区別して、15に再分類してみた。この15分類に従って、各期の住居跡をひろってみたのが表18である。この表で明らかであるが、Ａ１類は３期から７期の間のものに見られ、これに壁溝等のいずれかの構造の加わるものもオ４期からオ７期の間のものに見られる。ただ、例外的にオ14期のもの（ＣＴ７）にＡ１類カマドに壁溝をめぐらしたものが存在する。Ａ２類はオ13期に認められる。Ｂ１類は支柱穴を持つものと持たないものとがあるが、ともにオ５期の住居跡である。Ｂ２類はオ３期からオ５期の間、Ｂ３類はオ１期からオ６期までのものに見られ、壁溝と支柱穴を持つＦＴ12はオ３期の住居跡である。Ｃ１類は、各時期を通じて最もポピュラーで、オ１期からオ14期までの住居跡に見られる。しかし、Ｃ１類に壁溝の伴うＣＴ９はオ２期の住居跡である。Ｃ２類カマドはオ２期の住居跡に見られる。Ｃ３類カマドはオ５期からオ14期まで、時期的に長時間用いられるが古い住居跡には見られない。しかし、壁溝のめぐるＩＴ１はオ２期の住居跡である。Ｄ類はオ１期とオ14期の住居跡にある。これに壁溝をめぐらすＦＴ16はオ４期の住居跡である。

以上のうち、Ｄ類構造のカマドを持つものについては、昭和52年度にほ場整備関係遺跡として実施した当遺跡のＭＴ１住居跡でも確認している。南北長3.55ｍ～4.2ｍ、東西長 3.1ｍ～3.4ｍで、南東コーナーに、竪穴の対角線とはややずれるが、壁面に対しては斜方向に取り付くカマドを持つものであった。土師器甕Ｃ、須恵器杯Ａ、蓋Ｃが出土しており、平城宮跡ＳＤ 650Ａすなわちオ13期の住居跡であった。Ｄ類カマドを持つ住居跡はＧＴ６とＩＴ３であるが、ともに遺物の出土状況は不良で、オ１期の杯Ｃがともに出土し、また、オ14期の須恵器杯Ａあるいは皿等が混入し、時期決定が困難なものであるが、ＭＴ１の住居跡例からすれば、ともに新しい遺物の時期を選択した方がよく、また、考古学的にも妥当なところである。

さて、まず、カマド構造ではないが、壁溝、主・支柱穴等のいずれか１つ以上の構造を伴うものは、オ14期のＣＴ７の例外的なものを除けば、オ５期以前の住居跡に限られる。この点は、昭和52年度のほ場整備関係の当遺跡の調査でも、ＰＴ１に見られるように オ５期のものであって、特記すべき特徴といえる。次にカマドの構造であるが、前項では煙出しの有無、その傾斜角の相違等により９類に細分した

が、Ｂ類構造においては、１～３類のいずれも才６期以前の古い時期のものに見られ、才３期にはＢ２とＢ３、才５期にはＢ１～３が並存して見られる。従って、Ｂ類に関しては煙り出しの有無や方向等は特に時期による変化はなかったと言い得る。Ｃ類に関しては、煙り出しの見られないＣ１類と煙り出しが竪穴外に長くのばして設けられ、かつ、その間の坑底が水平なＣ３類とは才５期以降に併存する。従ってＣ類の場合、煙り出しの有無、その傾斜角は、特にＣ３類が新しく工案された構造といえる。Ｃ２類の場合、煙り出しがあって、カマド奥部から直ちに急角度で排煙する構造であるが、基本的にはＡ２類の構造と同一である。Ａ２類のＢＴ９が才13期の住居跡であって、これも時期的な特徴とは言い難い。煙り出しを竪穴外に設けるものはＡ２類とＣ２・Ｃ３類であるが、煙り出しをカマド奥部から直ちに急角度に立ち上らせることは、Ｂ類を除いて、他の煙り出しを持たないカマド構造と同様のものであると考えられることから、Ｃ２類はＣ１類に包括し得る性格のものと言える。従って、時期的な特徴は、煙り出しの傾斜角が水平になる点にあることになる。以上の点からカマド構造を再分類すると（Ａ１）、（Ｂ１～３）、（Ａ２・Ｃ１・２）、（Ｃ３）、（Ｄ）の５類にまとめることができる。これを時期的にまとめると、（Ａ１）は才３期から才７期、（Ｂ１～３）は才１期から才６期、（Ａ２、Ｃ１・２）は才１期から才14期、（Ｃ３）は才５期から才14期となって、カマド構造の変遷を伺うことができる。ただし、（Ｄ）に関しては、才13・14期に多い構造であるが、カマドの位置、方向からだけでは才４期にも見られ、壁溝等他の構造との関連で異り、ここでは一応時期幅を持たせて考えておく。

II）平面形

竪穴式住居跡の平面に関しては、南北の長さを 100として東西長の割り合いを算出し、±10単位で６類に分類した。このうち、±41～59のＶ類に該当するものはなく、また、±60以上のⅥ類はＡＴ10とＦＴ19が該当するが時期は不明である。 100に近いほど正方形に近かくなるが、別表で明らかなように、±20までのＩ及びII類の方形プランに近いものは才１期から才14期の各時期に認められるのに対し、±21～30のIII類が才Ｉ期から才５期まで、±31～40のⅣ類がＩＴ３の才14期を例外として才２期から才４期までと長方形プランのものが才５期までの古いものに採用されている。この平面形の特徴は、カマドの構造とは特に関連しない。

III）床面積

床面積については、±３㎡以内でまとまるものを床面積の小さいものからＩ～Ⅷ類に細分し、竪穴の一辺のみの知れるものを両辺長の相関表から可能性の高い部類に加えた。床面積の知れるものに限れば、4.6㎡～7㎡のＩ類は才９期から才14期のものに限られる。II類以上はおよそ才１期から存在するが、 8.1㎡～11㎡のIII類は第8期まで、18.1㎡～20.5㎡のⅣ類、22.5㎡～23.9㎡のＶ類は第7期まで、25.9㎡以上のⅥ～Ⅷ及びⅧ以上かと思われるものは第5期までの住居跡に見られる。8.1㎡～11㎡のII類は第1期から第14期まで普遍的に存在する。一辺から推察したものを加えると、第13～14期にIII～Ｖ類のものの存在が考えられ、才10期にⅥ～Ⅶ類の存在が推察できる。才８期以前のものについては、Ｉ及びII類かと考えられるものは存在しない。従って、床面積規模の大小には時期差が存在し、奈良時代後期に当る才９期以降はＩ類及びII類の極めて小規模なもののみとなる。また才８期以前にあっては、Ｉ類は存在しないが、II類からⅧあるいはⅧ類以上の大規模なものまでが混在する様子がうかがえる。ただ、床面積の細分は平面形と同様極めて機械的、微視的なものであった。むしろ、各時期、各住居跡群単位の中で相対的に区別すべきである。このことについては後に若干触れる。

床面積と竪穴の平面形との関係では、平面形の方形に近いＩ・II類は各規模のものに通有に見られる

時期		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
カマドの形態	A－1			○	●			○●		●					
	A－2										○				
	B－1					○●									
	B－2			○		○									
	B－3	○		○●		○	○								
	C－1	○	○●		○	○		○	○		○				○
	C－2		○												
	C－3		●			○		○	○	○		○		○	○
	D				●										○

表18．竪穴式住居跡カマド構造分類時期別一覧表（●は壁溝等を有するもの）

平面形	I	○		●		○		●	○	○		○		○	○
	II		●		●	●		○			○				●
	III	○	○			○									
	IV		○	○	○										○
床面面積	I									○	○				○
	II		●	○		○		○	○	○		○	○	○	○
	III	○	○	○	○	○		○	○						
	IV	○				○		●						○	●
	V	○		●				●							
	VI					○									
	VII				●										
	VIII	○	○		●	●									

表19．竪穴式住居跡床面積等分類時期別一覧表（●は壁溝等を有するもの）

表11　竪穴式住居跡構造分類時期別一覧表

時期	住居跡	カマド形態	平面積	床面積	方向	
1	AT 13	B－3	I	IV	N 8°30′ E	
	FT 13			VIII以上	N 8°30′ E	
	21				N 1°30′ E	
	GT 3	C－1		III～V	N 9°30′ W	
	6	D	I	II	N19°30′ W	
	IT 4	C－3	III		N30°30′ E	
	11			III	N 0°30′ E	
2	AT 1					
	2			III～V	N 4°30′ W	
	BT 5			II～(V)	N22°30′ E	
	CT 9	C－1	II	II	N30° W	○
	FT 5	C－2		III～V	N13° W	
	14			VIII以上	N 9° E	
	GT 2	C－1	III	II	N 9°30′ W	
	13				N23° W	
	IT 1	C－3	IV	III	N 5° W	○
3	AT 14		V～VI		N 3° E	
	BT 4	B－2	I	III	N16°30′ E	
	6	B－3	I	III	N31° E	
	FT 1		IV	III	N12°30′ E	
	4			II～(V)	N 4° W	
	12	B－3	I	V	N 3°30′ E	○ △
	GT 5			II～(V)	N31° E	
	9	B－3		V～VI	N12°30′ W	
	IT 5	A－1		VI～VII		
4	AT 5			III～V	N 9°30′ W	
	FT 11	C－1			N 2°30′ W	
	16	D	II	VII	N20°30′ E	○
	25	A－1		VIII以上	N11° W	○△×
	CT 7		VI	III	N29° W	
	10	C－1		VI～VII	N27°30′ W	
	11			VI～VII	N 7° W	
5	柏CT12	B－1	I	VI	N 1°30′ W	
	6	B－1			N 1°30′ W	
	7	B－1	II	VIII	N 1°30′ W	×
	AT 6	B－3	II	IV	N11°30′ W	
	11	B－2	III	III	N 1°30′ W	
	FT 7			VI～VII	N15° W	
	9				N 2° W	
	15			VIII以上	N13°30′ W	
	GT 8	C－1	I	II	N29°30′ W	

時期	住居跡	カマド形態	平面積	床面積	方向	
5	GT 12	C－1	I	III	N13°30′ W	
	IT 12	C－3			N19°30′ W	
6	BT 2	B－3		VI～VII	N 6° W	
	FT 2			V～VII	N 4° E	
	6				N 2°30E	
7	柏CT 5		I	IV	N22°30′ E	○×
	10	C－1	I	III	N 6°30′ E	
	AT 3	A－1	II	IV	N 7°30′ W	
	CT 5	A－1	I	V	N 0°	○×
	FT 10	C－1		II～(V)	N 1°30′ E	
	GT 4	D ?			N28° W	
	IT 7	C－3	I	II	N44°30′ E	
	8					
	10					
8	柏CT 4	C－1	I	III	N12°30′ E	
	9	C－3		II～(III)	N 9°30′ E	
	AT 4			III～V	N 9°30′ W	
	FT 23	C－1	I	III	N24°30′ W	
	HT 1	D ?		III～V	N 2° E	
	4			II～(V)	N 2° E	
9	柏CT 3	C－3	I	I	N 9°30′ W	
	BT 1	C－3		II～(V)	N 9°30′ E	
	CT 7	A－1	II	IV	N 0°	
10	CT 1	C－1		VI～VII	N 2° E	
	6				N 5° E	
	13		II	I	N 2°30′ W	
	IT 6					
11	CT 11	C－3	I	II	N 8°30′ E	
12	BT 8					
	IT 9	A－1		II～(V)	N16° W	
13	BT 9	A－2		II～(V)	N 6°36′ W	
	CT 8	C－3	I	II	N 6°36′ W	
	12	C－3		III～V	N 6°30′ W	
14	BT 10			III～V	N43° W	
	BT 11				N17°30 E	
	FT 8	C－3	II	I	N12° W	
	HT 2			I		
	5	C－3	I	II	N 7° E	
	6			III～V	N24° E	
	IT 2	C－1	I	II	N13° W	
	3	D	IV	II		

9°

表20．竪穴式住居跡構造分類時期別一覧表（○壁溝、△主柱穴、×支柱穴）

が、長方形プランのⅢ・Ⅳ類は、時期的に新しい小規模なⅠ類には当然認められないが、Ⅱ～Ⅳ類の比較的床面積の小さいものに認められる。

カマド構造については、時期的に古い段階のＡ類やＢ類はⅢ類以上の大規模なものに採用されるのは当然であり、また、規模に規制されていない。全期間通じて認められるＣ１類はⅡ～Ⅳ類の比較的小規模なものに限られ、Ｃ３類もⅠ～Ⅲ類の小規模なものに限って認められる。Ｄ類はⅡ・Ⅲ・Ⅶ類のものに採用されている。このように、Ｃ類カマドは小規模住居に採用される傾向にあるといえる。

Ⅳ）壁溝、主柱穴、支柱穴

これらのいずれか１つ以上を持つ住居跡がほぼオ７期以前に限られることはⅠ)カマドの構造の項で指摘した。これらの認められるものは極めて少ないが、平面形ではⅠ及びⅡ類の方形に近いものに限られ、長方形プランを持つものでは認められなかった。床面規模に関しては、オ２期のＣＴ９がⅡ類小規模であるが、Ⅳ類１、Ⅴ類２、Ⅶ類１、Ⅷ類２とⅣ類以上の比較的大規模なものに認めることができる。カマド構造との関係では、壁溝は各類の中に認めることができるが、主・支柱穴に関してはＣ類にはなく、Ａ及びＢ類のものに限って見ることができる。

Ⅴ）軸線方位

軸線方位については、軸線の取り方によって誤差が生じるが、各時期を通じて極めて不統一である。

第二項　溝状遺構

溝状遺構のうち、現存条里畦畔とほぼ一致するか、また、並行する東西方向のものは、柏原北ＣＭ１、柏原北ＡM2・3、ＡM1、ＣM17、ＣM19、ＣM20、ＫＭ１、ＬＭ１の８条である。まず、各溝状遺構の時期を考えてみる。

柏原北ＣＭ１は、幅4.1ｍ～6.7ｍのもので、２度にわたる堆積が認められた。出土遺物は極めて少なく、図化し得たものは須恵器の蓋Ｃ、土師器甕Ａの各１点ずつのみである。蓋Ｃは口径12.4cmで、天井部と口縁部の境界を稜をもって区別している。口縁部の段はほとんどないが、極めて扁平なものとなっている。口縁部は小さく、丸味を持っている。甕Ａは「く」の字の頸部で、口縁部は中程の器壁がやや厚くなっているが、単純に開く。体部はややナデ肩である。調整は不明。蓋Ｃはオ10期頃のものと思われる。埋土中よりの出土遺物であり、溝の埋没時期の上限を示すものと考える。

柏原北ＡＭ２・３は幅4.1ｍ～6.7ｍで、やはり２度にわたる堆積が認められる。下層は砂礫層で、灰釉陶器の埦が少数ながら出土している。底部を欠失している１点は、彎曲した体部に外反する口縁端部を持つ。底部片は、高台の外面に稜を残し、内面は直線的で、三日月高台の面影を残すものである。上層には比較的多量の遺物が包含されていた。奈良時代の土器が混入するが、ほとんど灰釉陶器と土師器である。灰釉陶器は埦・皿類で、埦は口縁部の外弯が小さい。高台部分は、三日月高台の面形を残す下層出土のものに類したものが若干含まれるが、ほとんど高台内面の彎曲は認められない。横断面台形状のもの、三角形状のものがあり、外面を垂直におろしている。土師器は小型の皿類で、口縁部に段を持ち、その端部にまき込みの残るものである。当溝状遺構では、上層の堆積後、その上面に土器溜りが形成されていた。灰釉陶器、山茶埦、土師器皿等がある。灰釉陶器は横断面正三角形状の低い高台が付き、体部は中程で稜を取って彎曲するが、その上下は直線的である。口縁端部は外反する。小型の埦は体部は埦に似て中程に稜を持ち、高台は台形状のものが付く。土師器皿は、口縁部外面に一段の段があり、端部のまき込みがなくなっている。以上の３層にわたる出土遺物は、およそ、下層より、猿投窯跡で鳴呼

82号窯式、百代寺窯式、東山G105号窯式に相当するものと考えられ、才17期、18期、19期にそれぞれ当ることができる。

ＡＭ１は幅1.6ｍ～2.9ｍで、ここでも大別して２度にわたる堆積を認めることができる。下層からは須恵器、土師器、上層からは灰釉陶器が出土している。下層の須恵器は杯Ａ・Ｂ・Ｃ、蓋Ｃ、皿がある。才２期から才７期までのものが見られるが、溝底の礫層からは、口径15.2㎝、器高 4.7㎝、口径指数26の杯Ａが出土している。体部は外反して大きく開き、高台は体部直下より内側に付き、横断面長方形の高いもので、外方によくふんばる。端部の肥厚が認められず、才４期頃のものと考えられる。溝底からの出土で、溝の開削時期のものと考えてよかろう。下層で最も新しいものに杯Ａで、体部直下に、肩平で低い高台の付くもの、蓋Ｃで、口縁部が屈曲し、その端部を小さくつまみ出した程度のもの等があり、才11期に相当すると考えられるものであゐ。

上層からは灰釉陶器の埦、皿、壺が出土している。埦は、いずれも彎曲して開く体部を持っていて深みがあり、端部を小さく外反させている。高台部はその内面に彎曲を残し、三日月高台となるものと外面に稜を残し、端面を尖り気味にし、内面に彎曲がほとんど見られないものとがある。前者は鳴呼82号窯式、後者は百代寺窯式に入ろう。従って、上層には才17期と18期の遺物が包含されていることになる。

ＣＭ17は幅3.6ｍ～4ｍのもので、２度にわたる流水が考えられる。出土遺物は少なく、山茶埦、土師器皿、青磁、白磁等がある。土師器の皿は小型のものは端部をナデ、底部に手ずくねの痕跡を良く残すもの。大型のものは口縁部に段が残るが、端部にまき込みはない。山茶埦は三角形状の低い高台のつくものである。才19期のものとしてよかろう。

ＫＭ１は幅 1.6ｍで、溝側壁に木杭の認められるものである。出土遺物は極めて少ないが、出土した灰釉陶器は、小型の埦形品と考えられるもので、その低い高台は内面に彎曲を残し、外面も稜を取って彎曲する。才17期頃のものと考えている。

ＬＭ１は幅３ｍ程で、木杭が残る。ここでも出土遺物は少ないが、灰釉陶器の埦の底部片を見ると、高台内面の彎曲はなくなっており、細長いものとなっている。才18期頃のものであろう。

ＣＭ19は幅0.8ｍ～1.6ｍで、埋土は単純である。遺物は少ないが土師器の小皿が出土している。１点は口縁部に段を持ち、端部をつまみ上げたもの、他は、口縁端部をナデたものである。口縁端部のまき込みが痕跡程度で、才19期に入ろう。

ＣＭ20は幅 3.2ｍで、やはり埋土は単純である。須恵器杯Ｂ、皿、灰釉陶器皿、壺、土師器皿等がある。杯Ｂは平底で、底部の丸味はなく、体部との境界も明瞭である。皿も杯Ｂと同様で、体部の開きは大きい。灰釉陶器の皿は高台の付くもの。体部はわずかに彎曲して端部を大きく外反させている。高台は内面を彎曲させ、端部に面を取り、付け根に箆押えの沈線がめぐる。壺は長頸のもので、外反した口縁端部を上下に肥厚させる。土師器の皿は深みのあるもの。その他陶器が出土している。陶器を除けば、平城宮跡ＳＤ 650Ａや黒笹90号窯に類品があり、10世紀前半、才15期に入るものである。

以上の出土土器の年代観からすれば、次のような同時存在関係を伺うことができよう。

時　期	柏原北 ＣＭ１	柏原北 ＡＭ２・３	ＡＭ１	ＣＭ17	ＣＭ19	ＣＭ20	ＫＭ１	ＬＭ１
第４期			▮					
∫			▮					
第９期	▮		▮					
第10期			▮					
第11期			▮					
⋮								
第15期						▮		
⋮								
第17期		▮	▮				▮	
第18期		▮	▮					▮
第19期		▮	▮	▮	▮			

表21．溝状遺構変遷表

ＡＭ１は、極めて長期間使用され、一時埋没後にほぼ同じ場所で水路が掘削されている。柏原北ＣＭ１は才９期にＡＭ１と同時存在するが短期間で埋没し、後才18期に、北23ｍの位置に新たに柏原北ＡＭ２・３が掘削され、才19期まで利用されている。柏原北Ａ・Ｃ両地区は才１住居跡群に入り、調査範囲内では才５期から才９期までの竪穴式住居跡が確認されている。その後掘立柱建物に変るが、柏原ＣＨ１はＣＭ１を切って構築されており、溝の埋没後のものである。従って、竪穴式住居群の廃絶とほぼ同時に溝の開削があり、後、掘立柱建物の構築に伴い柏原北ＡＭ２・３に付け変えられた可能性が強い。ＣＭ20は才15期頃に開削されているが、井口Ａ～Ｃ地区の才２住居跡群内では、特にＣ地区では才14期まで竪穴式住居が構築されている。従って、ここでも竪穴式住居の廃絶とともに溝の開削が実施されている。しかしこの溝も短期間で終り、才17・18期の空白期間をおいて、南25ｍ及び30ｍの位置にＣＭ17、ＣＭ19が開削される。才17・18の空白期間は、ＣＭ19に近接して、ＣＭ19とほぼ並行したＣＨ１の構築があり、掘立柱建物による集落の存在した期間であると考えることができる。ＫＭ１とＬＭ１とは80ｍの距離をおくが、ＫＭ１は才17期、ＬＭ１は才18期と考えられ、水路の付け変えを考えることができる。この附近にはＫＨ１及びＬＨ１が存在するが、各々溝との関係は不明である。

このように住居群との関係が想定できるが、これら溝状遺構のいくつかが現在条里と重複した位置にあり、条里水田との関係を暗示している。そこで、同時存在するものの距離を算定すると次のようになる。

才９期　柏原北ＣＭ１← 203ｍ→ＡＭ１

才17期　柏原北ＡＭ２・３← 180ｍ→ＡＭ１←1081ｍ→ＫＭ１

才18期　　〃　　← 180ｍ→ＡＭ１←1161ｍ→ＬＭ１

才19期　　〃　　← 180ｍ→ＡＭ１← 231ｍ→ＣＭ17

　　〃　　← 180ｍ→ＡＭ１← 240ｍ→ＣＭ19

算定された距離を現存条里区画数で割ると次のようになる。

才９期　101.5ｍ

才17期　　90ｍ　　108.1ｍ

才18期	90m	105.5m
才19期	90m	117.5m
	90m	120　m

地表観察できる条里畦畔とほぼ重複するものはＡＭ１のみであり、延長線上にあるが条里畦畔の残っていないものは柏原北ＣＭ１、ＣM17、ＫＭ１である。これらの間では 101.5m、 108.1m、 117.5m の数値が得られる。概数 110m前後で、ほぼ条里畦畔にのるものと考えてよい。ＡＭ１は第２住居群の南端を画し、第４期～第11期まで、竪穴式住居群とともに利用され、その竪穴式住居群の廃絶後一時使用されず、第17期の掘立柱建物の構築後、再び改修されて利用されている。また、柏原北ＣＭ１は竪穴式住居群と一部重複する可能性が残され、廃絶後、やはり第17期の掘立柱建物の築造とともに、位置を柏原北ＡＭ２・３にかえて利用されている。ＫＭ１、ＬＭ１もともに第17期あるいは第16期に掘立柱建物を伴って溝が掘られている。このように見てくると、現在条里畦畔のＡＭ１に重複する部分及びその附近の条里景観は第４期までさかのぼらせ得るし、また、柏原北ＣＭ１附近は第10期頃に出来上っていると考えることができる。一方ＫＭ１及びその附近の場合は、第17期以降となる。この時期以降は、柏原北ＣＭ１の柏原北ＡM2･3への付け変え、ＡＭ１の改修、ＣM17の開削、あるいはＫＭ１のＬＭ１への付け変え等が実施されながら、現存条里水田の原型の整備、開発がなされていった時期とすることができる。掘立柱建物群の造営は、溝の開削及びこれに伴う条里水田の開発と無関係ではないと考えて良かろう。

第三項　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、竪穴式住居跡と切り合い関係のあるものではすべて後出である。また前項の条里制と関係が深いと考えた溝状遺構とは、柏原北ＣＭ１を同ＣＨ１が切り込んでいることを除けば、全く重複しない。さらに、第1住居跡群は柏原北ＡM2･3を以って北を界し、第2住居跡群は、南はＡM1で界され、北は唯一ＣＨ１を除いてＣM17で界されている。第９住居跡群の場合も同様である。このように見ると、掘立柱建物跡は、柏原北ＡＭ２・３、ＡＭ１、ＣM17、ＫＭ１、ＬＭ１と極めて密接な関係を伺うことができる。従って、その大半が第17期から第19期の構築と考えられる。従って、ＫＨ１はＫＭ１の示す第17期、ＬＭ１はＬＭ１の示す第18期のものとすることも可能である。また、ＣM17の北側に出るＣＨ１は、その北にＣM20があって、この溝が一時期第２住居跡群の北を界するものであったとすると、ＣＨ１はＣM20の示す第15期のものと考えることができる。従って、第２住居跡群では、ＣＨ１以外の第15期以降の掘立柱建物の存在を考えねばならない。南端を界するＡＭ１が第17～19期までの遺物を出土しており、第15～19期の５期の建物の存在する可能性が高い。さらに、唯一溝を切り込む柏原北ＣＨ１は、柏原北ＡＭ２・３と第１住居跡群の掘立柱建物跡との関係を考えさせてくれるものであるが、柏原北ＡＭ２・３からは第17～19期の遺物が出土しており、第１住居跡群の掘立柱建物は３期に区別し得る可能性が強い。第３住居跡群から第８住居跡群の間ではこうしたことは考えにくいので、まず、第１・２住居跡群における掘立柱建物跡の編年作業から開始することとする。

まず第１住居跡群では、柏原北ＣＨ１と同ＣＨ４とが柱通りをＮ２°30′～６°Ｗに持ち、極めて溝状遺構の方向に近似している。柏原北ＣＨ１と同ＡＭ２・３とはほぼ並行するが、柏原北ＣＨ１は同ＣＭ１を切っており、従って柏原北ＡＭ２・３との関連性を考えることができる。他の２基は、柏原北ＣＨ２がＮ11°Ｗ、同ＣＨ３がＮ７°30′Ｅの方向にある。後述する第２住居跡群で、ＢＨ２→ＢＨ３の

関係があり、柱通りがＮ３°ＷからＮ６°Ｗへ変化しており、このことからすれば、柏原北ＣＨ１→同ＣＨ４→同ＣＨ３と西へ柱通りの移行順序に編年することができる。柏原北ＣＨ３はＮ７°30′Ｅと他の３基と異り、大きく東へ振れるものがある。柏原北ＣＭ１との関係を考えて才10期を上限と想定できる。

才２住居跡群では、ＢＨ２→ＢＨ３の関係があり、才１住居跡群とは柏原北ＣＨ１→同ＣＨ４の関係と並行する。ＢＨ２と近似した方位に柱通りを持つものはＡＨ２、ＡＨ３で、ＢＨ３に近いものはＡＨ６である。また、才15期と想定したＣＨ１にはＢＨ４が近い。ＢＨ６はＮ12°30′Ｗで才１住居跡群と同様と考えれば、柏原北ＣＨ２と並行すると考えることができる。他の５基は柱通りを東へ振るものである。ＢＨ５・７はＮ４°30′～５°30′Ｅに、ＡＨ１はＮ２°Ｅの方向にある。また、ＢＨ１はＮ８°30′Ｅの方向にあって柏原北ＣＨ３に近い。順次磁北に近かくなることを考えれば、ＢＨ１→ＢＨ５・７→ＡＨ１の順序を考えることができる。ＡＨ１が磁北に近かく、才15期のものが西に振って磁北に近いことから、才14期におけば、ＢＨ５・７は才13期、ＢＨ１は才12期と考えられる。従って、柏原北ＣＨ３は才13期とすることができる。ＢＨ５が切り込むＢＴ８は才12期のもので矛盾はない。以上からすれば、才１・２住居跡群では、次のように編年できる。

第12期　柏原北ＣＨ３・ＢＨ１

第13期　ＢＨ５・ＢＨ７

第14期　ＡＨ１

第15期　ＢＨ４・ＣＨ１

第16期　柏原北ＣＨ１・ＡＨ２・ＡＨ３・ＢＨ２

第17期　柏原北ＣＨ４・ＡＨ６・ＢＨ３

第18期　柏原北ＣＨ２・ＢＨ６

残るＡＨ４はＮ21°Ｗ、ＡＨ５はＮ23°Ｗの方向にあるもので、ともに才５期の竪穴式住居跡を切り込んでいる。柱通りの振りからすれば、ＡＨ４は才18期と考えているＣＨ１、ＡＨ５は才17期と考えているＫＨ１に近い。

同様の操作を才３～８住居跡群に及ぼせば次のようになる。竪穴式住居跡との切り合いも矛盾しない。

第12期　ＦＨ１、ＧＨ２

第13期　ＦＨ４、ＩＨ３

第14期　ＥＨ１、ＦＨ３、ＩＨ２、ＨＨ１

第15期

第16期

第17期

第18期　ＧＨ３、ＩＨ４、ＩＨ５

ＩＨ１はＮ20°30′Ｅと大きく東へ振れるものである。

以上掘立柱建物群を才12期から才18期までの７期に編年した。ＡＨ５やＡＨ４のように東あるいは西に大きく振れるものについては、ＫＨ１やＬＨ１の想定から才17～18期あるいは才19期求めることが可能で、計８期に区分できそうである。

このようにまとめて、前項で分類した掘立柱建物の構造的変遷について次に記述することとする。なお、竪穴式住居跡等他の遺構との関連については後項で扱う。

前項では、方位、規模、平面形態、柱間、柱間規模等について微視的に細分した。方位については編年の基準にしたもので、構造的には除外できる。編年を保留したＡＨ４、ＡＨ５はここでも保留する。まず間数を同じくするものについて比較する。

２間×２間のものはＡＨ１、ＢＨ２、ＢＨ３があり、柏原北ＣＨ４も加えることができそうである。いずれも平面形態は90～ 100で正方形に近い。柱間寸法はＡＨ１・柏原北ＣＨ４が大寸法で、他は小寸法である。規模はＡＨ１が大きく 22.09m²、ＢＨ２が 10.23m²、ＢＨ３が9.61m²、柏原北ＣＨ４が推定 17.64m²である。束柱はＢＨ２を除いて他のものにある。柱穴掘り方はＡＨ１、ＢＨ２が方形、ＢＨ３、柏原北ＣＨ４が円形である。このことから、２間×２間の建物では、平面規模が大→小への変化が見られる。柱間寸法や束柱の有無は時期的な差に関係がない。

２間×３間あるいは３間×３間のものでは、平面形態が90～ 100で正方形に近いものにＢＨ７、ＦＨ４、次で80～88がＧＨ２、ＧＨ３、72がＢＨ４、62～66がＢＨ５、柏原北ＣＨ１、ＡＨ２、ＡＨ３、柏原北ＣＨ２、55がＩＨ２である。才16期の柏原北ＣＨ１、ＡＨ２、ＡＨ３に比較的整った平面形態が認められるが、他の時期では各種が混在する。柱間寸法では、才13・14・15期のものに見られ、才16・18期のものには見られない。ただし、才13期にはＦＨ４の大寸法のものもある。規模については、各住居跡群単位で見ると、才１住居跡群の25.2m²→38.1m²、第２住居跡群の15.6m²～17.8m²→21.06m²→31.64m²～38m²、才５住居跡群の20m²→22.3m²と大型化の傾向にある。

２間×５間あるいは３間×５間の場合、平面形態は各時期、各住居跡群に関係なく、各種のものが混在する。規模については、才１住居跡群は１棟のみで比較できないが、才２住居跡群では66m²→55.1m²→ 49.35m²と縮少化の傾にある。才３住居跡群では32.1m²→34.2m²、才８住居跡群では25.2m²→42.5m²～48.4m²と逆に大型化する傾向にある。

以上のように、柱間寸法や平面形態は時期差や住居跡群に関係なく、各種のものが採用される。一方、住居跡規模に関しては、各住居跡単位で、２間×２間のものは縮少化、3間×2間あるいは３間×３間のものでは大型化、５間×２間あるいは５間×３間のものでは、才２住居跡群では縮少化、才３・８住居跡群では大型化する傾向にあることが指摘できる。このことは、各住居跡単位に一定のまとまりがあることを示していると考えられよう。次に、各時期毎に柱間によりまとめておきたい。

時　期	２間×２間	２間×３間・３間×３間	２間×５間・３間×５間
第12期		GH2	柏原北CH3・BH1・ＦＨ１
第13期		(BH5)・(BH7)・FH4	IH3
第14期	AH1	IH2	(EH1)・(FH3)
第15期		BH4	CH1
第16期	BH2	柏原北 CH1・(AH2)・(AH3)	
第17期	柏原北CH4・BH3		AH6
第18期	BH6	柏原北CH2・GH3	(IH4)・(IH5)

( )は柱間小寸法

表22．掘立柱建物跡時期別一覧表

各時期の棟数が極めて少ないため、一単位の構成を求めることはむつかしいが、才１住居跡群で才17期に2間×3間と2間×2間と思われるものがある。才２住居跡群では、才15期に３間×２間と５間×２間

と思われるもの、才17期に２間×２間と５間×３間のものとが共存する。それぞれ住居と倉庫の組合せと考えられるが、才13期で才２住居跡群に３間×２間のものが２棟、才14期で才３住居跡群に５間×２間のものが２棟、才16期に才２住居跡群で３間×２間のものが２棟、才18期に才８住居跡群で５間×２間のものが２棟と複数のものが存在しており、各住居跡群とも住居、倉庫各々の複数棟の組合せが考えられるところである。

第四項　墓跡、その他遺構

Ｉ）その他土坑

前項で、比較的良好な状態で遺物を出土している土坑の説明を行ったが、ここではそれらを出土遺物から時期を決定しておく。

柏原北ＣＢＰ６　　埋土の上層から羽釜、下層から須恵器杯Ａが出土している。杯Ａは底部と体部の境界が明瞭で、低く、端面を窪ませた高台が体部直下より内側に付く。体部は直線的である。上層の羽釜は、内傾する口縁部の端部を内側に突帯状に肥厚させる。羽の部分は水平にやや長いものとなっている。

柏原北ＣＢＰ４　　同ＢＰ６と同じ構造を持つもので、灰釉陶器の埦が出土している。才18期のものである。柏原北ＣＢＰ６の羽釜は才18期のものに比べて古式であり、才17期における。従ってこれら２基の土坑は掘立柱建物群に伴う遺構とすることができる。

柏原北ＣＢＰ10　　須恵器杯Ａ、土師器杯が出土している。杯Ａは口径14cm～15.3cm、器高3.5cm～3.9cm、口径指数20.9～25.7で、浅い大型品である。体部は中程より上方に稜あるいは沈線がめぐって口縁部を区別し、底部との境界は丸味があって稜も不明瞭である。高台は体部直下より内側に付く。いずれも低いもので、横断面長方形を呈するもの、端部をわずかに外側へ肥厚させるもの、肥厚せず端面を窪ませるもの等がある。土師器の杯は口縁部を外反させ、端部を内側にまき込むようにするもので、内面に口縁部を除いて暗文が残る。これらは、ＡＴ３の出土遺物に類し、才７期におけるものであり、並行する柏原北ＣＴ５・10に伴う土坑と考えられる。

ＡＰ13　　すでに説明したように、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器のセットがあり、折戸53号窯式、平城宮跡ＳＤ 650Ｂに相当するもので、才14期の土坑である。Ａ地区は才２住居跡群の範囲内にあり、竪穴式住居跡群は才14期まで存在する。従って、その終末期に出来た土坑である。

ＢＰ 207　　土師器の小皿で、体部外面のほぼ全体を横ナデし、底部を未調整で残すもので、従って体部と底部との境界が比較的明瞭なものである。底部を穿孔するものがある。口径は復原したものも含めて、8.5cm～10.2cm、高さ1.2cm～1.9cmのもので、才19期に類品が多い。従って、集落の終焉後の土坑である。

ＣＰ 215　　土師器杯を身とし、灰釉の皿を蓋として出土している。皿は細長く高い高台を付け、やや彎曲する口縁部でその端部を外反させている。杯は、体部下方で稜を取って彎曲させ、直線的で端部が丸く肥厚する口縁部を持つ。底部は未調整である。灰釉陶器は高台の内側の彎曲がなく、高いもので、百代寺窯式に見られ、才18期のものと考えられる。従って掘立柱建物に伴うもので、蔵骨器に使用されたものではないかと考えられる。

ＣＰ 150　　土師器の小皿で、口径 6.8cm、器高 1.8cmで、底部を上底風にくぼませたもの。室町期の小皿で、集落廃絶後の土坑である。

ＣＰ 169　　口径11.5cm、器高 2.4cmのやや大型の皿。口縁端部附近のみナデ調整し、以下は指頭痕が残る。柏原北ＡＭ２・３上面の土器溜りの出土品に類品があり、才19期頃かと思われる。

ＣＰ51　　羽釜が出土している。大きく内傾した口縁部と短い羽部を持つ。口縁部は端部に向って器壁に厚みが増す。体部は良く膨って、内外面を横刷毛 調整している。才19期のＣＭ19の中に類品がある。集落終末期の土坑である。

ＣＢＰ20　　須恵器杯Ａ・Ｂ、皿が出土している。杯Ａは口縁端部を小さく外反させ、高台は体部直下附近に付く。体部と底部との境界は甘い。高台は極めて低いが、まだ踏んばりを残す。端部は肥厚せず、端面に凹みを残すものがある。杯Ｂは底部と体部の境界が明瞭で、平底で丸味はない。皿は、口縁部を大きく外傾させるもので、平底である。ＢＴ８に類品があり、才12期の土坑である。

ＦＢＰ１　　土師器の高杯と刀子が出土している。

ＧＢＰ６　　須恵器杯Ｂ、蓋Ａ・Ｂ、壺、皿、土師器甕Ａ・Ｃ、鉢、杯が出土している。

蓋Ａは天井部に丸味があり、口縁部を稜を取って区別するものと天井部が平坦で、口縁部の稜の甘いものとがある。蓋Ｂは宝珠形のツマミを持ち、口縁部は水平にひらき、かえりは垂直につまみ出している。杯Ｂは底部に丸味を残すものと、大型で平底のものとがある。皿は平底で、口縁部は大きく外傾し、端部をわずかに外反させている。

土師器の甕Ａは心持ち内彎気味の単純な口縁部をもつ小型のものである。体部はナデ肩で、最大径が下半分にきて下膨れする。大型のものは「く」の字形の頸部と口縁端部を上方に肥厚させ、外側に面をとるものである。小型のものは体部内面を横刷毛、大型のものは外面を縦刷毛、内面を横刷毛で調整している。甕Ａにはこの他に口縁部を受口風にするものがある。大小あり、小型のものは受口部を外傾させ、体部はあまり膨らない。大型のものは外反する口縁端部を垂直に立たせる。

甕Ｃはゆるやかに彎曲する口縁部で、その端部つまんで横ナデし、尖り気味に終らせる。

甕類に上記のもの以外に、大きく外反する口縁部と下膨れする体部を持つものがある。体部の外面を縦、内面の頸部附近を横刷毛調整するが、指頭による削り痕が内面によく残っている。

杯は、口径18.8cm、器高 6.2cmの大型のもので、外面は口縁部附近を除いて篦削りし、内面を篦磨きする。口縁端部にまき込みがみられる。

鉢は口縁端部を小さく外反させ、口径より大きい体部を持つ。

これら土器類には才２期に含めるべきもの、才５期のもの、才９期のもの等が混在する。従って、竪穴式住居群との並行関係を求めることができよう。

その他多数の土坑が存在し、各々若干の遺物を出土しているが、その実測図を掲載するのにとどめ、各々の説明は省略したい。

第二節　遺　　物

第一項　須 恵 器

須恵器は供膳形態である杯・蓋・皿類を中心とし、他に高杯・平瓶・壺・甕類・鉢等があるが量的には極めて少ない。杯・蓋・皿類を除く、他の器種を竪穴式住居跡出土のものに限って時期別に見ると表23のようになる。

時　期	高杯	平瓶	鉢	壺	甕	甑
第 1 期						
第 2 期	○	○		○		
第 3 期				○		
第 4 期				○	○	
第 5 期		○	○			○
第 6 期						
第 7 期			○			○
第 8 期				○		
第 9 期					○	
第 10 期				○		
第 11 期				○		
第 12 期				○		
第 13 期			○	○		
第 14 期				○		

表23. 竪穴式住居跡出土須恵器各種出土一覧表

時　期	a	b	c	d
第 4 期			1	
第 5 期	2	1		
第 6 期	2	1	5	1
第 7 期	1	1	8	
第 8 期		1	3	6
第 9 期			1	4
第 10 期		1	2	6
第 11 期				3
第 12 期			1	13
第 13 期		1	1	1
第 14 期			3	6

表24. 竪穴式住居跡出土須恵器蓋Ｃ時期別出土数一覧表

この表から明らかなように、オ８期以降の住居跡では貯蔵形態の壺・甕類のみで、わずかにオ13期に鉢を見るにすぎない。オ７期までの器種のバラエティーの豊さは、杯類にも見られる。杯はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの６類の形態が見られ、杯Ｂがオ１期以降不扁的に見られ、杯Ａはオ３期以降、杯Ｃはオ１～３期の間に見られる。これらとは別に杯Ｄ～Ｆの形態を異にする杯類が存在するが、杯Ｄがオ４期とオ６期、杯Ｅがオ２期、杯Ｆがオ３期に見られ、量的には極めて少ないものであるが、オ６期までの特殊な器種である。このように、オ６・７期を境に、須恵器の器種構成に変化が見られる。これをオ１次の変化とすると、オ２次はオ13期頃であろう。すなわち、従来の須恵器の杯、皿類に加え、灰釉陶器を中心とする埦・皿類が出現するのである。オ18期では、たとえば、ＢＴ９の出土遺物を見ると、須恵器杯Ａ４点、皿２点、杯Ｂ２点であるのに対し、灰釉陶器の埦２点、皿２点、黒色土器の埦１点で、須恵器とそれ以外の供膳形態の割合が６：５とほぼ合半している。この傾向はオ14期にも続く。オ15期以降は竪穴式住居跡は存在しないが、溝状遺構や土坑等の出土遺物で見る限り、須恵器の杯、皿類は皆無に近かく、わずかに壺形土器に見られるにすぎない。従って、オ13・14期頃をオ２次の変化期と見ることができるのである。

このように、須恵器類は、オ６・７期を境に器種を単純化し、オ13・14期を境に、供膳形態をも灰釉陶器に譲ることになる。

次に、杯・皿・蓋の須恵器の中で最も不扁的に存在するものについて、その変遷を見ておくことにする。まず、蓋類はＡ～Ｄ類のものがあり、Ｄ類はオ12期にわずか１点を見るにすぎないものである。蓋Ａ類はオ１～４期まで、蓋Ｂはオ１～５期まで、蓋Ｃはオ５期以降オ14期まで見られる。従って、蓋Ａ・Ｂはオ４期まで共伴し、蓋Ｂ・Ｃはオ５期にのみ共伴する。蓋Ａは、オ１～４期までの間で、いずれの時期にも、口径に大小の２類がある。これに伴う杯Ｃについてはオ１～３期までで、オ４期のものから

は出土していない。あるいは、オ３期の杯Ｆ、オ４期の杯Ｄ等受部風の作りのあるものともセットになる可能性が強い。蓋Ｂは、オ１～５期の間に出られるが、口径規模10cm前後の小型のものはオ１～３期のものに限られ、オ４期以降は、12cm前後及び16.4cm～18.6cmの中型・大型に限られる。蓋Ｂは杯Ａ～Ｃとセットになるが、特にオ１・２期は杯Ｂ・Ｃとのセットであり、オ３期は杯Ａが出現するが、その規模から見て、蓋Ｂとのセットは考えられない。オ４期に入って量的に増加する杯Ａは大半が大型のＣ類であるが、この期を境に蓋Ｂも大型化しており、蓋Ｂはこの段階で杯Ａ・Ｂとセットになる。オ４期には杯Ｃは出土していない。蓋Ｃはオ５期以降普通に見られるものであるが、口径規模にａ.19cm～21.2cm、ｂ.17.3cm～18.4cm、ｃ．14.6cm～16.6cm、ｄ.11cm～13cmの４類がある。これを時期別に見ると表24のようになる。

この表からａ類の極めて大型のものはオ４～オ７期に限られ、ｃ類はオ６期以降、ｄ類はオ８期以降に一般的になる。セットとしては各時期でも大・中・小の３類が存在するが、オ７期頃を境に相対的に小規模化している。これは、次に見る杯類、特に杯Ａの口径の縮少化と関連する現象である。

次に杯類であるが、第１期以降普偏的に見る杯Ｂ類は、特に口径規模でａ～ｃの３類に区分し、口径指数から得られる深さでは各時期通じた共通性を見出し難かったが、各時期毎に見れば、最高４類まで区別できた。これは口径規模に関係なく、口径指数から求められたもので、１～４類とした。各時期毎の比較であって、１～４類の口径指数を示せないが、１類は、最も浅い皿に近いもの、２・３と深くなり、４は埦型のものである。これをまた時期毎に示すと表25のようになる。

時期	口径指数				口径		
	1	2	3	4	a	b	c
第１期	2	2	2		2	5	
第２期	2	2	3		4	1	
第３期	3	3	1	2	1	6	1
第４期	4	2	1	1	1	6	1
第５期	1	1				1	
第６期	1	2	1			1	3
第７期	1	1	2	1	2		1
第８期	2	2	?		?	1	2
第９期	1	4				5	
第10期		1				1	
第11期	1					1	
第12期	2	2				3	
第13期	1	1				2	1
第14期	?	1				1	

表25．竪穴式住居跡出土須恵器杯Ｂ時期別出土数一覧表

時期	a	b-1	b-2	b-3	c-1	c-2	c-3	c-4	d
第１期									
第２期									
第３期				1	1				
第４期				1		1	3		
第５期							2		
第６期							2	1	
第７期							1		1
第８期			4			1			
第９期			1			1			
第10期			6	2		2	1		
第11期		1	1	1		2			
第12期			4	2		4	2		
第13期			3	1					
第14期									

表26．竪穴式住居跡出土須恵器杯Ａ時期別出土数一覧

すなわち、口径に対して深さのある３類や埦型の４類はオ７期まで確実に認められ、オ９期以降は２種の深浅を持たなくなる。これをさらに口径についてみると、口径はａ.8.5cm～9.9cm、ｂ.10.3cm～12.7cm、ｃ.13.2cm～15.9cmに分けると、オ1・2期に大型のｃ類を欠くが、オ3～8期まではａ～ｃ類の各種

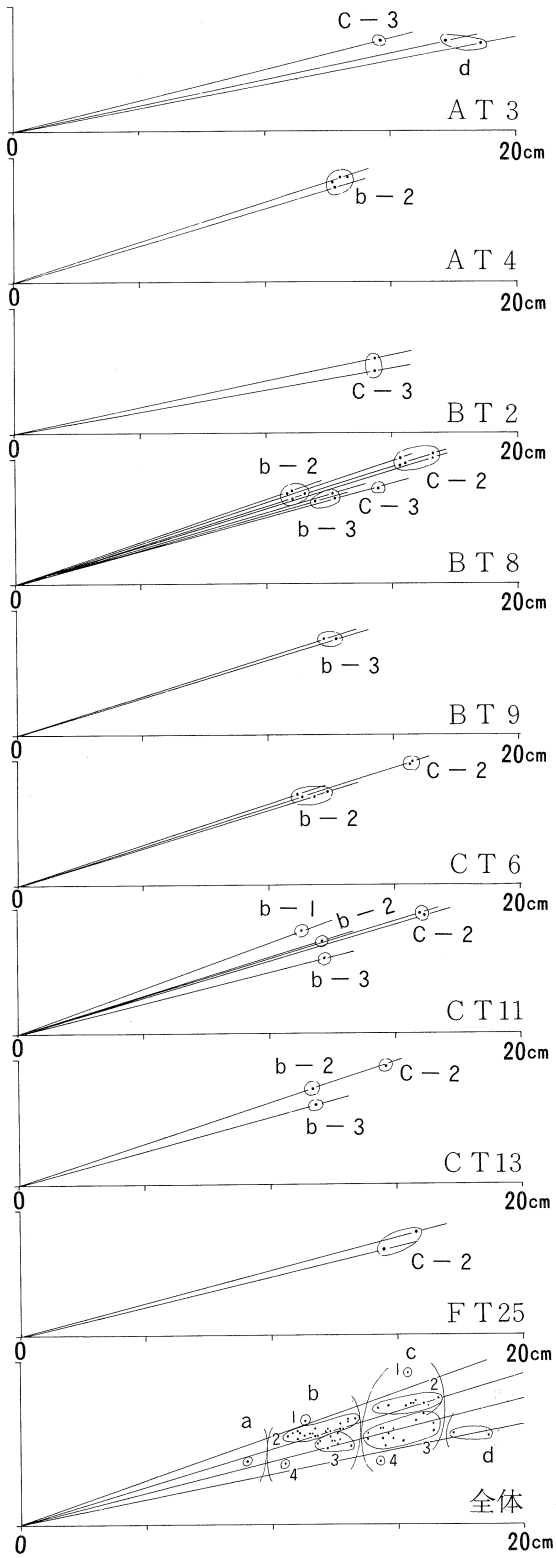


図165．須恵器坏A法量分布図

〔縦：高さ(器高－高台の高さ)、横：口径〕

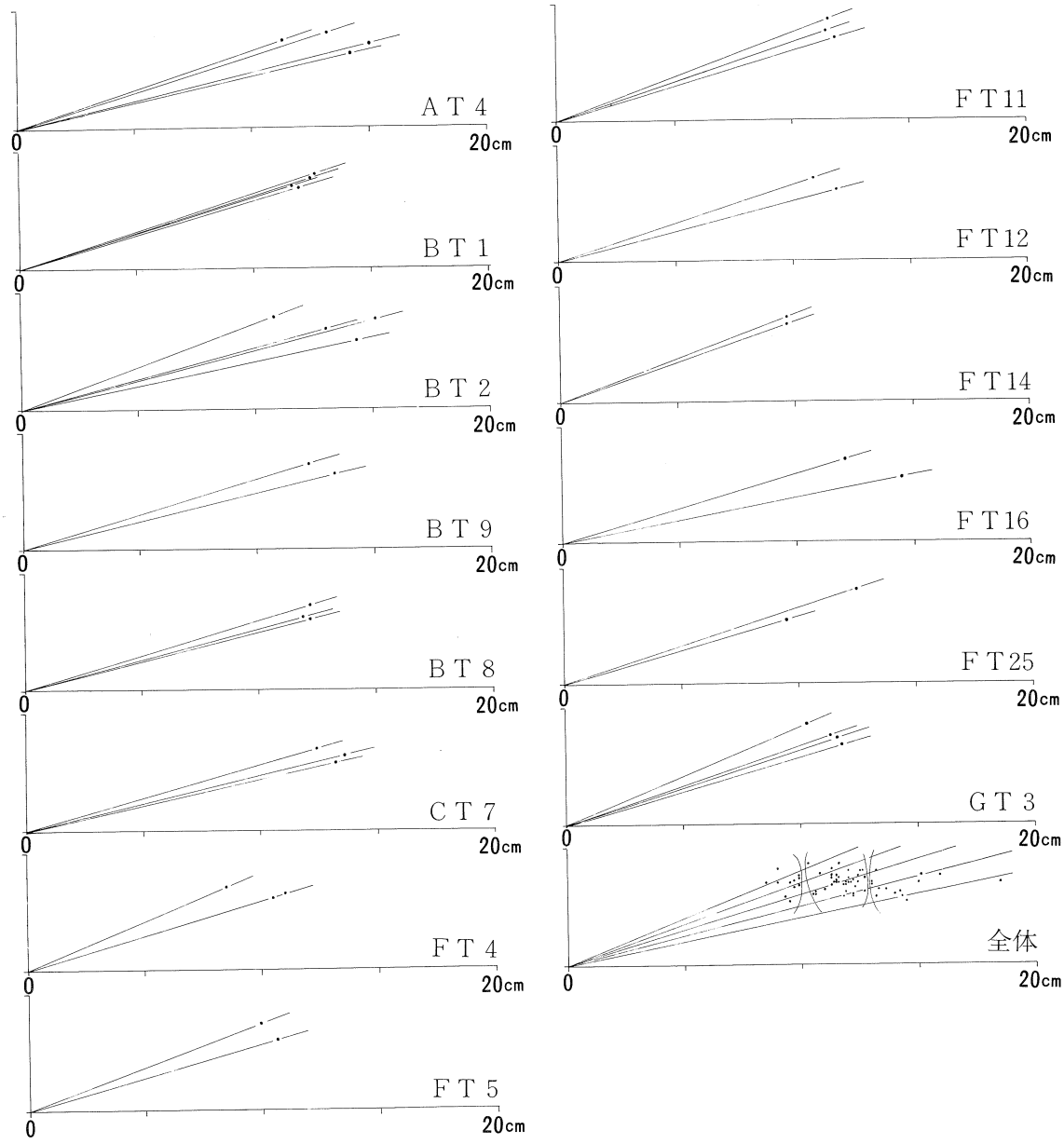


図166．須恵器坏Ｂ法量分布図（縦：器高、横：口径）

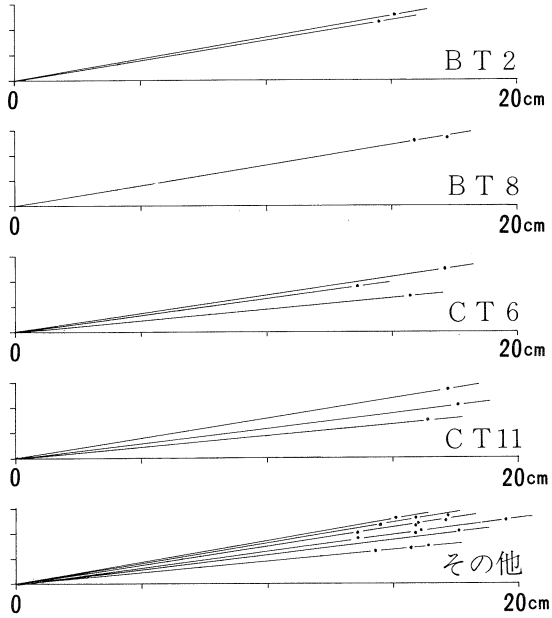


図167．須恵器皿法量分布図（縦：器高、横：口径）

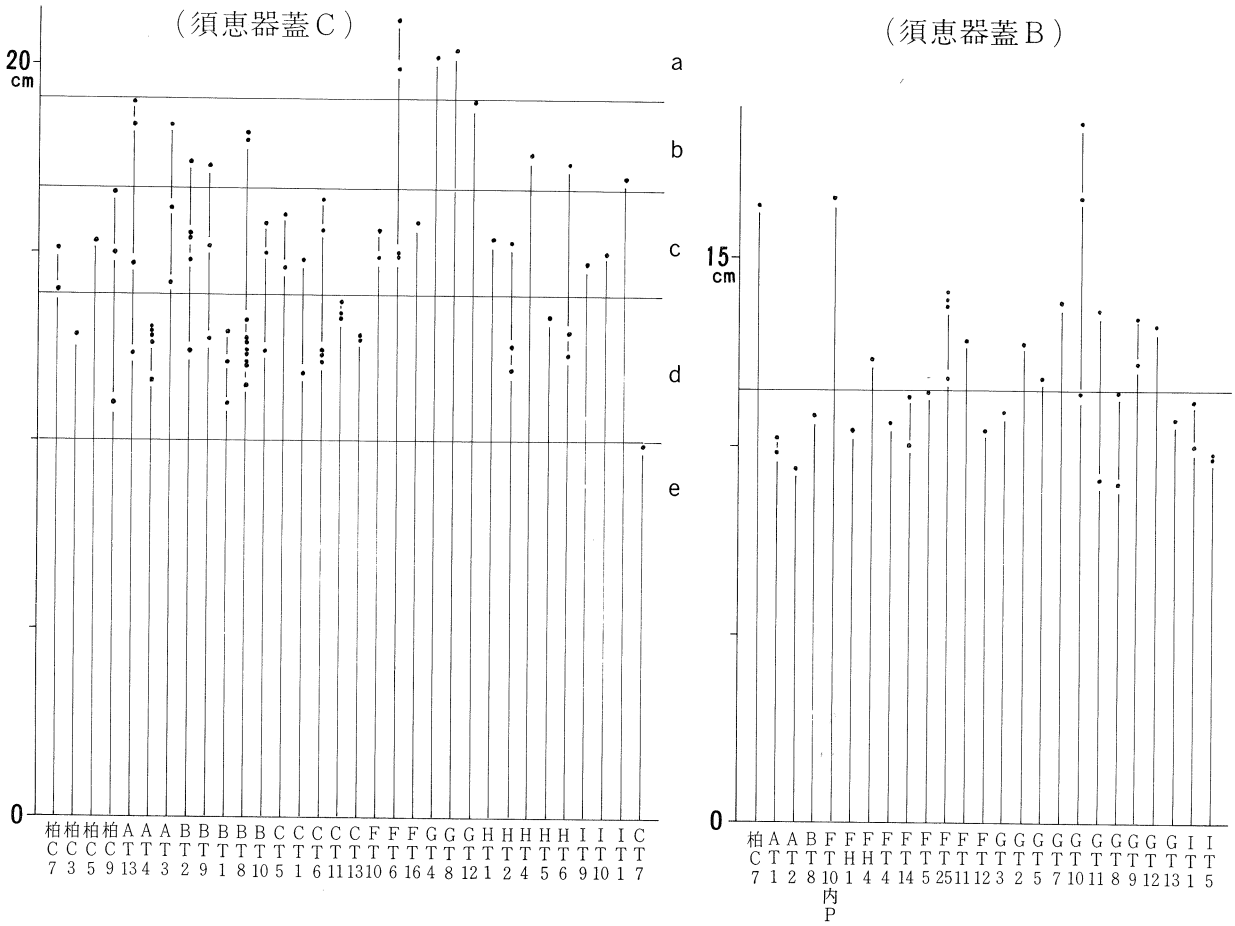


図168．須恵器蓋B．C口径比較図

がおおよそそろう。しかるに、オ９期以降は、中型のｂ類のみであって、オ13期のｃ類も口径13.3cmであって極めてｂ類に近いものとなっている。口径の小さいａ類は、およそ、オ１期にあっては１及び３類、オ２期にあっては２・３類、オ３期にあっては３類、オ４期では１・３類、オ７期では３・４類にあり、従って、口径規模ａ～ｃ類に口径指数の１～４類が加わり、オ７期までの杯Ｂ類は多様な形態を有することになり、オ８及至９期以降に単純化する傾向にあることがうかがえる。

杯Ａはオ３期から出現する。杯Ａは、口径及び口径指数から、ａ、ｂ－１～３、ｃ－１～４、ｄの９類に分類した。これを今また各時期別に示すと表26のようになる。

ａ→ｄは口径の小→大、各々の１→３・４は深いものから浅いものへの順序を示す。従って、オ３期には口径が大きくて、極めて深いものと極めて浅いものがあらわれるが、オ４期以降オ７期までは、口径は比較的大きく、しかも口径に比べて極めて浅いものとなっている。オ８期以降はｂ－２類及びｃ－２類が主流を占め、ｂ－３、ｃ－３の比較的浅いものが加わる。すなわち、オ８期以降口径の小さいものが現われ、大小ともに浅いものが小数ながら加わり、セット関係としては画一化する。この傾向は、先に見た蓋Ｃと対応するもので、蓋Ｃにおけるｄ類、すなわち、極めて小規模なものがオ８期より急激に増加することと杯Ａのｂ類のオ８期からの増加と一致する現象といえるのである。

最後に皿類であるが、オ７期までは、皿としての形態としてではなく、杯Ｂの１類の系統の中に納まるものである。杯Ｂの１類は、オ５期より口径を大きくし、その反面深さを浅くし、オ７期では極めて皿状に近かくなる傾向にある。杯Ｂと区別し得る皿状品はオ９期の中に確実に見ることができる。すなわち、杯ＡやＢとの比較の問題であって、系統的には杯Ｂの１類の変化としてとらえることができる。

以上、須恵器類の器種構成の変遷を個別にたどってきた。構成器種としての高杯、平瓶、瑠、あるいは杯のＤ～Ｆ等はオ７期頃までに存在し、オ８期以降では、杯、蓋、皿と壺、甕類に単純化される。個々のものの変化では、蓋Ｃ類が、口径規模に大中小の３類が各時期に認められるが、オ７期まではａ類のものが存在し、ｄ類のものがほとんど存在しないのに対し、オ８期以降はａ類がなく、規模の小さいｄ類が主流を占る。杯Ｂでは、オ７期までは、分類した口径規模ａ～ｃ、深さ１～４の各類が存在するのに対し、オ８期を境に、ａ類の１及び２類に限られ、形態の単純化傾向を見せる。杯Ａも蓋Ｃの傾向に対応し、オ８期以降にｂ類、特に２類が多量に出現し、また、ｂ－２及びｃ－２類を主流とし、ｂ－３、ｃ－３の浅いものとのセットが出来上り、画一化する。皿類についても、オ７期は杯Ｂの１類の範囲にあって、杯Ａとの形態差がなく、少なくとも オ９期以降に、杯ＡまたＢと区別できる皿としての形状をそなえるようになる。このように、須恵器類はオ７期以前とオ８期以降との間に一つの画期を見ることができる。オ２の画期は、先述したように、オ13・14期頃にあるが、次項で再述する。

第二項　土 師 器

須恵器が、オ１期からオ７期までの間、比較的豊富な器種構成が見られるといっても、量的には極めて少なく、その主要な用途を供膳形態の杯・蓋においている。これに対して土師器は、貯蔵形態の甕Ａ、煮沸形態の甕Ｂ・Ｃ、鍋、供膳形態の鉢、高杯、皿、杯と多岐にわたる用途に用いられている。

まず、各器に見る変遷をたどってみる。甕Ａは、口径規模でａ.10cm～14.6cm、ｂ.14.7cm～17.8cm、ｃ.20.2cm～29.5cmの大中小の3類がある。ａ、ｂの小型及び中型には、体部外面を縦刷毛、内面を横刷毛、底部外面を篦削りして調整するいわゆる近江型の調整技法を示すものがある。多くは単純に外反する口縁部を持つが、その端部の整形時に外反する等の若干の変化を示すものがある。オ３期には確実に存在す

る。才１期のものも内面の調整が磨滅していて不明であるが、近江型として良いもので、才１期以降才８期までの間で出土している。これに対して、外面に刷毛目を残すが、内面には残さず、指ナデや箆削り等の調整を施すものがある。これには口縁部に種々の特徴がある。直口で、口縁部が長がく、端部を内彎させるもので、甕というより壺形のもの、口縁部が外彎し、胴部径もほぼ等しい口径を持つもの、口縁部が短かく、あまり外反しないもの等々である。才１・２期は不明であるが、才３期以降才７期のものに見られ、近江型のものと共伴する。さらに、小中型のものには、口縁部を受口風に曲げ、体部を強く横ナデし、器壁に凹凸を生じさせるもの、外面に横あるいは斜めに粗い叩き痕を残すもの等がある。才６・９・10・12・13期の住居跡から出土している。これは、小型のものと中・大型のものとで口縁部の形態が異る。小型のものでは、才６期のものが才９期のものに比べて彎曲が明瞭で、才12期には端部をつまみ出すように、断面三角形の突帯風に、内側に肥厚させている。中型のものは大型の甕Ａを説明する時に扱うとして、才９期以降、甕Ａはこの種のものが、出土量は全体的に少なくなるが、主流を占める点注意されるところである。甕Ａの大型品では、近江型の整形技法や形態を取るものは出土していない。大型品にも幾つかの形態があるが、その中で、一つには、「く」の字形に口縁部を外反させ、口縁端部を上方あるいは下方に肥厚させて、外面に面を作り出すものがある。外面を縦、内面を斜方向に刷毛調整しているものが大半である。また、口縁部に刷毛目を残すものも見られる。この種のものは才１期から才８期の出土品の中に見ることができる。小・中型の近江型の甕Ａと同じ変遷をたどる。なお、この種の口縁部に類似して、口縁部を大きく外反させ、頸部に強いナデを施して口縁部下方に稜を生じさせるものが才５期の大型品、才７期の小型品に見られる。別種のものであろう。大型品にはこの種のものの他に、先述のように受口風の口縁部を持つものがある。小型品のように、口縁端部を内彎させ、その端部をつまみ出すようにして尖り気味に終らせるもので、外面に叩き痕がある。つまみ出しがより大きいものが才13期にあり、口縁部は単純であるが、体部外面に叩き痕のあるものが才17期の柏原北ＡＭ２から出土している。才７期以降の甕Ａは大中小型品ともこの種のものに占められることとなる。以上のように、甕Ａは才17期までに確実に見られる。小・中型品に近江型が存在し、才１～８期の間で出土する。大型品は口縁端部を肥厚させて面を取り、刷毛調査するものがこれに時期的に相応し、甕Ａの組合せを形成している。また、才８期までは、大中小型品とも、他の特徴を持ったものが附随的に出土するが、才９期以降では、いわゆる北陸系のロクロ土師器の特徴を有するものが占める。従って、甕Ａでは才８・９期の境に一つの面期を見ることができる。なお、北陸系類品のものは、体部下半分が不明であり、甕Ａとしたものの中に長胴化しているものの存在を考慮すべきである。

次に甕Ｂは出土数が極めて少ない。才３・５・７期の中に確実に存在する。すべて近江型の形態、調整技法を有するものである。甕Ｃとしたものの中に、存在する可能性もあるが、体部の膨りが甕Ａに似て大きいものは甕Ｂとしたが、他はすべて甕Ｃに一括している。

甕Ｃは才１期から才９期にまでみられ、才10期以降は姿を消す。甕Ｃはそのほとんどが近江型の形態、調整技法を持つものである。ただし、才３期のものの中に、底部まで刷毛目調整を残すものがある。６世紀段階のものに見られる特徴である。このことはともかく、実測図として掲載し得ないが、底部片のほとんどは箆削りを認めることができる。近江型以外の特徴を持つものは、才３期と才６期に見られるが、各１点を数えるにすぎない。このように近江型の甕Ｃは甕Ａ・Ｂに比べ長期間存在するようであるが、才８・9期のものでは、内彎した口縁端部を内外に肥厚させ、あるいは、短い口縁部を屈曲させる等の変化を見せており、従来の近江型の特徴と異るものとなっている。また、単純に外反する口縁部の端

部をわずかにつまみ上げるものや全ったく単純なものとなっている。これらを近江型の範囲に加えるかどうか判断し得ないが、甕Ｃの最終末の形態として理解し得よう。このように、甕Ｃは、若干の異形品を加えながらも近江型を主流として才１～９期までの間に存在し、才10期以降姿を消す。才10期以降甕形品の煮沸容器が存在しなくなることになるが、これにかわるものとして、先に指摘した北陸系類品の甕Ａの存在である。才９期の北陸系の甕Ａは胴部の最大径が口径をうわまわるが、才12・13期のものでは口径が大きくなっている。これらを長胴の甕Ｃとするのに難くない。ともかく、甕Ｃにおいても、近江型の終焉として才８・９期頃に画期をおくことができる。また北陸系の甕Ｃに長胴のものを認めるとしても、才13期までである点にも注意される。

鍋は量的には少数であって、住居跡からは才１・２・４・５・６・８・10期から出土している。鍋にも近江型が存在する。調整技法が甕類と同様であって、口縁部は単純に外反している。才１・２・５期のものが確実である。才６・８・10期のものは、口縁部の外反度が近江型のものより小さく、端部を上方に肥厚させる。内外面の整形は近江型と同様である。口縁部の相違で見れば、才４期のものも近江型に加えることができる。口縁端部を上方に肥厚させる鍋は北陸に類品を見出すことができる。このことは、鍋が才11期以降に出土していないが、その出現が甕Ａの北陸系類品の出現の時期と同様である点注意される。

鉢も量的に極めて少ない。才２・４・５・６期にわずかに見られる。才４期のものは、外面を口縁部を除いて全面篦削りし、内面も口縁部を除いて刷毛目調整している。近江型の鉢と考えてよかろう。各期毎に口縁部の形状に変化が見られるが、すでに述べているので再述はしない。

高杯も、才２・３・７期に確実なものが見られるが、土師器の中で最も少ない器種である。才８期以降では出土していない。

杯、これには埦形品も含めているが、まず、才１～８期までの段階、才９～13期までの段階、才14期以降の段階の３段階に区別ができる。すなわち、才８期までの杯類には、形能的には、口径指数15前後の浅いものと30前後の埦形の深いもの、及び、20前後の中間のものとがあり、口径に見る大小も11cm程のもの、15cm前後のもの、20cm前後のものがある。小型のものは概して浅く、中型のもの、大型のものには各種の深さがある。埦形の深いものは才７・８期に見られないが、形態には各種のものが併存しているのである。この状況が才９期～才13期の段階で、出土品を見ないという状況に一変するのである。この変化は、須恵器の項で見たように、須恵器の杯Ｂと皿との形態分化と極めて密接な関連があるようである。すなわち、須恵器の皿は、杯Ｂと明確に区別し、皿としての形態、しいては用途を明瞭にするのは才９期以降であって、才８期までの段階では、杯Ｂの中の浅深の相違はあっても、才９期以降のような皿としての形態は持たない。この才９期以降の杯Ｂと皿との形態、機態分化と土師器の杯の消滅とが期を一にしているのである。才８期まで、須恵器の皿としての機能は土師器杯（この場合埦形品は除くべきかもしれない）にあり、須恵器の皿が出現して以降、土師器杯の皿としての機能は須恵器に移行したと考えることができるのである。土師器杯の才３段階は才14期以降である。才14期に再び土師器の杯が出現する。才14期には須恵器の皿は存在するが、才15期以降には極めて少なく、灰釉陶器の埦、皿とともに、土師器の杯、皿類が増加する。もっとも、土師器の杯類は、才14期に、底部に篦おこし痕を残すものが出現するが、才15～17期には杯類は極めて少なく、才18・19期に、新たに底部に糸切り痕を残すものや高い高台を付けるものが出土する。しかし、それらの量も極めて少なく、土師器の大半は皿類に残ることとなる。このように、土師器杯は才８・９期の境、才14期頃の二つの画期を見ることができ

る。

以上、土師器の各器種についてその変遷を見てきた。甕Ａ・Ｂ・Ｃ、杯に特徴的に見るように、オ８・９期の境及びオ14期頃に大きな画期を見ることができるのである。この画期は、すでに述べたように、須恵器類にも認め得るところであり、単に須恵器あるいは土師器、また、個別の器種に限られた現象ではなく、この二つの画期に、何等かの社会的な変化のあることを暗示するものである。

第三項　施釉陶器、黒色土器、磁器、山茶埦

灰釉陶器、黒色土器はオ13期から出現し、緑釉陶器はオ14期から出土する。これらは埦皿類、灰釉陶器の小型の壺形品、黒色土器の小型の甕類に限られ、大型の壺・甕類は維然須恵器に限られている。オ13～19期までの間で、灰釉、緑釉、黒色土器の比率は、灰釉陶器 100に対して、黒色土器２以下、緑釉陶器１以下の割合いであって、緑釉陶器、黒色土器の占る割合いは極めて少ない。これは、湖北地方の特徴であって、湖南地方とのきわ立った相違である。

山茶埦はオ19期に出土する。また、白磁の埦形品がオ17期から、青磁がオ19期に出土している。灰釉陶器 100に対して 0.5以下である。

以上のように、須恵器、土師器にオ８・９期の境とオ14期頃の２つの画期を認めることが出来たが、さらに、集落の集焉とも関係するが、オ19期にオ３の画期を求めることが可能である。

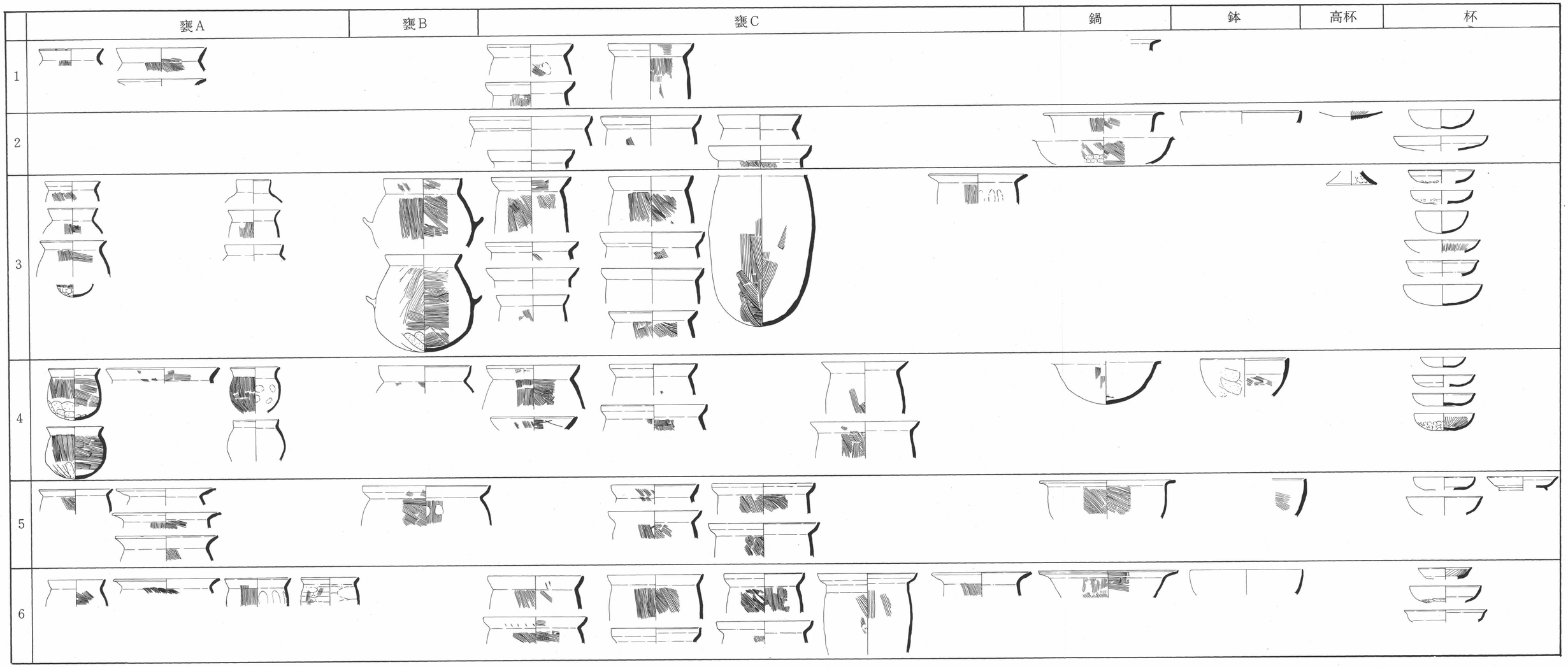
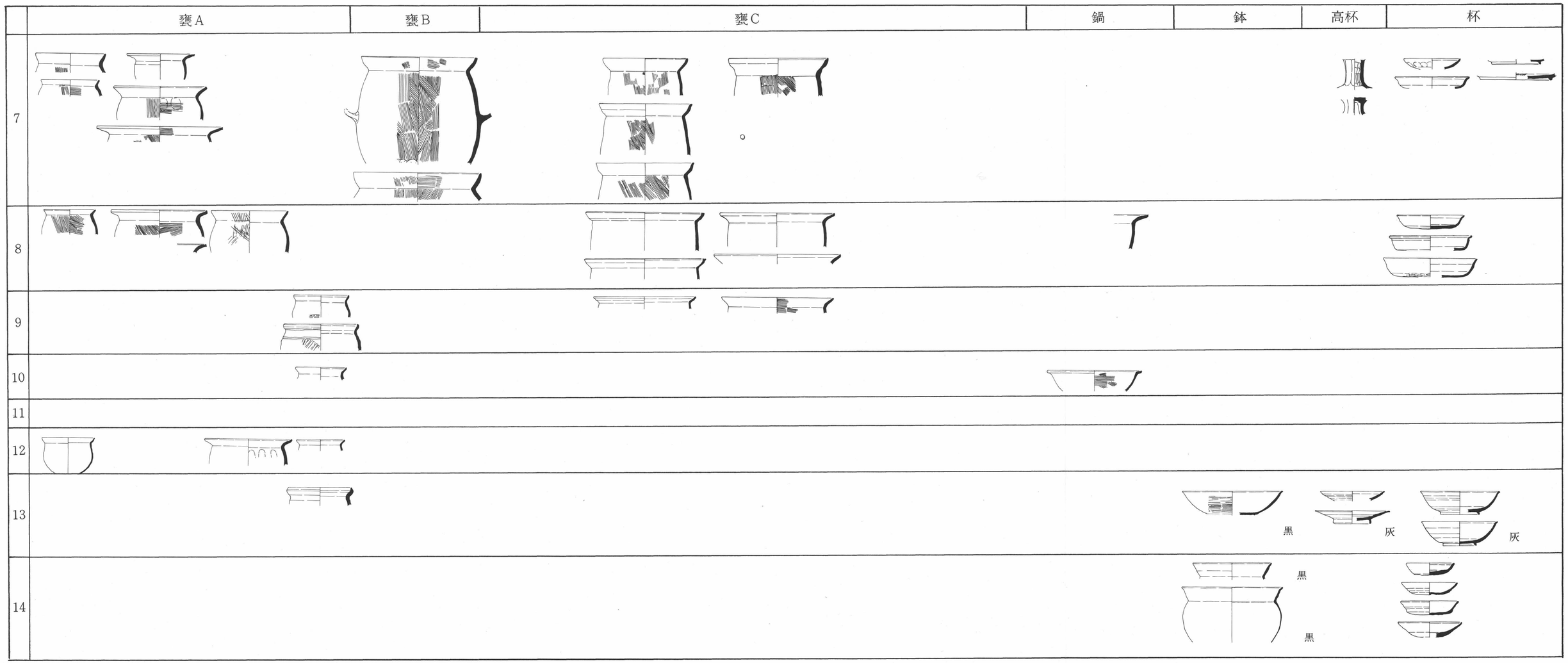


図169．竪穴式住居跡出土土師器編年図(1)



竪穴式住居跡出土土師器編年図(2)

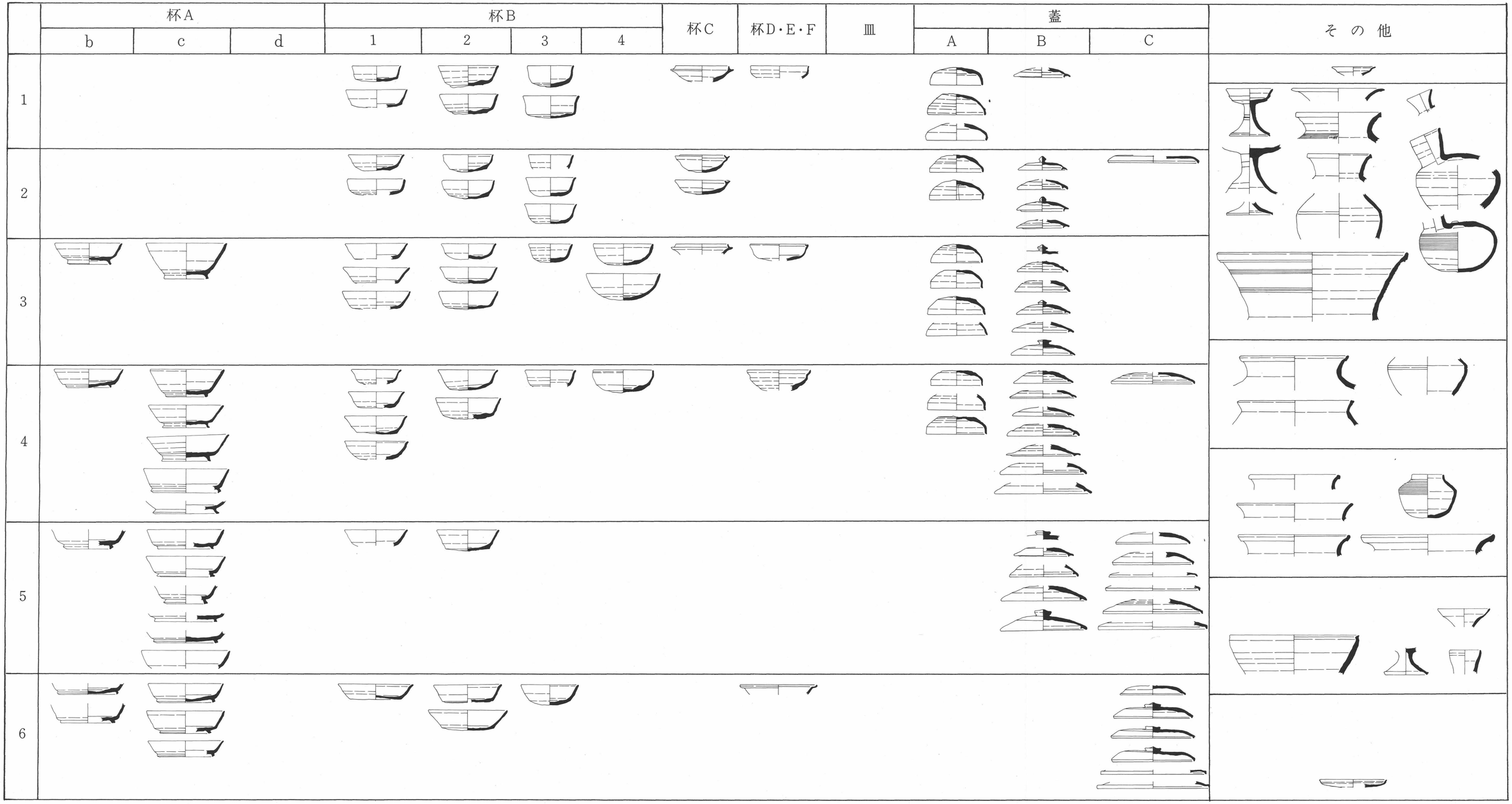
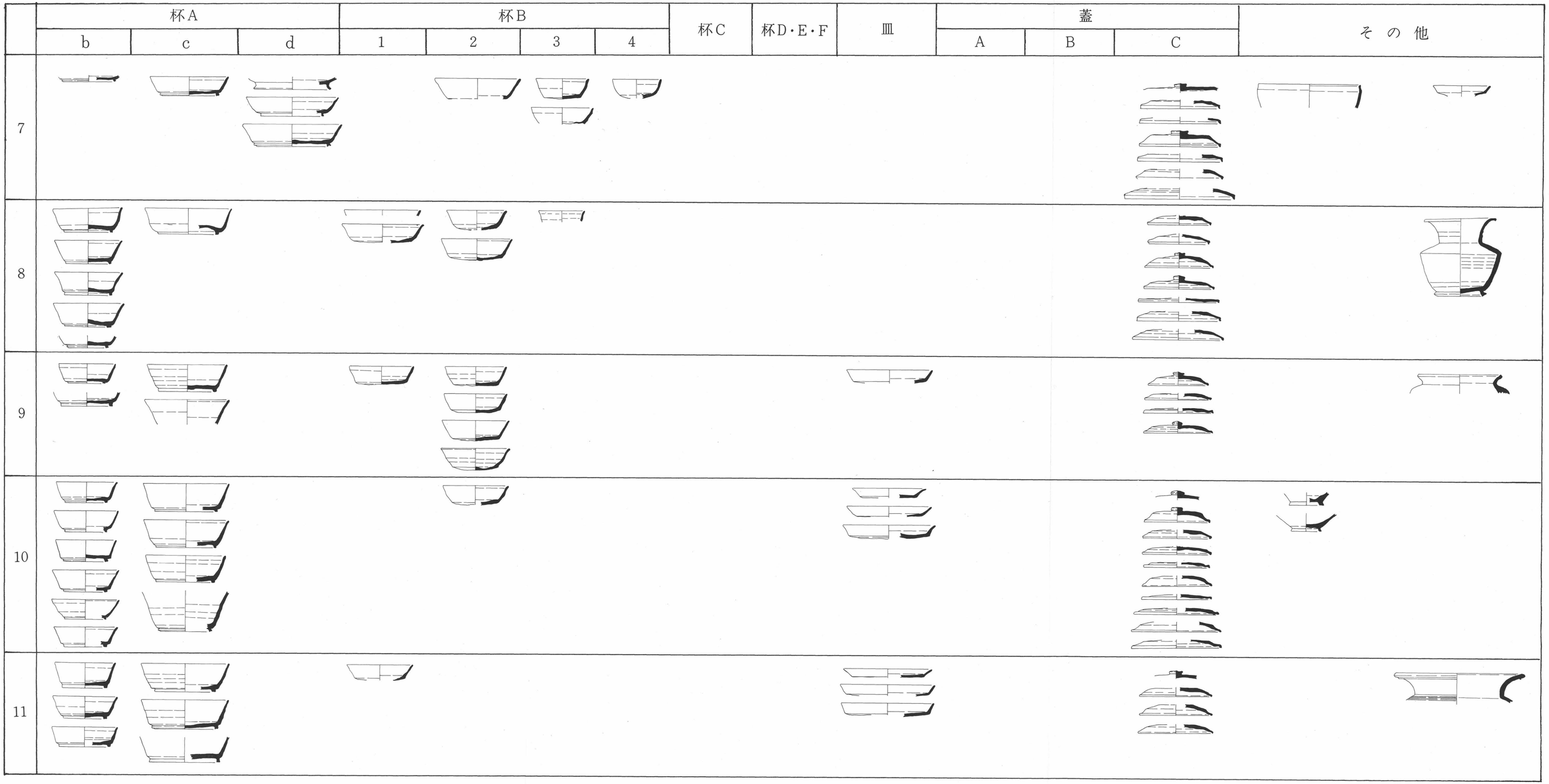
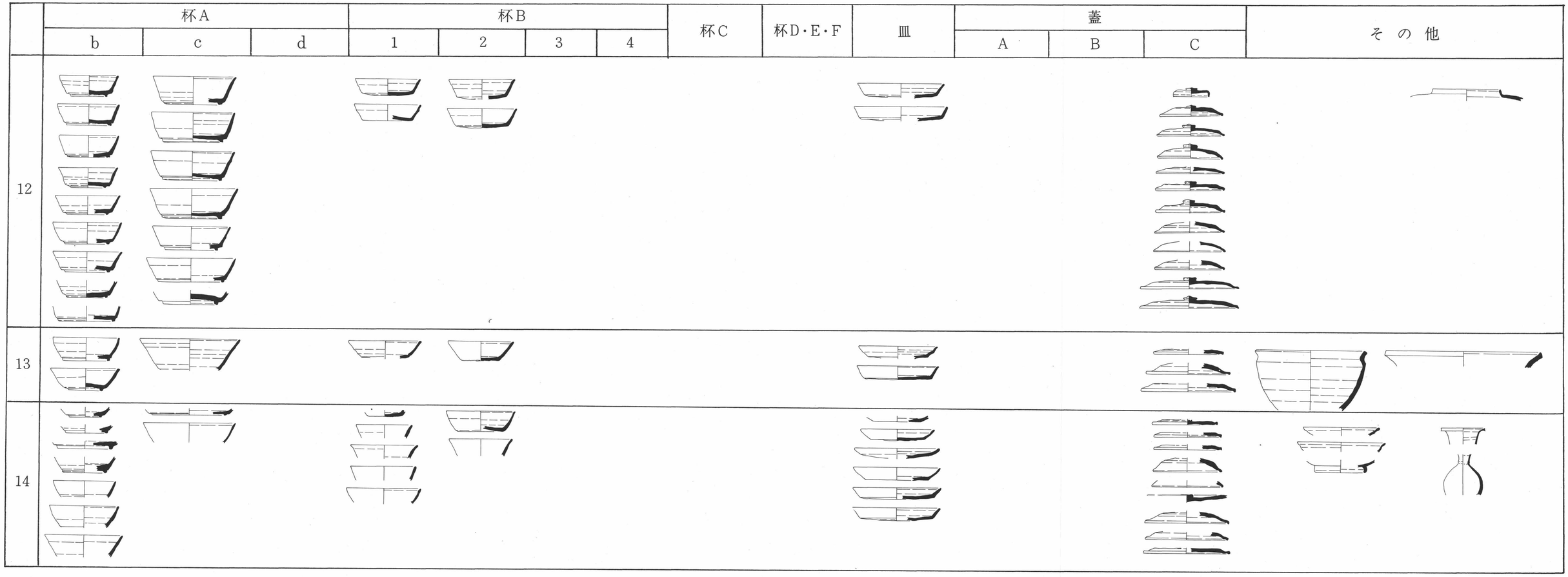


図170．竪穴式住居跡出土須恵器編年図(1)



竪穴式住居跡出土須恵器編年図(2)



竪穴式住居跡出土須恵器編年図(3)

第五章　総　　括

才四章では、各遺構の構造、特に、竪穴式住居跡と掘立柱建物を中心に、その構造的変遷と出土遺物、特に須恵器と土師器について、その器種構成を中心に変遷を見てきた。その結果、竪穴式住居跡で、才８期頃を境として、バラエティーに富んでいたカマド構造がほぼＣ類に統一され、平面形態も長方形プランがなくなり、ほぼ正方形のプランとなり、床面積も10m²前後の極めて小さいものへと変化する。この傾向は、竪穴式住居跡の出土遺物を中心とした土器類の変遷と全ったく一致するものである。

掘立柱建物跡は才12期から出現し、才12～14期の間で竪穴式住居跡と並存する状況にある。２間×５間あるいは３間×５間の住居形式を取るものが各時期に１～３棟あり、これに倉庫跡と思われる２間×２間、２間あるいは３間×３間のものが１～３棟ずつ存在する。確実に住居と倉庫とが一単位になる状況にはないが、才11期以前にさかのぼる掘立柱の倉庫跡が確認できない現状では、掘立柱形式の住居と倉庫とは一体とみなければならない。竪穴式住居から掘立柱建物への過渡期が才12～14期あることになる。この間で、注意すべきは、掘立柱建物の規模と倉庫を持つことである。すなわち、この間での竪穴式住居跡の規模は極めて縮少し、最小規模とした4.6m²～7m²のⅠ類及び 8.1m²～11m²のⅡ類のみであり、一辺の規模から最大に計算したとしても22.5m²～23.9m²のⅤ類まである。これに対し、掘立柱建物では、才12期のものが32m²と66m²、才13期のものが25.2m²、才14期のものが28.7m²～34.2m²である。才12期の66m²（ＢＨ１）は例外としても、いずれも30m²前後の規模を持つ。才８期頃までの竪穴式住居跡は、その規模がⅠ～Ⅷ類までの間で格差があったわけだが、この格差が、才12～14期の間では、規模だけではなく、掘立柱建物と竪穴式住居という構造上の格差として顕現するのである。今のところ、才８・９期にさかのぼる掘立柱建物を指摘し得ないが、ＡＨ４やＫＨ１、ＬＨ１等極端に東西に軸線をふる建物が古くなる可能性がある。やはり、現状では古式の掘立柱建物を指摘し得ないが、竪穴式住居跡規模の縮少する才８・９期頃に初現のある可能性を考え、従って、竪穴式住居跡の構造上の画期だけではなく、竪穴式住居跡と掘立柱建物という顕現した住居形式の相違の発現という村落構造上の大きな画期に発展し得る現像というべきである。この現象が、才８・９期の境で、土器様式や住居構造に大きな変革を持たらしたものと言い得るのである。このことにさらに補強し得る点は、倉庫跡の存在である。竪穴式住居跡に伴う倉庫跡は不明であるが、少なくとも調査対象範囲内において、各住居跡群の中には存在しない。しかるに、才12期の掘立柱建物の出現と同時に倉庫跡も出現する。住居形式の格差がさらに倉庫の保持というさらに大きな格差となって現われているのである。倉庫は住居跡と同様に、各住居跡群に分散的に分布しており、集中性はない。いわば個人所有的な有り方を示すのであるが、掘立柱建物の想定される初現期にさかのぼって同様に倉庫跡が存在していたかどうか不明といわざるを得ないが、倉庫形式のＡＨ４が極端に軸線を西にふっており、ＫＨ１やＬＨ１等と同様に古式のものと考えるなら、掘立柱建物の初現期に早くも個人所有的な倉庫が存在していたことになる。このことはともかく、掘立柱建物の出現と期を一にする倉庫跡の存在は、村落構造の変画を示す重要な点であろう。

こうした竪穴式住居跡と掘立柱建物との対峰関係は才14期を最後に姿を消す。すなわち、住居形式が才15期以降掘立柱建物にかわる。才15期以降の掘立柱建物は多くを検出していないが、２間×５間の住居形式と２間×２間、２間×３間の倉庫と思われるものとがある。才15期以降では、倉庫跡の規模に大

きな格差がある。第14期以前の倉庫跡は、ＦＨ４に 32.83㎡と例外的に大きいものがあるが、２間×２間、３間×２間を問わず、15.6㎡～ 22.09㎡程度である。これに対し、第15期以降では、２間×２間の9.61㎡～ 17.64㎡に対し、２間×３間の 22.31㎡～ 38.71㎡と極めて大きい格差が見られる。この倉庫の規模の差を住居形式や土器類の変化で示される第２の画期の重要なポイントと考える。このことと極めて密接に関連すると考えられるものが、現存条里に一致または近い位置にある溝状遺構である。ＡＭ１は第17期に改修され、柏原北ＣＭ１は掘立柱建物の出現に応じて柏原北ＡＭ２・３に新たに付けかえている。ＣM20は第15期、ＫＭ１は第17期に新たに設けられた水路である。第14期以前にあっては、住居分布範囲に対して、わずか柏原北ＣＭ１及びＡＭ１の２条を認め得るのみであるが、第15期以降には、柏原北ＡＭ２・３、ＡＭ１、ＫＭ１、ＣM20と新たに開削され、また、ＣM20は第19期にＣM17やＣＭ９に、ＫＭ１は第18期にＬＭ１に付け替え、ＡＭ１は改修が繰りかえされる等、水路の新設や改修が加えられている。このことは、遺跡周辺に広がる条里水田の開発と密接に関連するもので、第15期以降に生産面積の拡大、生産性の向上が計られたであろうことが推察されるのである。このことと第15期以降の倉庫に見る現象とをオーバーラップさせて考えることが可能である。

以上のように、住居構造や出土土器類の変遷で見られた２つの画期は、それぞれ、村落構造の大きな変革期を示すものと考えられるのである。

お　わ　り　に

国道 365号線バイパス工事に伴う発掘調査は、昭和53年度から昭和56年度にかけて、約４年間を要した。その間に蓄積した資料は膨大なものである。本書は一応正報告書の体裁はとっているが、蓄積した資料を十分に消化しきったものとはなっていない。本書では、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構を中心にとりあげ、各々を構造的に分類し、その変遷を通して、各遺構の相互関連に着目する方法を取った。従って、出土遺物については、これらの変遷をたどる補助的手段としたため、個々の遺物の観察記録や検討等を省略した形になった。従って、土器類等の産地同定や流通の問題追求等は行なっていない。また、全体的にも他遺跡の類例との比較検討を行なわず、できるだけ発掘調査から得られた成果の範囲内で資料操作を行なうことを心掛けたため、県内しいては日本歴史上の位置付けをも省略している。このように、種々の事項を省略したもので、とうてい正報告書の域に達っしていないことをおわびしたい。ただ、最も省略した形となった遺物類については、測図可能なものを出来るだけ掲載した。今後とも整理調査を継続して実施する必要のあることを申し述べておわりにかえたい。

昭和59年3月20日

国道365号線バイパス工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　II
―― 伊香郡高月町井口・柏原遺跡 ――

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会
財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　株式会社　中村太古舎
大津市京町三丁目4－32
TEL　(0775) 24－4370